尾崎紅葉著

紅葉全集

十千萬堂藏版

明治三十五年の紅葉山人

紅葉全集　卷之六

目次

紅葉全集　卷之六

目次

紅葉全集　目次（三）

紅葉全集 卷之六

金色夜叉

前編

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜むが如く、其の哀切に小き腸は斷れぬべし。

金色夜叉 前編 (一)

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を涜して、此黄昏より凩は戰出でぬ。今は(風吹くな、なあ吹くな)と優しき聲の宥むる者無きより、憤をも増したるやうに飾竹を吹靡けつゝ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂ひては引返し、揉みに揉んで獨り散々に騷げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無數の星を顯して、鋭く沍えたる光は寒氣を發つかと想はしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど氷らんとすなり。

人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、爭か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき、九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に邈く横はれるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、醉ひ、戲れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし子子の形を斂

めて、今爾時屹に如何にして在るかを厭はざらんとするも難からずや。
多時節なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、搖々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を擅に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立てゝ、心地惡き微温の四方に溢るゝと與に、垢臭き惡氣の盛に迸るに遭へる綱引の車あり。勢ひて角より曲り來にければ、避くべき遑無くて其中を驅拔けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に懷手して行過ぎし跡には、葉卷の殼の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は拔けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の恁く答へし後は語絶えて、車は驀直に走れり。紳士は二重外套の袖を犇と搔合せて、獺の衿皮の內に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、橫縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き〳〵て車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に箕輪と記したる軒燈を揭げて、剡竹を飾れる門構の內に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子の鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「賴む、賴む。」

奧の方なる響動の劇しきに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつゝ、格子戶を連打にすれば、旋て急足の音立てて人は出て來ぬ。

圓髷に結ひたる四十約の小く瘦せて色白き女の、茶微塵の絲織の小袖に

黒の奉書紬の紋付の羽織着たるは、此家の内儀なるべし。彼の忙しげに格子を啓るを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充滿〳〵たる履物の杖を立つべき地さへあらざるに遲へるを、彼は虛さず勤篤に下立ちて、此の敬ふべき賓の爲に辛くも一條の道を開けり。恪て紳士の脫捨てし駒下駄のみは獨り障子の内に取入れられたり。

（一）の二

箕輪の奥は十疊の客間と八疊の中の間とを打抜きて、廣間の十個所に眞鍮の燭臺を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空氣ランプを點したれば、四邊は眞晝より明に、人顏も眩きまでに耀き遍れり。三十人に餘んぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛りと歌留多遊を爲るなりけり。蠟燭の焔と炭火の熱と多人數の熱蒸と混じたる一種の溫氣は殆ど凝りて動かざる一間の內を、莨の煙と燈火の油煙とは互に縺れて渦巻きつゝ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剝げたるあり、髮の解れたるあり、衣の亂次く着頽れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取亂したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脫ぎて帶の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結ひたる

もあり。然しも息苦しき溫氣も、咽ばさるゝ煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く聲、笑頽るゝ聲、捩合ひ、蹈破く犇き、一齊に揚ぐる響動など、絕間無き騷動の中に狼藉として戲れ遊ぶ爲體は、三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯是修羅道を打覆したるばかりなり。
海上風波の難に遭へる時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも忽ち鎭りて、船は九死を出づべしとよ。今此の如何とも爲べからざる亂脈の座中をば、其油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心も其人の前には和ぎて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつゝも畏を懷けり。中の間なる團欒の柱側に座を占めて、重げに戴ける夜會結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騷ぐを興あるやうに涼き目を瞪りて、躬は淑かに引繕へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を賣るものゝ假の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑へり。一番の勝負

の果てぬ間に、宮といふ名は普く知られぬ。娘も數多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戸惑せるかと覺しきもあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服裝は宮より數等立派なるは數多あり。彼は其點にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、其起肩に紋御召の三枚襲を被ぎて、帶は紫根の七絲に百合の折枝を縒金の盛上にしたる、人々之が爲に目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。此外種々色々の綺爛なる中に立交らひては、宮の裝は纔に曉の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美しき染色をも奪ひて、彼の整へる面は如何なる麗はしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとも其の醜きを蔽ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるも其の美しきを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手爐を圍みて、蜜柑を剝きつゝ語ふ男の一個は、

彼の横顔を恍惚と遙に見入りたりしが、遂に思堪へざらんやうに呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！　馬士にも衣裳と謂ふけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物其自らが美しいのだもの、着物などは如何でも可い、實は何も着て居らんでも可い。」

「裸體なら猶結構だ！」

此の強き合槌撃つは、美術學校の學生なり。

綱曳にて駈着けし紳士は姑く休息の後内儀に導かれて入來りつ。其後には、今まで居間に潛みたりし主の箕輪亮輔も附添ひたり。席上は入亂れて、爰を先途と激しき勝負の最中なれば、彼等の來れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。

廣間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小き内儀の

口は疳の爲に引歪みて、其夫の額際より赭禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵肥滿にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替へて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のやうなるに頰の邊には薄紅を帶びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の廣き顏は稍正方形を成せり。緩く波打てる髮を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗りたり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挾み、五紋の黑鹽瀨の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七絲帶に金鏈子を垂れつゝ、大樣に面を擧げて座中を眴したる容は、實に光を發つらんやうに四邊を拂ひて見えぬ。此團欒の中に彼の如く色白く、身奇麗に、而も美々しく裝ひたるはあらざるなり。

「何だ、彼は？」

例の二人の一個は然も憎さげに呟けり。
「可厭な奴！」
唾吐くやうに言ひて學生は故と面を背けつ。
「お俊や、一寸。」　と內儀は群集の中より其娘を手招きぬ。
お俊は兩親の紳士を伴へるを見るより、慌忙しく起ちて來れるが、顏好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結ひて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚したり。顏を赧めつゝ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。
「どうぞ此方へ。」
娘は案內せんと待構へけれど、紳士は然して好ましからぬやうに頷けり。
母は歪める口を怪しげに動かして、
「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ。」
お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目禮せり。

「さあ、まあ、被入いまし。」

主の勸むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案內して、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其處まで介添に附きたり。二人は家內の紳士を遇ふことの極めて鄭重なるを訝りて、彼の行くより坐るまで一擧一動も見脫さゞりけり。其の行く時彼の姿は恰も左の半面を見せて、團欒の間を過ぎたりしが、無名指に輝ける物の凡ならず強き光は燈火に照添ひて、殆ど正しく見る能はざるまでに眼を射られたるに呆れ惑へり。天上の最も明なる星は我手に在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黃金の指環を穿めたるなり。

お俊は骨牌の席に復へると倖しく、密に隣の娘の膝を衝きて口早に呼きぬ。彼は忙々しく顏を擡げて紳士の方を見たりしが、其人よりは其指に耀く物の異常なるに駭かされたる體にて、

「まあ、那の指環は！一寸、金剛石？」

「然うよ。」
「大きいのねえ。」
「三百圓だつて。」
お俊の說明を聞きて彼は漫に身毛の彌立つを覺えつゝ、
「まあ！　好いのねえ。」
鱓の目ほどの眞珠を附けたる指環をだに、此幾歲か念懸くれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮べて攻鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失へる間に、電光の如く隣より伸來れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引攫へば、
「あら、貴方如何したのよ。」
お俊は苛立ちて彼の横膝を續けさまに拊きぬ。
「可くつてよ、可くつてよ、以來もう可くつてよ。」
彼は始めて空想の夢を覺して、及ばざる身の分を諦めたりけれども、一

金色夜叉 前編 （二四）

旦金剛石の強き光に燒かれたる心は幾分の知覺を失ひけんやうにて、然しも目覺しかりける手腕の程も見る〳〵漸く四途亂になりて、彼は敢無くも此時よりお俊の爲に賴み難き味方となれり。

慝して彼より此に傳へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「那が金剛石？」

「見給へ、金剛石。」

「あら、まあ金剛石??」

「可感い金剛石。」

「可恐い光るのね、金剛石。」

「三百圓の金剛石。」

瞬く間に三十餘人は相呼び相應じて紳士の富を謳へり。

彼は人々の更互におのれの方を眺むるを見て、其手に形好く葉巻を持たせて、右手を袖口に差入れ、少し懈げに床柱に靠れて、目鏡の下より下界を見遍すらんやうに目配して居たり。

係る目印ある人の名は誰しも問はであるべきにあらず、洩れしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼とて、一代分限ながら下谷區に聞ゆる資産家の家督なり。同じ區なる富山銀行は其父の私設する所にして、市會議員の中にも富山重平の名は見出さるべし。

宮の名の男の方に持囃さるゝ如く、富山と知れたる彼の名は直に女の口口に誦ぜられぬ。あはれ一度は此紳士と組みて、世に愛たき寶石に咫尺するの榮を得ばや、と彼等の心々に冀はざるは希なりき。人若し彼に咫

尽するの慾を得ば、啻に其の目の類無く樂さるゝのみならで、其の鼻までも菫花の多く齅ぐべからざる異香に薫ぜらるゝの幸を受くべきなり。男たちは自から荒められて、女の擧りて金剛石に心牽さるゝ氣色なるを、或は妬く、或は淺ましく、多少の興を冷さゞるはあらざりけり。獨り宮のみは騒げる體も無くて、其の清しき眼色は然しもの金剛石と光を爭はんやうに、用意深く、心樣も幽しく振舞へるを、崇拜者は益懽びて、我等の慕ひ參らする効はあるよ、偏に此君を奉じて孤忠を全うし、美と富との勝負を唯一戰に決して、紳士の憎き面の皮を引剝かん、と手藥煉引いて待ちかけたり。然れば宮と富山との勢は恰も日月を並懸けたるやうなり。宮は誰と組み、富山は誰と組むらんとは、人々の最も懸念する所なりけるが、鬮の結果は驚くべき豫想外にて、目指されし紳士と美人とは他の三人と與に一組になりぬ。始め二つに輪作りし人數は此時合併して一の大なる團欒に成されたるなり。而も富山と宮とは隣合に坐りされ

ば、夜と晝との一時に來にけんやうに皆狼狽騷ぎて、忽ち其隣に自ら社會黨と稱ふる一組を出せり。彼等の主義は不平にして、其目的は破壞なり。則ち彼等は專ら腕力を用ゐて或組の果報と安寧とを妨害せんと爲るなり。又其前面には一人の女に內を守らしめて、屈強の男四人左右に遠征軍を組織し、左翼を狼藉組と稱し、右翼を蹂躪隊と稱するも、實は金剛石の鼻柱を挫かんと大童になれるに外ならざるなり。果せる哉、件の組は此勝負に逢き大敗を取りて、人も無げなる紳士も有繫に鼻白み、美しき人は顏を赧めて、座にも堪ふべからざるばかりの面皮を缺かされたり。此の一番にて紳士の姿は不知見えずなりぬ。男たちは萬歲を唱へけれども、女の中には掌の玉を失へる心地したるも多かりき。散々に破壞され、狼藉され、蹂躪されし富山は、餘りに這文明的ならざる遊戲に怖をなして、密に主の居間に逃歸れるなりけり。

鬘を被たるやうに梳りたりし彼の髮は棕櫚箒の如く亂れて、環の隻捥げ

たる羽織の紐は、手長猿の月を捉へんとする状して搖々と垂れり。主は見るより然も慌てたる顏して、

「どう遊ばしました。おゝ、お手から血が出て居ります。」

彼は矢庭に煙管を捨てゝ、忽にすべからざらんやうに急遽と身を起せり。

「あゝ、酷い目に遭つた。どうも那樣亂暴ぢや爲樣が無い、火事裝束ででも出掛けなくつちや迚も立切れないよ。馬鹿にしてゐる！　頭を二つばかり撲れた。」

手の甲の血を吮ひつゝ富山は不快なる面色して設の席に着きぬ。豫て用意したれば、海老茶の紋縮緬の裀の傍に七寶燒の小判形の大手爐を置きて、蒔繪の吸物膳をさへ据ゑたるなり。主は手を打鳴して婢を呼び、大急に銚子と料理とを誂へて、

「それは如何も飛でもない事を。外に何處もお怪我はございませんでしたか。」

「那様に有られて耐るものかね。」
爲う事無さに主も苦笑せり。
「唯今絆創膏を差上げます。何しろ皆書生でございますから隨分亂暴でございませう。故々御招申しまして甚だ恐入りました。もう彼地へは御出陣にならんが宜うございます。何もございませんが此て何卒御寛り。」
「所が最一遍行つて見やうかとも思ふの。」
「へえ、又彼入いますか。」
物は言はで打笑める富山の腮は愈展れり。早くも其意を得てや破顔せる主の目は、薄の切疵の如く幾と有か無かになりぬ。
「では御意に召したのが、へえ？」
富山は益笑を湛へたり。
「ございましたらう、然うでございませうとも。」
「何故な。」

「何故も無いものでございます。十目の見る所ぢやございませんか。」
富山は頷きつゝ、
「然うだらうね。」
「彼は宜うございませう。」
「一寸好いね。」
「まづ其の御意でお熱い所をお一盞。不満家の貴方が一寸好いと有仰る位では、餘程尤物と思はなければなりません、忝く寡うございます。」
倉皇入來れる内儀は思ひも懸けず富山を見て、
「おや、此方にお在あそばしたのでございますか。」
彼は先の程より臺所に詰切りて、中入の食物の指圖などして居たるなりき。
「酷く負けて逃げて來ました。」
「それは好く逃げて被入いました。」

例の歪める口を窄めて内儀は空々しく笑ひしが、忽ち彼の羽織の紐の偏斷れたるを見尤めて、環の失せたりと知るより、慌て驚きて起たんとせり、如何にとなれば其環は純金製のものなればなり。富山は事も無げに、

「何爲、宜い。」

「宜いてはございません。純金では大變でございます。」

「何爲、可いと言ふのに。」　と聞きも訖らで彼は廣間の方へ出てゝ行けり。

「時に彼の身分は如何かね。」

「然やう、惡い事は御座いませんが…………。」

「が、如何したのさ。」

「が、大した事はございませんです。」

「それは然うだらう。然し凡そ甚麼ものかね。」

「舊は農商務省に勤めて居りましたが、唯今では地所や家作などで暮し

て居るやうでございます。如何か小金も有るやうな話で、鴫澤隆三と申して、直隣町に居りまするが、極手堅く小體に遣つて居るのでございます。」

「はあ、知れたもんだね。」

我は顔に頤を搔撫づれば、例の金剛石は燦然と光れり。

「それでも可いさ。然し嫁れやうか、嗣子ぢやないかい。」

「然やう、一人娘のやうに思ひましたが。」

「それぢや窮るぢやないか。」

「私は悉い事は存じませんから、一つ聞いて見ませうて。」

程無く内儀は環を搜得て歸來にけるが、誰が惡戯とも知らで耳搔の如く引展されたり。主は彼に向ひて宮の家內の樣子を訊ねけるに、知れる一遍は語りけれど、娘は猶能く知るらんを、後に招きて聽くべしとて、夫婦は頻に觴を侑めけり。

富山唯繼の今宵此に來りしは、年賀にあらず、骨牌遊にあらず、娘の多く聚れるを機として、嫁選せんとてなりけり。彼は一昨年の冬英吉利より歸朝するや否や、八方に手分して嫁を求めけれども、器量望の太甚しければ、二十餘件の縁談皆意に稱はで、今日が日までも仍其事に齷齪して已まざるなり。當時取急ぎて普請せし芝の新宅は、未だ人の住着かざるに、はや日に黒み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額を鳩めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

第二章

骨牌の會は十二時に迨びて終りぬ。十時頃より一人起ち、二人起ちて、見る間に人數の三分の一强を失ひけれども、猶飽かで殘れるものは景氣好く勝負を續けたり。富山の姿を隱したりと知らざる者は、彼敗走して歸りしならんと想へり。宮は會の終まで居たり。彼若し疾く還りたらんには、恐く踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顏に富山は主と語合へり。

彼に心を寄せし輩は皆彼が夜深の歸途の程を氣遣ひて、我願くは何處までも送らんと、絕か念ひに念ひけれど、彼等の深切は無用にも、宮の歸る時一人の男附添ひたり。其人は高等中學の制服を着たる二十四五の學生なり。金剛石に亞いては彼の擧動の目指れしは、座中に宮と懇意に見えたるは彼一人なりければなり。此の一事の外は人目を牽くべき點も無

く、彼は多く語らず、又は躁がず、始終愼しくして居たり。終まで此雨個の同伴なりとは露顯せざりき。然あらんには餘所々々しさに過ぎたればなり。彼等の打連れて門を出づるを見て、始めて失望せしもの寡からず。

宮は鳩羽鼠の頭巾を被りて、濃淺黄地に白く中形模樣ある毛織のショールを絡ひ、學生は焦茶の外套を着たるが、身を窄めて吹來る風を遣過しつゝ、遲れし宮の辿着くを待ちて言出せり。

「宮さん、那の金剛石の指環を穿めて居た奴は如何だい、可厭に氣取つた奴ぢやないか。」

「然うねえ、だけれど衆が彼人を目の敵にして亂暴するので氣の毒だつたわ。隣合つて居たもんだから私まで酷い日に遭されてよ。」

「うむ、彼奴が高慢な顏をしてゐるからさ。實は僕も横腹を二つばかり突いて遣つた。」

「まあ、酷いのね。」
「那云ふ奴は男の目から見ると反吐が出るやうだけれど、女には如何だらうね、那麽のが女の氣に入るのぢやないか。」
「私は可厭だわ。」
「芬々と香水の匂がして、金剛石の金の指環を穿めて、殿樣然たる服裝をして、好いに違無いさ。」
學生は嘲むが如く笑へり。
「私は可厭よ。」
「可厭なものが組になるものか。」
「組は鬮だから爲方が無いわ。」
「鬮だけれど、組に成つて可厭さうな樣子も見えなかつたもの。」
「那樣無理な事を言つて！」
「三百圓の金剛石ぢや到底僕等の及ぶ所にあらずだ。」

「知らない！」
宮はショールを搖上げて鼻の半まで掩隱しつ。
「あゝ寒い！」
男は肩を峙てゝ直と彼に寄添へり。宮は猶默して歩めり。
「あゝ寒い!!」
宮は仍答へず。
「あゝ寒い!!!」
彼は此時始めて男の方を見向きて、
「如何したの。」
「あゝ寒い。」
「あら可厭ね、如何したの。」
「寒くて耐らんから其中へ一處に入れ給へ。」
「何の中へ。」

「シォールの中へ。」

「可笑い、可厭だわ。」

男は逸早く彼の押へしシォールの片端を奪ひて、其中に身を容れたり。宮は歩み得ぬまでに笑ひて、

「あら貫一さん、是ぢや切なくて歩けやしない。あゝ、前面から人が來てよ。」

慤る戲を作して憚らず、女も爲すまゝに信せて咎めざる彼等の關繫は抑も如何。事情ありて十年來鴫澤に寄寓せる此の間貫一は、今年の夏大學に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人なり。

第三章

間貫一の十年來鴫澤の家に寄寓せるは、怙る所無くて養はるゝなり。母は彼の幼かりし頃世を去りて、父は彼の尋常中學を卒業するを見るに及ばずして病死せしより、彼は哀嘆の中に父を葬ると與に、己が前途の望をさへ葬らざる可からざる不幸に遭へり。父在りし日さへ月謝の支出の血を絞るばかりに苦しき痩世帶なりけるを、當時彼尚十五歳ながら間の戸主は學ぶに先ちて食ふべき急に迫られぬ。幼き戸主の學ぶに先ちては食ふべきの急、食ふべきに先ちては葬すべき急、猶之に先ちては看護醫藥の急ありしにあらずや。自活すべくもあらぬ幼き者の如何にして是等の急を救得しか、固より貫一が力の能ふべきにあらず、鴫澤隆三の身一個に引承けて萬端の世話せしに因るなり。孤兒の父は隆三の恩人にて、彼は聊か其舊德に報ゆるが爲に、嘗に其病めりし時に扶助せしのみなら

ず、常に心着けては貫一の月謝をさへ間支辨したり。恁くて貧き父を亡ひし孤兒は富める後見を得て鴫澤の家に引取られぬ。隆三は恩人に報ゆるに其短き生時を以て慊らず思ひければ、左右は其忘形見を天晴人と成して、彼の一日も忘れざりし志を繼がんとせるなり。

亡き人常に言ひけるは、苟くも侍の家に生れながら、何の面目ありて我子貫一をも人に侮らすべきや。彼は學士となして、願くは再び四民の上に立たしめん。貫一は不斷に此言を以て警められ、隆三は會ふ毎に亦此言を以て喞たれしなり。彼は言ふ遑だに無くて暴に歿りけれども、其の常に口にせし所は明かに彼の遺言なるべきのみ。

然れば貫一が鴫澤の家内に於ける境遇は、決して厄介者として陰に疎まるゝ如き憂目に遭ふにはあらざりき。憖ひ繼子などに生れたらんよりは、恁て在りなんこそ幾許か幸は多からんよ、と知る人は噂し合へり。隆三夫婦は實に彼を恩人の忘形見として疎ならず取扱ひけるなり。然ばかり

彼の愛せらるゝを見て、彼等は貫一をば娘の婿にせむとすならんと想へる者もありしかど、當時彼等は構へて然る心ありしにはあらざりけるも、彼の篤學なるを見るに及びて、漸く其心は出で來て、彼の高等中學校に入りし時、彼等の了簡は始めて定りぬ。

貫一は篤學のみならず、性質も直に、行も正しかりければ、此人物を以つて學士の冠を戴かんには、試に獲易からざる婿なるべし、と夫婦は私に喜びたり。此身代を讓られたりとて、他姓を冐して得謂はれぬ屈辱を忍ばんは、彼の屑しと爲ざる所なれども、美しき宮を妻に爲るを得ば、此身代も屈辱も何か有らんと、彼はなか／＼夫婦に增したる懽を懷きて、益學問を勵みたり。宮も貫一をば憎からず思へり。然れど恐くは貫一の思へる半には過ぎざらん。彼は自ら其の色好を知ればなり。世間の女の誰か自ら其の色好を知らざるべき、憂ふる所は自ら知るに過ぐるに在り。謂ふ可くんば、宮は己が美しさの幾何直するかを當然に知れるなり。彼

の美しさを以てして纔に箇程の資産を嗣ぎ、類多き學士風情を夫に有たんは、決して彼が所望の絶頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤より出でし例寡からざるを見たり。又は富人の醜き妻を厭ひて、美しき妾に親むを見たり。才だにあらば男立身は思のまゝなる如く、女は色をもて富貴を得べしと信じたり。尙彼は色を以て富貴を得たる人たちの若干を見たりしに、其容の己に如かざるものゝ多きを見出せり。剩へ彼は行く所に其美しさを唱はれざるはあらざりき。尙一件最も彼の意を强うせし事あり。そは彼が十七の歳に起りし事なり。當時彼は明治音樂院に通ひたりしに、ヴィオリンのプロフェッサアなる獨逸人は彼の愛らしき袂に艶書を投入れぬ。是素より仇なる戀にはあらで、女夫の契を望みしなり。殆ど同時に、院長の某は年四十を踰えたるに、先年其妻を喪ひしをもて再び彼を娶らんとて、密に一室に招きて切なる心を打明かせし事あり。

此時彼の小き胸は破れんとするばかり轟けり。半は曾て覺えざる可羞の爲に、半は遠に大なる希望の宿りたるが爲に。彼は玆に始めて己の美しさの寡くとも奏任以上の地位ある名流を其夫に直ひすべきを信じたるなり。彼を美しと見たるは彼の教師と院長とのみならで、牆を隣れる男子部の諸生の常に彼を見んとて打騷ぐをも、宮は知らざりしにあらず。若し彼のプロフェッサアに添はんか、或は四十の院長に從はんか、彼の榮譽ある地位は、學士を婿にして鴫澤の後を嗣ぐの比にはあらざらんをと、一旦抱ける希望は年と共に太りて、彼は始終晝ながら夢みつゝ、今にも貴き人又は富める人又は名ある人の己を見出して、玉の輿を舁せて迎に來るべき天緣の、必ず邂到らんことを信じて疑はざりき。彼の然までに深く貫一を思はざりしは全く之が爲のみ。然れども決して彼を嫌へるにはあらず、彼と添はゞ有繫に樂しからんとは念へるなり。如此く決定に其とは無けれど又有りとし見ゆる箒木の好運を望みつゝも、彼は怠らず

貫一を愛して居たり。貫一は彼の己を愛する外には其の胸の中に何もあらじとのみ思へるなりけり。

第四章

漆の如き闇の中に貫一の書齋の枕時計は十時を打ちぬ。彼は午後四時より向島の八百松に新年會ありとて未だ還らざるなり。

宮は奥より手ラムプを持ちて入來にけるが、机の上なる書燈を點し了れる時、婢は臺十能に火を盛りたるを持來れり。宮は之を火鉢に移して、

「而して奥のお鐵瓶も持つて來ておくれ。あゝ、もう彼方は御寢になるのだから。」

久しく人氣の絶えたりし一間の寒は、今俄に人の溫き肉を得たるを喜びて、直ちに咬まんとするが如く膚に薄れり。宮は慌忙しく火鉢に取附きつゝ、目を擧げて書棚に飾れる時計を見たり。

夜の闇く靜なるに、燈の光の獨り美しき顏を照したる、限無く艶なり。

松の内とて彼は常より着飾れるに、化粧をさへ爲たれば、露を帶びたる

花の梢に月のうつろへるが如く、背後の壁に映れる黒き影さへ香滴るゝやうなり。

金剛石と光を爭ひし目は惜氣も無く瞪りて時計の秒を刻むを打目戍れり。火に翳せる彼の手を見よ、玉の如くなり。然らば友禪模樣ある紫縮緬の半襟に韜まれたる彼の胸を想へ。其の胸の中に彼は今如何なる事を思へるかを想へ。彼は憎からぬ人の歸來を待侘ぶるなりけり。

一時又寒の太甚しきを覺えて、彼は時計より目を放つと與に起ちて、火鉢の對面なる貫一が裀の上に座を移せり。箇は彼の手に縫ひしを貫一の常に敷くなり、貫一の敷くをば今夜彼の敷くなり。

若やと聞着けし車の音は漸く近きて、忽ち轟きて、竟に我門に停りぬ。宮は疑無しと思ひて起たんとする時、客はいと醉ひたる聲して物言へり。貫一は生下戸なれば嘗て醉ひて歸りし事あらざれば、宮は力無く又坐りつ。時計を見れば早や十一時に垂んとす。

門の戸引啓けて、醉ひたる足音の土間に踏入りたるに、宮は何事とも分かず唯慌てゝラムプを持ちて出でぬ。臺所より婢も出合へり。

足の踏所も覺束無げに醉ひて、帽は落ちなんばかりに打傾き、ハンカチイフに裹みたる折を左に挈げて、山車人形のやうに揺々と立てるは貫一なり。面は今にも破れぬべく紅に熱して、舌の乾くに堪へかねて連に空唾を吐きつゝ、

「遲かつたかね。さあ御土産です。還つて之を細君に遣る。何ぞ仁なるや。」

「まあ、大變醉つて！　如何したの。」

「醉つて了つた。」

「あら、貫一さん、這麼所に寐ちや困るわ。さあ、早くお上りなさいよ。」

「然う見えても靴が脱げない。あゝ醉つた。」

仰様に倒れたる貫一の脚を掻抱きて、宮は辛くも其靴を取去りぬ。

「起きる、あゝ、今起きる。さあ、起きた。起きたけれど、手を牽いてくれなければ僕には歩けませんよ。」

宮は婢に燈を把らせ、自らは貫一の手を牽かんとせしに、彼は踉きつゝ肩に縋りて遂に放さゞりければ、宮は其の身一つさへ危きに、やう／＼扶けて書齋に入りぬ。

裀の上に舁下されし貫一は頭を机に支へて、打仰ぎつゝ微吟せり。

「君に勸む、金縷の衣を惜む莫れ。君に勸む、須く少年の時を惜むべし。花有り折るに堪へなば直に折る須し。花無きを待つて空しく枝を折ること莫れ。」

「貫一さん、如何して那樣に醉つたの？」

「醉つて居るでせう、僕は。ねえ、宮さん、非常に醉つて居るでせう。」

「醉つて居るわ。苦しいでせう。」

「然りや、苦しいほど醉つて居る。」這麽に醉つ居るに就いては大いに譯

が有るのだ。而して又宮さんなるものが大いに介抱して可い譯が有るのだ。宮さん！」

「可厭よ、私は、那樣に醉つて居ちや。不斷嫌ひの癖に何故那樣に飲んだの。誰に飲されたの。端山さんだの、荒尾さんだの、白瀨さんだのが附い居ながら、酷いわね、這麼に醉して。十時には乾度歸ると云ふから私は待つて居たのに、もう十一時過よ。」

「本當に待つて居てくれたのかい、宮さん。謝、多謝！　若其が事實であるならばだ、僕は此儘死んでも恨みません。這麼に醉されたのも、實は其なのだ。」

彼は宮の手を取りて、情に堪へざる如く握緊めつ。

「二人の事は荒尾より外に知る者は無いのだ。荒尾が又決して喋る男ぢやない。其が如何して知れたのか、衆が知つて居て…………僕は實に驚いた。四方八方から祝盃だ〳〵と、十も二十も一度に猪口を差されたのだ。

祝盃などを受ける覺は無いと言つて、手を引籠めて居たけれど、なかなか衆聽かないぢやないか。」

宮は竊に笑を帶びて餘念なく聽き居たり。

「それぢや祝盃の主意を變へて、假初にも那云ふ美人と一所に居て寢食を俱にすると云ふのが既に可羨しい。そこを祝すのだ。次には、君も男見なら、更に一歩を進めて、妻君に爲るやうに十分運動したまへ。十年も一所に居てから、今更人に奪られるやうな事があつたら、獨り間貫一一個人の恥辱ばかりではない、我々朋友全體の面目にも關する事だ。我我朋友ばかりではない、延いて高等中學の名折にもなるのだから、是非彼の美人を君が妻君にするやうに、是は我々が心を一にして結の神に禱つた酒だから、辭退するのは禮でない。受けなかつたら却つて神罰が有ると、弄謔とは知れて居るけれど、言葉が面白かつたから、甘糟から引受けて呷々遣付けた。

宮さんと夫婦に成れなかつたら、はゝはゝはゝ高等中學の名折になるのだと。恐入つたものだ。何分宜しく願ひます。」

「可厭よ、もう貫一さんは。」

「友達中にも然う知れて見ると、立派に夫婦にならなければ、彌よ僕の男が立たない義だ。」

「もう極つて居るものを、今更…………。」

「然うでないです。此頃翁さんや姨さんの様子を見るのに、如何も僕は

…………………………。」

「那樣事は決して無いわ、邪推だわ。」

「實は翁さんや姨さんの了簡は如何でも可い、宮さんの心一つなのだ。」

「私の心は極つて居るわ。」

「然うか知らん？」

「然うか知らん、それぢや餘りだわ。」

貫一は醉を支へかねて宮が膝を枕に倒れぬ。宮は彼が火の如き頰に、額に、手を加へて、

「水を上げませう。あれ、又寐ちや……貫一さん、貫一さん。」

寔に愛の潔き哉、此時は宮が胸の中にも例の汚れたる希望は跡を絶ちて彼の美しき目は他に見るべきものゝあらざらんやうに、其の力を貫一の寐顏に鍾めて、富も貴きも、乃至有ゆる利慾の念は、其の膝に覺ゆる一團の微溫の爲に溶されて、彼は唯妙に香しき甘露の夢に醉ひて前後をも知らざるなりけり。

諸の可忌しき忘想は此の夜の如く眼を閉ぢて、此一間に彼等の二人よりは在らざる如く、彼は世間に別人の影を見ずして、又此の明なる燈火の光の如きものありて、特に彼等をのみ照すやうに感ずるなり。

第五章

或日箕輪の內儀は思も懸けず訪來りぬ。其娘のお俊と宮とは學校朋輩にて常に往來したりけれども、未だ家と家との交際はあらざるなり。彼等の通學せし頃さへ親々は互に識らで過ぎたりしに、今は二人の往來も漸く踈くなりけるに及びて、俄に其母の來れるは、如何なる故にか、と宮も兩親も怪しき事に念へり。

凡そ三時間の後彼は歸行きぬ。

先に怪しみし家內は彼の來りしよりも其用事の更に思懸けざるに驚けり。貫一は不在なりしかば此の珍しき客來のありしを知らず、宮も亦敢て告げずして、二日と過ぎ、三日と過ぎぬ。其日より宮は少しく食して、多く眠らずなりぬ。貫一は知らず、宮は逾告げんとは爲ざりき。此間に兩親は幾度と無く談合しては、其事を決しかねて居たり。

彼の陰に在りて起れる事、又は見るべからざる人の心に浮べる事どもは、貫一の知る因もあらねど、片時も其目の忘れざる宮の樣子の常に變れるを見出さんは難き事にあらず。然も無かりし人の顏の色の遽に光を失ひたるやうにて、振舞など別けて力無く、笑ふさへいと打濕りたるを。宮が居間と謂ふまでにはあらねど、彼の簞笥手道具等置きたる小座敷あり。此には火燵の爐を切りて、用無き人の來ては迭に冬籠する所にも用ゐらる。彼は常に此に居て針仕事するなり。倦めば琴をも彈くなり。彼が手玩と見ゆる狗子柳のはや根を弛み、眞の打傾きたるが、鮟鱇切の水に埃を浮べて小机の傍に在り。庭に向へる肱懸窓の明きに敷紙を披げて、宮は膝の上に紅絹の引解を載せたれど、針は持たで、懶げに火燵に凭れたり。

彼は少しく食して多く眠らずなりてよりは、好みて此一間に入りて、深く物思ふなりけり。兩親は仔細を知れるにや、此樣子をば怪まんともせ

て、唯彼の爲すまゝに委せたり。

此の日貫一は授業始の式のみにて早く歸來にけるが、下座敷には誰も見えて、火燵の間に宮の咳く聲して、後は靜に、我が歸りしを知らざるよと思ひければ、忍足に窺寄りぬ。襖の僅に啓きたる隙より差覗けば、宮は火燵に倚りて硝子障子を眺めては俯目になり、又胸痛きやうに仰ぎては太息吐きて、忽ち物の音を聞澄すが如く、美しき目を瞠るは、何をか思凝すなるべし。人の窺ふと知らねば、彼は口も訴ふるばかりに心の苦悶を其狀に顯して憚らざるなり。

貫一は異みつゝも息を潛めて、猶彼の爲んやうを見んとゐたり。宮は少時ありて火燵に入りけるが、遂に櫓に打俯しぬ。

柱に身を倚せて、斜に內を窺ひつゝ貫一は眉を顰めて思惑へり。

彼は如何なる事ありて然ばかり案じ煩ふならん。然ばかり案じ煩ふべき事を如何なれば我に明さゞるならん。その故のあるべく覺えざると與に、

案じ煩ふ事のあるべきをも彼は信じ得ざるなりけり。恁く又案じ煩へる彼の面も自ら俯きぬ。問はずして知るべきにあらずと思定めて、再び内を差覗きけるに、宮は猶打俯して居たり、何時か落ちけむ、蒔絵の櫛の零れたるも知らで。

人の気勢に驚きて宮の振仰ぐ時、貫一は既に其傍に在り。彼は慌てゝ思頽るゝ気色を蔽はんと為たるが如し。

「あゝ、吃驚した。何時御帰んなすつて。」

「今帰つたの。」

「然う。些も知らなかつた。」

宮はおのれの顔の頻に眺めらるゝを眩ゆがりて、

「何を那様に視るの、可厭、私は。」

然れども彼は猶目を放たず、宮は故と打背きて、裁れ片畳の内を撈せり。

「宮さん、お前さん如何したの。えゝ、何処か不快のかい。」

「何ともないのよ。何故?」
慍く言ひつゝ、益急に搔せり。貫一は帽を冠りたるまゝ火燵に片肱掛けて斜に彼の顔を見遣りつゝ、
「だから僕は始終水臭いと言ふんだ。然う言へば、直に疑深いの、神經質だのと言ふけれど、それに違無いぢやないか。」
「だつて何ともありもしないものを……。」
「何ともないものが、悄然考へたり、太息を吐いたりして鬱いで居るものか。僕は先之から唐紙の外で立つて見て居たんだよ。病氣かい、心配でもあるのかい。言つて聞したつて可いぢやないか。」
宮は言ふ所を知らず、纔に膝の上なる紅絹を手弄るのみ。
「病氣なのかい。」
彼は僅に頭を掉りぬ。
「それぢや心配でもあるのかい。」

彼は仍頭を掉れば、

「ぢや如何したと云ふのさ。」

宮は唯胸の中を車輪などの廻るやうに覺ゆるのみにて、誠にも詐にも言を出すべき術を知らざりき。彼は犯せる罪の終に祕む能はざるを悟れる如き恐怖の爲に心慄けるなり。如何に答へんとさへ惑へるに、傍には貫一の益詰らんと待つよと思へば、身は搾らるゝやうに迫來る息の隙を、得も謂はれず冷かなる汗の流れ〳〵ぬ。

「それぢや如何したのだと言ふのに。」

貫一の聲音は漸く苛立ちぬ。彼の得言はぬを怪しと思へばなり。宮は驚きて不覺に言出せり。

「如何したのだか私にも解らないけれど、……私は此二三日如何したのだか……變に色々な事を考へて、何だか世の中が滿らなくつて、唯悲くなつて來るのよ。」

呆れたる貫一は瞬もせで耳を傾けぬ。
「人間と云ふものは今日偸して生きてゐても、何時死んで了ふか解らないのね。偸して居れば、可樂な事もある代に辛い事や、悲い事や、苦い事なんぞが有つて、二つ好い事は無し、考へれば考へるほど私は世の中が心細いわ。不圖然う思出したら、毎日那樣事ばかり考へて、可厭な心地になつて、自分でも如何か爲たのか知らんと思ふけれど、私病氣のやうに見えて？」
目を閉ぢて聽居し貫一は徐に眶を開くと與に眉を顰めて、
「それは病氣だ！」
宮は打萎れて頭を垂れぬ。
「然し心配する事は無いさ。氣に爲ては可かんよ、可いかい。」
「えゝ、心配ゐはゐません。」
異しく沈みたる其聲の寂しさを、如何に貫一は聽きたりしぞ。

「それは病氣の所爲だ、腦でも不良のだよ。那樣事を考へた日には、一日だつて笑つて暮せる日は有りはしない。固より世の中と云ふものは然う面白い義のものぢやないので、又人の身の上ほど解らないものは無い。其は其に違無いのだけれど、衆が皆那樣了簡を起して御覧な、世界中御寺ばかりになつて了ふ。儚いのが世の中と覺悟した上で、その儚い、滿らない中で切ては樂を求めやうとして、究竟我々が働いて居るのだ。考へて鬱いだ所で、滿らない世の中に儚い人間と生れて來た以上は、どうも今更爲方が無いぢやないか。だから、滿らない世の中を幾分か面白く暮さうと考へるより外は無いのさ。面白く暮すには、何か樂が無ければならない、一事恁と云ふ樂があつたら決して世の中は滿らんものではないよ。宮さんはそれでは樂と云ふものは無いのだね。此樂があればこそ生きてゐると思ふ程の樂は無いのだね。」

宮は美しき目を擧げて、求むる所あるが如く偷に男の顏を見たり。

「屹度無いのだね。」

彼は笑を含みぬ。然れども苦しげに見えたり。

「無い？」

宮の肩頭を捉りて貫一は此方に引向けんとすれば、爲すまゝに彼は緩く身を廻したれど、顔のみは可羞しく背けて居たり。

「さあ、無いのか、有るのかよ。」

肩に懸けたる手をば放さで連に搖るゝを、宮は鏁の槌もて撃懲さるゝやうに覺えて、安き心もあらず、冷なる汗は又一時流出でぬ。

「是は怪しからん！」

宮は危みつゝ彼の顔色を候ひぬ。常の如く戯るゝなるべし、其面は和ぎて一點の怒氣だにあらず、寧ろ唇頭には笑を包めるなり。

「僕などは一件大きな〳〵樂があるので、世の中が愉快で愉快で耐らんの。一日が經つて行くのが惜くて〳〵ね。僕は世の中が滿らない爲に其

樂を拵へたのではなくて、其樂の爲に此世の中に活きて居るのだ。若し此世の中から其樂を取去つたら、世の中は無い！　貫一といふ者も無い！　僕は其樂と生死を倶にするのだ。宮さん、可羨しいだらう！」

宮は忽ち全身の血の氷るばかりの寒さに堪へかねて打顫ひしが、此の心の中を覺られじと思へば、弱る力を勵して、

「可羨しいわ。」

「可羨しければ、お前さんの事だから分けてあげやう。」

「何卒。」

「えゝ、悉皆遣つて了へ！」

彼は外套の衣兜より一袋のボン〳〵を取出して火燵の上に置けば、餘力に袋の口は弛みて、紅白の玉は珊々と亂出でぬ。這は宮の最も好める菓子なり。

第六章

其翌々日なりき、宮は貫一に勸められて行きて醫の診察を受けしに、胃病なりとて一瓶の水藥を與へられぬ。貫一は信に胃病なるべしと思へり。患者は必ず然る事あらじと思ひつゝも其藥を服したり。懊惱として憂に堪へざらんやうなる彼の容體に幾許の變も見えざりけれど、其心に水と火の如きものありて相尅する苦痛は、益募りて止まざるなりけり。

貫一は彼の憎からぬ人ならずや。怪むべし、彼は此日頃然しも憎からぬ人を見ることを懼れぬ。見ねば有繫に見まほしく思ひながら、面を合すれば冷汗も出づべき恐怖を生ずるなり。彼の情有る言を聞けば、身をも斫らるゝやうに覺ゆるなり。宮は彼の優しき心根を見ることを恐れたり。宮が心地勝れずなりてより、彼に對する貫一の優しさは其平生に一層を加へたれば、彼は死を覓むれども得ず、生を求むれども得ざらんやうに、

惱亂じて幾と其の堪ふべからざる限に至りぬ。

遂に彼は此苦を兩親に訴へしにやあらん、一日母と娘とは遽に身支度して、忙々しく車に乗りて出でぬ。彼等は小からぬ一個の旅鞄を携へたり。

大風の凪ぎたる迹に孤屋の立てるが如く、侘しげに留守せる主の隆三は獨り碁盤に向ひて碁經を披き居たり。齢は尙ほ六十に遠けれど、頭は夥しき白髮にて、長く生ひだる髯なども六分は白く、容は瘦せたれど未だ老の衰も見えず、眉目溫厚にして頗る古井波無きの風あり。

旋て歸來にける貫一は二人の在らざるを怪みて主に訊ねぬ。彼は徐に長き髯を撫でゝ片笑みつゝ、

「二人はの、今朝新聞を見ると急に思着いて、熱海へ出掛けたよ。何でも昨日醫者が湯治が良いと言うて切に勸めたらしいのだ。いや、もう急の思着で、脚下から鳥の起つやうな騷をして、十二時卅分の汽車で。あゝ、獨で寂しい所、まあ茶でも淹れやう。」

貫一は有る可かざる事のやうに疑へり。

「はあ、それは。何だか夢のやうですな。」

「はあ、私も那様鹽梅で。」

「然し、湯治は良いでございませう。幾日ほど逗留のお心算で？」

「まあ甚麼だか四五日と云ふので、些の着の儘で出掛けたのだが、何爲直に飽きて了うて、四五日も居られるものか。出養生より内養生の方が樂だ。何か旨い物でも食べやうぢやないか、二人で、なう。」

貫一は着更へんとて書齋に還りぬ。宮の遺したる筆の蹟などあらんかと思ひて、求めけれども見えず。彼の居間をも尋ねけれども在らず。急ぎ出でしなれば然もあるべし、明日は必ず便あらんと思飜せしが、有繋に心樂まざりき。彼の六時間學校に在りて歸來れるは、心の瘦するばかり美しき俤に饑ゑて歸來れるなり。彼は空く饑ゑたる心を抱きて慰むべくもあらぬ机に向へり。

「實に水臭いな。幾許急いで出掛けたつて、何とか一言ぐらゐ言遺いて行きさうなものぢやないか。一寸其處へ行つたのぢやなし、四五日でも旅だ。第一言遺く、言遺かないよりは、湯治に行くなら行くと、始に話が有りさうなものだ。急に思着いた？ 急に思着いたつて、急に行かなければならん所ぢやあるまい。俺の歸るのを待つて、話をして、明日行くと云ふのが順序だらう。四五日ぐらゐの離別には顏を見ずに行つても彼人は平氣なのか知らん。

女と云ふ者は一體男よりは情が濃であるべきのだ。それが濃でないと爲れば、愛して居らんと考へるより外は無い。豈に彼人が愛して居らんとは考へられん、又萬々那樣事は無い。けれども十分に愛して居ると云ふほど濃ではないな。

元來彼人の性質は冷淡さ。それだから所謂（娘らしい）所が餘り無い。自分の思ふやうに情が濃でないのも其所爲か知らんて。子供の時分から成

程然云ふ傾向は有つてゐたけれど、今のやうに太甚しくはなかつたやうに考へるがな。子供の時分に然うであつたなら、今ぢや猶更でなければならんのだ。其を考へると疑ふよ、疑はざるを得ない！
其に引替へて自分だ、自分の愛して居る度は實に非常なもの、殆ど………
……殆とではない、全くだ、全く溺れてゐるのだ。自分でも如何して這麼だらうと思ふほど溺れてゐる！
是程自分の思つてゐるのに對しても、最少し情が篤くなければならんのだ。或時などは實に水臭い事がある。今日の事なども隨分酷い話だ。之が互に愛してゐる間の仕草だらうか。深く愛してゐる丈に恁云ふ事を爲れると實に憎い。
小説的かも知れんけれど、八犬傳の濱路だ、信乃が明朝は立つて了ふと云ふので、親の目を忍んで夜更に逢ひに來る、あの情合でなければならな。いや、妙だ！　自分の身の上も信乃に似てゐる。幼少から親に別

れて此の鴫澤の世話になつてゐて、其處の娘と許婚……似てゐる、似てゐる。

然し内の濱路は困る、信乃にばかり氣を揉して、餘り憎いな、そでない爲方だ。之から手紙を書いて思ふさま言つて遣らうか。憎いは憎いけれど病氣ではあるし、病人に心配させるのも可哀さうだ。

自分は又神經質に過るから、思過を爲る所も大きにあるのだ。其は彼人からも不斷言はれる、けれども自分が思過であるか。彼人が情が薄いのかは一件の疑問だ。

時々然う思ふ事がある、彼人の水臭い仕打の有るのは、多少か自分を侮つてゐるのではあるまいか。自分は此家の厄介者、彼人は家附の娘だ。因て自ら主と家來と云ふやうな考が始終有つて、……否其も彼人に能く言れる事だ、それくらゐなら始から許しはしない。好いと思へばこそ恁云ふ譯に、……然うだ。然うだ、其を言出すと太く慍られるのだ、

一番其を惱るよ。勿論那樣樣子の些少でも見えた事は無い、自分の僻見に過ぎんのだけれども、氣が濟まないから愚痴も出るのだ。然し、若も彼人の心に那樣根性が爪の垢ほどでも有つたらば、自分は潔く此緣は切つて了ふ。立派に切つて見せる！　自分は愛情の俘とはなつても、未だ奴隸になる氣は無い。或は此緣を切つたなら自分は彼人を忘れかねて焦死に死ぬかも知れん、死なんまでも發狂するかも知れん。管はん！　如何ならうと切れて了ふ。切れずに措くものか。

其は自分の僻見で、彼人に限つては那樣心は微塵も無いのだ、其點は自分も能く知つてゐる。けれども情が濃でないのは事實だ、冷淡なのは事實だ。だから、冷淡であるから情が濃でないのか。自分に對する愛情が其冷淡を打壞すほどに熱しないのか。或は熱し能はざるのが冷淡の人の愛情であるのか。之が、研究すべき問題だ。」

彼は意に滿たぬ事ある每に、必ず此の問題を研究せざるなけれども、未

だ曾て解釋し得ざるなりけり。今日はや如何に解釋せんとすらん。

（六）の二

翌日果して熱海より便はありけれど、僅に一枚の端書をもて途中の無事と宿とを通知せるに過ぎざりき。宛名は隆三と貫一とを並べて、宮の手蹟なり。貫一は讀了ると齊しく片々に引裂きて捨てゝけり。宮の在らば如何にとも言解くなるべし。彼の親しく言解かば、如何に打腹立ちたりとも貫一の心の釋けざることはあらじ。宮の前には常に彼は慍をも、恨をも、憂をも忘るゝなり。今は可懷しき顏を見る能はざる失望に加ふるに、此不平に遭ひて、而も言解く者のあらざれば、彼の慍は野火の飽くこと知らで燎くやうなり。

此夕隆三は彼に食後の茶を薦めぬ。一人の侘しければ留めて物語はんとてなるべし。然れども貫一の屈托顏して絕えず思の非ぬ方に馳する氣色なるを、

「お前如何ぞ爲なすつたか。うむ、元氣が無いの。」
「はあ、少し胸が痛みますので。」
「それは好くない。劇く痛みでもするかな。」
「いえ、何爲、もう宜しいのでございます。」
「それぢち茶は可くまい。」
「頂戴します。」
係る淺ましき慍を人に移さんは、甚だ謂無き事なり、と自ら制して、書齋に歸りて愁ひ心を傷めんより、人に對して姑く憂を忘るゝに如かじと思ひければ、彼は努めて寛がんとえたれども、動もすれば心は空になりて、主の語を聞逸さむとす。
今日文の來て細々と優しき事など書聯ねたらば、如何に我は嬉しからん。なか〳〵同じ處に居て飽かず顏を見るに易へて、其の樂は深かるべきを。さては出行きし恨も忘られて、二夜三夜は遠かりて、せめて其の文を形

見に思續けんもをかしかるべきを。
彼は其身の卒に出行きしを、如何に本意無く我の思ふらんかは能く知るべきに。其を知らば一筆書きて、など我を慰めんとは爲ざる。其の一筆を如何に我の嬉しく思ふらんかをも能く知るべきに。我を可憐と思へる人の何故に然は爲ざるにやあらん。恁までに情篤からぬ戀の世に在るべきか。疑ふべし、疑ふべし、と貫一の胸は又亂れぬ。主の聲に驚かされて、彼は忽ち其事を忘るべき吾に復れり。
「ちと話したい事があるのだが、や、誠に妙な話で、なう。」
笑ふにもあらず、顰むにもあらず、稍自ら嘲むに似たる隆三の顏は、燈火に照されて、常には見ざる異しき相を顯せるやうに、貫一は覺ゆるなりき。
「はあ、如何いふ御話ですか。」
彼は長き髯を忙しく揉みては、又頤の邊より徐に撫下して、先打出さん

語を案じたり。

「お前の一身上の事に就いてだがの。」

纔に恁く言ひしのみにて、彼は又遲ひぬ、其の髯は虻に苦しむ馬の尾のやうに揮はれつゝ。

「いよ〳〵お前も今年の卒業だつたの。」

貫一は遽に敬はるゝ心地して自と膝を正せり。

「で、私もまあ一安心したと云ふもので、幾分か是でお前の御父樣に對して恩返も出來たやうな譯、就いてはお前も益〳〵勉強してくれんでは困るなう。未だ此先大學を卒業して、それから社會へ出て相應の地位を得る迄に仕上げなければ、私も鼻は高くないのだ。如何か洋行の一つも爲せて、指折の人物に爲たいと考へて居るくらゐ、未だ〳〵是から兩肌を脫いで世話をえなければならんお前の體だ、なう。」

之を聞ける貫一は鐵繩をもて縛められたるやうに身の重きに堪へず、心

の轉た苦しきを感じたり。其恩の餘りに大いなるが爲に、彼は其中に在りて其中に在ることを忘れんと爲る平生を省みたるなり。

「はい。非常な御恩に預りまして、考へて見ますると、口では御禮の申しやうもございません。愚父が何程の事を致したか知りませんが、なかなか這麼御恩返を受けるほどの事が出來るものでは有りません。愚父の事は措きまして、私は私で、此御恩は如何か立派に御返し申したいと念つて居ります。愚父の亡りました彼時に、此方で引取つて戴かなかつたら、私は今頃何に成つて居りますか、其を思ひますと、世間に私ほど幸なものは恐く無いでございませう。」

彼は十五の少年の驚くまでに大人びたる己を見て、其の着たる衣を見て、其の坐れる裀を見て、旋て美しき宮と共に此家の主となるべき其身を思ひて、漫に涙を催せり。實に七千圓の粧奩を隨へて、百萬金も購ふ可からざる戀女房を得べき學士よ、彼は小買の米を風呂敷に提げて、其の影

の如く痩せたる犬と與に月夜を走りし少年なるをや。

「お前が然う思うてくれゝば私も張合がある。就いては改めてお前に頼があるのだが、聽いてくれるか。」

「如何いふ事ですか、私で出來ます事ならば、何なりと致します。」

彼は恁く潔く答ふるに憚らざりけれど、心の底には危む所無きにしもあらざりき。人の恁る言を出す時は、多く能はざる事を強ふる例なればなり。

「外でも無いがの、宮の事だ、宮を嫁に遣らうかと思つて。」

見るに堪へざる貫一の驚愕をば、せめて亂さんと彼は慌忙しく語を次ぎぬ。

「之に就いては私も種々と考へたけれど、大きに思ふ所もあるて、いつそ彼は遣つて了うての、お前は最少しの事だから大學を卒業して、四五年も歐羅巴へ留學して、全然仕上げた所で身を固めるとしたら如何かな。」

汝の命を與へよと逼らるゝ事あらば、其時の人の思は如何なるべき！可恐しきまでに色を失へる貫一は空く隆三の面を打目戍るのみ。彼は太く困じたる體にて、長き髯をば揉みに揉みたり。

「お前に約束をして置いて、今更變換を爲るのは、何とも氣の毒だが、之に就いては私も大きに考へた所があるので、必ずお前の爲にも惡いやうには計はんから、可いかい、宮は嫁に遣る事にしてくれ、なう。」

待てども貫一の言を出さゞれば、主は寡からず惑へり。

「なう、惡く取つてくれては困るよ、彼を嫁に遣るから、それで我家とお前との縁を切つて了ふと云ふのではない、可いかい。大した事は無いが此家は全然お前に讓るのだ、お前は矢張私の家督よ、なう。で、洋行も爲せやうと思ふのだ。必ず惡く取つては困るよ。約束をした宮をの、餘所へ遣ると云へば、何かお前に不足でもあるやうに聞えるけれど、決して然した譯ではないのだから、其處はお前が能く

の如く痩せたる犬と與に月夜を走りし少年なるをや。

「お前が然う思うてくれゝば私も張合がある。就いては改めてお前に頼があるのだが、聽いてくれるか。」

「如何いふ事ですか、私で出來ます事ならば、何なりと致します。」

彼は恁く潔く答ふるに憚らざりけれど、心の底には危む所無きにしもあらざりき。人の恁る言を出す時は、多く能はざる事を強ふる例なればなり。

「外でも無いがの、宮の事だ、宮を嫁に遣らうかと思つて。」

見るに堪へざる貫一の驚愕をば、せめて亂さんと彼は慌忙しく語を次ぎぬ。

「之に就いては私も種々と考へたけれど、大きに思ふ所もあるて、いつそ彼は遣つて了うての、お前は最少しの事だから大學を卒業して、四五年も歐羅巴へ留學して、全然仕上げた所で身を固めるとしたら如何かな。」

汝の命を與へよと逼らるゝ事あらば、其時の人の思は如何なるべき！

可恐しきまでに色を失へる貫一は空く隆三の面を打目成るのみ。彼は太く困じたる體にて、長き髯をば揉みに揉みたり。

「お前に約束を爲て置いて、今更變換を爲るのは、何とも氣の毒だが、之に就いては私も大きに考へた所があるので、必ずお前の爲にも惡いやうには計はんから、可いかい、宮は嫁に遣る事に爲てくれ、なう。」

待てども貫一の言を出さゞれば、主は寡からず惑へり。

「なう、惡く取つてくれては困るよ、彼を嫁に遣るから、それで我家とお前との緣を切つて了ふと云ふのではない、可いかい。大した事は無いが此家は全然お前に讓るのだ、お前は矢張私の家督よ、なう。で、洋行も爲せやうと思ふのだ。必ず惡く取つては困るよ。約束を爲た宮をの、餘所へ遣ると云へば、何かお前に不足でもあるやうに聞えるけれど、決して然した譯ではないのだから、其處はお前が能く

承知してくれんければ困る、誤解されては困る。又お前にしても、學問を仕上げて、なう、天晴の人物に成るのが第一の希望であらう。其志を遂げさへ爲れば、宮と一所になる、ならんは何程の事でもないのだ。なう、然うだらう、然し是は理窟で、お前も不服かも知れん。不服と思ふから私も賴むのだ。お前に賴が有ると言うたのは此の事だ。從來もお前を世話した、後來も益世話をせうからなう、其處に免じて、お前も此賴は聽いてくれ。」

貫一は戰く脣を咬緊めつゝ、故ら緩舒に出せる聲音は、怪しくも常に變れり。

「それぢや翁樣の御都合で、如何しても宮さんは私に下さる譯には參らんのですか。」

「さあ、斷つて遣れんと云ふ次第ではないが、お前の意は如何だ。私の賴は聽ずとも、又自分の修行の邪魔にならうとも、那樣貪着は無しに、

何でも彼でも宮が欲しいと云ふのかな。」

「…………………………。」

「然うではあるまい。」

「…………………………。」

得言はぬ貫一が胸には、理に似たる彼の理不盡を憤りて、責むべき事、詰るべき事、罵るべき、言破るべき事、辱むべき事の數々は沸くが如く充滿ちたれど、彼は神にも勝れる恩人なり。理非を問はず其言には逆ふべからずと思へば、血出づるまで舌を咬みても、敢て言はじと覺悟せるなり。彼は又思へり、恩人は恩を枷に如此く逼れども、我は此枷の爲に屈せらるべきも、彼は如何なる斧を以てか宮の愛をば割かんとすらん。宮が情は我が思ふまゝに濃ならずとも、我を棄つるが如き然ばかり薄き情にはあらざるを。彼だに我を棄てざらんには、枷も理不盡も恐るべきかは。賴むべきは宮が心なり。賴まるゝも宮が心也と、彼は可憐き宮を

思ひて、其父に對する慍を和げんと勉めたり。

我は常に宮が情の濃ならざるを疑へり。恰も好し此理不盡ぞ彼が愛の力を試むるに足るなり。善し〳〵、盤根錯節に遇えずんば。

「嫁に遣ると有仰るのは、何方へ御遣しになるのですか。」

「それは未だ確とは極らんがの、下谷に富山銀行と云ふのがある、それ、富山重平な、彼の息子の嫁に欲しいと云ふ話があるので。」

其ぞ箕輪の骨牌會に三百圓の金剛石を炫かせし男にあらずや、と貫一は陰に嘲笑へり。然れど又餘りに其人の意外なるに駭きて、旋て又彼は自ら笑ひぬ。是必ずしも意外ならず、苟くも吾が宮の如く美しきを、目あり心あるものゝ誰かは戀ひざらん。獨り怪しとも怪きは隆三の意なる哉。我十年の約は輕々しく破るべきにあらず、猶謂無きは、一人娘を出して嫁せしめんとするなり。戯るゝにはあらずや、心狂へるにはあらずや。貫一は寧ろ恁く疑ふをば、事の彼の眞意に出でしを疑はんより邇かるべ

しと信じたりき。

彼は競争者の金剛石なるを聞きて、一度は汚され、辱められたらんやうにも怒を作せしかど、既に勝負は分明にして、我は手を束ねて此弱敵の自ら僵るゝを看んと思へは、心稍落居ぬ。

「は、はあ、富山重平、聞いて居ります、偉い財産家で。」

此一言に隆三の面は熱くなりぬ。

「之に就いては私も大きに考へたのだ、何に為ろ、お前との約束もあるものなり、又一人娘の事でもあり、然し、お前の後来に就いても、宮の一身に就いてもの、又私たちは段々取る年であつて見れば、其老後だの、其等の事を考へて見ると、此鴫澤の家には、お前も知つての通り、恁と云ふ親類も無いで、何かに就けて誠に心細いわ、なう。私たちは追々年を取るばかり、お前たちは若しと云ふもので、爰に可頼しい親類が有れば、何程心丈夫だか知れんて、なう。因で富山ならば親類に持つても可

愧からん家格だ。氣の毒な思をさせてお前との約束を變易するのも、私たちが一人娘を他へ遣つて了ふのも、究竟は銘々の爲に行末好かれと思ふより外は無いのだ。

それに、富山からは切つての懇望で、無理に一人娘を貰ふと云ふ事であれば、息子夫婦は鴫澤の子同樣に、富山も鴫澤も一家のつもりで、決して鴫澤家を疎には爲まい。娘が內に居なくなつて不都合があるならば、何の樣にも其不都合の無いやうにと計はうからと、なう、それは隨分事を分けた話で。

決して慾ではないが、良い親類を持つと云ふものは、人で謂へば取も直さず良い友達で、お前にしても然うだらう、良い友達が有れば、萬事の話合手になる、何彼の力になる、なう、謂はゞ親類は一家の友達だ。お前が是から世の中に出るにしても、大相な便宜になるといふもの。其や此や考へて見ると、內に置かうよりは、遣つた方が、誰の爲彼の爲で

はない、四方八方が好いのだから、私も決心して、いつそ遣らうと思ふのだ。

私の了簡は恁云ふのだから、必ず惡く取つてくれては困るよ、なう。私だとて年効も無く事を好んで、何爲に若いものゝ不爲になれと思ふものかな。お前も能く其處を考へて見てくれ。

私も恁して賴むからは、お前の方の賴も聽かう。今年卒業したら直に洋行でも爲たいと思ふなら、又然云ふ事に私も一番奮發しやうではないか。明日にも宮と一處になつて、私たちを安心さしてくれるよりは、お前も私も最少しの所を辛抱爲て、いつその事博士になつて喜ばしてくれんか。」

彼は然も思ひのまゝに說完せたる面色して、寬に髯を撫でゝ居たり。

貫一は彼の說進むに從ひて、漸く其心事の火を觀るより明なるを得たり。彼が千言萬語の舌を弄して倦まざるは、畢竟利の一字を掩はんが爲のみ。貧する者の盜むは世の習ながら、貧せざるも仍盜まんとする乎。我も穢

れたる此世に生れたれば、穢れたりとは自ら知らで、或は穢れたる念を起し、或は穢れたる行を爲すことあらむ。然れど自ら穢れたりと知りて自ら穢すべきや。妻を賣りて博士を買ふ！　是豈穢れたるの最も大なる者ならずや。

世は穢れ、人は穢れたれども、我は常に我恩人の獨り汚に染みざるを信じて疑はざりき。過ぐれば夢より淡き小恩をも忘れずして、貧しき孤子を養へる志は、之を證して餘あるを。人の淺ましきか、我の愚なるか、恩人は酷くも我を欺きぬ。今は世を擧げて皆穢れたるよ。悲めばとて既に穢れたる世を奈何にせん。我は此時此穢れたる世を喜ばん乎。然しも此穢れたる世に唯一つ穢れざるものあり、喜ぶべきものあるにあらずや。貫一は可憐き宮が事を思へるなり。

我の愛か、死をもて脅すとも得て屈すべからず。宮が愛か、某の帝の冠を飾れると聞く世界無雙の大金剛石をもて購はんとすとも、爭でか動し

得べき。我と彼との愛こそ淤泥の中に輝く玉の如きものなれ。我は此一つの穢れざるを抱きて、此世の渾て穢れたるを忘れん。

貫一は恁く自ら慰めて、有繫に彼の巧言を憎し可恨しとは思ひつゝも、枉げて然あらぬ體に聽き居たるなりけり。

「それで、此話は宮さんも知つて居るのですか。」

「薄々は知つて居る。」

「では未だ宮さんの意見は御聞にならんので？」

「それは、何だ、一寸聞いたがの。」

「宮さんは如何申して居りました。」

「宮か、宮は別に如何といふ事は無いのだ。御父樣や御母樣の宜しいやうにと云ふので、宮の方には異存は無いのだ。彼にも悉皆譯を說いて聞かした所が、然云ふ次第ならばと、漸く得心がいつたのだ。」

斷じて詐なるべしと思ひながらも、貫一の胸は跳りぬ。

「はあ、宮さんは承知を爲ましたので？」
「然う、異存は無いのだ。で、お前も承知してくれ、なう。一寸聞けば無理のやうではあるが、其實少しも無理ではないのだ。私の今話した譯はお前にも能く解つたらうが、なう。」
「はい。」
「其譯が解つたら、お前も快く承知してくれ、なう。なう、貫一。」
「はい。」
「それではお前も承知をしてくれるな。それで私も大きに安心した。悉しい事は何れ又寛緩話を爲やう。而してお前の頼も聽かうから、まあ能く種々考へて置くが可いの。」
「はい。」

第七章

熱海は東京に比して温きこと十餘度なれば、今日漸く一月の半を過ぎぬるに、梅林の花は二千本の梢に咲亂れて、日に映へる光は玲瓏として人の面を照し、路を埋むる幾斗の清香は凝りて掬ぶに堪へたり。梅の外には一木無く、處々に亂石の低く横はるのみにて、地は坦に氈を鋪きたるやうの芝生の園の中を、玉の碎けて迸り、練の裂けて飜る如き早瀬の流ありて横さまに貫けり。後に負へる松杉の緑は麗に霽れたる空を攅して、其頂に方りて懶げに懸れる雲は眠るに似たり。習との風もあらぬに花は頻に散りぬ。散る時に輕く舞ふを鶯は爭ひて歌へり。

宮は母親と連立ちて入來りぬ。彼等は橋を渡りて、船板の牀几を据ゑたる木の下を指して緩く歩めり。彼の病は未だ快からぬにや、薄假粧したる顔色も散りたる葩のやうに衰へて、足の運も怠げに、動すれば頭の低

るゝを、思出しては努めて梢を眺むるなりけり。彼の常として物案すれば必ず唇を咬むなり。彼は今頻に唇を咬みたりしが、

「御母さん、如何しませうねえ。」

いと好く咲きたる枝を飽かず見上げし母の目は、此時漸く娘に轉りぬ。

「如何せうたつて、お前の心一つぢやないか。初發にお前が適きたいといふから、恁云ふ話にもたのぢやないかね。それを今更……………。」

「それは然うだけれど、如何も貫一さんの事が氣になつて。御父さんはもう貫一さんに話を爲すつたらうか、ねえ御母さん。」

「あゝ、もう爲すつたらうとも。」

宮は又唇を咬みぬ。

「私は、御母さん、貫一さんに顔が合されないわね。だから若し適くのなら、もう逢はずに直と行つて了ひたいのだから、然云ふ都合にして下さいな。私はもう逢はずに行くわ。」

聲は低くなりて、美しき目は濕へり。彼は忘れざるべし、其の涙を拭へるハンカチイフは再び逢はざらんとする人の形見なるを。

「お前が其程に思ふのなら、何で自分から適きたいとお言ひなのだえ。然う何時迄も氣が迷つてゐては困るぢやないか。一日經てば一日だけ話が運ぶのだから、本當に如何とも確然極めなくては可けないよ。お前が可厭なものを無理にお出といふのぢやないのだから、斷るものなら早く斷らなければ、だけれど、今になつて斷ると云つたつて…………………………

………。」

「可いわ。私は適くことは適くのだけれど、貫一さんの事を考へると情無くなつて…………………………。」

貫一が事は母の寢覺にも苦む處なれば、娘の其名を言ふ度に、犯せる罪をも歌はるゝ心地して、此良緣の喜ぶべきを思ひつゝも、有繫に胸を開きて喜ぶを得ざるなり。彼は强ひて宮を慰めんと試みつ。兼ねては自ら

慰むるなるべし。

「お父さんからお話があつて、貫一さんも其で得心がいけば、濟む事だし、又お前が彼方へ適つて、末々まで貫一さんの力になれば、お互の仕合と云ふものだから、其處を考へれば、貫一さんだつて………、それに男と云ふものは思切が好いから、お前が心配して居るやうなものではないよ。是なり遇はずに行くなんて、其はお前却つて善くないから、矢張逢つて、丁と話をして、而して淸く別れるのさ。此後とも末長く兄弟で往來をしなければならないのだもの。いづれ今日か明日には御音信があつて、樣子が解らうから、而したら還つて、早く支度に掛らなければ。」

宮は牀几に倚りて、半は聽き、半は思ひつゝ、膝に散來る葩を拾ひては、おのれの脣に代へて連に咬碎きぬ。鶯の聲の絕間を流の音は咽びて止まず。

宮は何心無く面を挙ると與に稍隔てたる木の間隱に男の漫行する姿を認めたり。彼は忽ち眼を着けて、木立は垣の如く、花は幕の如くに遮る隙を縫ひつゝ、姑く其影を逐ひたりしが、遂に誰をや見出しけん、慌忙しく母親に呼けり。彼は急に牀几を離れて五六歩進行きしが、彼方よりも見付けて、逸早く呼びぬ。

「其處に御出でしたか。」

其聲は靜なる林を動して響きぬ。宮は聞くと齊しく、恐れたる風情にて牀几の端に竦りつ。

「はい、唯今し方參つたばかりでございます。好くお出掛でございましたこと。」

母は慇く挨拶しつゝ彼を迎へて立てり。宮は其方を見向きもやらで、彼の急足に近く音を聞けり。

母子の前に顯れたる若き紳士は、其の誰なるやを說かずもあらなん、目

覺しく大なる金剛石の指環を輝かせるよ。柄には綠色の玉を獅子頭に彫みて、象牙の如く瑩潤に白き杖を携へたるが、其尾をもて低き梢の花を打落し〳〵、
「今お留守へ行きまして、此處だといふのを聞いて追懸けて來た譯です。熱いぢやないですか。」
宮はやう〳〵面を向けて、さて淑に起ちて、恭しく禮するを、唯繼は世にも嬉しげなる目して受けながら、仍飽くまでも倨り高るを忘れざりき。其の張りたる腮と、への字に結べる薄唇と、尤異き金綠の目鏡とは彼が尊大の風に尠からざる光彩を添ふるや疑無し。
「おや、然やうでございましたか、其はまあ。餘り好い御天氣でございますから、ぶら〳〵と出掛けて見ました。眞に今日はお熱いくらゐでございます。まあ此へお掛遊ばして。」
母は牀几を拂へば、宮は路を開きて傍に佇めり。

「貴方がたもお掛けなさいましな。今朝です、東京から手紙で、急用があるから早速歸るやうに――と云ふのは、今度私が一寸した會社を建てるのです、外國へ此方の塗物を賣込む會社。是は去年中からの計畫で、いよ〳〵此三四月頃には立派に出來上る譯でありますから、私も今は隨分忙しい體、何爲ろ社長ですからな。それで私が行かなければ解らん事があるので、呼びに來た。で、翌の朝立たなければならんのであります。」

「おや、それは急な事で。」

「貴方がたも一所にお立ちなさらんか。」

彼は宮の顏を偸視つ。宮は物言はん氣色もなくて又母の答へぬ。

「はい、難有う存じます。」

「それとも未だ御在ですか。宿屋に居るのも不自由で、面白くもないぢやありませんか。來年あたりは一つ別莊でも建てませう、何の雜は無い事です。地面を廣く取つて其中に風流な田舍家を造るです。食物などは

東京から取寄せて、それでなくては實は保養には成らん。家が出來てから寛緩遊びに來るです。」

「結構でございますね。」

「お宮さんは、何ですか、恁云ふ田舍の靜な所が御好なの？」

宮は笑を含みて言はざるを、母は傍より、

「是はもう遊ぶ事なら嫌にございませんので。」

「はゝはゝはゝ誰も然うです。それでは以後盛にお遊びなさい。どうせ毎日用は無いのだから、田舍でも東京でも西京でも、好きな所へ行つて遊ぶです。船は御嫌ですか。はゝあ。船が平氣だと、支那から亞米利加の方を見物旁今度旅行を爲て來るのも面白いけれど。日本の内ぢや遊山に行いた所で知れたもの、甚麼に贅澤を爲たからと云つて。御歸になつたら一日赤阪の別莊の方へ遊びにお出下さい、ねえ。梅が好いのであります。それは大きな梅林が有つて、一本々々種の違ふのを

集めて二百本もあるが、皆老木ばかり。此梅などは全て爲方が無い！這麼若い野梅、薪のやうなもので、庭に植ゑられる花ぢやない。是で熱海の梅林も凄しい。是非内のをお目に懸けたいでありますね。一日遊びに來て下さい、御馳走を爲ますよ。お宮さんは何が所好ですか、えゝ、一番所好なものは？」

彼は陰に宮と語らんことを望めるなり、宮は仍言はずして可羞しげに打笑めり。

「で、何日御歸でありますか。明朝一所に御發足にはなりませんか。此地に然う長く居なければならんと云ふ次第ではないのでせう、そんなら一所にお立ちなすつたら如何であります。」

「はい、難有うございますが、少々宅の方の都合がございまして、二三日内には音信がございます筈で、其音信を待ちまして、實は歸ることに致してございますものですから、折角の仰せですが、はい。」

「はゝあ、それぢや如何もな。」

唯繼は例の倨りて天を睨むやうに打仰ぎて、杖の獅子頭を撫廻しつゝ、少時思案する體なりしが、やをら白羽二重のハンカチイフを取出して、片手に一揮揮るよと見れば鼻を拭へり。菫花の香は咽ばさるゝばかりに薫じ遍りぬ。

宮も母も其の鋭き匂に驚けるなり。

「あゝと、私是から少し散歩しやうと思ふのであります。是から出て流に沿いて、田圃の方を。私未だ知らんけれども、餘程景色が好いさうな。御一所にと云ふのだが、大分路程が有るから、貴方は御迷惑でありませう。二時間ばかりお宮さんを御貸し下さいな、私一人で歩いても滿らない。お宮さんは胃が不良のだから散歩は極めて藥、是から行つて見ませう、ねえ。」

彼は杖を取直してはや立たんとす。

「はい、難有うございます。お前お供をお爲かい。」
宮の遲ふを見て、唯繼は故に座を起てり。
「さあ行つて見ませう、えゝ、胃病の藥です。然う因循して居ては可けない。」
衝と寄りて輕く宮の肩を拊ちぬ。宮は忽ち面を紅めて、如何にとも爲ん術を知らざらんやうに立惑ひて居たり。母の前をも憚らぬ男の馴々しさを、憎しとにはあらねど、己の仂なきやうに愧づるなりけり。
得も謂はれぬ其の仇無さの身に浸遍るに堪へざる思は、漫に唯繼の目の中に顯れて異しき獨笑となりぬ。此の仇無き娩ゑらしき、美しき娘の柔き手を携へて、人無き野道の長閑なるを語ひつゝ行かば、如何ばかり樂からんよと、彼そはや心も空になりて、
「さあ、行つて見ませう。御母さんから御許が出たから可いではありませんか、ねえ、貴方、宜しいでありませう。」

お出なさいと命令を爲すつて下さい。」
母は宮の猶羞づるを見て、
「お前お出かい、如何お爲だえ。」
「貴方、お出かいなど〻、有仰つちや可けません。お出なさいと命令を爲すつて下さい。」
宮も母も思はず笑へり。唯繼も後れじと笑へり。
又人の入來る氣勢なるを宮は心着きて窺ひしに、姿は見えずして靴の音のみを聞けり。梅見る人か、あらぬか、用ありげに忙しく踏立つる足音なりき。
「ではお前お供をおしな。」
「さあ、行きませう。直其處まで〻ありますよ。」
宮は小き聲して、
「御母さんも一處に御出なさいな。」
「私かい、まあお前お供をおしな。」

母親を作ひては大いに風流ならず、頗る妙ならずと思へば、唯繼は飽くまで之を防がんと、

「いや、御母さんには却つて御迷惑です。道が良くないから御母さんには迚も可けますまい。實際貴方には切つてお勸め申されない、御迷惑は知れて居る。何も遠方へ行くのではないのだから、御母さんが一處でなくても可いぢやありませんか、ねえ。私折角思立つたものでありますから、それでは一寸其處までゞ可いから附合つて下さい。貴方が可厭だつたら直に歸りますよ、ねえ。それはなか／＼好い景色だから、まあ私に騙されたと思つて來て御覧なさいな、ねえ。」

此時忙しげに聞えし靴音はや止みたり。人は出去りしにあらで、七八間彼方なる木蔭に足を停めて、忍びやかに樣子を窺ふなるを、此方の三人は誰も知らず。彳める人は高等中學の制服の上に焦茶の外套を着て、肩には古りたる象皮の學校鞄を掛けたり。彼は間貫一にあらずや。

再び靴音は高く響きぬ。其の驟なると近きとに驚きて、三人は始めて音する方を見遣りつ。

花の散りかゝる中を進來つゝ學生は帽を取りて、

「姨さん、參りましたよ。」

母子は動顛して殆ど人心地を失ひぬ。母親は物を見るべき力もあらず呆れ果てたる目をば空しく瞪りて、少時は石の如く動かず。宮は、あはれ生きてあらんより忽ち消えて此土と成了らんことの、せめて心易さを思ひつゝ、其淡白き唇を咬裂かんとすばかりに咬みて止まざりき。想ふに彼等の驚愕と恐怖とは其の殺せし人の計らずも今生きて來れるに會へるが如きものならん。氣も不覺なれば母は譫語のやうに言出せり。

「おや、お出なの。」

宮は些少なりともおのれの姿の多く彼の目に觸れざらんやうにと冀へる如く、木蔭に身を側めて、打過む呼吸を人に聞かれじとハンカチイフに

口元を掩ひて、見るは苦しけれど、見ざるも辛き貫一の顔を、俯したる額越に窺ひては、又唯繼の氣色をも氣遣へり。
唯繼は彼等の心々に然ばかりの大波瀾ありとは知らざれば、聞及びたる鴫澤の食客の來れるよと、例の金剛石の手を見よがしに杖を立てゝ、誇りかに梢を仰ぐ腮を張れり。
貫一は今回の事も知れり、彼の唯繼なる事も知れり、既に此場の樣子をも知らざるにはあらねど、言ふべき事は後にぞ犇と言はん、今は姑く色にも出さじと、裂けもぬべき無念の胸をやう／＼鎮めて、苦しき笑顔を作りて居たり。
「宮さんの病氣は如何でございます。」
宮は耐りかねて竊にハンカチイフを咬緊めたり。
「あゝ、大きに良いので、もう二三日內には歸らうと思つてね。お前さん能く來られましたね、學校の方は？」

教場に普請を爲る所があるので、今日半日と明日明後日と休課になつたものですから。」

「おや、然うかい。」

唯繼と貫一とを左右に受けたる母親の絶體絶命は、過ちて野中の古井に落ちたる人の、沈みも果てず、上りも得爲ず、命の綱と危くも取縋りたる草の根を、鼠の來りて嚙むに遭ふと云へる比喩に最能く似たり。如何に爲べきかと或は懼れ、或は惑ひたりしが、終に其の免るまじきを知りて、彼はやう〳〵胸を定めつ。

「丁度宅から人が參りましてございますから、甚だ勝手がましうございますが、私等は是から宿へ歸りますでございますから、いづれ後程伺ひに出ますでございますが………。」

「はゝあ、それでは何でありますか、明朝は御一所に歸れるやうな都合になりますな。」

「はい、話の模様に因りましては、然やう願はれるかも知れませんので、いづれ後程には見非伺ひまして、…………。」

「成程、それでは殘念ですが、私も散歩は罷めます。散歩は罷めて是から歸ります。歸つてお待申して居ますから、後に是非お出下さいよ。宜しいですか、お宮さん、それでは後に屹度お出なさいよ。誠に今日は殘念でありますな。」

彼は行かんとして、更に宮の傍近く寄來て、

「貴方。屹度後にお出なさいよ、えゝ。」

貫一は瞬も爲で視て居たり。宮は窮して彼に會釋さへ爲かねつ。娘氣の可羞に怯くあるとのみ思へる唯繼は、益寄添ひつゝ、舌怠きまでに語を和げて、

「宜しいですか、來なくては可けませんよ。私待つて居ますから。」

貫一の眼は燃ゆるが如き色を作して、宮の横顔を睨着けたり。彼は懼れ

て傍目をも轉らざりけれど、必ず然あるべきを想ひて獨り心を慄かせしが、猶唯繼の如何なることを言出でんも知られずと思へば、左にも右にも其場を繕ひぬ。母子の爲には幾許の幸なりけん、彼は貫一に就いて半點の疑ひをも容れず、唯饜くまでも娩しき宮に心を遺して行けり。

其後影を透すばかりに目戍れる貫一は我を忘れて姑く佇めり。兩個は其心を測りかねて、言も出でず、息をさへ凝して、空しく早瀨の音の聒さを聽くのみなりけり。

旋て此方を向きたる貫一は、尋常ならず激して血の色を失へる面上に、多からんとすれども能はずと見ゆる微少の笑を洩して、

「宮さん、今の奴は此間の骨牌に來て居た金剛石だね。」

宮は俯きて脣を咬みぬ。母は聞かざる爲して、折しも啼ける鶯に木の間を窺へり。貫一は此體を見て更に嗤笑ひつ、

一夜見たら其程でもなかつたが、晝間見ると實に氣障な奴だね。而して

如何だ、あの高慢ちきの面は―」
「貫一さん。」　母は卒に呼びかけたり。
「はい。」
「お前さん翁さんから話はお聞きでせうね、今度の話は。」
「はい。」
「あゝ、そんなら可いけれど。不断のお前さんにも似合はない、那様人の悪口などを言ふものぢやありませんよ。」
「はい。」
「さあ、もう歸りませう。お前さんもお草臥だらうから、お湯にでも入つて、而して未だ御午餐前なのでせう。」
「いえ、汽車の中で鮨を食べました。」
三人は倶に歩始めぬ。貫一は外套の肩を拂はれて、後を捻向けば宮と面を合せたり。

「其処に花が粘いてゐたから取つたのよ。」

「それは難有う!!!」

第八章

打霞みたる空ながら、月の色は匂滴るゝやうにて、微白き海は縹渺として限を知らず、譬へば無邪氣なる夢を敷けるに似たり。寄せては返す波の音も眠げに怠りて、吹來る風は人を醉はしめんとす。打連れて此濱邊を逍遙せるは貫一と宮となりけり。

「僕は唯胸が一杯で、何も言ふことが出來ない。」

五歩六歩行きし後宮はやう〳〵言出でつ。

「堪忍して下さい。」

「何も今更謝ることは無いよ。一體今度の事は翁さん姨さんの意から出たのか、又はお前さんも得心であるのか、其を聞けば可いのだから。」

「…………。」

「此地へ來るまでは、僕は十分信じて居つた、お前さんに限つて那樣了

箇のあるべき筈は無いと。實は信じるも信じないも有りはしない、夫婦の間で、知れ切つた話だ。
昨夜翁さんから悉しく話があつて、其上に賴むといふ御言だ。」
差含む涙に彼の聲は顫ひぬ。
「大恩を受けてゐる翁さん姨さんの事だから、賴むと言はれた日には僕の體は火水の中へでも飛込まなければならないのだ。翁さん姨さんの賴なら、無論僕は火水の中へでも飛込む精神だ。火水の中へなら飛込むが、此賴ばかりは僕も聽くことは出來ないと思つた。火水の中へ飛込めと云ふよりは、もつと無理な、餘り無理な賴ではないかと、僕は濟まないけれど翁さんを恨んでゐる。
而して、言ふ事も有らうに、此賴を聽いてくれゝば洋行さして遣るとお言ひのだ。い……い……いかに貫一は乞食士族の孤兒でも、女房を賣つた錢で洋行せうとは思はん！」

貫一は踏留りて海に向ひて泣けり。宮は此時始めて彼に寄添ひて、氣遣しげに其顔を差覗きぬ。

「堪忍して下さいよ、皆私が……………何ぞ堪忍して下さい。」

貫一の手に縋りて、忽ち其肩に面を推當つると見れば、彼も泣音を洩すなりけり。波は漾々として遠く烟り、月は朧に一灣の眞砂を照して、空も汀も淡白き中に、立盡せる二人の姿は墨の滴りたるやうの影を作れり。

「それで僕は考へたのだ、是は一方には翁さんが僕を說いて、お前さんの方は姨さんが說得しやうと云ふので、無理に此處へ連出したに違無い。翁さん姨さんの賴と有つて見れば、僕は不承知を言ふことの出來ない身分だから、唯々と言つて聞いて居たけれど、宮さんは幾多でも剛情を張つて差支無いのだ。如何あつても可厭だとお前さんさへ言通せば、此緣談はそれで破れて了ふのだ。僕が傍に居ると智恵を付けて邪魔を爲ると思ふものだから、遠くへ連出して無理往生に納得させる計だなと考着く

と、さあ心配でく僕は昨夜は夜一夜寐はまない、那樣事は萬々有るまいけれど、種々言はれる爲に可厭と言はれない義理になつて、若や承諾するやうな事があつては大變だと思つて、家は學校へ出る積で、僕はわざわざ樣子を見に來たのだ。

馬鹿な、馬鹿な！　貫一ほどの大馬鹿者が世界中を捜して何處に在る!!僕は是程自分が大馬鹿とは、二十五歳の今日まで知……知……知らなかつた。」

宮は可悲と可懼に襲はれて少しく聲さへ立てゝ泣きぬ。

憤を抑ふる貫一の呼吸は漸く亂れたり。

「宮さん、お前は好くも僕を欺いたね。」

宮は覺えず慄けり。

「病氣と云つて此へ來たのは、富山と逢ふ爲だらう。」

「まあ、其ばつかりは……………。」

「おゝ、其ばつかりは？」
「餘り邪推が過ぎるわ、餘り酷いわ。何ぼ何でも餘り酷い事を。」
泣入る宮を尻目に掛けて、
「お前でも酷いと云ふ事を知つてゐるのかい、宮さん。是が酷いと云つて泣く程なら、大馬鹿者にされた貫一は……貫一は……貫一は血の涙を流しても足りは爲んよ。
お前が得心せんものなら、此地へ來るに就いて僕に一言も言はんと云ふ法は無からう。家を出るのが突然で、其暇が無かつたなら、後から手紙を寄來すが可いぢやないか、出拔いて家を出るばかりか、何の便も爲ん處を見れば、始から富山と出會ふ手筈になつてゐたのだ。或は一所に來たのか知れはせない。宮さん、お前は奸婦だよ。姦通したも同じだよ。」
「那樣酷いことを、貫一さん、餘りだわ、餘りだわ。」
彼は正體も無く泣頽れつゝ、寄らんとするを貫一は突退けて、

「操を破れば奸婦ぢやあるまいか。」
「何時私が操を破つて？」
「幾許大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻が操を破る傍に付いて見て居るものかい！　貫一と云ふ歴とした夫を持ちながら、其夫を出抜いて、餘所の男と湯治に來てゐたら、姦通して居ないといふ證據が何處に在る。」
「然う言はれて了ふと、私は何とも言へないけれど、富山さんと逢ふの、約束してあつたのと云ふのは、其は全く貫一さんの邪推よ。私等が此地に來てゐるのを聞いて、富山さんが後から尋ねて來たのだわ。」
「何で富山が後から尋ねて來たのだ。」
宮は其唇に釘打たれたるやうに再び言は出でざりき。貫一は、慍く詰責せる間に彼の必ず過を悔い、罪を詫びて、其身は未か命までも己の欲する儘ならんことを誓ふべしと信じたりしなり。設し信ぜざりけんも、心陰に望みたりしならん。如何にぞや、彼は露ばかりも然せる氣色は無く

て、引けども朝顔の垣を離るまじき一圖の心變を、貫一はなか〳〵信しからず覺ゆるまでに呆れたり。

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも換へて最愛みし人は芥の如く我を惡めるよ。恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、幾と身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖ひて、此熱腸を冷さんとも思へり。忽ち彼は頭腦の裂けんとするを覺えて、苦痛に得堪へずして尻居に仆れたり。

宮は見るより驚く遑もあらず、諸共に砂に塗れて搔抱けば、閉ぢたる眼より亂落つる涙に浸れる灰色の頰を、月の光は悲しげに彷徨ひて、迫れる息は凄しく波打つ胸の響を傳ふ。宮は彼の背後より取縋り、抱緊め、撼動して、戰く聲を勵せば、勵す聲は更に戰きぬ。

「如何して、貫一さん、如何したのよう！」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顏をいと懇に拭

ひたり。

「吁、宮さん恁して二人が一處に居るのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物を言ふのも今夜限だよ。一月の十七日、宮さん、善く覺えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだか！　再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！　可いか、宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ。」

宮は挫ぐばかりに貫一に取着きて、物狂しう咽入りぬ。

「那様悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱してゐて下さいな。

私はお肚の中には言ひたい事が澤山あるのだけれど、餘り言難い事ばかりだから、口へは出さないけれど、唯一言いひたいのは、私は貴方の事は忘れはしないわ――私は生涯忘れはしないわ。」

「聞きたくない！　忘れんくらゐなら何故見棄てた。」

「だから、私は決して見棄てはしないわ。」

「何、見棄てない？　見棄てないものが嫁に歸くかい、馬鹿な！　二人の夫が有てるかい。」

「だから、私は考へてゐる事があるのだから、最少し辛抱して其を――私の心を見て下さいな。屹度貴方の事を忘れない證據を私は見せるわ。」

「えゝ、狼狽へて行らんことを言ふな。食ふに窮つて身を賣らなければならんのぢやなし、何を苦んで嫁に歸くのだ。内には七千圓も財産が在つて、お前は其處の一人娘ぢやないか、而して婿まで極つてゐるのぢやないか。其婿も四五年の後には學士になると、末の見込も着いてゐるの

だ。而もお前は其婿を生涯忘れないほどに思つて居ると云ふぢやないか。それに何の不足が有つて、無理にも嫁に歸かなければならんのだ。天下に是くらゐ理の解らん話が有らうか。如何考へても、嫁に歸くべき必要の無いものが、無理に算段を爲て嫁に歸かうと爲るには、必ず何ぞ事情が無ければ成らない。

婿が不足なのか、金持と縁を組みたいのか、主意は決して此二件の外にはあるまい。言つて聞かしてくれ。遠慮は要らない。さあ、さあ、宮さん、遠慮することは無いよ。一旦夫と定めたものを振捨てるくらゐの無遠慮なものが、這麼事に遠慮も何も要るものか。」

「私が惡いのだから堪忍して下さい。」

「それぢや婿が不足なのだね。」

「貫一さん、それは餘りだわ、那樣に疑ふのなら、私は甚麼事でも爲て、而して證據を見せるわ。」

「婿に不足は無い？　それぢや富山は財があるうらか、して見ると此結婚は慾からだね、僕の離縁も慾からだね。で、此結婚はお前も承知をしたのだね、え丶？

翁さん嫗さんに迫られて、餘義無くお前も承知をしたのならば、僕の考て破談にする方は幾許もある。僕一人が惡者になれば、翁さん嫗さんを始めお前の迷惑にもならずに打壊して了ふことは出來る、だからお前の心持を聞いた上で手段があるのだが、お前も適つて見る氣は有るのかい。

貫一の眼は其全身の力を聚めて、思惱める宮が顏を鋭く打目成れり。五歩行き、七歩行き、十歩を行けども、彼の答はあらざりき。貫一は空を仰ぎて太息したり。

「宜しい、もう宜しい。お前の心は能く解つた。」

今はや言ふも益無ければ、重ねて口を開かざらんかと打按じつ丶も、彼は亂る丶胸を寛うせんが爲に、強ひて目を放ちて海の方を眺めたりし

が、仍得堪へずやありけん、又言はんとして顧れば、宮は傍に在らずして、六七間後なる波打際に面を掩ひて泣けるなり。

可惱しげなる姿の月に照され、風に吹れて、あはれ消えもせぬべく立ち迷へるに、漾々たる海の端の白く頽れて波と打寄せたる、艶に哀を盡せる風情に、貫一は憤をも恨をも忘れて、少時は畫を看る如き心地もせつ。

更に、此美しき人も今は我物ならずと思へば、なかなか夢かとも疑へり。

「夢だ夢だ、長い夢を見たのだ！」

彼は頭を低れて足の向ふまゝに汀の方へ進行きしが、泣く泣く歩來れる宮と互に知らで行合ひたり。

「宮さん、何を泣くのだ。お前は些とも泣くことは無いぢやないか。空涙！」

「どうせ然うよ。」

殆ど聞得べからざるまでに其聲は涙に亂れたり。

「宮さんお前に限つては然云ふ了簡は無からうと、僕は自分を信じる程に信じてゐたが、それぢや依樣お前の心は慾だね、財なのだね。如何に何でも餘り情無い、宮さん、お前はそれで自分に愛相は盡きないかい。好い出世をして、然ぞ榮耀も出來て、お前はそれで可からうけれど、財に見換へられて棄てられた僕の身になつて見るが可い。無念と謂はうか口惜いと謂はうか、宮さん、僕はお前を刺殺して――驚くことは無い！――いつそ死んで了ひたいのだ。それを怺へてお前を人に奪れるのを手出しも爲ずに見てゐる僕の心地は、甚麼だと思ふ、甚麼だと思ふよ！自分さへ好ければ他は如何ならうともお前は管はんのかい。一體貫一はお前の何だよ、何だと思ふのだよ。鴫澤の家には厄介者の居候でも、お前の爲には夫ぢやないかい。僕はお前の男妾になつた覺は無いよ、宮さん、お前は貫一を玩弄物にしたのだね。平生お前の仕打が水臭い〳〵と思つたも道理だ、始から僕を一時の玩弄物の意で、本當の愛情は無かつ

たのだ。然うとは知らずに僕は自分の身よりもお前を愛して居た。お前の外には何の樂も無いほどにお前の事を思つて居た。其程までに思つてゐる貫一を、宮さん、お前は如何しても棄てる氣かい。

それは無論金力の點では、僕と富山とは比較にはならない。彼方は屈指の財産家、僕は固より一介の書生だ。けれども善く宮さん考へて御覽、ねえ、人間の幸福ばかりは決して財で買へるものぢやないよ、幸福と財とは全く別物だよ。人の幸福の第一は家内の平和だ、家内の平和は何か、夫婦が互に深く愛すると云ふ外は無い。お前を深く愛する點では、富山如きが百人寄つても到底僕の十分の一だけも愛するとは出來まい、富山が財産で誇るなら、僕は彼等の夢想することも出來ん此の愛情で爭つて見せる。夫婦の幸福は全く此の愛情の力、愛情が無ければ既に夫婦は無いのだ。

己の身に換へてお前を思つてゐる程の愛情を有つてゐる貫一を棄てゝ、

夫婦間の幸福には何の益も無い、寧ろ害になり易い、その財産を目的に結婚を爲るのは、宮さん、如何いふ心得なのだ。然し財といふものは人の心を迷はすもので、智者の學者の豪傑のと、千萬人に勝れた立派な〳〵男子さへ、財の爲には隨分陋い事も爲るのだ。其を考へれば、お前が偶然氣の變つたのも、或は無理も無いのだらう、からして僕は其は咎めない。但もう一遍、宮さん善く考へて御覧な、其の財が——富山の財産がお前の夫婦間に何程の効力があるのかと謂ふことを。

雀が米を食ふのは僅十粒か二十粒だ、俵で置いてあつたつて、一度に一俵食へるものぢやない、僕は鳴澤の財産を譲つてもらはんでも、十粒か二十粒の米に事を缺いて、お前に饑い思を爲せるやうな、那樣意氣地の無い男でもない。若し間違つて、其の十粒か二十粒の工面が出來なかつたら、僕は自分は食はんでも、決してお前に不自由は爲せん。宮さん、

僕は是……是程までにお前の事を思つてゐる！」

貫一は雫するを拂ひて、

「お前が富山へ嫁く、それは立派な生活をして、榮耀も出來やうし、樂も出來やう、けれども那箇の財産は決して息子の嫁の爲に費さうとて作られた財産ではない、と云ふ事をお前考へなければならんよ。愛情の無い夫婦の間に、立派な生活が何だ！　榮耀が何だ！　世間には、馬車に乘つて心配さうな青い顏をして、義會へ招れて行く人もあれば、自分の妻子を車に載せて、其を自分が挽いて花見に出掛ける車夫もある。富山へ嫁けば、家内も多ければ人出入も、劇しゝ、從つて氣兼も苦勞も一通の事ぢやなからう。其中へ入つて、氣を傷めながら愛しても居らん夫を持つて、それでお前は何を樂に生きてゐるのだ。然して勤めて居れば、末には那の財産がお前の物になるのかい。富山の奧様と云へば立派かも知れんけれど、食ふ所は今の雀の十粒か二十粒に過ぎんのぢやないか。

設んば那の財産がお前の自由になると爲た所で。女の身に何十萬と云ふ金が如何なる、何十萬の金を女の身で面白く費へるかい、雀に一俵の米を一度に食へと云ふやうなものぢやないか。男を持たなければ女の身は立てないものなら、一生の苦樂他人に頼るで、女の寶とするのは其夫ではないか。何百萬圓の財が有らうと、其夫が寶と爲るに足らんものであつたら、女の心細さは、なか〱車に載せて花見に連れられる車夫の女房には及ばんぢやあるまいか。

聞けば彼富山の父と云ふものは、内に二人外に三人も妾を置いてゐると云ふ話だ。財の有る者は大方那樣眞似を爲て、妻は些の床の置物にされて、謂はゞ棄てられて居るのだ。棄てられて居ながら其愛されて居る妾よりは、責任も重く、苦勞も多く、苦ばかりで樂は無いと謂つて可い。お前の嫁く唯繼だつて、固より所望でお前を迎ふのだから、當座は隨分愛しも爲るだらうが、其が長く續くものか、財が有るから好きな眞似も

出來る、他の樂に氣が移つて、直にお前の戀は冷されて了ふのは判つて居る。其時になつてのお前の心地を考へて御覽、那の富山の財產が其苦を拯ふかい。家に澤山の財が在れば、夫よ棄てられて床の置物になつて居ても、お前はそれで樂かい、滿足かい。

僕が人にお前を奪られる無念は謂ふまでも無いけれど、三年の後のお前の後悔が目に見えて、心變をした憎いお前ぢやあるけれど、猶且可哀さうてならんから、僕は眞實で言ふのだ。

僕に飽きて富山に惚れてお前が嫁くのなら、僕は未練らしく何も言はんけれど、宮さん、お前は唯立派な所へ嫁くといふ其ばかりに迷はされて居るのだから、其は過つてゐる、其は實に過つてゐる、愛情の無い結婚は究竟自他の後悔だよ。今夜此場のお前の分別一つで、お前の一生の苦樂は定るのだから、宮さん、お前も自分の身が大事と思ふなら、又貫一も不便だと思つて、賴む！　賴むから、もう一度分別を爲直してくれな

いか。
七千圓の財產と貫一が學士とは、二人の幸福を保つには十分だよ。今でさへも隨分二人は幸福ではないか、男の僕でさへ、お前が在れば富山の財產などを可羨いとは更に思はんのに、宮さん、お前は如何したのだ！僕を忘れたのかい、僕を可愛くは思はんのかい。」
彼は危きを拯はんとする如く犇と宮に取着きて、匂滴るゝ頸元に沸ゆる涙を濺ぎつゝ、蘆の枯葉の風に揉るゝやうに身を顫せり。宮も離れじと抱緊めて諸共に顫ひつゝ、貫一が臂を咬みて咽泣に泣けり。
「嗚呼、私は如何したら可からう！若し私が彼方へ嫁つたら、貫一さんは如何するの、それを聞かして下さいな。」
木を裂く如く貫一は宮を突放して、
「それぢや斷然お前は嫁く氣だね！是迄に僕が言つても聽いてくれんのだね。ちえゝ、膓の腐つた女！姦婦!!」

其聲と與に貫一は脚を擧げて宮の弱腰を礑と踢たり。地響して横樣に轉びしが、なか〳〵聲をも立てず苦痛を忍びて、彼はそのまゝ砂の上に泣伏したり。貫一は猛獸などを撃ちたるやうに、彼の身動も得爲ず弱々と僵れたるを、なほ憎さげに見遣りつゝ、

「宮、おのれ、おのれ姦婦。やい！　貴樣のな、心變をしたばかりに間貫一の男一匹はな、失望の極發狂して、大事の一生を誤つて了ふのだ。學問も何も最う廢だ。此恨の爲に貫一は生きながら惡魔になつて、貴樣のやうな畜生の肉を啖つて遣る覺悟だ。富山の令……令夫……令夫人！　もう一生お目には掛らんから、其顏を擧げて、眞人間で居る内の貫一の面を好く見て置かないかい。長々の御恩に預つた翁さん姨さんには一目會つて段々の御禮を申上げなければ濟まんのでありますけれど、仔細あつて貫一は此儘長の御暇を致しますから、隨分お達者で御機嫌よろしう……宮さん、お前から好く然う言つておくれ、よ、若し貫一は、

如何したとお訊ねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晩に氣が違つて、熱海の濱邊から行方知れずになつて了つたと…………。」
宮は矢庭に駈起きて、立たんと爲れば脚の痛に脆くも倒れて効無きを、漸く這寄りて貫一の脚に縋付き、聲と涙とを爭ひて、
「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方これから何……何處へ行くのよ。」
貫一は有繋に驚けり、宮が衣の披けて雪可羞しく露せる膝頭は、夥しく血に染みて顫ふなりき。
「や、怪我をしたか。」
寄らんとするを宮は支へて、
「え丶、這麼事は管はないから、貴方は何處へ行くのよ。話があるから今夜は一所に歸つて下さい、よう、貫一さん、後生だから。」
「話が有れば此で聞かう。」

「此ぢや私は可厭よ。」
「ええ、何の話が有るものか。さあ此を放さないか。」
「私は放さない。」
「剛情張ると蹴飛すぞ。」
「蹴られても可いわ。」
貫一は力を極めて振断れば、宮は無殘に伏轉びぬ。
「貫一さん。」
貫一ははや幾間を急行きたり。宮は見るより必死と起上りて、脚の傷に幾度か仆れんとせつつも後を慕ひて、
「貫一さん、それぢやもう留めないから、もう一度、もう一度……………
私は言遺した事がある。」
遂に倒れし宮は再び起つべき力も失せて、唯聲を頼に彼の名を呼ぶのみ。漸く朧になれる貫一が影の一散に岡を登るが見えぬ。宮は身悶して猶呼

續けつ。旋て其の黒き影の岡の頂に立てるは、此方を目戍れるならんと宮は聲の限に呼べば、男の聲も遙に來りぬ。

「宮さん！」

「あ、あ、あ、貫一さん！」

首を延べて眴せども、目を瞪りて眺むれども、聲せし後は黒き影の搔消す如く失せて、其かと思ひし木立の寂しげに動かず、波は悲しき音を寄せて、一月十七日の月は白く愁ひぬ。

宮は再び戀しき貫一の名を呼びたりき。

（三十一年七月）

金色夜叉　中編

第一章

新橋停車場の大時計は四時を過ること二分餘、東海道行の列車は既に客車の扉を鎖して、機關車に烟を噴せつゝ、三十餘輛を聯ねて蜿蜒として横りたるが、眞承の秋の日影に夕榮して、窓々の硝子は燃えんとすばかりに耀けり。驛夫は右往左往に奔走して、早く〳〵と喚くを餘所に、大蹈歩の寛々たる老歐羅巴人は麥酒樽を竊みたるやうに腹突出して、桃色の服着たる十七八の娘の日本の繪日傘の柄に橙色のリボンを飾りたるを小脇にせると推並び、おのれが乘物の顏して急ぐ氣色も無く過る後より、蚤取眼になりて遲れじと所體頽して驅來る女房の、嵩高なる風呂敷包を抱くが上に、四歳ほどの子を背負ひたるが、何處の扉も鎖したるに狼狽

紅葉全集

ふるを、車掌に強曳れて漸く安堵せる間も無く、青洟垂せる女の子を率ゐて、五十餘の老夫の是も戸惑ひて往きつ復りつせし揚句、驛夫に曳れて室内に押入れられ、如何なる罪やあらげなく閉てらるゝ扉に袂を介まれて、もし〳〵と救を呼ぶなど、未だ都を離れざるにはや旅の哀を見るべし。

五人一隊の若き紳士等は中等室の片隅に圓居して、其中に旅行らしき手荷物を控へたるは一人よりあらず、他は皆横濱までとも見ゆる扮裝にて、紋付の袷羽織を着たるもあれば、精縷の背廣なるもあり、袴着けたるが一人、大島紬の長羽織と差向へる人のみぞフロックコオトを着て、待合所にて受けし餞別の瓶、函などを網棚の上に片附けて、其手を摩挲ひつつ窓より首を出して、停車場の方をば、求むるものありげに望見たりしが、旋て藍の如き晩霽の空を仰ぎて、

「不思議に好い天氣に成つた、なあ。此分なら大丈夫じや。」

「今晩雨になるのも又一興だよ、ねえ、甘糟。」
黒餅に立澤瀉の黒紬の羽織着たるが恁く言ひて示す所あるが如き微笑を洩せり。甘糟と呼れたるは、茶柳條の仙臺平の袴を着けたる、此中にて獨り頰髯の嚴しさを蓄ふる紳士なり。
甘糟の答ふるに先ちて、背廣の風早は若きに似合はぬ皺嗄聲を振搾りて、
「甘糟は一興で、君は望む所なのだらう。」
「馬鹿言へ。甘糟の痒きに堪へんことを僕は丁と洞察して居るのだ。」
「これは憚様です。」
大島紬の紳士は黏着いたるやうに靠れたりし身を遽に起して、
「風早、君と僕とね、今日は實際犧牲に供されて居るのだよ。佐分利と甘糟は夙て横濱を主張して居るのだ、何でも此間遊仙窟を見出して來たのだ。それで我々を引張つて行つて、大いに氣焰を吐く意なのさ。」
「何じやい、何じやい！　君達が此の二人に犧牲に供されたと謂ふなら、

僕は四人の爲に賣られたんじや。其には及ばんと云ふのに、是非濱迄見送ると言ふて、氣の毒なと思うて居つたら、僕を送るのを名として君達は……怪しからん事たぞ。學生中から其の方は勉強しをつた君達の事ぢやから、今後は實に想遣らるゝね。えゝ、肩書を辱めん限は遣るも可からうけれど、注意はしたまへよ、本當に。」

此の老實の言を作すは、今は四年の昔間貫一が兄事せし同窓の荒尾讓介なりけり。彼は去年法學士を授けられ、次いで內務省試補に擧げられ、踰えて一年の今日愛知縣の參事官に榮轉して、赴任の途に上れるなり。其の齡と深慮と誠實との故を以つて、彼は他の同學の先輩として推服する所たり。

「これで僕は諸君へ意見の言納じや。願くは君達も宜く自重してくれたまへ。」

面白く發りし一座も忽ち白けて、頻に燻らす卷莨の煙の、急駛せる車の

逆風に扇らるゝが、飛雲の如く窓を逸れて六郷川を掠むるあるのみ。
佐分利は幾數回頷きて、
「いや然う言れると慄然とするよ、實は嚮停車場で例の「美人クリイム」(箇は美人の高利貸を戯稱せるなり)を見掛けたのだ。那の聲で蜥蜴喰ふかと思ふね、毎見ても美しいには驚嘆する。全で淑女の扮裝だ、就中今日は冶して居つたが、何處か旨い口でもあると見える。那奴に搾られちや克はん、那が本當の眞綿で首だらう。」
「見たかつたね、それは。夙て御高名は聞及んで居る。」
と大島紬の猶續けんとするを遮りて、甘糟の言へる。
「おゝ、寶井が退學を吃つたのも、其奴が債權者の重なる者だと云ふぢやないか。餘程好い女ださうだね、黄金の腕環なんぞ篏めて居ると云ふぢやないか。酷い奴な！　鬼神のお松だ。佐分利は其の劇なのを知りながら係つたのは、大いに冒險の目的があつて存するのだらうけれど、木

伊乃にならんやうに褌を緊めて掛るが可いぜ。」

「誰か其奴には尻押が有るのだらう。亭主が有るのか、或は情夫か、何か有るのだらう。」

鰐嗄聲は卒然として此の問を發せるなり。

「其に就いては小說的の閲歷があるのさ。情夫ぢやない、亭主がある、此奴が、君、我々の一世紀前に鳴した高利貸で、赤樫權三郎と云つては、いや無法な強慾で、加ふるに大々的の癇物と來て居るのだ。」

「成程！　積極と消極と相觸れたので爪に火が燃る譯だな。」

大島紬が得意の謔浪に、深沈なる荒尾も已むを得ざらんやうに破顏しつ。

「その赤樫と云ふ奴は貸金の督促を利用しては女を弄ぶのが道樂で、此奴の爲に汚された者は隨分意外の邊にも在るさうな。そこで今の（美人クリイム）、是も其の手に罹つたので、原は貧乏士族の娘で堅氣であつたのだが、老猾此娘を見ると食指大いに動いた譯で、之を俘にまたさに父

親に少し許の金を貸したのだ。期限が來ても返せん、其を何とも言はずに、後から〳〵と三四度も貸して置いて、もう好い時分に、内に手が無くて困るから、半月ばかり仲働に貸してくれと言出した。是は縦んば奴の胸中が見え透いて居たからとて、勢ひ辭りかねる人情だらう。今から六年ばかり前の事で、娘が十九の年老猾は六十約の禿顱の事だから、まさかに色氣とは想はんわね。因で内へ引張つて來て口說いたのだ。女房といふ者は無いので、怪しげな婆姿然たる女を置いて居つたのが、其内にいつか娘は妾同様になつたのは奈何だい！」

固唾を嚥みたりし荒尾は思ふ所ありげに打頷きて、

「女といふ者は那樣ものじやて。」

甘糟は其の面を振仰ぎつゝ、

「驚いたね、君にして此言あるのは。荒尾が女を解釋せうとは想はなんだ。」

「何爲かい。」

佐分利の話を進むる折から、汽車は遽に速力を加へぬ。

大「聞えん〳〵、もつと大きな聲で。」

風「さあ、御順にお膝繰だ。」

佐「荒尾、あの葡萄酒を抜かんか、喉が渇いた。これからが佳境に入るん
だからね。」

甘「中錢があるのは酷い。」

佐「蒲田、君は好い莨を吃つて居るぢやないか、一本頂戴。」

甘「いや、圖に乘ること。僕は手廻の物を片附けやう。」

佐「甘糟、燐寸を持つて居るか。」

「そら、お出だ。持參いたして居りまする仕合で。」

佐分利は居長高になりて、

「些と點けてくれ。」

葡萄酒の紅を啜り、ハヴナの紫を吹きて、佐分利は徐に語を繼ぐ、
「所謂一朶の梨花海棠を壓してからに、娘の滿枝は自由にされて了つた譯だ。是は無論親父には內證だつたのだが、當座は荐つて歸りたがつた娘が、後には親父の方から歸れ〳〵言つても、歸らんだらう。其內に段段樣子が知れた者で、侍形氣の親父は非常な立腹だ。子でない、親でないと云ふ騷になつたね。すると禿の方から、妻だから不承知なのだらう、籍を入れて本妻に直すから與れろといふ談判になつた。それで逢つて見ると娘も、阿父さん、何か承知して下さいは、親父益す意外の益す不服だ。けれども、天魔に魅入られたものと親父も愛相を盡して、唯一人の娘を阿父さん彼自身より十歲約も老漢の高利貸に與れて了つたのだ。それから滿枝は益す禿の寵を得て、內政を自由にするやうになつたから、定めて生家の方へ貢ぐと思の外、極の給の外は塵葉一本饋らん。是が又禿の御意に入つた處で、女め熟ら高利の鹽梅を見て居る內に、いつか此

の商賣が面白くなつて來て、此の身代我物と考へて見ると、一人の親父よりは金錢の方が大事、といふ不敵な了簡が出た譯だね。」
「驚くべきものじやね。」
荒尾は可忌しげに呟きて、稍不快の色を動せり。
「因で、敏捷な女には違無い、自然と高利の呼吸を呑込んで、後には手の足りん時には禿の代理を爲て、何處へでも出掛けるやうになつたのは益す驚くべきものだらう。丁度一昨年邊から禿は中氣が出て未だに動けない。そいつを大小便の世話まで爲て、女の手一つで盛に商賣を爲て居るのだ。それで、其の前年かに親父は死んだのださうだが、板の間に薄縁を一枚敷いて、其の上で往生したと云ふくらゐの始末だ。病氣の出る前などは陸に寄せ付けなんださうだがな、殘刻と云つても、何云ふのだか餘り氣が知れんぢやないかな――然し事實だ。で、禿は其の通の病人だから、今では那の女が獨で腕を揮つて益す盛に遣つて居る。是則ち(美

人（クリイム）の名ある所以さ。
年紀かい、二十五だと聞いたが、然う、漸う二三とよりは見えんね。那で可愛い細い聲をして物柔に、口數が寡くって巧い言をいふこと、恐るべきものだよ。銀貨を見て何處の國の勳章だらうなどゝ言ひさうな、誠に上品な樣子をして居て、書替だの、手形に願ふのと、急所を衝く手際の婉曲に巧妙な具合と來たら、實に魔藥でも用ゐて人の心を蕩すかと思ふばかりだ。僕も三度ほど蕩されたが、柔能く剛を制すて、高利貸には美人が妙！　那奴に一國を預ければ輙ちクレオパトラだね。那奴には滅されるよ。」

風早は最も子を覺えたる氣色にて、

「では、今は其の禿顱は中風で寐たきりなのだね、一昨年から？　それでは何か虫があるだらう。有る、有る、それくらゐの女で神妙にして居るものか、無いと見せて有る所がクレオパトラよ、然し、壯な女だな。」

「餘り壯なのは恐れる。」

佐分利は頭を抑へて後樣に靠れつゝ笑ひぬ。次いで一同も笑ひぬ。

佐分利は二年生たりしより旣に高利の大火坑に墮ちて、今はしも連帶一判、取交ぜ五口の債務六百四十何圓の呵責に膏を取るゝ身の上にぞありける。次いでは甘糟の四百圓、大島紬氏は卒業前にして百五十圓、後に又二百圓、無疵なるは風早と荒尾とのみ。

汽車は神奈川に着きぬ。彼等の物語をば笑ましげに傍聽したりし橫濱商人躰の乘客は、幸に無聊を慰められしを謝すらんやうに、慇に一揖して此に下車せり。暫く話の絕えける間に荒尾は何をか打案ずる躰にて、其の目を空しく見据ゑつゝ漫語のやうに言出でたり。

「其後誰も間の事を聞かんかね。」

「間貫一かい。」　と皺嗄聲は問反せり。

「おゝ、誰やらぢやつたね、高利貸の才取とか、手代とかして居ると言

だのは。」

蒲「然う／＼、那樣話を聞いたつけね。然し、間には高利貸の才取は出來ない。他は高利を貸すべく餘り多くの涙を有つて居るのだ。」

我が意を得つと謂はんやうに荒尾は頷きて、猶も思に沈み居たり。佐分利と甘糟の二人は其頃一級先ちてありければ、間とは相識らざるなりき。

荒「高利貸と云ふのは奈何も妄ぢやらう。全く餘り多くの涙を有つて居る。惜い事をした。得難い才子ぢやつたものね、他が今居らうなら……………。」

彼は忍びやかに太息を泄せり。

「君達は今逢うても顏を見忘れはすまいな。」

風「それは覺えて居るとも。他の峭然と外眥の昂つた所が目標さ。」

蒲「而して髮の癖毛の具合がな、愛嬌が有つたぢやないか。デスクの上に頰杖を拄いて、恁う下向になつて何時でも眞面目に講義を聽いて居た所は、何處かアルフレッド大王に肖て居たさ。」

荒尾は仰ぎて笑へり。

「君は毎も妙な事を言ふ人じやね。アルフレッド大王とは奇想天外だ。僕の親友を古英雄に擬してくれた御禮に一盃を献じやう。」

「成程、君は兄弟のやうに為て居つたから、始終憶ひ出すだらうな。」

「僕は實際死んだ弟よりも間の居らなくなつたのを悲む。」

愁然として彼は頭を俛れぬ。大島紬は受けたる盃を把りながら、更に佐分利が持てる猪口を借りて荒尾に差しつ。

「さあ、君を慰める爲に一番間の健康を祝さう。」

荒尾の喜は實に溢るゝばかりなりき。

「おゝ、それは辱ない。」

盈々と酒を容れたる二つの猪口は、彼等の目より高く擧げらるゝと齊しく戛と相撃てば、紅の雫の漏るが如く流るゝを、互に引くより早く一息に飲乾したり。之を見たる佐分利は甘糟の膝を搖して、

「蒲田は如才ないね、面は醜いが那の呼吸で行くから、往々拾ひ物を爲るのだ。那言れて見ると誰でも些と憎くないからね。」
甘「流石は交際官試補！」
佐「試補々々！」
風「試補々々立つて泣きに行く…………。」
荒「馬鹿な！」
言を改めて荒尾は言出せり。
「どうも僕は不思議でならんが、停車場で間を見たよ。間に違無いのじや。」
唯の今陰ながら其の健康を禱りし蒲田は拍子を拔して彼の面を眺めたり。
「ふう、それは不思議。他は氣が着かなんだかい。」
「始は待合所の入口の所で些と顏が見えたのじや。餘り意外ぢやつたから、僕は思はず長椅子を起つと、もう見えなくなつた、それから有間し

て一寸偶然見ると、又見えたのじや。」

甘「探偵小說だ。」

荒「其時も起ちかけると又見えなくなつて、それから切符を切つて步場へ入るまで見えなかつたのじやが、入つて少し來てから、奈何も氣になるから振返つて見ると、傍の柱に僕を見て黑い帽を揮つとる者がある、それは間よ。帽を揮つとつたから間に違無いぢやないか。」

橫濱！　橫濱！　と或は急に、或は緩く叫ぶ聲の窓の外面を飛過ると與に、響は雜然として起り、迸り出づる群集は玩具箱を覆したる如く、場內の彼方より轟く鈴の音は此の響と混雜との中を貫きて奔注せり。

第二章

柵の柱の下に在りて帽を揮りたりしは、荒尾が言の如く、四年の生死を詳悉にせざりし間貫一にぞありける。彼は親友の前に自の影を晦し、其の消息をさへ知らせざりしかど、陰ながら荒尾が動靜の概畧を伺ふことを怠らざりき。這回其の參事官たる事も、午後四時發の列車にて赴任する事をも知るを得しかば、餘所ながら暇乞もせ、二つには榮譽の錦を飾れる姿をも見んと思ひて、群集に紛れて此には來りしなりけり。

何の故に間は四年の音信を絶ち、又何の故に然しも懷に忘れざる舊友と相見て別を爲さゞりしか。彼が今の身の上を知らば、此の疑問は自ら解釋せらるべし。

柵の外に立ちて列車の行くを送りしは獨り間貫一のみにあらず、其許に聚ひし老若貴賤の男女は皆個々の心をもて、愁ふるもの、樂むもの、羨

ふもの、或は何とも感ぜぬものなど、品變れども目的は一なり。數分時の混雜の後車の出づると與に、一人散り、二人散りて、彼の如く久しう立盡せるはあらざりき。旋て重き物など引くらんやうに彼の漸く踵を旋せし時には、推重るまでに柵際に聚ひし衆は殆ど散果てゝ、驛夫の三四人が箒を執りて場内を掃除せるのみ。

貫一は差俯るゝ涙を拂ひて、獨り後れたるを驚きけん、遽に急ぎて、蓬萊橋口より出でんと、恰も石段際に寄る所を、誰とも知らで中等待合の内より聲を懸けぬ。

「間さん！」

慌てゝ彼の見向く途端に、

「些と。」　と戸口より半身を示して、黄金の腕環の氣爽に燦ける手なる絹ハンカチイフに唇邊を掩ひて、束髮の婦人の小腰を屈むるに會へり。艶なる面に得も謂はれず愛らしき笑をさへ浮べたり。

「や、赤樫さん……」
婦人の笑もて迎ふるには似ず、貫一は冷然として眉だに動かさず。
「好い所でお目に懸りましたこと。急にお話を致したい事が出來ましたので、まあ、些と此方へ。」
婦人は内に入れば、貫一も澁々跟いて入るに、長椅子に掛れば、止む無く其の側に座を占めたり。
「實は那の保險建築會社の小車梅の件なのでございますがね。」
彼は黒樗文絹の帯の間を搜りて金側時計を取出し、手早く收めつゝ、
「貴方どうせ御飯前で被在いませう。此では御話も出來ませんですから、何方へかお供を致しませう。」
紫根鹽瀬に消金の口金打ちたる手鞄を取直して、婦人はやをら起上りつ。
迷惑は貫一が面に顯れたり。
「何方へ？」

「何方でも、私には解りませんですから貴方のお宜い所へ。」
「私にも解りませんな。」
「あら、那様事を仰有らずに、私は何方でも宜いのでございます。」
荒布革の横長なる手鞄を膝の上に掻抱きつゝ貫一の思案せるは、其の宜き方を擇ぶにあらで、倶に行くをば躊躇せるなり。
「まあ、何にしても出ませう。」
「然やう。」
貫一も今は是非無く婦人に從ひて待合所の出會頭に、入來る者ありて、其の足尖を拯げよと踏付けられぬ。驚き見れば長高き老紳士の目尻も異しく、滿枝の色香に惑ひて、是は失敬、意外の麁相をせるなりけり。彼は猶懲りずまに此の目覺しき美形の同伴をさへ暫く目送せり。
二人は停車場を出でゝ、指す方も無く新橋に向へり。
「本當に、貴方、何方へ參りませう。」

「私は何方でも。」
「貴方、何時までも那様事を言つて被在つては限がございませんから、好い加減に極めやうでは御座いませんか。」
「然やう。」
滿枝は彼の心進まざるを曉れども、勉めて吾意に從はしめんと念へば、然ばかりの無遇をも甘んじて、
「それでは、貴方、鰻鱺は上りますか。」
「鰻鱺？　遣りますよ。」
「鷄肉と何方が宜うございます。」
「何方でも。」
「餘り御挨拶ですね。」
「何爲ですか。」
此時貫一は始めて滿枝の面に眼を移せり。百の媚を含みて瞠へし彼の眦

は、未だ[illegible]はずして既に其の言はんとせる半をば語盡したるべし。彼の爲人を知りて畜生と疎める貫一も、有繋に艶なりと思ふ心を制し得ざりき。滿枝は貝の如き前齒と隣れる金齒とを露して片笑みつゝ、

「まあ、何爲でも宜うございますから、それでは鷄肉に致しませうか、」

「それも可いでせう。」

三十間堀に出でゝ、二町ばかり來たる角を西に折れて、唯有る露地口に淸らなる門構して、光澤消硝子の軒燈籠に鳥と標したる方に、人目には然ぞ解あるらしう二人は連立ちて入りぬ。いと奧まりて、在りとも覺えぬ邊に六疊の隱座敷の板道傳に離れたる一間に案内されしも宜なり。懼れたるにもあらず、困じたるにもあらねど、又全く然にあらざるにもあらざらん氣色にて貫一の容さへ可愼げに默して控へたるは、慥る處に此の人と共にとは思懸けざる爲體を、有繋に胸の安からぬなるべし。通し物は逸早く滿枝が好きに計ひて、少頃は言無き二人が中に置れたる莨

盆は子細らしう一炷の百和香を燻らせぬ。
「間さん、貴方どうぞお楽に。」
「はい、これが勝手で。」
「まあ、那様事を有仰らずに、よう、どうぞ。」
「内に居つても私は此の通なのですから。」
「嘘を有仰いまし。」
慤ても貫一は膝を崩さで、巻莨入を取出せしが、生憎一本の莨もあらざりければ、手を鳴さんとするを、満枝は先んじて、
「お間に合せに之を召上りましな。」
麻蝦夷の御主殿持と與に薦むる筒の端より燒金の吸口は仄に輝けり。歯は黄金、帯留は黄金、指環は黄金、腕環は黄金、時計は黄金、今又煙管は黄金にあらずや。黄金なる哉、金、金！　知る可し、其の心も金！
と貫一は獨り可笑さに堪へざりき。

「いや、私は日本莨は一向可かんので。」

言ひも訖らぬ顔を満枝は熟と視て、

「決して穢いのでは御座いませんけれど、つい心着きませんでした。」

懐紙を出して故とらしく其の吸口を拵拭へば、貫一も少しく慌てゝ、

「決して然云ふ譯ぢやありません、私は日本莨は用ゐんのですから。」

満枝は再び彼の顔を眺めつ。

「貴方、嘘をお吐きなさるなら、もう少し物覚を善く遊ばせよ。」

「はあ？」

「先日鰐淵さんへ上つた節、貴方召上つて被在つたではございませんか。」

「はあ？」

「瓢箪のやうな恰好のお煙管で、而して羅宇の本に些と紙の巻いてございました。」

「あ！」と叫びし口は頓に塞がざりき。満枝は仇無げに口を掩ひて

笑へり。此の罰として貫一は直に三服の吸付莨を強ひられぬ。
左右する間に盃盤は陳ねられたれど、滿枝も貫一も三盃を過し得ぬ下戸なり。女は淸めし猪口を出して、
「貴方、お一盞。」
「可かんのです。」
「又那樣事を。」
「今度は實際。」
「それでは麥酒に致しませうか。」
「いや、酒は和洋とも可かんのですから、どうぞ御隨意に。」
酒には禮ありて、おのれ辭せんとならば、必ず他に侑めて酌せんとこそあるべきに、甚しい哉、彼の手を束ねて、御隨意にと會釋せるや、滿枝は心憎しとよりはなか〳〵に可笑しと思へり。
「私も一向不調法なのでございますよ。折角差上げたものですからお一

盞お受け下さいましな。」

貫一は止む無く其の一盞を受けたり。はや恁く酒になりけれども、滿枝が至急と言ひし用談に及ばざれば、

「時に小車梅の件と云ふのは甚麼事が起りましたな。」

「もうお一盞召上れ、それからお話を致しますから。まあ、お見事！もうお一盞。」

彼は忽ち眉を攢めて、

「いや那樣に。」

「それでは私が戴きませう、恐入りますがお酌を。」

「で、小車梅の件は？」

「其の件の外に未だお話があるのでございます。」

「大相有りますな。」

「醉はないと申上げ難い事なのですから、私少々醉ひますから、貴方。

憚様ですが最一つお酌を。」
「酔つちや困ります。用事は酔はん内にお話し下さい。」
「今晩は私酔ふ意なのでございますもの。」
其の媚ある目の邊は漸く花櫻の色に染みて、心樂げに稍身を寛に取成したる風情は、實に匂など零れぬべく、熱しとて紺の絹精縷の被風を脱げば、羽織は無くて、粲然としたる紋御召の袷に黒樗文絹の丸帶、華麗に紅の入りたる友禪の帶揚して、鬢の後れの被る耳際を掻上ぐる左の手首には、早蕨を二筋寄せて蝶の宿れる形したる例の腕環の爽に晃き遍りぬ。常に可忌と思へる物を愿く明々地に見せつけられたる貫一は、得堪ふまじく苦りたる眉状して密に目を翥じつ。彼は女の貴族的に装へるに反して、黒紬の紋付の羽織に藍千筋の秩父銘撰の袷着て、白縮緬の兵兒帶も新しからず。
彼を識れりし者は定めて見咎むべし、彼の面影は尠からず變りぬ。愛ら

しかりし處は皆失せて、四年に餘る悲酸と憂苦と相結びて常に解けざる堅色は、自から暗き陰を成して其面を蔽へり。撓むとも折るべからざる堅忍の氣は、沈鬱せる顏色の表に動けども、嘗て宮を見しやうの優しき光は再び其の眼に輝かずなりぬ。見ることの冷に、言ふことの謹めるは、彼が近來の特質にして、人は之が爲に狎るゝを憚れば、自も亦苟も親みを求めざるほどに、同業者は誰も〳〵偏人として彼を遠けぬ。焉んぞ知らん、貫一が心には、然しもの戀を失ひし身のいかで狂人たらざりしかを怪むなりけり。

彼は色を正して、滿枝が獨り興に乘じて盃を重ぬる躰を打目成れり。

「もう一盞戴きませうか。」

笑を漾ふる眸は微醺に彩られて、更に別様の媚を加へぬ。

「もう止したが可いでせう。」

「貴方が止せと有仰るなら私は止します。」

「敢て止せとは言ひません。」

「それぢや私酔ひますよ。」

答無かりければ、満枝は手酌して其の半を傾けしが、見る〳〵頬の麗しく紅になれるを、彼は手もて掩ひつゝ、

「あゝ、酔ひましたこと。」

貫一は聞かざる為して貰を燻らし居たり。

「間さん、…………………。」

「何ですか。」

「私今晩は是非お話し申したいことがあるので御座いますが、貴方お聴き下さいますか。」

「それをお聞き申す為に御同道まをしたのぢやありませんか。」

満枝は嘲むが如く微笑みて、

「私何だか酔つて居りますから、或は失礼なことを申上げるかも知れま

せんけれど、お氣に障へては困りますの。然し、御酒の上で申すのではございませんから、どうぞ其のお意で、宜うございますか。」

「撞着して居るぢやありませんか。」

「まあ那樣に有仰らずに、高が女の申すことでございますから。」

とは事難しうなりぬべし。克はぬまでも多少は累を免れんと、貫一は手を拱きつゝ俯目になりて、力めて關らざらんやうに持成すを、滿枝は擦寄りて、

「これお一盞で後は決してお強ひ申しませんですから、是だけお受けなすつて下さいましな。」

貫一は些の言も出さで其の猪口を受けつ。

「これで私の願は屆きましたの。」

「易い願ですなっ」と、あはや出でんとせし唇を結びて、貫一は纔に苦笑して止みぬ。

「間さん。」
「はい。」
「貴方失禮ながら、何でございますか、鰐淵さんの方に未だお長く彼在るお意なのですか。然し、いづれ獨立あそばすので御座いませう。」
「勿論です。」
「而して、まづ何頃彼方と別にお成りあそばすお見込なのでございますの。」
「資本のやうなものが少しでも出來たらと思つて居ます。」
滿枝は忽ち聲を斂めて、物思はしげに差俯き、莨盆の縁をば弄べるやうに煙管もて刻を打ちて居たり。折しも電燈の光の遽に晦むに驚きて顏を擧れば、又舊の如く一間は明うなりぬ。彼は煙管を捨てゝ猶暫し打案じたりしが、
「這麼事を申上げては甚だ失禮なのでございますけれど、何時まで彼方

に被在るよりは、早く獨立あそばした方が宜いては御座いませんか。もし明日にも然と云ふ御考で被在るならば、私……………………這麼事を申しては…………………烏滸がましいので御座いますが、大した事は以來ませんけれど、都合の出來るだけは御用達申して上げたいのでございますが、然う遊ばしませんか。」

意外に打れたる貫一は箸を扣へて女の顏を屹と視たり。

「然う遊ばせよ。」

「其は何云ふ譯ですか。」

實に貫一は答に窮せるなりき。

「譯ですか？」　と滿枝は口籠りたりしが、

「別に申上げなくてもお察し下さいましな。私だつて何日までも赤樫に居たいことは無いぢやございませんか。然云ふ譯なのでございます。」

「全然解らんてすな。」

「貴方、可うございますよ。」
可恨しげに滿枝は言を絕ちて、橫膝に莨を拈り居たり。
「失禮ですけれど、私はお先へ御飯を戴きます。」
貫一が飯桶を引寄せんとするを、はたと抑へて、
「お給仕なれば私致します。」
「それは憚樣です。」
滿枝は飯桶を我が側に取寄せしが、茶椀を其に伏せて、彼方の壁際に推遣りたり。
「未だお早うございますよ、もうお一盞召上れ。」
「もう頭が痛くて克はんですから赦して下さい。腹が空いて居るのですから。」
「お饑い所を御飯を上げませんでは、然ぞお辛うございませう。」
「知れた事ですわ。」

「然でございませう。それなら、此方で思つて居ることが全で先方へ通らなかつたら、饑いのに御飯を食べないのよりは遙に辛うございますよ。那樣にお饑じければ御飯をお附け申しますから、貴方も只今の御返事をなすつて下さいましな。」

「返事と言はれたつて、有仰ることの主意が能く解らんですもの。」

「何爲お了解になりませんの。」

責むるが如く男の顏を見遣れば、彼も亦詰るが如く見返しつ。

「解らんぢやありませんか。親い御交際の間でもない私に資本を出して下さる。而して其の譯はと云へば、貴方も彼處を出る。解らんぢやありませんか。どうか飯を下さいな。」

「解らないとは、貴方、お酷いぢやございませんか。ではお氣に召さないのでございますか。」

「氣に入らんと云ふ事は有りませんが、緣も無い貴方に金を出して戴く

「……………。」

「あれ、其の事ではございませんてば。」

「どうも非常に腹が空いて来ました。」

「それとも貴方外にお約束でも遊ばした御方がお在なさるのでございますか。」

彼終に鋒鋩を露し来れるよと思へば、貫一は猶解せざる躰を作して、

「妙な事を聞きますね。」

と苦笑せしのみにて續く言もあらざるに、満枝は圖を外されて、やゝ心惑へるなりけり。

「然云ふやうなお方がお在なさらなければ、……………私貴方に御願があるのでございます。」

貫一も今は屹と胸を据ゑて、

「うむ、解りました。」

「あゝ、お了解になりまして?!」

嬉しと心に言へらんやうの氣色にて、彼は猪口に餘せし酒を一息に飲乾して、其の盃を銜と貫一に差せり。

「又ですか。」

「是非！」

強に乘せられて貫一は思はず受ると齊しく盈々注れて、下にも置れず一口附くるを見たる滿枝が歡喜！

「其のお盃は淸めてございませんよ。」

一々底意ありて忽諸にすべからざる女の言を、彼はいと可煩しくて持餘せるなり。

「お了解になりましたら、どうぞ御返事を。」

「其の事なら、どうぞ是限にまて下さい。」

僅に恁く言ひ放ちて貫一は嚴かに沈默しつ。滿枝も有繫に醉を冷して、

彼の氣色を候ひたりしに、例の言寡なる男の次いでは言はざれば、
「私も這麼可恥しい事を、一旦申上げたからには、此儘では濟されません。」
貫一は緩かに頷けり。
「女の口から恁云ふ事を言出しますのは能々の事でございますから、其に對する丈の理由を有仰つて、どうぞ十分に私が得心の參るやうにお話し下さいましな、私座興で這麼事を申したのではございませんから。」
「御尤です。私のやうな者でも那樣に言つて下さると思へば、決して嬉くない事はありません。ですから、其の御深切に對して裹まず自分の考量をお話し申します。けれど、私は御承知の偏屈者でありますから、衆とは大きに考量が違つて居ります。
第一私は一生妻といふ者は決して持たん覺悟なので。御承知か知りませんが、元私は書生でありました、それが中途から學問を罷めて、此の商

賣を始めたのは、放蕩で遣損つたのでもなければ、敢て食窮めた譯でも有りませんので。書生が可厭さに商賣を遣らうと云ふのなら、未だ外に幾多も好い商賣は有りますさ。何を苦んで這麼極惡非道な、白日盗を爲すと謂はうか、病人の喉口を干すと謂はうか、命よりは大事な人の名譽を殺して、其の金錢を奪取る高利貸などを擇むものですか。」

聽居る滿枝は益す醉を冷されぬ。

「不正な家業と謂ふよりは、もう惡事ですな。それを私が今日始めて知つたのではない、知つて身を墮したのは、私は當時敵手を殺して自分も死にたかつたくらゐ無念極る失望をした事があつたからです。其の失望と云ふのは、私が人を頼にして居つた事があつて、其の人達も頼れなければならん義理合になつて居つたのを、不圖した慾に誘れて、約束は違へる、義理は捨てる、而して私は見事に賣られたのです。」

火影を避けんとしたる彼の目の中の遽に耀けるは、なほ新なる痛恨の涙

の浮べるなりけり。
「實に賴少い世の中で、其の義理も人情も忘れて、罪も無い私の賣られたのも、原はと云へば、金錢からです。假初にも一匹の男子たる者が、金錢の爲に見易へられたかと思へば、其の無念といふものは、私は一……………一……………一生忘れられんです。
輕薄でなければ詐、詐でなければ利慾、愛相の盡きた世の中です。それほど可厭な世の中なら、何爲一思に死んで了はんか、と或は御不審かも知れん。私は死にたいにも、其の無念が障になつて死切れんのです。賣られた人達を苦めるやうな那樣復讐などは爲たくはありません、唯自分だけで可いから、一旦受けた恨！　それだけは屹と霽さなければ措かん精神。片時でも其の恨を忘れることの出來ん胸中といふものは、我ながら然う思ひますが、全で發狂して居るやうですな。それで、高利貸のやうな殘刻の甚しい、殆ど人を殺す程の度胸を要する事を每日扱つて、而

賣を始めたのは、放蕩で遣損つたのでもなければ、敢て食窮めた譯でも有りませんので。書生が可厭さに商賣を遣らうと云ふのなら、未だ外に幾多も好い商賣は有りますさ、何を苦んで這麽極惡非道な、白日盜を爲すと謂はうか、病人の喉口を干すと謂はうか、命よりは大事な人の名譽を殺して、其の金錢を奪取る高利貸などを擇むものですか。」

聽居る滿枝は益す醉を冷されぬ。

「不正な家業と謂ふよりは、もう惡事ですな。それを私が今日始めて知づたのではない、知つて身を墮したのは、私は當時敵手を殺して自分も死にたかつたくらゐ無念極る失望をした事があつたからです。其の失望と云ふのは、私が人を頼にして居つた事があつて、其の人達も頼れなければならん義理合になつて居つたのを、不圖した慾に誘れて、約束は違へる、義理は捨てる、而して私は見事に賣られたのです。」

火影を避けんとしたる彼の目の中の遽に耀けるは、なほ新なる痛恨の涙

の浮べるなりけり。
「實に賴少い世の中で、其の義理も人情も忘れて、罪も無い私の賣られたのも、原はと云へば、金錢からです。假初にも一匹の男子たる者が、金錢の爲に見易へられたかと思へば、其の無念といふものは、私は一……一……一生忘れられんです。

輕薄でなければ詐、詐でなければ利慾、愛相の盡きた世の中です。それほど可厭な世の中なら、何爲一思に死んで了はんか、と或は御不審かも知れん。私は死にたいにも、其の無念が障になつて死切れんのです。賣られた人達を苦めるやうな那樣復讐などは爲たくはありません、唯自分だけで可いから、一旦受けた恨！　それだけは屹と霽さなければ措かん精神。片時でも其の恨を忘れることの出來ん胸中といふものは、我ながら然う思ひますが、全で發狂して居るやうですな。それて、高利貸のやうな殘刻の甚しい、殆ど人を殺す程の度胸を要する事を毎日扱つて、而

して感情を暴して居なければ迚も堪へられんので、發狂者には適當の商賣です。そこで、金錢ゆゑに賣られもすれば、辱められもした、金錢の無いのも謂はゞ無念の一つです。其の金錢が有つたら何とでも恨が霽されやうか、と其を樂に義理も人情も捨てゝ掛つて、今では名譽も色戀も無く、金錢より外には何の望も持たんのです。又考へて見ると、恷ひ人などを信じるよりは、金錢を信じた方が間違が無い。人間よりは金錢の方が夐か頼になりますよ、頼にならんのは人の心です！

先づ恁云ふ考で此の商賣に入つたのでありますから、實を申せば、貴方の貸して遣らうと有仰る資本は欲いが、人間の貴方には用が無いのです。」

彼は仰ぎて高笑しつゝも、其の面は痛く激したり。

滿枝は彼の言の決して謌ならざるべきを信じたり。彼の偏屈なる、實に然るべき所見を懷けるも怪むには足らずと思へるなり。然れども、彼は未だ戀の甘きを知らざるが故に、心狹くも此の面白き世に偏屈の扉を閉

ぢて、詐と輕薄と利欲との中に詐と輕薄と利欲との外なる樂あるを曉らざるならん。旋て我夫を敎へん、と滿枝は輙く望を失はざるなりき。
「では何でございますか、私の心も依樣賴にならないとお疑ひ遊ばすのでございますか。」
「疑ふ、疑はんと云ふのは二の次で、私は其の失望以來此の世の中が嫌て、總ての人間を好まんのですから。」
「それでは誠も〳〵——命懸けて貴方を思ふ者がございましても？」
「勿論！　別して惚れたの、思ふのと云ふ事は大嫌です。」
「あの、命を懸けて慕つて居るといふのがお了解になりましても？」
「高利貸の目にも涙は無いですよ。」
今は取付く島も無くて、滿枝は暫し惘然として居たり。
「どうぞ御飯を頂戴。」
打萎れつゝ滿枝は飯を盛りて出せり。

「これは恐入ります。」

彼は喰ふこと傍に人無き若し。滿枝の面は薄紅になほ醉は有りながら、醉へる體も無くて、唯打案じたり。

「貴方も上りませんか。」

偖く會釋して貫一は三盃目を易へつ。良有りて、

「間さん、」と、呼れし時、彼は滿口に飯を啣みて遽に應ふる能はず、唯目を擧げて女の顏を見たるのみ。

「私も這麼事を口に出します迄には、もしや貴方が御承知の無い時には、と其等を考へまして、もう多時胸に疊んで居つたのでございます。それまで大事を取つて居りながら、偖う一も二も無く奇麗にお謝絕を受けては、私實に面目無くて……餘り悔しうございますわ。」

慌忙しくハンカチイフを取りて、片手に恨泣の目元を掩へり。

「面目無くて私此座が起れません、間さん、お察し下さいまし。」

貫一は冷々に見返りて、
「貴方一人を嫌つたと云ふ譯なら、然うかも知れませんけれど、私は總ての人間が嫌なのですから、どうぞ惡からず思つて下さい。貴方も御飯をお上んなさいな。おゝ！　而して小車梅の件に就いてのお話は？」
泣赤めたる目を拭ひて滿枝は答へず。
「何云ふお話ですか。」
「那樣事は奈何でも宜うございます。間さん、私奈何しても思切れませんから、然う思召して下さい。で、お可厭ならお可厭で宜うございますから、私が這麼に思つて居ることを、どうぞ何日までもお忘れなく…………屹と覺えて被在いましよ。」
「承知しました。」
「もつと優しい言をお聞せ下さいましな。」
「私も覺えて居ます。」

「もつと何とか有仰りやうが有りさうなものではございませんか。」

「御志は決して忘れません。是なら宜いでせう。」

滿枝は物をも言はず衝と起ちしが、飜然と貫一の身近に寄添ひて、

「お忘れあそばすな。」　と言ふさへに力籠りて、其の太股を絕か撮れば、貫一は不意の痛に覆らんとするを支へつゝ橫樣に振拂ふを、滿枝は早くも身を開きて、知らず顏に手を打鳴して婢を呼ぶなりけり。

第三章

赤坂氷川の邊に寫眞の御前と言へば知らぬ者無く、實に此殿の出づるに寫眞機械を車に積みて隨へざることあらざれば、自ら人目を遁れず、恁る異名は呼るゝにぞありける。子細を明めずしては、(將棊の殿樣)の流かとも想はるべし。あらず！　才の敏、學の博、貴族院の椅子を占めて、優に高かるべき器を抱きながら、五年を獨逸に薰染せし學者風を喜び、世事を抛ちて愚なるが如く、累代の富を控へて、無勘定の雅量を肆にすれども、なほ歳の入るものを計るに正に出づるに五倍すてふ、子爵中有數の內福と聞えたる田鶴見良春其人なり。

氷川なる邸內には、唐破風造の昔を摸せる館と相並びて、歸朝後起せし三層の煉瓦造の異しきまで目慣れぬ式なるは、此の殿の數寄にて、獨逸に名ある古城の面影を偲びて此に象れるなりとぞ。之を文庫と書齋と客

間とに充てゝ、萬足らざる無き閑日月をば、書に耽り、畫に樂み、彫刻を愛し、音樂に嘯き、近き頃よりは專ら寫眞に遊びて、齡三十四に迨べども頑として未だ娶らず。其の居るや、行くや、出づるや、入るや、常に飄然として、絶えて貴族的容儀を修めざれど、自らなる七萬石の品格は、面白う眉秀てゝ、鼻高く、眼爽に、形の淸に揚れるは、皎として玉樹の風前に臨めるとも謂ふべくや、御代々御美男にわたらせらるゝとは常に藩士の誇る所なり。

係れば良緣の空しからざること、蝶を捉へんとする蜘蛛の糸より繁しと雖も、反顧だに爲ずして、例の飄然忍びては醉の紛れの逸早き風流に慰み、內には無妻主義を主張して、人の諫などふつに用ゐざるなりけり。然るは、彼の地に留學の日、陸軍中佐なる人の娘と相愛して、末の契も堅く、月下の小舟に比翼の櫂を操り、スプレイの流を指して、此の水の終に涸るゝ日はあらんとも、我が戀の焰の消ゆる時あらせじ、と互の誓

詞に詐はあらざりけるを、歸りて母君に請ふことありしに、いと太う驚かれて、こは由々しき家の大事ぞや。夷狄は穢多よりも賤むべきに、畏くも我が田鶴見の家をばなでう禽獸の檻と爲すべき。あな、可疎しの吾子が心やと、涙と共に掻口說きて、悲び歎きの餘は病にさへ伏したまへりしかば、殿も所爲無くて、心苦しう思ひつゝも、猶行末をこそ頼めと文の便の度々に慰めて、彼方も在るにあられぬ三年の月日を、憂きは死なゝんと味氣なく過せしに、一昨年の秋物思ふ積にやありけん、心自から弱りて、存へかねし身の苦惱を、御神の惠に助けられて、導かれし天國の杳として原ぬべからざるを、いとゞしく可懷しの殿の胸は破れぬべく、幾と知覺の半をも失ひて、世と絕つの念益す深く、今は無盡の富も世襲の貴きも何にかはせんと、唯懷を亡き人に寄せて、形見こそ仇ならず書齋の壁に掛けたる半身像は、彼女が十九の春の色を苦に手寫して、嘗て貽りしものなりけり。

殿は此の失望の極放肆遊惰の裏に聊か懐を遣り、一具の寫眞機に千金を擲ちて、之に嬉戯すること小兒の如く、身をも家をも外にして、遊ぶと費すとに餘念は無かりけれど、家令に畔柳元衞ありて、其の人迂ならず、善く財を理し、事を計るに由りて、恁る疎放の殿を戴ける田鶴見家も、幸に些の破綻を生ずる無きを得てけり。

彼は貨殖の一端として密に高利の貸元を營みけるなり。千、二千、三千五千、乃至一萬の巨額をも容易に支出する大資本主たるを以て、高利貸の大口を引受くる輩の此に便らんとせざるはあらず。然れども慧き畔柳は事の密なるを策の上と爲して、叨に利の爲に誘はれず、始より其の藩士なる鰐淵直行の一手に貸出すのみにて、他は皆彼の名義を用ゐて、直接の取引を爲さゞれば、同業者は彼の那邊にか金穴あるを疑はざれども其の果して誰なるやを知る者絶えてあらざるなりき。

鰐淵が名の同業間に聞えて、威權をさ〳〵四天王の隨一たるべき勢ある

は、此の資本金の後楯ありて、運轉神助の如きに由るのみ。彼は元田鶴見の藩士にて、身柄は謂ふにも足らぬ足輕頭に過ぎざりしが、才覺ある者なりければ、廢藩の後出でゝ小役人を勤め、轉じて商社に事へ、一時或は地所家屋の賣買を周旋し、萬年青を手掛け、米屋町に出入し、何れにしても世渡の茶を濁さずといふと無かりしかど、皆思はしからで巡査を志願せしに、上官の首尾好く、竟には警部にまで取立てられしを、中ごろにして金是權と感ずる所ありて、奉職中蓄得たりし三百餘圓を元に高利貸を始め、世間の未だ此の種の惡手段に慣れざるに乘じて、或は欺き、或は嚇し、或は賺し、或は虐げ、纔に法網を潜り得て辛くも繩附たらざるの罪を犯し、積不善の五六千圓に達せし比、恰も好し、畔柳の後見を得たりしは、虎に翼を添へたる如く、現に彼の今運轉せる金額は殆ど數萬に上るとぞ聞えし。

畔柳は此手より穫るゝ利の半は、之を御殿の金庫に致し、半は之を懐に

して、鰐淵も之に因りて利し、金は一にして其利を三にせる家令が六臂の働は、主公が不生産的なるを補ひて猶餘ありとも謂ふべくや。鰐淵直行、此人ぞ間貫一が捨鉢の身を寄せて、牛頭馬頭の手代と頼まれ、五番町なる其の家に四年の今日まで寄寓せるなり。貫一は鰐淵の裏二階なる八疊の一間を與へられて、名は雇人なれども客分に遇はれ、手代となり、顧問となりて、主の重寶大方ならざれば、四年の久しきに彌れども主は彼を出すことを喜ばず、彼も亦家を搆ふる必要無ければ、敢て留るを厭ふにもあらで、手代を勤むる傍若干の我が小額をも運轉して、自ら營む便もあれば、今營ひに此を出でゝ痩臂を張らんよりは、然るべき時節の到來を待つには如かじと分別せるなり。彼は嘗に手代として能く働き、顧問として能く慮るのみをもて、鰐淵が信用を得たるにあらず、彼の齢を以てして、色を近けず、酒に親まず、浪費せず、遊惰せず、勤むべきは必ず勤め、爲すべきは必ず爲して、己を衒はず、他を貶めず、恭

謹にして而も氣節に乏しからざるなど、世に難有き若者なり、と鰐淵は寧ろ心陰に彼を畏れたり。

主は彼の爲人を知りし後、如此き人の如何にして高利貸などや志せると疑ひしなり。貫一は己の履歴を詐りて、如何なる失望の極身を之に墮せしかを告げざるなりき。然れども彼が高等中學の學生たりしことは後に顯れにき。他の一事の秘に至りては、今もなほ主が疑問に存すれども、そのまゝに年經にければ、改めて穿鑿もせられで、やがては、暖簾を分けて屹としたる後見は爲てくれんと、鰐淵は常に疎ならず彼が身を念ひぬ。直行は今年五十を一つ越えて、妻なるお峯は四十六なり。夫の心猛く、人の憂を見ること、犬の嚔の如く、唯貪りて饜くを知らざるに引易へて、氣立優しとまでにはあらねど、鬼の女房ながらも尋常の人の心は有てるなり。彼も貫一の偏屈なれども律義に、愛すべき所とては無けれど、憎ましき所とては猶更にあらぬを愛して、何くれと心着けては、彼

の爲に計りて善かれと祈るなりけり。
いと幸ありける貫一が身の上哉。彼は世を恨むる餘其の執念の驅るまゝに、人の生ける肉を啖ひ、以つて聊か逆境に暴されたりし枯腸を癒さんが爲に、三惡道に捨身の大願を發起せる心中には、百の呵責も、千の苦艱も固より期したるを、なか〳〵係る寛なる信用と、係る溫き憐愍とを被らんは、羝羊の乳を得んとよりも彼は望まざりしなり。憂の中の喜なる哉、彼は此の喜を如何に喜びけるか。呵責をも苦艱をも敢て惡まざるべき覺悟の貫一は、此の信用の終には慾の爲に剝がれ、此の憐愍も利の爲に吝まるゝ時の目前なるべきを固く信じたり。

毒は毒を以て制せらる。鰐淵が債務者中に高利借の名にしおふ某黨の有志家某あり。彼は三年來生殺の關係にて、元利三千圓の責を負ひながら、奸智を弄し、雄辯を揮ひ、大膽不敵に構へて出沒自在の計を出し、鰐淵が老巧の術といへども得て施す所無かりければ、同業者の之に係りては、逆捩を吃ひて血反吐を嘖されし者尠からざるを、鰐淵は彌よ憎しと思へど、彼に對しては鋏捍も折れぬべきに持餘しつるを、克はぬまでも棄措くは口惜ければ、せめては令見の爲にも折々釘を刺して、再び那奴の翅を展べしめざらんに如かずと、昨日は貫一の曠らず嚴談せよと代理を命ぜられて、其の家に向ひしなり。

彼は散々に飜弄せられけるを、劣らじと罵りて、前後四時間ばかり其座を起ちも遣らで壯に言爭ひしが、病者に等しき青二才と侮りし貫一の、

陰忍強く立向ひて屈する氣色あらざるより、有合ふ仕込杖を拔放し、おのれ還らずば生けては還さじと、二尺餘の白刄を危く突付けて脅せしを、其の鼻頭に待ひて愈よ動かざりしを、來合せつる壯士三名の亂拳に圍れて門外に突放され、少しは傷など受けて歸來にけるが、之が爲に彼の感じ易き神經は甚しく激動して、夜もすがら眠を成さず、今朝は心地の轉た勝れねば、一日の休養を乞ひて、夜具をも收めぬ一間に引籠れるなりけり。慫ることありし翌日は夥しく腦の憊るゝと與に心亂れ動きて、其の憤りし後を憤り、悲みし後を悲まざれば已まず、爲に必ず一日の勤を廢するは彼の病なりき。故に彼は折に觸れつゝ其の體の弱く、其の情の急なる、到底此の業に不適當なるを感ぜざること無し。彼が此業に入りし最初の一年は働より休の多かりし由を言ひて、今も鰐淵の笑ふことあり。次の年よりは漸く慣れてけれど、彼の心は決して此の惡を作すに慣れざりき。唯能く忍得るを學びたるなり。彼の學びて之を忍得るの故は、

爾來終天の失望と恨との一日も忘るゝ能はざるが爲に、其の苦悶の餘勢を驅りて他の方面に注がしむるに過ぎず。彼は其の失望と恨とを忘れんが爲には、以外の堪ふまじき苦悶を辭せざるなり。然れども彼は今も仍往々自ら爲せる殘刻を悔い、或は人の加ふる侮辱に堪へずして、神經の過度に亢奮せらるゝ爲に、一日の調攝を求めざるべからざる微恙を得ることあり。

朗に秋の氣澄みて、空の色、雲の布置匂はしう、金色の日影は豐に快晴を飾れる南受の縁障子を隙して、爽なる肌寒の蓐に長高く痩せたる貫一は横れり。蒼く濁れる頰の肉よ、髐へる横顏の輪廓よ、曇の懸れる眉の下に物思はしき眼色の凝りて動かざりしが、旋て崩るゝやうに頰杖を倒して、枕囊に重き頭を落すと與に寐返りつゝ掻卷引寄せて、擴げたりし新聞を取りけるが、見る間もあらず投遣りて仰向になりぬ。折しも誰ならん、階子を昇來る音す。貫一は凝然として目を塞ぎ居たり。紙門を啓

けて入來れるは主の妻なり。貫一の慌てゝ起上るを、そのまゝにと制して、机の傍に坐りつ。

「紅茶を淹れましたからお上んなさい。少しばかり栗を茹でましたから。」

手籃に入れたる栗と盆なる茶器とを枕頭におきて、

「氣分は奈何です。」

「いや、何有、寐て居るほどの事は無いので。これは色々御馳走樣でございます。」

「冷めない内にお上んなさい。」

彼は會釋して珈琲茶碗を取上げしが、

「旦那は何時頃お出懸になりました。」

「今朝は毎より早くね、氷川へ行くと云つて。」

言ふも可疎しげに聞えけれど、然して貫一は意も留めず、

「はあ、畔柳さんですか。」

「それが奈何だか知れないの。」
お峯は苦笑しつ。明なる障子の日脚は其の面の小皺の讀まれぬは無きまでに照しぬ。髪は薄けれど、櫛の齒通りて、一髪を亂さず圓髷に結ひて、顔の色は赤き方なれど、いと好く磨きて清に滑なり。鼻の邊に薄痘痕ありて、口を引窄むる癖あり。齒性惡ければとて常に涅めたるが、感るをや烏羽玉とも謂ふべく殆ど耀くばかりに麗し。茶柳條のフランネルの單衣に朝寒の羽織着たるが、御召縮緬の染直しなるべく見ゆ。貫一は有繋に聞きも流されず、
「何為ですか。」
お峯は羽織の紐を解きつ結びつして、言はんか、言はざらんかを遅へる風情なるを、強ひて問はまほしき事にはあらじと思へば、貫一は籃なる栗を取りて剝き居たり。彼は姑く打案ぜし後、
「あの赤樫の別品さんね、あの人は惡い噂が有るぢやありませんか、聞

紅葉全集

きませんか。」

「惡い噂とは?」

「男を引掛けては食物に爲るとか云ふ……。」

貫一は覺えず首を傾けたり。曩の夜の事など思合すなるべし。

「然でせう。」

「一向聞きませんな。那奴男を引掛けなくても金錢には窮らんでせうから、那樣事は無からうと思ひますが……。」

「だから可けない。お前さんなんぞもべいろしや組の方ですよ。金錢が有るから爲ないと限つたものですか。然云ふ噂が私の耳へ入つて居るのですもの。」

「はて、な。」

「あれ、那樣剝きやうをまちや食べる所は無い、此方へお貸しなさい。」

「これは憚樣です。」

お峯は其の言はんとする所を言はんとには、默々と手を束ねて在らんよ
り、事に紛らしつゝ語るの便あるを思へるなり。彼は更に栗の大いなる
を擇みて、其の頂よりナイフを加へつ。

「些と見たつて那樣事を爲さうな風ぢやありませんか。お前さんなんぞ
は堅人だから可いけれど、本當に那麼者に係合ひでもしたら大變ですよ。」

「然云ふ事が有りますかな。」

「だつて、私の耳へさへ入る位なのに、お前さんが萬更知らない事は無
からうと思ひますがね。あの別品さんが其を遣ると云ふのは評判ですよ。
金窪さん、鷲爪さん、それから芥原さん、皆其の話をして居ましたよ。」

「或は那樣評判があるのかも知れませんが、私は一向聞きません。成程、
那云ふ風ですから、それは然かも知れません。」

「外の人には這麼話は出來ません、長年氣心も知り合つて家内の人も同
じのお前さんの事だから、私もお話を爲るのですけれどね、困つた事が

出來て了つたの――奈何したら可からうかと思つてね。」

お峯がナイフを執れる手は漸く鈍くなりぬ。

「おや、これは大變な虫だ。こら、御覽なさい、此の虫は奈何でせう。」

「非常ですな。」

「虫が付いちや可けません！　栗には限らず。」

「然です。」

お峯は又一つ取りて剝き始めけるが、心進まざらんやうにナイフの運は愈よ等閑なりき。

「これは本當にお前さんだから私は信仰して話を爲るのですけれど、此處限の話ですからね。」

「承知ました。」

貫一は食はんとせし栗を持ち直して、屹とお峯に打向ひたり。聞く耳もあらじと知れど、秘密を語らんとする彼の聲は自から潜りぬ。

「どうも私は此間から異しいわいと思つて居たのですが、どうも樣子がね、内の夫が那の別品さんに係合を付けて居やしないかと思ふの――どうも其に違無いの！」

彼はや栗など剝かずなりぬ。貫一は搖笑して、

「那樣馬鹿な事が、貴方……。」

「外の人ならいざ知らず、附いて居る女房の私が……それはもう間違無し！」

貫一は熟と思ひ入りて、

「旦那はお幾歲でしたな。」

「五十一、もう爺ですわね。」

彼は又思案して、

「何ぞ證據が有りますか。」

「證據と云つて、別に寄來した文を見た譯でもないのですけれど、那樣

念を推さなくたつて、もう違無いの!!」

息巻くお峯の前に彼は面を俯して言はず、靜に思廻すなるべし。お峯は心着きて栗を剝き始めつ。其の一つを終ふるまで言を繼がざりしが、さて徐に、

「それはもう男の働とか云ふのだから、妾も樂も可うございます。是が藝者だとか、圍者だとか云ふのなら、私は何も言ひはしませんけれど、第一に、赤樫さんといふ者があるのぢやありませんか、ねえ。其の上に那の女だ！　凡の代物ぢやありはしませんわね。それだから私は實に心配で、心火なら可いけれど、なか〳〵心火どころの洒落た沙汰ぢやありはしません。那麼者に係合つて居た日には、末始終甚麼事になるか知れやしない、それが私は苦勞でね。內の夫もあのくらゐ利巧で居ながら奈何したと云ふのでせう。今朝出掛けたのもどうも異しいの、確に氷川へ行つたのぢやないらしい。だから御覧なさい、此頃は何となく治れてゐ

ますわね、而して今朝なんぞは羽織から帶から仕立下し渾成で、その奇麗事と謂つたら、何が日にも氷川へ行くのに那麽に靚した事はありはしません。もうそれは氷川でない事は知れ切つて居るの。」

「それが事實なら困りましたな。」

「あれ、お前さんは未だ那樣氣樂なことを言つて居るよ。事實ならつて、事實に違無いと云ふのに。」

貫一の氣乘せぬをお峯はいと齒痒くて心苛つなるべし。

「はあ、事實とすれば彌よ善くない。あの女に係合つちや全く妙でない。御心配でせう。」

「私は悋氣で言ふ譯ぢやない、本當に旦那の身を思つて心配を爲るのですよ、敵手が惡いからねえ。」

思ひ直せども貫一が腑には落ちざるなりけり。

「而して、それは何頃からの事でございます。」

「つい此頃ですよ、何でも。」
「然し、何にしろ御心配でせう。」
「其に就いて是非お頼があるのですがね、折を見て私も篤り言はうと思ふのです。就いては是といふ證據が無くちや口が出ませんから、何とか其處を突止めたいのだけれど、私の體ぢや戸外の様子が全然解らないのですものね。」
「御尤。」
「で、お前さんと見立てゝお頼があるのです。どうか内々様子を探つて見て下さいな。お前さんが寢てお在でないと、實は今日早速お頼があるのだけれど、折が悪いのね。」
行けよと命ぜられたると奚ぞ擇ばん、是有る哉、紅茶と栗と、と貫一は其の餘に安く賣られたるが獨り可笑かりき。
「いえ、一向差支ございません。奈何いふ事ですか。」

「然う？　餘りお氣の毒ね。」
彼の赤き顔の色は耀くばかりに懽びぬ。
「御遠慮無く有仰つて下さい。」
「然う？　本當に可いのですか。」
お峯は彼が然諾の爽なるに遇ひて、紅茶と栗との之に酬ゆるの薄儀に過ぎたるを、今更に可愧しく覺ゆるなり。
「それではね、本當に御苦勞で濟まないけれど、氷川迄行つて見て來て下されば、それで可いのですよ。畔柳さんへ行つて、旦那が行つたか、行りないか、若し行つたのなら、何頃行つて何頃歸つたか、何有、十に九までは屹度行きはしませんから。其の樣子だけ解れば、それで可いのです。それだけ知れゝば、それで探偵が一つ出來たのですから。」
「では行つて參りませう。」
彼は起ちて寢衣帶を解かんとすれば、

「お待ちなさいよ、今俥を呼びに遣るから。」
恁く言捨てゝお峯は忙しく階子を下行けり。
迹に貫一は繰返し〳〵此事の眞僞を案じ煩ひけるが、服を改めて居間を出でんとしつゝ、
「女房に振られて、學士に成損つて、後が高利貸の手代で、お上さんの秘密探偵か！」
と端無く思ひ浮べては漫に獨り打笑れつ。

第四章

貫一は直に俥を飛して氷川なる畔柳の許に赴けり。其の居宅は田鶴見子爵の邸內に在りて、裏門より出入すべく、館の側面を負ひて、横長に三百坪約を木槿垣に取廻して、昔形氣の內や幽しげに造成したる二階建なり。構の可愼しう目立たぬに引易へて、木口の撰擇の至れるは、館の改築ありし折其の舊材を拜領して用ゐたるなりとぞ。

貫一も彼の主も此家に公然の出入を憚る身なれば、玄關側なる格子口より訪るゝを常とせり。彼は戸口に立寄りけるに、鰐淵の履物は在らず。はや歸りしか、來ざりしか、或は未だ見えざるにや、左にも右にもお峯が言には符合すれども、直に之を以て疑を容るべきにあらずなど思ひつつ音なへば、應ずる者無くて、再びする時聞慣れたる主の妻の聲して、連に婢の名を呼びたりしに、答へざりければ旋て自ら出て來て、

「おや、さあ、お上んなさい。丁度好い處へお出でした。」

眼のみいと大くて、病勝に瘦衰へたる五體は燈心の如く、見るだに慘々しながら、聲の明にして張ある、何處より出づる音ならんと、一たびは目を驚かし、一たびは耳を驚かすてふ。貫一が一種の化物と謂へる其の人なり。年は五十路ばかりにて頭の霜繁く、夫よりは姉なりとぞ。

貫一は屋敷風の恭しき禮を作して、

「はい、今日は急ぎまするで、これで失禮を致しまする。主人は今朝ほど此方樣へ伺ひましたでございませうか。」

「いゝえ、お出はありませんよ。實はね、ちとお話が有るので、お目に懸りたいと申して居りました所。唯今御殿へ出て居りますて、些と呼びに遣りませうから、暫くお上んなすつて。」

言はるゝまゝに客間に通りて、端近う控ふれば、彼は井の端なりし婢を呼立てゝ、速々主の方へ走らせつ。莨盆を出し、番茶を出せしのみにて、

納戸に入りける妻は再び出で來らず。此間に貫一は如何に此の探偵一件を處置せんかと工夫して居たり。良有りて婢の息促き還來にける氣勢せしが、旋て妻の出でゝ例の聲を振ひぬ。

「あの唯今些と手が放せませんので、御殿の方に居りますから、どうか彼方へお出なすつて。直其處ですよ、婢に案内を爲せます、あの豐や！」

暇乞して戸口を出づれば、勝手元の垣の側に廿歳かと見ゆる物馴顏の婢の待てりしが、後さまに帶繕ひつゝ道知邊す。垣に沿ひて曲れば、玉川砂礫を敷きたる徑ありて、出外るれば子爵家の構内にて、三棟並べる塗籠の背後に、桐の木高く植列ねたる下道の清く掃いたるを行窮れば、板塀繞らせる下屋造の煙突より忙しげなる煙立昇りて、折しも御前籠舁入るゝは通用門なり。貫一も之を入りて、餘所ながら過來し厨に、酒の香、物煮る匂頻りて、奧よりは絶えず人の通ふ亂響したる、來客などやと覺えつゝ、吽柳が詰所なるべき一間に導かれぬ。

(四) の 二

畔柳元衞の娘靜緒は館の腰元に通勤せるなれば、今日は特に女客の執持に召れて、高髷、變裏に粧を改め、お傍不去に麁畧あらせじと冊くなりけり。係て邸内遊覽の所望ありければ、先づ西洋館の三階に案内すとて、迂廻階子の半を昇行く後姿に、其の客の如何に貴婦人なるかを窺ふべし。鬘ならではと見ゆるまでに結做したる圓髷の漆の如きに、珊瑚の六分玉の後挿を點じたれば、更に白襟の冷艶物の類ふべき無く、貴族鼠の縐高縮緬の五紋なる單衣を曳きて、帶は海松色地に裝束切摸の色紙散の七絲を高く負ひたり。淡紅色紋絽の長襦袢の裾は上履の歩に緩く匂零して、絹足袋の雪に嫋々なる山茶花の開く心地す。

此の麗しき容をば見返り勝に靜緒は壁側に寄りて二三段づゝ先立ちけるが、彼の俯きて昇れるに、櫛の蒔繪のいと能く見えければ、ふと其に目

を奪はれつゝ一段踏み失ねて、凄しき響の中にあなや僵れんと爲たり。幸に怪我は無かりけれど、彼はなか〳〵己の怪我などより貴客を駭かせし狼藉をば、得も忍ばれず滿面に慚ぢて、

「どうも取んだ麁相を致しまして…………。」

「いゝえ。貴方本當に何處もお傷めなさりはしませんか。」

「いゝえ。然ぞ吃驚遊ばしましたでございませう、御免あそばしまして。」

這度は薄氷を蹈む想して一段を昇る時、貴婦人は其の帶の解けたるを見て、

「些とお待ちなさい。」

進寄りて結ばんとするを、心着きし靜緒は慌て驚きて、

「あれ、恐入ります。」

「可うございますよ。さあ、熟として。」

「あれ、それでは本當に恐入りますから。」

争ひ得ずして竟に貴婦人の手を勞せし彼の心は、溢るゝばかり感謝の情を起して、次いでは此の優しさを櫻の花の薫あらんやうにも覺ゆるなり。彼は女四書の內訓に出でたりとて屢ば父に聽さるゝ（五綵服を盛にするも、以つて身の華と爲すに足らず、貞順道に率へば、乃ち以つて婦德を進むべし）の本文に合ひて、恪てこそ始めて色に矜らず、厥德に爽かずとも謂ふべきなれ。愛でたき人にも遇へるかなと綣に思入りぬ。

三階に着くより靜緖は西北の窓に寄り行きて、効々しく綠色の帷を絞り、硝子戶を繰揚げて、

「どうぞ此方へお出あそばしまして。此が一番見晴が宜いのでございます。」

「まあ、好い景色ですことね！　富士が好く晴れて。おや、大相木犀が匂ひますね、お邸內に在りますの？」

貴婦人は此の秋霽の朗に濶くして心往くばかりなるに、夢など見るらん

面色して佇めり。窓を爭ひて射入る日影は斜に其の姿を照して、襟留なる眞珠は焚ゆる如く輝きぬ。塵をだに容さず澄みに澄みたる添景の中に立てる彼の容華は淸く鮮に見勝りて、玉壺に白き花を挿したらん風情あり。靜緖は女ながらも見惚れて、不束に眺入りつ。

其の目の爽にして滴るばかり情の籠れる、其の眉の思へるまゝに畫き成せる如き、其の口元の莟ながら香に立つと見ゆる、其の鼻の似るものも無く最と好く整ひたる、肌理濃に光をさへ帶びたる、色の透るばかりに白き、難を求めなば、髮は濃くて瑩澤に、頭も重げに束ねられたれど、髮際の少しく打亂れたると、立てる容こそ風にも堪ふまじく繊弱なれど、面の痩の過ぎたる爲に、自ら愁はしう底寂しきと、頸の細きが折れやせぬべく可傷きとなり。

然れど恁く揃ひて好き器量は未だ見ずと、靜緖は心に驚きつゝ、蹈外せし麁忽をはや忘れて、見据うる流眄は其の物を奪はんと覘ふが如く、吾

を失へる顔は間抜けて、常は顧らるゝ貌ありながら、草の花の匂無きやうに、此の貴婦人の傍には見劣せらるゝこと夥しかり。彼は己の間抜けたりとも知らで、返す〳〵も人の上を思ひて止まざりき。實に此の奥方なれば、金時計持てるも、眞珠の襟留せるも、指環を五つまで穿せるも、設し馬車に乘りて行かんとも、何をか愧づべき。婦の德をさへ虧かで此の嬋娟に生れ得て、而も此の富めるに遇へる、天の惠と世の幸とを併せ享けて、殘る方無き果報の恪も痛じき人もあるもの乎。美しきは貧しくて、賣らざるを得ず、富めるは醜くて、買はざるを得ず、二者は愜はぬ世の習なるに、女ながらも恪う生れたらんには、其の幸は男にも過ぎぬべしなど、若き女は物羨の念強ければ、妬しとは及び難くて、靜緒は心に畏るゝなるべし。

彼は貴婦人の貌に耽りて、其の款待にとて携へ來つる双眼鏡を參らするをば氣着かで居たり。箇は殿の佛蘭西より持ち歸られし名器なるを、漸

く取出して薦めたり。形は一握の中に隱るゝばかりなれど、能く遠くを望み得る力は幾と神助と疑ふべく、筒は乳白色の玉もて造られ、僅に黃金細工の金具を施したるのみ。

旋て双眼鏡は貴婦人の手に在りて、措くを忘るゝまでに愛でられけるが、目の及ばぬ遠き限は南に北に眺盡されて、彼は此の鏡の凡ならず精巧なるに驚ける狀なり。

「那處に遠く些の小楊枝ほどの棒が見えませう、那が旗なので、淺黃に赤い柳條の模樣まで昭然見えて、而して旗竿の頭に鳶が宿つて居るのが手に取るやう。」

「おや、然やうでございますか。何でも此の位の眼鏡は西洋にも多度御座いませんやうて、招魂社のお祭の時などは、狼煙の人形が能く見えるのでございます。私は之を見まする度に然やう思ひますのでございますが、恁云ふ風に話が聞えましたら然ぞ宜うございませう。餘り近くに見

えますので、音や聲なんぞが致すかと想ふやうでございます。
「音が聞えたら、彼方此方の音が一所に成つて紛雜になつて了ひませう。
恁く言ひて齊しく笑へり。靜緒は客遇に慣れたれば、可羞げに見えながらも話を求むるには拙からざりき。
「私は始めて之を見せて戴きました折、殿樣に全然騙されましたのでございます。鼻の前に見えるだらうと仰せられますから、然やうにございますと申上げますと、見えたら直に其の眼鏡を耳に推付けて見ろ、早くさへ耳に推付ければ、音でも聲でも聞へると仰せられますので…………。」
淀無く語出づる靜緒の顏を見入りつゝ貴婦人は笑ましげに聽居たり。
「私は急いで推付けましたのでございます。」
「まあ！」
「何有、ちつとも聞えは致しませんのでございますから、然やう申上げますと、推付けやうが惡いと仰せられまして、御自身に遊ばして御覽な

さるのでございますよ。何遍致して見ましたか知れませんのでございますけれど、何も聞えは致しませんので。然やう致しまするると、お前では可かんと仰せられまして、御供を致して居りました御家來から、御親類方も御在で被居いましたが、皆爲つて御覧遊ばされました。」

貴婦人は怺へかねて失笑せり。

「あら、本當なのでございますよ。それで、未だ推付けやうが惡い、もつと早く〳〵と仰せられるものでございますから、御殿に居ります速水と申す者は餘り急ぎましたので、耳の此處を酷く打ちまして、血を出したのでございます。」

彼の歡べるを見るより靜緒は椅子を持來りて薦めし後、さて語り續くるやう。

「それで誰にも聞えないのでございます。然やう致しまするると、殿様は御自身に遊ばして御覧で、なるほど聞えない。奈何したのか知らんなん

て、それは、もう實にお眞面目なお顔で、故と御考へあそばして、佛蘭西に居た時には能く聞えたのだが、日本は氣候が違ふから、空氣の具合が眼鏡の度に合はない、それで聞えないのだらうと仰せられましたのを、皆本當に致して、一年ばかり釣られて居りましたのでございます。」

其の名器を手にし、其の耳にせし人を前にせる貴婦人の興を覺ゆることは、殿の惡作劇を親く睹たらんにも劣らざりき。

「殿樣はお面白い方で被在いますから、隨分那樣事を遊ばしませうね。」

「それでも此の二三年はどうも御氣分がお勝れ遊ばしませんので、お險しいお顏を爲て被在るのでございます。」

書齋に掛けたる半身の畫像こそ其の病根なるべきを知れる貴婦人は、卒に空目遣して物の思はしげに、例の底寂しう打濕りて見えぬ。

良有りて彼は徐に立ち上りけるが、這回は更に遠きを眺めんとて双眼鏡を取り直してけり。彼方此方に差向くる筒の當所も無かりければ、偶ま

唐棣葉のいと近きが鏡面に入り來て一面に蔓りぬ。粒々の實も珍しく、何の木かと其儘子細に視たりしに、葉陰を透きて人顏の見ゆるを、心とも無く眺めけるに、自から得忘れぬ面影に肖たる所あり。

貴婦人は差し向けたる手を緊と据ゑて、目を拭ふ間も忙しく、なほ心を留めて望みけるに、枝葉の遮りて左右に思ふまゝならず。漸く其の顏の明に見ゆる隙を求めけるが、別に相對へる人ありて、髮は黑けれども眞額の瑩々禿げたるは、先に挨拶に出でし家扶の畔柳にて、今一人なる其人こそ、眉濃く、外眦の昂れる三十前後の男なりけれ。得忘れぬ面影に肖たりとは未や、得忘れぬ其の面影なりと、ゆくりなくも認めたる貴婦人の鏡持てる手は兢々と打顫ひぬ。

行く水に數書くよりも儚き戀しさと可懷さとの朝夕に、なほ夜晝の別も無く、絕えぬ思は其の外ならざりし四年の久しきを、熱海の月は朧なりしかど、一期の淚に宿りし面影は、なか／＼消えもやらで身に添ふ幻を

形見にして、又何日は必ずと念懸けつゝ、雨にも風にも君が無事を祈りて、心は毫も昔に渝らねど、君が恨を重ぬる宮は此に在り。思ひに思ふのみにて別れて後の事は知らず、如何なる勞をや然までは積みけん、齡よりは面瘁して、異しうも物々しき分別顏に老いにけるよ。幸薄く暮さるゝか、着たるものゝ見好げにもあらで、なほ書生なるべき姿なるは、何にか身を寄せらるゝならんなど、思は置所無く湧出でゝ、胸も裂けぬべく覺ゆる時、男の何語りてや打笑む顏の鮮に映れば、貴婦人の目よりは涙すゞろに玉の糸の如く流れぬ。今は堪へ難くて聲も立ちぬべきに、始めて人目あるを曉りて失したりと思ひたれど、所爲無くハンカチイフを緊しく目に掩てたり。靜緒の驚駭は謂ふばかり無く、

「あれ、如何が遊ばしました。」

「いえ、何有、私は腦が不良ものですから、餘り物を瞶めて居ると、奈何かすると眩暈がして涙の出ることがあるので。」

「お腰をお掛け遊ばしまし、少しお頭をお摩り申上げませう。」
「いえ、恁して居ると、今に直に癒ります。憚りですがお冷を一つ下さいましな。」
靜緒は墓地に行かんとす。
「あの、貴方、誰にも有仰らずにね、心配することは無いのですから、本當に有仰らずに、唯私が嗽をすると言つて、持つて來て下さいましよ。」
「はい、畏りました。」
彼の階子を下り行くと齊しく貴婦人は再び鏡を取りて、葉越の面影を望みしが、一目見るより漸含む涙に曇らされて、忽ち文色も分かずなりぬ。
彼は靜無く椅子に崩折れて、縱まに泣亂したり。

（四）の三

此の貴婦人こそ富山宮子にて、今日夫なる唯繼と倶に田鶴見子爵に招れて、男同士のシャンペンなど酌交す間を、請うて庭内を遊覽せんとて出てしにぞありける。

子爵と富山との交際は近き頃よりにて、彼等の孰も日本寫眞會々員たるに因れり。自ら宮の除物になりて二人の興に入れるは、想ふに其の物語なるべし。富山は此の殿と親友たらんことを切望して、只管其の想を獲んと力めけるより、子爵も好みて交るべき人とも思はざれど、勢ひ疎じ難くて、今は會員中善く識れるものゝ最たるなり。爾來富山は益す傾慕して措かす、家にツイシアンの模寫と傳へて所藏せる古畫の鑒定を乞ふを名として、曩に芝西久保なる居宅に請じて疎ならず饗す事ありければ、其の返とて今日は夫婦を招待せるなり。

會員等は富山が頻に子爵に取入るを見て、皆其の心を測りかねて、大方は彼爲にする所あらんなど言ひて陋み合へりけれど、其の實敢て爲にせんとにもあらざるべし。彼は常に其の友を擇べり。富山が交る所は、其の地位に於て、其の名聲に於て、其の家柄に於て、或は其の資產に於て、孰の一つか取るべき者ならざれば決して取らざりき。然れば彼の友とする所は、其等の一つを以て優に彼以上に價する人士にあらざるは無し。實に彼は美しき友を有てるなり。然りとて彼は未だ曾て其の友を利用せし事などあらざれば、こたびも强に有福なる華族を利用せんとにはあらて、友として美しき人なれば、愨く勉めて交は求むるならん。故に彼は其の名簿の中に一箇の憂を同うすべき友をだに見出さゞるを知れり。抑も友とは樂を共にせんが爲の友にして、若し憂を同うせんとには、別に金錢ありて、人の助を用ゐず、又決して用ゐるに足らずと信じたり。彼の美しき友を擇ぶは固より此の理に外ならず。寔に彼の擇べる友は皆美

しけれども、盡く是酒肉の兄弟たるのみ。知らず、彼は是を以て其の友に滿足すとも、仍之を其の妻に於けるも然りと爲すの勇ある乎。彼が最愛の妻は、其の一人を守るべき夫の目を眛めて、陋みても猶餘ある高利貸の手代に片思の涙を灑ぐにあらずや。

宮は傍に人無しと思へば、限知られぬ涙に搔昏れて、熱海の濱に打俯したりし悲歎の足らざるを此に續がんとすなるべし。階下より仄に足音の響きければ、やう〳〵泣顏隱して、故と頭を支へつゝ室の中央なる卓子の周圍を步み居たり。旋て靜緖の持來りし水に漱ぎ、懷中藥など服して後、心地復りぬとて又窓に倚りて外方を眺めたりしが、

「ちよいと、那處に、それ、男の方の話をしてお在の所も御殿の續きなのですか。」

「何方でございます。へ、へい、那は父の詰所で、誰か客と見えまする。」

「お宅は？　御近所なのですか。」

「はい、お邸内でございます。是から直に見えまする、あの、倉の左手に高い樅の木がございませう、あの陰に見えます二階家が宅なのでございます。」
「おや、然うで。それでは此の下から直とお宅の方へ行かれますのね。」
「然やうでございます。お邸の裏門の側でございます。」
「あゝ然うですか。では些とお庭の方からお邸内を見せて下さいましな。」
「お邸内と申しても裏門の方は誠に穢うございまして、御覧あそばすやうな所はございませんです。」
宮は此を去らんとして又葉越の面影を窺へり。
「付かない事をお聞き申すやうですが、那處にお父様のお話をして被在るのは何地の方ですか。」
彼の親達は常に出入せる鰐淵の高利貸なるを明さゞれば、静緒は教へられし通りを告るなり。

「他は番町の方の鰐淵と申す、地面や家作などの賣買を致して居ります者の手代で、間とか申しました。」

「はあ、それでは違ふか知らん。」

宮は聞えよがしに獨語ちて、其の違へるを訝るやうに擬しつゝ又其方を打目戍れり。

「番町は何の邊で？」

「五番町だとか申しました。」

「お宅へは始終見えるのでございますか。」

「はい、折々參りますでございます。」

此の物語に因りて宮は彼の五番町なる鰐淵といふに身を寄するを知り得たれば、此上は如何にとも逢ふべき便はあらんと、獲難き寶を獲たるにも勝れる心地せるなり。然れども此後相見んことは何日をも計られざるに、願うては神の力も及ぶまじき今日の奇遇を仇に、餘所ながら見て別

れんは本意無からずや。設し彼の眼に睨まれんとも、互の面を合せて、言は交さずとも切ては相見て相知らばやと、四年を戀に饑ゑたる彼の心は熬るゝ如く動きぬ。

有繋に彼の氣遣へるは、事の危きに過ぎたるなり。附添さへある賓の身にして、賤きものに遇はるゝ手代風情と、而も其の邸内の徑に相見て、萬一不慮の事などあらば、我等夫婦は抑や幾許の恥辱を受くるならん。人にも知られず、我身一つの恥辱ならんには、此の面に唾吐るゝも厭はじの覺悟なれど、奇遇は棄つるに惜き奇遇ながら、逢瀬は今日の一日に限らぬものを、事の破を目に見て愚に躁るべきや。ゆめ〳〵今日は逢ふべき機ならず、辛くとも思止まんと胸は据ゑつゝも、彼は靜緒を賺して、邸内を一周せんと、西洋館の後より通用門の側に出てゝ、外塀際なる礫道を行けば、靜緒は斜に見ゆる父が詰所の軒端を指して、

「那處が唯今の客の參つて居ります所でございます。」

寳に唐楪葉は高く立ちて、折しも一羽の小鳥來鳴けり。宮が胸は異しう衝と塞りぬ。

樓を下りて此に來たるは僅少の間なれば、得も彼の人は未だ歸らざるべし、若し此に出で來らば如何にすべきなど、有繫に可恐きやうにも覺えて、歩は運べど地を蹈める心地も無く、靜緒の語るも耳には入らで、さて行くほどに裏門の傍に到りぬ。

遊覽せんとありしには似で、貴婦人の目を擧れども何處を眺むるにもあらず、俯き勝に物思はしき風情なるを、靜緒は怪しくも氣遣しくて、

「まだ御氣分がお惡う被在いますか。」

「いゝえ、もう大概良いのですけれど、未だ何だか胸が少し惡いので。」

「それはお宜うございません。ではお座敷へお歸りあそばしました方がお宜うございませう。」

「家の中よりは戸外の方が未だ可いので、もう些と歩いてゐる中には復

りますよ。あゝ、此方がお宅ですか。」
「はい、誠に見苦しい居所でございます。」
「まあ、奇麗な！　木槿が盛ですこと。白ばかりも淡泊して好いぢやありませんか。」
畔柳の住居を限として、それより前は道あれども、賓の足を容るべくもあらず、納屋、物干場、井戸端などの透きて見ゆる疎垣の此方に、樫の實の夥しく零れて、片側に下水を流せる細路を鷄の遊び、狗の睡れるなど見るも悒さに、靜緒は急ぎ返さんとせるなり。貴婦人もはや返さんとすると與に恐懼は忽ち其の心を襲へり。
此の一筋道を行くなれば、設し彼の人の出來るに會はゞ、遁れんやうはあらで明々地に面を合すべし。然るは望まざるにもあらねど、靜緒の見る目あるを如何にせん。假令此方にては知らぬ顏してあるべきも、爭で彼の人の見付けて驚かざらん。固より恨を負へる我が身なれば、言など

懸けらるべしとは想はねど、さりとてなか〳〵道行く人のやうには見過されざるべし。此に宮を見たる其の驚駭は如何ならん、仇に遇へる其の憤懣は如何ならん。必ず彼の人の凄じう激せるを見ば、靜緒は幾許我を怪むらん。恁く思ひ浮ぶると齊しく身内は熱して冷き汗を出し、足は地に吸るゝかとばかり竦みて、宮は之を想ふにだに堪へざるなりけり。脇道もあらば避けんと、靜緒に問へば有らずと言ふ。知りつゝも此の死地に陷りたるを悔いて、遣る方も無く惑へる宮が面色の穩からぬを見尤めて、靜緒は竊に目を側めたり。彼はいとゞ其の目を懼るゝなるべし。今は心も漫に足を疾むれば、土藏の角も間近になりて、其處をだに無事に過ぎなば、と切に急がるゝ折しも、人の影は突として其の角より顯れつ。宮は眩きぬ。

之より歸りて左も右もお峯が前は好きやうに言諷へ、さて篤と實否を糺せし上にて私に爲んやうも有らんなど貫一は思案しつゝ、黑の中折帽を

稍ゝ目深に引側め、通學に馴されし疾足を驅りて、塗籠の角より斜に桐の並木の間を出でゝ、礫道の端を歩み來れり。

四邊に往來のあるにあらねば、二人の姿は忽ち彼の目に入りぬ。一人は畔柳の娘なりとは疾く知られけれど、顏打背けたる貴婦人の眩く着飾りたるは、子爵家の客なるべしと纔に察せらるゝのみ。互に歩み寄りて一間ばかりに近けば、貫一は靜緒に向ひて慇懃に禮するを、宮は傍に能ふ限は身を窄めて、密に流眄を凝したり。其の面の色は慘として夕顏の花に宵月の映へる如く、其の冷なるべきも幾と相似たりと見えぬ。脚は打顫ひ〳〵、胸は今にも裂けぬべく轟くを、覺られじとすれば猶打顫ひ、猶轟きて、貫一が面影の目に沁むばかり見ゆる外は、生きたりとも死にたりとも自ら分かぬ心地志てき。

貫一は帽を打着て行過ぎんとする際に、ふと目鞘の走りて、館の賓なる貴婦人を一瞥せり。端無くも相互の面は合へり。宮なるよ！　姦婦なる

よ！　銅臭の肉蒲團なるよ！　と且は驚き、且は憤り、はたと睨めて動かざる眼には見る〳〵涙を湛へて、唯一攫にもせまほしく肉の躍るを推怺へつゝ、竊に齒咬をなしたり。可懷さと可恥さとを取集めたる宮が胸の内は何に喩へんやうも無く、あはれ、人目だにあらずば抱付きても思ふまゝに苛まれんをと、心のみは憧れながら身を如何とも爲難ければ、せめて此の誠は通ぜよかしと、見る目に思を籠むるより外はあらず。

貫一は衝と踏出して始の如く足疾に過行けり。宮は附人に面を背けて、唇を咬みつゝ歩めり。驚きに驚かされし靜緒は何事とも辨へねど、推すべきほどには推して、事の秘密なるを思へば、賓の顔色の然しも常ならず變りて可惱しげなるを、問出でんも可や否やを料りかねて、唯可愼しう引添ひて行くのみなりしが、漸く庭口に來にける時、

「大相お顔色がお惡くて被在いますが、お座敷へお出あそばして、お休み遊ばしましては如何でございます。」

「那樣に顏色が惡うございますか。」
「はい、眞蒼で被在います。」
「あゝ然ですか、困りましたね。それでは彼方へ參つて、又皆さんに御心配を懸けると可けませんから、お庭を一周まして、其内には氣分が復りますから、而してお座敷へ參りませう。然し、今日は大變貴方のお世話になりまして、お蔭樣で私も…………。」
「あれ、取でもない事を有仰います。」
貴婦人は其の無名指より纎眼兒の押競を片截にせる黄金の指環を拔取りて、懷紙に包みたるを、
「失禮ですが、是はお禮の證に。」
靜緒は驚き怖れたるなり。
「はい、……………恁云ふ物を…………。」
「可うございますから取つて置いて下さい。其代り誰にもお見せなさら

ないやうに、阿父様にも阿母様にも、誰にも有仰らないやうに、ねえ。」受けじと為るを手籠に取せて、互に何も知らぬ顔して、木の間傳ひに泉水の俺朶橋近く寄る時、書院の静なるに夫の高笑するが聞えぬ。

宮は此の散歩の間に勉めて氣を平げ、色を斂めて、左も右も人目を遁れんと計れるなり。然れども這は酒を竊みて酔はざらんと欲するに同じかるべし。

彼は先に遭ひし事の胸に鏤られたらんやうに忘るゝ能はざるさへあるに、なか〳〵朽ちも果てざりし戀の更に萌出でゝ、募りに募らんとする心の亂は、堪ふるに難き痛苦を齎して、一歩は一歩より胸の逼ること急に、身内の血は盡く其の心頭に注ぎて餘さず煎らるゝかと覺ゆるばかりなるに、候る折は打寛ぎて意任せの我が家に獨り居たらんぞ可き。人に接して強ひて語り、強ひて笑ひ、強ひて樂まんなど、あな可煩しと、例の劇しく唇を咬みて止まず。

築山陰の野路を寫せる徑を行けば、踏處無く地を這ふ葛の亂れ生ひて、草藤、金線草、紫茉莉の色々、茅萱、穗薄の露滋く、泉水の末を引きて潺々水を卑きに落せる汀なる胡麻竹の一叢茂れるに隱顯して、苔蒸す石組の小高きに四阿の立てるを、やうやう辿り着きて貴婦人は艱しげに憩へり。

彼は靜緖の柱際に立ちて控ふるを、

「貴方もお草臥でせう、那へお掛けなさいな。未だ私の顏色は惡うございますか。」

其の色の前にも劣らず蒼白めたるのみならで、下唇の何に傷きてや、少しく血の流れたるに、彼は太く驚きて、

「あれ、お唇から血が出て居ります。如何あそばしました。」

ハンカチイフもて抑へければ、絹の白きに柘榴の花瓣の如く附きたるに、貴婦人は懷鏡取出して、咬むことの過ぎし故ぞと知りぬ。實に顏の色は

躬も凄しと見るまでに變れるを、庭の内をば幾周して我は此の色を隱さんと爲らん、と彼は心陰に己を嘲るなりき。忽ち女の聲して築山の彼方より、

「靜緒さん、靜緒さん！」

彼は走り行き、手を鳴して應へけるが、旋て木隱に語ふ氣勢して、返り來ると齊しく賓の前に會釋して、

「先程からお座敷ではお待兼で被在いますさうで御座いますから、直に彼方へお出あそばしますやうに。」

「おや、然でしたか。隨分先から長い間道草を食べましたから。」

道を轉じて靜緒は雲帶橋の在る方へ導けり。橋に出づれば正面に書院を望むべく、はや所狹きまで盃盤を陳ねたるも見えて、夫は席に着き居たり。

此方の姿を見るより子爵は椽先に出でゝ麾きつゝ、

「そこをお渡りになつて、此方に燈籠がございませう、那の傍へ些とお出て下さいませんか。一枚像して戴きたい。」

寫眞機は既に好き處に据ゑられたるなり。子爵は庭に下立ちて、早くもカメラの覆を引被ぎ、彼此位置を取りなどして、

「さあ、光線の具合が妙だ！」

いてや、事の樣を見んとて、慢々と出來れるは富山唯繼なり。片手には葉卷の半燻りしを撮み、片臂を五紋の單羽織の袖の內に張りて、鼻の下の延びて見ゆるやうの笑を浮べつゝ、

「あゝ、おまへ其處に居らんければ可かんよ、何爲歩いて來るのかね。」

子爵の慌てたる顏は此時毛繻子の覆の內より衝と顯れたり。

「可けない！　那處に居て下さらなければ可けませんな。何、御免を蒙る？――可けない！　お手間は取せませんから、どうぞ。」

「いや、貴方は巧い言をお覺えですな。お手間は取せませんは餘程好い。」

「此の位に言つて願はんとね、近頃は寫してもらふ人よりは寫したがる者の方が多いですからね。さあ、奧さん、まあ、彼方へ。靜緒、お前奧さんを那處へお連れ申して。」

唯繼は目もて示して、

「お前、早く行かんけりや可かんよ、折角恪して御支度をなすつて下すつたのに、是非願ひな。えゝ。那の燈籠の傍へ立つのだ。此の機械は非常に結構なのだから是非願ひな。何も羞含むことは無いぢやないか、何、羞含む譯ぢやない？　然とも、羞含むことは無いとも、始終內で遣つて居るのに、那で可いのさ。姿勢は私が見て遣るから早くおいで。燈籠へ倚掛つて頰杖でも拄いて、空を眺めて居る狀なども可いよ。ねえ、如何てせう。」

「結構、結構。」と子爵は頷けり。

心は進まねど强ひて否むべくもあらねば、宮は行きて指定の位置に立て

るを、唯継は望み見て、

「然う棒立ちになつて居つちや可かんぢやないか。何ぞ持つて居る方が可いか知らんて。」

恁く呟きつゝ庭下駄を引掛け、急ぎ行きて、其の想へるやうに燈籠に倚しめ、頬杖を拄しめ、空を眺めよと教へて、袂の皺めるを展べ、裾の縺を引直し、さて好しと、少しく退きて姿勢を見ると與に、彼は其の面の可悩げに太くも色を變へたるを發見して、直に寄り來つ。

「奈何したのだい、おまへ、其の顔色は？　何處か不快のか、えゝ。非常な血色だよ、奈何した。」

「少しばかり頭痛がいたすので。」

「頭痛？　それぢや恁して立つて居るのは苦しいだらう。」

「いゝえ、其程ではないので。」

「苦しいやうなら我慢をせんとも、私が譯を言つてお謝絶をするから。」

「いゝえ、宜うございますよ。」
「可いかい、本當に可いかね。我慢をせんとも可いから。」
「宜うございますよ。」
「然うか。然し非常に可厭な色だ。」
彼は眷々として去る能はざるなり。待ちかねたる子爵は呼べり。
「如何ですか。」
唯繼は慌忙しく身を開きて、
「一つ是で御覧下さい。」
鏡面に照して二三の改むべきを注意せし後、子爵は種板を挿入るれば、唯繼は心得て其の邇を避けたり。
空を眺むる宮が目の中には焚ゆらんやうに一種の表情力充滿ちて、物憂さの支へかねたる姿も故とならず。色ある衣は唐松の翠の下蔭に章を成して、秋高き清遠の空は其の後に舗き、四脚の雪見燈籠を小楯に裾の邊

は寒咲躑躅の茂に隠れて、近きに二羽の鵞の汀に歩るなど、寧ろ書にこそ寫さまほしきを、子爵は心に喜びつゝ寫眞機の前に進み出て、今や鏡面を開かんと構ふる時、貴婦人の頰杖は忽ち頽れて、其身は燈籠の笠の上に折重なりて岸破と伏しぬ。

第五章

遊佐良橘は郷里に在りし日も、出京の遊學中も、頗る謹直を以て聞えしに、却りて日本周航會社に出勤せる今日、三百圓の高利の爲に艱さるゝと知れる彼の友は皆驚けるなり。或ものは結婚費なるべしと言ひ、或ものは外を張らざるべからざる爲の遣繰なるべしと言ひ、或ものは隱遊の風流債ならんと說くもありて、此の不思議の負債と其の美しき妻とは、遊佐に過ぎたる物が二つに數へらるゝなりき。然れども箇は謂ふべからざる事情の下に連帶の印を假せしが、形の如く腐れ込みて、義理の餘毒の苦を受けると知りて、彼の不幸を悲むものは、交際官試補なる法學士蒲田鐵彌と、同會社の貨物課なる法學士風早庫之助とあるのみ。

凡そ高利の術たるや、渇者に水を賣るなり。渇の甚しく堪へ難き者に至りては、決して其の肉を割きて之を換ふるを辭せざるべし。此の急に乘

じて之を賣る、一杯の水も其の値玉漿を盛るに異る無し。故に前後不覺に渇する者能く之を買ふべし、其の渇の癒るに及びては、玉漿なりとして喜び吃せしものは、素と下水の上澄に過ぎざるを悟りて、痛恨、痛悔すと雖も、彼は約の如く下水の倍量をば、其の鮮血に搾り其の活肉に割きて以て返さゞるべからず。噫、世間の最も不敵なる者高利を貸して、之を借るは更に最も不敵なる者と爲さゞらんや。是を以て、高利は借るべき人之を借りて始めて用ゐるべし、然らずば之を借るの覺悟あるべきを要す。是風早法學士の高利貸に對する意見の概要なり。遊佐は實に此の人にあらず、又此の覺悟とても有らざるを、奇禍に罹れる哉と、彼は人の爲ながら常に此の憂を解く能はざりき。

近きに鄕友會の秋季大會あらんとて、今日委員會のありし歸さを彼等は三人打連れて、遊佐が家に向へるなり。

「別に御馳走と云つては無いけれど、松茸の極新しいのと、製造元から

貰つた黑麥酒が有るからね、鷄でも買つて、寛り話さうぢやないか。」

遊佐が弄れる半月形の熏豚の鑵詰も、此の設にとて途に求めしなり。

蒲「それは結構だ。然う泊が知れて見ると急ぐにも當らんから、どうだね、一ケエム、君は此頃風早と對に成つたさうだが、長足の進歩ぢやないか。然し、どうも其の長足の**ちやうはてう**（貂）足らず、續ぐにフロックを以つて爲るのぢやないかい。此頃は全然フロックが止つた？　はゝはゝは、それはお目出度いやうな御愁傷のやうな妙な次第だね。然し、フロックが止つたのは明に一段の進境を示すものだ。まあ、それで大分話せるやうになりました。」

風早は例の皺嗄聲して大笑を發せり。

風「更に一段の進境を示すには、堅杖をまて二寸三分クロオスを裂かなければ可けません。」

蒲「三たび臂を折つて良醫となるさ。那から僕は堅杖の極意を悟つたのだ。」

風「へゝへ、此頃の僕の後曳の手際も知らんで」
之を聞きて、こたびは遊佐が笑へり。
遊「君の後曳も口ほどではないよ。此間那處の主翁が然う言つて居た、風早さんが後曳を三度なさると、新しいチョオクが半分失る…………。」
蒲「穿得て妙だ。」
風「チョオクの多少は業の巧拙には關せんよ。遊佐が無闇に杖を取易へるのだつて、決して見とも好くはない。」
蒲田は手もて遽に制しつ。
「もう、それで可い。他の非を擧げるやうな者に業の出來た例が無い。悲い哉君達の球も蒲田に八十で廢止だね。」
風「八十の事があるものか。」
遊「それでは幾箇で來るのだ。」
「八十五よ。」

「五とは情無い！　心の程も知られける哉だ。」
「何でも可いから一ゲエム行かう。」
「行かうとは何だ！　願ひますと言ふものだ。」
語も訖らざるに彼は傍腹に不意の肱突を吃ひぬ。
「あ、痛！　然う強く撞くから毎々球が滾げ出すのだ。風早の球は暴いから癇癪玉と謂ふのだし、遊佐のは馬鹿に柔いから蒟蒻玉。それで、二人の撞く所は雷公と蚊帳が掴擇して居るやうなものだ。」
風「えゝ、自分が何ほど撞けるのだ。」
蒲「然う、多度も行りんが、天狗の風早に二十遣るのさ。」
二人は劣らじと諍ひし末、直に一番の勝負をいざ〳〵と手薬煉引きかくるを、遊佐は引分けて、
「それは飲んでからに爲やう。夜が長いから後で寛り出來るさ。歸つて風呂にても入つて、それから徐々始めやうよ。」

往來繁き町を湯屋の角より入れば、道幅其の二分の一許なる横町の物賣る店も雜りながら閑靜に、家並整へる中程に店藏の質店と軒ラムプの並びて、格子木戶の內を庭がゝりにしたる門に楪葉の立てるぞ遊佐が居住なる。

彼は二人を導きて內格子を開きける時、彼の美しき妻は出で來りて、伴へる客あるを見て稍ゝ打惑へる氣色なりしが、遽に笑を含みて常の如く迎へたり。

「さあ、どうぞお二階へ。」

「座敷は？」　と夫に尤められて、彼は逾よ困じたるなり。

「唯今些と塞つてをりますから。」

「ぢや、君、二階へどうぞ。」

勝手を知れる客なれば從々と長四疊を通りて行く跡に、妻は小聲になりて。

「鰐淵から參つて居りますよ。」

「來たか！」

「是非お目に懸りたいと言つて、何と言つても歸りませんから、座敷へ上げて置きました。些とお會ひなすつて、早く還してお了ひなさいましな。」

「松茸は奈何した。」

妻は此の暢氣なる問に驚かされぬ。

「貴方、まあ松茸なんぞよりは早く…………。」

「待てよ。それから此間の黒麥酒な…………。」

「麥酒も松茸もございますから早く他を還してお了ひなさいましよ。私は那奴が居ると思ふと不快な心持で。」

遊佐も差當りて當惑の眉を顰めつ。二階にては例の球戲の爭なるべし、然も氣樂に高笑するを妻はいと心憎く。

少間ありて遊佐は二階に昇り來れり。

蒲「浴に一つ行かうよ。手拭を貸してくれ給へな。」

遊「ま、待ち給へ、今一處に行くから。時に弱つて了つた。」

實に言ふが如く彼は心穩かならず見ゆるなり。

風「まあ、坐りたまへ。奈何したのかい。」

遊「坐つても居られんのだ、下に高利貸が來て居るのだよ。」

蒲「那物が來たのか。」

遊「先から座敷で歸來を待つて居つたのだ。困つたね！」

彼は立ちながら頭を抑へて緩く柱に倚れり。

蒲「何とか言つて逐返して了ひ給へ。」

遊「なか〳〵逐返らんのだよ。陰忍した皮肉な奴でね、那奴に捉つたら耐らん。」

蒲「二三圓も叩き付けて遣るさ。」

遊「もう其も度々なのでね、他は書替を爲せやうと掛つて居るのだから、延期料を握つたのぢや今日は歸らん。」

風早は聽居るだに心苦しくて、

「蒲田、君一つ談判してやり給へ、えゝ、何とか君の辯を奮つて。」

「是は外の談判と違つて唯金錢づくなのだから、素手で飛込むのぢや辯の奮ひやうが無いよ。それで、忽諸すると飛んで火に入る夏の虫となるのだから、まあ君が行つて何とか話をして見たまへ。僕は樣子を立聞して、臨機應變の助太刀を爲るから。」

いと難しと思ひながらも、恁ては果てじと、遊佐は氣を取直して下り行くなりけり。

風「氣の毒な、萎れて居る。彼の事だから心配して居るのだ。君、何とかして拯つて遣り給へな。」

蒲「一つ行つて樣子を見て來やう。何有、那樣に心配するほどの事は無い

のだよ。遊佐は氣が小いから可かない。那云ふ風だから益す脚下を見られて好い事を爲れるのだ。高が金錢の貸借だ、命に別條は有りはしないさ。」

「命に別條は無くても、名譽に別條が有るから、紳士たるものは懼れるだらうぢやないか。」

「ところが懼れない！　紳士たるものが高利を貸したら名譽に關らうけれど、高い利を拂つて借りるのだから、安利や無利息なんぞを借りるから見れば、負に以つて榮とするに足れりさ。紳士たりと雖も金錢に窮らんと云ふ限は無い、窮つたから借りるのだ。借りて返さんと言ひは爲まいし、名譽に於て傷く所は少しも無い。」

「恐入りました、高利を借りやうと云ふ紳士の心掛は又別の物ですな。」

「て、假に一歩を讓るさ、讓つて、高利を借りるなどは、紳士たるものの慚づべき行と爲るよ。然ほど慚づべきならば始から借りんが可いぢや

ないか。既に借りた以上は仕方が無い、未だ借りざる先の慚づべき心を以つて之に對せんとするも能はざるなりだらう。宋の時代であつたかね、何か亂が興つた。すると上奏に及んだものがある、是は師を動かさるゝまでもない、一人の將を河上へ遣して、賊の方に向つて孝經を讀せられた事ならば、賊は自から消滅せん、は好いぢやないか。之を笑ふけれど、遊佐の如きは眞面目で孝經を讀んで居るのだよ、既に借りてさ、天引四割と吃つて一月隔に血を吮れる。那樣無法な目に遭ひながら、未だ借りざる先の紳士たる德義や、良心を持つて居て耐るものか。孝經が解るくらゐなら高利は貸しません、彼等は錢勘定の出來る毛族さ。」

得意の快辯流るゝ如く、彼は息をも繼せず說來りぬ。

「濡れぬ内こそ露をもだ。遊佐も借りんのなら可いさ、既に借りて、無法な目に遭ひながら、仍未だ借りざる先の良心を持つてゐるのは大きな愆だ。それは勿論借りた後と雖も良心を持たなければならんけれど、借

りざる先の良心と、借りたる後の良心とは、一物にして一物ならずだよ。武士の魂と商人根性とは元是一物なのだ。それが境遇に應じた魂ともなれば根性ともなるのさ。で、商人根性と雖も決して不義不德を容さんことは、武士の魂と敢て異る所は無い。武士にあつては武士魂なるものが、商人にあつては商人根性なのだもの。そこで、紳士も高利などを借りん内は武士の魂よ、既に對高利となつたら、商人根性にならんければ身が立たない。究竟は敵に應ずる手段なのだ。」

「それは固より御同感さ。けれども、紳士が高利を借りて、榮と爲るに足れりと謂ふに至つては…………。」

蒲田は恐縮せる狀を作して、

「それは少し白馬は馬に非ずだつたよ。」

「時に、もう下へ行つて見て遣り給へ。」

「どれ、一匕深く探る蛟鰐の淵と出掛けやうか。」

「空拳を奈んだらう。」

一笑して蒲田は二階を下りけり。風早は獨り臥つ起きつ安否の氣遣れて、苦しき無聊に堪へざる折から、主の妻は漸く茶を持ち來りぬ。

「どうも甚だ失禮を致しました。」

「蒲田は座敷へ參りましたか。」

彼は其の美しき顏を少しく赧めて、

「はい、あの居間へお出で、紙門越に樣子を聽いて被在います。どうも這麼處を皆樣のお目に掛けまして、實にお可恥くてなりません。」

「何有、他人ぢやなし、皆樣子を知つて居る者ばかりですから構ふ事はありません。」

「私はもう彼奴が參りますと、惣毛竪つて頭痛が致すのでございます。那麼强慾な事を致すものは全く人相が別でございます。それは可厭に陰氣な靱々した、底意地の惡さうな、本當に探偵小說にでも在りさうな奴

てございますよ。」
急足に階子を鳴して昇り來りし蒲田は、
「おい〳〵風早、不思議、不思議。」
と上端に坐れる妻の背後を過るとて絶か其足を蹈付けたり。
「これは失禮を。お痛うございましたらう。どうも失禮を。」
骨身に沁みて痛かりけるを妻は赤くなりて推怺へつゝ、然り氣無く挨拶せるを、風早は見かねたりけん、
「不相變麁相かしいね、蒲田は。」
「どうぞ御免を。つい慌てたものだから…………。」
「何を那樣に慌てるのさ。」
「落付れる譯のものではないよ。下に來て居る高利貸と云ふのは、誰だと思ふ。」
「君のと同じ奴かい。」

「人様の居る前で君のとは怪しからんぢやないか。」
「これは失禮。」
「僕は妻君の足を蹈んゞのだが、君は僕の面を蹈んだ。」
「でも仕合と皮の厚い所で。」
「怪しからん！」
妻の足の痛は忽ち下腹に轉りて、彼は得堪へず笑ふなりけり。
風「常談どころぢやない、下では苦んで居る人があるのだ。」
蓮「其の苦しめて居る奴だ、不思議ぢやないか、間だよ、あの間貫一だよ。」
敵寄すると聞きけんやうに風早は身構へて、
「間貫一、學校に居た?!」
「然う！ 驚いたらう。」
彼は長き鼻息を出して、空しく眼を瞪りしが、
「本當かい。」

「まあ、見て來たまへ。」
別して呆れたるは主の妻なり。彼は鈍ましからず胸の跳るを覺えぬ。同じ思は二人が面にも顯るゝを見るべし。
「下に參つて居るのは御朋友なのでございますか。」
蒲田は忙しげに頷きて、
「然です。我々と高等中學の同級に居つた男なのですよ。」
「まあ！」
「夙て學校を罷めてから高利貸を遣つて居ると云ふ話は聞いて居ましたけれど、極温和い男で、高利貸などの出來る氣ぢやないのですから、那樣事は虛だらうと誰も想つて居つたのです。ところが、下に來て居るのが其の間貫一ですから驚くぢやありませんか。」
「まあ！　高等中學にも居た人が何だつて高利貸などに成つたのでございませう。」

「さあ、因で誰も虚と想ふのです。」
「本に然でございますね。」
少しき前に起ちて行きし風早は疑を霽して歸り來れり。
「奈何だ、奈何だ。」
「驚いたね、確に間貫一！」
「アルフレッド大王の面影があるだらう。」
「エッセクスを逐拂はれた時の面影だ。然し彼奴が高利貸を遣らうとは想はなかつたが、奈何したのだらう。」
「さあ、那で因業な事が出來るだらうか。」
「因業どころではございませんよ。」
主の妻は其の美しき顔を皺めたるなり。
蒲「隨分酷うございますか。」
妻「酷うございますわ。」

こたびは泣顔せるなり。風早は決する所有るが如くに餘せし茶をば遽に取りて飲干し、

「然し間であるのが幸だ、押掛けて行つて、昔の顔で一つ談判せうぢやないか。我々が口を利くのだ、奴も然う阿漕なことは言ひもすまい。次手に何とか話を着けて、元金だけか何かに負けさして遣らうよ。那奴なら恐れることは無い。」

彼の起ちて帶締直すを蒲田は見て、

「まるで喧嘩に行くやうだ。」

「那様事を言はずに自分も些と氣凛とするが可い、帶の下へ時計の垂下つて居るなどは威嚴を損じるぢやないか。」

「うむ、成程。」　と蒲田も立上りて帶を解けば、主の妻は傍より、

「お羽織をお取りなさいましな。」

「これは憚樣です。些と身支度に婦人の心添を受ける所は堀部安兵衛と

いふ役だ。然し芝居でも、人數が多くて、支度をする方は大概取つて投げられるやうだから、お互に氣を着ける事だよ。」

「馬鹿な！　間如きに。」

「急に強くなつたから可笑い。さあ、用意は好いよ。」

「此方も可い。」

二人は膝を正して屹と差向へり。

妻「お茶を一つ差上げませう。」

蒲「どうしても敵討の門出だ。互に交す茶盃か。」

座敷には窘める遊佐と沈着きたる貫一と相對して、莨盆の火の消えんとすれど呼ばず、彼の傍に茶托の上に伏せたる茶碗は、嘗て肺病患者と知らで出せしを恐れて除物に為たりしをば、妻の取出して故と用ゐたるなり。

遊佐は憤を忍べる聲音にて、

「それは出來んよ。勿論朋友は幾多も有るけれど、書替の連帶を賴むやうな者は無いのだから。考へて見給へ、何ぼ朋友の中だと云つても外の事と違つて、借金の連帶は賴めないよ。然う無理を言つて困らせんでも可いぢやないか。」

貫一の聲は重きを曳くが如く底強く沈みたり。

「敢て困らせるの、何のと云ふ譯ではありません。利は下さらず、書替

は出來んと、それでは私の方が立ちません。何方とも今日は是非願はんければならんのでございます。連帯と云つたところで、固より貴方がお引受けなさる精神なれば、外の迷惑にはならんのですから、些の名義を借りるだけの話、それくらゐの事は朋友の誼として、何方でも承諾なさりさうなものですがな。究竟名義だけあれば宜いので、私の方では十分貴方を信用して居るのですから、決して其の連帯者に掛らうなどゝは思はんのです。此で何とか一つ廉が付きませんと、私も主人に對して言譯がありません。利を受取る譯に行かなかつたから、書替をして來たと言へば、それで一先句切が付くのでありますから、どうぞ一つ然う願ひます。」

遊佐は答ふる所を知らざるなり。

「何方でも可うございます、御親友の内で一名。」

「可かんよ、それは到底可かんのだよ。」

「到底可かんでは私の方が濟みません。然う致すと、自然御名譽に關るやうな手段も取らんければなりません。」

「奈何せうと言ふのかね。」

「無論差押です。」

遊佐は強ひて微笑を含みけれど、胸には犇と應へて、はや八分の怯氣付きたるなり。彼は悶えて捩斷るばかりに其髭を拈り〳〵て止まず。

「三百圓やそこらの端金で貴方の御名譽を傷けて、後來御出世の妨碍にもなるやうな事を爲るのは、私の方でも決して可好くはないのです。けれども、此方の請求を容れて下さらなければ已むを得んので、實は事は穩便の方が双方の利益なのですから、更に御一考を願ひます。」

「それは、まあ、品に由つたら書替も爲んではないけれど、君の要求は、元金の上に借用當時から今日迄の制規の利子が一ヶ年分と、今度拂ふべき九十圓の一月分を加へて三百九十圓かね、其に對する三月分の天引が

百十七圓強、其と合して五百圓の證書面に書替へろと云ふのだらう。又そこが連帶債務と言ふだらうけれど、一文だつて自分が費つたのでもないのに、此間九十圓といふものを取られた上に、又改めて五百圓の證書を書かされる！　餘り馬鹿々々しくて話にならん。此方の身にも成つて少しは斟酌するが可いぢやないか。一文も費ひもせんで五百圓の證書が書けると想ふかい。」

空嘯きて貫一は笑へり。

「今更那樣事を！」

遊佐は陰に切齒をなして其の横顔を睨付けたり。

彼も遁れ難き義理に迫りて連帶の印捺きしより、不測の禍は起りて憖る憂き目を見るよと、太く己に懲りてければ、此際人に連帶を頼みて、同樣の迷惑を懸くることもやと、斷じて貫一の請求を容れざりき。さりとて今一つの請求なる利子を即座に拂ふべき道もあらざれば、彼の進退は

繋に谷ると與に貫一も此場は一寸も去らじと構へたれば、遊佐は羂に係れる獲物の如く一分時毎に窮する外は無くて、今は唯身に受くべき謂無き責苦を受けて、恪までに惱まさるゝ不幸を恨み、飜りて一點の人情無き賤奴の虐待を憤る胸の内は、前後も覺えず暴れ亂れて幾と引裂けんとするなり。

「第一今日は未だ催促に來る約束ぢやないのではないか。」

「先月の廿日にお拂ひ下さるべきのを、未だにお渡が無いのですから、何日でも御催促は出來るのです。」

遊佐は拳を握りて顫ひぬ。

「然云ふ怪しからん事を！　何の爲に延期料を取つた。」

「別に延期料と云つては受取りません。期限の日に參つたのにお拂が無い、因で空しく歸る其の日當及び俥代として下すつたから戴きました。ですから、若し那に延期料と云ふ名を附けたらば、其の日の取立を延期

する料とも謂ふべきでせう。」

「貴、貴樣は！　最初十圓だけ渡さうと言つたら、十圓では受取らん、利子の內金でなしに三日間の延期料としてなら受取る、と言つて持つて行つたぢやないか。それからつい此間又十圓…………。」

「それは確に受取りました。が、今申す通り、無駄足を踏みました日當でありますから、其日が經過すれば、翌日から催促に參つても宜い譯なのです。まあ、過去つた事は措きまして…………。」

「措けんよ。過去りは爲んのだ。」

「今日は其事で上つたのではないのですから、今日の始末をお付け下さいまし。では奈何あつても書替は出來んと有仰るのですな。」

「出來ん！」

「で、金も下さらない？」

「無いから遣れん！」

貫一は目を側めて遊佐が面を熟と候へり。其の冷に鋭き眼の光は異しく彼を襲ひて、坐に熱する怒氣を忘れしめぬ。遊佐は忽ち吾に復れるやうに覺えて、身の危きに處るを省みたり。一時を快くする暴言も竟に曳れ者の小唄に過ぎざるを曉りて、手持無沙汰に鳴を鎭めつ。

「では、何頃御都合が出來るのですか。」

機を制して彼も劣らず和ぎぬ。

「さあ、十六日まで待つてくれたまへ。」

「碇と相違ございませんか。」

「十六日なら相違無い。」

「それでは十六日まで待ちますから…………。」

「延期料かい。」

「まあ、お聞きなさいまし、約束手形を一枚お書き下さい。それなら宜うございませう。」

「宜い事も無い…………。」

「不承を有仰る所は少しも有りはしません、其の代り何分か今日お遣し下さい。」

恁く言ひつゝ手鞄を開きて、約束手形の用紙を取出せり。

「錢は有りはせんよ。」

「僅少で宜いので、手數料として。」

「又手數料か！　ぢや一圓も出さう。」

「日當、俥代なども入つて居るのですから五圓ばかり。」

「五圓なんと云ふ金圓は有りはせん。」

「それぢや、どうも、」

彼は遽に躊躇して、手形用紙を惜めるやうに拈るなりけり。

「えゝ、では三圓ばかり出さう、」

折から紙門の開きけるを弗と貫一の瞠ふる目前に、二人の紳士は徐々と

入來りぬ。案内も無く懸る內證の席に立入りて、彼等の各心得顏なるは、必ず子細あるべしと思ひつゝ、彼は少しく座を動ぎて容を改めたり。紳士は上下に分れて二人が間に坐りければ、貫一は敬ひて禮を作せり。

蒲「どうも曩から見たやうだ、見たやうだと思つて居たら、間君ぢやないか。」

風「餘り樣子が變つたから別人かと思つた。久しく會ひませんな。」

貫一は愕然として二人の面を眺めたりしが、忽ち身の熱するを覺えて、其の誰なるやを憶出せるなり。

「是はお珍しい。何方かと思ひましたら、蒲田君に風早君。久しくお目に掛りませんでしたが、いつもお變無く。」

蒲「其後は奈何ですか、何か當時は變つた商賣をお始めですな——儲りませう。」

貫一は打笑みて、

「宜い事も無い…………。」

「不承を有仰る所は少しも有りはしません、其の代り何分か今日お遣し下さい。」

恁く言ひつゝ手鞄を開きて、約束手形の用紙を取出せり。

「錢は有りはせんよ。」

「僅少で宜いので、手數料として。」

「又手數料か！　ぢや一圓も出さう。」

「日當、俥代なども入つて居るのですから五圓ばかり。」

「五圓なんと云ふ金圓は有りはせん。」

「それぢや、どうも、」

彼は遽に躊躇して、手形用紙を惜めるやうに拈るなりけり。

「えゝ、では三圓ばかり出さう、」

折から紙門の開きけるを弗と貫一の瞪ふる目前に、二人の紳士は徐々と

入來りぬ。案内も無く懸る內證の席に立入りて、彼等の各心得顔なるは、必ず子細あるべしと思ひつゝ、彼は少しく座を動ぎて容を改めたり。紳士は上下に分れて二人が間に坐りければ、貫一は敬ひて禮を作せり。

蒲「どうも曩から見たやうだ、見たやうだと思つて居たら、間君ぢやないか。」

風「餘り樣子が變つたから別人かと思つた。久しく會ひませんな。」

貫一は愕然として二人の面を眺めたりしが、忽ち身の熱するを覺えて、其の誰なるやを憶出せるなり。

「是はお珍しい。何方かと思ひましたら、蒲田君に風早君。久しくお目に掛りませんでしたが、いつもお變無く。」

蒲「其後は奈何ですか、何か當時は變つた商賣をお始めですな——儲りませう。」

貫一は打笑みて、

「儲りもしませんが、間違つて這麽事になつて了ひました。」
彼の毫も愧づる色無きを見て、二人は心陰に呆れぬ。侮りし風早も恪て
は與し易からず思へるなるべし。
「儲けづくであるから何でも可いけれど、然し思切つた事を始めました
ね。君の性質で能く此の家業が出來ると思つて感服しましたよ。」
「眞人間に出來る業ぢやありませんな。」
是實に眞人間にあらざる人の言なり。二人は此の破廉耻の老面皮を憎し
と思へり。
蒲「酷いね、それぢや君は眞人間でないやうだ。」
「私のやうな者が憖ひ人間の道を守つて居つたら、迚も此世の中は渡れ
んと悟りましたから、學校を罷めると與に人間も罷めて了つて、此の商
賣を始めましたので。」
風「然し眞人間時分の朋友であつた僕等に恪して會つてゐる間だけは、依

舊眞人間で居てもらひたいね。」

風早は親しげに放笑せり。

蓮「然う〳〵、それ、那の時分浮名の聒しかつた、何とか云つたつけね、それ、君の所に居つた美人さ。」

貫一は知らざる爲してゐたり。

風「おゝ〳〵那？　さあ、何とか云つたつけ。」

蓮「ねえ、間君、何とか云つた。」

設し其の舊友の前に人間の面を赧めざる貫一も、是に到りて多少の心を動かさゞるを得ざりき。

「那樣謫らん事を。」

蓮「此頃は那の美人と一所ですか、可羨しい。」

「もう昔話は御免下さい。それでは遊佐さん、之に御印を願ひます。」

彼は矢立の筆を抽きて、手形用紙に金額を書入れんとするを、

風「あゝ些と、その手形は何云ふのですね。」
貫一の簡單に其の始末を述ぶるを聽きて、
「成程御尤。そこで少しお話が爲たい。」
蒲田は姑く助太刀の口を噤みて、皺嗄聲の如何に辨ずるかを聽かんと、吃餘の葉卷を火入に插して、威長高に腕組して控へたり。
「遊佐君の借財の件ですがね、那は奈何か特別の扱をして戴きたいのだ。君の方も營業なのだから、御迷惑は掛けませんさ、然し舊友の賴と思つて、少し勘辨をしてもらひたい。」
彼も答へず、是も少時は言はざりしが、
「奈何かね、君。」
「勘辨と申しますと？」
「究竟君の方に損の掛らん限は減けてもらひたいのだ。知つての通り、元此の借金は遊佐君が連帶であつて、實際賴れて印を貸しただけの話で

あるのが、測らず倒れて來たといふ譯なので、それは貸主の目から見れば、那樣事は奈何でも可いのだから、取立てるものは取立てる、其處は能く解つて居る、からして今更其の愚痴を言ふのぢやない。然し朋友の側から遊佐君を見ると、取んだ災難に罹つたので、如何にも氣の毒な次第。ところで、圖らずも貸主が君と云ふので、轍鮒の水を得たる想で我我が中へ入つたのは、營業者の鰐淵として話を爲るのではなくて、舊友の間として、實は無理な賴も聽いてもらひたいのさ。夙て話は聞いて居るが、那の三百圓に對しては、借主の遠林が從來三回に二百七十圓の利を拂つて在る。それから遊佐君の手で九十圓、合計三百六十圓と云ふものが既に入つて居るのでせう。して見ると、君の方には既に損は無いのだ、であるから、此の三百圓の元金だけを遊佐君の手で返せば可いといふ事にしてもらひたいのだ。」

貫一は冷笑せり。

「然すれば遊佐君は三百九十圓拂ふ譯だが、是が一文も費はずに空に出るのだから隨分辛い話、君の方は未だ〳〵利益になるのを此で見切るのだから是も辛い。因で辛さ競を爲るのだが、君の方は三百圓の物が六百六十圓になつてゐるのだから、立前にはなつてゐる、此方は三百九十圓の全損だから、此を一つ酌量してもらひたい、ねえ、特別の扱で。」

「全でお話にならない。」

秋の日は短しと謂はんやうに、貫一は手形用紙を取上げて、用捨無く約束の金額を書入れたり。一齊に彼の面を注視せし風早と蒲田との眼は、更に相合うて瞋れるを、再び彼方に差向けて、いとゞ嚴しく打目成れり。

風「どうか然云ふ事にしてくれたまへ。」

貫「それでは遊佐さん、之に御印を願ひませう。日限は十六日、宜うございますか。」

此の傍若無人の振舞に蒲田の怺へかねたる氣色なるを、風早は目授して、

「間君、まあ少し待つてくれたまへよ。恥を言はんければ解らんけれど、此の借金は遊佐君には荷が勝過ぎて居るので、利を入れるだけでも方が付かんのだから、長く之を背負つて居た日には、體も一所に沈沒して了ふばかり、實に一身の浮沈に關る大事なので、僕等も非常に心配して居るやうなもの丶、力が足らんで如何とも手の着けやうが無い。對手が君であつたのが運の盡きざる所なのだ、舊友の僕等の難を拯ふと思つて、一つ頼を聽いてくれ給へ。全然損を掛けやうと云ふのぢやないのだから、決して然う無理な頼ぢやなからうと思ふのだが、奈何かね、君。」

「私は鰐淵の手代なのですから、然云ふお話は解りかねます。遊佐さん、では、今日はまあ三圓頂戴して之に御印を、どうぞお早く。」

遊佐は其の獨に計ひかねて覺束なげに頷くのみ。言はて忍びたりし蒲田の怒は此時衝くが如く、

「待ち給へと言ふに！　先から風早が口を酸くして頼んで居るのぢやな

いか、錢貰が門に立つたのぢやない、人に對するには禮と云ふものがある、可然き挨拶を爲たまへ。」

「お話がお話だから可然き御挨拶の爲やうが無い。」

「默れ、聞！　貴樣の頭腦は錢勘定ばかりして居るので、人の言ふ事が解らんと見える。誰が其の話に可然挨拶を爲ろと言つた。友人に對する擧動が無禮だから節めと言つたのだ。高利貸なら高利貸のやうに、身の程を省みて神妙にして居れ。盜人の兄弟分のやうな不正な營業をして居ながら、傲して舊友に會つたらば赧い顏の一つも爲ることか、世界漫遊でもして來たやうな見識で、貴樣は高利を貸すのを適れ名譽と心得て居るのか。恥を恥とも思はんのみか、一枚の證文を鼻に懸けて我々を侮蔑した此の有樣を、荒尾讓介に見せて遣りたい！　貴樣のやうな畜生に生れ變つた奴を、荒尾は依樣昔の間貫一だと思つて、此間も我々と話して、貴樣の安否を苦にしてな、實の弟を殺したより、貴樣を失つた方が

悲いと言つて鬱いで居たぞ。其の一言に對しても少しは良心の眠を覺せ！　眞人間の風早庫之助と蒲田鐵彌が中に入るからは決して迷惑を掛けるやうな事は爲んから、今日は順しく歸れ、歸れ。」

「受取るものを受取らなくては歸れもしません。貴下方がそれまで遊佐さんの件に就いて御心配下さいますなら、恁う爲すつて下さいませんか、左も右も此の約束手形は遊佐さんから戴きまして、此の方の形はそれで一先附くのですから、改めて三百圓の證書をお書き下さいまし、風早君と蒲田君の連帶にして。」

蒲田は此の手段を知るの經驗あるなり、

「うん、宜い。」

「では然う爲つて下さるか。」

「うん、宜い。」

「然う致せば又お話の付けやうもあります。」

「然し氣の毒だな、無利息、十個年賦は。」
「えゝ？　常談ぢやありません。」
有繋に彼の一本參りしを、蒲田は誇りがに嘲笑しつ、
風「常談は措いて、いづれ四五日內に篤と話を付けるから、今日の所は、
久しぶりで會つた僕等の顏を立てゝ、何も言はずに歸つてくれ給へな。」
「然云ふ無理を有仰るで、私の方も然るべき御挨拶が出來なくなるので
す。既に遊佐さんも御承諾なのですから、此の手形はお貰ひ申して歸り
ます。未だ外へ廻るで急ぎますから、お話は後日寬り伺ひませう。遊佐
さん、御印を願ひますよ。貴方御承諾なすつて置きながら今になつて遲
遲なすつては困ります。」
「疫病神が戶惑したやうに手形々々と煩い奴だ。俺が始末をして遣らう
よ。」
彼は遊佐が前なる用紙を取りて、

蒲「金壹百拾七圓…………何だ、百拾七圓とは。」

遊「百十七圓？　九十圓だよ。」

蒲「金壹百拾七圓と此通り書いてある。」

恁る事は能く知りながら彼は故と怪しむなりき。

遊「そんな筈は無い。」

貫一は彼等の騒ぐを尻目に掛けて、

「九十圓が元金、之に加へた二十七圓は天引の三割、是が高利の定法です。」

音もせざれど遊佐が膽は潰れぬ。

「お……ど……ろ……いたね！」

蒲田は物をも言はず件の手形を二つに引裂き、遊佐も風早も是はと見る間に、猶も引裂き〳〵、引捩りて間が目先に投遣りたり。彼は騒げる色も無く、

「何を爲るのです。」

「始末を丟て遣つたのだ。」

「遊佐さん、それでは手形もお出し下さらんのですな。」

彼は間が非常手段を取らんとするよ、と心陰に懼を作して、

「いや然云ふ譯ぢやない…………。」

蒲田は佐と膝を前めて、

「いや、然云ふ譯だ！」

彼の鬼臉なるをいと稚しと輕しめたるやうに、間は故と色を和げて、

「手形の始末はそれで付いたか知りませんが、貴方も折角中へ入つて下さるなら、最少し男らしい扱をなさいましな。私如き畜生とは違つて、貴方は立派な法學士、」

「おゝ俺が法學士なら奈何した。」

「名實が相副はんと謂ふのです。」

「生意氣な、もう一遍言つて見ろ。」
「何遍でも言ひます。學士なら學士のやうな所業を爲さい。」
蒲田が腕は電光の如く躍りて、猶言はんとせし貫一が胸先を諸摑に無圖と捉りたり。
「間、貴様は…………。」
捩向けたる彼の面を打目戍りて、
「取つて投げてくれやうと思ふほど憎い奴でも、恁して顔を見合せると、白い二本筋の帽を冠つて、煖爐の前に膝を並べた時分の姿が目に附いて、嗚呼、順しい間を、と力抜がして了ふ。貴様これが人情だぞ。」
鷹に遭へる小鳥の如く身動も得爲で押付けられたる貫一を、風早は有繫に憫然と見遣りて、
「蒲田の言ふ通りだ。僕等も中學に居た頃の間と思つて、それは誓つて迷惑を掛けるやうな事は爲んから、君も友人の誼を思つて、二人の頼を

聽いてくれ給へ。」

「さあ、聞、奈何だ。」

「友人の誼は友人の誼、貸した金は貸した金で自から別問題…………
…………。」

彼は忽ち吭迫りて言ふを得ず、蒲田は稍く強く緊めたるなり。

「さあ、もつと言へ、言つて見ろ。言つたら貴樣の呼吸が止るぞ。」

貫一は苦しさに堪へで振釋かんと踠けども、嘉納流の覺ある蒲田が力に敵しかねて、なか〳〵其の爲すに信せたる幾分の安きを賴むのみなりけり。遊佐は驚き、風早も心ならず、

「おい蒲田、可いかい、死にはしないか。」

「餘り、暴くするなよ。」

蒲田は哄然として大笑せり。

「恁なると金力よりは腕力だな。ねえ、どうしても是は水滸傳にある圖

だらう。惟ふに、凡そ國利を護り、國權を保つには、國際公法などは實は糸瓜の皮、要は兵力よ。萬國の上には立法の君主が無ければ、國と國との曲直の爭は抑も誰の手で遺憾無く決せらるゝのだ。玆に唯一つ審判の機關がある、曰く戰！」

「もう釋してやれ、大分苦しさうだ。」

蒲「强國にして辱められた例を聞かん、故に僕は外交の術も嘉納流よ。」

遊「餘り酷い目に遭せると、僕の方へ報つて來るから、もう舍してくれたまへな。」

他の言に手は弛めたれど、蒲田は未だ放ちも遣らず、

「さあ、間、返事は奈何だ。」

「吭を緊められても出す音は變りませんよ。間は金力には屈しても、腕力などに屈するものか。憎いと思ふなら此面を五百圓の紙幣束でお撲きなさい。」

「金貨ぢや可かんか。」
「金貨、結構です。」
「ぢや金貨だぞ！」
油断せる貫一が左の高頬を平手打に絶か吃すれば、呀と両手に痛を抑へて、少時は顔も得挙げざりき。蒲田はやう〳〵座に復りて、
「急には此奴帰らんね。いつそ此で酒を始めやうぢやないか、而して飲み且談ずると為う。」
「さあ、それも可からう。」
独り可からぬは遊佐なり。
「此で飲んぢや旨くないね。而して形が付かなければ、何時までだつて帰りはせんよ。酒が仕舞になつて是ばかり遺られたら猶困る。」
「宜い、帰去には僕が一所に引張つて好い処へ連れて行つて遣るから。ねえ、間、おい、間と言ふのに。」

「はい。」
「貴様、妻君有るのか。おゝ、風早！」
と彼は横手を拍ちて不意に叫べば、
「えゝ、吃驚する、何だ。」
「憶出した。間の許婚はお宮、お宮。」
「此頃は他と一所かい。鬼の女房に天女だけれど、今日ぢや大きに日済などを貸して居るかも知れん。えゝ、貴様、那様事を爲しちや可かんよ。けれども高利貸などは、これで却つて女子には温しいとね、間、然うかい。彼等の非義非道を働いて暴利を貪る所以の者は、依様旨いものを食ひ、好い女を自由にまて、好きな榮曜がまて見たいと云ふ、唯それだけの目的より外は無いのだと謂ふが、然なのかね。我々から考へると、人情の忍ぶ可からざるを忍んで、經營慘憺と努める所は、何ぞ非常の目的があつて貨を殖へるやうだがな、譬へば、軍用金を聚めるとか、お家の

寶を質請するとか。單に己の慾を充さうばかりで、那麼思切つた殘刻な仕事が出來るものではないと想ふのだ。許多のガリ〳〵亡者は論外として、間貫一に於ては何ぞ目的が有るのだらう。這麼非常手段を遣るくらゐだから、必ず非常の目的が有つて存するのだらう。」

秋の日は忽ち黃昏れて、稍早けれど燈を入るゝと與に、用意の酒肴は順を逐ひて運び出されぬ。

「おつと、麥酒かい、頂戴。鍋は風早の方へ、羹方は宜しくお賴み申しますよ。うゝ、好い松茸だ、京でなくては恁は行かんよ——中が眞白で、庖丁が軋むやうでなくては。今年は不作だね、瘠せてゐて、虫が多い、那の雨が障つたのさ。間、奈何だい、君の目的は。」

「唯貨が欲いのです。」

「で、其の貨を奈何する。」

「滿らん事を！　貨は奈何でもなるぢやありませんか。奈何でもなる貨

だから欲い、其の欲い貨だから、恬して催促もするのです。さあ、遊佐さん、本當に奈何して下さるのです。」
風「まあ、之を一盃飮んで、今日は機嫌好く歸つてくれ給へ。」
蒲「そら、お取次だ。」
貫「私は酒は不可のです。」
蒲「折角差したものだ。」
「全く不可のですから。」
差付けらるゝを推除くる機に、コップは脆くも蒲田の手を脱れば、莨盆の火入に抵りて發矢と割れたり。
「何を爲る！」
貫一も今は怺へかねて、
「奈何したと！」
やをら起たんと爲る所を、蒲田が力に胸板を衝れて、一耐もせず仰様に

打僵けたり。蒲田は此の隙に彼の手鞄を奪ひて、中なる書類を手信に摑出せば、狂氣の如く駈寄る貫一、と組み付くを、利腕捉つて、
「身分に障るぞ！」
「默れ！」と捩伏せ、
「さあ、遊佐、其の中に君の證書が在るに違無いから、早く其奴を取つて了ひ給へ。」
之を聞きたる遊佐は色を變へぬ。風早も事の餘に暴なるを快しと爲ざるなりき。貫一は駭きて、撥返さんと右に左に身を揉むを、蹈跨りて捩揚げ捩揚げ、蒲田は聲を勵して、
「此期に及んで！　躊躇する所でないよ。早く、早く、早く！　風早、何を考へとる。さあ、遊佐、えゝ、何事も僕が引受けたから、管はず遣り給へ。證書を取つて了へば、後は細工はりう〳〵僕が心得て居るから、早く探したまへと言ふに。」

手を出しかねたる二人を睨廻して、蒲田はなか〱下に貫一の悶ゆるにも劣らず、獨り業を沸して効無き地鞴を踏みてぞ居たる。

風「それは餘り遣過ぎる、善くない、善くない。」

「善いも惡いもあるものか、僕が引受けたから管はんよ。遊佐、君の事ぢやないか、何を憺然して居るのだ。」

彼は幾と慄きて、寧ろ蒲田が腕立の紳士にあるまじきを諫めんとも思へるなり。腰弱き彼等の與するに足らざるを憤れる蒲田は、寶の山に入りながら手を空うする無念さに、貫一が手も折れよとばかり捩上れば、

「あゝ、待つた〱。蒲田君、待つてくれ、何とか話を付けるから。」

「えゝ、聒しい。君等のやうな意氣地無しはもう頼まん。僕が獨で遣つて見せるから、後學の爲に能く見て置き給へ。」

恬く言捨てゝ蒲田は片手して己の帶を解かんとすれば、時計の紐の生憎に絡るを、躁りに躁りて引放さんとす。

風「獨で奈何するのだよ。」

彼は有繋に見かねて手を假さんと寄り進みつ。

蒲「奈何するものか、此奴を蹈縛つて置いて、僕が證書を探すわ。」

「まあ、餘り穩でないから、それだけは思ひ止り給へ。今間も話を付けると言つたから。」

「何か此奴の言ふ事が！」

間は苦しき聲を搾りて、

「屹と話を付けるから、此手を釋してくれ給へ。」

風「屹と話を付けるな――此方の要求を容れるか。」

間「容れる。」

詐とは知れど、二人の同意せざるを見て、蒲田も然まではと力挫けて、竟に貫一を放ちてけり。

身を起すと與に貫一は落散りたる書類を掻聚め、鞄を拾ひて其中に捩込

み、さて慌忙しく座に復りて、
「それでは今日はこれでお暇をします。」
蒲田が思切りたる無法に長居は危しと見たれば、心に恨は含みながら、陽には克はじと閉口して、重ねて難題の出でざる先に左右は引取らんと爲るを、
「待て〳〵。」　と蒲田は下司扱に呼掛けて、
「話を付けると言つたでないか。さあ、約束通り要求を容れん內は、今度は此方が還さんぞ。」
膝推向けて迫寄る氣色は、飽くまで喧嘩を買はんとするなり。
「屹と要求は容れますけれど、鬻から散々の目に遭されて、何だか酷く心持が惡くてなりませんから、今日はこれで還して下さいまし。これは長座をいたしてお邪魔でございました。それでは遊佐さん、いづれ二三日の內に又上つてお話を願ひます。」

忽ち打つて縺りし貫一の様子に蒲田は冷笑して、

「間、貴様は犬の糞で仇を取らうと思つて居るな。遣つて見ろ、那様場合には自今毎でも蒲田が顯れて取挫いで遣るから。」

「間も男なら犬の糞ぢや仇は取らない。」

「利いた風なことを言ふな。」

風「これさ、もう好加減に爲ないかい。間も歸り給へ。近日是非篤と話を爲たいから、何事も其節だ。さあ、僕が其處まで送らう。」

遊佐と風早とは起ちて彼を送出せり。主の妻は椽側より入り來りぬ。

「まあ、貴方、お蔭様で難有う存じました。もう〳〵甚麽に好い心持でございませう。」

「や、これは。些と壯士芝居といふ所を。」

「大相宜い幕でございましたこと。お酌を致しませう。」

件の騷動にて四邊の狼藉たるを、彼は効々しく取形付けて居たりしが、

二人の旋て入來るを見て、
「風早さん、何もお蔭樣で助りました、然し飛んだ御迷惑樣で。さあ、何も御座いませんけれど、どうぞ貴下方御寛り召上つて下さいまし。」
妻の喜は溢るゝばかりなるに引易へて、遊佐は青息吻きて思案に昏れたり。
「弱つた！　君が那して取緊めてくれたのは可いが、此の返報に那奴甚麼事を爲るか知れん。明日あたり突然と差押などを吃せられたら耐らんな。」
「餘り蒲田が手酷い事を爲るから、僕も、さあ其を案じて、惴々して居たぢやないか。嘉納流も可いけれど、後前を考へて遣つてくれなくては他迷惑だらうぢやないか。」
「まあ、待ち給へと言ふことさ。」
蒲田は袂の中を搔りて、揉皺みたる二通の書類を取出しつ。

風「それは何だ。」

遊「奈何したのさ。」

何ならんと主の妻も鼻の下を延べて窺へり。

蒲「何だか僕も始めてお目に掛るのだ。」

彼は先づ其の一通を取りて披見るに、鰐淵直行に對する債務者は聞きも知らざる百圓の公正證書なり。

二人は蒲田が案外の物持てるに驚かされて、各息を凝して瞪れる眼を動さず。蒲田も無言の間に他の一通を取りて披けば、妻は逾近きて差覗きつ。四箇の頭顱はラムプの周邊に麩に寄る池の鯉の如く犇と聚れり。

「是は三百圓の證書だな。」

一枚二枚と繰り行けば、債務者の中に鼻の前なる遊佐良橘の名をも著したり、蒲田は彈機仕掛のやうに躍り上りて、

「占めた！ 是だ〳〵。」

驚喜の餘り身を支へ得ざる遊佐の片手は鶏の鉢の中にすつぽと落入り、乗出す膝頭に銚子を薙倒して、

「僕のかい、僕のかい。」

「奈何、奈何、奈何。」　と證書を取らんとする風早が手は、筋の活動を失へるやうにて幾度も捉へ得ざるなりき。

「まあ！」　と叫びし妻は忽ち胸塞りて、其後を言ふ能はざるなり。

蒲田は手の舞ひ、膝の蹈むところを知らず、

「占めたぞ！　占めたぞ!!　難有い!!!」

證書は風早の手に移りて、遊佐と其妻と彼と六の目を以て子細に之を點撿して、其の夢ならざるを明めたり。

「君は奈何したのだ。」

風早の面は且呆れ、且喜び、且懼るゝに似たり。旋て證書は遊佐夫婦の手に渡りて、打擴げたる二人が膝の上に、是ぞ比翼讀なるべき。更に麥

酒の漸を引きし蒲田は(血は大刀に滴りて拭ふに遑あらざる)意氣を昂げて、

「何と凄からう。奴を捩伏せて居る中に脚で搔寄せて袂へ忍ばせたのだ——早業さね。」

「猶且嘉納流にあるのかい。」

「常談言つちや可かん。然し、是も嘉納流の教外別傳さ。」

「遊佐の證書といふのは奈何して知つたのだ。」

「それは知らん。何でも可いから一つ二つ奪つて置けば、奴を退治る材料になると考へたから、早業をして置いたのだが、思ひきや是が覘ふ敵の證書ならんとは、全く天の善に與する所だ。」

「餘り善でもない。而して那を此方へ取つて了へば、三百圓は蹈めるのかね。」

蒲田「大蹈め！　少し惡黨になれば蹈める。」

風「然し、公正證書であつて見ると…………………。」

蒲「あつても差支無い。それは公證人役場には證書の源本が備付けてあるから、いざと云ふ日には其が物を言ふけれど、此の正本さへ引揚げてあれば、間貫一いくら地動波動したつて、河童の皿に水の乾いた同然、恁なれば無證據だから、矢でも鐵砲でも持つて來いだ。然し、全然蹈むのも有繫に不便との思召を以つて、そこは何とか又色を着けて遣らうさ。まあ〳〵君達は安心して居たまへ、蒲田辨理公使が宜しく樽俎の間に折衝して、遊佐家を泰山の安きに置いて見せる。嗚呼、實に近來の一大快事だ！」

人々の呆るゝには目も掛けず、蒲田は證書を推戴き推戴きて、

「さあ、遊佐君の爲に萬歲を唱へやう。奧さん、貴方が音頭をお取んなさいましよ――いゝえ、本當に。」

小心なる遊佐は此の非常手段を極惡大罪と心安からず覺ゆるなれど、蒲

田が一切を引受けて見事に捋開けんといふに勵されて、さては一生の怨敵退散の賀と、各漫に前む膝を聚めて、長夜の宴を催さんとぞ犇いたる。

第七章

茫々たる世間に放れて、蚤く骨肉の親むべき無く、況や愛情の温むるに會はざりし貫一が身は、一鳥も過ぎざる枯野の廣きに塊然として横る石の如きものなるべし。彼が鴫澤の家に在りける日宮を戀ひて、其の優しき聲と、柔き手と、溫き心とを得たりし彼の滿足は、何等の樂をも以外に求むる事を忘れしめき。彼は此の戀人をもて妻とし、生命として慊らず、母の一部分となし、妹の一部分となし、或は父の、兄の一部分とも爲して宮の一身は彼に於ける愉快なる家族の團欒に値せしなり、故に彼の戀は靑年を樂む一場の風流の麗しき夢に似たる類ならで、質は其の文に勝てるものなりけり。彼の宮に於けるは都ての人の妻となすべき以上を妻として、寧ろ其の望む所多きに過ぎずやと思はしむるまでに心に懸けて、自は其の至當なるを固く信ずるなりき。彼は此世に一人の宮を得

たるが爲に、萬木一時に花を着くる心地して、曩の枯野に夕暮れし石も、今將た水に溫み、霞に醉ひて、長閑なる日影に眠る如く覺えけんよ、其の戀の途よ急に、途よ濃になり勝れる時、人の最も憎める競爭者の爲に、而も輙く宮を奪はれし貫一が心は如何なりけん。身をも心をも打委せて詐ることを知らざりし戀人の、忽ち敵の如く己に反きて、空く他人に嫁するを見たる貫一が心は更に如何なりけん。彼は此に於いて曩に半箇の骨肉の親むべきなく、一點の愛情の溫むるに會はざりし凄寥を感ずるのみにして止らず、失望を添へ、恨を累ねて、彼の塊然たる野末の石は、霜置く上に凩の吹誘ひて、皮肉を穿ち來る人生の酸味の到頭骨に徹する一種の痛苦を惱みて已まざるなりき。實に彼の宮を奪れしは、其の甞て與へられし物を取去られし上に、與へられざりし物をも併せて取去られしなり。

彼は或は其の恨を抛つべし、盍ぞ其の失望をも忘れざらん。然れども彼は

永く其の痛苦を去らしむる能はざるべし、一旦太く其心を傷けられたる彼の痛苦は、永く其心の存在と倶に存在すべければなり。其の業務として行はざるべからざる殘忍刻薄を自ら強ふる痛苦は、能く彼の痛苦と相尅して、其間聊か思を遣るべき餘地を竊み得るに慣れて、彼は漸く忍ぶべからざるを忍びて爲し、恥づべきをも恥ぢずして行ひけるほどに、勁敵に遇ひ、惡徒に罹りて、或は弄ばれ、或は欺かれ、或は脅され、勢毒を以つて制し、暴を以つて易ふるの已むを得ざるより、一は其の道の習に薫染して、彼は益す懼れず貪るに至れるなり。同時に例の不斷の痛苦は彼を撻つやうに募ることありて、心も消々に惱まさるゝ毎に、齷齪利を趁ふ力も失せて、彼はなか〳〵死の安きを懷はざるにあらず。唯其の一旦にして易く、又今の空き死を遂げ了らんをば、いと效爲しと思返して、設し遠くとも心に期する所は、なでう一度前の失望と恨とを霽し得て、胸裡の涼きこと、氷を碎いて明鏡を磨ぐが如く爲ざらん、其の夕ぞ

我は正に死ぬべきと私に慰むるなりき。

貫一之一は彼の痛苦を忘るゝ手段として、一は其の妄執を散ずべき快心の事を買はんの目的をもて、恪は高利を貪れるなり。知らず彼が其の夕にして瞑せんとする快心の事とは何ぞ。彼は尋常復讐の小術を成して、宮に富山に鴫澤に人身的攻撃を加へて快を取らんとにはあらず、今少しく事の大きく男らしくあらんをば企圖せるなり。然れども、痛苦の劇しく、懷舊の恨に堪へざる折々、彼は熱き涙を握りて祈るが如く嘆ちぬ。

(唉、這麼思を爲るくらゐなら、いつそ潔く死んだ方が夐に勝だ。死んでさへ了へば萬慮空しく此の苦艱は無いのだ。それを命が惜くもないのに死にもせず……死ぬのは易いが、死ぬことの出來んのは、どう考へても餘り無念で、此の無念を此儘に胸に納めて死ぬことは出來んのだ。貨が有つたら何が面白いのだ。人に言はせたら、今俺の貯へた貨は、高が一人の女の宮に換へる價はあると謂ふだらう。俺には無い！　第一貨

などを持つて居るやうな氣持さへ爲んぢやないか。失望した身には其の望を取復すほどの寶は無いのだ。唉、其の寶は到底取復されん。宮が今罪を詫びて夫婦になりたいと泣き付いて來たとしても、一旦心を變じて、身まで瀆された宮は、決して舊の宮でなければ、もう間の寶ではない。間の寶は五年前の宮だ、其の宮は宮の自身さへ取復す事は出來んのだ。返す〴〵戀しいのは宮だ。恁して居る間も宮の事は忘れかねる、けれど、それは富山の妻になつて居る今の宮ではない、噫、鴫澤の宮！　五年前の宮が戀しい。俺が百萬圓を積んだところで、昔の宮は獲られんのだ！思へば貨も滿らん。少いながらも今の貨が熱海へ追つて行つた時の鞄の中に在つたなら…………え丶!!）

頭も打割る丶やうに覺えて、此の以上を想ふ能はざる貫一は、是に到りて自失し了るを常とす。恁る折よ、熱海の濱に泣倒れし鴫澤の娘と、田鶴見の庭に逍遙せし富山が妻との姿は、双々貫一が身邊を彷徨して去ら

ざるなり。彼は此の痛苦の堪ふべからざるに任せて、幾と前後を顧ずして他の一方に事を爲すより、往々其の性の爲す能はざるをも爲して、假さゞること仇敵の如く、債務に逼りて酷を極るなり。退いては之を悔ゆるも、又折に觸れて激すれば、忽ち勢に驅られて斷行するを憚らざるなり。恪して彼の心に拘ふ事あれば、自ら念頭を去らざる痛苦をも其間に忘るゝを得べく、素より彼は正を知らずして邪を爲し、是を喜ばずして非を爲すものにあらざれば、己を枉げて之を行ふ心苦しさは、俯して愧ぢ、仰ぎて懼れ、天地の間に身を置く所は、纔に其の容るゝ空間だに猶濶きを覺ゆるなれど、彼の痛苦に較べては、夐に忍ぶの易く、體の亦胖なるをさへ感ずるなりけり。

一向に神を勞し、思を費して、日夜之を暢るに遑あらぬ貫一は、肉瘦せ、骨立ち、色疲れて、宛然死水などのやうに沈鬱し了んぬ。其の攅めたる眉と空しく凝せる目とは、體力の漸く衰ふるに反して、精神の愈よ亢奮

すると與に、思の益す繁く、益す亂るゝを、從ひて變り、從ひて解かんとすれば、なほも繁り、なほも亂るゝを、竟に如何に爲ばや、と心も碎けつゝ打惱めるを示せり。更に見よ、漆のやうに鮮潤なりし髪は、後腦の邊に若干の白きを交へて、額に催せし皺の一筋長く横れるぞ、其の心の窄れる驗ならざるべき、況んや彼の面を蔽へる陰は益す黯きにあらずや。

吁、彼は其の初一念を遂げて、外面に、內心に、今は全く此世からなる魔道に墮つるを得たりけるなり。貪欲界の雲は凝りて歩々に厚く護り、離恨天の雨は隨所直に灑ぐ、一飛一躍出でゝは人の肉を啖ひ、半生半死入りては我と腸を劈く。居る所は陰風常に廻りて白日を見ず、行けども行けども無明の長夜今に到るまで一千四百六十日、逢へども可懷しき友の面を知らず、交れども曾て情の蜜より甘きを知らず、花咲けども春日の麗なるを知らず、樂來れども打背きて歡ぶを知らず、道あれども履む

を知らず、善あれども與するを知らず、福あれども招くを知らず、惠あれども享くるを知らず、空く利欲に耽りて志を喪ひ、偏に迷執に弄ばれて思を勞らす、吁、彼は終に何をか成さんとすらん。間貫一の名は漸く同業者間に聞えて、恐るべき彼の未來を屬目せざるはあらずなりぬ。

彼の堪ふべからざる痛苦と、此の死をも快くせんとする目的とあるが爲に、貫一の漸く頻なる嚴談酷促は自から此處に彼處に債務者の怨を買ひて、彼の爲に泣き、彼の爲に憤るもの寡からず、同業者と雖も時としては彼の餘に用捨無きを咎むるさへありけり。獨り鰐淵は之を喜びて、強將の下弱卒を出さゞるを誇れるなり。彼は己の今日あるを致せし辛抱と苦勞とは、未だ如此くにして足るものならずとて、屢ば其例を擧げては貫一を嗾し、飽くまで彼の意を強うせんと勉めき。之が爲に慰めらるゝとにはあらねど、其の行へる殘忍酷薄の人の道に缺けたるを知らざるにあらぬ貫一は、職業の性質既に不法なれば之を營むの非道なるは必然の

理にて、己の爲す所は都ての同業者の爲す所にて、己一人の殘刻なるにあらず、高利貸なる者は、世間一樣に如此く殘刻ならざるべからずと念へるなり。故に彼は決して己の所業のみ獨り怨を買ふべきにあらずと信じたり。

實に彼の頼める鰐淵直行の如きは、彼の辛うじて其の半を想ひ得る殘刻と、終に學ぶ能はざる譎詐とを左右にして、始めて今日の富を得てしなり。此の點に於ては彼は一も二も無く貫一の師表たるべしと雖も、其實然許の殘刻と譎詐とを擅にして、仍天に畏れず、人に憚らざる不敵の傲骨あるにあらず、彼は密に警めて多く夜出でず、内には神を敬して、得知れぬ敎會の大信者となりて、奉納寄進に財を吝まず、唯是身の無事を祈るに汲々として、自ら安ずる計をなせり。彼は年來非道を行ひて、仍箇の家榮え、身の全きを得るは、正に此の信心の致す所と仕へ奉る御神の冥護を辱なみて措かざるなりき。貫一は彼の如く殘刻と譎詐とに勇な

らざりけれど、又彼の如く敬神と閑居とに怯ならず、身は人と生れて人がましく行ひ、一も曾て犯せる事のあらざりしに、天は却りて己を罰し、人は却りて己を詐り、終生の失望と遺恨とは濫に斷腸の斧を揮ひて、死苦の若かざる絶痛を與ふるを思ひては、彼は縦し天に人に憤る所あるも、懼るべき無しと爲るならん。貫一の最も懼れ、最も憚る所は自の心のみなりけり。

第八章

用談果つるを俟ちて貫一の魚膠無く暇乞するを、滿枝は暫しと留置きて、用有りげに奥の間にぞ入りたる。其の言の如く暫し待てども出て來ざれば、又卷莨を取出しけるに、手爐の炭は狼の糞のやうになりて、いつか火の氣の絕えたるに、檀座に毛絲の敷物したる石笠のラムプの餤を假りて、貫一は爲う事無しに煙を吹きつゝ、此の赤樫の客間を夜目ながら眴しつ。

袋棚なる置時計は十時十分前を指せり。違棚には箱入の人形を大小二つ並べて、其下は七寶燒擬の一輪挿、蠟石の飾玉を水色縮緬の三重の褥に載せて、床柱なる水牛の角の懸花入は松に隼の勸工塲蒔繪金々として、花を見ず。鑄物の香爐の惡古びに玄ませたると、羽二重細工の花筐とを床に飾りて、雨中の富士をば引攪旋したるやうに落墨して、金泥精描の

騰龍は目貫を打つたるかとばかり雲間に耀ける横物の一幅。頭を回らせば、楣間に黄海大海戰の一間程なる水彩畫を揭げて、座敷の隅には二鉢の菊を据ゑたり。

良有りて出來れる滿枝は服を改めたるなり。絲織の衿懸けたる小袖に納戸小紋の縮緬の羽織着て、七絲と黑繻子との晝夜帶して、華美なるシオウルを携へ、髮など撫付けしと覺しく、面も見違ふやうに輕く粧ひて、

「大變失禮を致ゐました。些と私も其處まで買物に出ますので、實は御一緒に願はうと存ゑまして。」

無禮なりとは思ひけれど、口說れし誼に貫一は今更腹も立て難くて、

「あゝ然ですか。」

滿枝は衝と寄りて聲を低くし、

「御迷惑で被在いませうけれど。」

聞き飽きたりと謂はんやうに彼は取合はで、

「それぢや參りませう。貴方は何方までお出なのですか。」
「私は大橫町まで。」
二人は打連れて四谷左門町なる赤樫の家を出でぬ。傳馬町通は兩側の店に燈を列ねて、未だ宵なる景氣なれど、秋としも覺えず夜寒の甚しければ、往來も稀に、空は星あれどいと暗し。
「何といふお寒いのでございませう。」
「然やう。」
「貴方、間さん、貴方那樣に離れてお步き遊ばさなくても宜いぢやございませんか。それではお話が遠きませんわ。」
彼は町の左側を這度は貫一に擦寄りて步めり。
「これぢや私が步き難いです。」
「貴方お寒うございませう。私お鞄を持ちませう。」
「いゝや、奈何いたして。」

「貴方恐入りますが、もう少し御緩りお歩きなすつて下さいましな、私呼吸が切れて…………。」

已む無く彼は加減して歩めり。滿枝は着重るシオウルを搖上げて、

「疾から是非お話を致したいと思ふ事があるのでございますけれど、其後些ともお目に掛らないものですから。間さん、貴方、本當に偶にはお遊びに被入つて下さいましな。私もう決して先達而のやうな事は再び申上げませんから。些と被入つて下さいましな。」

「は、難有う。」

「お手紙を上げましても宜うございますか。」

「何の手紙ですか。」

「御機嫌伺の。」

「貴方から機嫌を伺はれる譯が無いぢやありませんか。」

「では、戀しい時に。」

「貴方が何も私を……。」
「戀しいのは私の勝手でございますよ。」
「然し、手紙は人にても見られると面倒ですから、お辭をします。」
「でも近日に私お話を致したい事があるのでございますから、鰐淵さんの事に就きましてね、私は是程困つた事はございませんの。で、是非貴方に御相談を願はうと存じまして、…………。」
唯見れば傳馬町三丁目と二丁目との角なり。貫一は此にて滿枝を撒かんと思ひ設けたるなれば、彼の語り續くるをも會釋爲ずして立住りつ。
「それぢや私は此で失禮します。」
其の不意に出でゝ貫一の闇き横町に入るを、
「あれ、貴方、其方から被行るのですか。此の通を被行いましなね、わざわざ那樣寂しい道をお出なさらなくても、此方の方が順ではございませんか。」

満枝は離れ難なく二三間追ひ行きたり。

「何有、此方が餘程近いですから。」

「幾多も違ひは致しませんのに、賑かな方を被行いましよ。私其の代り四谷見附の所までお送り申しますから。」

「貴方に送つて戴いたつて爲やうが無い。夜が更けますから、貴方も早く買物を爲すつてお歸りなさいまし。」

「那樣お爲轉を有仰らなくても宜うございます。」

慿く言爭ひつゝ、行くにもあらねど留るにもあらぬ貫一に引添ひて、不知不識其方に歩ませられし満枝は、矢庭に立竦みて聲を揚げつ。

「あゝ！　間さん些と。」

「奈何しました。」

「路惡へ入つて了つて、履物が取れないのでございますよ。」

「それだから貴方は這麼方へお出なさらんが可いのに。」

彼は漸々寄り來れり。

「憚樣ですが、此の手を引張つて下さいましな。あゝ、早く、私轉びますよ。」

シオウルの外に援を求むる彼の手を取りて引寄すれば、女は蹣きつゝ泥濘を出でたりしが、力や餘りけん、身を支へかねて撞と貫一に靠れたり。

「あゝ、殆い。」

「轉びましたら貴方の所爲でございますよ。」

「馬鹿なことを。」

彼は此時扶けし手を放たんとせしに、釘付などにしたらんやうに曳けども振れども得離れざるを、怪しと女の面を窺へるなり。滿枝は打背けたる顏の半をシオウルの端に包みて、握れる手をば彌よ固く緊めたり。

「さあ、もう放して下さい。」

益す緊めて袖の中へさへ曳入れんとすれば、

「貴方、馬鹿な事をしては可けません。」

女は一語も言はず、面も背けたるまゝに、其手は益放たで男の行く方に歩めり。

「常談しちや可かんてすよ。さあ、後から人が來る。」

「宜うございますよ。」

獨語つやうに言ひて、滿枝は彌寄添ひつ。貫一は怺へかねて力任せに吽と曳けば、手は離れずして、女の體のみ倒れかゝりぬ。

「あ、痛！　那樣酷い事をなさらなくても、其處の角まで參ればお放し申しますから、もう少しの間どうぞ…………。」

「好い加減になさい。」

と暴かに引拂ひて、寄らんとする隙もあらせず摩脱くるより足を疾めて津守坂を驀直に下りたり。

やう〳〵昇れる利鎌の月は亂雲を芟りて、迥き梢の頂に姑く掛れり。一

抹の闇を透きて士官學校の森と、其の中なる兵營と、其の隣なる町の片割とは、懶く寢覺めたるやうに覺束なき形を顯しぬ。坂上なる巡査派出所の燈は空く血紅の光を射て、下り行きし男の影も、取殘されし女の姿も終に見えず。

（八）の二

片側町なる坂町は軒並に鎖して、何處に隙洩る火影も見えず、舊砲兵營の外柵に生茂る群松は颯々の響を作して、其の下道の小暗き空に五位鷺の魂切る聲消えて、夜色愁ふるが如く、正に十一時に垂んとす。

忽ち兵營の門前に方りて人の叫ぶが聞えぬ、間貫一は二人の曲者に圍れたるなり。一人は黒の中折帽の鐔を目深に引下し、鼠色の毛絲の衿巻に半面を裹み、黒キャリコの紋付の羽織の下に紀州ネルの下穿高々と尻褰して、黒足袋に木裏の雪踏を履き、六分強なる色木の弓の折を杖につきたり。他は盲縞の股引腹掛に、唐棧の半纏着て、茶ヅックの深靴を穿ち、衿巻の頰冠に鳥撃帽子を頂きて、六角に削成したる檳榔子の逞しきステッキを引抱き、いづれも身材貫一よりは低けれど、血氣腕力兼備と見えたる壯佼どもなり。

「物取か。恨を受ける覺は無いぞ！」
「默れ！」と弓の折の寄るを、貫一は片手に障へて、
「僕は間貫一といふ者だ。恨があらば尋常に敵手にならう。物取ならば財は與れる。譯も言はずに無法千萬な、待たんか！」
答は無くて揮下したる弓の折は貫一が高頰を發矢と打つ。眩きつゝも逃行くを、猛然と追迫れる檳榔子は、件の杖もて片手突に肩の邊を曳と突いたり。蹈み耐へんとせし貫一は水道工事の鐵道に跌きて仆るゝを、得たりと附入る曲者は、餘に躁りて貫一の仆れたるに又跌き、一間ばかりの彼方に反跳を打ちて投飛されぬ。入替りて一番手の弓の折は貫一の背を袈裟掛に打据ゑければ、起きも得せで、崩折るゝを、畳みかけんとする隙に、手元に脱捨てたりし駒下駄を取るより早く、彼の面を望みて投げたるが、丁と中りて痿む爾時、貫一は蹶起きて三歩ばかりも遁れしを、打轉けし檳榔子の躍り蒐りて、拜打に下せる杖は小鬢を掠り、肩を辷り

て、鞄持つ手を斷れんとすばかりに撲ちけるを、辛くも忍びて衝と退きながら身構しが、目潰吃ひし一番手の怒を作して奮進し來るを見るより、今は危しと鞄の中なる小刀撈りつゝ馳出づるを、輙く肉薄せる二人が笞は雨の如く、所嫌はぬ滅多打に、彼は敢無くも昏倒せるなり。

塊「奈何です、もう可いに爲ませうか。」

弓「此奴あれの鼻面へ下駄を打着けよつた、あゝ、痛。」

衿卷搔除けて彼の撫でたる鼻は朱に染みて、西洋蕃椒の熟えたるに異らず。

塊「おゝ、大變な衄ですぜ。」

貫一は息も絕々ながら緊と鞄を搔抱き、右の逆手に小刀を隱し持ちて、此上にも狼藉に及ばゞ爲んやう有りと、油斷を計りて故と爲す無き躰を裝ひ、直呻きにぞ呻き居たる。

弓「憎い奴じや。然し、隨分撲つたの。」

媼「えゝ、手が痛くなつて了ひました。」

弓「もう引揚げやう。」

恁て曲者は間近の横町に入りぬ。辛うじて面を擡げ得たりし貫一は、一時に發せる全身の疼痛に、精神漸く亂れて、屢ば前後を覺えざらんとす。

（三十二年一月）

金色夜叉　後編

第一章

翌々日の諸新聞は坂町に於ける高利貸遭難の一件を報道せり。中に間貫一を誤りて鰐淵直行と爲るもありしが、負傷者は翌日大學第二醫院に入院したりとのみは、一樣に事實の眞を傳ふるなりけり。然れど其人を誤れる報道は決して何等の不都合をも生ぜざるべし。彼等を識らざる讀者は湯屋の喧嘩も同じく三面記事の常套として看過すべく、何の遑か其の敵手の誰々なるを問はん。識れる者は恐くは、貫一も鰐淵も一つに足腰の利かずなるまで撃踣されざりしを本意無く思へるなるべし、又或者は彼の即死せざりしをも物足らず覺ゆるなるべし。下手人は不明なれども、察するに貸借上の遺趣より爲せる業ならんとは、諸新聞の記せる如く、

人も皆思ふ所なりけり。
直行は今朝病院へ見舞に行きて、妻は患者の容體を案じつゝ留守せるなり。夫婦は心を協せて貫一の災難を悲み、何程の費をも吝まず手宛の限を加へて、少小の瘢をも遺さゞらんと祈るなりき。股肱と恃み、我子とも思へる貫一の遭難を、主人はなか〱其身に受けし闇打のやうに覺えて、無念の止み難く、かばうりの事に屆する鰐淵ならぬ令見の爲に、彼が入院中を目覺しくも厚く賄ひて、再び手出しもならざらんやう、陰ながら卑怯者の息の根を遏めんと、氣も狂はしく力を竭せり。
彼の妻は又、旋ては恁る不慮の事の夫の身にも出で來るべきを思過して、若し然るべからんには如何にか爲べき、此の悲さ、此の口惜さ、此の心細さにては止まじと思ふに就けて、空可恐く胸の打騷ぐを禁め得ず。奉公大事ゆゑに怨を結びて、憂き目に遭ひし貫一は、夫の禍を轉じて身の

仇とせし可憫さを、日比の手柄に増して浸々難有く、彼を念ひ、此を思ひて、絕に心弱くのみ成行くほどに、裏に愧づること、懼るゝこと、疚きことなどの常に抑へたるが、忽ち涌立ち、跳出でゝ、其身を責むる痛苦に堪へざるなりき。

年久しく飼るゝ老猫の凡そ子狗ほどなるが、棄てたる雪の塊のやうに長火鉢の猫板の上に蹲りて、前足の隻落して爪頭の灰に埋るゝをも知らず、鼾をさへ搔きて熟睡したり。妻は其夜の騷擾、次の日の氣勞に、血の道を惱める心地にて、懵々となりては驚かされつゝありける耳元に、格子の鐸の轟きければ、はや夫の歸來かと疑ひも果てぬに、紙門を開きて顯せる姿は、年紀二十六七と見えて、身材は高からず、色やゝ蒼き瘦顏の險しげに口髭逞しく、髮の生ひ亂れたるに深々と紺ネルトンの二重外套の襟を立てゝ、黑の中折帽は脫ぎて手にもつ。高き鼻に鼈甲緣の目鏡を挿みて、稜ある眼色は見る物每に恨あるが如し。

妻は思設けぬ面色の中に喜を漾へて、

「まあ直道かい、好くお出だね。」

片隅に外套を脱捨つれば、彼は黒綾のモオニングの新しからぬに、濃納戸地に黒縞の窄袴の寛なるを着けて、清ならぬ護謨のカラ、カフ、鼠色の紋繻子の頸飾したり。妻は徐く起ちて、其外套を柱の折釘に懸けつ。

「どうも取んだ事で、阿父さんの様子は甚麼？　今朝新聞を見ると愕いて飛んで来たのです。容體は奈何です。」

彼は時儀を叙ぶるに遑ばずして忙しげに慌く問出でぬ。

「あゝ新聞で、然だつたかい。何有阿父さんは奈何も作りはしないわね。」

「はあ？　坂町で大怪我を為つて、病院へ入つたと云ふのは？」

「那は間さ。阿父さんだとお思ひなの？　可厭だね、奈何したと云ふのだらう。」

「いや、然ですか。でも、新聞には歴然と然う出て居ましたよ。」

「それぢや其の新聞が違つて居るのだよ。阿父さんは先之病院へ見舞にお出掛だから。間も無くお歸來だらう。まあ寛々してお在な。」
恪と開ける直道は餘の不意に拍子抜して、喜びも得爲ず啞然たるのみ。
「あゝ、然ですか。間が遣られたのですか。」
「あゝ、間が可哀さうにねえ。取んだ災難で、大怪我を爲たのだよ。」
「甚麽です。新聞には餘程酷いやうに出て居ましたが。」
「新聞に在る通だけれど。不具になるやうな事も無いさうだが、全然快くなるには三月ぐらゐは甚麽事を爲ても要るといふ話だよ。誠に氣の毒な、それで、阿父さんも大抵な心配ぢやないの。まあ、ね、病院も上等へ入れて手宛は十分に爲てあるのだから。決して氣遣は無いやうなものだけれど、何しろ大怪我だからね。左の肩の骨が少し摧けたとかで、手が綏縦になつて了つたの。其外紫色の痣だの、蚯蚓腫だの、打切れたり、擦毀したやうな負傷は、お前、體一面なのさ。それに氣絶するほど頭部

を撲れたのだから、腦病でも出なければ可いつて、お醫者樣も然う言つてお在ださうだけれど、今の所では那樣鹽梅も無いさうだよ。何しろ其晩内へ舁込んだ時は半死半生で、些の虫の息が通つて居るばかり、私は一見目ると、是は迚も助るまいと想つたけれど、割合に人間といふものは丈夫なものだね。」

「それは災難な、氣の毒な事をしましたな。まあ十分に手宛をして遣るが可いです。而して阿父さんは何と言つて居ました。」

「何とゝは？」

「間が闇打にされた事を。」

「いづれ敵手は貸金の事から遺趣を持つて、其の悔し紛に無法な眞似をしたのだらうつて、大相腹を立てゝお在なのだよ。全くね、間は那云ふ不斷の大人しい人だから、詰らない喧嘩なぞを爲る氣遣はなし、何でも其に違は無いのさ。それだから猶更氣の毒で、何とも謂ひやうが無い。」

「間は若いから、それでも助るのです、阿父さんであつたら命は有りませんよ、阿母さん。」

「まあ不厭なことをお言ひでないな！」

浸々思入りたりし直道は徐に其の恨めしき目を擧げて、

「阿母さん、阿父さんは未だ此家業をお廢めなさる樣子は無いのですかね。」

母は苦しげに鈍り〳〵て、

「然ねえ……別に何とも……私には能く解らないね……。」

「もう今に應報は阿父さんにも……。阿母さん、間が那麼目に遭つたのは、決して人事ぢやありませんよ。」

「お前又阿父さんの前で那樣事をお言ひでないよ。」

「言ひます！　今日は是非言はなければならない。」

「それは言ふも可いけれど、從來も隨分お言ひだけれど、那の氣性だか

ら阿父さんは些もお聽きではないぢやないか。迚も他の言ふことなんぞは聽かない人なのだから、まあ、最少しお前も目を瞑つてお在よ、よ。」

「私だつて親に向つて言ひたくはありません。大概の事なら目を瞑つて居たいのだけれど、實に是ばかりは目を瞑つて居られないのですから。始終然う思ひます、私は外に何も苦勞といふものは無い、唯是だけが苦勞で、考出すと夜も寐られないのです。外に甚麼苦勞が在つても可いから、どうか此苦勞だけは沒して了ひたいと熟く思ふのです。唉、這麼事なら未だ親子で乞食をした方が增に可い。」

彼は涙を浮べて俯きぬ。母は其身も倶に責めらるゝ想して、或は可慚く、或は可忌く、此の苦しき位置に在るに堪へかねつゝ、言解かん術さへ無けれど、左にも右にも言はで已むべき折ならねば、辛じて打出しつ。

「其はもうお前の言ふのは尤だけれど、お前と阿父さんとは全で氣合が違ふのだから、萬事考量が別々で、お前の言ふ事は阿父さんの肚には入

らず、ね、又阿父さんの爲る事はお前には不承知と謂ふので、其中へ入つて私も困るわね。內も今では相應にお財も出來たのだから、恁云ふ家業は廢めて、樂隱居になつて、お前に嫁を貰つて、孫の顏でも見たい、と然う思ふのだけれど、那云ふ氣の阿父さんだから、那樣ことを言出さうものなら、甚麼に慍られるだらうと、それが見え透いて居るから、漫然した事は言はれずさ、お前の心を察して見れば可哀さうではあり、然かと云つて何方を奈何することも出來ず、陰で心配するばかりで、何の役にも立たないながら、これでなか〱苦しいのは私の身だよ。
然ぞお前は氣も濟まなからうけれど、迚も今の處では何と言つた所が、應と承知をしさうな樣子は無いのだから。愁ひ言合つてお互に心持を惡くするのが果だから、……それは、お前、何と云つたつて親一人子一人の中だもの、阿父さんだつて心ぢや甚麼にお前が便だか知れやしないのだから、究竟はお前の言ふ事も聽くのは知れて居るのだし、阿父さん

だつて現在の子の那樣にまで思つて居るのを、決して心に掛けないのではないけれども、又阿父さんの方にも其處には了簡があつて、一概にお前の言ふ通にも成りかねるのだらう。

それに今日あたりは、間の事で大變氣が立つて居る所だから、お前が何か言ふと却つて善くないから、今日は窃として措いておくれ、よ、本當に私が頼むから、ねえ直道。」

實に母は自ら言へりし如く、板挾の難局に立てるなれば、唯管事あらせじと、誠の一圖に直道を諭すなりき。彼は涙の催すに堪へずして、鼻目鏡を取捨てゝ目を推拭ひつゝ、猶咽び居たりしが、

「阿母さんに然う言れるから、私は不斷は怺へて居るのです。今日ばかり存分に言はして下さい。今日言はなかつたら言ふ時は有りませんよ。間の那樣目に遭つたのは天罰です、此天罰は阿父さんも今に免れんことは知れて居るから、言ふのなら今、今言はんくらゐなら、私はもう一生

言ひません。」

母は其の一念に脅されけんやうにて漫寒きを覺えたり。渋打去みて直道は語を繼ぎぬ。

「然し私の仕打も善くはありません、阿父さんの方にも言分は有らうと、それは自分で思つて居ます。阿父さんの家業が氣に入らん、意見をしても用ない、這麼汚れた家業を爲るのを見て居るのが可厭だ、と親を棄てて別居して居ると云ふのは、如何にも情合の無い話で、實に私も心苦しいのです。決して人の子たる道ではない、然ぞ不孝者と阿父さん始阿母さんも然う思つてお在でせう。」

「然は思ひはしないよ。お前の方にも理はあるのだから、然は思ひはしないけれど、一處に居たら然ぞ好からうとは…………。」

「それは私は猶の事です。這麼内に居るのは可厭だ、別居して獨で遣る、と我儘を言つて、何なり悠なり自分で暮して行けるのも、それまでに敎

育して貰つたのは誰のお蔭かと謂へば、皆親の恩。其も是も知つて居ながら、阿父さんを蹈付にしたやうな行を爲るのは、阿母さん能々の事だと思つて下さい。私は親に悖ふのぢやない、阿父さんと一處に居るのを嫌ふのぢやないが、私は金貸などゝ云ふ賤い家業が大嫌なのです。人を惱めて己を肥す――淺しい家業です！」

身を顫はして彼は涙に搔昏れたり。母は居久らぬまでに惑へるなり。

「親を過すほどの藝も無くて、生意氣な事ばかり言つて實は面目も無いのです。然し不自由を辛抱してさへ下されば、兩親ぐらゐに乾もじい思は屹と爲せませんから、破屋でも可いから親子三人一所に暮して、人に後指を差されず、罪も作らず、怨も受けずに、淸く暮したいぢやありませんか。世の中は貨が有つたから、それで可い譯のものぢやありませんよ。まして非道をして拵へた貨、那樣貨が何の賴になるものですか、必ず惡錢身に附かずです。無理に仕上げた身上は一代持たずに滅びます。因果

の報う例は恐るべきものだから、一日でも早く這麼家業は廢めるに越した事はありません。唉、末が見えて居るのに、情無い事ですなあ！」

積惡の應報覿面の末を憂ひて措かざる直道が心の眼は、無殘にも怨の刃に劈れて、路上に横死の恥を暴せる父が死顏の、犬に蹋られ、泥に塗れて、古蓆の陰に枕せるを、怪くも歴々と見て、恐くは我が至誠の鑑は父が未然を宛然映し出して謬らざるにあらざるかと、事の目前の眞にあらざるを知りつゝも、餘りの淺しさに我を忘れて衝と迸る哭聲は、咬緊むる齒をさへ漏れて出づるを、母は駭き、途方に昏れたる折しも、門に俥の駐りて、格子の鐸の鳴るは夫の歸來か、次手惡しと胸を轟かして、直道の肩を搖り動しつゝ、聲を潜めて口早に、

「直道、阿父さんのお歸來だから、泣いて居ちや可けないよ、早く彼方へ行つて、……よ、今日は後生だから何も言はずに……。」

はや足音は次の間に來りぬ。母は慌てゝ出迎に起てば、一足遲れに紙門

は外より開れて、主直行の高く幅たき軀は岸然とお峯の肩越に顯れぬ。

（二）の二

「おゝ、直道か珍しいの。何時來たのか。」

恁く言ひつゝ彼は艶々と赭みたる鉢割の廣き額の陰に小く點せる金壺眼を心快げに睜きて、妻が例の如く外套を脱するまゝに立てり。お峯は直道が言に稜あらんことを慮りて、然り氣無く自ら代りて答へつ。

「もう少し先でした。貴方は大相お早かつたぢやありませんか、丁度好うございましたこと。而して間の容體は甚麼ですね。」

「いや、仕合と想うたよりは輕くての、まあ、ま、那分なら心配は無いて。」

黒一樂の三紋付けたる綿入羽織の衣紋を直して、彼は機嫌好く火鉢の傍に歩み寄る時、直道は漸く面を抗げて禮を作せり。

「お前、奈何した、あゝ、妙な顔をして居るでないか。」

棕櫚の毛を植ゑたりやとも見ゆる口髭を掻拈りて、太短なる眉を顰むれば、聞居る妻は呀とばかり、刃を踏める心地も爲めり。直道は屹と振仰ぐと與に兩手を胸に組合せて、居長高になりけるが、父の面を見し目を伏せて、さて徐に口を開きぬ。

「今朝新聞を見ました所が、阿父さんが、大怪我を爲つたと出て居つたので、早速お見舞に參つたのです。」

白髮を交へたる茶褐色の髮の頭に置餘るばかりなるを撫でゝ、直行は、

「何新聞か知らんけど、それは間の間違ぢやが。俺なら那樣場合に出會うたて、唯々打れちや居りやせん。何の先は二人でないかい、五人までは敵手にしてくれるが。」

直道の隣に居たる母は密に彼のコオトの裾を引きて、言を返させじと心着るなり。之が爲に彼は少しく遲ひぬ。

「本にお前奈何した、顏色が良うないが。」

「然ですか。餘り貴方の事が心配になるからです。」
「何じや？」
「阿父さん、度々言ふ事ですが、もう金貸は廢めて下さいな。」
「又！　もう言ふな。言ふな、廢める時分には廢めるわ。」
「廢めなければならんやうになつて廢めるのは見ともない。今朝貴方が半死半生の怪我をしたといふ新聞を見た時、私は甚麼にしても早く此家業をお廢めなさるやうに爲せなかつたのを熟く後悔したのです。幸に貴方は無事であつた、から猶更今日は私の意見を用て貰はなければならんのです。今に阿父さんも間のやうな災難を必ず受けるですよ。其が可恐いから廢めると謂ふのぢやありません。正い事で爭つて殞す命ならば、決して辭することは無いけれど、金錢づくの事で怨を受けて、それ故に無法な目に遭ふのは、如何にも恥曝しではないですか。一つ間違へば命も失はなければならん、不具にも爲れなければならん、阿父さんの身の

上を考へると、私は夜も寐られんのですよ。這麼家業を爲んでは生活が出來んのではなし、阿父さん阿母さん二人なら。一生安樂に過せるほどの資産は既に有るのでせう、それに何を苦んで、人には怨まれ、世間からは指彈をされて、無理な財を拵へんければならんのですか。何で那樣に財が要るのですか。誰にしても自身に足りる以外の財は、子孫に遺さうと謂ふより外は無いのでせう。貴方には私が一人子、其の私は一錢たりとも貴方の財は讓られません！　欲くないのです。然すれば、貴方は今日無用の財を貯へる爲に、人の怨を受けたり、世に誚られたり、而して現在の親子が讐のやうになつて、貴方にしても這麼家業を決して名譽と思つて樂んで爲つて居るのではないでせう。私のやうなものでも可愛いと思つて下さるなら、財産を遺して下さる代に私の意見を聽いて下さい。意見とは言ひません、私の願です。一生の願ですから何ぞ聽いて下さい。」

父が前に頭を低れて、輙く抗げぬ彼の面は熱き涙に蔽るゝなりき。
些も動ずる色無き直行は却つて微笑を帶びて、語をさへ和げつ。
「俺の身を思うて那樣に言うてくれるのは嬉いけど、お前のは其は杞憂と謂ふんじや。俺と違うてお前は神經家ぢやから那樣に思ふんぢやけど、世間と謂ふものはの、お前の考へとるやうなものではない。學問の好きな頭腦で實業を遣る者の仕事を責むるのは、それは可かん。人の怨の、世の誚のと言ふけどの、我々同業者に對する人の怨など〻云ふのは、面面の手前勝手の愚痴に過ぎんのじや。世の誚と云ふのは、多くは嫉、其の證據は、働の無い奴が貧乏しとれば愍まる〻じや。何家業に限らず、財を拵へる奴は必ず世間から何とか攻撃を受くる、然ぢやらう。財の有る奴で評判の好えものは一人も無い、其通ぢやが。お前は學者ぢやから自ら心持も違うて、財などを然う貴いものに思うて居らん。學者は然うなけりやならんけど、世間は皆學者ではないぞ、可えか。實業家の精神

は唯財じや、世の中の奴の慾も財より外には無い。それほどに、のう、人の欲がる財じや、何ぞ好え所が無くてはならんぢやらう。何處が好えのか、何で那樣に好えのかは學者には解らん。

お前は自身に供給するに足るほどの財があつたら、其上に望む必要は無いと言ふのぢやな、それが學者の考量じやと謂ふんぢやが。自身に足るほどの物があつたら、それて可えと滿足して了うてからに、手を退くやうな了簡であつたら、國は忽ち亡るじや――社會の事業は發達せんじや。而して國中若隱居ばかりになつて了うたと爲れば、お前奈何するか、あ。慾に限の無いのが國民の生命なんじや。

俺に那樣に財を拵へて奈何するか、とお前は不審するじやね、俺は奈何も爲ん、財は餘計にあるだけ愉快なんじや。究竟財を拵へるが極めて面白いんじや。お前の學問するのが面白い如く、俺は財の出來るが面白いんじや。お前に本を讀むのを好え加減に爲い、一人前の學問が有つたら、

其上望む必要は有るまいと言うたら、お前何と答へる、あ。お前は能う此家業を不正ぢやの、汚はしいのと言ふけど、財を儲くるに君子の道を行うてゆく商賣が何處に在るか。我々が高利の金を貸す、如何にも高利じや、何爲高利か、可えか、無抵當じや、そりや。借る方に無抵當といふ便利を與ふるから、其便利に對する報酬として利が高いのぢやらう。それで我々は決して利の高い金を安いと詐つて貸しはせんぞ。無抵當で貸すぢやから利が高い、其を承知で皆借るんじや。それが何で不正か、何で汚はしいか。利が高うて不當と思ふなら、始から借らんが可え、那樣高利を借りても急を拯はにや措れんくらゐの困難が樣々にある今の社會じや。高利貸を不正と謂ふなら、其の不正の高利貸を作つた社會が不正なんじや。必要の上から借る者があるで、貸す者がある。なんぼ貸したうても借る者が無けりや、我々の家業は成立ちは爲ん。其必要を見込んで仕事を爲るが則ち營業の魂なんじや。

財といふものは誰でも愛して、皆獲やうと念うとる、獲たら離すまいと爲とる、のう。其財を人より多く持たうと云ふぢやもの、尋常一樣の手段で行くものではない。合意の上で貸借して、それで儲くるのが不正なら、總ての商業は皆不正でないか。學者の目からは、金儲する者は皆不正な事をしとるんじや。」

太くも此辯論に感じたる彼の妻は、屢ば直道の顏を偸視て、あはれ彼が理窟も之が爲に挫けて、氣遣ひたりし口論も無くて止みぬべきを想ひて私に懽べり。

直道は先づ嚴に頭を掉りて、

「學者でも商業家でも同じ人間です。人間である以上は人間たる道は誰にしても守らんければなりません。私は決して金儲を爲るのを惡いと言ふのではない、いくら儲けても可いから、正當に儲けるのです。人の弱みに付入つて高利を貸すのは、斷じて正當でない。那樣事が營業の魂な

どゝは…………！　譬へば間が災難に遭つた。あれも先は二人で、而も不意打を吃したのでせう、貴方は那の所業を何とお考へなさる。男らしい遺趣返の爲方とお思ひなさるか。卑劣極る奴等だと、然ぞ無念にお思ひでせう？」

彼は聲を昻げて逼れり。然れども父は他を顧て何等の答をも與へざりければ、再び聲を鎮めて、

「奈何ですか。」

「勿論。」

「勿論？　勿論ですとも！　何奴か知らんけれど、實に陋い根性、劣な奴等です。然し、怨を返すといふ點から謂つたら、奴等は立派に目的を達したのですね。然でせう、設ひ其手段は如何にあらうとも。」

父は騒がず、笑を含みて赤き髭を弄りたり。

「卑劣と言れやうが、陋いと言れやうが、思ふさま遺趣返をした奴等は

目的を達して然ぞ滿足して居るでせう。それを摑殺しても遣りたいほど悔しいのは此方ばかり。

阿父さんの營業の主意も、彼等の爲方と少しも違はんぢやありませんか。間の事に就いて無念だと貴方がお思ひなさるなら、貴方から金を借りて苦められる者は、猶且貴方を怨まずには居ませんよ。」

又しても感じ入りたるは彼の母なり。𢘆ては如何なる言をもて夫は之に答へんとすらん、我は此理の覿面當然なるに口を開かんやうも無きにと、心慌てつゝ夫の氣色を窺ひたり。彼は自若として、却つて其子の善く論ずるを心に愛づらんやうの面色にて、轉た微笑を弄するのみ。然れども妻は能く知れり。彼の微笑を弄するは、必ずしも人の之を弄するにあらざる時に於いて屢するを。彼は今それか非ぬかを疑へるなり。

蒼く羸れたる直道が顏は可忌しくも白き色に變じ、聲は甲高に細りて、膝に置ける手頭は連りに震ひぬ。

「いくら論じた所で、解り切つた理窟なのですから、もう言ひますまい。言へば唯阿父さんの心持を惡くするに過ぎんのです。然し、從來も度々言ひましたし、又今日這麼に言ふのも、皆阿父さんの身を案じるからで、之に就ては陰で何ほど私が始終苦心して居るか知つてお在は無からうけれど、考出すと勉強するのも何も可厭になつて、吁、いつそ山の中へでも引籠んで了はうかと思ひます。

阿父さんは此家業を不正でないとお言ひなさるが、實に世間では地獄の獄卒のやうに憎み賤んで、附合ふのも耻にして居るのですよ。世間なんぞは管ふものか、と貴方はお言ひでせうが、子として其を聞される心苦さを察して下さい。貴方も管はんと謂ふ其の世間も、猶且我々が渡つて行かなければならん世間です。其の世間に肩身が狹くなつて、終には容れられなくなるのは、男の面目ではありません。私は其が何より悲い。此方に大見識があつて、其が世間と衝突して、その爲に憎まれるとか、

棄てられるとか謂ふなら、世間は私を棄てんでも、私は喜んで阿父さんと一處に世間に棄てられます。親子棄てられて路端に餓死するのを、私は親子の名譽、家の名譽と思ふのです。今我々親子の世間から疎れて居るのは、自業自得の致す所で、不名譽の極です！」

眼は痛恨の涙を湧して、彼は覺えず父が面を睨みたり。直行は例の嘯けり。

直道は今日を限と思入りたるやうに飽くまで言を止めず。

「今度の事を見ても、如何に間が怨まれて居るかゞ解りませう。貴方の手代でさへ那の通ではありませんか、して見れば貴方の受けて居る怨、憎は甚麼であるか言ふに忍びない。」

父は忽ち遮りて、

「善し、解つた。能う解つた。」

「では私の言を用ゐて下さるか。」

「まあ、可え。解つた、解つたから…………。」
「解つたとお言ひなさるからは乾と用ゐて下さるのでせうな。」
「お前の言ふ事は能う解つたさ。然し、爾は爾たり、吾は吾たりじや。」
直道は愀へかねて犇と拳を握れり。
「まだ若い、若い。書物ばかり見とるぢや可かん、少しは世間も見い。なるほど子の情として親の身を案じてくれる、其點は空には思はん。お前の心中も察する、意見も解つた。然し、俺は俺で又自ら信ずる所あつて遣るんぢやから、折角の忠告ぢやからと謂うて、枉げて從ふ譯にはいかんで、のう。今度間が那云ふ目に遭うたから、俺は猶更劇い目に遭はうと謂うて、心配してくれるんか、あ？」
はや言ふも益無しと觀念ゑて直道は口を開かず。
「そりや辱いが、ま、當分俺の軀は俺に委して置いてくれ。」
彼は徐に立上りて、

「些と是から行て來にやならん處があるて、寛りして行くが可え。」
怱忙と二重外套を打被ぎて出づる後より、帽子を持つて送れる妻は密に出先を問へるなり。彼は大いなる鼻を皺めて、
「俺が居ると面倒ぢやから、些と出て來る。可えやうに言うての、還してくれい。」
「へえ？　そりや困りますよ。貴方、私だつて其は困るぢやありませんか。」
「まあ可えが。」
「可くはありません、私は困りますよ。」
お峯は足摩して迷惑を訴ふるなりけり。
「お前なら居ても可え。而して、もう還るぢやらうから。」
「それぢや貴方還るまで被在て下さいな。」
「俺が居ては還らんうらぢやが。早う行けよ。」

有繋に争ひかねてお峯の漸々佇めるを、見も返らで夫は驀地に門を出でぬ。母は直道の勢に怖れて、先にも増して然ぞや苛まるゝならんと想へば、虎の尾をも履むらんやうに覺えつゝ歸り來にけり。唯見れば、直道は手を拱き、頭を低れて、在りけるまゝに凝然と坐したり。

「もうお中食だが、お前何をお上りだ。」

彼は身轉も爲ざるなり。重ねて、

「直道。」　と呼べば、始めて覺束なげに顏を擧げて、

「阿母さん！」

其の術無き聲は謂知らず母の胸を刺せり。彼は此子の幼くて善く病める枕頭に居たりし心地をそのまゝに覺えて、幾と衝と寄らんとしたり。

「それぢや私はもう歸ります。」

「あれ、何だね、未だ可いよ。」

異くも遽に名殘の惜れて、今は得も放たじと心牽るゝなり。

「もうお中食だから、久しぶりで御膳を食べて……。」

「御膳も吭へは通りませんから……。」

第二章

主人公なる間貫一が大學第二醫院の病室にありて、晝夜を重傷に惱める外、身邊に事あらざる暇に乘じて、富山に嫁ぎたる宮が其後の消息を傳ふべし。

一月十七日をもて彼は熱海の月下に貫一に別れ、其の三月三日を擇びて富山の家に輿入志たりき。其塲より貫一の失踪せしは、鴫澤一家の爲に物化の邪魔拂たりしには疑無かりけれど、家内は擧りて有繋に騷動しき。其父よりも母よりも宮は更に切なる誠を籠めて心痛せり。彼は啻に棄てざる戀を棄てにし悔に泣くのみならで、寄邊あらぬ貫一が身の安否を慮りて措く能はざりしなり。

氣強くは別れにけれど、旋て歸り來んと頼めし心待も、終に空なるを曉りし後、然りとも今一度は假初にも相見んことを願ひ、又其心の奧には、

必ず然ばかりの逢瀬は有るべきを、おのれと契りけるに、彼の行方は知れずして、其身の家を出づべき日は潮の如く迫れるに、遣方も無く漫惑ひては、常に鈍ましう思ひ下せる卜者にも問ひて、後には廻合ふべきも、今はなか〱文の便もあらじと教へられしを、筆持つは篤なる人なれば、長き〱怨言などは告來さんと、それのみは掌を指すばかりに待ちたりしも、疑ひし卜者の言は不幸にも過たで、宮は彼の怨言をだに聞くを得ざりしなりけり。

左にも右にも今一目見ずば動かじと始に念ひ、それは慍はずなりてより、せめて一筆の便聞かずばと更に念ひしに、事は心と渾て違ひて、然しも願はぬ一事のみは玉を轉ずらんやうに何等の障も無く捗取りて、彼が空く貫一の便を望みし一日にも似ず、三月三日は忽ち頭の上に跳り來れるなりき。彼は終に心を許し肌身を許せし初戀を擲ちて、絶痛絶苦の悶々の中に一生最も樂かるべき大禮を擧げ畢んぬ。

宮は實に貫一に別れてより、始めて己の如何ばかり彼に戀せしかを知りけるなり。
彼の出でゝ歸らざる戀しさに堪へかねたる夕、宮は其机に倚りて思ひ、其衣の人香を嗅ぎて悶え、其寫眞に頰摩して憧れ、彼若し己を容れて、こゝに優しき便をだに聞せなば、親をも家をも振捨てゝ、直に彼に奔るべきものをと念へり。結納の交されし日も宮は富山唯繼を夫と定めたる心はつゆ起らざりき。然れど、己は終に其家に適くべき身たるを忘れざりしなり。
幾と自ら其緒を索むる能はざるまでに宮は心を亂しぬ。彼は別れし後の貫一をば然ばかり慕ひて止まざりしかど、過を改め、操を守り、覺悟して其戀を全うせんとは計らざりけるよ。眞に彼の胸に恃める覺悟とてはあらざりき。戀佗びつゝも心を貫かんとにはあらず、由無き緣を組まんと志たるよと思ひつゝも、強ひて今更否まんとするにもあらず、彼方の

戀しきを思ひ、此方の富めるを愛み、自ら決する所無く、爲す所無くして空き迷に弄ばれつゝ、終に移すべからざる三月三日の來るに會へるなり。

此日よ、此夕よ、更けて床盃の其期に迨びても、怪むべし、宮は決して富山唯繼を夫と定めたる心は起らざるにぞありける、止此人を夫と定めざるべからざる我身なるを忘れざりしかど。彼は自ら謂へり、此心は始より貫一に許したるを、緣ありて身は唯繼に委すなり。故に身は唯繼に委すとも、心は長く貫一を忘れずと、恁く謂へる宮は此心事の不德なるを知れり、然れど此不德の其身に免る能はざる約束なるべきを信じて、寧ろ深く怪むにもあらざりき。如此にして宮は唯繼の妻となりぬ。花聟君は彼を愛するに二念無く、彼を遇するに全力を擧げたり。宮は其身の上の日毎耀き勝るまゝに、逾よ意中の人と私すべき陰無くなりゆくを見て、愈よ樂まざる心は、夫の愛を承くるに慵くて、唯機械の如く事

ふるに過ぎざりしも、唯繼は彼の言ふ花の姿、溫き玉の容を一向に愛で悦ぶ餘に、冷かに空き器を抱くに異らざる妻を擁して、殆ど憎むべきまでに得意の頤を撫づるなりき。彼が一段の得意は、二個月の後最愛の妻は妊りて、翌年の春美しき男子を擧げぬ。宮は我とも覺えず淺しがりて、産後を三月ばかり重く病みけるが、其の癒ゆる日を竢たで、初子はいと弱くて肺炎の爲に殁りにけり。

子を生みし後も宮が色香はつゆ移はずして、自ら可惱しき風情の添りたるに、夫が愛護の念は益深く、寵は人目の見苦しきばかり彌よ加はるのみ。彼は其妻の常に樂まざる故を毫も曉らず、始より唯其色を見て、打沈みたる生得と獨合點して多く問はざるなりけり。

斯く怜まれつゝも宮が初一念は動かんともせで、難有き人の情に負きて、此に嫁ぎし罪をさへ歎きて止まざりしに、思はぬ子まで成せし過は如何にすべきと、躬ら其の容し難きを慚ぢて、悲むこと太甚しかりしが、實

に親の所憎にや堪へざりけん、其子の失せし後、彼は再び唯繼の子をば生まじ、と固く心に誓ひしなり。二年の後、三年の後、四年の後まで異しくも宮は此誓を全うせり。

次第に彼の心は樂まずなりて、今は何の故に其の嫁ぎたるかを自ら知るに苦めるなりき。機械の如く夫を守り、置物のやうに内に据られ、絶えて人の妻たる効も思出もあらで、空く籠鳥の雲を望める身には、其のみの願なりし裕なる生活も、富める家計も。土の如く顧るに足らず、却りて此の四年が間思ひに思ふばかりにて、熱海より行方知れざりし人の姿を田鶴見の邸内に見てしまで、彼は全く音沙汰をも聞かざりしなり。生家なる鴫澤にては薄々知らざるにもあらざりしかど、然る由無き事を告ぐるが如き愚なる親にもあらねば、宮の之を知るべき便は絶れたりしなり。

計らずも其の夢寐に忘れざる姿を見たりし彼が思は幾許なりけんよ。儚う

ゑたる者の貪り食ふらんやうに、彼は其一目にして四年の求むる所を求めんとゑたり。饜かず、饜かず、彼の慾は此日より益急になりて、既に自ら心事の不德を以つて許せる身を投じて、唯快く萬事を一事に換へて已まん、と深くも念じたり。

五番町なる鰐淵といふ方に住める由は、靜緒より聞きつれど、むざとは文も通はせ難く、道は遠からねど、獨り出てゝ彷徨ふべき身にもあらぬなど、克はぬ事のみなるに苦しかりけれど、安否を分かざりし幾年の思に較ぶれば、はや囊の物を捜るに等しかるをと、其一筋に慰められつゝも彼は日毎の徒然を憂きに堪へざる餘、我心を遣る方無く明すべき長き長き文を書かんと思立ちぬ。そは折を得て送らんとにもあらず、又逢うては言ふ能はざるを言はしめんとにもあらで、止だ恪も儚き身の上と切なき胸の內とを獨自ら愬へんとてなり。

（二）の二

宮は貫一が事を忘れざると與に、又長く熱海の悲き別を忘るゝ能はざるなり。更に見よ、歳々廻來る一月十七日なる日は、其の悲き別を忘れざる胸に烙して、彼の悔を新にするにあらずや。

「十年後の今月今夜も、僕の涙で月は曇らして見せるから、月が曇つたらば、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると想ふが可い。」

掩へども宮が耳は常に此聲を聞かざるなし。彼は其日の其夜に會ふ毎に、果して月の曇るか、あらぬかを試しに、曾て其人の餘所に泣ける徵もあらざりければ、有繫に恨は忘られしかと、其には心安きにつけて、諸共に今は我をも思はでや、さては何處に如何にしてなど、更に打歎かるゝなりき。

例の其日は四たび廻りて今日しも來りぬ。晴れたりし空は午後より曇りて少しく吹出でたる風のいと寒く、凡ならず冷ゆる日なり。宮は毎よりも心煩はしき此日なれば、彼の筆援りて書續けんと爲たりしが、餘に思亂るれば、さるべき力も無くて、いとゞしく紛れかねて居たり。

益す寒威の募るに堪へざりければ、遽に煖爐を調ぜしめて、彼は西洋間に徙りぬ。盡く窓帷を引きたる十疊の間は寸隙もあらず裹まれて、火氣の漸く春を蒸す處に、宮は體を胖に友禪縮緬の長襦袢の褄を蹈披きて、緋の紋緞子張の樂椅子に凭りて、心の影の其處に映るを眺むらんやうに、其の美しき目をば唯白く坦なる天井に注ぎたり。

夫の留守には此家の主として、彼は事ふべき舅姑を戴かず、氣兼すべき小姑を抱へず、足手絡の幼きも未だ有らずして、一箇の仲働と兩箇の下婢とに萬般の煩はしきを委せ、一日何の爲すべき事も無くて、出づるに車あり、膳には肉あり、而も言ふことは皆聽れ、爲すことは皆悅ばるゝ

夫を持てるなど、彼は今若き妻の黄金時代をば夢むる如く樂めるなり。實に世間の娘の想ひに想ひ、望みに望める絶頂は正に己の此の身の上なる哉、と宮は不覺胸に浮べたるなり。

嗟乎、おのれも此身の上を願ひに願ひし餘に、再び難得き戀人を棄てにしよ。然れども、此身の上に窮めし樂も、五年の昔なりける今日の日に窮めし悲に易ふべきものはあらざりしを、と彼は苦しげに太息きたり。今にして彼は始めて悟りぬ。おのれの此の身の上を願ひしは、其の戀人と倶に同じき樂を享けんと願ひしに外ならざるを。若し身の樂と心の樂とを併享くべき幸無くて、必ず其一つを擇ぶべきものならば、孰を取るべきかを知ることの晩かりしを、遣方も無く悔ゆるなりけり。

此の寒き日を此の煖き室に、此の焦るゝ身を此意中の人に並べて、此の誠をもて此の戀しさを語らば如何に、と思到れる時、宮は殆ど裂けぬべく胸を苦しく覺えて、今の待つ身は待たざる人を待つ身なる、其の口惜

さを悶えては、在るにも在られぬ椅子を離れて、歩み寄りたる窓の外面を何心無く打見遣れば、いつしか雪の降出でゝ、薄白く庭に敷けるなり。一月十七日なる感はいと劇しく動きて、宮は降頻る雪に或言を聽くが如く佇めり。折から唯繼は還來りぬ。靜に啓けたる闥の響は絕に物思へる宮の耳には入らざりき。氷の如く冷徹りたる手をわりなく懷に差入れらるゝに驚き、咄嗟と見向かんとすれば、後より緊と抱へられたれど、夫の常に飭める香水の薰は隱るべくもあらず。

「おや、お歸來でございましたか。」

「寒かつたよ。」

「大相降つて參りました、然ぞお困りでしたらう。」

「何だか知らんが、むちやくちやに寒かつた。」

宮は樂椅子を夫に勸めて、躬は煖爐の薪を燒べたり。今の今まで貫一が事を思窮めたりし心には、夫なる唯繼に倦く事ふるも、なかく道なら

ぬやうにて屑からず覺ゆるなり。窓の外に降る雪、風に亂るゝ雪、梢に宿れる雪、庭に布く雪、見ゆる限の白妙は、我身に積める人の怨の丈かとも思ふに、恁てあることの疚しさ、切なさは、脂を搾らるゝやうにも忍び難かり。然れども、此の美人の前に此雪を得たる夫の得意は限無くて、其脚を八文字に踏展け、漸く煖まれる頤を突反して、

「あゝ、降る〳〵、面白い。恁云ふ日は寄鍋で飲むんだね。寄鍋を取つて貰はう、寄鍋が好い。それから珈琲を一つ拵へてくれ、コニャックを些と餘計に入れて。」

宮の行かんとするを、

「お前、行かんでも可いぢやないか、要る物を取寄せて此で拵へなさい。」

彼の電鈴を鳴して、火の傍に寄來ると齊く、唯繼は其手を取りて小脇に挾みつ。宮は懌べる氣色も無くて、彼の爲すに任するのみ。

「おまへ奈何した。何を鬱いで居るのかね。」

引寄せられし宮は幾と仆れんとして椅子に支へられたるを、唯繼は鼻も摩るばかりに其顏を差覗きて、餘念も無く見入りつゝ、

「顏の色が甚だ惡いよ。雪で寒いんで、胸でも痛むんか、頭痛でもするんか、然うも無い？　奈何したんだな。それぢや、もつと爽然してくれんぢや困るぢやないか。然う陰氣だと情合が薄いやうに想はれるよ。――體お前は夫婦の情が薄いんぢやあるまいかと疑ふよ。えゝ？　那樣ことは無いかね。」

忽ち闥の啓くと見れば、仲働の命ぜし物を持來れるなり。人目を憚らず其妻を愛するは唯繼が常なるを、見苦しと思ふ宮は其傍を退かんとすれど、放たざるを例の事とて仲働は見ぬ風しつゝ、器具と壜とをテエブルに置きて、直に退り出でぬ。恁く執念く愛せらるゝを、宮はなか〳〵憂くも淺しくも思ふなりけり。

雪は風を添へて搔亂し〳〵降頻りつゝ、はや日暮れなんとするに、樂き

夜の漸く來れるが最辱き唯繼の目尻なり。

「近頃はお前別して鬱いで居るやうぢやないか、俺には然う見えるがね。而して内にばかり引籠んで居るのが宜くないよ。此頃は些とも出掛けんぢやないか。然う因循して居るから、益す陰氣になつて了ふのだ。此間も鳥柴の奥さんに會つたら、然う言つて居たよ、何爲近頃は奥さんは些ともお見えなさらんのだらう。芝居ぐらゐにはお出掛になつても可さゝうなものだが、全然影も形もお見せなさらん。なんぼお大事になさるつて、那樣に仕舞込んでお置きなさるものぢやございません、慈善の爲に少しは衆にも見せてお遣んなさい、なんぞと非常に遣られたぢやないか。それからね、知つて居る通り、今度の選擧には實業家として福積が當選したらう。俺も大いに與つて盡力したんさ。それで近日當選祝があつて、其が濟次第別に慰勞會と云ふやうな名で、格別盡力した連中を招待するんだ。其席へは令夫人携帶といふ譯なんだから、是非お前も出なければ

ならん。驚くよ、俺の社會では富山の細君と來たら評判なもんだ。會つたことの無い奴まで、お前の事は知つて居るんさ。因て、俺も實は自慢てね、然う評判になつて見ると、輕々しく出行かれるのも面白くない、餘り顔を見せん方が見識で好いけれど、然し、近頃のやうに籠つてばかり居るのは、第一衞生にお前へ良くない。實は俺は日曜毎にお前を連れて出たいんさ。おまへの來た當座は然であつたぢやないかね。子供を産んでから、然う、あれから半年ばかり經つてからだよ、餘り出なくなつたのは。それでも隨分彼地此地出たぢやないかね。

善し、珈琲出來たか。うゝ熱い、旨い。お前もお飲み、之を半分上げやうか。澤山だ？　それだからお前は冷淡で可かんと謂ふんさ。ぢや、酒の入らんのを飲むと可い。寄鍋は未か。うむ、彼方に支度がしてあるから、來たら言ひに來る？　それは善い、西洋室の寄鍋なんかは風流でない、那は長火鉢の相對に限るんさ。

可いかね、福積の招待には吃驚させるほど美しくして出て貰はなけりやならん。それで、着物だ、何か欲ければ早速拵へやう。おまへが是なら ば十分と思ふ服裝で、隆として推出すんだね。而してお前此頃は餘り服裝に管はんぢやないか、可かんよ。いつでも此の小紋の羽織の寐恍けたのばかりは恐れるね。何爲那の被風を着ないのかね、那は好く似合ふにな。

明後日は日曜だ、何處かへ行かうよ。其着物を見に三井へでも行かうか。いや、然う〳〵、柏原の奥さんが、お前の寫眞を是非欲いと言つて、會ふ度に聒しく催促するんで克はんよ。明日は用が有つて行かなければならんのだから、持つて行かんと拙いて。未だ有つたね、無い？　そりや可かん。一枚も無いんか、そりや可かん。それぢや、明後日寫しに行かう。直と若返つて二人で寫すなんぞも可いぢやないか。

善し、寄鍋が來た？　さあ行かう。」

夫に引添ひて宮は此室を出でんとして、思ふ所ありげに姑く窓の外面を窺ひたりしが、

「どうして這麼に降るのでせう。」

「何を下らんことを言ふんだ。さあ、行かう〳〵。」

第三章

宮は既に富むと裕なるとに饜きぬ。抑も彼が此家に嫁ぎしは、惑深き娘氣の一圖に、榮耀榮華の欲するまゝなる身分を願ふを旨とするなりければ、始より夫の愛情の如きは、有るも善し、有らざるも更に善しと。殆ど無用の物のやうに輕めたりき。今や其願足りて、而も遂に饜きたる彼は彌よ纏らるゝ愛情の煩はしきに堪へずして、寧ろ影を追ふよりも儚き昔の戀を思ひて、私に樂むの味あるを覺ゆるなり。

恪なりてより彼は自ら唯繼の面前を厭ひて、寂しく垂籠めては随意に物思ふを懌びたりしが、圖らずも田鶴見の邸内に貫一を見しより、彼の然して昔に變らぬ一介の書生風なるを見しより、一度は絶えし戀ながら、仍冥々に行末望あるが如く、然るは、彼が昔のまゝの容なるを、今も其の獨を守りぬ、時の到るを待つらんやうに思倣さるゝなりけり。

其時は果して到るべきものなるか。宮は躬の心の底を叩きて、答を得るに沮みつゝも、有繋に又己にも知れざる秘密の潜める心地して、一面には覺束なくも、又一面には左にも右にも信ぜらるゝなり。

便ち宮の夫の愛を受くるを難堪く苦しと思知りたるは、彼の寫眞の鏡面の前に悶絶せし日よりにて、其の戀しさに取迫めては、いでや、此の富めるに饜き、裕なるに倦める家を棄つべきか、棄てよとならば遲はじと思へるも屢なりき。唯敢て之を爲ざるは、竊に望は繫けながらも、行くべき方の怨を解かざるを虞るゝ故のみ。

素より宮は唯繼を愛せざりしかど、決して之を憎むとにはあらざりき。然れど今はしも正に其念は起れるなり。自ら謂へらく、吾夫こそ當時戀と富との値を知らざりし己を欺き、空く輝ける富を示して、售るべくもあらざりし戀を奪ひけるよ、と悔の餘は恁る恨をも他に被せて、彼は己を過りしをば、全く夫の罪と爲せり。

此心なる宮は此の一月十七日に會ひて、此の一月十七日の雪に會ひて、いとゞしく貫一が事の忍ばるゝに就けて轉た惡人の夫を厭ふこと甚しかり。無辜の唯繼は係る今宵の樂を授る此の美しき妻を拜するばかりに、有程の誠を奉げて、蜜よりも甘き言の數々を呫きて止まざれど、宮が耳には人の聲は聞えずして、雪の音のみぞいと能く響きたる。

其雪は明方になりて歇みぬ。乾坤の白きに漂ひて華麗に差出でたる日影は、漲るばかりに暖き光を鋪きて終日輝きければ、七分の雪は其日に解けて、はや翌日は往來の妨碍もあらず。處々の泥濘は打續く快晴の天に曝されて、刻々に乾き行くなり。

此雪の爲に外出を封ぜられし人は、此の日和と此の道とを見て、皆怺へかねて昨日より出でしも多かるべし。まして今日となりては、手置の宜からぬ横町、不性なる裏通、屋敷町の小路などの氷れる雪の九十九折、或は捏返せし汁粉の海の、差掛りて難儀を極むるとは知らず、見渡す町

通の乾々干に固れるに喫かされて、控へたりし人の出でざるはあらざらんやうに、往來の常より頻なる午前十一時といふ頃、屈み勝に疲れたる車夫は、泥の粉衣掛けたる車輪を可惱しげに轉して、黑綾の吾妻コオト着て、鐵色縮緬の頭巾を領に卷きたる五十路に近き賤しからぬ婦人を載せたるが、南の方より芝飯倉通に來かゝりぬ。

唯有る横町を西に切れて、某の神社の石の玉垣に沿ひて、だら〳〵と上る道狹く、繁き木立に南を塞がれて、殘れる雪の夥多しきが泥交に蹈散されたるを、件の車は曳々と挽上げて、取着に土塀を由々しく構へて、門には電燈を揭げたる方にぞ入りける。

這は富山唯繼が住居にて、其の女客は宮が母なり。主は疾に會社に出勤せし後にて、例刻に來れる髮結の今方歸行きて、まだ其迹も掃かぬ程なり。紋羽二重の肉色鹿子を掛けたる大圓髷より水は滴るばかりに、玉の如き喉を白絹のハンカチイフに卷きて、風邪氣などにや連に打咳きつ

つ、宮は奥より出迎に見えぬ。其の故とも覺えず餘に著き面羸は、唯一目に母が心を驚せり。

閑ある身なれば、宮は月々生家なる兩親を見舞ひ、母も同じほど訪ひ音づるゝをば、此上無き隱居の保養と爲るなり。信に女親の心は、娘の身の定りて、其家榮え、其身安泰に、而もいみじう出世したる姿を見るに增して樂まさるゝ事はあらざらん。彼は宮を見る毎に大なる手柄をも成したらんやうに、吾が識れるほどの親といふ親は、皆才覺無く、仕合薄くて、有樣は氣の毒なる人達哉、と漫に己の誇らるゝなりけり。然れば月毎に彼が富山の門を入るは、正に人の母たる成功の凱旋門を過る心地もすなるべし。

可懷きと、嬉しきと、猶今一つとにて、母は得々と奥に導れぬ。久しく垂籠めて友欲しき宮は、拯を得たるやうに覺えて、有るまじき事ながら、或は密に貫一の報を齎せるにもあらずやなど、枉げても念じつゝ、せめ

ては愁に閉ぢたる胸を姑くも寛うせんとするなり。

母は語るべき事の日頃蓄へたる數々を措きて、先づ宮が血色の氣遣しく衰へたる故を詰りぬ。同じ事を夫にさへ問れしを思合せて、彼は然までに己の羸れたるを懼れつゝも、

「然う？　でも、何處も惡い所なんぞ有りはしません。餘り體を動かさないから、その所爲かも知れません。けれども、此頃は時々氣が鬱いで鬱いて耐らない事があるの。那は血の道と謂ふんでせうね。」

「あゝ、それは血の道さ。私なんぞも持病にあるのだから、依様然だらうよ。それでも、それで痩せるやうぢや良くないのだから、お醫者に診てもらふ方が可いよ、放つて措くから畢竟持病にもなるのさ。」

宮は唯頷きぬ。

母は不圖思起してや、然も慌忙しげに、

「後が出來たのぢやないかい。」

なり。

宮は打笑みつ。然れども例の可差とにはあらで傍痛き餘を微見せしやう

「那樣事はありはませんわ。」

「然う何日までも沙汰が無くちや困るぢやないか。本當に未だ那樣樣子は無いのかえ。」

「有りはませんよ。」

「無いのを手柄にでもゑて居るやうに、何だね。一人はもう無くて奈何するのだらう、先へ寄つて御覽、後悔を爲るから。本當なら二人ぐらゐ有つて好い時分なのに、那限後が出來ない所を見ると、やつぱり躰が弱いのだね。今の內養生して、丈夫にならなくちや可けないよ。お前は然して平氣で、いつまでも若くて居る氣なのだらうけれど、本宅の方なんぞでも後がく〳〵つて、甚麼に待兼ねてお在だか知れはしないのだよ。內ぢや又阿父さんは、他は奈何したと謂ふんだらう、情無い奴だ。子を生

み得ないのは女の恥だつて、慍り切つて居なさるくらゐだのに、當人のお前と云つたら、可厭に落着いて居るから、憎らしくてなりはしない。而して、お前は先の内は子供が所好だつた癖に、自分の子は欲くないのかね。」

宮も有繋に當惑しつゝ、

「欲くない事はありはしませんけれど、出來ないものは爲方が無いわ。」

「だから、何でも養生して、體を丈夫にするのが専だよ。」

「體が弱いとお言ひだけれど、自分には別段此が惡いと思ふ處も無いから、診てもらふのも變だし…………けれどもね、阿母さん、私は疾から言はう言はうと思つて居たのですけれど、實は氣に懸る事があつてね、それて始終何だか心持が快くないの。其の所爲で自然と體も良くないのか知らんと思ふのよ。」

母の其目は瞪り、其膝は前み、其胸は潰れたり。

「奈何したのさ！」

宮は俯きたりし顏を寂しげに起して、

「私ね、去年の秋、貫一さんに逢つてね………。」

「然かい！」

己だに聞くを憚る秘密の如く、母は其の應ふる聲をも潜めて、まして四邊には油斷もあらぬ氣勢なり。

「何處で。」

「内の方へも全然爾來の樣子は知れないの？」

「あゝ。」

「些も？」

「あゝ。」

「奈何して居ると云ふやうな話も？」

「あゝ。」

恁く纔に應ふるのみにて、母は自ら湧せる萬感の渦の裏に陷りてぞ居たる。

「然う？　阿父さんは內證で知つてお在ぢやなくて？」

「いゝえ、那樣事は無いよ。何處で逢つたのだえ。」

宮は其の梗概を語れり。聽居る母は、彼の事無く其場を遁れ得てし始末を詳かにするを俟ちて、始めて重荷を下したるやうに哱と息を吻きぬ。

貫に彼は熱海の梅園にて膩汗を搾られし次手惡さを思合せて、憂き目を重ねし宮が不幸を、不愍とも、慘しとも、今更に親心を傷むるなりけり。然れども過ぎし其事よりは、爲に宮が前途に一大障礙の或は來るべきを案じて、母はなか〳〵心穩ならず、

「而して貫一は奈何したえ。」

「お互に知らん顏を為て別れて了つたけれど…………。」

「ふゝ、それから？」

「其限なのだけれど、私は氣になつてね。それも出世して立派になつて居るのなら、然うも思はないけれど、つまらない風采をして、何だか大變羸れて、私も極が惡かつたから、能くは見なかつたけれど、氣の毒のやうに身窄しい樣子だつたわ。それに、聞けばね、番町の方の鰐淵とかいふ、地面や家作なんぞの世話をして居る内に使はれて、依樣其處に居るらしいのだから、好い事は無いのでせう。那して子供の内から一處に居た人が、那麼になつて居るかと思ふと、昔の事を考へ出して、私は何だか情無くなつて…………。」

彼は襦袢の袖の端に窃と眶を挲りて、

「好い心持はしないわ、ねえ。」

「へえゝ、那樣になつて居るのかね。」

母の顏色も異しき寒さにや襲はるゝと見えぬ。

「それ迄だつて、憶出さない事は無いけれど、去年逢つてからは、毎日

のやうに氣になつて、可厭な夢なんぞを度々見るの。阿父さんや、阿母さんに會ふ度に、今度は話さう、今度は話さうと思ひながら、私の口からは何と無く話し難いやうで、實は今迄言はずに居たのだけれど、其事が初中終苦になる所爲で氣を傷めるから體にも障るのぢやないかと、然う想ふのです。」

思凝せるやうに母は或方を見据ゑつゝ、言は無くて頷き居たり。

「それで、私は阿母さんに相談して、貫一さんを奈何か爲て上げたいの——那時に那樣話も有つたのでせう。而して依舊鴫澤の跡は貫一さんに取して下さいよ、それでなくては私の氣が濟まないから。今迄は行方が知れなかつたから爲方がないけれど、聞合せれば直に分るのだから、其を抛つて措いちや此方が惡いから、阿父さんにでも會つて貰つて、何とか話を付けるやうに爲て下さいな。而して從來通に内で世話を爲て、甚麼にも彼人の目的を達爲さして、立派に吾家の跡を取して下さい。私は

然うしたら兄弟の盃をして、何處までも生家の兄さんで、未始終力になつて欲いわ。」

宮が此言は決して內に自ら欺き、又敢て外に他を欺くにはあらざりき。影とも儚く隔の關の遠き戀人として餘所に朽さんより、近き他人の前に己を殺さんぞ、同じく受くべき苦痛ならば、其の忍び易きに就かんと冀へるなり。

「それは然でもあらうけれど、隨分考へ物だよ。彼人の事なら、內でも時々話が出て、何處に奈何して居るか知らんって、案じないぢやないけれど、阿父さんも能くお言ひのさ、如何に何だつて、餘り貫一の仕打が憎いって。成程それは、お前との約束ね、其を反古にしたと云ふので、齡の若いもの丶事だから腹も立たう、立たうけれど、お前自分の身の上も些は考へて見るが可いわね。子供の內から那して世話になつて、全く內のお蔭で左も右も那丈にもなつたのぢやないか、其の恩も有れば、義

理も有るのだらう。そこ所を些と考へたら、あれぎり家出をして了ふなんて、那麼まあ面抵がましい仕打振をするってが有るものかね。それぢや那約束を反古にして、もうお前には用は無いから奈何でも獨て勝手に爲るが可い、と云ふやうな不人情なことを假初にも爲たのぢやなし、鴫澤の家は讓らうし、所望なら洋行も爲せやうと迄言ふのぢやないか。それは一時は腹も立たうけれど、好く了簡して前後を考へて見たら、萬更譯の解らない話をして居るのぢやないのだもの、私達の顏を立てゝくれたつて、那樣に罸も當りはしまいと思ふのさ。而してお剩に、阿父さんから十分に譯を言つて、頭を低げないばかりにして頼んだのぢやないかね。だから此方には少しも無理は無い筈だのに、貫一が餘り身の程を知な過るよ。

それはね、阿父さんが昔彼人の親の世話になつた事があるさうさ、其の恩返なら、行處の無い軀を十五の時から引取つて、高等學校を卒業する

迄に仕上げたら、それで十分だらうぢやないか。全く、お前、貫一の爲方は增長して居るのだよ。それだから、阿父さんだつて、私だつて、那されて見ると決して可愛くはないのだからね、今更此方から搜出して、右や左言ふほどの事はありはしないよ。それぢや何ぼ何でも不見識とやらぢやないか。」

其の不見識とやらを嫌ふよりは、別に嫌ふべく、懼るべく、警むべき事あらずや、と母は私に慮れるなり。

「阿父さんや阿母さんの身になつたら、然う思ふのは無理も無いけれど、どうも此儘ぢや私が氣が濟まないんですもの、今になつて考へて見ると、貫一さんが惡いのでなし、阿父さん阿母さんが惡いのでなし、全く私一人が惡かつたばかりに、貫一さんには阿父さん阿母さんを恨ませるし、阿父さん阿母さんには貫一さんを惡く思はせたのだから、依樣私が仲へ入つて、元々通に爲なければ濟まないと思ふんですから、貫一さんの惡

いのは、どうぞ私に免じて、今迄の事は水に流して了つて、改めて貫一さんを内の養子にして下さいな。若し然なれば、私もそれで苦勞が減るのだから、屹度體も丈夫になるに違無いから、是非然云ふ事に阿父さんにも賴んで下さいな、ねえ、阿母さん。然して下さらないと、私は段々體を惡くするわ。」

憖く言出でし宮が胸は、斯に盡く其罪を懺悔したらんやうに、多少の凉しきを覺ゆるなりき。

「那樣に言ふのなら、還つて阿父さんに話をして見やうけれど、何も其の所爲で體が弱くなると云ふ譯も無かりさうなものぢやないか。」

「いゝえ、全く其の所爲よ。始終そればかり苦になつて、時々考込むと、實に耐らない心持になることがあるんですもの。此間逢ふ前までは那樣でもなかつたのだけれど、那から急に――然うね、何と謂つたら可いのだらう――私が那麼に不仕合な身分にして了つたと然う思つて、然ぞ恨

んで居るだらうと、氣の毒のやうな、可恐いやうな、而して、何と無く私は悲しくてね。外には何も望は無いから、どうか彼人だけは元のやうにして、那の優しい氣立で、末始終阿父さんや阿母さんの世話をして貰つたら、甚麼に嬉しからうと、那樣事ばかり考へては欝いで居るのです。いづれ私からも阿父さんに話をしますけれど、當面阿母さんから好く此譯を然う言つて、本當に賴んで下さいな。私二三日の內に行きますから。」

然れども母は投首して、

「私の考量ぢや、どうも今更ねえ、…………………。」

「阿母さんは！　何も那樣に貫一さんを惡く思はなくたつて可いわ。折角話をして貰はうと思ふ阿母さんが然云ふ氣ぢや、迚も阿父さんだつて承知をしては下さるまいから…………………。」

「お前がそれまでに言ふものだから、私は不承知とは言はないけれど………………………。」

「可いの、不承知なのよ。阿父さんも猶且貫一さんが憎くて、大方不承知なんでせうから、私は憑據にはならないから、不承知なら不承知でも可いの。」

涙含みつゝ宮が焦心になれるを、母は打惑ひて、

「まあ、お聞きよ。それは、ね、…………。」

「阿母さん、可いわ――私、可いの。」

「可かないよ。」

「可かなくっても可いわ。」

「あれ、まあ、…………何だね。」

「どうせ可いわ。私の事は管つてはおくれでないのだから…………。」

我にもあらで迸る泣聲を、衝と袖に抑へても、宮は急來る涙を止めかねたり。

「何もお前、泣くことは無いぢやないか。可笑な人だよ。だからお前の

言ふことは解つて居るから、内へ歸つて、善く話をした上で…………………………。」

「可いわ。そんなら、然うで私にも了簡があるから、奈何とも私は自分で爲るわ。」

「自分で那樣事を爲るなんて、それは可くないよ。恁云ふ事は決しておまへが自分で爲ることぢやないのだから、それは可けませんよ。」

「…………………………。」

「歸つたら阿父さんに善く話を爲やうから、……………泣くほどの事は無いぢやないかね。」

「だから、阿母さんは私の心を知らないのだから、頼効が無い、と謂ふのよ。」

「多度お言ひな。」

「言ふわ。」

眞顏作れる母は火鉢の緣に丁と煙管を撃けば、他行持の暫く乾されて弛みし雁首は、ほつくり脫けて灰の中に舞込みぬ。

第四章

頭部に受けし貫一が挫傷は、危くも腦膜炎を續發せしむべかりしを、肢體に數個所の傷部と與に、其の免るべからざる若干の疾患を得たりしのみにて、今や日増に康復の歩を趁ひて、可艱げにも自ら起居を扶け得る身となりければ、一日一夜を爲す事も無く、ベッドの上に靜養を勉めざるべからざる病院の無聊をば、殆ど生きながら葬られたらんやうに倦み困じつゝ、彼は更に此病と相關する如く、關せざる如く併發したる別樣の苦惱の爲に侵さるゝなりき。

主治醫も、助手も、看護婦も、附添婆も、受附も、小使も、乃至患者の幾人も、皆目を側めて彼と最も密なる關係あるべきを疑はざるまでに、滿枝の頻繁病を訪ひ來るなり。三月に亘る久しきを彼の美しき姿の絶えず出入するなれば、噂は自から院内に播りて、博士の某さへ終に唆され

て、垣間見の歩を此に枉げられしとぞ傳へ侍る。始の程は何者の美形とも得知れざりしを、醫員の中に例の囮められしがありて、名著の美人クリイムと洩せしより、いとゞ人の耳を驚かし、目を悦ばす種とはなりて、貫一が浮名も之に伴ひて唱はれけり。

然りとは彼の曉るべき由無けれど、何の廉もあらぬに足近く訪はるゝを心憂く思ふ餘に、一度ならず滿枝に向ひて言ひし事もありけれど、見舞といふを陽にして訪ひ來るなれば、理として好意を拒絶すべきにあらず。然は謂へ、這は情の掛罠と知れば、又甘んじて受くべきにもあらず。而のみならで、彼は素より滿枝の爲人を惡みて、其貌の美しきを見ず、其思の切なるを汲まんともせざるに、猶且主ある身の謬りて仇名もや立たばなど氣遣はるゝに就けて、貫一は彼の入來るに會へば、冷き汗の湧出づると與に、創所の遽に疼き立ちて、唯異しくも己なる者の全く痺らさるゝに似たるを、吾ながら心弱しと尤むれども効無かりけり。實に彼は

日頃此頃を逃れん爲に、努めて此敵を避けてぞ過せし。今彼の身は第二醫院の一室に密封せられて、而も隱るゝ所無きベッドの上に横はれゝば、宛然俎板に上れる魚の如く、空しく他の爲すに委するのみなる仕合を、搔挘らんとばかりに悶ゆるなり。

係る苦しき枕頭に彼は又驚くべき事實を見出しつゝ、飜へつて己を顧れば、測らざる累の既に逮べる迷惑は、其の藁蒲團の內に針の包れたる心地して、今仍彼の病むと謂はゞ、恐くは外に三分を患ひて、內に却つて七分を憂ふるにあらざらんや。貫一も其をこそ懸念せしが、果して鰐淵は彼と滿枝との間を疑ひ初めき。彼は又鰐淵の疑へるに由りて、其人と滿枝との間をも畧推し得たるなり。

例の煩はしき人は今日も訪ひ來つ、而も仇ならず意を籠めたりと覺しき見舞物など持ちて。はや一時間餘を過せども、彼の枕頭を起ちつ、居つして、なか〳〵歸り行くべくも見えず。貫一は寄付けじとやうに彼方を

向きて、覺めながら目を塞ぎていと靜に臥したり。附添婆の折から出行きしを候ひて、滿枝は椅子を躙り寄せつゝ、

「間さん、間さん。貴方、貴方。」

と枕の端を指もて音なへど、眠れるにもあらぬ貫一は何の答をも與へず。滿枝は起ちてベッドの彼方へ廻り行きて、彼の寢顏を差覗きつ。

「間さん。」

猶答へざりけるを、輕く肩の邊を撼せば、貫一は然るをも知らざる爲は爲かねて、始めて目を開きぬ。彼は佯く覺めたれど、滿枝は仍ほ覺めざりし先の可懷しげに差寄りたる態を改めずして、其手を彼の肩に置き、其顏を彼の枕に近けたるまゝ、

「私貴方に些とお話を爲て置かなければならない事があるのでございますから、お聞き下さいまし。」

「あ、まだ在しつたのですか。」

「いつも長居を致して、然ぞ御迷惑でございませう。」

「……………………。」

「外でもございませんが…………。」

彼の隔無く身近に狎るゝを可忌しと思へば、貫一は故と寐返りて、椅子を置きたる方に向直り、

「どうぞ此方へ。」

此心を曉れる滿枝は、飽くまで憎き事爲るよと、持てるハンカチイフにベッドを打ちて、恪までに遇はれながら、仍ほ此人を慕はでは已まぬ我身かと、効無くも餘に輕く弄ばるゝを可愧うて佇みたり。然れども貫一は直に席を移さゞる滿枝の爲に、再び言を費さんとも爲ざりけり。

氣嵩なる彼は胸に餘して、聞えよがしに、

「唉、貴方には輕蔑されて居る事を知りながら、何爲私腹を立てるヿとが出來ないのでせう。實に貴方は！」

滿枝は彼の枕を提へて顫ひしが、貫一の寂然として眼を閉ぢたるを益苛ちて、

「餘り酷うございますよ。間さん、何とか有仰つて下さいましな。」

彼は堪へざらんやうに苦りたる口元を引歪めて、

「別に言ふ事はありません。第一貴方のお見舞下さるのは難有迷惑で……

……………。」

「何と有仰います！」

「以來はお見舞にお出で下さるのを御辭退します。」

「貴方、何と……………!!」

滿枝は眉を昂げて詰寄せたり。貫一は仰ぎて眼を塞ぎぬ。

素より彼の無愛相なるを滿枝は知れり。彼の無愛相の己に對しては更に甚しきを加ふるをも善く知れり。滿枝が手管は、今其外に顯せるやうに決して内に惊へかねたるにはあらず、恪して其人と諍ふも、亦慍はざる

戀の内に聊か樂む道なるを思へるなり。涙微紅めたる瞼に耀きて、いつや宿せる曉の葩に露の津々なる。

「お内にも御病人の在るのに、早く歸つて上げたが可いぢやありませんか。私も貴方に度々來て戴くのは甚だ迷惑なのですから。」

「御迷惑は始から存じて居ります。」

「いゝや、未だ外に此頃のがあるのです。」

「あゝ！　鰐淵さんの事ではございませんか。」

「まあ、然です。」

「それだから、私お話が有ると申したのではございませんか。それを貴方は、私と謂ふと何でも欝陶しがつて、如何に何でも那樣に作るものぢやございませんよ。其事ならば、貴方が御迷惑遊ばして被在るばかりぢやございません、私だつて甚麼に窮つて居るか知れは致しません。此間も鰐淵さんが可厭なことを有仰つたのです。私些も管ひは致しませんけ

れど、然でもない、貴方が此先御迷惑あそばすやうな事があつてはと存じて、私共を心配致して居るくらゐなのでございます。」

聴居ざるにはあらねど、貫一は絶えて應答だに爲ざるなり。

「實は疾からお話を申さうとは存じたのでございますけれど、那樣可厭な事を自分の口から吹聴らしく、却つて何も御存じない方が可からうと存じて、何も申上げずに居つたのでございますが、鰐淵樣の彼此有仰るのは今に始まつた事ではないので、もう私實に窮つて居るのでございます。始終好い加減なことを申しては遁げて居るのですけれど、鰐淵さんは私が貴方を這麼に……………と云ふ事は御存じなかつたのですから、それで濟んで居りましたけれど、貴方が御入院あそばしてから、私恁して始終お訪ね申しますし、鰐淵さんも頻繁被入るので、度々お目に懸る所から、何とかお想ひなすつたのでございませう。それで此間は到頭其を有仰つて、譯が有るなら有るで、隱さずに話をしろと有仰るのぢやござい

ませんか。私爲方がありませんから、お約束を忘たと申して了ひました。」

「え！」と貫一は繃帶したる頭を擡げて、彼の有爲顏を赦し難く打目戍れり。滿枝は有繫過を悔いたる風情にて、やをら左の袂を膝に搔載せ、牡丹の莟の如く揃へる紅絹裏の振を弄りつゝ、彼の咎を懼るゝ目遣為て居たり。

「實に怪しからん！　謔なことを有仰つたものです。」

萎るゝ滿枝を尻目に挂けて、

「もう可いから、早くお還り下さい。」

彼を喝せし怒に任せて、半起為たりし體を投倒せば、腰部の創所を強く抵てゝ、得堪へず呻き苦むを、不意なりければ滿枝は殊に惑ひて、

「どう遊ばして？　何處ぞお痛みですか。」

手早く夜着を揚げんとすれば、拂退けて、

「もうお還り下さい！」

言放ちて貫一は例の背を差向けて、遽に打鎮り居たり。

「私還りません！　貴方が然う酷く有仰れば、以上還りません。いつまでも居られる軀ではないのでございますから、順しく還るやうにして還して下さいまし。」

いとはしたなくて立てる滿枝は闥の啓くに驚かされぬ。入來れるは、附添婆か、あらず。看護婦か、あらず。國手の回診か、あらず。小使か、あらず。あらず！

胡麻鹽羅紗の地厚なる二重外套を絡へる魁肥の老紳士は悠然として入來りしが、内の光景を見ると齊く胸惡き色は衝と其面に出でぬ。滿枝は心に少く慌てたれど、然しも顯さで、窈かに小腰を屈めて、

「おや、お出あそばしまし。」

「ほゝ、是は、毎度お見舞下さつて。」

同じく慇懃に會釋はすれど、疑も無く反對の意を示せる金壺眼は光を逞

う女の横顔を瞥見せり。静に臥したる貫一は發作の來れる如き苦惱を感じつゝ、身を起して直行を迎ふれば、

「奈何じやな。好え方がお見舞に來て居つて下さるで、可えの。」

打付に過ぎし言を二人ともに快からず思へば、頓に答は無くて、其場の白けたるを、然こそと謂はんやうに直行の獨り笑ふなりき。如何に答ふべきか、如何に言釋くべきか、如何に處すべきかを思煩へる貫一は艱しげなる顏を稍内向けたるに、今はなか〳〵惡怯もせで滿枝は椅子の前なる手爐に寄りぬ。

「然しお宅の御都合もあるぢやらうし、又お忙しい所を度々お見舞下されては痛入ります。それに是の病氣も最早快うなるばかりぢやで御心配には及ばんで、以來お出で下さるのは何分お斷り申しまする。」

言黒めたる邪魔立を滿枝は面憎がりて、

「いゝえ、もう奈何致しまして、此の御近邊迄毎々次手がありますので

ございますから、其の御心配には及びません。」
直行の眼は再び輝けり。貫一は愍に彼を窘めじと、傍より言を添へぬ。
「毎度お訪ね下さるので、却つて私は迷惑致すのですから、どうか貴方から可然御斷り下さるやうに。」
「當人もお氣の毒に思うて那の樣に申すで、折角ではありますけど、決して御心配下さらんやうに、のう。」
「お見舞に上りましてはお邪魔になりまする事ならば、私差控へませう。」
滿枝は色を作して直行を打見遣りつゝ、其面を引廻して、旋て非ぬ方を目成りたり。
「いや、いや、な、決して、那樣譯ぢや…………。」
「餘りな御挨拶で！　女だと思召して有仰るのかは存じませんが、それまでのお指圖は受けませんで宜うございます。」
「いや、那樣に惡う取られては甚だ困る、畢竟貴方の爲を思ひますぢや

に因つて…………。」
「何と有仰います。お見舞に出ますのが、何で私の不爲になるのでございませう。」
「それにお心着が無い？」
其の能く用ゐる微笑を弄して、直行は巧に温顏を作れるなり。
滿枝は稍急立ちぬ。
「ございません！」
「それは、お若いで然う有らう。甚だ失敬ながら、すいぢや申して見やう。な。貴方もお若けりや間も若い。若い男の所へ若い女子が度々出入したら、那樣事は無うても、人が彼此言ひ易い、可いですか、而したら、間は左に右じや。赤樫樣と云ふ者のある貴方の軀に疵が付く。そりや、不爲ぢやありますまいか、あゝ。」
陰には己自ら更に甚しき不爲を強ひながら、人の口といふものゝ慤まで

に重寶なるが可笑し。と滿枝は思ひつゝも。
「それは御深切に難有う存じます。私は左も右、間さんは是からお美しい御妻君をお持ち遊ばす大事のお體で被在るのを、私のやうな者の爲に御迷惑遊ばすやうな事が御座いましては何とも濟みませんですから、私自今愼みますでございます。」
「是は太い失敬なことを申しましたに、早速お用ゐなさつて難有い。然し、間も貴方のやうな方と嘘にも彼此言るゝんぢやから、甚麼にも嬉いぢやらう、私のやうな老人ぢやつたら、死ぬほどの病氣したて、赤樫さんは訪ねても下さりや爲まいにな。」
貫一は苦々しさに聞かざる爲して居たり。
「那樣事が有るものでございますか、お見舞に上りますとも。」
「然やうかな。然し、這麼に度々來ては下さりやすまい。」
「それこそ、御妻君が在つしやるのですから、餘り頻繁上りますと……

……。」
後は得言はで打笑める目元の媚、ハンカチイフを口蔽にしたる差含さなど、直行はふと目を奪はれて、飽かず覺ゆるなりき。
「はつ、はつ、はつ、すぢや細君が無いで、此へは安心してお出かな。私は赤樫さんの處へ行つて言ひますぞ。」
「はい、有仰つて下さいまし。私此方へ度々お見舞に出ますことは、宅でも存じて居るのでございますから。唯今も貴方から御注意を受けたのでございますが、私も用を抱へて居る體で憖して上りますのは、お見舞に出なければ濟まないと考へまする譯がございますからで、其實、上りますれば、間さんは却つて私の伺ふのを懊惱く思召して被在るのですから、それは私のやうな者が餘り參つてはお目障か知れませんけれど、外の事ではなし、お見舞に上るのでございますから、那樣に作らなくても宜しいではございませんか。

然し、それでも私氣に懸つて、恁して上るのは、でございます、宅へお出になつた御歸途に此の御怪我なんでございませう。それに、未だ私濟みません事は、那時大通の方をお歸り遊ばすと有仰つたのを、津守坂へお出なさる方がお近いと然申してお勸め申すと、其途で此の御災難でございませう。で私考へるほど申譯が無くて、宅でも大相氣に致して、勉めてお見舞に出なければ濟まないと申すので、其の心持で毎度上るのでございますから、唯今のやうな御忠告を伺ひますと、私實に心外なのでございます。那樣にまで上れば、間さんは間さんでお喜が無いのでございませう。」

彼はいと辛しとやうに、恨めしとやうに、さては悲しとやうにも直行を視るなりけり。直行は又其の辛し、恨めし、悲しとやうの情に堪へざらんとする滿枝が顏をば、竊に金壺眼の一角を溶しつゝ眺入るにぞありける。

「然やうかな。如何さま、それで善う解りましたじや。太い御深切な事で、間も然ぞ滿足ぢやらうと思ひまする。又私からも、そりや厚うお禮を申しまするじや、で、な、お禮はお禮、今の御忠告は御忠告じや、惡う取つて下さつては困る。貴方が那樣に念うて、每々お訪ね下さると思や、私も實に嬉いで、折角の御好意をな、どうか卻くるやうな失敬なことは決して言ひたうはないんじや、言ふのはお爲を念ふからで、是も依樣年寄役なんぢやから、捨てゝ措けんで。年寄と云ふ者は、是で左右嫌はるゝじや。貴方も依樣年寄はお嫌ひぢやらう、あゝ。奈何ですか、あ、あ。」

赤髭を拈り〳〵て、直行は女の氣色を偸視つ。

「然やうでございます、お年寄は勿論結構でございますけれど、どう致しても若いものは若い同士の方が氣が合ひまして宜しいやうでございますね。」

「すぢやて、お宅の赤樫さんも年寄でせうが。」
「それでございますから、もう〳〵口喧しくてなりませんのです。」
「ぢや、口喧しうも、氣難しうもなうたら、奈何ありますか。」
「それでも私好きませんでございますね。」
「それでも好かん？　太う嫌うたもんですな。」
「尤も年寄だから嫌ふ、若いから一概に好くと申す譯には參りませんでございます。いくら此方から好きましても、他で嫌はれましては、何の効もございませんわ。」
「然やう、な。けど、貴方のやうな方が此方から好いたと言うたら、甚麼者でも可厭言ふ者は、ろりや無い。」
「那麼事を有仰つて！　如何でございますか、私那樣覺はございませんから、一向存じませんでございます。」
「然やうかな。はっはっ。然やうかな。はっはっはっはっ。」

椅子も傾くばかりに身を反して、彼は故とらしく搖上げ搖上げて笑ひたりしが、
「間、奈何ぢやらう。赤樫さんは那言うて居らるゝが、然うかの。」
「如何ですか、然云ふ事は。」
誰か烏の雌雄を知らんとやうに、貫一は冷然として嘯けり。
「お前も知らんかな、はっはっはっはっ。」
「私が自分にさへ存じませんものを、間さんが御承知有らう筈はございませんわ。ほゝほゝほゝ。」
其の故とらしさは彼にも遜らじとばかり、蒲枝は笑ひ噪せり。
直行が眼は誰を見るとしも無くて獨り耀けり。
「それでは私もうお暇を致します。」
「ほう、もう、お歸去かな。私もはや行かん成らんで、其所まで御一處に。」

「いえ、私些と、あの、西黒門町へ寄りますてございますから、甚だ失禮でございますが…………。」

「まあ、宜しい。其處まで。」

「いえ、本當に今日は…………。」

「まあ、宜しいが。實は、何じや、彼の旭座の株式一件な、話がつい纏りさうぢやで、此際お打合をして置かんと、(琴吹)の收債が面白うない。お目に掛つたのが幸ひやから、些と其のお話を。」

「では、明日にでも又。今日は些と急ぎますでございますから。」

「那樣に急にお急ぎにならんでも宜しいがな。商賣上には年寄も若い者も無い。然う嫌はれては奈何もならん。」

姑く推問答の末彼は終に滿枝を拉し去れり。迹に貫一は惡夢の覺めたる如く連に太息吁いたりしが、旋て爲ん方無げに枕に就きてよりは、見るべき物もあらぬ方に、止だ果無く目を奪れ居たり。

第五章

檜葉、樅などの古葉の黄しげなるを望むべき窓の外に、庭ともあらず打荒れたる廣場は、唯麗なる日影のみぞ饒に置餘して、そこらの梅の點々と咲初めたるも、自ら怠り勝に風情作らずと見ゆれど、春の色香に出でたるは憐むべく、打霞める空に來馴るゝ鵯のいとゞしく鳴頻りて、午後二時を過ぎぬる院内の寂々たるに、會ま響くは患者の廊下を緩う行くなり。

枕の上の徒然は、此時人を壓して殆ど重きを覺えしめんとす。書見せると見えし貫一は辛うじて夢を結び居たり。彼は實に夢ならでは有得べからざる怪しき夢に弄ばれて、躬も夢と知り、夢と覺さんとしつゝ、仍睡の中に囚れしを、端無く人の呼ぶに駭されて、漸く慵き枕を欹てつ。愕然として彼は瞳を凝せり。ベッドの傍に立てるは、其の怪しき夢の中

に顯れて、始終相離れざりし主人公其人ならずや。打返し〲視れども、訪來れる滿枝に紛あらざりき。とは謂へ、彼は夢か、あらぬかを疑ひて止まず。然るは其の眞ならんより仍夢の中なるべきを信ずるの當れるを思へるなり。美しさも常に增して、夢に見るべき姿などのやうに四邊も可耀しく、五六歳ばかりも若ぎて、其人の妹なりやとも見えぬ。まして六十路に餘れる夫有てる身と誰かは想ふべき。

髮を臺灣銀杏といふに結びて、飾とては故と本甲蒔繪の櫛のみを挿したり。黑縮緬の羽織の夢想裏に光琳風の春の野を色入に染めて、納戸縞の御召の下に濃小豆の更紗縮緬、紫根七絲に樂器盡の晝夜帶して、半襟は色絲の縫ある肉色なるが、頸の白さを匂はすやうにて、化粧なども良濃く、例の腕環のみは燦爛と煩し。今日は殊に推して來にけるを、得堪へず心の尤むらん風情にて佇める姿限無く嬌きて見ゆ。

「お寢のところを取んだ失禮を致しました。私上る筈ではないのでござ

いますけれど、是非申上げなければなりません事がございますので、些と伺ひましたのでございますから、今日の所はどうか御堪忍あそばして。」

彼の許を得んまでは席に着くをだに憚る如く、滿枝は漂しげに仍立てるなり。

「はあ、然やうですか。一昨々日那程申上げたのに……。」

内に燃ゆる憤を抑ふると與に貫一の言は絶えぬ。

「鰐淵さんの事なのでございますの。私困りまして、奈何いたしたら宜しいのでございませう！　間さん、恁なのでございますよ。」

「いや、其事なら伺ふ必要は無いのです。」

「あら、那樣ことを有仰らずに……。」

「失禮します。今日は腰の傷部が又痛みますので。」

「おや、それは、お劇いことはお在なさらないのでございますか。」

「いえ、何有。」

「どうぞお樂に在しつて。」

貫一は無雑作に郡内縞の掻巻引被けて臥しけるを、疎略あらせじと滿枝は勤篤に傅きて、旋て己も始めて椅子に倚れり。

「貴方の前で這麼事は私申上げ難いのでございますけれど、實は、あの一昨々日でございますね、那云ふ譯で鰐淵さんと御一處に參りました所が、御飯を食べるから何でも附合へと有仰るので、湯島の天神の茶屋へ寄りましたのでございます。然う致すと、案の定可厭らしい事をもうもう執濃く有仰るのでございます、而して飽くまで貴方の事を疑つて、始終其を有仰るので、私一番其には困りました。那の方もお年効の無い、物の道理がお解りにならないにも程の有つたもので、一體私を何と思召して被在るのか存じませんが、客商賣でも為て居る者に戯れるやうな事を、それも一度や二度ではないのでございますから、私殘念で、一昨々日なども泣いたのでございます。で、此後二度と那樣事の有仰れないや

うに、私其場で十分に申したことは申しましたけれど、變に氣を廻して被在る方の事でございますから、取んだ八當で貴方へ御迷惑が懸りますやうでは、何とも私申譯がございませんから、どうぞ其だけお含み置き下さいまして、惡からず…………。

今度お會ひあそばしたら、鰐淵さんが何とか有仰るかも知れません。然ぞ御迷惑で被在いませうけれど、そこは宜しいやうに有仰つて置いて下さいまし。それも貴方が何とか些でも思召して被在る方とならば、那樣事を有仰られるのも亦何でございませうけれど、嫌拔いてお在遊ばす私のやうな者と譯でもあるやうに有仰られるのは、然ぞお辛くて被在いませうけれど、私のやうな者に見込れたのが因果とお諦め遊ばせまし。貴方も因果なれば、私も…………私は猶因果なのでございますよ。恁云ふのが實に因果と謂ふのでございませうね。」

金煙管の莨の獨り杳眇と燻るを手にせるまゝ、滿枝は儚さの遣方無げに

萎れ居たり。然るをも見向かず、答へず、頑として石の如く横れる貫一。
「貴方もお諦め下さいまし、全く因果なのでございますから、切めて然と諦めてゞも居て下されば、それだけでも私幾分か思が透つたやうな氣が致すのでございます。
間さん、貴方は過日私が這麼に思つて居ることを何日までもお忘れないやうにと申上げたら、お志は決して忘れんと有仰いましたね。お覺えあそばして被在いませう。ねえ、貴方、よもやお忘れは無いでせう。如何なのでございますよ。」
勢ひて問詰むれば、極めて事も無げに、
「忘れません。」
滿枝は彼の面を絕に怨視て瞬も爲ず、爾時人聲して闥は徐に啓きぬ。
案内せる附添の婆は戸口の外に立ちて請じ入れんとすれば、客は其の老に似氣なく、今更内の樣子に心惑せらるゝ體にて、彼にさへ可愼しう小

聲に言付けつゝ名刺を渡せり。
滿枝は如何なる人かと瞥と見るに、白髪交りの髯は長く胸の邊に垂れて、篤實の面貌瘦せたれども賤しからず、長は高しとにあらねど、素より腴にもあらざりし肉の自ら齡の衰に削れたれば、冬枯の峯の抽けるやうに聳えても見ゆ。衣服など然る可く、程を守りたるが奥幽しくて、誰とも知らねど有繫に疎ならず覺えて、彼は早くも此賓の席を設けて待てるなりき。
貫一は婆の示せる名刺を取りて、何心無く打見れば、鴫澤隆三と誌したり。色を失へる貫一は其の堪へかぬる驚愕に驅れて、忽ち身を飜して其方を見向かんとせしが、幾と同時に又枕して、終に動かず。狂ひ出でんずる息を嚴く閉ぢて、燃るばかりに瞋れる眼は放たず名刺を見入りたりしが、然しも内なる千萬無量の思を裹める一點の涙は不覺に滾び出でぬ。
這は怪しと思ひつゝも婆は、

「此方へお通し申しませうて…………。」

「知らん！」

「はい？」

「這麼人は知らん。」

人目あらずば引裂き棄つべき名刺よ、瀆はしと投返せば床の上に落ちぬ。彼は強ひて目を塞ぎ、身の顫ふをば吾と吾手に抱窘めて、恨は忘れずとも憤は忍ぶべしと、撻たんやうにも己を制すれば、髪は逆堅ち蠢きて、頭腦の裏に沸騰る血は其の欲するまゝに注ぐ所を求めて、心も狂へと亂螫すなり。彼は之と爭ひて猶も抑へぬ。面色は漸く變じて灰の如し。婆は懼れたる目色を客の方に忍ばせて、

「御存じないお方なので？」

「一向知らん。人違だらうから、斷つて返すが可い。」

「然やうでございますか、それでも、貴方樣のお名前を有仰つてお尋ね

…………。」

「あゝ、何でも可いから早く断つて。」

「然やうでございますか、それではお断り申しませうかね。」

（五）の二

婆は鴫澤の前に其趣を述べて、投棄てられし名刺を返さんとすれば、手を後様に束ねたるまゝに受取らで、強ひて面を和ぐるも苦しげに見えぬ。

「あゝ、然やうかね、御承知の無い譯は無いのだ。はゝは、大分久しい前の事だから、お忘れになつたのか知れん、それでは宜い、私が直にお目に掛らう。此の部屋は間貫一さんだね、あゝ、それでは間違無い。」

屹と思案せる鴫澤の椅子ある方に進み寄れば、滿枝は座を起ち、會釋して、席を薦めぬ。

「貫一さん、私だよ。久しう會はんので忘れられたかのう。」

室の隅に婆が茶の支度せんとするを、滿枝は自ら行きて手を下し、或は指圖もし、又自ら持來りて薦むるなど尋常の見舞客にはあらじと、鴫澤は始めて此女に注目せるなり。貫一は知らざる如く彼方を向きて答へず。

仔細こそあれとは覺ゆれど、例の此人の無愛相よ、と滿枝は傍に見つゝも憫に可笑かりき。

「貫一さんや、私だ。疾にも訪ねたいのであつたが、何にしろ居所が全然知れんので。一昨日ふと聞出したから不取聊悉して出向いたのだが、病氣は奈何かのう。何か、大怪我ださうではないか。」

猶も答のあらざるを腹立しくは思へど、滿枝の居るを幸に、

「睡て居りますですかな。」

「はい、如何でございますか。」

彼は此の長者の窘めるを傍に見かねて、貫一が枕に近く差寄りて窺へば、淚の顏を褥に擦付けて、急上げ〳〵肩息して居たり。何事とも覺えず驚かされしを、色にも見せず、怪まるゝをも言に出さず、些の心着さへあらぬやうに擬して、

「お客樣が被入いましたよ。」

「今も言ひました通り、一向識らん方なのですから、お還し申して下さい。」
彼は面を伏せて又言はず。滿枝は早くも其意を推して、亦多くは問はず。席に復りて、
「お人違ではございませんでせうか。どうも御覺が無いと有仰るのでございます。」
長き髯を推揉みつゝ、鴫澤は爲方無さに苦笑して、
「人違とは如何なことでも！　五年や七年會はんでも私は未だそれほど老耄はせんのだ。然し覺が無いと言へば其迄の話、覺もあらうし、人違でもなからうと思へばこそ、恁して折角會ひにも來たらうと謂ふもの。老人の私が故々恁して出向いて來たのでのう、そこに免じて、些とでも會うて貰ひませう。」
挨拶如何にと待てども、貫一は音だに立てざるなり。

「それぢや、何かい、這麼に言うても不承してはくれんのかの。あゝ、然やうか、是非が無い。

然し、貫一さん、能う考へて御覽、まあ、私たちの事を奈何思うて居らるゝか知らんが、お前さんの爾來の爲方、又今日の此の始末は、ちと妥當ならんではあるまいか。左に右鴫澤の翁に對して惡う爲たものではなからうと思うが奈何であらうの。成程お前さんの方にも言分はあらう、それも聞きに來た。私の方にも少しく言分の無いではない、それも聞かせたい。然し、惡して故々尋ねて來たものであるから、此方では既に折れて出て居るのだ。而してお前さんに會うて話と謂ふは、決して身勝手な事を言ひに來たぢやない、猶且其方の身の上に就いて善かれと計ひたい老婆心切。私の方では其の當時に在つてもお前さんを棄てた覺は無し、又今日も五年前も同じ考量で居るのだ。それを、まあ、若い人の血氣と謂ふのであらう、唯一圖に思ひ込んで誤解されたのが、私は如何にも殘

念でならん。今日迄も誤解されて居るのは愈よ心外だで、お前さんの住所の知れ次第早速出掛けて來たのだ。凡そ此方の了簡を誤解されて居るほど心苦しい事は無い。人の爲に謀つて、而して僅の行違から恨まれる、恩に被せうとて謀つたてはないが、恨まれやうとは誰にしても思はん。で、那して睦しう一家族で居つて、私たちも死水を取つて貰ふ意であつたものを、僅の行違から音信不通の間になつて了ふと謂ふは、何ともはや淺ましい次第で、私も誠に寐覺が惡からうと謂ふもの、實に姨とも言暮して居るのだ。私の方では何處までも舊通りになつて貰うて、早く隱居でもしたいのだ。それも然しお前さんの了簡が釋けんでは話が出來ん。其話は二の次としても、差當り誤解されて居る一條だ。會うて篤と話をしたら直に譯は分らうと思うで、是非一通りは聞いて貰ひたい。其上でも心が釋けん事なら、どうも其迄。私はお前さんの親御の墓へ詣つて、のう、抑もお前さんを引取つてから今日までの來歷を在樣陳べて。鴫澤

は是〳〵の事を爲、偖〳〵思ひまする、けれども成行で偖云ふ始末になりましたのは、殘念ながら致方が無い、と丁とお分疏を言うて、而して私は私の一分を立てゝから立派に縁が切りたいのだ、のう。はや五年も便を爲んのだから、お前さんは縁を切つた氣であらうが、私の方では未だ縁は切らんのだ。

私は考へる、設へば此の鴫澤の翁の爲た事が不都合であらうか知れん、けれども間貫一たる者は唯一度の不都合ぐらゐは如何にも我慢をしてくれんければ成るまいかと思ふのだ。又其の我慢が成らんならば、最少し妥當に事を爲てもらひたかつた。私の方に言分のあると謂ふのは其處だ。言はせれば其通り私にも言分はある、然し、那樣事を言ひに來たではない、私の方にも如何樣手落があつたて、其詫も言はうし、又昔も今も此方には心持に異變は無いのだから、それが第一に知らせたい。翁が久しぶりで來たのだ、のう、貫一さん、今日は何も言はずに淸う會うてくれ。」

曾て聞かざりし戀人が身の上の秘密よ、と滿枝は奇しき興を覺えて耳を傾けぬ。

我強くも貫一の仍言はんとはせざるに、漸く怺へかねたる鴫澤の翁は矢庭に椅子を起ちて、强ひても其の顏見んと步み寄れり。事の由は知るべきやう無けれど、此客の言を盡せるにも理聞えて、無下に打も棄てられず、然れども貫一が唯淚を流して一語を出さず、いと善く識るらん人をば覺無しと言へる、是にもなか〳〵所謂はあらんと推測るれば、一も二も無く滿枝は戀人に與して此場の急を拯はんと思へるなり。

枕頭を窺ひつゝ危む如く眉を攅めて、鴫澤の未だ言出でざる時、

「私看病に參つて居ります者でございますが、何方樣で被在いますか存じませんが、此の一兩日病人は熱の氣味で始終昏々いたして、時々譫語のやうな事を申して、泣いたり、慍つたり致すのでございますが、………………。」

頭を捻向けて滿枝に對せる鴫澤の顏の色は、此時故に解きたりと見えぬ。
「はあ、は、然やうですかな。」
「先程から伺ひますれば、年來御懇意で被在るのを人違だとか申して、大相失禮を致して居るやうでございますが、依樣熱の加減で前後が解りませんのでございますから、どうぞお氣にお懸け遊ばしませんやうに。此熱も直に除れまするさうでございますから、又改めてお出を願ひたう存じます。今日は私御名刺を戴いて置きまして、お輕快なり次第私から悉くお話を致しますでございます。」
「はあ、其はゝゝ。」
「實は、何でございました、昨日もお見舞にお出で下すつたお方に變な事を申掛けまして、何も病氣の事で爲方もございませんけれど、私弱り切りましたのでございます。今日は又如何致したのでございますか、昨日とは全て反對で那の通り默り切つて居りますのですが、却つて無闇な

ことを申されるよりは始末が宜いでございます。」

恪ても始末は善しと謂ふかと、翁は打蹙むべきを強ひて易へたるやうの笑を洩せば、滿枝は其の言了せしを喜べるやうに笑ひぬ。彼は婆を呼びて湯を易へ、更に熱き茶を薦めて、再び客を席に着かしめぬ。

「然云ふ譯では話も解りかねる。では又上る事に致しませう。手前は鴫澤隆三と申して――名刺を差上げて置きまする、之に住所も誌してあります――貴方は失禮ながら猶且鰐淵さんの御親戚でゞも？」

「はい、親戚ではございませんが、鰐淵さんとは父が極御懇意に致して居りますので、それに宅が此の近所でございますもので、ちよく／＼お見舞に上つてはお手傳を致して居ります。」

「はゝ、然やうで。手前は五年ほど掛違うて間とは會ひませんので、どうか去年あたり嫁を娶うたと聞きましたが、如何いたしましたな。」

彼は此の美しき看病人の素性知らまほしさに、あらぬ問をも設けたるな

り。

「然やうな事はついに存じませんですが。」

「はて、然とばかり思うて居りましたに。」

容儀人の娘とは見えず、妻とも見えず、而も綺粲しう裝飾れる樣は、色を賣る儔にやと疑はれざるにはあらねど、言辭行儀の端々自ら然にもあらざる、畢竟是何者と、鴫澤は容易に其の一斑をも推し得ざるなりけり。然れども、懇意と謂ふも、手傳と謂ふも、皆詐ならんとは想ひぬ。正き筋の知邊にはあらで、人の娘にもあらず、又貫一が妻と謂ふにもあらずして、深き譯ある內證者なるべし。若し然もあらば、貫一は其身の境遇と與に墮落して性根も腐れ、身持も頽れたるを想ふべし、左右は好みて昔の緣を繫ぐべきものにあらず。如此き輩を出入せしむる鴫澤の家は、終に不慮の禍を招くに至らんも知るべからざるを、と彼は心中遽に懼を生じて、さては彼の恨深く言を容れざるを幸に、今日は一先立還りて、

尙ほ一層の探索と一番の熟考とを遂げて後、來る可くは再び來らんも晩からず、と失望の裏別に幾分の得る所あるを私に喜べり。

「いや、是は奈何も圖らずお世話樣に成りました。いづれ又近日改めてお目に掛りまするで、失禮ながらお名前を伺うて置きたうござりまするが。」

「はい、私は。」　と紫根鹽瀨の手提の中より小形の名刺を取出して、

「甚だ失禮でございますが。」

「はい、是は。　赤樫滿枝さまと有仰いますか。」

此女の素性に於ける彼の疑は益暗くなりぬ。夫有てる身の我は顏に名刺を用意せるも似氣無し、まして裏面に横文字を入れたるは、猶可愼からず。應對の嫻にして人馴れたる、服裝などの當世風に貴族的なる、或は歐羅巴的女子職業に自營せる人などならずや。但し其の餘に色美きが、又然る際には相應からずも覺えて、這は終に一題の麗しき謎を彼に與ふ

るに過ぎざりき。鴫澤の翁は貫一の冷遇に慍るをも忘れて、此謎の爲に苦められつゝ病院を辭し去れり。

客を送り出でし滿枝の內に入り來れば、ベッドの上に貫一の居丈高に起直りて、瘦盡れたる拳を握りつゝ、咄々、言はて忍びし無念に堪へずして、獨り疾視の瞳を凝すに會へり。

第六章

數日前より鰐淵が家は燈の點る頃を期して、何處より來るとも知らぬ一人の老女に訪るゝが例となりぬ。其人は齡六十路餘に傾きて、顔は皺みたれど膚清く、切髮の容などなか〳〵由ありげにて、風俗も見苦しからず。唯異樣なるは茶微塵の御召縮緬の被風をも着ながら、更紗の小風呂敷包に油紙の上掛したるを矢筈に負ひて、薄穢き護謨底の運動靴を履いたり。

所用は折入つて主に會ひたしとなり。生憎にも來る度他出中なりけれど、本意無げにも見えて急ぎ歸り、飽きもせずして通ひ來るなりけり。お峯は漸く怪しと思初めぬ。

彼の恰も三日續けて來れる日、其の擧動の常ならず、殊には眼色凄く、憚も無く人を目戍りては、時ならぬに獨り打笑む顔の坐寒きまでに可恐

きは、狂人なるべし、而も夜に入るを候ひ、時をも差へず訪ひ來るなど、我家に祟を作すにはあらずや、とお峯は遽に懼を抱きて、とても一度は會ひて、又と足踏せざらんやう、唯管直行に其の始末を頼みければ、今日は用意して、四時頃にはや還り來にけるなり。

「どうも貴方、他は氣違ですよ。それでも品の良いことは、些とまあ旗本か何かの隱居さんと謂つたやうな、然し一體、鼻の高い、目の大きい、瘦せた面長な、怖い顏なんですね。戶外へ來て案內する時の其聲といふものが、實に無いんですよ。每でも極つて、(賴みます、はい賴みます。)と恁う窕に、緩り二聲言ふんで。もう〳〵其聲を聞くと慄然と爲て、あゝ可厭だ。何だつて又那麽氣違なんぞが來出したんでせう、本當に緣起でもない！」

お峯は柱なる時計を仰ぎぬ。燈の點るには未だ間ありと見るなるべし。

直行は可難げに眉を寄せ、脣を引結びて、

「何者か知らんて、一向心當と謂うては無い。名は言はんて？」
「聞きましたけれど言ひませんの。あの樣子ぢや名なんかも解りは爲ますまい。」
「而して今晩來るのか。」
「來られては困りますけれど、屹度來ますよ。那麼のが毎晩々々來られては耐りませんから、貴方本當に、來ましたら篤り說諭して、もう來ないやうに作つて下さいよ。」
「そりや受合へん、他が氣違ぢやもの。」
「氣違だから私も氣味が惡いからお賴み申すのぢやありませんか。」
「幾多賴まれたてヽ、氣違ぢやもの、俺も爲やうは無い。」
賴める夫の然しも思はで賴無き言に、お峯は力落して且は尠からず心慌つるなり。
「貴方でも可けないやうだつたらば、巡査に然う言つて引渡して遣りま

せう。」

直行は打笑へり。

「まあ、那樣に騷がんとも可え。」

「騷ぎはしませんけれど、私は可厭ですもの。」

「誰も氣違の好えものは無い。」

「それ、御覽なさいな。」

「何じや。」

知らず、其の老女は何者。狂か、あらざるか、合力か、物賣か、將主の知人か、正體の顯るべき時は係る裏にも一分時毎に近くなりき。

終日灰色に打曇りて、薄日をだに吝みて洩さゞりし空は漸く暮れんとして、彌增す寒さは怪しからず人に逼れば、幾分の凌ぎにもと家々の戶は例よりも早く鎖されて、仍ほ稍明く其の色厚氷を懸けたる如き西の空より、隱々として寂しき餘光の遠く來れるが、遽に去るに忍びざらんやう

に彷徨へる巷の此處彼處に、軒ラムプは既に點し了りて、新に白き焰を放てり。

一陣の風は砂を捲きて起りぬ。怪しの老女は此風に吹出されたるが如く姿を顯はせり。切髪は亂れ逆堅ちて、披拂と飄る裾袂に靡されつゝ漂はしげに行きつ留りつ、町の南側を辿り〳〵て、鰐淵が住へる横町に入りぬ。銃槍の忍返を打ちたる石塀を溢れて一本の梅の咲誇れるを、斜に軒ラムプの照せるが其門なり。

彼は殆ど我家に歸り來れると見ゆる態度にて、從々と寄りて戸を啓けんとしたれど、啓かざりければ、彼の窕に緩しと謂ふ聲して、

「頼みます、はい、頼みます。」

風は颯々と鳴りて過ぎぬ。此聲を聞きしお峯は竦みて立たず。

「貴方、來ましたよ。」

「うん、那か。」

實に直行も氣味好からぬ聲とは思へり。小鍋立せる火鉢の角に猪口を措き、燈を持て來よと婢に命じて、玄關に出でけるが、先づ戶の內より、

「はい何方ですな。」

「旦那はお宅でございませうか。」

「居りますが、何方で。」

答はあらで、呟くか、囁くか、小聲ながら頻に物言ふが聞ゆるのみ。

「何方ですか、お名前は何と有仰るな。」

「お目に掛れば解ります。何に致せ、おゝお、まあ、梅が好く咲きましたぢやございませんか。當日の挿花は依樣此の梅が宜からうと存じます。さあ、どうぞ此方へお入り下さいまし、御遠慮無しに、さあ。」

啓けんとせしに啓かざれば、彼は戶を打叩きて劇しく案內す。さては狂人なるよと直行も迷惑したれど、此儘にては逐ふとも立去るまじきに、一度は會うて左にも右にも爲んと、心ならずも戶を開けば、聞きしに差

はぬ老女は入來れり。
「鰐淵は私ぢやが、何ぞ用かな。」
「おゝ、おまへが鰐淵か！」
衝と乘出して其面に瞳を据ゑられたる直行は、鬼氣に襲はれて忽ち寒く戰けるなり。熟くと見入る眼を放つと共に、老女は皺手に顏を掩ひて潸潸と泣出せり。呆れ果てたる直行は金壺眼を凝して其の泣くを眺むる外はあらざりけり。
彼は泣きて〳〵止まず。
「解らんな！　一體何云ふんか、あゝ、私に用と云ふのは？」
朽木の自ら頽れ行くらんやうにも打萎れて見えし老女は、猛然として振仰ぎ、血聲を搾りて、
「此の大騙め！」
「何ぢやと！」

から、早く落してお了ひなさい。」

有繋に持扱ひて直行の途方に暮れたるを、老女は目を繊めて、何處より出づらんやとばかり世にも奇しき聲を發ちて緩く笑ひぬ。彼は謂知らぬ凄氣に打れて、覺えず肩を聳かせり。

懲役と言ひ、雅之と言ふに因りて、彼は始めて此の狂女の身元を思合せぬ。彼の債務者なる飽浦雅之は、私書僞造罪を以つて彼の被告として此の十數日前、罰金十圓、重禁錮一箇年に處せられしなり。實に其の母なり。其母は之が爲に亂心せしか。

爾思へりしのみにて直行は其他に猶も思ふべき事あるを思ふを欲せざりき。雅之の私書僞造罪をもて刑せられしは事實の表にして、其罪は裏面に彼の謀りて陷れたるなり。

彼等の用ゐる惡手段の中に、人の借るを求めて連帶者を得るに窮するあれば、其の一判にても話合の上は貸さんと稱へて先づ誘ひ、然る後、但

し證書の體を成さしめんが爲、例の如く連帶者の記名調印を要すればとて、假に可然き親族知己などの名義を私用して、在合ふ印章を捺さしめ、固より懇意上の内約なれば其の僞なるを咎めず、と手輕に持掛けて、實は法律上有効の證書を造らしむるなり。借方も愆る所業の不義なるを知ると雖も、一は焦眉の急に迫り、一は期限内にだに返辨せば何事もあらじと姑息して、此の術中には陷るなりけり。

期に迨びて還さゞらんか、彼は忽ち爪牙を露し、陰に告訴の意を示して之を脅し、散々に不當の利を貪りて、其の肉盡き、骨枯るゝの後、猶ほ饜く無き慾は、更に件の連帶者に對して寐耳に水の強制執行を加ふるなり。之を表沙汰にせば、債務者は論無う刑法の罪人たらざるべからず、是に於て誰か恐慌し、狼狽し、惱亂し、號泣し、死力を竭して七所借の調達を計らざらん。此時魔の如き力は喉を扼して其背を搏つ、人の死と生とは渾て彼が手中に在りて緊握せらる、欲する所として得られざるは無

地には落さじとやうに慌て惶き、油紙もて承けんと爲る、其の利腕を矢庭に捉へて直行は格子の外へ擸さんと爲たり。彼は推れながら格子に縋りて差理無理爭ひ、

「えゝ、おのれは他を此崖から突落す氣だな。此の老婦を騙討に爲るのだな。」

喚きつゝ身を捻返して、突掛けし力の怪しき強さに、直行は踏辷らして尻居に倒るれば、彼は囃し立てゝ笑ふなり。忽ち起上りし直行は彼の衿上を揉摑みて、力まかせに外方へ突遣り、手早く雨戸を引かんとせしに、軋みて動かざる間に又駈戻りて、狂女は其の凄しき顔を戸口に顯せり。餘りの可恐さに直行は吾を忘れて其顔を礑と撲ち、痿む所を得たりと鎖せば、外より割るゝばかりに戸を叩きて、

「さあ、首を渡せ。大事な證文も取上げて了つたな、大事な靴も取つたな。靴盗坊、大騙！首を寄來せ、首を寄來せ。」

直行は佇みて様子を候ひ居たり。拔足差足忍び來れる妻は、後より小聲に呼びて、

「貴方、奈何爲ました。」

夫は戸の外を指して仍去らざるを示せり。お峯は土間に護謨靴と油紙との遺散れるを見付けて、由無き質を取りけるよと思ひ煩へる折しも、

「頼みます、はい、頼みますよ。」

と例の聲は聞えぬ。お峯は胴顫して、長く此に留るに堪へず、夫を勸めて奥に入りけり。

戸叩く音は後も撓まず響きたりしが、直行の裏口より出でゝ窺ひける時は、風吹荒ぶ門の梅の飛雪の如く亂點して、燈火の微に照す處其影は見えざるなりき。

次の日も例刻になれば狂女は又訪ひ來れり。主は不在なりとて、婢をして彼の遺せし二品を返さしめけるに、前夜の暴れに暴れし氣色は無くて、

殊勝に聞分けて歸り行きぬ。

お峯は其翌日も必ず來るべきを懼れて夫の在宅を請ひけるが、果して來にけり。又試に婢を出して不在の由を言はしめしに、這回は直に立去らで、

「それぢやお歸來まで此でお待ち申しませう。實はね、是非お受取申す品があるので、其を持つて歸りませんと都合が惡いのですから、幾日でもお待ち申しますよ。」

彼は門口に蹲りて動かず。婢は樣々に言作へて賺しけれど、一聲も耳には入らざらんやうに、石佛の如く應ぜざるなり。彼は已む無く之を奧へ告げぬ。直行も爲ん術あらねば棄措きたりしに、良二時間も居て見えずなりぬ。

お峯は心苦しがりて、此上は唯警察の手を借らんなど噪ぐを、直行は人を煩はすべき事にはあらずとて聽かず。然らば又と來ざらんやうに逐拂

ふべき手立のありやと責むるに、害を爲すにもあらねば、宿無犬の寐たると想ひて意に介るなとのみ。意に介くまじき如きを故に夫にえ學ばじ、と彼は腹立しく思へり。此一事のみにあらず、お峯は常に夫の共に謀ると謂ふことと無くて、女童と侮れるやうに取合はぬ風あるを、口惜くも可恨くも、又或時は心細さの便無き餘に、神を信ずる念は出でゝ、夫の頼むに足らざる所をば神明の冥護に據らんと、八百萬の神といふ神は差別無く敬信せるが中にも、維に數年前より新に神道の一派を開きて、天尊敎と稱ふるあり。神體と崇めたるは、其光紫の一大明星にて、御名を大御明尊と申す。天地渾沌として日月も未だ成らざりし先高天原に出現ましませしに因りて、天上天下萬物の司と仰ぎ、諸の足らざるを補ひ、總て缺けたるを完うせしめんの大御誓をもて國土百姓を寧けく惠ませ給ふとなり。彼は夙に起信して、此尊をば一身一家の守護神と敬ひ奉り、事と有れば祈念を凝して偏に頼み聞ゆるにぞありける。

此夜は別して身を淨め、御燈の數を獻げて、災難即滅、怨敵退散の祈願を籠めたりしが、翌日の點燈頃ともなれば、又來にけり。夫は出でゝ未だ歸らざれば、今日若し罵り躁ぎて、內に躍入ることもやあらば如何せんと、前後の別知らぬばかりに動顚して、取次には婢を出し遣り、躬は神棚の前に駈着け、顫聲を打揚げ、丹精を抽でゝ祝詞を宣り居たり。狂女は不在と聞きて敢て爭はず、昨日の如く、此にて歸來を待たんとて、同じき處に同じき形して蹲れり。婢は格子を鎖し固めて內に入りけるが、暫くは音も爲ざりしに、遽に物語る如き、或は罵る如き聲の頻に聞ゆるより、主の知らで歸來て捉へられたるにもあらずや、と臺所の小窓より差覗けば、彼の外には人も在らぬに、在るが如く語るなり。其の語る所は婢の耳に聞分けかねたれど、我子が此の主に欺かれて無實の罪に陷されし段々を、前後不揃に泣いつ怒りつ訴ふるなりけり。

第七章

子の讐なる直行が首を獲んとて、夕々に狂女の訪ひ來ること八日に迨べり。淺ましとは思へど、逐ひて去らしむべきにあらず、又門口に居たりとて人を騷がすにもあらねば、左にも右にも手を着けかねて棄措るゝなりき。直行が言へりし如く、畢竟彼は何等の害をも加ふるにあらざれば、犬の寐たると太だ擇ばざるべけれど、縮緬の被風着たる人の形の黃昏るる門の薄寒きに踞ひて、灰色の剪髪を搔亂し、妖星の光にも似たる眼を睨反して、笑ふかと見れば泣き、泣くかと見れば憤り、己の胸のやうに際も知らず黑く濁れる夕暮の空に向ひて其の悲と恨とを訴へ、腥き油紙を拈りては人の首を獲んと待つなる狂女！　縱し今は何等の害を加へずとも、終には此家に祟を作すべき望を繫くるにあらずや。人の執着の一念は水をも火と成し、山をも海と成し、鐵を劈き、巖を碎くの例、まし

てや家を滅し、人を塵にすなど、塵を吹くよりも易かるべきに、可恐しや、事無くてあれかしと、お峯は獨り謂知らず心を傷むるなり。夫は決して雅之の私書僞造を己の陷れし巧なりとは彼に告げざれば、惡は正しく狂女の子に在りて、此方に恨を受くべき筋は無く、自ら係る事も出來るは家業の上の勝負にて、又一方には貸倒の損耗あるを思へば、所詮仕し、仕さるゝは商の習と、お峯は自ら意を強うして、此の老女の狂を發せしを、夫の爲せる業とは毫も思ひ寄するにあらざりき。然は謂へ、人の親の切なる情を思へば、實に然ぞと肝に徹ふる節無きにもあらざるめり。大方係る筋より人は恨まれて、奇しき殃にも遭ふなれば、と、唯思過されては窮無き恐怖の募るのみ。

日に〳〵狂女の忘れず通ひ來るは、陰ながら我等の命を絶たんが爲にて、多時門に居て動かざるは、其の妄執の念力を籠めて夫婦を呪ふにあらずや、と幾と信ぜらるゝまでにお峯が夕暮の心地は譬へん方無く惱されぬ。

然れば狂女の門に在る間は、大御明尊の御前に打頻り祝詞を唱ふるにあらざれば凌ぐ能はず。係る中にも心に些の弛あれば、煌々と耀き遍れる御燈の影遽に晦み行きて、天尊の御像も朧に消失せなんと吾目に見ゆるは、納受の恵に泄れ、擁護の綱も切れ果つるやと、彼は身も世も忘るゝばかりに念を籠め、烟を立て、汗を流して神慮を驚かすにぞありける。
槍は降りても必ず來べし、と震慴れながら待たれし九日目の例刻になりぬれど、如何にしたりけん狂女は見えず。鋭く冱返りたる此日の寒氣は鍼もて膚に霜を種うらんやうに覺えしめぬ。外には烈風怒り號びて、樹を鳴し、屋を撼し、砂を捲き、礫を飛して、曇れる空ならねど吹揚げらるゝ埃に蔽れて、一天晦く亂れ、日色黄に濁りて、殊に物可恐き夕暮の氣勢なり。
鰐淵が門の燈は硝子を二面まで吹落されて、火は消え、ラムプは覆りたり。內の燈火は常より鮮に主が晩酌の喫臺を照し、火鉢に架けたる鍋の

物は沸々と薫じて、はや一銚子更へたるに、未だ狂女の音容はあらず。

お峯は半危みつゝも幾分の安堵の思を弄び喜ぶ風情にて、

「氣違さんも此風には弱つたと見えますね。もう毎も屹度來るのに來ませんから、今夜は來やしますまい、何ぼ何でも此風ぢや吹飛されて了ひませうから。あゝ、眞に天尊樣の御利益があつたのだ。」

夫が差せる猪口を受けて、

「お相をしませうかね。何は無くても這麼好い心持の時に戴くとお美いものですね。いゝえ、然う續けては迚も……まあ、貴方。おや〳〵もう七時廻つたんですよ。そんなら斷然今晩は來ないと極りましたね。ぢや、戸締を爲して了ひませうか。眞に今晩のやうな氣の霽々した、心の底から好い心持の事はありませんよ。那の氣違さんぢや甚麼に壽を短めたか知れはしません。もう是限來なくなるやうに天尊樣へお願ひ申しませう。はい、戴きませう、御酒もお美いものですね。何有那の婆さんが

唯怖いのぢやありませんよ。それは氣味は惡うございますけれどもさ、怖いより、氣味が惡いより、何と無く凄くて耐らないんです。他が來ると、悚然と、惣毛竪つて體が竦むのですもの、唯の怖いとは違ひますわね。それが、何だか、恁う執着れてもするやうな氣がして、あの、それ、能く夢で可恐い奴なんぞに追懸けられると、迯げるには迯げられず、聲を出さうとしても出ないので、奈何なる事かと思ふ事がありませう、とんと那麼やうな心持なんで。あゝ、もう那樣話は止しませう。私は少し醉ひました。」

銚子を更へて婢の持來れば、

「金や、今晩は到頭來ないね、氣違さんさ。」

「好い鹽梅でございます。」

「お前には後でお菓子を御褒美に出すからね。貴方、是は那の氣違さんと此頃懇意になつて了ひましてね、氣違の取次は金に限るのです。」

「あら可厭なことを有仰いまし。」

吹來り、吹去る風は大浪の寄せては返す如く絕間無く轟きて、其の劇さは柱などをひちひちと鳴搖がし、物打倒す犇き、引斷る音、壓折る響は此處彼處に聞えて、唯居るさへに膽は冷されぬ。長火鉢には怠らず炭を加へ〱、鐵瓶の湯氣は雲を噴くこと頻なれど、更に背面を壓する寒は鐵板などや負はさるゝかと、飲めども多く醉を成さゞるに、直行は後を牽きて已まず、お峯も心祝の數を過して、其の地顏の赭きを假漆布きたるやうに照り耀して陶然たり。

狂女は果して來ざりけり。歡び醉へるお峯も唯醉へる夫も、褒美貰ひし婢も、十時近き比には皆寐鎭りぬ。

風は猶も邪に吹募りて、高き梢は箒の掃くが如く撓められ、疎に散れる罪の數は終に吹下されぬべく、層々凝れる寒は殆ど有らん限の生氣を吸さてら害つぬだに陰森たる夜色は益す冥く、益す凄しからんとす。忽

ち此の黒暗々〱を劈きて、鰐淵が裏木戸の邊に一道の光は揚りぬ。低く發りて物に遮られたれば、何の火とも辨へ難くて、其の迸發の朱く烟れる中に、母家と土藏との影は朧に顯るゝともなく奪はれて、瞬くばかりに消失せしは、風の強きに吹敷れたるなり。良有りて、同じほどの火影の又映ふと見れば、早くも薄れ行きて、こたびは燃えも揚らず、消えも遣らで、少時明を保ちたりしが、風の僅の絶間を偷みて、閃々〱と納屋の板戸を傳ひ、始めて騰れる焰は炳然として四邊を照せり。塀際に添ひて人の形動くと見えしが、仍暗くて了然ならず。

數息の間にして火の手は縱橫に蔓りつゝ、納屋の内に亂入れば、噴出づる黒烟の渦は或は頽れ、或は疊みて、其の外を引籠むと與に、見え遍りし家も土藏も堆き黯黮の底に沒して、闇は焰に破られ、焰は烟に揉立てられ、烟は更に風の爲に碎かれつゝも、蒸出す勢の夥しければ、猶ほ所狹く漲りて、文目も分かず攪亂れたる中より爆然と鳴りて、天も焦げよ

と納屋は一面の猛火と變じてけり。

彼の了然ならざりし形は此時明に耀かされぬ。宵に來べかりし狂女の佇めるなり。躍り狂ふ烟の下に自若として、面も爛れんとすばかりに照されたる姿は、此災を司る鬼女などの現れ出でにけるかと疑はしむ。實に彼は火の如何に焚え、如何に熾くや、と嚴に監るが如く眥を裂きて、其の立てる處を一歩も移さず、風と烟と焰との相雜り、相爭ひ、相勢ひて、力の限を互に奮ふをば、妙じくも爲たりとや、漫笑を洩せる顏色は此世に匹ふべきものありとも知らず。

風の暴頻る響動に紛れて、寐耳に之を聞着る者も無かりければ、誰一人出て噪がざる間に、火は烈々と下屋に延きて、廚の燃立つ底より一聲叫喚せるは誰、狂女は嘻々として高く笑ひぬ。

人々出合ひて打騷ぐ比には、火元の建物の大半は烈火となりて、土藏の窓々より焔を出し、はや如何にとも爲んやうあらざるなり。然しもの强風なりしかど、消防力めたりしに據りて、三十幾戸を燒きしのみにて、午前二時に迨びて鎭火するを得たり。雜踏の裏より怪しき奴は早くも拘引せられしと傳へぬ。彼の狂女の去りも遣ざりしが捕れしなり。

火元と認定せらるゝ鰐淵方は塵一筋だに持出さずして、憐むべき一片の焦土を遺したるのみ。家族の消息は直ちに警察の訊問する所となりぬ。婢は命辛々迯了せけれども、目覺むると齊く枕頭は一面の火なるに仰天し、二聲三聲奧を呼捨にして走り出でければ、主たちは如何になりけん、知らずと言ふ。夜明けぬれど夫婦の出で來ざりけるは、過など有りしにはあらずやと、警官は出張して搜索に及べり。

熱灰の下より一體の屍の半焦爛れたるが見出されぬ。目も當てられず、淺ましう悒き限を盡したれど、主の妻と輙く辨ぜらるべき面影は焚殘れり。さてはと其の邇くを隈無く掻起しけれど、他に見當るものは無くて、倉前と覺しき邊より始めて焦壞れたる人骨を掘出せり。醉ひて遁惑ひし故か、貪りて身を忘れし故か、左にも右にも主夫婦は此の火の爲に落命せしなり。家屋も土藏も一夜の烟となりて、鰐淵の跡とては赤土と灰との外に覓むべきものもあらず、風吹迷ふ長烟短焰の紛糺する處に、獨り無事の形を留めたるは、主が居間に備へ付けたりし金庫のみ。

別居せる直道は旅行中にて未だ還らず、貫一は恰もお峰の死體の出でし時病院より駈着けたり。彼は三日の後には退院すべき手筈なりければ、今は全く癒えて務を執るをも妨げざれど、事の極めて不慮なると、急激なると、瑣小ならざるとに心惑のみせられて、病後の身を以て之に當らんはいと苦しかりけるを、盡瘁して萬端を處理しつゝ、唯管直道の歸京

を待てり。
枕をも得擧げざりし病人の今恁く健に起きて、常に來ては親く慰められし人の頑にも強かりしを、空しく燼餘の斷骨に相見て、吊ふ言だにあらざらんとは、貫一の遽に其の眞をば眞とし能はざる所なりき。人は皆死ぬべきものと人は皆知れるなり。然れども其の常に相見る人の死ぬべきを思ふ能はず。貫一は此の五年間の家族を追めての一人も餘さず、家倉と共に焚盡されて一夜の中に儚くなり了れるに會ひては、おのれが懷裡の物の故無く消失せにけんやうにも頼み難く覺えて、恁ては我身の上の今宵如何に成りなんをも料られざるを、無常の愁は頻に膓に泌むなりけり。
住むべき家の痕跡も無く燒失せたりと謂ふだに、見果てぬ夢の如し、まして併せて頼めし主夫婦を喪へるをや。音容幻を去らずして、幾と幽明の界を辨ぜず、剩へ久しく病院の乾燥せる生活に困じて、此家を懷ふこ

と切なりければ、追慕の情は極りて迷執し、迫めては得る所もありやと、夜の晩きに貫一は市ヶ谷なる立退所を出でゝ、杖に扶けられつゝ程遠からぬ燒跡を弔へり。

連日風立ち、寒かりしに、此夜は遽に緩みて、朧の月の色も暖に、曇るともなく打霞める町筋は靜に眠れり。燻臭き惡氣は四邊に充滿ちて、踏荒されし道は水に濕り、燼に埋れ、燒杭燒瓦など所狹く積重ねたる空地を、火元とて板圍も得爲ず、其とも分かぬ燒原の狼藉として、鰐淵が家居は全く形を失へるなり。黑焦に削れたる幹のみ短く殘れる一列の立木の傍に、塊堆く盛りたるは土藏の名殘と踏み行けば、灰燼の熱氣は未だ冷めずして、微に面を撲つ。貫一は前杖拄いて悵然として佇めり。其の立てる二三歩の前は直行が遺骨を發せし所なり。恨むと見ゆる死顏の月は、肉の片の棄てられたるやうに朱く敷ける滿地の瓦を照して、目に入るものは皆伏し、四望の空く寥々たるに、黑く點せる人の影を、彼は自

ら物凄く顧らるゝなりき。

立盡せる貫一が胸には、在りし家居の狀の明かに映じて、赭く光れるお峯が顏も、苦き口付せる主が面も眼に浮びて、歷々と相對へる心地もするに、姑くは其境に己を忘れたりしが、旋て徐に仰ぎ、徐に俯して、さて徐に一步を行きては一步を返しつゝ、いとゞ思に沈みては、折々涙をも推拭ひつ。彼は轉た人生の淒涼を感じて禁ずる能はざりき。苟くも其の親める者の半にして離れ乖かざるはあらず。見よ或は彼の棄てられし恨を遺し、或は此の奪はれし悲に遭ひ、前の恨の消えざるに又新なる悲を添ふ。棄つる者は去り、棄てざる者は逝き、煢然として吾獨り在り。在るが故に慶ぶべきか、亡きが故に悼むべきか、在る者は積憂の中に活き、亡き者は非命の下に殪る。抑も此の活と此の死とは孰を哀み、孰を悲まん。

吾が煩悶の活を見るに、彼等が慘憺の死と相同じからざるなし。但殊に

する所は去ると留るとのみ。彼等の死にありて聊か吾が活の苦しきをも慰むべきか、吾が活ありて、始めて彼等が死の傷しきを弔ふに足らんか。吾が腸は斷たれ、吾が心は壞れたり、彼等が肉は爛れ、彼等が骨は碎けたり。活きて爾苦める身をも、仍ほ有繫に魂も消ぬべく打駭かしつる彼等が死狀なるよ。產を失ひ、家を失ひ、猶も身を失ふに尋常の終を得ずして、極惡の重罪の者と雖も未だ曾て如此き虐刑の辱を受けず、犬畜生の末までも箇樣の業は曝さゞるに、天か、命か、或は應報か。然れども獨り吾が直行をもて世間に善を作さゞる者と爲す勿れ。人情は暗中に刃を揮ひ、世路は到る處に陷穽を設け、陰に陽に惡を行ひ、不善を作さゞるはなし。若し吾が直行の行ふ所をもて咎むべしと爲さば、誰か有りて咎められざらん、而も猶甚しきを爲して天も憎まず、命も薄んぜず、應報も之を避るもの有るを見るにあらずや。彼等の慘死を辱むるなかれ、適ま奇禍を免れ得ざりしのみ。

恁く念へる貫一は生前の誼深かりし夫婦の死を歎きて、此の永き別を遣方も無く悲み惜むなりき。さて何時までか此に在らんと、主の遺骨を出せし邊を拜し、又妻の屍の横りし處を拜して、心侘しく立去らんとしたりしに、彼は怪しくも遽に胸の内の搔亂るゝ心地すると與に、失せし夫婦の弔ふ者もあらで闇路の奥に打棄てられたるを悲く、あはれ猶少時留らずやと、いと迫めて乞ひ縋ると覺ゆるに、行くにも忍びず、又立還りて積みたる土に息へり。

實に彼も家の内に居て、遺骸の前に限知られず思ひ亂れんより、此には亡き人の傍にも近く、遺言に似たる或る消息をも得るらん想して、立てたる杖に重き頭を支へて、夫婦が地下に齎せし念々を冥捜したり。旋て彼は何の得る所や有りけん、繁き涙は滂沱と頰を傳ひて零れぬ。

夜陰に轟く車ありて、一散に飛し來りけるが、燒場の際に止りて、翩と下立ちし人は、直ちに鰐淵が跡の前に尋ね行きて歩を住めたり。

燒瓦の踏破かるゝ音に面を擡げたる貫一は、件の人影の近く進來るをば、誰ならんと認むる間も無く、

「間さんですか。」

「おゝ、貴方は！　お歸來でしたか。」

其人は待ちに待たれし直道なり。貫一は忙しく出迎へぬ。向ひて立てる兩箇は月明に面を見合ひけるが、各口吃して卒に言ふ能はざるなりき。

「何とも不慮な事で、申上げやうもございません。」

「はい。此度は留守中と云ひ、別してお世話になりました。」

「私は事の起りました晩は未だ病院に居りまして、恁云ふ事とは一向存じませんで、夜明になつて漸く駈着けたやうな始末。今更申した所が愚痴に過ぎんのですけれど、私が居りましたらまさか這麼事にはお爲せ申さんかつたと、實に殘念でなりません。又お二人にしても餘り不覺な、それしきの事に狼狽される方ではなかつたに、是迄の御壽命であつたか、

殘多い事を致しました。」
直道は塞ぎし眼を怠げに開きて、
「何も彼も皆燒けましたらうな。」
「唯一品、金庫が助かりました外には、悉皆燒いて了ひました。」
「金庫が殘りました？　何が入つて居るのですか。」
「貨も少しは在りませうが、帳簿、證書の類が主でございます。」
「貸金に關した？」
「然やうて。」
「えゝ、其が燒きたかつたのに！」
口惜しとの色は絶か其の面に上れり。貫一は彼が意見の父と相容れずして、年來別居せる內情を詳かに知れば、迫めて其の喜ぶべきをも、却つて僞く憂と爲す故を曉れるなり。
「家の燒けたの、土藏の落ちたのは差支無いのです、寧ろ燒いて了はん

ければ成らんのでしたから、それは結構です。兩親の歿つたのも、私であれ、貴方であれ、恁して泣いて悲む者は、此に居る二人限で、世間に誰一人……………然ぞ衆が喜んで居るだらうと思ふと、唯親を喪したのが情無いばかりではないですよ。」

然れども堰敢へず流るゝは恩愛の涙なり。彼を憚りし父と彼を畏れし母とは、決して共に子として彼を慈むを忘れざりけり。其の憚られ、畏れられし點を除きては、彼は他の憚られ、畏れられざる子よりも多く愛を被りき。生きてこそ爭ひし父よ。亡くての今は、其の聽れざりし恨より、親として事へざりし不孝の悔は直道の心を責むるなり。

生暖き風は急に來りて其の外套の翼を吹捲りぬ。這は此に失せし母の賜ひしを、と端無く彼は憶起して、然ばかりは有のすさびに德とも爲ざりけるが、世間に量り知られぬ人の數の中に、誰か故無くして一紙を與ふる者ぞ。我は今聘せられし測量地より歸來れるなり。此の學術と此の位

置とを與へて恩と爲ざりしは誰なるべき。外に之を求むる能はず、重ねて之を得べからざる父と母とは、相携へて杳に迢に隔つる世の人となりぬ。

炎々たる猛火の裏に、其の父と母とは苦み悶えて援を呼びけんは幾許ぞ。彼等は果して誰をか呼びつらん。思此に到りて、直道が哀咽は渾身をして涙に化し了らしめんとするなり。

「喜ぶなら世間の奴は喜んだが可いです、貴方一箇のお心持で御兩親は御滿足なさるのですから。這麼ことを申上げては實に失禮ですけれども、貴方が今日まで御兩親をお持ちになつて居られたのは、私などの身から見ると何よりお可羨いので、此の世の中に親子の愛情ぐらゐ詐の無いものは決して御座いませんな。私は十五の歳から孤兒になりましたのてすが、それは、親が附いて居らんと見縊られます。餘り見縊られたのが自棄の本で、遂に私も眞人間に成損つて了つたやうな譯で。固より己の至

らん罪ではありますけれど、抑も親の附いて居らんかつたのが非常な不仕合で、那樣薄命な者も恁して在るのですから、其はもう幾歳になつたから親に別れて可いと謂ふ理窟はありませんけれど、聊か慰むるに足ると、まあ、思召さなければなりません。」

貫一の此人に向ひて親く物言ふ今夜の如き例はあらず、彼の物言はずとよりは、此人の惡み遠けたりしなり。故は、彼こそ父が不善の助手なれと、始より畜生視して、得べくば撲つて殺さんとも念ずるなりければ、今彼が言の端々に人がましき響あるを聞きて、いと異しと思へり。

「それでは、貴方眞人間に成損つたとお言ひのですな。」

「然うでございます。」

「然うすると、今は眞人間ではないと謂ふ譯ですか。」

「勿論でございます。」

直道は俯きて言はざりき。

「いや貴方のやうな方に向つて這麼太腐れた言を申しては濟みません。さあ、參りませうか。」

彼は仍ほ俯き、仍ほ言はずして、頷くのみ。

夜は太く更けにければ、然らでだに音を絶てる寂靜は此に澄徹りて、深くも物を思入る苦しさに直道が踩躙る靴の下に、瓦の脆く割るゝが鋭く響きぬ。地は荒れ、物は毀れたる中に一箇は立ち、一箇は偃ひて、言あらぬ姿の侘しげなるに、照すとも無き月影の隱々と映添ひたる、既に彷彿として悲の圖を描成せり。

愨て暫く有りし後、直道は卒然言を出せり。

「貴方、眞人間に成つてくれませんか。」

其の聲音の可愁しき底には情も籠れりと聞えぬ。貫一は粗彼の意を曉れり。

「はい、難有うございます。」

「奈何ですか。」

「折角のお言ではございますが、私は奈何ぞ此儘にお措き下さいまし。」

「それは何爲ですか。」

「今更眞人間に復る必要も無いのです。」

「さあ、必要は有りますまい。私も必要から貴方にお勸めするのではない。もう一度考へてから挨拶をまて下さいな。」

「いや、お氣に障りましたらお赦し下さいまし。貴方とは從來浸々お話を致した事もございませんで、私といふ者は甚麼人物であるか、御承知はございますまい。私の方では毎々お噂を伺つて、能く貴方を存じて居ります。極潔いお方なので、精神的に傷いた所の無い御人物、然云ふ方に對して我々などの心事を申上げるのは、實際恥入る次第で、言ふ事は一々曲つて居るのですから、正い、直なお耳へは入らん所ではない、逆ふのでございませう。で、潔い貴方と、拗けた私とでは、始からお話は

合はんのですから、それてお話を爲る以上は、どうぞ何事もお聞流に願ひます。」

「あゝ、善く解りました。」

「眞人間になつてくれんかと有仰つて下すつたのが、私は非常に嬉しいのでございます。這麼商賣は眞人間の爲る事ではない、と知つて居ながら恁して致して居る私の心中、辛いのでございます。那樣思をしつゝ何爲して居るか！　曰く言難して、精神的に酷く傷けられた反動と、先づ思召して下さいまし。私が酒が飲めたら自暴酒でも吃つて、體を毀して其限に成つたのかも知れませんけれど、酒は可かず、腹を切る勇氣は無し、究竟は意氣地の無い所から、這麼者に成つて了つたのであらうと考へられます。」

彼の潔しと謂ふなる直道が潔き心の同情は、彼の微見したる述懐の爲に稍動されぬ。

「お話を聞いて見ると、貴方が今日の境遇になられたに就いては、餘程深い御様子が有るやう、何云ふのですか、悉く聞して下さいませんか。」

一極愚な話で、到底お聞せ申されるやうな者ではないのです。又自分も此事は他には語るまい、と堅く誓つて居るのでありますから、どうも申上げられません。究竟或事に就いて或者に欺かれたのでございます。」

「はあ、それではお話は其で措きませう。で、貴方も那麼家業は眞人間の爲べき事ではない、と十分承知して居らるゝ、父などは決して愧づべき事ではない、と謂つて剛情を張り通した。實に淺ましい事だと思ふから、或時は不如父の前で死んで見せて、最後の意見を爲るより外は無い、と決心したことも有つたのです。父は飽くまで聽かん、私も飽くまで棄てゝは措かん精神、甚麼事を爲ても是非改心させる覺悟で居つた所、今度の災難で父を失つた、殘念なのは、改心せずに死んでくれたのだ、是が一生の遺憾で。一時に兩親に別れて、死目には逢はず、其の臨終と謂

へば、氣の毒とも何とも謂ひやうの無い……………凡そ人の子として此より上の悲が有らうか、察し給へ。其に就けても、改心せずに死なしたのが、愈よ殘念で、早く改心さへしてくれたらば、此の災難は免れたに違無い、いや私は然う信じて居る。然し、過ぎた事は今更爲方が無いから、父の代に是非貴方に改心して貰ひたい。今貴方が改心して下されば、私は父が改心したも同じと思つて、それで滿足するのです。然すれば、必ず父の罪も滅びる、私の念も霽れる、貴方も正しい道を行けば、心安く、樂く世を送られる。

成程、お話の樣子では、這麼家業に身を墜されたのも、已むを得ざる事情の爲とは承知して居りますが、父への追善、又其の遺族の路頭に迷つて居るのを救ふのと思つて、金を貸すのは罷めて下さい。父に關した財產は一切貴方へお讓り申しますから、其を資本に何ぞ人をも益するやうな商賣をして下されば、此上の喜は有りません。父は非常に貴方を愛し

て居つた、貴方も父を愛して下さるてせう、愛して下さるなら、父に代つて非を悛めて下さい。」

聽居る貫一は露の晨の草の如く仰ぎ視ず。語り訖れども猶仰ぎ視ず、如何にと問るゝにも仰ぎ視ざるなりけり。

忽ち一閃の光ありて燒跡を貫く道の畔を照しけるが、其の燈の此方に向ひて近くは、巡査の見尤めて寄來るなり。兩箇は一樣に暱へて、待つと志もなく動かず居たりければ、其前に到れる角燈の光は隈無く彼等を曝しぬ。巡査は如何に驚きけんよ、彼も此も各慘として蒼き面に涙垂れたり——而も此は人の泣くべき處なるか、時は正に午前二時半。

（三十三年一月）

續金色夜叉

第一章

時を錢なりとして之を換算せば、一秒を一毛に見積りて、壹人前の睡量凡そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、實に金五圓七拾六錢に相當す。之を三百六十五日の一年に合計すれば、金貳千壹百〇貳圓四拾錢の巨額に上るにあらずや。然れば玆に廿七日と推薄りたる歳末の市中は物情恟々として、世界絶滅の期の終に宣告せられたらんも恪やとばかりに、坐りし人は出でゝ歩み、歩みし人は走りて過ぎ、走りし人は足も空に、合ふさ離るさの氣立ましく、肩相摩しては傷き、轂相撃ちては碎けぬべきをも覺えざるは、心々に今を限と慌て騒ぐ事ありて、不狂人も狂せるなり。彼等は皆過去の十一箇月を虚に送りて、一秒の塵の積める貳

千餘圓の大金を何處にか振落し、後悔の尾に立ちて今更の血眼を瞪き、草を分け、瓦を揆しても、其の行方を尋ねんと爲るにあらざるなし。恁る間にも常は止一毛に値する一秒の壹錢乃至拾錢にも暴騰せる貴々重々の時は、速射砲を連發にするが如く飛過るにぞ、彼等の恐慌は更に意言も及ばざるなる。

其の平生に怠無かりし天は、又今日に何の變易もあらず、悠々として蒼く、昭々として闊く、浩々として靜に、而も確然として其の覆ふべきを覆ひ、終日北の風を下し、夕付く日の影を耀して、師走の塵の表に高く澄めり。見遍せば兩行の門飾は一樣に枝葉の末廣く壽山の翠を交し、十町の軒端に續く注連繩は、福海の霞揺曳して、繁華を添ふる春待つ景色は、轉た舊り行く歳の魂を驚かす。

彼の人々の貳千餘圓を失ひて馳違ふ中を、梅提げて通るは誰が子、獵銃擔げ行くは誰が子、妓と車を同うするは誰が子、啣楊枝して好き衣着た

るは誰が子。或は二頭立の馬車を驅る者、結納の品々担する者、雜誌など讀みもて行く者、五人の子を數珠繫にして勸工場に入る者、彼等は各若干の得たる所有りて、如此く自ら足れりと爲るにかあらん。此等の少く失へる者は喜び、彼等の多く失へる輩は憂ひ、又希には全く失はざりし人の樂めるも、皆内には齷齪として、盈てるは虧けじ、虧けるは盈たんと、孰か其の求むる所に急ならざるはあらず。人の世は三の朝より花の晝、月の夕にも其の思の外はあらざれど、勇怯は死地に入りて始て明なる年の關を、物の數とも爲ざらんほどを目にも見よとや、空嘯の醉を踏み、鐵鞭を曳き、一卷のブックを懷にして、嘉平治平の袴の燒海苔を綴れる如きを穿ち、フラネルの浴衣の洗曬して垢染に汚たるに、文目も分かぬ木綿縞の布子を襲ねて、ジォンソン帽の瓦色に化けたるを頂き、焦茶地の縞羅紗の二重外套は何の冬誰が不用をや讓られけん、尋常ようは寸の薄りたるを、身材の人より豐なるに絡ひたれば、例の袴は風にや

吹斷れんと危くも閃きつゝ、其人は齢三十六七と見えて、形瘦せたりとにはあらねど、寒樹の夕空に倚りて孤なる風情、獨り負ふ氣無く麗しくも富める髭髯は、下には乳の邊まで毿々と垂れて、左右に拈りたるは八字の蔓を巻きて耳の根にも迨びぬ。打見れば面目爽に、稍傲れる色有れど峻しくはあらず、而も今陶々然として酒興を發し、春の日長の野邊を辿るらんやうに、西筋の横町を此の大路に出て來らんとす。

「瓢空しく夜は靜にして高樓に上り、酒を買ひ、簾を巻き、月を邀へて醉ひ、醉中劍を拂へば光月を射る。」

彼は節をかしく微吟を放ちて、行く〳〵且樂むに似たり。打晴れたる空は琉璃色に夕榮えて、俄に冱え勝る颪の目口に沁みて磨鍼を打つらんやうなるに、烈火の如き醉顔を差付けては太息嘘いて、右に一歩左に一歩と蹣きつゝ、

「往々悲歌して獨り流涕す、君山を剗却して湘水平に、桂樹を斫却して

月更に明ならんを、丈夫志有りて…………。」

と唱ひ出づる時、一隊の近衛騎兵は南頭に馬を疾めて、眞一文字に行手を横斷するに會ひければ、彼は鐵鞭を植てゝ、舞立つ砂煙の中に魁の花を裝へる健兒の參差として推行く後影をば、壯なる哉と謂まほしげに看送りて、

「我四方に遊びて意を得ず、陽狂して藥を施す成都の市、」

と漫に其詩の首をば小聲朗に吟じ居たり。さては往來の遑き目も皆牽れて、此の節季の修羅場を獨天下に吃ひ醉へるは、何者の暢氣か、自棄か、豪傑か、悟か、醉生兒か、と異しき姿を見て過る有れば、面を識らんと窺ふ有り、又は其の身の上など思ひつゝ行くも有り。彼は太く醉へれば總て知らず、町の殷賑を眺め遣りて、何方を指して行かんとも心定らず姑く立てるなりけり。

然ばかり人に怪しまるれど、彼は今日のみ此町に姿を顯したるにあらず、

折々散歩すらんやうに出來ることあれど、箇様の醉態を認むるは、兼て注目せる派出所の巡査も希しと思へるなり。

旋て彼は鐵鞭を曳鳴して大路を右に出でしが、二町許も行きて、乾の方より狹き坂道の開きたる角に來にける途端に、風を帶びて駛下りたる俥は、生憎其方に蹣ける醉客の膁の邊を一衝撞てたりければ、彼は卻含を打つて二間も彼方へ撥飛さるゝと齊しく、大地に横面擦つて僵れたり。不思議にも無難に踏留りし車夫は、此の麁忽に氣を奪れて立ちたりしが、面倒なる敵手と見たりけん、そのまゝ轅を回して逃れんとするを、俥の上なる黑綾の吾妻コオト着て、素鼠縮緬の頭巾被れる婦人は樺色無地の絹臘虎の膝掛を推除けて、駐めよ、返せと閊ゆるを、猶聽かで曳々と挽き行く後より、

「待て、こら！」と喝する聲に、行く人の始て事有りと覺れるも多く、はや車夫の不情を尤むる語も聞ゆるに、耐りかねたる婦人は強て其

處に下車して返し來りぬ。

例の物見高き町中なりければ、此の忙しき際をも忘れて、寄來る人數は蟻の甘きを探りたるやうに、一面には遭難者の土に踞へる周邊を擁し、一面には婦人の左右に傍ひて、目に物見すと採立てたり。婦人は途を來つゝ被物を取りぬ。紋羽二重の小豆鹿子の手絡したる圓髷に、鼈甲脚の金七寶の玉の後簪を斜に、高蒔繪の政子櫛を翳して、粧は實に塵をも怯れぬべき人の謂ひ知らず思惑へるを、可痛の嵐に堪へぬ花の顏や、と群集は自ら聲を歛めて肝に徹ふるなりき。

いと更に面の裏まほしき此場を、頭巾脱ぎたる彼の可羞さと切なさとは幾許なりけん、打赧めたる顏は措き所あらぬやうに、人堵の内を急足に辿りたり。帽子も鐵鞭も、懷にせしブックも、薩摩下駄の隻も投散されたる中に、醉客は半ば身を擡げて血を流せる右の高顴を平手に掩ひつゝ、寄來る婦人を打見遣りつ。彼は其の前に先づ懦れず會釋して、

「どうも取んだ麁相を致しまして、何とも相濟みませんでございます。おや、お顏を！　お目を打ちましたか、まあ奈何も…………。」

「いや太した事は無いのです。」

「然やうでございますか。何處ぞお痛め遊ばしましたでございませう。」

腰を得立てず居るを、婦人は仍ほ氣遣へるなり。

車夫は數次腰を屈めて主人の後方より進出でけるが、

「どうも、旦那、誠に申譯もございません、どうか、まあ平に御勘辨を願ひます。」

眼を其方に轉じたる醉客は恚れるとしもなけれど聲粛に、

「貴様は善くないぞ。麁相を爲たと思うたら何爲車を駐めん。逃げやうとするから呼止めたんじや。貴様の不心得から主人にも恥を掻する、」

「へい恐入りました。」

「どうぞ御勘辨あそばしまして。」

俥の主の身を下して辭を添ふれば、彼も打頷きて、

「以來氣を着けい、よ。」

「へい…………へい。」

「早う行け、行け。」

やをら彼は起たんとすなり。さては望外なる主從の喜に引易へて、見物の飽無氣さは更に望外なりき。彼等は幕の開かぬ芝居に會へる想して、餘に落着の蛇尾振はざるを悔みて、はや忙々しき踵を回すも多かりけれど、又見榮ある此場の模樣に名殘を惜みつゝ去り敢へぬもありけり。

車夫は起ち惱める醉客を扶けて、履物を拾ひ、鞭を拾ひて宛行へば、主人は帽を淸め、ブックを取上げて彼に返し、頭巾を車夫に與へて、懇に外套、袴の泥を拂はしめぬ。免されし罪は消えぬべきも、歷々と挫傷の其面に殘れるを見れば、疚しきに堪へぬ心は、なほ爲すべき事あるを吝みて私せるにあらずやと省られて、彼は有繫に見捨てかねたる人の顏を、

始は可傷と眺めたりしに、其の眼色は漸く鋭く、且は疑ひ且は怪しむらんやうに、忍びては矚りつゝ便無げに佇みけるに、いでや長居は無益とばかり、彼は蹌踉と踏出せり。

婦人は左にも右にも遣過せしが、又何とか思直しけん、遽に追行きて呼止めたり。頭を捻向けたる醉客は眊れる眼を屹と見据ゑて、自か他かと訝しさに言も出さず。

「もしお人違でございましたら御免あそばせまして。貴方は、あの、もしや荒尾さんでは被在いませんですか。」

「は？」　彼は覺えず身を回して、丁と立てたる鐵鞭に仗り、這は是白日の夢か、空華の形か、正體見んと爲れど、醉眼の空しく張るのみにて、益す霽れざるは疑なり。

「荒尾さんで被在いましたか！」

「はあ？　荒尾です、私荒尾です。」

「那の間貫一を御承知の？」

「おゝ、間貫一、舊友でした。」

「私は鳴澤の宮でございます。」

「何、鳴澤………鳴澤の………宮と有仰る………？」

「はい、間の居りました宅の鳴澤。」

「おゝ、宮さん！」

奇遇に驚かされたる彼の醉は頓に半は消えて、せめて昔の俤を認むるや、と其人を打眺むるより外はあらず。

「お久しぶりで御座いました。」

宮は懽び勇みて犇と寄りぬ。

今は美しき俥の主ならず、路傍の醉客ならず名宣合へる彼と此との思は如何。間貫一が鳴澤の家に在りし日は、彼の兄の如く友として善かりし人、彼の身の如く契りて怜しかりし人にあらずや。其日の彼等は又同胞

にも得べからざる親を以て、膝をも交へ心をも語りしにあらずや。其日の彼等は多少の轉變を覺悟せし一生の中に、今日の奇遇を算へざりしなり。縱し然りとも、一たび同胞と睦合へりし身の、弊衣を飄して道に醉ひ、流車を驅りて富に驕れる高下の差別の自ら種有りて作せるに似たる如此きを、彼等は更に〳〵夢ざりしなり。其の算へざりし奇遇と夢ざりし差別とは、咄々、相携へて二人の身上に逼れるなり。女氣の脆き涙ははや宮の目に濕ひぬ。

「まあ大相お變り遊ばしましたこと！」

「貴方も變りましたな！」

然しも見えざりし面の傷の可恐きまでに益す血を出すに、宮は持たりしハンカチイフを與へて拭はしめつゝ、心も心ならず樣子を窺ひて、

「お痛みあそばすでせう。少しお待ちあそばしまし。」

彼は何やらん吩咐けて車夫を遣りぬ。

「直此の近くに懇意の醫者が居りますから、其處まで被入つて下さいまし。唯今俥を申附けました。」

「何の、那樣に騷ぐほどの事は無いです。」

「あれ、お殆うございますよ。而して大相召上つて被在るやうですから、左も右もお俥でお出あそばしまし。」

「いんや、宜しい、大丈夫。時に間は其後奈何しましたか。」

宮は胸先を刃の透るやうに覺ゆるなりき。

「其事に就きまして色々お話も致したいので御座います。」

「然し、奈何して居ますか、無事ですか。」

「はい、…………。」

「決して無事ぢやない筈です。」

生きたる心地もせずして宮の慙ぢ懼ける傍に、車夫は見苦しからぬ一臺の辻車を伴ひ來れり。漸く面を擧れば、いつ又寄りしとも知らぬ人立を、

可忌くも巡査の怪みて近くなり。

第二章

鬚深き横面に貼薬したる荒尾讓介は既に蒼く醉醒めて、煌々たる空氣ラムプの前に襞襀もあらぬ袴の膝を丈六に組みて、接待莨の葉巻を燻らしつゝ意氣肅に、打萎れたる宮と熊の敷皮を斜に差向ひたり。這は是、彼の識れると謂ひし醫師の奥二階にて、疊敷に爲たる西洋造の十疊間なり。物語とはや緒を解きしなるべし。

「間が影を隱す時僕に遺した手紙が有る、それで悉い樣子を知つて居るです。其の手紙を見た時には、僕も顫へて腹が立つた。直に貴方に會うて、是非これは思返すやうに飽くまで忠告して、それで聽かずば、もう人間の取扱は爲ちや居られん、腹の瘉ゆるほど打踣して、一生結婚の成らんやう立派な不具に爲て與れやう、と既に其時は立上つたですよ。然し、間が言を盡しても貴方が聽ろんと云ふ、僕の言を容れやう道理が無

い。又間を嫌うた以上は、貴方は富山への賣物じや、他の賣物に疵を附けちや濟まん、と然う思うて、そりや實に矢も楯も耐らん胸を摩つて了うたんです。」

宮が顏に推當てたる片袖の端より、連に眉の顰むが見えぬ。

「宮さん、僕は貴方は然云ふ人ではないと思うた。那程互に愛して居つた間さへが欺かれたんぢやから、僕の欺れたのは無理も無いぢやらう。僕は僕として貴方を怨むばかりでは慊らん、間に代つて貴方を怨むですよ、いんや、怨む、七生まで怨む、屹と怨む！」

終に宮が得堪へぬ泣音は洩れぬ。

「間の一身を誤つたのは貴方が誤つたのじや。其は又間にしても、高が一婦女子に棄てられたが爲に志を挫いて、命を抛つたも同然の墮落に果てる彼の不心得は、別に間として大いに責めんけりやならん。然し、間が如何に不心得であらうと、貴方の罪は依然として貴方の罪じや、のみ

ならず、貴方が間を棄てた故に、彼が今日の有様に墮落したのであつて見れば、貴方は女の操を破つたのみでない、併せて夫を刺殺したも…………。」

宮は慄然として振仰ぎしが、荒尾の鋭き眥は貫一が怨も憑りたりやと、其の見る前に身の措所無く打竦みたり。

「同じですよ。然うは思ひませんか。で、貴方の悔悟されたのは善い、是は人として悔悟せんけりやならん事。けれども殘念ながら今日に及んでの悔悟は業に晩い。間の墮落は間其人の死んだも同然、貴方は夫を持つて六年、なあ、水は覆つた、盃は破れて了うたんじや。恁う成つた上は最早神の力も逮ぶことではない。お氣の毒じやと言ひたいが、猶且貴方が自ら作せる罪の報で、固より恁く有るべき事ぢやらうと思ふ。」

宮は俯きてよゝと泣くのみ。

吁、吾が罪！　然りとも知らで犯せし一旦の吾が罪！　其の吾が罪の深

さは、彼人ならぬ人さへ恁まで惽み、恁まで怨むか。然もあらば、必ず思知る時有らんと言ひし其人の、爭て〳〵吾が罪を容すべき。吁、吾が罪は終に容されず、吾が戀人は終に再び見る能はざるか。

宮は胸潰れて、涙の中に人心地をも失はんとすなり。

おのれ、利を見て愛無かりし匹婦、惽しとも惽しと思はざるにあらぬ荒尾も、當面に彼の悔悟の切なるを見ては、有繫に情は動くなりき。宮は際無く顏を得擧げず居たり。

「然し、好う悔悟を作つた。間が容さんでも、又僕が容さんでも、貴方は其の悔悟に因つて自ら容されたんじやよ。」

由無き慰藉は聞かじとやうに宮は俯しながら頭を掉りて更に泣入りぬ。

「自にでも容されたのは、誰にも容されんには勝つて居る。又自ら容さるゝのは、終には人に容さるゝ其が始ぢやらうと謂ふもの。僕は未だ未だ容し難く貴方を怨む、怨みは爲るけれど、今日の貴方の胸中は十分察

するのです。貴方のも察するからには、他の者の間の胸中も亦察せにやならん、可いですか。而して孰が多く憐むべきであるかと謂へば、間の無念は抑甚麼ぢやらうか、なあ、僕は其を思ふんです。其を思うて見ると、貴方の苦痛を傍観するより外は無い。

恁して今日図らずお目に掛つた。僕は婦人として生涯の友にせうと思うた人は、後にも先にも貴方ばかりじや。いや、それは段々お世話にもなつた、忝いと思うた事も幾度か知れん、其の媛友に何年ぶりかで逢うたのぢやから、僕も實に可懐う思ひました。」

宮は泣音の迸らんとするを咬緊めて、濡浸れる袖に犇々と面を擦付けたり。

「けれど又、圓髷に結うて、立派にして居らるゝのを見りや、決して可愛うはなかつた。幸ひ貴方が話したい事が有ると言るゝ、善し、那様に間を詐つた貴方じや、又僕を幾何ほど詐ることぢやらう、其を聞いた上

で、今日こそは打踣して與れやうと待つて居つた。然るに、貴方の悔悟、僕は陰に喜んで聽いたのです。今日の貴方は依様僕の友の宮さんぢやつた。好う貴方は悔悟なすつた！　然も無かつたら、貴方の顏に此の十倍の疵を附けにや還さんぢやつたのです。なあ、自ら容されたのは人に赦さるゝ始――解りましたか。

で、間に取成してくれい、詫を言うてくれい、とのお囑ぢやけれど、それは僕は爲ん。爲んのは、間に對して奈何も出來んのぢやから。又貴方に罪有りと知つて居りながら其人から賴まるゝ僕でない。又僕が間であつたらば、斷じて貴方の罪は容さんのぢやから。

恪して親友の敵に逢うてからに、指も差さずに別るゝ、是が荒尾の貴方に對する寸志と思うて下さい。いや、久しぶりで折角お目に掛りながら、可厭な言ばかり聞せました。それぢや、まあ、御機嫌好う、これでお暇致します。」

會釋して荒尾の身を起さんとする時、

「暫く、どうぞ。」　宮は取亂したる泣顔を振擧げて、重き瞼の露を拂へり。

「それでは此上甚麽にお願ひ申ましても、貴方はお詫を爲つては下さらないので御座いますか。而して貴方も猶且私を容さんと有仰るので御座いますか。」

「然うです。」

忙しげに荒尾は片膝立てゝ居たり。

「どうぞ最暫く被在つて下さいまし、唯今直に御飯が參りますですから。」

「や、飯なら欲うありませんよ。」

「私は未だ申上げたい事が有るのでございますから、荒尾さんどうかお坐り下さいまし。」

「いくら貴方が言うたつて、返らん事ぢやありませんか。」

「那樣にまで有仰らなくても、………少しは、もう堪忍なすつて下さいまし。」

火鉢の縁に片手を翳して、何をか打案ずる樣なる目を藾しつゝ、荒尾は答へず。

「荒尾さん、それでは、迚もお聽入はあるまいと私は諦めましたから貫一さんへお詫の事はもう申しますまい、又貴方に容して戴く事も願ひますまい。」

咄嗟に荒尾の視線は轉じて、猶語續る宮が面を掠め去りぬ。

「唯一目私は貫一さんに逢ひまして、其前でもつて、私の如何にも惡かつた事を思ふ存分謝りたいので御座います。唯彼人の目の前で謝りさへ爲たら、それで私は本望なのでございます。素より容してもらはうとは思ひません、貫一さんが又容してくれやうとも、え丶、どうせ私は思ひは致しません。容されなくても私は管ひません。私はもう覺悟を致し……

……………………。」

宮は苦しげに涙を呑みて、

「ですから、どうぞ御一所にお伴れなすつて下さいまし。貴方がお伴れなすつて下されば、貫一さんは屹と逢つてくれます。逢つてさへくれましたら、私は殺されましても可いので御座います。貴方と二人で私を責めて責めて責め抜いた上で、貫一さんに殺さして下さいまし。私は貫一さんに殺してもらひたいので御座います。」

感に打れて霜置く松の如く動かざりし荒尾は、忽ち其の長き髯を振りて頷けり。

「うむ、面白い！　逢うて間に殺されたいとは、宮さん好う言れた。然うなけりやならんじや。然し、なあ、然しぢや、貴方も今は富山の奥さん、唯繼と云ふ夫の有る身じや、滅多な事は出來んですよ。」

「私は管ひません！」

「可かん、そりや可かん。間に殺されても辭せんと云ふ其の悔悟は可いが、それぢや貴方は間有るを知つて夫有るのを知らんのじや。夫を奈何なさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。

して見りや、始には富山が爲に間を欺き、今又間の爲に貴方は富山を欺くんじや。一人ならず二人欺くんじや！　一方には悔悟して、其が爲に又一方に罪を犯したら、折角の悔悟の効は沒つて了ふ。」

「那樣事は管ひません！」

無慙に唇を咬みて、宮は抑へ難くも激せるなり。

「管はんぢや可かん。」

「いゝえ、管ひません！」

「そりや可かん！」

「私はもう那樣事は管ひませんのです。私の軀は甚麼になりませうとも、

疾から棄てゝ居るので御座いますから、唯最一度貫一さんにお目に掛つて、此の氣の濟むほど謝りさへ致したら、其場でもつて私は死にましても本望なのですから、富山の事などは…………不如然して死んで了ひたいので御座います。」

「それ〳〵然云ふ無考な、譯の解らん人に僕は與することは出來んと謂ふんじや。一體然した貴方は了簡ぢやからして、始に間をも棄てたんじや。不埒です！　人の妻たる身で夫を欺いて、それで管はんとは何事ですか。那樣貴方が了簡であつて見りや、僕は寧ろ富山を不敏に思ふです、貴方のやうな不貞不義の妻を有つた富山其人の不幸を愍まんけりやならん、いや、愍む、貴方よりは富山に僕は同情を表する、愈よ憎むべきは貴方じや。」

四途亂に濕へる宮の目は熒ゆらんやうに耀けり。

「然う有仰つたら、私は奈何して悔悟したら宜いので御座いませう。荒

尾さん、どうぞ助けると思召してお誨へなすつて下さいまし。」

「僕には誨へられんで、貴方がまあ能う考へて御覧なさい。」

「三年も四年も前から一日でも其事を考へません日と云つたら無いのでございます。其が爲に始終悒々と全で疾つて居るやうな氣分で、噫もう這麼なら、いつそ死んで了はう、と熟く然うは思ひながら、唯もう一目、一目で可うございますから貫一さんに逢ひませんでは、どうも死ぬにも死なれないので御座います。」

「まあ能う考へて御覧なさい。」

「荒尾さん、貴方それでは餘りでございますわ。」

獨に餘る心細さに、宮は男の袂を執りて泣きぬ。理切めて荒尾も其手を拂ひかねつゝ、吾ならぬ愁に胸塞れて、實にもと覺ゆる宮が衰容に眼凝し居たり。

「荒尾さん、這麼に思つて私は悔悟して居るのぢやございませんか、昔

の宮だと思召して頼に成つて下さいまし。どうぞ、荒尾さん、どうぞ、さあ、お誨へなすつて下さいまし。」

涙に昏れて其の語は能くも聞えず。階子下の物音は膳運び出づるなるべし。

果して人の入來て、夕餉の設すとて少時紛されし後、二人は謂ふべからざる侘しき無言の中に相對するのみなりしを、荒尾は始て高く咳きつ。

「貴方の言るゝ事は能う解つて居る、決して無理とは思はんです。如何にも貴方に誨へて上げたい、誨へて貴方の身の立つやうな處置で有るなら、誨へて上げんぢやないです。けれどもじや、其が誨へて上げられんのは、僕が貴方であつたら慿う爲ると云ふ考量に止るので…………いや、いや、そりや言れん。言うて善い事なら言ひます、人に對して言ふべき事でない、況や誨ふべき事ではない、止だ僕一箇の了簡として肚の中に思うた迄の事、究竟荒尾的空想に過ぎんのぢやから、空想を誨へて人を

實は何も言はんので、言はんぢやない、實際言得んのじや。然し猶能う考へて見て、貴方に誨へらるゝ方法を見出したら、更にお目に掛つて申上げやう。折が有つたら又お目に掛ります。

誤つては奈何もならんから、僕は何も言はんので、言はんぢやない、實際言得んのじや。然し猶能う考へて見て、貴方に誨へらるゝ方法を見出したら、更にお目に掛つて申上げやう。折が有つたら又お目に掛ります。
は、僕の住居？　住居は、まあ言はん方が可い、蛩が子なれば宿も定めずじや。言うても差支は無いけれど、貴方に押掛けらるゝと困るから、まあ言はん。は、如何にも、這麼態をして居るので、貴方は吃驚なすつたか、然うでせう。自分にも驚いて居るのぢやけれど奈何も爲方が無い。僕の身の上に就ては段々子細が有るですとも。其もお話ましたいけれど、又此次に。

酒は餘り飲むな？　はあ、今日のやうに酔うた事は希です。忝い、折角の御忠告ぢやから今後は宜い、氣を着くるです。

力に成つてくれと言うたとて、義として僕は貴方の力には成れんぢやないてすか。貴方の胸中も聴いた事ぢやから、敵にはなるまい、けれど力

には成られんですよ。間にも其後逢はんのですとも。一遍逢うて聞きたい事も言ひたい事も頗る有るのぢやけれども、訪ねもせんので。それにや一向意味は無いですとも。はあ、一遍訪ねませう。明日訪ねてくれい？ 然うは可かん、僕も是でなか〳〵用が有るのぢやから。あゝ、貴方も浮世が可厭か、僕も御同様じや。世の中と云ふものは、一つ間違ふと誠に面倒なもので、僕なども今日の有様では生効の無い方ぢやけれど、此儘で空く死ぬるも殘念でな、然う思うて生きては居るけれど、苦しみつゝ生きて居るなら、死んだ方が無論勝ですさ。何故命が惜いのか、考へて見ると頗る解なくなる。」

語りつゝ彼は食を了りぬ。

「嗚呼、貴方に給仕して貰ふのは何年ぶりと謂ふのか知らん。間も善う食うた。」

宮は差含む涙を啜れり。盡きせぬ悲を何時までか見んとやうに荒尾は俄に身支度して、

「こりや然し却つてお世話になりました。それぢや宮さん、お暇。」

「あれ、荒尾さん、まあ、貴方…………。」

はや彼は起てるなり。宮は其前に塞りて立ちながら泣きぬ。

「私は奈何したら可いのでせう。」

「覺悟一つです。」

始て誨ふるが如く言放ちて荒尾の排け行かんとするを、彼は猶も縋りて、

「覺悟とは？」

「讀んで字の如し。」

驚破、彼の座敷を出づるを、送りも行かず、坐りも遣らぬ宮が姿は、寂しくも壁に向ひて動かざりけり。

第三章

門々の松は除かれて七八日も過ぎぬれど、仍ほ正月機嫌の失せぬ富山唯繼は、今日も明日もと行處を求めては、夜を晷に繼ぎて打廻るなりけり。宮は毫かも之を咎めず、出づるも入るも唯彼の爲すに任せて、恰も旅館の主の爲らんやうに、形ばかりの送迎を怠らざると謂ふのみ。此の夫に對する仕向は兩三年來の平生を貫きて、彼の性質とも病身の故とも許さるゝまでに目慣されて、又彼方よりも咎められざるなり。其と共に唯繼の行も曩日とは漸く變りて、出遊に耽らんとする傾も出で來しを、淺瀬の浪と見し間も無く近き頃より俄に深陷して浮るゝと知れたるを、宮は猶しも措きて咎めず。他は如何にとも爲よ、吾身は如何にとも成らば成れと互に咎めざる心易さを偸みて、異しき女夫の契を繫ぐにぞありける。

悋れども唯繼は仍ほ其妻を忘れんとはせず。始終の憂に瘁れたる宮は決して美しき色を減ぜざりしよ、彼が其の美しさを變へざる限は夫の愛は斷くべきにあらざりき。抑も此に嫁ぎしより一點の愛だに無かりし宮の、今に到りては啻に愛無きに止らずして、陰に厭ひ憎めるにあらずや。其故に彼は漸く家庭の樂からざるをも感ずるにあらずや。其故に彼は外に出でゝ憂を霽すに忙はしきにあらずや。然れども彼の忘れず塒に歸り來るは、又此の妻の美しき顏を見んが爲のみ。既に其顏を見了れば、何ばかりの樂のあらぬ家庭は、彼をして火無き煖爐の傍に處しむるなり。彼の凍えて出でざること無し。出づれば幸ひに其の金力に賴りて勢を得、媚を買ひて、一時の慾を肆まにし、其處には樂むとも知らず樂み、苦むとも知らず苦みつゝ宮が空しき色香に溺れて、內には悋る美しきものを手活の花と眺め、外には到る處に當世の翮を鳴して推廻すが、此上無う紳士の願足れりと心得たるなり。

いて、其の妻は見るも厭しき夫の傍に在る苦を片時も輕くせんとて、彼の繁き外出を見赦して、十度に一度も色を作さゞるを、風引かぬやうに召しませ猪牙とやらの難有き賢女の志とも戴き喜びて、いと堅き家の守と且は等閑ならず念ひにけり。然るは獨り夫のみならず、本家の兩親を始親屬知邊に至るまで一般に彼の病身を憫みて、おとなしき嫁よと賞め揚さぬはあらず。實に彼は某の妻のやうに出行かず、くれがしの夫人のやうに氣儘ならず、又は誰々の如く華美を好まず、强請事せず、而も其等の人々より才も容も立勝りて在りながら、常に内に居て夫に事ふるより外を爲ざるが、最怜しと見ゆるなるべし。宮が裏める秘密は知る者もあらず、躬も絶えて異まるべき穗を露さゞりければ、其の夫に事へて捗捗しからぬ僞も僞とは爲られず、却りて人に憫まるゝなんど、其身には量無き幸を享くる心の内に、獨り遣方無く苦める不幸は、又量無しと爲ざらんや。

十九にして戀人を棄てにし宮は、昨日を夢み、今日を嘆ちつゝ、過せば過さるゝ月日を累ねて、茲に廿あまり五つの春を迎へぬ。此春の齎せしものは痛悔と失望と憂悶と、別に空く其の身を老しむる齡なるのみ。彼は釋れざる囚にも同じかる思を惱みて、元日の明るよりいとゞ懊惱の遣る方無かりけるも、年の始といふに臥すべき病ならねば、起き居るまゝに本意ならぬ粧も、色を好める夫に勸められて、例の美しと見らるゝ淺ましさより、猶甚しき淺ましさを其人の陰に陽に恨み悲むめり。

宮は今外出せんとする夫の寒凌ぎに葡萄酒飲む間を暫く長火鉢の前に冊くなり。木振賤しからぬ二鉢の梅の影を帶びて南緣の障子に上り盡せる日脚は、袋棚に据ゑたる福壽草の五六輪咲揃へる葩に輝きつゝ、更に唯纎の身よりは光も出づらんやうに、彼は晝眩き新調の三枚襲を着飾りて、其の最も珍と爲る里昂製の白の透織の絹領卷を右手に引摳ひ、左に宮の酌を受けながら、

「あゝ、拙い手付……………あゝ零れる、零れる！　是は恐入つた。これだからつい餘所で飲む氣にもなりますと謂つて可い位のものだ。」

「ですから多度上つて被入いまし。」

「宜しいかい、宜しいね。宜い。今夜は遲いよ。」

「何時頃お歸來になります。」

「遲いよ。」

「でも大約時間を極めて置いて下さいませんと、お待ち申して居る者は困ります。」

「遲いよ。」

「それぢや十時には皆寢みますから。」

「遲いよ。」

又言ふも煩しくて宮は口を閉ぢぬ。

「遲いよ。」

「…………。」
「驚く程遲いよ。」
「………………。」
「おい、些と。」
「………。」
「おや、お前慍つたのか。」
「…………………………。」
「慍らんでも可いぢやないか、おい。」
彼は續け樣に宮の袖を曳けば、
「何を作るのよ。」
「返事を爲んからさ。」
「お遲いのは解りましたよ。」
「遲くはないよ、實は。だからして、まあ機嫌を直すべし。」

「お遲いならお遲いで宜うございますから…………。」
「遲くはないと言ふに、お前は近來直に慍るよ、何云ふのかね。」
「一つは病氣の所爲かも知れませんけれど、」
「一つは俺の浮氣の所爲かい。恐入つたね。」
「…………………………。」
「お前一つ飮まんかい。」
「私澤山。」
「おや俺が半分助けて遣るから、」
「いゝえ、澤山なのですから。」
「まあ然う言はんで、少し、注ぐ眞似。」
「欲くもないものを、貴方は。」
「まあ可いさ。お酌は、それ恁云ふ鹽梅に、愛子流かね。」
妓の名を聞ける宮の如何に言ふらん、と唯繼は陰に樂み待つなる流眄を

彼の面に逡れるなり。

宮は知らず貌に一口の酒を啣みて、眉を顰めたるのみ。

「もう飲めんのか、ぢや此方へお寄來し。」

「失禮ですけれど、」

「此上へもう一盃注いで貰はう。」

「貴方、十時過ぎましたよ、早く被行いませんか。」

「可いよ、此の二三日は別に俺の爲る用は無いのだから。それで實はね、今日は少し遲くなるのだ。」

「然うでございますか。」

「遲いと云つたつて怪いのぢやない。此の廿八日に傳々會の大溫習が有るといふ譯だらう、因て今日五時から糸川の處へ集つて下溫習を爲るのさ。俺は、それお特得の、（親々に誘はれ、難波の浦を船出して、身を盡したる、憂きおもひ、泣いてチヽチヽあかしのチントン風待にテテンチ

ンツン…………。」
厭しげに宮の餘所見せるに、乘地の唯繼は愈よ聲を作りて、
「(たま〱逢ひはア——ア逢ひイ——ながらチツン〱〱つれなき嵐に吹分けられェ、エ、エ、、、ツン〱〱テツテツトン、テツトン國へ歸ればア、、、父イ、、、母のチ、、チン〱〱〱〱チイン思ひも寄らぬ夫定…………。)」
「貴方もう好加減になさいましよ。」
「もう少し聽いてくれ、(立つる操を破ら…………。)」
「又寛り伺ひますから、早く被行いまし。」
「然し、巧くなつたらう、ねえ、些と聞けるだらう。」
「私には解りませんです。」
「是は恐入つた、解らないのは情無いね。少し解るやうに成つて貰はうか。」

「解らなくても宜しうございます。」
「何、宜しいものか、淨琉璃の解らんやうな頭腦ぢや爲方が無い。お前は一躰冷淡な頭腦を有つて居るから、それで淨琉璃などを好まんのに違無い　奈何も然うだ。」
「那樣事はございません。」
「何、然うだ。お前は一躰冷淡さ。」
「愛子は奈何でございます。」
「愛子か、他は那で冷淡でないさ。」
「それで能く解りました。」
「何が解つたのかね。」
「解りました。」
「些も解らんよ。」
「まあ可うございますから、早く被行いまし、而して早くお歸りなさい

まし。」
「うゝ、是は恐入つた、冷淡でないぢや早く歸る、お前待つて居るか。」
「私は何時でも待つて居りますぢや御座いませんか。」
「是は冷淡でない！」
漸く唯繼の立起れば、宮は外套を着せ掛けて、不取敢彼に握手を求めぬ。
這は決して宮の冷淡ならざるを證するに足らざるなり、故は、此の女夫の出入に握手するは、夫の始より命じて習せし躾なるをや。

（三）の二

夫を玄關に送り出でし宮は、旋て氷の窖などに入るらん想しつゝ、是非無き歩を運びて居間に還りぬ。彼は其夫と偕に在るを謂はんやう無き累と爲なれど、又其の獨を守りて此家に處るゝをも堪へ難く悒きものに思へるなり。必しも力むるとにはあらねど、夫の前には自ら氣の張ありて、左に右に然るべくは振舞へど、恣まなる身一箇となれば、遽に慵く打勞れて、心は整へん術も知らず紊れに亂るゝが常なり。

火鉢に倚りて宮は我を喪へる躰なりしが、如何に思入り、思回し思窮むればとて、解くべきにあらぬ胸の内の、終に明けぬ闇に彷徨へる可悲さは、在るにもあられず身を起して彼は障子の外なる縁に出でたり。

麗しく冱えたる空は遠く三四の凧の影を點じて、見遍す庭の名殘無く冬枯れたれば、淺露なる日の光の眩きのみにて、啼狂ひし梢の鵯の去りし

後は、隔てる隣より戞々と羽子突く音して、なか〳〵此には其の寒さを忍ぶ値あらぬを、彼は然れども少時居て、又空を眺め、又冬枯を見遣り、同じき日の光を仰ぎ、同じき羽子の音を聞きて、抑へんとはしたりけれども抑へ難さの竟に苦しく、再び居間に入ると見れば、其處にも留らで、書齋の次なる寢間に入るより、身を抛ちてベッドに伏したり。

厚き蓐の積れる雪と眞白き上に、亂疊める幾重の衣の彩を爭ひつゝ、妖なる姿の意も介かず横れるを、窓の日の帷を透して隱々照したる、實に匂も零るゝやうにて、彼は浪に漂ひし人の今打揚げられたるも現ならず、幾と力竭きて絕入らんとするが如く、止だ手枕に横顏を支へて、力無き眼を瞪れり。竟には溜息吻きて其目を閉づれば、片寢に倦める面を內向けて、裾の寒さを侘しげに身動したりしが、猶も底止無き思の淵は彼を沈めて逭さゞるなりけり。

隅棚の枕時計は突と秒刻を忘れぬ。益す靜に、益す明かなる閨の內には、

空しとも空しき時の移るともなく移るのみなりしが、忽ち差入る鳥影の軒端に近く、俯したる宮が肩頭に打連りて飜きつ。

良有りて彼は嬾くベッドの上に起直りけるが、鬢の縺れし頭を傾けて、帷の隙より僅に眺めらるゝ庭の面に見るとしもなき目を遣りて、當所無く心の彷徨ふ蹤を追ふなりき。

久しからずして彼は此をも出でゝ又居間に還れば、直に簞笥の中より友禪縮緬の帶揚を取出し、心に籠めたりし一通の文とも見ゆるものを拔きて、這度は主の書齋に持ち行きて机に向へり。其の卷紙は貫一が遺せし筆の跡などにはあらで、いつかは宮の彼に送らんとて、別れし後の思の丈を竊に書聯ねたるものなりかし。

往年宮は田鶴見の邸内に彼を見しより、いとゞ忍びかねたる胸の内の訴へん方もあらぬ切なさに、唯心寛の假初に援りける筆ながら、なか〳〵口には打出し難き事を最好く書きも陳けも爲しを、あはれ彼人の許に送

りて、思ひ知りたる今の悲さを告げばやと、一圖の意をも定めしが、又案ずれば、其文の果して貫一の手に觸れ、目にも入るべきか。縦し然ればとて、憎み怨める怒の餘に投返されて、人目に曝さるゝ事などあらば、徒に身を滅す疵を求めて終りなんをと、遣れば火に入る蟲の危く、捨つるは惜くも、旋て好き首尾の有らんやうに據無き頼を繋けつゝ、彼は懊惱に堪へざる毎に取出でゝは寫し易ふる傍ら、或は書添へ、或は改めなどして、此文に向へば自ら其人に向ふが如く、其人に向ひては幾と言盡して心殘のあらざる如く、止之に因りて欲するまゝの夢をも結ぶに似たる快きを覺ゆるなりき。慝して得逐らぬ文は寫せしも灰となり、反古となりて、彼の帶揚に籠められては、いつまで草の可哀や用らるゝ果も知らず、宮が手習は實に久うなりぬ。

些箇に慰められて過せる身の荒尾に邂逅ひし嬉しさは、何に似たりと謂はんも愚にて、此人をこそ仲立にて、積る思を遂げんと頼みしを、仇の

如く與せられざりし悲さに、然らでも切なき宮が胸は搔亂れて、今は漸く危きを懼れざる覺悟も出て來て、いつまで草のいつまで恁てあらんや、文は遂らんと、此の日頃思ひ立ちてけり。

紙の良きを擇び、筆の良きを擇び、墨の良きを擇び、彼は意して其字の良きを殊に擇びて、今日の今ぞ始めて假初ならず寫さんと爲なる。打顫ふ手に十行餘認めしを、衝と裂きて火鉢に差燕べければ、焰の急に炎々と騰るを、可踈しと眺めたる折しも、紙門を啓けて其光に愕えし婢は、覺えず主の氣色を異みつゝ、

「あの、御本家の奧樣がお出で遊ばしました。」

第四章

主夫婦を併せて燒亡せし鰐淵が居宅は、然るほどに貫一の手に頼りて其跡に改築せられぬ。有形よりは小躰に、質素を旨と爲たれど專ら舊の搆造を摸して差はざらんと勉めしに似たり。

間貫一と陶札を掲げて、彼は此の新宅の主になれるなり。家督たるべき直道は如何にせし。彼は始より此の不義の遺産に手をも觸れざらんと誓ひ、且之を貫一に與へて、其物は正業の資たれ、其人は改善の人たれと冀ひしを、貫一は今此家の主となれるに、仍先代の志を飜さずして、益す盛に例の貪を營むなりき。然れば彼と貫一との今日の關繫は如何なるものならん、絶えて之を知る者あらず。凡そ人生箇々の裏面には必ず如此き內情若くは秘密とも謂ふべき者ありながら、幸に他の穿鑿を免れて、曖昧の裏に葬られ畢んぬる例尠からず。二代の鰐淵なる間の家の此の一

件も亦貫一と彼との外に洩れざるを得たり。

隱して今は鰐淵の手代ならぬ三番町の間は、其向に有數の名を成して、外には善く貸し、善く斂むれども、內には事足る老婢を役ひて、僅に自炊ならざる男世帶を張りて、仍も奢らず、樂まず、心は昔日の手代にして、趣は失意の書生の如く、依然たる變物の名を失はで居たり。

出でゝは有繫に勞れて日暮に歸り來にける貫一は、彼の常として、吾家ながら人氣無き居間の內を、旅の木蔭にも休へる想しつゝ、稍興冷めて坐りも遣らず、物の悲き夕を特に獨の感じ居れば、老婢はラムプを持ち來りて、

「今日三時頃でございました、お客樣が見えまして、明日又今頃來るから、是非內に居てくれるやうにと有仰つて、お名前を伺つても、學校の友達だと言へば可い、と然う有仰つてお歸りになりました。」

「學校の友達？」

臆測にも知る能はざるは此の藪から棒の主なり。
「甚麽風の人かね。」
「然やうでございますよ、年紀四十約の蒙茸と髭鬚の生えた、身材の高い、剛い顏の、全て壯士見たやうな風躰をして在でした。」
「…………………………。」
些の憶起す節もありや、と貫一は打案じつゝも半も怪むに過ぎざりき。
「而して、まあ大相横柄な方なのでございます。」
「明日三時頃に又來ると？」
「然やうでございますよ。」
「誰か知らんな。」
「何だか誠に風の惡さうな人躰で御座いましたが、明日參りましたら通しませうで御座いますか。」
「ぢや用向は言つては行かんのだね。」

「然やうでございますよ。」
「宜しい、會つて見やう。」
「然やうでございますか。」
起ち行かんとせし老婢は又居直りて、
「それから何でございました、間も無く赤樫さんが被入いまして、」
貫一は懌ばざる色を作して之に應へたり。
「神戸の蒲鉾を三枚、見事なのでございます。それに藤村の蒸羊羹を下さいまして、私まで毎度又頂戴物を致ましたので御座います。」
彼は益す不快を禁じ得ざる面色して、應答も爲で聽き居たり。
「而して明日五時頃些とお目に掛りたいから、然う申上げて置いてくれと有仰つてゞ御座いました。」
可しとも彼は口に出さで、寧ろ止めよとやうに忙く頷けり。

（四）の二

學校友達と名宣りし客は其言の如く重ねて訪ひ來ぬ。不思議の對面に駭き惑へる貫一は、迅雷の耳を掩ふに遑あらざらんやうに劇く吾を失ひて、頓には其の惘然たるより覺むるを得ざるなりき。荒尾讓介は席の温る間の手弄に放ちも遣らぬ下髯の、長く忘れたりし友の今を如何にと觀るに忙しかり。

「殆ど一昔と謂うても可い程になるのぢやから話は澤山ある、けれども之より先に聞きたいのは、君は今日でも僕をじや、此の荒尾を親友と思うて居るか、奈何かと謂ふのじや。」

答ふべき人の胸は仍自在に語るべくもあらず亂れたるなり。

「考へる迄はなからう。親友と思うて居るなら、居る、然うなけりや、ないと言ふ迄で是か否かの一つじや。」

「そりや昔は親友であつた。」

彼は覺束無げに言出せり。

「然う。」

「今は然ぢやあるまい。」

「何爲にな。」

「其後五六年も全く逢はずに居るのだから、今では親友と謂ふことは出來まい。」

「何有五六年前も一向親友ではありやせんぢやつたではないか。」

貫一は目を側めて彼を訝りつ。

「然ぢやらう、學士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈の場合に、何等の相談も爲んのみか、それなり失踪して了うたのは、何處が親友なのか。」

其の常に慙ぢ且悔る一事を責められては、癒えざる痍をも割るゝ心地し

て、彼は苦しげに容を斂め、聲をも出さで居たり。
「君の情人は君に負いたぢやらうが、君の友は決して君に負かん筈じや。其の友を何爲に君は棄てたか。其通り棄てられた僕ぢやけれど、恬して又訪ねて來たのは、未だ君を實は棄てんのじやと思ひ給へ。」
學生たりし荒尾！　參事官たりし荒尾!!　尾羽打枯せる今の荒尾の姿は變りたれど、猶一片の變らぬ物ありと知れる貫一は、夢とも消えて、去りし、去りし昔の跡無き跡を悲しと偲ぶなりけり。
「然し、僕が棄てゝも棄てんでも、那樣事に君は痛痒を感ずるぢやなからうけれど、僕は僕で、友の德義として左に右一旦は棄てんで訪ねて來た。で、斷然棄つるも、又棄てんのも、唯今日にある意じや。
今では荒尾を親友とは謂へん、と君の言うた所を以つて見ると、又今更親友であることを君は望んでは居らんやうじや。然であるならば僕の方でも敢て望まん、立派に名宣つて僕も間貫一を棄つる！」

貫一は頭を低れて敢て言はず。

「然し、今日まで親友と思うて居つた君を棄つるからには、是が一生の別になるのぢやから、其の餞行として一言云はんけりやならん。間、君は何の爲に貨を殖ゆるのじや。彼の大いなる樂とする者を奪れた爲に、其に易へる者として金錢といふ考を起したの乎。其も可からう、可いとして措く。けれどもじや、其を獲る爲に不義不正の事を働く必要が有る乎。君も現在他から苦められて居る軀ではないのか。然なれば己が又他を苦むるのは尤も用捨すべき事ぢやらうと思ふ。それが他を苦むると謂うても、難儀に附入つて、而して其血を搾るのが君の營業、殆ど強奪に等い手段を以つて金を殖えつゝ、君はそれで今日慰められて居るの乎。如何に金錢が總ての力であるか知らんけれど、人たる者は惡事を行つて居つて、一刻でも安樂に居らるゝものではないのじや。それとも、君は怡然として樂んで居る乎、長閑な日に花の盛を眺むるやうな氣持で

催促に行つたり、差押を爲たりして居る乎。奈何かい、間。」
彼は愈よ口を閉ぢたり。
「恐くじや。然云ふ氣持の事は、此の幾年間に一日でも有りはせんのぢやらう。君の顏色を見い！　全で罪人じやぞ。獄中に居る者の面じや。」
別人と見るまでに彼の淺ましく瘁れたる面を矚りて、讓介は涙の落つるを覺えず。
「間、何で僕が泣くか、君は知つて居るか。今の間ぢや知らんぢやらう。幾多貨を殖えた所で、君は其分では到底慰めらるゝ事はありやせん。病が有るからと謂うて毒を飲んで、其病が瘥るぢやらうか。君は恰も藥を飲む事を知らんやうなものぢやぞ。僕の友であつた間は那樣痴漢ぢやなかつた、さて見りや發狂したのぢや。發狂してからに馬鹿な事を爲居る奴は尤むるに足らんけれど、一婦人の爲に發狂した其の根性を、彼の友として僕が慙ぢざるを得んのじや。間、君は盜人と言れたぞ。罪人と言

れたぞ、狂人と言れたぞ。少しは腹を立てい！　腹を立てゝ僕を打つとも蹴るとも爲て見い！」
彼は自ら言ひ、自ら憤り、尙自ら打ちも蹴も爲んずる色を作して速々答を貫一に逼れり。
「腹は立たん！」
「腹は、立たん？　それぢや君は自身に盜人とも、罪人とも…………………………………………………………………。」
「狂人とも思つて居る。一婦人の爲に發狂したのは、君に對して實に面目無いけれど、旣に發狂して了つたのぢやから、どうも今更爲やうが無い。折角ぢやあるけれど、此儘棄置いてくれ給へ。」
貫一は纔に慯く言ひて已みぬ。
「然うか。それぢや君は不正な金錢で慰められて居るのか。」
「未だ慰められては居らん。」

「何日慰めらるゝのか。」
「解らん。」
「而して君は妻君を娶うたか。」
「娶はん。」
「何爲娶はんの乎、恁して家を構へて居るのに獨身ぢや不都合ぢやらうに。」
「然でもないさ。」
「君は今では彼の事を奈何思うて居るな。」
「彼とは宮の事かね。他は畜生さ！」
「然し、君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは人の心は有つちや居らん、人の心が無けりや畜生じや。」
「然云ふけれど、世間は大方畜生ぢやないか。」
「僕も畜生かな。」

「…………………。」

「間、君は彼が畜生であるのに激して猶且畜生になつたのじやな。若し彼が畜生であつたのを改心して人間に成つたと爲たら、同時に君も畜生を罷めにやならんじやな。」

「彼が人間に成る？　能はざる事だ！　僕は高利を貪る畜生だけれど、人を欺く事は爲んのだ。詐つて人の誠を受けて、而して其を賣るやうな殘忍な事は決して爲んのだ。始から高利と名宣つて貸すのだから、否な者は借りんが可いので、借りん者を欺いて貸すのぢやない。宮の如き畜生が何で再び人間に成り得るものか。」

「何爲成り得んのか。」

「何爲成り得るのか。」

「然なら君は彼の人間に成り得んのを望むのか。」

「望むも望まんも、那麼者に用は無い！」

寧ろ其面に唾せんとも思へる貫一の氣色なり。
「そりや彼には用は無いぢやらうけれど、君の爲に言ふべきことぢやと思ふから話すのぢやが、彼は今では大いに悔悟して居るぞ、君に對して罪を悔いて居るぞ！」
貫一は吾を忘れて嗤笑ひぬ。彼は其の如何に賤むべき乎、謂はんやうもあらぬを念ひて、更に嗤笑ひ、猶嗤笑ひ、遏めんとして又嗤笑ひぬ。
「彼も然ふて悔悟して居るのぢやから、君も悔悟するが可からう、悔悟する時ぢやらうと思ふ。」
「彼の悔悟は彼の悔悟で、僕の與る事は無い。畜生も少しは思知つたと見える、其も可からう。」
「先頃計らず彼に逢うたのじや、すると、僕に向うて涙を流して、そりや眞實悔悟して居るのぢや。而して僕に詫を爲てくれ、其が成らずば、君に一遍逢せてくれ、と縋つて賴むのじやな、けれど僕も思ふ所が有る

から拒絶はゑた。又君に對しても、彼が其樣に悔悟して居るから容して遣れと勸めは爲ん、其は別問題じや。但僕として君に言ふ所は、彼は悔悟して獨り苦んで居る。則ち彼は自ら罰せられて居るのぢやから、君は君として怨を釋いて可からうと思ふ。君が其怨を釋いたなら、昔の間に復るべきぢやらうと考へるのじや。

君は今のところ慰められて居らん、それで又、何日慰めらるゝとも解らんと言うたな、然しじや、彼が悔悟してからに其樣に思うて居ると聞いたら、君は其を以つて大いに慰められはせんかな。君が此の幾年間に得た金錢、それは幾多か知らんけれど、其の寡からん金錢よりは、彼が終に悔悟したと聞いた一言の方が、遙に大いなる力を以つて君の心を慰むるであらうと思ふのぢやが、奈何か。」

「それは僕が慰められるよりは、宮が苦まなければならん爲の悔悟だらう。宮が前非を悟つた爲に、僕が失つた者を再び得られる譯ぢやない、

然して見れば、僕の今日は其に因つて少も慰められる所は無いのだ。惱いことは彼は飽くまで惱い、が、其の惱さに僕が慰められずに居るのではないからして、宮其者の一身に向つて、僕は棄てられた怨を報いやうなどゝは決して思つて居らん、畜生に讐を復す價は無いさ。
今日になつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと謂ひたいけれど、是は固より然う有るべき事なのだ。始に那麼不心得を爲なかつたら、悔悟する事は無かつたらうに——不心得であつた、非常な不心得であつた！」
彼は黯然として空く懷へるなり。
「僕は彼の事を言はんのじや。又彼が悔悟した爲に君の失うた者が再び得らるゝ譯でないから、それぢや慰められんと謂ふのなら、それで可いのじや。要するに、君は其の失うた者が取返されたら可いのぢやらう、而して其の目的を以つて君は貨を殖ゝて居るのぢやらう、なあ、然すり

や其の貨さへ得られたら、好んで不正な營業を爲る必要は有るまいが。君が失うた者が有る事は知つて居る。其が爲に常に樂まんのも、同情を表して居る、因で金錢の力に頼つて慰められやうとして居る、に就いては異議も有るけれど、それは君の考に委する。貨を殖ゆるも可い。可いとする以上は大いに富むべしぢや。けれど、富むと云ふのは貪つて聚むるのではない、又貪つて聚めんけりや貨は得られんのではない、不正な手段を用んでも、富む道は幾多も有るぢやらう。君に言ふのも、な、其の目的を變へよではない、止だ手段を改めよじや。路は違へても同じ高嶺の月を見るのぢやが。」

「辱いけれど、僕の迷は未だ覺めんのだから、間は發狂して居る者と想つて、一切管ひ付けずに措いてくれ給へ。」

「然うか。奈何あつても僕の言は用られんのじやな。」

「容してくれ給へ。」

「何を容すのぢや！　貴樣は俺を棄てたのではないか、俺も貴樣を棄てたのじやぞ、容すも容さんも有るものか。」
「今日限互に棄てゝ別れるに就いては、僕も一箇聞きたい事が有る。それは君の今の身の上だが、奈何したのかね。」
「見たら解るぢやらう。」
「見たばかりで解るものか。」
「貧乏して居るのよ。」
「それは解つて居るぢやないか。」
「それ丈じや。」
「それ丈の事が有るものか。何で官途を罷めて、而して那樣に貧乏して居るのか、樣子が有りさうぢやないか。」
「話した所で狂人には解らんのよ。」
荒尾は空嘯きて起たんと爲なり。

「解つても解らんでも可いから、まあ話す丈は話してくれ給へ。」
「其を聞いて何爲る。あゝ貴樣は何か、金でも貸さうと云ふのか。否thank じや、赤貧洗ふが如く窮して居つても、心は怡然として樂んで居るのじや。」
「それだから猶、何爲て然う窮して、其を又樂んで居るのか、其には何か事情が有るのだらう、から、其を聞せてくれ給へと言ふのだ。」
荒尾は故らに哈々として笑へり。
「貴樣如き無血蟲が那樣事を聞いたとて何が解るもので。人間らしい事を言ふな！」
「然うまで辱められても辭を返すことの出來ん程、僕の軀は腐つて了つたのだ。」
「固よりじや。」
「恁う腐つて了つた僕の軀は今更爲方が無い、けれども、君は立派に學

位も取つて、參事官の椅子にも居た人、國家の爲に有用の器であることは、決して僕の疑はん所だ。で、僕は常に君の出世を豫想し、又陰に其を禱つて居つたのだ。君は僕を畜生と言ひ、狂人と言ひ、賊と言ふけれど、君を懷ふ念の僕の胸中を去つた事はありはせんよ。今日迄君の外には一人の友も無いのだ。一昨年であつた、君が靜岡へ赴任すると聞いた時は、嬉くもあり、可懷くもあり、又考へて見れば、自分の身が悲くもなつて、僕は一日飯も食はんで居た。其に就けても、久し振で君に逢つて慶賀も言ひたいと念つたけれど、奈何も逢れん僕の軀だから、切て陰ながらでも君の出世の姿が見たいと、新橋の停車場へ行つて、君の立派に成つたのを見た時は、何も彼も忘れて僕は唯嬉くて涙が出た。」

さてはと荒尾も心陰に頷きぬ。

「君の出世を見て、それほど嬉しかつた僕が、今日君の那樣に零落して居るのを見る心持は甚麼であるか、察し給へ。自分の身を顧ずに恁云ふ

事を君に向つて言ふべきではないけれど、僕はもう己を棄てゝ居るのだ、一婦女子の詐に憤つて、其が爲に一身を過つたと知りながら、自身の覺悟を以て匡正することの出來んと謂ふのは、全く天性愚劣の致す所と、自ら恨むよりは無いので、僕は生きながら腐れて、是で果てるのだ。君の親友であつた間貫一は既に亡き者に成つたのだ、と然う想つてくれ給へ。であるから、是は間が言ふのではない、君の親友の或者が君の身を愛んで忠告するのだとして聽いてくれ給へ。何云ふ事情か、君が話してくれんから知れんけれど、君の軀は十分自重して、社會に立つて壯なる働を作して欲いのだ。君は然して窮迫して居るやうだけれど、決して世間から棄てられるやうな君でない事を僕は信ずるのだから、一箇人として己の爲に身を愛みたまへと謂ふのではなく、國家の爲に自重し給へと願ふのだ。君の親友の或者は君が其才を用る爲に社會に出やうと爲るならば、及ぶ限の助力を爲る精神であるのだ。」

貫一の面は病などの忽ち愈えけんやうに輝きつゝ、如此く潔くも麗しき辭を語れるなり。

「うゝ、それぢや君は何か、僕の俹して落魄して居るのを見て氣毒と思ふのか。」

「君が謂ふほどの畜生でもない！」

「其處じや、間。世間に貴樣のやうな高利貸が在る爲に、適れ用らるべき人才の多くがじや、名を傷け、身を誤られて、社會の外に放逐されて空く朽つるのじやぞ。國家の爲に自重せいと、僕の如き者にでも然う言うてくるゝのは忝いが、同じ筆法を以つて、君も社會の公益の爲に其の不正の業を罷めてくれい、と僕は又賴むのじや。今日の人才を滅す者は、曰く色、曰く高利貸ぢやらう。此通り零落れて居る僕が氣毒と思ふなら、君の爲に艱まれて居る人才の多くを一層不敏と思うて遣れ。君が愛に失敗して苦むのもじや、或人が金錢の爲に苦むのも、苦むと云

ふ點に於ては差異は無いぞ。で、僕も恬して窮迫して居る際ぢやから、憂を分つ親友の一人は誠欲いのじや、昔の間貫一のやうな友が有つたらばと思はん事は無い。其の友が僕の身を念うてくれて、社會へ打つて出て壯に働け、一臂の力を假さうと言ふのであつたら、僕は如何に嬉しからう！　世間に最も喜ぶべき者は友、最も惡むべき者は高利貸じや。如何に高利貸の惡むべきかを知つて居る丈、僕は益す友を懷ふのじや。其の昔の友が今日の高利貸――其の惡むべき高利貸！　吾又何をか言はんじや。」

彼は口を閉ぢて、貫一を疾視せり。

「段々の君の忠告、僕は難有い。猶自分にも篤と考へて、此の腐れた軀が元の通潔白な者に成り得られるなら、其に越した幸は無いのだ。君も亦自愛してくれ給へ。僕は君にこそ棄てられても、君の大いに用られるのを見たいのだ。又必ず大いに用られなければならん其人が、然して不遇

て居るのは、殘念であるよりは僕ゝ悲い。那樣に念つても居るのだから、一遍君の處も訪ねさしてくれ給へ。何處に今居るかね。」
「まあ、高利貸などは來て貰はん方が可い。」
「其日は友として訪ねるのだ。」
「高利貸に友は持たんものな。」
窒かに紙門を押啓きて出來れるを、誰かと見れば滿枝なり。彼如何なれば不躾にも此席にゝ顯れけん、と打駭ける主よりも、荒尾が心の中こそ更に匹ふべくもあらざるなりけれ。いでや、彼は窘みて其の長き髯をば痛に拈りつ。然れど狼狽へたりと見られんは口惜しとやうに、遽に其手を胸高に拱きて、動かざること山の如しと打控へたる樣も、自ら故とらしくて、亦見好げにゝあらざりき。
滿枝は先づ主に挨拶して、さて荒尾に向ひては一際禮を重く、而も躬はあらぬ手の動き、目の視るまで、專ら貴婦人の如く振舞ひつゝ、笑むともあら

ず面を和げて姑く辭を出さず。荒尾は此際なか〳〵默するに堪へずして、
「是は不思議な所で！　成程間とは御懇意かな。」
「君は奈何して此方を識つて居るのだ。」
左瞻右視して貫一は呆るゝのみなり。
「そりや少し識つて居る。然し、長居はお邪魔ぢやらう、大きに失敬した。」
「荒尾さん。」
滿枝は遁さじと呼留めて、
「恁云ふ處で申上げますのも如何で御座いますけれど、」
「あゝ、そりや此で聞くべき事ぢやない。」
「けれど毎も御不在ばかりで、お話が付きかねると申して弱り切つて居りますで御座いますから、」
「いや、會うたところでからに話の付けやうもないのじや。遁げも隱れ

も爲んから、まあ時節を待つて貰はうさ。」
「それは甚麽にもお待ち申上げますけれど、貴方の御都合の宜しいやうにばかり致しては居られませんで御座います。そこはお察しあそばしませな。」
「うゝ、隨分酷い事を察しさせられるのじやね。」
「近日に是非私お願ひ申しに伺ひますで御座いますから、どうぞ宜しく。」
「そりや一向宜しくないかも知れん。」
「あゝ、然う、此の前でございましたか、那の者が伺ひました節、何か御無禮な事を申上げましたとかで、大相な御立腹で、お刀をお拔き遊ばして、斬つて了ふとか云ふ事が御座いましたさうで。」
「有つた。」
「あれ、本當に然やうな事を遊ばしましたので？」
滿枝は彼に耻ぢよとばかり嗤笑ひぬ。然知つたる荒尾は飽くまで眞顏を

作りて、

「本當とも！　實際那奴砍却つて了はうと思うた。」

「然しお考へ遊ばしたで御座いませう。」

「まあ其邊じや。　那でも犬猫ぢやなし、斬捨にもなるまい。」

「まあ、怖い事ぢや御座いませんか。　私なぞは滅多に伺ふ譯には參りませんで御座いますね。」

夫は誰が事を言ふならんとやうに、荒尾は頂を反して噪き笑ひぬ。

「僕が美人を斬るか、其の目で僕が殺さるゝか。　どう歸つて、刀でも拭いて置かう。」

「荒尾君、夕飯の支度が出來たさうだから、食べて行つてくれ給へ。」

「其は折角ぢやが、盜泉の水は飲まんて。」

「まあ貴方、私お給仕を勸めます。　さあ、まあお下に被居つて。」

滿枝は荒尾の立てる脚下に褥を推付けて、實に還さじと主にも劣らず最

惜む様なり。

「全て御夫婦のやうじやね。是は好一對じや。」

「其のお意で、奈何ぞお席に被居つて。」

固より留らざるべき荒尾は終に行かんとしつゝ、

「間、貴様は…………。」

「…………………………。」

「…………………………。」

彼は脣の寒かるべきを思ひて、空く鬱抑して歸り去れり。其の言はざりし語は直に貫一が胸に響きて、彼は人の去にける迹も、仍ほ聽くに苦しき面を得擧げざりけり。

（四）の三

程も有らずランプは點されて、止だ在りけるまゝに竦み居たる彼の傍に置るゝと與に、其光に照さるゝ滿枝の姿は、更に粧をも加へけんやうに怪しからず妖艶に、宛然色香を擅にせる牡丹の枝を咲撓めたる風情にて、彼は親しげに座を進めつ。

「間さん、貴方奈何あそばして。非常にお鬱ぎ遊ばして被居るぢや御座いませんか。」

貫一は怠くも纔に目を移して、

「一躰貴方は奈何して荒尾を御存じなのですか。」

「私よりは、貴方が那方の御朋友で被居るとは、實に私意外で御座いますわ。」

「貴方は奈何𛀙て御存じなのです。」

「まあ債務者のやうな者なので御座います。」
「債務者！　荒尾が？　貴方の？」
「私が直接に關係した譯ぢや御座いませんのですけれど。」
「はあ、而して額は若干なのですか。」
「三千圓約でございますの。」
「三千圓？　それで其の直接の貸主と謂ふのは何處の誰ですか。」
滿枝は彼の遽に振向きて膝の前むをさへ覺えざらんとするを見て、歪むる口角に笑を忍びつゝ、
「貴方は實に現金で被在るのね。御自分のお聽になりたい事は熱心にお成りで、平生私がお話でも致すと、全で取合つても下さいませんのですもの。」
「まあ可いです。」
「些とも可い事はございません。」

「うゝ、然すると直接の貸主と謂ふのが有るのですね。」

「存じません！」

「お話し下さいな、樣子に由つては其金は私から辨償しやうとも思ふのですから。」

「私貴方からは戴きません。」

「上げるのではない、辨償するのです。」

「いゝえ、貴方とは御相談になりません。又貴方が是非辨償なさると云ふ事ならば、私那の債權を棄てゝ了ひます。」

「それは何爲ですか。」

「何爲でも宜しう御座いますわ。ですから、貴方が辨償なさらうと思召すなら、私に債權を棄てゝ了へと有仰つて下さいまし。然う致せば私喜んで棄てます。」

「何云ふ譯ですか。」

「何云ふ譯で御座いますか。」
「甚だ解らんぢやありませんか。」
「勿論解らんので御座いますとも。私自分で自分が解らんくらゐで御座いますもの。然し貴方も、間さん、隨分お解りに成りませんのね。」
「いゝや、僕は解つて居ます。」
「えゝ、解つて被居りながら些もお解りにならないのですから、私も益す解らなくなりますですから、然う思つて被居いまし。」
滿枝は金煙管に手爐の縁を丁と拍ちて、男の顏に流眄の怨を注ぐなり。
「まあ然云ふ事を言はずに、左も右もお話を被成つて下さい。」
「御勝手ねえ、貴方は。」
「さあ、お話し下さいな。」
「唯今お話致しますよ。」
滿枝は遽に煙管を索めて、さて傍に人無き若く緩に煙を吹きぬ。

「貴方の債務者であらうとは實に意外だ。」

「…………。」

「どうも事實として信ずる事は出來んくらゐだ。」

「…………。」

「三千圓！　荒尾が三千圓の負債を何で爲たのか、殆ど有得べき事で無いのだけれど、…………。」

「…………。」

唯見れば、滿枝は仍も煙管を放たざるなり。

「さあ、お話し下さいな。」

「這麼に遲々して居りましたら、然ぞ貴方憤つたくて被居いませう。」

「憤つたいのは知れて居るぢやありませんか。」

「憤つたいと云ふものは、決して好い心持ぢやございませんのね。」

「貴方は何を言つてお在なのです！」

「はい〳〵恐入りました。それぢや早速お話を致しませう。」

「どうぞ。」

「蓋か御承知で被居いましたらう、前に宅に居りました向坂と申すの、他が静岡へ參つて、今では些と盛に遣つて居るので御座います。それで、那方は静岡の參事官でお在なのでした、然やうで御座いましたらう。其頃向坂の手から何したので御座います。究竟那方も其件から諭旨免官のやうな事にお成なすつて、又東京へお還りにならなければ爲方が無いので、彼方を引拂ふのに就いて、向坂から話が御座いまして、宅の方へ始は委任して參つたので御座いましたけれど、丁度去年の秋頃から全然此方へ引繼いで了ふやうな都合に致ましたの。

然し、それは取立に骨が折れるので御座いましてね、那して止と遊んでお在も同樣で、飜譯か何か少許爲さる御樣子なのですから、今の所では奈何にも手の着けやうが無いので御座いますわ。」

「はあ、成程。然し、他が何て三千圓と云ふ金を借りたか知らん。」
「それは那方は連帶者なので御座います。」
「はあ！　然して借主は何者ですか。」
「大館朔郎と云ふ岐阜の民主黨員で、選擧に失敗したものですから、其の運動費の後肚だとか云ふ話でございました。」
「うむ、如何にも！　大館朔郎…………それぢや事實でせう。」
「御承知で被居いますか。」
「其は荒尾に學資を給した人で、他が始終恩人と言つて居つた其人だ。」
はや其の言の中に彼の心は急に傷みぬ。己の敬愛せる荒尾讓介の窮して戚々たらず、天命を樂むと言ひしは、眞に義の爲に功名を擲ち、恩の爲に富貴を願ざりし故にあらずや。彼の貧きは萬々人の富めるに優れり。君子なる吾友よ。然しも潔き志を抱ける者にして、其の酬らるゝ薄倖の彼の如く甚しく酷なるを念ひて、貫一は漫ろ涙の沸く目を閉ぢたり。

第五章

遽に千葉に行く事有りて、貫一は午後五時の本所發を期して車を飛せしに、咄嗟、一歩の時を遲れて、二時間後の次回を待つべき倒懸の難に遭へるなり。彼は悄々停車場前の休憩處に入りて奧の一間なる縞毛布の上に溫茶を啜りたりしが、門を出づる折受取りし三通の郵書の鞄に打込みしまゝなるを、此時取出せば、中に一通のM, Shigis——.と裏書せるが在り。

「えゝ、又寄來した！」

彼は之のみ開封せずして、旋て他の讀賣と一つに投入れし鞄を礑と閉づるや、枕に引寄せて仰臥すと見れば、はや目を塞ぎて睡を促さんと爲るなりき。然れども、彼は能く睡るを得べきか。有繋に其人の筆の蹟を見ては、今更に憎しとも戀しとも、絕えて念にや懸けざるべしと誓へる彼の心も、睡らるゝまでに安かる能はざるなり。

いて、此文こそは宮が送りし再度の愬にて、其の始て貫一を驚かせし一札は、約そ二週間前に彼の手に入りて、一字も漏れず其の目に觸れしかど、彼は曩に荒尾に答へしと同様の意を以て其の自筆の悔悟を讀みぬ。這度とても亦同じき繰言なるべきを、何の未練有りて、徒に目を汚し、懷を傷けんやと、氣強くも右より左に搔遣りけるなり。

宮は如何に悲しからん！　此の兩度の消息は、其の苦しき胸を剖き、其の切なる誠を吐きて、世をも身をも忘れし自白なるを、事若し誤らば、此の手證は生ながら葬らるべき罪を得るに餘有るものならずや。然しも覺悟の文ながら、彼は其の一通の力を以て直に貫一の心を解かんとは思設けざりき。

故に幾日の後に待ちて又恁く聞ねしを、此文にも仍驗あらずば、彼は彌增す悲の中に定めて三度の筆を援るなるべし。知らずや、貫一は再度の封をだに切らざりしを――三度、五度、七度重ね〴〵て十百通に及ばん

とも、貫一は斷じて此の愚なる悔悟を聽かじと意を決せるを。
靜に臥したりし貫一は忽ち起きて鞄を開き、先づ彼の文を出し、燐寸を捜りて、封のまゝなる其端に火を移しつゝ、火鉢の上に差翳せり。一片の焔は烈々として、白く颺るものは宮が思の何乎、黒く壞落つるものは宮が心の何乎、彼が幾年の悲と悔とは嬉くも今其人の手に在りながら、すげなき烟と消えて跡無くなりぬ。
貫一は再び鞄を枕にして始の如く仰臥せり。
間有りて婢どもの口々に呼邀ふる聲して、入來し客の、障子越なる隣室に案内されたる氣勢に、貫一は其の男女の二人連なるを知れり。
彼等は若き人のやうにもあらず頗る沈寂に座に着きたり。
「まだ澤山時間が有るから寛り出來る。さあ、鈴さん、お茶をお上んなさい。」
這は男の聲なり。

「貴方本當に此夏にもお歸んなさいますのですか。」
「盆過には是非一度歸ります。然しね、お話をした通り尊父さんや尊母さんの氣が變つ了つてお在なのだから、鈴さんばかり那樣に思つて居ておくれでも、是が奈何して、圓く納るものぢやない。此上はもう唯諦めるのだ。私は男らしく諦めた！」
「雅さんは男だから然でせうけれど、私は諦めません。然ぢやないとお言ひなさるけれど、雅さんは阿父さんや阿母さんの爲方を慍つてお在なのに違無い。それだから私までが憎いので、いゝえ、然うよ、私は何でも可いから、若し雅さんが引取つて下さらなければ、一生何處へも適きはしませんから。」
女は處々聞き得ぬまでの涙聲になりぬ。
「だつて、尊父さんや尊母さんが不承知であつて見れば、幾許私の方で引取りたくつても引取る譯に行かないぢやありませんか。其も、誰を怨

む譯も無い、全く自分が惡いからて、這麼軀に疵の付いた者に大事の娘を與れる親は無い、與れないのが尤だと、それは私そ自分ながら思つて居る。」

「阿父さんや阿母さんが與れなくても、雅さんさへ貰つて下されば可いのぢやありませんか。」

「那樣解らない事を言つて！　私だつて甚麼に悔しいか知れはしない。其は自分の不心得から那麼罪にも陷ちたのだけれど、實を謂へば、高利貸の罠に罹つたばかりで、自分の軀には生涯の疵を付け、隻の母親は……殺して了ひ、又其上に……許婚は破談にされ、……這麼情無い思を爲る位なら、不如私は牢の中で死んで了つた……方が可かつた！」

「あれ、雅さん、那樣事を……。」

兩箇は一度に哭き出せり。

「阿母さんが那畜生の家を燒いて、夫婦とも燒死んだのは好い肚癒ぢや

あるけれど、一旦私の軀に附いた此疵は消えない、阿母さんも來月は鈴さんが來てくれると言つて、朝晩に其ばかり樂にして在すつた………の だし、」

女は衝と出でし泣音の後を怺へ〳〵て啜上げぬ。

「私も破談に爲る氣は少も無いけれど、是は私の方から斷るのが道だから。必ず惡く思つて下さるな。」

「いゝえ………いゝえ………私は………何も………斷られる譯はありません。」

「私に添へば、鈴さんの肩見も狹くなつて、生涯何の彼のと人に言れなけりやならない。其がお氣毒だから、私は自分から身を退いて、是迄の緣と諦めて居るので。然し、鈴さん、私は貴方の志は決して忘れませんよ。」

女は唯愈よ咽び居たり。音も立てず臥たりし貫一は此時忍び起きて、

障子の其處此處より男を隙見せんと爲たりけれど、竟に意の如くならで止みぬ。然れども彼は正しく其の聲音に聞覺あるを思合せぬ。彼男は鰐淵の家に放火せし狂女が子にて、私書僞造罪を以て一年の苦役を受けし飽浦雅之ならずと爲んや。然なり、女の其名を呼べるにても知らるゝを、と獨り頷きつゝ貫一は又潜りて聽耳立てたり。

「嘘にも然して志は忘れないなんて言つて下さる程なら、依舊約束通り私を引取つて下さいな。雅さんが那云ふ災難にお遭なので、其が爲に緣を切る意なら、私は、雅さん、……………一年が間……………鹽斷なんぞ爲はしませんわ。」

彼は自ら其の苦節を憶ひて泣きぬ。

「雅さんが自分に惡い事を爲て那麼譯に成つたのぢやなし、高利貸の奴に瞞されて無實の罪に陥ちたのは、雅さんの災難だ、と私は倶共に悔し……………悔し……………悔しいとは思つて居ても、それで雅さんの軀に疵が附つ

いたから、一處になるのは迷惑だなんと何時私が思つて！　雅さん、私は那樣女ぢやありません、那樣女ぢや……………ない！」

此心を知らずや、と情極りて彼の悶え慨くが手に取る如き隣にそ、貫一が内俯に頭を擦付けて、卷莨の消えしを擎げたるまゝに横れるなり。

「雅さんは私を那樣女だとお思ひのは、貴方がお留守中の私の事を御存じないからですよ。私は三月の餘も疾つて……………那樣事も雅さんは知つてお在ぢやないのでせう。それは、阿父さんや阿母さんは雅さんの處へ上げる氣は無いにしても、私は私の了簡で、若し那云ふ事が有つたので雅さんの肩身が狹くなるやうなら、私は猶更雅さんの處へ適かずにそ居られない、而して私も雅さんと一處に肩身が狹くなりたいのですから。然でなけりや、子供の内から那麼に可愛がつて下すつた雅さんの尊母さんに私は濟まない。

親が不承知なのを私が自分の了簡通に爲るのは、そりや不孝かも知れま

せんけれど、私は奈何しても雅さんの處へ適きたいのですから、お可厭でなくば引取つて下さいましな、私の事は管ひませんから、雅さんが貰つて下さるお心持がお有なさるのか、奈何だか唯其を聞して下さいな。」

貫一は身を回して臂枕に打仰ぎぬ。彼は己が與へし男の不幸よりも、添れぬ女の悲よりも、先づ其の娘が意氣の壯なるに感じて、あはれ、世には恁る切なる戀の焚る如き誠もあるよ、と頭は熱し胸は轟くなり。

さて男の聲は聞ゆ。

「それは、鈴さん、言ふ迄もありはしない。私も那麼目にさへ遭はなかつたら、今頃は家内三人で睦しく、笑つて暮して居られるものを、と思へば猶の事、私は今日の別が何とも謂れないほど情無い。恁して今では人に顔向も出來ないやうな身に成つて居る者を那樣に言つてくれるのは此の世の中に鈴さん一人だと私は思ふ。其の優しい鈴さんと一處に成れるものなら、這麼結構な事は無いのだけれど、尊父さん、尊母さんの心

にもなつて見たら、今の私にも添されないのは、決して無理の無い所で、子を念ふ親の情は、何處の親でも差違は無い。そこを考へればこそ、私は鈴さんの事は諦めると云ふので、子として親に苦勞を懸けるのは、不孝どころではない、惡事だ、立派な罪だ！　私は自分の不心得から親に苦勞を懸けて、其が爲に阿母さんも那云ふ事に成つて了つたのだから、實は私が手に掛けて殺したも同然。其上に又私ゆゑに鈴さんの親達に苦勞を懸けては、それぢや人の親まで殺すと謂つたやうな者だから、私も諦められない所を諦めて、是から一働して世に出られるやうに成るのを樂に、猶且暗い處に入つて居る氣で精一杯勉强するより外は無い、と私は覺悟して居るのです。」

「それぢや、雅さんは內の阿父さんや阿母さんの事は那樣に思つて下すつても、私の事は些も思つては下さらないのですね。私の軀なんぞは奈何ならうと、雅さんは管つては下さらないのね。」

「那樣事が有るものぢやない！　私だつて…………。」
「いゝえ、可うございます。もう可いの、雅さんの心は解りましたから。
「鈴さん、それは違つて居るよ。それぢや鈴さんは全で私の心を酌んではおくれでないのだ。」
「それは雅さんの事よ。阿父さんや阿母さんの事を然して思つて下さる程なら、本人の私の事だつて思つて下さりさうな者ぢやありませんか。雅さんの處へ適くと極つて、其の爲に御嫁入道具まで丁と調へて置きながら、今更外へ適れますか、雅さんも考へて見て下さいな。阿父さんや阿母さんが不承知だと謂つても、そりや餘り酷いわ、餘り勝手だわ！私は死んでも他へは適きはしませんから、可いわ、可いわ、私は可いわ！」
女は身を顫して泣沈めるなるべし。
「那樣事をお言ひだつて、それぢや何爲うと云ふのです。」

「何爲ても可う御座います、私は自分の心で極めて居ますから。」
亞いで男の聲は爲ざりしが、間有りて孰より語り出でしとも分かず、又一時密々と話聲の洩れけれど、調子の低かりければ此方にも聞知られざりき。彼等は久しく此の細語を息めずして、其間一たびも高く言を出さざりしは、互に其意に逆ふ所無かりしなるべし。
「屹と？　屹とですか。」
始て又明かに聞えしは女の聲なり。
「然すれば私も其氣で居るから。」
恁て彼等の聲は又低うなりぬ。然れど益す絮々として飽かず語れるなり。
貫一は心陰に女の成効を祝し、且つ雅之たる者の之が爲に如何に幸ならんかを想ひて、恰も妙なる樂の音の計らず洩聞えけんやうに、憂かる己をも忘れんとしつ。
今彼娘の宮ならば如何ならん、吾彼の雅之ならば如何ならん。吾は今日

の吾たるを擇ぶ可きか、將彼の雅之たるを希はんや。貫一は空う恁く想へり。

宮も嘗て己に對して、彼娘に遜るまじき誠を抱かざるにしもあらざりき。彼にして若し金剛石の光を見ざりしならば、亦吾をも刑餘に慕ひて、其の誠を全うしたらんや。唯繼の金力を以て彼娘を脅したらんには、亦彼の雅之を入獄の先に棄てたりけんや。耀ける金剛石と汚れたる罪名とは、孰か愛を割くの力多かる。

彼は更に恁く思へり。

唯其人を命として、己も有らず、家も有らず、何處の野末にも相從はんと誓へる彼娘の、竟に利の爲に志を移さゝるを得べきか。又は一旦其人に與へたる愛を吝みて、再び價高く他に賣らんと爲るなきを得べきか。利と爭ひて打勝れたると、他の愛と爭ひて敗れたると、吾等の恨は孰に深からん。

彼は又恪も思へるなり。

夫愛の最も篤からんには、利にも惑はず、他に又易ふる者もあらざる可きを、假初も之の移るは、其の最も篤きにあらざるを明せるなり。凡そ異性の愛は吾愛の如く篤かるを得ざる者なるか、或は己の信ずらんやうに、宮の愛の特に己にのみ篤からざりしなるか。吾は彼の不義不貞を憤るが故に世上の戀なる者を疑ひ、且渾て之を斥けぬ。然れども其の一旦の憤は、之を斥けしが爲に消ゆるにもあらずして、其の必ず得べかりし物を失へるに似たる怏々は、吾心を食盡し、終に吾身を斃すにあらざれば、得やは去るまじき惡靈の如く執念く吾を苦むるなり。恪れば何事にも樂むを知らざりし心の、今日偶ま人の相悦ぶを見て、又躬も怡びつゝ、樂の影を追ふらんやうなりしは何の故ならん。縱吾は宮の愛ならずとも、之に易ふる者を得て、左右は此心を慰めしむ可きや。

彼は逾よ思廻せり。

宮は此の日頃吾に篤からざりしを悔いて、其悔を表せんには、何等の事を成さんも唯吾命のまゝならんとぞ言來したる。吾は其悔の爲には彼の憤を忘るべきか、任他吾戀の舊に復りて再び完かるを得るにあらず。彼の悔は彼の悔のみ、吾が失意の恨は終に吾が失意の恨なるのみ。此恨は富山に數倍せる富に因りて始て償はるべき乎、或は其富を獲んとする貪欲は此恨を移すに足る乎。

彼は苦しき息を嘘きぬ。

吾戀を壞りし唯繼！　彼等の戀を壞らんと爲しは誰ぞ、其の吾の今千葉に赴くも、又或は壞り、或は壞らんと爲るにあらざる無き乎。而も其の貪欲は吾に何をか與へんとすらん。富乎、富は吾が狂疾を醫すべき特効劑なりや。彼の妨げられし戀は、破鏡の再び合ふを得て樂み、吾が割れし愛は落花の復る無くして畢らんのみ！　いで、吾は恪て空く埋るべきか、風に因りて飛ぶべきか、水に落ちて流るべきか。

貫一は船橋を過る燈暗き汽車の中に在り。

第六章

千葉より歸りて五日の後M, Shigis ——の書信は又來りぬ。貫一は例に因りて封のまゝ火中してけり。其の筆の蹟を見れば、忽ち浮ぶ其人の面影は、唯繼と並び立てる梅園の密會にあらざる無きに、彼は殆ど當時に同じき憤を發して、先の二度なるよりは此の三度に及べるを、徑廷しくも廻らぬ筆の力などを以て、舊に返し得べき未練の吾に在りとや想へる、愚なる精衞の來りて大海を塡めんとするやと、却りて頑に自ら守らんとも爲なり。

然りとも知らぬ宮は蟻の思を運ぶに似たる片便も、行くべき方にし音づるゝを、さて彼人の如何に見るらん、書綴れる吾誠の千に一つも通ずる事あらば、掛けても願へる一筋の緒ともなりなんと、人目あらぬ折毎には必ず筆援りて、其の限無き思を寫してぞ止まざりし。

唯繼は近頃彼の專ら手習すと聞きて、其の善き行を感ずる餘に、良き墨、良き筆、良き硯、良き手本まで自ら求め來ては、此の難有き心掛の妻に遺りぬ。宮は其等を汚はしとて一切用ること無く、後には夫の机にだに向はずなりけり。恁く怠らず綴られし文は、又六日を經て貫一の許に送られぬ。彼は四度の文をも例の灰と棄てゝ顧ざりしに、日を經ると思ふ程も無く、五度の文は來にけり。縦し送り〳〵て千束にも餘れ、手に取るからの烟ぞと侮れる貫一も、曾て宮には無かりし執着の箇許なるを謂知らず異みつゝ、今日のみは直にも焚かざりし其文を、一度は披き見んと爲たり。

「然し…………。」

彼は輒く手を下さゞりき。

「赦してくれと謂ふのだらう。其外には、見なければ成らん用事の有る譯は無い。若し有ると爲れば、其は見る可からざる用事なのだ。赦して

くれなら赦して遣る、又赦さんでも既に赦れて居るのではないか。悔悟したなら、悔悟したで、それで可い。悔悟したから、赦したからと云つて、其が奈何なるのだ。其が今日の貫一と宮との間に如何なる影響を與へるのだ。悔悟したから他の操の疵が愈えて、又赦したから、富山の事が無い昔に成るのか。其點に於ては、貫一は飽くまで十年前の貫一だ。宮！　貴様は一生汚れた宮ではないか。事の破れて了つた今日になつて、悔悟も赦してくれも要つたものか、無益な事だ！　少も汚れん宮であるから愛して居つたのだ、其を貴様は汚して了つたから怨んざのだ。然して一遍汚れた以上は、其に對する十倍の德を行つても、其の汚れたのを汚れざる者に改めることは到底出來んのだ。

てあるから何と言つた！　熱海で別れる時も、お前の外に妻と思ふ者は無い、一命に換へても此緣は切られんから、俺の此の胸の中を可憐と思つて、十分決心してくれ、と實に男を捨てゝ賴んだてはないか。其の貫

一に負いて…………何の面目有つて今更悔悟…………晩い！」

彼は其文を再三柱に鞭ちて、終に繩の如く引捩りぬ。

打續きて宮が音信の必ず一週に一通來ずと謂ふこと無くて、披れざるに送り、送らるゝに披かざりしも、はや算ふれば十通に上れり。有繋に今は貫一が見る度の憤も弱りて、待つとにもあらねど、其の定りて來る文の繁きに、自ら他の悔い悲める宮在るを忘るゝ能はずなりぬ。然れど、其の忘るゝ能はざるも、遽に彼を可懷むにもあらず、又其の憤の弱れるも、彼を赦し、彼を容れんと爲るにあらずして、始に戀ひしをば棄てられ、後には棄てしを悔らるゝ身の、其の古き戀は仍己に存し、彼の新なる悔は切に饕るも、徒に凍えて水を得たるに同じかる此の兩の者の、相對して相拯ふ能はざる苦艱を添ふるに過ぎざるをや。是に於て貫一は披かぬ宮が文に向へば、其の幾倍の悲きものを吾と心に讀みて、彼の恨ならぬ恨も生じ、彼の憤ならぬ憤も發して、憂身獨の儚き世をば如何にせ

んやうも知らて、唯安からぬ晝夜を送りつゝ、出づるに入るに茫々として、彼は屢ば其の貪るをさへ忘るゝ事ありけり。劇しく物思ひて寢ねざりし夜の明方近く疲睡を催せし貫一は、新緑の雨に暗き七時の閨に魘ろる夢の苦しく頻に呻きしを、老婢に喚れて、覺めたりと知りつゝ現ならず又睡りけるを、再び彼に搖起されて驚けば、

「お客樣でございます。」

「お客？　誰だ。」

「荒尾さんと有仰いまして。」

「何、荒尾？　あゝ、然うか。」

主の急ぎ起きんとすれば、

「お通し申しますで御座いますか。」

「おゝ、早くお通お申して。而してな、唯今起きました所で御座いますから、暫く失禮致しますと然う申して。」

貫一は彼の一別の後三度まで彼の隱家を訪ひしかど、毎に不在に會ひて、二度に及べる消息の返書さへあらざりければ、安否の如何を滿枝に糺せしに、變る事無く其處に住めりと言ふに、さては眞に交を絕たんとすならんを、姑く强て追はじと、一月餘も打絕えたりしに、彼方より好くこそ來つれ、吾が此苦を語るべきは唯彼在るのみなるを、朋の來れるも、實に恁ばかり樂きはあらざらん。今日は酒を出して一日彼を還さじなど、心忙しきまでに歡ばれぬ。

絕交せるやうに疎音なりし荒尾の、何の意ありて卒に訪來れるならん。貫一は其の何の意なりやを念はず、又其の突然の來叩をも怪まずして、畢竟彼の疎音なりしは其の飄然主義の拘らざる故、交を絕つとは言ひしかど、誼の吾を棄つるに忍びざる故と、彼は此人の仍己を友として來れるを、有得べからざる事とは信ぜざりき。

手水場を出來し貫一は腫眶の赤きを連瞬きつゝ、羽織の紐を結びも敢へ

ず、衝と客間の紙門を排けば、荒尾は居らず、彼の荒尾讓介は居らで、美しう裝へる婦人の獨り差含しう控へたる。打惑ひて入りかねたる彼の目前に、可疑しき女客も未だ背けたる面を回さず、細雨靜に庭樹を撲ちて、滴る翠は内を照せり。

「荒尾さんと有仰るのは貴方で。」

彼は先づ慇く會釋して席に着きけるに、婦人は猶も面を示さゞらんやうに頭を下げて禮を作せり。

而も彼は輙く其の下げたる頭と拄へたる手とを擧げざるなりき。始に何者なりやと驚されし貫一は、今又何事なりやと彌よ呆れて、彼の樣子を打矚れり。乍ち有りて貫一の眼は慌忙しく覓むらん色を作して、婦人の俯けるを佗と窺ひたりしが、

「何ぞ御用でございますか。」

「…………。」

彼は益す急に左瞻右視して窺ひつ。

「何云ふ御用向でございますか、伺ひませう。」

「…………………………。」

露置く百合の花などの仄に風を迎へたる如く、其の可疑しき婦人の面は術無げに舉らんとして、又慚ぢ懼れたるやうに遅疑ふ時、

「宮!?」　と貫一の聲は筒抜けて走りぬ。

宮は嬉し悲しの心昧みて、身も世もあらず泣伏したり。

「何用有つて來た!」

怒るべきか、此時。恨むべきか、此時。辱むべきか、悲むべきか、號ぶべきか、詈るべきか、責むべきか、彼は一時は萬感の相亂れて急なるが爲に、吾を吾としも覺ゆる能はずして打顫ひ居たり。

「貫一さん!　どうぞ堪忍えて下さいまし。」

宮は漸う顏を振舉げしも、凄じく色を變へたる貫一の面に向ふべくもあ

らて萎れ俯しぬ。

「早く歸れ！」

「…………。」

「宮！」

幾年聞かざりし其の聲ならん。宮は危みつゝも可懷しと見る目を覺えず其方に轉せば、鋭く瞪ふる貫一の眼の濕へるは、既に如何なる涙の催せしならん。

「今更お互に逢ふ必要は無い。又お前も何顏で逢ふ意か。先達而から頻に手紙を寄來すが、那は一通でも開封したのは無い、來れば直に燒棄てて了ふのだから、以來は斷じて寄來さんやうに。私は今病中で、恁して居るのも太儀でならんのだから、早く歸つて貰ひたい。」

彼は老婢を召して、

「お客樣のお立だ、お供に然う申して。」

取附く島もあらず思惱める宮を委きて、貫一は早くも獨り座を起たんとす。

「貫一さん、私は今日は死んでも可い意でお目に掛りに來たのですから、貴方の存分に甚麼目にでも遭せて、然してそれで左も右も今日は勘辨して、お願ですから私の話を聞いて下さいまし。」

「何の爲に！」

「私は全く後悔しました！　貫一さん、私は今になつて後悔しました!!　悉い事は此間からの手紙に段々書いて上げたのですけれど、全で見ては下さらないのでは、後悔して居る私の甚麼切ない思をして居るか、お解りにならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言れない事ばかり、設ひ書けない私の筆でも、那を悉皆見て下すつたら、些とはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。色々お詫は爲る意でも、憖してお目に掛つて見ると、面目が無いやら、悲いやらで、何一語も言へないのです

けれど、貫一さん、迚も私は來られる筈でない處へ憑して來たのには、死ぬほどの覺悟を爲たのと思つて下さいまし。」

「其が何爲るのだ。」

「然まで覺悟を爲て、是非お話を爲たい事が有るのですから、御迷惑でもどうぞ、どうぞ、貫一さん、左も右も聞いて下さいまし。」

涙ながらに手を拄へて、吾が足下に額叩く宮を、何爲らんとやうに打見遣りたる貫一は、

「六年前の一月十七日、那時を覺えて居るか。」

「…………。」

「さあ、奈何か。」

「私は忘れは爲ません。」

「うむ。那時の貫一の心持を今日お前が思知るのだ。」

「堪忍して下さい。」

唯見る間に出行く貫一、咄嗟、紙門は鐵壁よりも堅く閉てられたり。宮は其心に張充めし望を失ひて礑と領伏しぬ。

「豐、豐！」　と老婢を呼ぶ聲劇く縁續の子亭より聞ゆれば、直に走り行く足音の響きしが、旋て返し來れる老婢は客間に顯れぬ。宮は未だ頭を擧げず居たり。可憐しき束髮の頸元深く、黄蘗染の半衿に紋御召の二枚袷を重ねたる衣紋の綾先づ謂はんやう無く、肩狀優しう內俯したる脊に金茶地の東綴の帶高く、勝色裏の敷亂れつゝ、白羽二重のハンカチイフに淚を掩へる指に赤く、白く指環の玉を耀したる、殆ど物語の畫をも看るらん心地して、此の美しき人の身の上に何事の起りけると、豐は可恐きやうにも覺ゆるぞかし。

「あの、申上げますが、主人は病中の事でございますもので、唯今生憎と急に氣分が惡くなりましたので、相濟みませんで御座いますが中座を致しました。恐入りますすで御座いますが、どうぞ今日は是で御立歸を願

ひますて御座います。」

面を抑へたるまゝに宮は涙を啜りて、

「あゝ、然やうで御座いますか。」

「折角お出の所を誠にどうもお氣毒さまで御座います。」

「唯今些と支度を致しますから、もう少々置いて戴きますよ。」

「さあ〳〵、貴方御遠慮無く御寛と遊ばしまし。又何だか降出して參りまして、今日はいつそお寒過ぎますで御座います。」

彼の起ちし迹に宮は身支度を爲るにもあらで、始て甦りたる人の唯在るが如くに打沈みてぞ居たる。

良久しかるに客の起たんとする模樣あらねば、老婢は又出來れり。宮は爾時遽に身繕して、

「それではお暇を致します。些と御挨拶だけ致して參りたいのですから、何方にお寢つてお在てすか…………。」

「はい、あの何でございます、どうぞもうお管ひ無く…………………。」

「いゝえ、御挨拶だけ些と。」

「然やうで御座いますか。では此方へ。」

主の本意ならじとは念ひながら、老婢は止むを得ず彼を子亭に案内せり。

昨夜の收めざる蓐の內に貫一は着のまゝ打仆れて、夜着も掻巻も裾の方に蹴放し、枕は辛うじて其端に幾度か置易られし頭を載せたり。

思ひも懸けず宮の入來るを見て、起回らんとせし彼の膝下に、早くも女の轉び來て、立たんと爲れば袂を執り、猶も犇と寄添ひて、物をも言はず泣伏したり。

「えゝ、何の眞似だ！」

突返さんとする男の手を、宮は兩手に抱き緊めて、

「貫一さん！」

「何を爲る、此の恥不知！」

「私が悪かつたのですから、堪忍えて下さいまし。」

「えゝ、聒しい！　此を放さんか。」

「貫一さん！」

「放さんかと言ふに、えゝ、もう！」

其身を楯に宮は放さじと争ひて益す放さず、両箇が顔は互に息の通はんとすばかり近く合ひぬ。一生又相見じと誓へる其人の顔の、おのれ眺めたりし色は疾く失せて、誰ゆゑ今の別に歎なるも、仍形のみは變らずして、實に彼の宮にして宮ならぬ宮と、吾は如何にして此に逢へる！　貫一は其胸の夢むる間に現ともなく彼を瞻れり。宮は殆ど情極りて、纔に狂せざるを得たるのみ。

彼は人の頭より大いなるダイアモンドを乞ふが爲に、此の貫一の手を把る手をば釋かざらん。大いなるダイアモンド乎、幾許大いなるダイアモンドも、宮は人の心の最も小き誠に値せざるを既に知りぬ。彼の持たる

ダイアモンドは然せる大いなる者ならざれど、其の棄去りし人の誠は量無きものなりしが、嗟乎、今何處に在りや。其の甞て誠を惠みし手は冷かに殘れり。空しく其手を抱きて泣かんが爲に來れる宮が悔は、實に幾許大いなる者ならん。

「さあ、早く歸れ！」

「もう二度と私はお目に掛りませんから、今日の所は奈何とも堪忍して、打つなり、毆くなり貫一さんの勝手にして、然して少小でも機嫌を直して、私のお詫に來た譯を聞いて下さい。」

「えゝ、煩い！」

「それぢや打つとも毆くともして…………。」

身悶して宮の縋るを、

「那樣事で俺の胸が霽れると想つて居るか、殺しても慊らんのだ。」

「えゝ、殺れても可い！　殺して下さい。私は、貫一さん、殺して貰ひ

たい、さあ、殺して下さい、死んで了つた方が可いのですから。」

「自分で死ね！」

彼は自ら手を下して、此身を殺すさへ屑からずとまでに己を鄙むなる乎、餘に辛しと宮は唇を咬みぬ。

「死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態を爲ずに何爲死ぬ迄立派に棄て通さんのだ。」

「私は始から貴方を棄てる氣などは有りはしません。それだから篤りとお話を爲たいのです。死んで了へとお言ひでなくても、私はもう疾から自分ぢや生きて居るとは思つて居ません。」

「那樣事聞きたくはない。さあ、もう歸れと言つたら歸らんか！」

「歸りません！　私は甚麼事しても此儘ぢや……歸れません。」

宮は男の手をば益す弛めず、益す激する心の中には、夫もあらず、世間もあらずなりて、唯此の命に易ふる者を失はじと一向に思入るなり。

折から縁に足音するは、老婢の來るならんと、貫一は取られたる手を引放たんとすれば、這は如何、宮は些も弛めざるのみか、其容をだに改めんと爲ず。果して足音は紙門の外に逼れり。

「これ、人が來る。」

「…………………。」

宮は唯力を極めぬ。

不意に此體を見たる老婢は、半啓けたる紙門の陰に顏引入れつゝ、

「赤樫さんがお出になりまして御座います。」

窮厄の色は衝と貫一の面に上れり。

「あゝ、今其方へ行くから。――さあ、客が有るのだ、好加減に歸らんか。えゝ、放せ。客が有ると云ふのに奈何するのか。」

「ぢや私は此に待つて居ますから。」

「知らん！　もう放せと言つたら。」

用捨もあらず宮は捻倒されて、落花の狼藉と起き敢へぬ間に貫一は出行く。

(八)の二

座敷外に脱ぎたる紫裏の吾妻コオトに目留めし滿枝は、嘗て知らざりし其の内曲の客を問はで止む能はざりき。又常に厚く惠るゝ老婢は、彼の爲に始終の様子を告るの勞を吝まざりしなり。さてはと推せし胸の内は瞋恚に燃えて、可憎き人の疾く出で來よかし、如何なる貌して我を見んと爲らん、と焦心に待つ間のいとゞしう久かりしに、貫一はなか〳〵出で來ずして、而も子亭の幾と人氣もあらざらんやうに打鎭れるは、我に忍ぶか、と彌よ滿枝は怺へかねて、

「お豐さん、もう一遍旦那樣に然う申して來て下さいな、私今日は急ぎますから、些とお目に懸りたいと。」

「でも、私は誠に參り難いので御座いますよ、何だかお話が大變込入つてお在のやうで御座いますから。」

「管はんぢやありませんか、私が然う申したと言つて行くのですもの。」
「では然う申上げて參りますです。」
「はあ。」
老婢は行きて、紙門の外より、
「旦那さま、旦那さま。」
「此方にお在は御座いませんよ。」
恁く答へしは客の聲なり。豊は紙門を開きて、
「おや、然やうなので御座いますか。」
實に主は在らずして、在るが如く其の枕頭に坐れる客の、猶悲の殘れる面に髮をば少し打亂し、左の裕の二寸許も裂けたるまゝに姿も整はず居たりしを、遽に引樞ひつゝ、
「今し方其方へお出なすつたのですが…………。」
「おや、然やうなので御座いますか。」

「那裡のお客様の方へお出なすたのでは御座いませんか。」
「いゝえ、貴方、那裡のお客様が急ぐと有仰つてゞ御座いますものですから、然う申上げに參つたので御座いますが、それぢやまあ、那邊へ被入いましたらう！」
「那裡にも被在いませんの！」
「然やうなので御座いますよ。」
老婢は此を倉皇起ちて、滿枝が前に、
「此方へも被入いませんで御座いますか。」
「何が。」
「あの、那裡にも被在いませんので御座いますが。」
「旦那樣が？　奈何して。」
「今し方這裡へ出てお在になつたのださうで御座います。」
「嘘、嘘ですよ。」

「いゝえ、那裡にそお客樣がお一人で被在るばかり………………。」

「嘘ですよ。」

「いゝえ、奈何いたして貴方、決して嘘ぢや御座いません。」

「だつて、此方へお出なさりは爲ないぢやありませんか。」

「ですから、まあ、何方へ被入つたのかと思ひまして…………。」

「那裡に屹度隱れてゞもお在なのですよ。」

「貴方、那樣事が御座いますものですか。」

「奈何だか知れはしません。」

「はてね、まあ。お手水ですか知らん。」

隨處尋ねんとて彼は又倉皇起ちぬ。

有効無き此の侵辱に遭へる吾身を如何にせん、と滿枝は無念の遣る方無さに色を變へながら、些も騷ぎ惑はずして、知りつゝ食みし毒の驗を耐へ忍び居たらんやうに、得も謂れず竊に苦めり。宮は其人の遁れ去りし

こそ頼の綱は切られしなれと、はや留るべき望も無く、まして立歸るべき力は有らで、罪の報は悲くも何時まで儚き此身ならんと、打俯し、打仰ぎて、太息吻くのみ。
颯と空の昏み行く時、軒打つ雨は漸く密なり。
戸棚、押入の外捜さゞる處もあらざりしに、終に主を見出さゞる老婢は、希有なる貌して又子亭に入來れり。
「何方にも被在いませんで御座いますが…………。」
「あら、然やうですか。ではお出掛にでも成つたのでは御座いませんか。」
「然やうで御座いますね。一體まあ奈何なすつたと云ふので御座いませう、那裡にも這裡にもお客様を置去に作つてからに。はてね、まあ、奈何もお出掛になる譯は無いので御座いますけれど、家中に它何處にも被在らない所を見ますと、お出掛になつたので御座いますか知らん。それにしても…………まあ御免あそばせまして。」

彼は又滿枝の許に急ぎ行きて、事の由を告げぬ。

「いゝえ、貴方、私は見て參りましたので御座いますよ。子亭に被在りは致しません、それは大丈夫で御座います。」

彼は遽に心着きて履物を檢め來んとて起ちけるに、踵いで起てる滿枝の庭前の縁に出づると見れば、從々と行きて子亭の入口に顯れたり。

宮は何人の何の爲に入來れるとも知らず、先づ愕きつゝも彼を迎へて容を改めぬ。吾が戀人の戀人を拜まんとて此に來にける滿枝の、意外にも敵の己より少く、己より美しく、己より可憐く、己より貴きを見たる妬さ、憎さは、唯此者有りて可怜さ故に、他の情も誠も彼は打忘るゝよと、あはれ、一念の力を劍とも成して、此場を去らず刺殺さまほしう、心は躍り襲り、躍り襲らんと爲るなりけり。

宮は稍羞ひて、葉隱に咲遲れたる花の如く、夕月の涼しう棟を離れたるやうに滿枝は彼の前に進出でゝ、互に對面の禮せし後、

「始めましてお目に掛りますで御座いますが、間様の…………御親戚？　で被在いますで御座いますか。」

憎き人をば一番困めんの滿枝が底意なり。

「はい親類筋の者で御座いまして。」

「おや、然やうで被在いますか。手前は赤樫滿枝と申しまして、間様とは年來の御懇意で、もう御親戚同樣に御交際を致して、毎々お世話になつたり、又及ばずながらお世話も致したり、始終お心易く致して居りますで御座いますが、ついぞ、まあ從來お見上げ申しませんで御座いました。」

「はい、つい先日まで長らく遠方に參つて居りましたもので御座いますから。」

「まあ、然やうで。餘程何でございますか、御遠方で？」

「はい…………廣島の方に居りまして御座います。」

「はあ、然やうで。唯今は何方に。」
「池端に居ります。」
「へえ、池端、お宜しい處で御座いますね。然し、夙て間樣のお話では、御自分は身寄も何も無いから、どうぞ親戚同樣に末の末まで交際したいと有仰るもので御座いますから、全く然うとばかり私信じて居りましたので御座いますよ。それに唯今伺ひますれば、御立派な御親戚がお有り遊ばすのに、何云ふお意で那麼事を有仰ったので御座いませう。何も親戚のお有りあそばす事をお隱しになるにも當らんぢや御座いませんか。那の方は時々然云ふ水臭い事を一躰作るので御座いますよ。」
疑の雲は始て宮が胸に懸りぬ。父が嘗て病院にて見し女の必ず譯有るべきと指せしは是ならん。さては客來と言ひしも詐にて、或は內緣の妻と定れる身の、吾を咎めて邪魔立せんと乎、但は彼人の是見よとて此に引出せしかと、今更に差はざりし父が言を思ひて、宮は仇の爲に病めるを

答たるゝやうにも覺ゆるなり。遂よ長く居るべきにあらぬ今日の此場は是迄と潔く座を起たんとゐたりけれど、何處にか潛み居る彼人の吾が還るを待ちて忽ち出で來て、此者と手を把り、面を並べて、可哀なる吾をば笑ひ罵りもやせんと想へば、得堪へず口惜くて、如何にせば可きと心苦く遲ひ居たり。

「お久しぶりで折角お出の處を、生憎と餘義無い用向の使が見えましたもので、お出掛になつたので御座いますが、些と遠方でございますから、お歸來の程は夜にお成りで御座いませう、近日どうぞ又御寛とお出で遊ばゐまして。」

「大相長座を致ゐまして、貴方も御用のお有り遊ばした所を、心無いお邪魔を致ゐまして、相濟みませんで御座いました。」

「いゝえ、もう、私共は始終上つて居るので御座いますから、些とも御遠慮にゝ及びませんで御座います。貴方こそ然ぞ御殘念で被在いませう。」

「はい、誠に殘念でございます！」
「然やうで御座いませうとも。」
「四五年ぶりで逢ひましたので御座いますから、色々昔話でも致して今日は一日遊んで參らうと、樂に致して居りましたのを、實に殘念で御座います。」
「大きに。」
「然やうなら私はお暇を致しませう。」
「お歸去で御座いますか。丁度唯今小降で御座いますね。」
「いゝえ、幾多降りました所が俥で御座いますから」
互に憎し、口惜しと鎬を削る心の刃を捺へて、彼等は又相見ざるべしと念じつゝ別れにけり。

第七章

家の内を隈無く尋ぬれども在らず、さては今にも何處よりか歸來んと待てど暮せど、姿を晦せし貫一は、我家ながらも身を容るゝ所無き苦紛れに、裏庭の木戸より傘も擎さで忍び出でけるなり。

然れど唯一目散に脱れんとのみにて、卒に志す方もあらぬに、生憎降頻る雨をば、幸くも人の軒などに凌ぎつゝ、足に信せて行くほどに、近頃思立ちて折節通へる碁會所の前に出でければ、左も右も成らんとて、其處に躍入りけり。

客は三組ばかり、各靜に窓前の竹の清韻を聽きて相對せる座敷の一間奥に、主は乾魚の如き親仁の黄なる髯を長く生したるが、兀然として獨り盤を磨き居る傍に通りて、彼は先づ濡れたる衣を炙らんと火鉢に寄りたり。

異み問るゝにも能くも答へずして、貫一は餘りに不思議なる今日の始末を、其の餘波は今も轟く胸の内に痛か思回して、又空く神は傷み、魂は驚くと雖も、我や怒る可き、事や哀むべき、或は悲む可き乎、恨む可き乎、抑も喜ぶ可き乎、慰む可き乎、彼は全く自ら辨ぜず。五内渾て燃え、四肢直に氷らんと覺えて、名狀すべからざる感情と煩悶とは新に來りて彼を襲へるなり。

主は貫一が全濕の姿よりも、更に可訝しき其の氣色に目留めて、問はても椿事の有りしを疑はざりき。

此まで身は遁れ來にけれど、なか〱心安からで、兩人を置去に爲し跡は如何、又我が爲んやうは如何など、彼は打惑へり。沸くが如き其の心の騷がしきにも似て、小暗き空に滿てる雨聲を破りて、三面の盤に鳴る石は斷續して甚だ幽なり。主は此時窓際の手合觀に呼れたれば、貫一は獨り殘りて、未だ乾ぬ袂を翳しつゝ、愈よ限無く惑ひ居たり。遽に人の

騒立つるに愕きて顔を擧れば、座中盡く頸を延べて己が方を眺め、聲々に臭しと喚えるに、見れば、吾が羽織の端は火中に落ちて黑煙を起つるなり。直に揉消せば人は靜ると與に、彼も亦前の如し。

少頃有りて、門に入來し女の訪ふ聲して、

「宅の旦那樣は倘や這裡へ被入りは致しませんで爲たらうか。」

主は忽ち髯の頤を回して、

「あゝ、奧にお在で御座いますよ。」

豐かと差覗きたる貫一は、

「おゝ、傘を持つて來たのか。」

「はい。此方にお在なので御座いましたか、もう方々お搜し申しました。」

「然うか。客は歸つたか。」

「はい、疾にお歸になりまして御座います。」

「四谷のも歸つたか。」

「いゝえ、是非お目に掛りたいと有仰いまして、」

「居る？」

「はい。」

「それぢや見付からんと言つて措け。」

「ではお歸りに成りませんので？」

「最少し經つたら歸る。」

「直にもうお中食で御座いますが、」

「可いから早く行けよ。」

「未だ旦那樣は朝御飯も、」

「可いと言ふに！」

老婢は傘と足駄とを置きて悄々還りぬ。

程無く貫一も焦げたる袂を垂れて出行けり。

彼は此の情緒の劇く紛亂せるに際して、可煩しき滿枝に會らるゝ苦惱に

堪へざるを思へば、其の歸去らん後までは決して還らじと心を定めて、既に所在を知られたる碁會所を立出でしが、逾よ指して行くべき方は有らず。はや正午と云ふに未だ朝の物さへ口に入れず、又半錢をも帶びずして、如何に爲んとするにか有らん、猶降りに降る雨の中を茫々然として彷徨へり。

初夏の日は長かりけれど、纔に幾局の勝負を決せし盤の上にて、殆ど惜き夢の間に昏れて、折から雨も霽れたれば、好者どもゝ終に碁子を斂めて、惣立に歸るを恰も送らんとする主の忙々しく燈ともす比なり、貫一の姿は始て我家の門に顯れぬ。

彼は内に入るより、

「飯を、飯を！」と婢を叱して、颯と奧の間の紙門を排けば、何ぞ圖らん燈火の前に人の影在り。

彼は立てるまゝに目を瞪りつ。然れど、其影は後向に居て動かんとも爲

ず。　滿枝は未だ往かざる乎、と貫一は覺えず高く舌打したり。女は尙も殊更に見向かぬを、此方も故と言を掛けずして子亭に入り、豐を呼びて衣を更へ、膳をも其處に取寄せしが、何とか爲けん、必ず入來べき滿枝の食事を了る迄も來ざるなりき。　却りて仕合好しと、貫一は打勞れたる身を暢かに、障子の月影に肱枕して、姑く喫烟に耽りたり。

敢て戀しとにはあらねど、苦げに羸れたる宮が面影の幻は、頭を回れる一蚊の聲の去らざらんやうに襲ひ來て、彼が切なる哀訴も從ひて憶出でらるれば、仍往きかねて那邊に忍ばずやと、風の音にも幾度か頭を擧げし貫一は、婆娑として障子に搖るゝ竹の影を疑へり。

宮は何時まで此に在らん、我は例の孤なり。思ふに、彼の悔いたるとは誠ならん、我の死を以て容さゞるも誠なり。彼は悔いたり、我より容さば容さるべきを、然は容さずして堅く隔つる思も、又怪きまでに貫一は侘くて、其の釋き難き怨に加ふるに、或種の哀に似たる者有るを感ずる

なりき。いと淡き今宵の月の色こそ、其の哀にも似たるやうに打眺めて、他の憎しとよりは、轉た自を悲しと思續けぬ。彼は竟に堪へかねたる氣色にて障子を推啓れば、涼しき空に懸れる片割月は眞向に彼の面に照りて、彼の愁ふる眼は又痛かに其光を望めり。

「間さん。」

居たるを忘れし人の可疎しき聲に見返れば、はや背後に坐れる滿枝の、常は人を見るに必ず笑を帶びざる無き目の秋波も乾き、顏色などは殊に稿れて、など愬は淺ましきと、心陰に怪む貫一。

「あゝ、未だ御在でしたか。」

「はい、居りました。お午前から私お待ち申して居りました。」

「あゝ、然でしたか、其は大きに失禮ました。而して何ぞ急な用でも。」

「急な用が無ければ、お待ち申して居つては惡いので御座いますか。」

語氣の卒に厲きを駭ける貫一は、空く女の顏を見遣るのみ。

一お惡いで御座いませう。お惡いのは私能く存じて居ります。第一お待ち申して居りましたのよりは、今朝ほど私の參りましたのが、一層お惡いので御座いませう。取だ御娛のお邪魔を致しまして、間さん、誠に私相濟みませんで御座いました。」

其の眼色は怨の鋩を露して、男の面上を貫かんとやうに緊しく見据ゑたり。

貫一は苦笑して、

「貴方は何を謊な事を言つて居るのですか。」

「今更お廋しなさるにも及びませんさ。若い男と女が一間に入つて、取つ付き引付きして泣いたり笑つたりして居れば、譯は大概知れて居るぢや御座いませんか。私那に控へて居りまして、樣子は大方存じて居ります。七歲や八歲の子供ぢや御座いません、其位の事は誰にだつて直に解りませうでは御座いませんか。

從後貴方がお出掛になりますと私直に此のお座敷へ推掛けて參つて、那の御婦人にお目に掛りましたので御座います。」

絮しと聞流せし貫一も、此に到りて耳を欹てぬ。

「而して色々お話を伺ひまして、お二人の中も私能く承知致しました。那方も又有仰らなくても可さゝうな事までお話を作いますので、それは隨分聞難い事まで私伺ひました。」

爲失したりと貫一は密に術無き拳を握れり。満枝は猶も言足らで、

「然し、間さん、適に貴方で御座いますのね、私敬服して了ひました。失禮ながら貴方のお腕前に驚きましたので御座います。那云つた美婦人を御娯にお持ち遊ばして居ながら、世間へは偏人だ事の、一國者だ事のと、其方へ掛けては實に奇麗なお顔を遊ばして、今日の今朝まで何年が間と云ふもの秘隱に隱し通して被居つたお手際には、私實に驚入つて一言も御座いません。能く凄いとか何とか申しますが、貴方のやうなお方

の事を然う申すので御座いませう。」
「もう充らん事を…………、貴方何ですか。」
「お口ぢや然う有仰つても、實はお嬉いので御座いませう。あれ、那しちや考へて被居る！　那樣にも戀しくて被居るのですかね。」
然れば我が出行きし迹をこそ案ぜしに、果して恁る孽は出で來にけり。由無き者の目にも觸れけるよ、と貫一はいと苦しく心踢りつゝ、物言ふも憂き唇を閉ぢて、唯月に打向へるを、女は此方より熟々と見透して目も放たず。
「間さん、貴方然う默つて被居らんでも宜しいては御座いませんか。那云ふお美しいのを御覽に成つた後では、私如き者にも口をお利きに成るのもお可厭なので被居いませう。私お察し申して居ります。ですから私決して絮い事は申上げません、少し聞いて戴きたい事が御座いますのですから、庶か其丈言して下さいまし。」

貫一は冷に目を轉して、

「何なりと有仰い。」

「私もう貴方を殺して了ひたい！」

「何です?!」

「貴方を殺して、他も殺して、而して自分も死んで了ひたく思ふのです。」

「其も可いでせう。可いけれど何で私が貴方に殺されるのです歟。」

「間さん、貴方は其譯を御存無いと有仰るのですか、何の口で有仰るのですか。」

「是は怪しからん！　何ですと。」

「怪しからんとは、貴方も餘りな事を有仰るでは御座いませんか。」

既に恨み、既に瞋りし滿枝の眼は、此に到りて始て泣きぬ。いと有るまじく思掛けざりし貫一は寧ろ可恐しと念へり。

「貴方は那樣にも私が憎くて被居るのですね。何て又然うお憎みなさる

のですか。其譯をお聞せ下さいまし。私其が伺ひたい、是非伺はなければ措きません。」

「貴方を何日私が憎みました。那樣事は有りません。」

「では、何で怪しからんなどゝ有仰います。」

「怪しからんぢやありませんか、貴方に殺される譯が有るとは。私は決して貴方に殺される覺は無い。」

滿枝は口惜しげに頭を掉りて、

「有ります！　立派に有ると私信じて居ります。」

「貴方が獨で信じても……」

「いゝえ、獨で有らうが何で有らうが、自分の心に信じた以上は、私共を貫きます。」

「私を殺すと云ふのですか。」

「隨分殺しかねませんから、覺悟を被成つて被居いまし。」

「はあ、承知しました。」

逾よ昇れる月に木草の影もをかしく、庭の風情は添りけれど、軒端なる芭蕉葉の露夥しく夜氣の侵すに堪へて、やをら内に入りたる貫一は、障子を閉てゝ燈を明うし、故に床の間の置時計を見遣りて、

「貴方、もうお歸りに成つたが可いでせう、餘り晩くなるですから。ええ？」

「憚り樣で御座います。」

「いや、御注意を申すのです。」

「其の御注意が憚り樣で御座いますと申上げるので。」

「あゝ、然うですか。」

「今朝の那の方なら、那樣御注意なんぞを遊ばさんで御座いませう。如何ですか。」

憎さげに言放ちて、彼は吾矢の立つを看んとやうに、姑く男の顔色を候

ひしが、

「一躰他は何者なので御座います！」

犬にも非ず、猫にも非ず、汝に似たる者よと思ひけれど、言爭はんは愚なりと勘辨して、彼は才に不快の色を作せしのみ。滿枝は益す獨り憤れて、

「舊いお馴染ださうで御座いますが、那の恰好は、商賣人ではなし、萬更の素人でもないやうな、貴方も餘程不思議な物をお好み遊ばすでは御座いませんか。然し、間さん、他は主有る花で御座いませう。」

妄に言へるならんと念へど、如何にせん貫一が胸は陰に轟けるを。

「奈何ですか、なあ。」

「然云ふ者を對手に遊ばすと、別してお樂が深いとか申しますが、其代に罪も深いので御座いますよ。貴方が今日まで巧に隱し拔いて被居つた譯も、それで私能く解りました。是ばかりは餘り公に御自慢は出來ん事

て御座いますもの、秘密に遊ばしますのは實に御尤で御座います。其の大事の秘密を、人も有らうに、貴方の嫌ひの〱大御嫌ひの私に知られたのは、甚麼にかお心苦くて被居いませう、私十分お察し申して居ります。然し私に取りましては、是程幸な事は無いので御座います。貴方が餘り片意地に他を苦しめてばかり被居つたから、今度は私から思ふ樣之で苦めて上げるのです。然う思召して被居い！」

聞訖りたる貫一は吃々として竊笑せり。

「貴方は氣でも違ひま爲んですか。」

「少しは違つても居りませう。誰が這麼氣違にえ作すつたのです。私氣が違つて居るなら、今朝から變に成つたので御座いますよ。お宅に詣つて氣が違つたのですから、元の正氣に復してお還し下さいまし。」

彼は擦寄り、擦寄りて貫一の身近に逼れり。淺ましく心苦しかりけれど迯ぐべくもあらねば、臭き物に鼻を掩へる心地しつゝ、貫一は身を側め

側め居たり。滿枝は猶も寄添はまほしき風情にて、
「就きましては、私一言貴方に伺ひたい事が有るので御座いますが、是はどうぞ御遠慮無く貴方の思召す通を丁と有仰つてお聞せ下さいまし、宜しう御座いますか。」
「何です乎。」
「何です乎では可厭です、宜しいと截然有仰つて下さい。さあ、さあ、貴方。」
「けれども…………。」
「けれどもぢや御座いません。私の申す事だと、貴方は毎も氣の無い返事ばかり遊ばすのですけれど、何も御迷惑に成る事では御座いませんのです、私の申す事に就て貴方が思召す通を答へて下されば、それで宜しいのですから。」
「勿論答へます。それは當然の事ぢやないですか。」

「それが當然でなく、極打明けて少しも裹まずに言つて戴きたいのですから。」

善と貫一は領きつ。

「では、屹度有仰つて下さいまし。間さん、貴方は私を慾い奴だと思召して被居るで御座いませう。私始終然う思ひながら、貴方の御迷惑も管はずに猶且恬して附纒つて居るのは、自分の口から箇樣な事を申すのも、甚だ可笑いので御座いますけれど、私、實に貴方の事は片時でも忘れは致しませんのです。それは如何に思つて居りました所が、元來私と云ふ者を嫌ひ抜いて御在なのですから、あの歌が御座いますね、行く水に數書くよりも儚きは、思はぬ人を思ふなりけりとか申す、實に其通り、行く水に數を書くやうな者で、私の願の愜ふ事は到底無いので御座いませう。もう然うと知りながら、それでも、間さん、私是ばかりは諦められんので御座います。

這麼者に見込まれて、然ぞ御迷惑では被居いませうけれど、私が是程まてに思つて居ると云ふ事は、貴方も御存で被居いませう。私が熱心に貴方の事を思つて居ると云ふ事で御座います、其はお了解に成つて居るて御座いませう。」

「然うですな……そりや或は然うかも知れませんけれど………。」

「何を言つて被居るのですね、貴方は。或はも然うかもないでは御座いませんか！　然も無ければ、私何も貴方に慾がられる譯は御座いませんさ、貴方も私を慾いと思召すのが、現に何よりの證據で。漆膠くて困ると御迷惑して被居るほど、承知を遊ばしてお在のては御座いませんか。」

「それは然う謂へば那樣ものです。」

「貴方から嫌はれ抜いて居るにも關らず、這麼に私が思つて居ると云ふ事は、十分御承知なので御座いませう。」

「然う。」

「で、私從來に色々申上げた事が御座いましたけれど、些とでもお聽き遊ばしては下さいませんでした。それは表面の理窟から申せば、無理な御願かも知れませんけれど、私は又私で別に考へる所が有つて、決して貴方の有仰るやうな道に外れた事とは思ひませんのです。縱んば然うでありましても、是ばかりは外の事とは別で、お互に係と思つた日にそ、其處に理窟も何も有るのでは御座いません。究竟貴方が其を口實にして遁げて被居るのは、始から解り切つて居るので。然し、貴方も人から偏屈だとか、一國だとか謂れて被居るのですから、成程儀剛な片意地な處もお有なすつて、色戀の事なんぞにそ貪着を遊ばさん方で、それで私の心も汲分けては下さらんの歟と、然うも又思つたり致して、實は貴方の頑固なのを私齒痒いやうに存じて居つたので御座います。……………所が！」

と言ひも敢へず煙管を取りて、彼は貫一の横膝をば或る念力強く痛か推したり。

「何を作るのです！」
拂へば取直す其の煙管にて、手とも云はず、膝とも云はず、當るを幸に滿枝は又打ち被る。

這は何事と駭ける貫一は、身を避る暇もあらず三つ四つ撃れしが、遂に取つて抑へて兩手を働かせじと爲れば、內俯に引据られたる滿枝は、物をも言はで彼の股の邊に咬付いたり。怪しからぬ女哉、と怒の餘に手暴く振放せば、仍辛くも縋れるまゝに面を擦付けて咽泣に泣くなりき。

貫一は唯不思議の爲體に呆れ惑ひて言も出でず、漸く泣居る彼を推斥けんと爲たれど、膠の附きたるやうに取縋りつゝ、益す泣いて泣いて止まず。涙の濕は單衣を透して、箇の難面き人の膚に沁みぬ。

捨置かば如何に募らんも知らずと、貫一は用捨無く放して、起たんと爲るを、彼は虛さず纏りて、又泣顔を擦付れば、怺へかねたる聲を勵す貫一。

「貴方は何を爲るのですか！　好い加減に被成い。」

「…………。」

「而して早くお歸りなさい。」

「歸りません！」

「歸らん？　歸らんけりや宜しい。もう明日からは貴方の此へ足蹈の出來んやうに爲て了ふから、然うお思ひなさい。」

「私死んでも參ります！」

「今迄我慢をして居たですけれど、もう拋つて置かれんから、私は赤樫さんに會つて、貴方の事を悉皆話して了ひます。」

滿枝は始て涙に沾へる目を擧げたり。

「はあ、お話し下さい。」

「…………。」

「赤樫に聞えましたら、奈何致すので御座います。」

貫一は歯を鳴して急上げたり。

「貴方は…………實に…………驚入つた根性ですな！　赤樫は貴方の何ですか。」

「間さん、貴方は又赤樫を私の何だと思召して被居るのですか。」

「怪しからん！」

彼は憎き女の頰桁をば撃つて〱打割る能はざるを憾と爲なるべし。

「定て他は私の夫だと思召すので御座いませうが、決して然やうでは御座いませんです。」

「そんなら何ですか。」

「往日もお話致しましたが、金力で無理に私を奪つて、終に這麼體にして了つた、謂はゞ私の讐も同然なので。成程人は夫婦とも申しませうが、私の氣では何とも思つて居りは致しません。然うですから、自分の好いた方に惚れて騒ぐ分は、一向差支の無い獨身も同じので御座います。

間さん、どうぞ赤樫にお會ひ遊ばしたら、滿枝の奴が惚れて居て爲方が無いから、內の御膳炊に貰つて遣るから、然う思へと、貴方が有仰つて下さいまし。私豐の手傳でも致して、此方に一生奉公を致します。貴方は大方赤樫に言ふと有仰つたら、震へ上つて私が怖がりでも爲ると思召すのでせうが、私驚きも恐れも致しません、寧ろ勝手なのですけれど、赤樫が其は途方に昧れるで御座いませう。」

貫一は幾と答ふる所を知らず。滿枝も然こそは呆れつらんと思へば、

「それは實際で御座いますの。若し話が一つ間違つて、面倒な事でも生じましたら、私が困りますよりは餘程赤樫の方が困るのは知れて居るのですから、私を遠けやう爲にお話を被成るのなら、徒爾な事で御座います。赤樫は私を恐れて居りませうとも、私些とも那の人を恐れては居りませんです。けれども、折角然う思召すものなら、物は試で御座いますから、間さん、貴方、赤樫にお話し遊ばして御覧なさいましな。

私も貴方の事を吹聴致します。那云ふ主有る婦人と關係遊ばして、始終人目を忍んで逢引して被居る事を觸散しますから、それで何方が餘計迷惑するか、比較事を致しませう。如何で御座います。」

「男勝りの機敏な貴方にも似合はん、有繋は女だ。」

「何で御座います？」

「お聞きなさい。男と女が話をして居れば、其が直ちに逢引ですか。又妙齢の女でさへあれば、必ず主有るに極つて居るのですか。淺膚な邪推とは云ひながら、人を誣ふるも太甚しい！　失敬千萬な、氣を着けて口をお利きなさい。」

「聞さん、貴方、些と此方をお向きなさい。」

手を取りて引けば、振釋き、

「えゝ、もう貴方は、」

「お慾いでせう。」

「勿論。」

「私向後もっと、もっと〳〵慾くして上げるのです。さあ、貴方、今何と有仰ったので御座います、淺膚な邪推ですって？　貴方こそ最少し氣を着けてお口をお利き遊ばせな、貴方も男子で被居るなら、何爲立派に、其の通だ、情婦が有るのが奈何したと、恁う打付けて有仰らんのです。聞さん、私貴方に向つて那樣事を彼是申す權利は無い女なので御座いますよ。幾多然云ふ權利を有ちたくても、有つ事が出來ずに居るので御座います。それに、何も私の前を憚つて、然う向に成つてお隱し遊ばすには當らんでは御座いませんか。

私實を申しませうか、箇樣なので御座います。貴方が餘所外に未だ何百人愛して被居る方が有りませうとも、それで愛相を盡して、貴方の事を思切るやうな、私那樣浮氣な了簡ではないのです。又貴方の御迷惑に成る秘密を洩しました所で、慊はない願が慊ふ譯ではないので御座いませ

う。奈何思召して被居るか存じませんけれど、私其程卑怯な女ではない積で御座います。

世間へ吹聽して貴方を困らせるなど〻申したのは、那は些の其場の憎まれ口で、私決して那樣心は微塵も無いので御座いますから、どうか其のお積で、お心持を惡く遊ばしませんやうに。つい口が過ぎましたのですから、御勘辨遊ばしまして。私此の通お詫を致します。」

滿枝は惜まず身を下して、彼の前に頭を低ぐる可憐しさよ。貫一は如何にとも爲る能はずして、竊に首を掻いたり。

「就きましては、私今から改めて折入つた御願が有るので御座いますが、貴方も從來の貴方ではなしに、十分人情を解して被居る間さんとして宣告を下して戴きたいので御座います。其のお辭次第で、私もう斷然何方に致しても了簡を極めて了ひますですから、間さん、貴方も庶か歯に衣を着せずに、お心に在る通りを其儘有仰つて下さいまし。宜しう御座い

ますか。今更新しく申上げませんでも、私の心は奥底まで見通しに貴方は御存で被居るのです。從來も隨分絮く申上げましたけれど、貴方は一圖に私をお嫌ひ遊ばして、些でも私の申す事は取上げては下さらんのです——然やうで御座いませう。貴方から那樣に嫌はれて居るのですから、私も然う何時まで好い耻を搔かずとも、早く立派に斷念して了へば宜いのです。私然う申すと何で御座いますけれど、是でも女子にしては極未練の無い方で、手短に一か八か決して了ふ側なので御座います。それが此事ばかりは實に我ながら何爲係う意氣地が無からうと思ふ程、……是が迷つたと申すので御座いませう。自分では物に迷つた事と云ふは無い積の私、其が貴方の事ばかりにそ全く迷ひました。ですから、唯其の胸の中だけを貴方に汲んで戴けば、私それで本望なので御座います。是程に執心致して居る者を、徹頭徹尾貴方がお嫌ひ遊ば

すと云ふのは、能く〳〵の因果で、究竟貴方と私とは性が合はんので御座いませうから、それはもう致方も有りませんが、那樣に爲れて迄も猶且恁して慕つて居るとは、如何にも不敏な者だと、設ひ其の當人はお氣に召しませんでも、其の心情はお察し遊ばされても宜しいでは御座いませんか。決して其をお察し遊ばす事の出來ない貴方ではないと云ふ事は、私今朝の事實で十分確めて居ります。

御自分が戀しく思召すのも、人が戀しいのも、戀しいに差は無いで御座いませう。増して、貴方、片思に思つて居る者の心の中は甚麼に切ないてせうか、間さん、私貴方を殺して了ひたいと申したのは無理で御座います乎。這麼不束な者でも、同じに生れた人間一人が、貴方の爲に至て奴隷のやうに成つて、而も今貴方のお辭を一言聞きさへ致せば、それで死んでも惜くないと迄に思込んで居るので御座います。其處をお考へ遊ばしたら、如何に好かん奴であらうとも、雫ぐらゐの情は懸けて遣ら

う、と御不承が出來さうな者では御座いませんか。私も然う御迷惑に成る事は望みませんです、せめて滿足致されるほどのお辭を、唯一言で宜しいのですから。今迄のお馴染効にどうぞ聞さん、其だけお聞せ下さいまし。」

終に近く益す顫へる聲は、竟に平生の調をさへ失ひて聞えぬ。彼は正しく其の一言の爲には幾千圓の公正證書を擧げて反古に爲んも、なか〳〵吝からぬ氣色を帶びて逼れり。息は凝り、面は打蒼みて、其袖よりは劍を出さん乎、其心よりは笑を出さん乎、と胸跳らせて片時も苦しく待つなりき。

切なりと謂はゞ實に極めて切なる、可憐しと謂はゞ又極めて可憐しき彼の心の程は、貫一もいと善く知れゝど、他の己を愛するの故を以て直ちに蛇蝎に親まんや、と却りて其執念をば難堪く淺ましと思へるなり。然れど又情として厲しく言ふを得ざる此場の仕儀なり。貫一は打惱める

眉を強て披かせつゝ、

「而して貴方が満足するやうな一言？……………何云ふ事を言つたら可いのですか。」

「貴方もまあ何を有仰つて被居るのでせう。御自分の有仰る事を他にお聞き遊ばしたつて、誰が存じて居りますものですか。」

「それは然うですけれど、私にも解らんから、」

「解るも解らんも無いでは御座いませんか。それが貴方は何か巧い遁口上を有仰らうと被成るから、急に御考も無いので、貴方に對する私、其の私が満足致すやうな一言と申したら、間さん、外にそ有りは致しませんわ。」

「いや、其なら解つて居ます……………。」

「解つて被居るなら些と有仰つて下さいましな。」

「其は解つて居ますけれど、貴方の言れるのは僫でせう、段々お話の有

つたやうな譯てあるから、左に右其の心情は察しても可からう、其を察して居るのが善く解るやうな挨拶を爲てくれと云ふのぢやありませんか。實際其は餘程難しい、別に奈何も外に言ひ樣も無いですわ。」
「まあ何でも宜しう御座いますから、私の滿足致しますやうな御挨拶を被成つて下さいまし。」
「だから、何と言つたら貴方が滿足なさるのですか。」
「私の此心を汲んでさへ下されば、それで滿足致すので御座います。」
「貴方の思召は實に難有いと思つて居ます。私は永く記憶して是は忘れません。」
「間さん、屹度て御座いますか、貴方。」
「勿論てす。」
「屹度で御座いますね。」
「相違ありません！」

「屹度？」

「ねゝ！」

「其の證據をお見せ下さいまし。」

「證據を？」

「はあ。口頭ばかりでは私可厭で御座います。貴方も那程確に有仰ったのですから、萬更心に無い事をお言ひ遊ばしたのでは御座いますまい、然やうなら其だけの證據が有る譯です。其の證據を見せて下さいますか。」

「見せられる者なら見せますけれど。」

「見せて下さいますか。」

「見せられる者なら。然し…………。」

「いゝえ、貴方が見せて下さる思召ならば、…………。」

驚破、障子を推開きて、貫一は露けき庭に躍り下りぬ。衝と其迹に顯れたる滿枝の面は、斜に葉越の月の冷き影を帶びながら仍火の如く燃えに

燃ゑたり。

第八章

家の内にて己と老婢との外に、今客も在らざるに、女の泣く聲、詬る聲の聞ゆるは甚だ謂無し、我或は夢むるにあらずやと疑ひつゝ、貫一は枕せる頭を擡げて耳を澄せり。

其聲は急に噪しく、相爭ふ氣勢さへして、はた〳〵と紙門を搖かすは、愈よ怪しと夜着排却けて起ち行かんとする時、ばつさり紙門の倒るゝと齊しく、二人の女の姿は貫一が目前に轉び出でぬ。

苛まれしと見ゆる方の髪は浮藻の如く亂れて、着たるコオトは雫するばかり雨に濡れたり。其人は起上り樣に男の顏を見て、嬉しや、可懷しやと心も空なる氣色。

「貫一さん！」と匐ひ寄らんとするを、薄色魚子の羽織着て、夜會結に爲たる後姿の女は躍り被つて引据れば、

「あれ、貫、貫一さん！」

拯を求むる其聲に、貫一は身も消入るやうに覺えたり。彼は念頭を去らざりし宮ならずや。七生まで其願は聽かじと郤けたる滿枝の、我の辛さを彼に移して、先の程より打ちも詬りもしたりけんを、猶慊らで我が前に責むる乎と、貫一は怺へかねて顫ひ居たり。滿枝は縱まに宮を捉へて些も動かせず、徐に貫一を見返りて、

「間さん、貴方のお大事の戀人と云ふのは是で御座いませう。」

頸髮取つて宮が面を引立てゝ、

「此女で御座いませう。」

「貫一さん、私は悔しう御座んす。此人は貴方の奧さんですか。」

「私奧さんなら奈何したのですか。」

「貫一さん！」

彼は足擦して叫びぬ。滿枝は直ちに推伏せて、

「え丶、聒しい！　貫一さんは其處に一人居たら澤山ではありませんか。貴方より私が間さんにそ言ふ事が有るのですから、少し靜にして聽いてお在なさい。

間さん、私想ふのですね、究竟慿云ふ女が貴方に腐れ付いて居ればこそ、甚麼に申しても私の言は取上げては下さらんので御座いませう。貴方は那樣に未練がお有り遊ばしても、元此女は貴方を棄てゝ、餘所へ嫁に入つて了つたやうな、實に畜生にも劣つた薄情者なのでは御座いませんか。――私善く存じて居ますわ。　貴方も餘り男らしくなくてお在なさる。それは如何にお可愛いのか存じませんけれど、一旦愛相を盡して迯げて行つた女を、いつまでも思込んで遲々して被居るとは、まあ何たる不見識な事でせう！　貴方はそれでも男子です乎。私なら這麼女は一息に刺殺して了ふのです。」

宮は跋返さんと爲しが、又抑へられて聲も立てず。

「間さん、貴方、私の申上げた事をば、やあ道ならぬの、不義のと、實に立派な口上を有仰いましたでは御座いませんか。其程義のお堅い貴方なら、何爲這麽淫亂の人非人を阿容活けてお置き遊ばすのですか。それでは私への口上に對しても、貴方男子の一分が立たんで御座いませう。以爲成敗は遊ばしません。さあ、私決してもう二度と貴方にそ何も申しませんから、貴方も此女を見事に成敗遊ばしまし。然もなければ、私も立ちませんです。

間さん、奈何遊ばしたので御座いますね、早く何とか遊ばして、貴方も男子の一分をお立てなさらんければ濟まん所では御座いませんか。私此で拜見致して居りますから、立派に遣つて御覽あそばせ。

卒と云ふ場で貴方の腕が鈍つても、決して爲損じの無いやうに、私好い刃物をお貸し申しませう。さあ、間さん、之をお持ち遊ばせ。」

彼の懷を出でたるは蠟塗の晃く一口の短刀なり。貫一は其の殺氣に搏れ

て一指をも得動かさず、空しく眼を耀して滿枝の面を睨みたり。宮はや氣死せる乎、推伏せられたるまゝに聲も無し。

「さあ、私恁して抑へて居りますから、吭なり胸なり、ぐつと一突に遣つてお了ひ遊ばせ。えゝ、もう貴方は何を遲々して被居るのです。刀の持樣さへ御存じ無いのですか、恁して拔いて！」

と片手ながらに一揮揮れば、鞘は發矢と飛散つて、電光袂を廻る白刃の影は、忽ち飜つて貫一が面上三寸の處に落來れり。

「之で突けば可いのです。」

「…………。」

「さては貴方は這麼女に未だ未練が有つて、息の根を止めるのが惜くて被居るので御座いますね。殺して了はうと思ひながら、手を下す事が出來んのですね。私代つて殺して上げませう。何の雜作も無い事。些と御覽あそばせな。」

言下に忽焉と消えし刄の光は、早くも宮が亂鬢を掠めて顯れぬ。啊呀と貫一の號ぶ時、妙くも彼は跛起きざまに突來る鋩を危く外して、

「あれ、貫一さん！」

と滿枝の手首に縋れるまゝ、一心不亂の力を極めて捩伏せ〳〵、仰様に推重りて仆したり。

「貫、貫一さん、早く、早く此刀を取つて下さい。而して私を殺して下さい――貴方の手に掛けて殺して下さい。私は貴方の手に掛つて死ぬのは本望です。さあ、早く殺して、私は早く死にたい。貴方の手に掛つて死にたいのですから、後生だから一思ひに殺して下さい！」

此の恐るべき危機に瀕して、貫一は謂知らず自ら異くも、敢て拯の手を藉さんと爲るにもあらで、而も見るに之堪へずして、空しく悶えに悶え居たり。必死と爭へる兩箇が手中の刄は、或は高く、或は低く、右に左に閃々として、恰も一鉤の新月白く風の柳を縫ふに似たり。

「貫一さん、貴方は私を見殺になさるのですか。奈何でも此女の手に掛けて殺すのですか！　私は命は惜くはないが、此女に殺されるのは悔しい！　悔しい!!　私は悔しい!!」

彼は亂せる髪を夜叉の如く打振り〳〵、五體を揉みて、唇の血を噴きぬ。

彼も殺さじ、是も傷けじと、貫一が胸は車輪の廻るが若くなれど、如何にせん、其身は内より不思議の力に緊縛せられたるやうにて、逸れど、躁れど、寸分の微搖を得ず、せめては聲を立てんと爲れば、吭は又塞りて、鐵丸を啣める想。

力も今は絶々に、はや危しと宮は血聲を揚げて、

「貴方が殺して下さらなければ、私は自害して死にますから、貫一さん、此刀を取つて、私の手に持せて下さい。さ、早く、貫一さん、後生です、さ、さ、さあ取つて下さい。」

又激しく捩合ふ郤含に、短刀は戞然と落ちて、貫一が前なる疊に突立つ

たり。宮は虚さず躍り被りて、我物得つと手に爲れば、遣らじと滿枝の組付くを、推隔つる腋の下より後突に、欛も透れと刺したる急所、一聲號びて仰反る滿枝――鮮血！　兇器！　殺傷！　死體！　亂心！　重罪！

貫一は目も眩れ、心も消ゆるばかりなり。宮は犇と寄添ひて、

「もう此上は奈何で私は無い命です。お願ですから、貫一さん、貴方の手に掛けて殺して下さい。私はそれで貴方に赦された積で喜んで死にますから。貴方もどうぞ其でもう堪忍して、今迄の恨は霽して下さいまし、よう、貫一さん。私が這麽に思つて死んだ後までも、貴方が堪忍して下さらなければ、私は生替死替して七生まで貫一さんを怨みますよ。さあ、それだから私の迷はないやうに、貴方の口からお念佛を唱へて、之で一思ひに、さあ貫一さん、殺して下さい。」

朱に染みたる白刃をば貫一が手に持添へつゝ、宮は其の可懷しき拳に頻回頰擦したり。

「私は是で死んで了へば、もう二度と此世でお目に掛ることは無いのですから、せめて一遍の回向をして下さると思つて、今はの際で唯一言赦して遣ると有仰つて下さい。生きて居る内こそ甚麽にも憎くお思ひでせうけれど、死んで了へば其限、罪も恨も殘らず消えて土に成つて了ふのです。私は恝して前非を後悔して、貴方の前で潔く命を捨てるのも、其の御詫が爲たいばかりなのですから、貫一さん、既往の事は水に流して、もう好い加減に堪忍して下さいまし。よう、貫一さん、貫一さん！今思へば、那時の不心得が實に悔しくて〳〵、私は何とも謂ひやうが無い！ 貴方が涙を零して言つて下すつた事も覺えて居ます。後來屹度思中るから、今夜の事を忘れるなとお言ひの聲も、今だに耳に付いて居るわ。私の一圖の迷とは謂ひながら何爲那時に些少でも氣が着かなかつた乎。愚な自分を責めるより外は無いけれど、死んでも這麽回復の付かない事を何て私は爲ましたらう！ 貫一さん、貴方の罰が中つたわ！ 私

は生きて居る空が無い程、貴方の罰が中つたのざわ！　だから、もう是で堪忍して下さい、よ、貫一さん。

而して迚も此の罰の中つた軀では、今更左右と思つても、願なんぞの慨ふと云ふのは愚な事、未だ〳〵憂目を見た上に思死に死にでも爲なければ、私の業は滅しないのでせうから、此世に未練は澤山有るけれど、私は早く死んで、此の苦難を埋めて了つて、而して早く元の淨い軀に生れ替つて來たいのです。然う爲たら、私は今度の世にそ、甚麼艱難辛苦を爲ても屹度貴方に添遂げて、此胸に一杯思つて居る事も悉皆善く聽いて戴き、又此世で爲遺した事も其時は十分に爲てお目に掛けて、必ず貴方にも悦ばれ、自分も嬉しい思を爲て、此上も無い樂い一生を送る氣です。今度の世には、貫一さん、私は決して那麼不心得は爲ませんから、貴方も私の事を忘れずに居て下さい。可うござんすか！　屹度忘れずに居て下さいよ。

人は最期の一念で生を引くと云ふから、私は此事ばかり思窮めて死にます。貫一さん、此通だから堪忍して！」

聲震はせて縋ると見れば、宮は男の膝の上なる鋩目掛けて岸破と伏したり。

「や、行つたな！」

貫一が胸は劈けて始て此聲を出せるなり。

「貫一さん！」

無殘やな、振仰ぐ宮が喉は血に塗れて、刃の半を貫けるなり。彼は其手を放たて苦しき眼を睜きつゝ、男の顏を視んと爲るを、貫一は氣も漫に引抱へて、

「これ宮、貴樣は、まあ是は何事だ！」

大事の刃を拔取らんと爲れど、一念凝りて些も弛めぬ女の力。

「之を放せ、よ、之を放さんか。さあ、放せと言ふに、えゝ、何爲放さ

んのだ。」

「貫、貫一さん。」

「おゝ、何だ。」

「私は嬉しい。もう…………もう思遺す事は無い。堪忍して下すつたのですね。」

「まあ、此手を放せ。」

「放さない！　私は是で安心して死ぬのです。貫一さん、あゝ、もう氣が遠く成つて來たから、早く、早く、赦すと言つて聞せて下さい。赦すと、赦すと言つて！」

血は滾々と溢す流れて、末期の影は次第に黯く逼れる氣色。貫一は見るにも堪へず心亂れて、

「これ、宮、確乎しろよ。」

「あい。」

「赦したぞ！　もう赦した、もう堪……堪……堪忍……した！」
「貫一さん！」
「宮！」
「嬉しい！　私は嬉しい！」
貫一は唯胸も張裂けぬ可く覺えて、言は出でず、抱き緊めたる宮が顏をば溢り下つる熱湯の涙に浸して、其の冷たき脣を貪り吮ひぬ。宮は男の唾を口移に辛くも喉を潤して、
「そんなら貫一さん、私は、吁、苦しいから、もう是で一思ひに……。」
と力を出して刳らんと爲るを、緊と抑へて貫一は、
「待て、待て〳〵！　左も右も此手を放せ。」
「いゝえ、止めずに。」
「待てと言ふに。」
「早く死にたい！」

漸く刀を拋放せば、宮は忽ち身を回して、轉けつ轉びつ座敷の外に脫れ出づるを、

「宮、何處へ行く！」

遣らじと伸べし腕は逮ばず、苛つて起ちし貫一は唯一摑と躍り蒐れば、生憎蒲枝が死骸に躓き、一間許投げられたる其處の敷居に膝頭を碎けんばかり強く打れて、踣りしまゝに起きも得ず、身を竦めて呻きながらも、

「宮、待て！　言ふことが有るから待て！　豐、豐！　豐は居ないか。早く追掛けて宮を留めろ！」

呼べど號べど、宮は返らず、老婢は居らず、貫一は阿修羅の如く憤りて起ちしが、又仆れぬ。仆れしを漸く起回りて、忙々しく四下を眴せど、はや宮の影は在らず。其の歩々に委せし血は苧環の絲を曳きたるやうに長く連りて、疊より緣に、緣より庭に、庭より外に何處まで、彼は重傷を負ひて行くならん。

磐石を曳くより苦しく貫一は膝の疼痛を怺へ〱て、左にも右にも塀外に蹣ひ出づれば、宮は未だ遠くも行かず、有明の月冷やかに夜は水の若く白みて、ほの〲と霧狭罩めたる大路の寂として物の影無き邊を、唯獨り覺束無げに走れるなり。

「宮！　待て！」

呼べば谺え返せども、雲は幽にして彼は應へず。齒咬を作して貫一は後を追ひぬ。

固より間は幾許も有らざるに、急所の血を出せる女の足取、引捉ふるに何程の事有らん、と侮りしに相違して、彼は始の如く走るに引易へ、此方は漸く息疲るゝに及べども、距離は竟に依然として近づく能はず。這は口惜し、と貫一は滿身の力を勵し、僵るゝならば僵れよと無二無三に走りたり。宮は猶脱るゝほどに、帶は忽ち颯と釋けて脚に絡ふを、右に左に蹴拂ひつゝ、跌きては進み、行きては蹌き、彼もはや力は竭きたりと

見えながら、如何に爲ん、其處に伏して復起きざる時、躬も終に及ばずして此處に絕入せんと思へば、貫一は今に當りて纔に聲を揚ぐるの術を餘すのみ。

「宮！」と奮つて呼びしかど、憫むべし、其聲は苦しき喘の如き者なりき。我と吾肉を啖はんと想ふばかりに躁れども、貫一は既に聲を立つべき力をさへ失へるなり。さては効無き己に憤を作して、益す休まず狂呼すれば、彼の吭は終に破れて、汨然として一涌の鮮紅を嘔出せり。心晦みて覺えず倒れんとする耳元に、松風驀然と吹起りて、吾に復れば、眼前の御壕端。只看る、宮は行き〳〵て生茂る柳の暗きに分入りたる、入水の覺悟に極れり、と貫一は必死の聲を搾りて連に呼べば、咳入り咳入り數口の喀血、斑爛として地に委ちたり。何思ひけん、宮は千條の綠の陰より、其色よりは稍白き面を露して、追來る人を熟と見たりしが、竟に疲れて起きも得ざる貫一の、唯手を抗げて遙に留むるを、免し給へ

と伏拝みて、衝と茂の中に隠れたり。
彼は己の死ぬべきを忘れて又起てり。駆寄る岸の柳を潜りて、水は深き乎、宮は何處に、と葎の露に踏滑る身を危くも淵に臨めば、鞺鞳と瀉ぐ早瀬の水は、駭く浪の體を盡し、亂るゝ流の文を捲いて、眼下に幾箇の怪しき大石、夫の鼇背を聚めて丘の如く、其勢を拒がんと爲れど、觸るれば拂ひ、當れば飜り、長波の邁く所滔々として破らざる無き奮迅の力は、兩岸も爲に震ひ、坤軸も爲に轟き、踏居る土も今にや崩れなんと疑ふ處、衣袂の雨濃に灑ぎ、鬢髮の風轉た急なり。
あな凄まじ、と貫一は身毛も彌竪ちて、縋れる枝を放ちかねつゝ、看れば、叢の底に秋蛇の行くに似たる徑有りて、幾と逆落に懸崖を下るべし。危き哉と差覗けば、茅葛の頻に動きて、小笹棘に見えつ隠れつ段々と辷り行くは、求むる宮なり。
其死を止めんの一念より他あらぬ貫一なれば、愕と見るより心も空に、

足は地を蹈む遑もあらず、唯遲れじと思ふばかりよ、壑間の嵐の誘ふに委せて、驀直に身を墮せり。

或は摧けて死ぬべかりしを、恙無きこそ天の佑と、彼は數步の内に宮を追ひしが、流に浸れる巖を渉りて、既に渦巻く瀧津瀨に生憎！　花は散りかゝるを、

「宮！」

と後に呼ぶ聲殘りて、前には人の影も在らず。

咄嗟の遲を天に叫び、地に號き、流に悶え、巖に狂へる貫一は、血走る眼に水を射て、此處や彼處と戀しき水屑を覓むれば、正しく浮木芥の類とも見えざる物の、十間計彼方を揉みに揉んで、波間隱に推流さるゝは、人ならず哉、宮なる乎と瞳を定むる折しもあれ、水勢其處に一段急なり、在りける影は弦を放れし箭飛を作して、行方も知らずと胸潰るれば、忽ち遠く浮き出てたり。

嬉しやと貫一は、道無き道の木を攀ぢ、崖を傳ひ、或は下りて水を踰え、石を踰み、巖を廻り、心地死ぬべく踉蹌として近き見れば、緑樹陰愁ひ、潺湲聲咽びて、淺瀬に繋れる宮が軀よ！

貫一は唯其上に泣伏したり。

吁、宮は生前に於て纔に一刻の前なる生前に於て、此情の熱き一滴を幾許かは忝なみけん。今や千行垂ると雖も効無き涙は、徒に無心の死顔に濺ぎて宮の魂は知らざるなり。

貫一の悲は窮りぬ。

「宮、貴様は死……死……死んだのか。自殺を爲るまへ可哀なのに、此の淺ましい姿は奈何だ！刄に貫き、水に溺れ、貴様は是で苦しくはなかつた乎。可愛い奴め、思ひ迫めたなあ！宮、貴様は自殺を爲た上身を投げたのは、一つの死では慊ずに、二つ命

を捨てた氣乎。然う思つて俺は不敏だ！甚麼事が有らうとも、貴樣に對する那の恨は決して忘れんと誓つたのだ。誓つたけれど、此の無殘な死狀を見ては、罪も恨も皆消えた！　赦したぞ、宮！　俺は心の底から赦したぞ！今はの際に赦したと、俺が一言云つたらば、那の苦しい息の下から嬉しいと言つたが、宮、貴樣は俺に赦されるのが那樣に嬉しいの乎。好く後悔した！　立派な悔悟だぞ!!
餘り立派で、貫一は恥入つた！　宮、俺は面目無い！　是迄の精神とは知らずに見殺に爲たのは殘念だつた！　俺が過だ！　宮、赦してくれよ！　可いか、宮、可いか。
嗚呼死んで了つたのだ!!!」
貫一は彼の死の餘りに酷く、餘りに潔きを見て、不貞の血は既に盡く沃がれ、舊惡の膚は全く洗れて、殘れる者は、悔の爲に、誠の爲に、己の

爲に捨てたる亡骸の、實に憐みても憐むべく、悲みても猶及ばざる思の、今は唯極めて切なる有るのみ。

夫の烈々たる怨念の跡無く消ゆると與に、一旦涸れにし愛慕の情は又泉の湧くらんやうに起りて、其胸に漲りぬ。苦しからず哉、人亡き後の愛慕は、何の思か之に似る者あらん。彼はなか〳〵生ける人にこそ如何なる恨をも繋くるの忍び易きを今ぞ知るなる。

貫一は腸斷ち涙連りて、我を我とも覺ゆる能はず。

「宮、貴樣に手向けるのは、俺の此の胸の中だ。之で成佛してくれ、よ。此世の事は是迄だ、其代り今度の世にそ、貴樣の言つた通り、必ず夫婦に成つて、百歳までも添、添、添遂げるぞ！ 忘れるな、宮。俺も忘れん！ 貴樣も屹度覺えて居ろよ！」

氷の如き宮が手を取り、犇と握りて、永く眠れる面を覗かんと爲れば、涙急にして文色も分かず、推重りて、恰じやと身を悶えつゝ少時泣いた

り。

「然し、宮、貴様は立派な者だ。一たび罪は犯しても、恪して悔悟して自殺を爲たのは、實に見上げた精神だ。然うなけりや成らん、天晴だぞ。それでこそ始て人間たるの面目が立つのだ。

然るに、此の貫一は奈何か！　一端男と生れながら、高が一婦の愛を失つたが爲に、志を挫いて一生を誤り、餓鬼の如き振舞を爲て恥とも思はず、非道を働いて暴利を貪るの外は何も知らん。其財は何に成るの乎、何の爲に那樣事を爲るの乎。

凡そ人と謂ふ者には、人として必ず盡すべき道が有る。己と云ふ者の外に人の道と云ふ者が有るのだ。俺は其の道を盡して居る乎、盡さうと爲て居る乎。思つた女と添ふ事が出來ん、唯其丈の事に失望して了つて、其の失望の爲に、苟くも男と生れた一生を抛たうと云ふのだ。人たるの効は何處に在る、人たる道は奈何したの乎。

噫、誤つた！

宮、貴樣が俺に對して悔悟するならば、俺は人たるの道に對して悔悟しなけりや濟まん軀だ。貴樣が悃して立派に悔悟したのを見て、俺は實に愧入りも爲りや、可羨しくもある。當初貴樣に棄てられた爲に、悃云ふ墮落をした貫一ならば、貴樣の悔悟と共に俺も速かに心を悛めて、人たるの道に負ふ所の此罪を贖はなけりや成らん譯だ。

嗟乎、然し、何に就けても苦しい世の中だ！

人間の道は道、義務は義務、樂は又樂で、其も無けりや立たん。俺も鴫澤に居て宮を對手に勉强して居つた時分は、此の人世と云ふ者は唯面白い夢のやうに考へて居た。

那が浮世なの乎、是が浮世なの乎。

爾來今日迄の六年間、人らしい思を爲た日は唯の一日でも無かつた。それて何が頼で俺は活きて居たの乎。死を決する勇氣が無いので活きて居

たやうなものだ！　活きて居たのではない、死損つて居たのだ!!鰐淵は焚死に、宮は自殺した。俺は何爲るの乎。俺の此の感情の強いのでは、又向來宮の此の死顏が始終目に着いて、一生悲しい思を爲なければ成らんのだらう。まて見りや、今迄よりは一層苦を受けるのは知れて居る。其中で俺は活きて居て何を爲るの乎。

人たるの道を盡す？　人たるの行を爲る？　あゝ、憖い、憖い！　人として居ればこそ那樣義務も有る、人でなくさへあれば何も要らんのだ。自殺して命を捨てるのは、一の罪惡だと謂ふ。或は罪惡かも知れん。けれども、茫々然と呼吸して居るばかりで、世間に對しては何等の益する所も無く、自身に取つては其が苦痛であるとしたら、自殺も一種の身始末だ。増して、俺が今死ねば、忽ち何十人の人が助り、何百人の人が懽ぶか知れん。

俺も一箇の女故に身を誤つた其餘が、盗人家業の高利貸とまで墮落して、

是でやみ〳〵死んで了ふのは、餘り無念とは思ふけれど、當初に出損つたのが一生の不覺、那が抑も不運の貫一の軀は、最一遍鍛直して出て來るより外爲方が無い。此世の無念は其時霽す！」

然しも遣る方無く悲めりし貫一は、其悲を立ろに拔くべき術を今覺れり。看々涙の頰の乾ける邊に、異しく昂れる氣有りて青く輝きぬ。

「宮、待つて居ろ、俺も死ぬぞ！　貴樣の死んでくれたのが餘り嬉しいから、さあ、貫一の命も貴樣に遣る！　來世で二人が夫婦に成る、是が結納だと思つて、幾久く受けてくれ。貴樣も定めて本望だらう、俺も不足は少しも無いぞ。」

然らば往きて汝の陷りし淵に沈まん。沈まば諸共と、彼は宮が屍を引起して背に負へば、其の輕きこと一片の紙に等し。怪しと見返れば、更に怪し！　芳芬鼻を撲ちて、一朶の白百合大さ人面の若きが、滿開の葩を垂れて肩に懸れり。

不思議に愕くと爲れば目覺めぬ。覺むれば曉の夢なり。

（三十五年四月）

續續金色夜叉

第一章

貫一が胸は益苦しく成り愈りぬ。彼を念ひ、是を思ふに、生きて在るべき心地はせて、寧ろ彼の怪しき夢の如く成りなんを、快からず乎と疑へるなり。

彼は空しく萬事を抛ちて、懊憹の間に三日ばかりを過しぬ。之を語らんに人無く、愬へんにも友無く、而も自ら拯ふべき道は有りや。有りとも覺えず、無しとは知れど、煩ふ者の煩ひ、惱む者の惱みて縱まゝなるを如何にせん。彼は實に此の昏迷亂擾せる一根の惡障を抉去りて、猛火に燬かんことを冀へり。爾時彼は死ぬべきなり。生乎、死乎。貫一の苦悶は漸く急にして、終に此の問題の前に首を垂るゝに至れり。

値無き吾が生存は、又同く値無き死亡を以つて畢へしむべき者乎。悔に堪へざる吾が生の値無かりしを結ばんには、之を償ふに足る可き死を以て爲ざる可からざる乎。或は、此に過多き半生の最期を遂げて、新に他の値ある後半の復活を明日に計るべき乎。

彼は強ちに死を避けず、又生を厭ふにもあらざれど、兩ながら其の値無きを、私に屑しと爲ざるなり。當面の苦は彼に死を勸め、半生の悔は耻を責めて假さず。苦を拔かんが爲に、我は値無き死を辭せざるべき乎、過を償はんが爲に、我は樂まざる生を忍ぶべき乎。碌々の生は易し、死は則ち難し。碌々の死は易し、生は則ち難し。我は悔いて人と成るべきか、死して其愚を全うすべき乎。

貫一は活を求めて得ず、死を覓めて得ず、居れば立つを念ひ、立てば臥すを想ひ、臥せば行くを懷ひ、寐ぬれば覺め、覺むれば思ひて、夜もあらず、日もあらず、人もあらず、世もあらで、惟憂ひ惑へる己一箇の措

所無く可煩しきに惱亂せり。

恰も此際抛ち去るべからざる一件の要事は起りぬ。先に大口の言込有りし貸付の綏々急に取引迫りて、彼は些の猶豫も無く、自ら野州鹽原なる畑下と云へる溫泉場に出向き、其處に清琴樓と呼べる湯宿に就きて、密に云々の探知すべき必要を生じたるなり。

謂知らず慾しと腹立されけれど、行懸の是非無く、且は難得き奇景の地と聞及べば、少時の憂を忘るゝ事も有らんと、自ら努めて結束し、彼日より約一週間の後、彼は幾と進まぬ足を曳きて家を出でぬ。

其晨横雲白く明方の空に半輪の殘月を懸けたり。一番列車を取らんと上野に向ふ俥の上なる貫一は、此の曉の眺矚に撲れて、覺えず悚然たる者ありき。

（一）の二

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、貫一は易らざる其の悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の獨に倦み憊れつゝ、始て西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今尚茫々たる古の那須野原に入れば、天は濶く、地は遐に、唯平蕪の迷ひ、斷雲の飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて、行くほどに路は窮らず、漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡る處に淙々の響有りて、之に架れるを入勝橋と爲す。

輙ち橋を渡りて僅に行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷に壑深く陷りて、幾廻せる葛折の、後には密樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々の花を發き、遙よ躋れば、遙に木隱の音のみ聞えし流の水上は淺く露れて、

驚破や、斯に空山の雷白光を放ちて頽れ落ちたる乎と凄じかり。道の右は山を劃りて長壁と成し、石凾に蘚碧うして、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀑小瀑の珊々として瀉げるは、嶺上の松の調も、定て此緒よりやと見捨て難し。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を踏みて、山中の景は始て奇なり。之より行きて道有れば水有り、水有れば必ず橋有り、全溪にして三十橋。山有れば巖有り、巖有れば必ず瀑有り、全嶺にして七十瀑。地有れば泉有り、泉有れば必ず熱有り、全村にして四十五湯。猶數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

抑も鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片皿の、四里に岐れ、十一里に亘りて、到る處巉巖の水を夾まざる無きは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過れば、根本山、魚止瀧、兒ヶ淵、左靭の險は古りて、

白雲洞は朗に、布瀧、龍ヶ鼻、材木石、五色石、船岩なんどゝ眺行けば、鳥井戸、前山の翠衣に染みて、福渡の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが、甚だ興有りと目留まれば、又此邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。貫一は覺えず踏止りぬ。彼の逆巻く波に分け入りし宮が、息絶えて浮び出でたりし其處の景色に、似たりとも酷だ似たる岸の布置、茂の狀況、乃至は漾ふる水の文も、透徹る底の岩面も、廣さの程も、位置も、趣も、子細に看來れば逾よ差はず。

彼は眦を決きて寒慄せり。

怪むべき哉、曾て經たりし塲を其のまゝに夢むる例は有れ、所據も無く夢みし跡を、歷々と憶く目前に見ると云ふも有る事乎。宮の軀の横りし處も、又は己の追來し筋も、彼處よ、此處よと、陰に一々指しては、限

無く駭けるなり。

車夫を顧みて、處の名を問へば、不動澤と言ふ。

物可恐しげなる澤の名なるよ。げに思へば、人も死ぬべき處の名なり。我も既に死なんとせしがと、有繫現の身にも沁む時、宮にそあらで山百合の花なりし怪異を又懷ひて、彼は肩頭寒く顫ひぬ。

卒に踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、咄々、何等の物乎、と先驚かさるゝ異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見擧る絶頂にそ、はら〱松も危く立竦み、幹竹割に割放したる斷面は、半空より一文字に垂下して、岌々たる其勢、幾と眺むる眼も留らず。

貫一は惘然として佇めり。

彼が宮を追ひて轉び落ちたりし谷間の深さは、正に此の天邊の高さより投じたらんやうに、冉々として虚空を舞下る危惧の難堪かりしを想へるなり。

我未だ嘗て見ざりつる絶壁！　危しとも、可恐しとも、夢ならずして爭か飛下り得べき、又此の人並ならぬ雲雀骨の粉微塵に散つて失せざりしこそ、洵に夢なりけれと、身柱冷かに瞳を凝す彼の傍より、是こそ名にし負ふ天狗巖、と爲たり貌にも車夫は案内す。

貫一は彼の夢の奇なりしより、更に〳〵奇なる此の鹽原の實覺をば疑ひ懼れつゝ立盡せり。

既に如此くなれば、怪は愈よ怪に、或は夢中に見たりし踪の猶着々活現し來りて、飽くまで我を脅さゞれば休まざらんと爲るにあらずや、と彼は胸安からずも足に信せて、彼嶽の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水之が爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横りて高さ二丈に餘り、其頂は平に濶りて、寛に百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色を成して、鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀可恐しげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍

の浪に漬りて、夜な〳〵天狗巖の魔風に誘はれて吼えもせぬべき怪しの物なり。

其古蒲生飛驒守氏郷此の處に野立せし事有るに因りて、野立石とは申す、と例のが說出すを、貫一は頷きつゝ、目も放たず打眺めて、獨り竊に舌を卷くのみ。

彼は實に壑間の宮を尋ぬる時、箇の大石を眼下に窺ひ見たりしを忘れざるなり。

又は流るゝ宮を追ひて、道無きに困める折、左右には水深く、崖高く、前には攀づべからざる石の塞りたるを、攀ぢて半に到りて進退谷りつる、其石も是なりけん、と肩は自と聳えて、久く留るに堪へず。

數步を行けば、宮が命を沈めし其淵と見るべき處も、彼が釋けたる帶を曳きし其巖も、歷然として皆在らざるは無し！　貫一が髮毛は針の如く竪ちて戰げり。彼の思は前夜の惡夢を反復すに等しき苦惱を辭する能は

ざればなり。
夢ながら可恐くも、淺ましくも、悲くも、可傷くも、分く方無くて唯一圖に切なかりしを、事倘し一場の夢にして止らざらんには、抑も如何！
今や鹽原の實景は一々夢中の見る所。然らば此景既に夢ならず！　思掛けずも此に來にける吾身も亦夢ならず！　但夢に缺く者とては宮一箇のみ。纔に彼の此に來らざるのみ!!
貫一は恁く思到りて、我又夢に入りたるにあらざる乎と疑はんとも爲つ。夢ならずと爲ば、我は由無き處に來にけるよ。幸に夢に似る事無くてあれかし。異しとも甚だ異し！　疾く往きて、疾く還らん、と遽に率し車に乘りて、白倉山の麓、鹽釜の湯、高尾塚、離室、甘湯澤、兄弟瀧、玉簾瀬、小太郎淵、路の頭に高きは寺山、低きに人家の在る處、即ち畑下戸。

第二章

一村十二戸、溫泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。此に淸琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨み、俯しては、水石の粼々たるを弄び、仰げむ西に、富士、喜十六の翠巒と對して、淸風座に滿ち、袖の澤を落來る流は、二十丈の絕壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀧あり。東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾深く夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて丘壑の富を擅まにし、林泉の奢を窮め、又有るまじき淸福自在の別境なり。

貫一は此の繪を看る如き淸穩の風景に値ひて、彼の途上險しき巖と峻しき流との爲に幾度か魂飛び肉銷して、理むる方無く搔亂されし胸の內は、靄然として頓に和ぎ、恍然として總て忘れたり。

彼は以爲らく、

誠に好くこそ我は來つれ！　胡ぞ來るの甚だ遲かりし。　山の麗しと謂ふも、壤の堆き者のみ。　川の暢しと謂ふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として拔く可からざる我が半生の痼疾は、爭で壤と水との醫すべき者ならん、と齒牙にも掛けず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚の者ならずや。　看よ、看よ、木々の綠も、浮べる雲も、秀る峯も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鷄の鳴く音も、空の色も、皆自ら浮世の物ならで、我は爰に憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と輕く、心は水と淡く、希はくそ今より如此くして我生を了らん哉。

戀も有らず、怨も有らず、金錢も有らず、權勢も有らず、名譽も有らず、野心も有らず、榮達も有らず、墮落も有らず、競爭も有らず、執着も有らず、得意も有らず、失望も有らず、止だ天然の無垢にして、形骸の安きのみなる此里、我思を埋むるの里乎、吾骨を埋るの里乎。

性來多く山水の美に親まざりし貫一は、殊に心の往く所を知らざるばかりに愛で悦びて、清琴樓の二階座敷に案內されたれど、內にも入らで、始より瀧に向へる欄干に倚りて、偶ま人中を迷ひたりし子の母の親にも逢ひけんやうに、少時は其傍を離れ得ざるなりき。

樓前の綠は漸く暗く、遠近の水音冱えて、はや夕暮るゝ山風の身に浸めば、先づ湯浴などせばやと、何氣無く座敷に入りたる彼の眼を、又一個驚かす物こそあれ。

鞄を置いたる床間に、山百合の花のいと大きなるを唯一輪棒挿に活けたるが、莖形に曲り傾きて、恰も此方に向へるなり。

貫一は覺えず足を踏止めて、其の瞪れる眼を花に注ぎつ。宮とはや此に居たりとやうに、彼は卒爾の感に衝れたるなり。

既に幾處の實景の夢と符合するさへ有るに、亦其の殊に夢の夢なる一本百合の此に在る事、畢竟偶合に過ぎずとは謂へ、然りとては餘りに彼夢

と此旅との照應急に、因緣深きに似て、那ど恁は我を驚かすの太甚しき！

奇を弄して益出づる不思議に、彼は益懼を作して、或は這裏に天意の測り難き者有るなからん乎、と有繫に惑ひ苦めり。

旋て傍近く寄りて、幾許似たると眺むれば、打披ける葩は凛として玉を割いたる如く、濃香芬々と迸り、葉色に露氣有りて綠鮮に、定て今朝や剪りけんと覺しき花の勢なり。少く樂まされし貫一も、之が爲に興冷めて、俄に重き頭を花の前に支へつゝ、又夫の愁を徐々に喚起さんと爲つ。

「お風呂へ御案內申しませう。」

其聲に彼は婢を見返りて、

「あゝ、姐さん、此花を那裏へ持つて行つておくれでないか。」

「はあ、其花で御座いますか。旦那樣は百合の花はお嫌ひで？」

「いや、匂が強くて、頭痛がして成らんから。」

「然やうて御座いますか。唯今直に片附けますです。是は唯一つ早咲で、珍しう御座いましたものですから、先程折つてまゐつて、徒に挿して置いたんで御座います。」

「うゝ、成程、早咲だね。」

「然やうて御座います。來月あたりに成りませんと、餘り咲きませんので。是が唯一つ有りましたんで、紛れ咲なので御座いますね。」

「うゝ紛れ咲、然うだね。」

「御案内致しませう。」

風呂場に入れば、一箇の客先在りて、未だ燈點さぬ微黯の湯槽に漬りけるが、何樣人の來るに駭けると覺しく、甚だ忙しげに身を起しつ。貫一が入れば、直に上ると齊しく洗場の片隅に寄りて、色白き背を此方に向けたり。

年紀は二十七八なるべき歟。良屏弱なる短軀の男なり。頻に左視右瞻す

れども、明々地ならぬ面貌は定かに認め難かり。然れども、自ら見識越ならぬは明なるに、何が故に人目を避るが如き態を作すならん。華車なる形成は、此等邊の人にあらず、何人にして、何が故になど、貫一は徒に心牽れて居たり。

旋て彼が出づれば、待ちけるやうに男は入替りて、仍飽く迄此方を向かざらんと爲つゝ、蕭索に溶を行ふ音を立つるのみ。

其の膚の色の男に似氣無く白きも、其の骨繊に肉の痩せたるも、又は其擧動の打濕りたるも、其の人を懼るゝ氣色なるも、總て自ら尋常ならざるは、察するに精神病者の類なるべし。然ては何の怪む所有らん。節は初夏の未だ寒き、此の寥々たる山中に來り宿れる客なれば、保養欝散の爲ならずして、湯治の目的なるを思ふべし。誠に然なり、彼は病客なるべきをと心釋けてそ、はや口も遣らずなりける間に、男は浴み果てゝ、貸浴衣引絡ひつゝ出で行きけり。

暮色は逾よ濃に、轉た激しき川音の寒さを添ふれど、手寡なればや燈も持來らず、湯香高く蒸騰る煙の中に、獨り影暗く蹲るも、少しく凄じき心地して、程無く貫一も出でゝ座敷に返れば、床間にも百合の花も在らず、煌々たる燈火の下に座を設け、膳を据ゑて、傍に手焙を置き、茶器食籠など取揃へて、此の一目有繋に旅の勞を忘るべし。

先づ衣桁に在りける褞袍を被ぎ、夕冷の火も戀しく引寄せて莨を吃し居れば、天地靜に石走る水の響、梢を渡る風の聲、颯々淙々と鳴りて、幽なること太古の如し。

乍ちはたゝと跫音長く廊下に曳いて、先のにもあらぬ小婢の夕餉を運び來れるに引添ひて、其處に出でたる宿の主は、

「今日は好うこそ御越し下さいまして、さぞ御勞樣で被居いませうて御座ります。えゝ、又唯今程は格別に御茶料を下し置れまして、甚だ恐入りました儀で、難有う存じまして、厚く御禮を申上げまするで御座いま

す。

ええ、前以てお詫を申上げ置きまするのは、召上り物の所で御座りまして、一向はや御覽の通何も御座りませんて、誠に相濟みません儀で御座いまするが、實は、未だ些と時候もお早いので、自然お客樣のお越も御座りませんゆゑ、何分用意等も致し置きませんやうな次第で。然し、一兩日中にもお麁末ながら何ぞ差上げまするやうに取計ひまするで御座いますで、どうぞ、まあ今明日の處は御勘辨を下さいまして、御寛と御逗留下さいまするやうに。――これ、早う御味噌汁をお易へ申して來ないか。」

主の辭し去りて後、貫一は彼の所謂何も無き、椀も皿も皆黃なる鷄子一色の膳に向へり。

「內にもお客は今幾箇有るのだね。」

「這箇の外にお一方で御座りやす。」

「一箇？　那のお客は單身なのか。」

「はい。」
「先に湯殿で些と遇つたが、男の客だよ。」
「然よて御座りやす。」
「他は病人だね。」
「どうて御座りやすか。――那樣事無えで御座りやせう。」
「然かい。何處も不良い處は無いやうかね。」
「無えやうで御座りやすな。」
「奈何だ、お前達と懇意にして話をするか。」
「そりや被爲りやす。」
「俺と那箇が爲る？」
「旦那樣とてすけ？　そりや旦那樣のやうにし被爲りやせん。」
「うむ、然うすると、俺の方がお饒舌なのだな。」
「あれ、然よぢや御座りやせんけれど、那裏のお客樣は默つて被居る方

が多う御座りやす、而して何でもお連樣が直に入しやる筈で、其を、まあ酷う待つてお在なさりやす。」
「どうも病人のやうだが、然でないかな。」
「あゝ、旦那樣はお醫者樣で御座りやすか。」
貫一は覺えず噴飯せんと爲つゝ、
「成程、好い事を言ふな。俺は醫者ぢやないけれど、どうも見た所が病人のやうだから、然ぢやないかと思つたのだ。もう長く來て居るお客か。」
「いんえ。昨日お出になりやしたので。」
「昨日來たのだ？　東京の人か。」
「はい、日本橋の方のお方で御座りやす。」
「それぢや商人か。」
「私能く知りやせん。」
「おゝ、伴が後から來るのか。いや、大きに御馳走だつた。」

「何も御座りやせんで、お麁末樣で御座りやす。」

婢は膳を引きて起ちぬ。貫一は頽然と臥たり。

二十間も座敷の數有る大構の內に、唯二人の客を宿せるだに、寂寥は既に餘んぬるを、此の深山幽谷の暗夜に蔽れたる孤村の片邊に倚れる淸琴樓の間毎に亘る長廊下は、星の下行く町の小路より、幾許心細くも可恐き夜道ならんよ。戶一重外にゝ、山颪の絕えずおどろ〳〵と吹廻りて、早瀨の波の高鳴は、眞に放鬼の名をも懷ふべかり。

折しも唾壺打つ音は、二間許を隔てゝ甚だ蕭索に聞えぬ。貫一は何の故とも知らで、其の念頭を得放れざる彼の客の身の上をば、獨り樣々に案じ入りつゝ、彼既に病客ならず、又我が識る人ならずと爲ば、何を以つて人を懼るゝ態を作すならん。抑も彼は何者なりや。又何の尤むる所有りて、然ばかり人を懼るゝや。

貫一は此秘密の鑰を獲んとして、左往右返に暗中模索の思を費すなりき。

（二）の二

明る朝の食後、貫一は先づ此の狹き畑下戸の隅々まで一遍見周りて、畧ぼ其の狀況を知ると與に、淸琴樓の家格を考へなどして、磧に出づれば、淺瀨に架れる板橋の風情面白く、渡れば喜十六の山麓にて、十町許登りて須巻の瀧の湯有りと敎へらるゝまゝに、遂に其處まで往きて、午近き頃宿に歸りぬ。

汗を流さんと風呂場に急ぐ廊下の交互に、貫一は恰も彼の客の湯上りに出會へり。這回は彼も面を見せじとやうに、慌忙しく打背きて過行くなり。

今は疑ふべくもあらず、彼は正しく人目を避けんと爲るなり。則ち人を懼るゝなり。故は、自ら尤るなり。彼は果して何者ならん、と貫一は愈よ深く怪みぬ。

昨日こそ誰乎彼の黯黮にて、分明に面貌を辨ぜざりしが、今の一目は、躬も奇なりと思ふばかり奇くも、彼の不用意の間に速寫機の如き力を以てして、其の映じ來りし形を總て脫さず捉へ得たりしなり。

貫一は其の相貌の瞥見に緣りて、直ちに彼の性質を占はんと試るまでに、いと善く見極めたり。然れども、奈何にせん、彼の相する所は、始に疑ひし所と頗る一致せざる者有り。彼若し實に人を懼るゝと爲ば、彼の人を懼るゝ所以と、我より彼の人を懼るゝ所以と爲す者とは、或は稍趣を異にせざらんや。又想ふに、彼は決して自ら尤る所など有るに非ずして、止だ其の性の多羞なるが故のみ乎、未だ知るべからず。此の二者の前のをも取り難く、有繫に後のにも頷きかねて、彼は又新に打惑へり。

午飯の給仕には年嵩の婢出でたれば、餘所ながら彼の客の事を問ひけるに、箸をも取らで今外に出で行きしと云ふ。

「はあ、飯も食はんで？　何處へ行つたのかね。」

「何でも昨日あたりお連樣がお出の筈になつて居りましたので御座いませう。それを大相お待ちなすつて被居いました處が、到頭お着が無いもんで御座いますから、今朝から御心配遊して、停車場まで樣子を見がてら電報を掛けに行くと有仰いまして、それてお出ましに成つたので御座います。」

「うむ、それは心配だらう。能く有る事だ。然し、飯も食はずに氣を揉んで居るとは、何云ふ伴なのかな。――年寄か、婦でゞもあるか。」

「如何で御座いますか。」

「お前知らんのか。」

「私存じません。」

彼は覺えず小首を傾くれば、

「旦那も大相御心配ぢや御座いませんか。」

「然云ふ事を聞くと、俺も氣になるのだ。」

「ぢや旦那も餘程苦勞性の方ですね。」
「大きに然うだ。」
「それぢやお連樣が入しつて見て、お年寄か、お友達なら宜しう御座いますけれど、倘も、ねえ貴方、お美しい方ろ何かゞつた日には、それこそ旦那は大變で御座いますね。」
「奈何大變なのか。」
「又御心配ぢや御座いませんか。」
「うむ。大きにこれは然うだ。」
風恬に草香りて、唯居るは惜しき日和に奇痒く、貫一は又出でゝ、鹽釜の西南十町許の山中なる鹽の湯と云ふに遊びぬ。還れば寂しく夕暮るゝ頃あり。例の如く湯に入りて、上れば直に膳を持出で、燈も漸く燿きしに、彼の客は未だ歸り來ず、
「閑寂なのも可いけれど、外に客と云ふ者が無くて、至で侘う獨法師も

隨分心細いね。」
託言がましく貫一が言出づれば、
「然やうで被居いませう、何と申したつて此の山奧で御座いますから。全體旦那がお一人で被入ると云ふお心懸が惡いので御座いますもの、それは爲方が御座いません。」
婢は故とらしう高笑しつ。
「成程、是は恐入つた。今度から善く心得て置く事だ。」
今度なんて有仰らずに、旦那も明日あたり電信でお呼寄になつたら如何で御座います。」
「五十四になる老婢を呼んだつて、お前、始らんぢやないか。」
「まあ、旦那は那麼好い事を言つて被居る。其の老婢さんの方でないのをお呼びなさいましよ。」
「氣の毒だが、内にそ其限より居ないのだ。」

「ですから、旦那、づっと外にお在んなさるので御座いませう。」
「そりや外には幾多でも在るとも。」
「あら、御馳走で御座いますね。」
「何有、能く聽いて見ると、それが皆人の物ださうだ。」
「何ですよ、旦那。貴方、本當の事を有仰るもんですよ。」
「本當にも嘘にも其通だ。私なんぞは那樣意氣な者が有れば、何爲に這麼青臭い山の中へ遊びに來るものか。」
「おや！　どうせ青臭い山の中で御座います。」
「青臭いどころか、お前、天狗巖だ、七不思議だと云ふ者が有る、可恐い山の中に違無いぢやないか。其處へ彷徨々、閑さうな貌をして唯一箇で遣つて來るなんぞは、能々の間拔と思はなけりやならんよ。」
「それぢや旦那は間拔なのぢや御座いませんか。那樣解らない事が有るものですか。」

「間抜にも大間抜よ。宿帳を御覽、東京間抜一人と附けて在る。」
「其傍に小く、下女鹽原間抜一人と、ぢや附けさせて戴きませう。」
「面白い事を言ふなあ、おまへは。」
「猶且少し抜けて居る所爲で御座います。」
彼は食事を了りて湯浴し、少焉ありて九時を聞きけれど、彼客は未だ歸らず。寢床に入りて、程無く十時の鳴りけるにも、水聲空く樓を繞りて、松の嵐の枕上に落つる有るのみなり。始より其人を怪まざらんには此の咎むるに足らぬ瑣細の事も、大いなる糢糊の影を作して、逾よ彼が疑の眼を遮り來らんとするなりけり。貫一は幾と疑ひ得らるゝ限疑ひて、躬も其の妄に過るの太甚きを驚ける迄に至りて、始て罷めんと爲たり。之に亞いで、彼は抑も何の故有りて、肥瘠も關せざる彼客に對して、恁ばかり輕々しく思を費し、又念を懸るの固執なる乎、其の謂無き己をば、敢て自ら解かんと試みつ。

然れども、人は往々にして自ら率る其己を識る能はず。貫一は抑へて怪まざらんと爲ば、理に於て怪まずしてあるべきを信ずるものから、又幻視せるが如き其の大いなる影の冥想の間に纏綿して、或は理外に在る者有る無からんや、と疑はざらんと爲る傍より却りて惑しむるなり。表階子の口に懸れる大時計は、病み憊れたるやうの鈍き響を作して、廊下の闇に彷徨ふを、數ふれば正に十一時なり。

彼客は此の深更に及べども未だ歸り來ず。

彼は歸り來らざるなる乎、歸り得ざるなる乎、歸らざるなる乎など、又思放つ能はずして、貫一は寐苦しき枕を頻回易へたり。今や十二時にも成りなんにと心に懸けながら、其音は聞くに及ばずして遂に眠を催せり。

日高き朝景色の前に起出づれば、座敷の外を小婢は雜巾掛して居たり。

「お早う御座りやす。」

「睡さうな顏をして居るな。」

「はい、昨夜那裏のお客様がお歸になるかと思つて、遲うまで待つて居りやしたで、今朝睡うござりやす。」
「あゝ、あのお客は昨夜は歸らずか。」
「はい、お歸が御座りやせん。」
貫一は彼客の間の障子を開放したるを見て、匜楊枝のまゝ欄杆傳ひに外を眺め行く態して、其の前を過れば、床の間に小豆革の手鞄と、淺黃キヤリコの風呂敷包とを並べて、傍に二三枚の新聞紙を引捏ね、衣桁に絹物の袷を懸けて、其裾に紺の靴下を疊置きたり。
さては少しく本意無きまでに、座敷の内にて見出すべき異狀も有らで、彼は宿帳に據りて、洋服仕立商なるを知りたると、敢て背く所有りとも覺えざるなりき。
拍子拔して返れる貫一は、心私に其の臆測の鑿なりしを媿ぢざるにもあらざれど、又之が爲に、直ちに彼の濡衣を剝去る迄に釋然たる能はずし

て、好し、此上は其の待人の如何なる者なる乎を見て、疑は決すべしと、旋て其の消息を齎し來るべき彼の歸來の程を、陰ながら最更に遲しと待てり。

夜は山精木魅の出でゝ遊ぶを想はしむる、陰森凄幽の氣を凝すに反して、此の霽朗なる晝間の山容水態は、明媚爭か畫も如かん、天色大氣と殆ど塵境以外の感無くんばあらず。黄金を織作せる羅にも似たる麗しき日影を蒙りて、萬斛の珠を鳴す谷間の淸韻を樂みつゝ、欄頭の山を枕に恍惚として消ゆらんやうに覺えたりし貫一は、急遽しき跫音の廊下を動し來るに駭されて、起回りさまに頭を捻向れば、何事とも知らず、年嵩の婢の駈着るなり。

「些と旦那、參りましたよ、參りましたよ！　早く被入つて御覽なさいまし。些と早く。」

「何が來るのだ。」

「何でも可いんですから、早く被入いましよ。」

「何だ、何だな。」

「早く階子の所へ被入つて御覧なさい。」

「おゝ、あの客が還つたのか。」

彼ははや飛ぶが如くに引返して、貫一の言は五間も後に殘されたり。彼が注進の模樣は、見るべき待人を伴ひ歸れるならんをと、直に起ちて、表階子の邊に行く時、既に晩し、兩箇の人影は欄の上に顯れたり。

鐔廣なる藍鼠の中折帽を前斜に冠れる男は、例の面を見せざらんと爲れど、彼客なり。引連れたる女は、二十歳を二つ三つも越したる可し、銀杏返を引約めて、本甲蒔繪の揷櫛根深に、大粒の淡色瑪瑙に金脚の後簪、堆朱彫の玉根掛をかけて、鬢の一髮をも亂さず、極めて快く結ひ做したり。葡萄茶の細格子の縞御召に勝色裏の袷を着て、羽織は小紋縮緬の一紋、阿蘭陀模樣の七絲の袱紗帶に金鏁子の繊きを引入れて、嬌かしき友禪染

の襦袢の袖して口元を拭ひつゝ、四季袋を紐短かに挈げたるが、弗と此方を見向ける素顔の色蒼く、口の紅も點さで、較や裏寂くも花の咲過ぎたらんやうの竊衰を帶びたれど、美目の盼たる色香尚濃にして、漫ろ人に染むばかりなり。

兩箇は彼の見る目の顯露なるに氣怯せる樣子にて、先を爭ふ如く足早に過行きぬ。貫一も亦其の逢着の唐突なるに打惑ひて、なか〳〵精く看るべき遑あらざりけれど、其女は萬々彼の妻なんどにあらじ、と獨り合點せり。

第三章

彼の男女は娩しさに堪へざらんやうに居寄りて、手に手を交へつゝ密々に語れり。

「然うなの、だから私は甚麼に心配したか知れやしない。なか〳〵貴方が此處で想つて居るやうな譯に行きは爲ませんとも。そりや貴方の心配も然うでせうけれど、私の心配と云つたら、本當に無かつたの。察しるが可いって、そりや貴方、お互ぢやありませんか。吁、私は今だに胸が悸々して、後から追掛けられるやうな氣持がして、何だか落付かなくて可けない。」

「まあ何でも、恬して約束通り逢へりや上首尾なんだ。」

「全くよ。一昨日の晩あたりの私の心配と云つたら、こりや奈何だかと、然う思つたくらゐ、今考へて見れば、自分ながら好く出られたの。猶且

盡きない緣なのだわ。」

些と男の顏を眄りて、濡るゝ瞼を輕く拭へり。

「其の緣の盡きないのが、究竟彼我の身の窮迫なのだ。俺も恁云ふ事に成らうとは思はなかつたが、成程、惡緣と云ふ者は爲方の無いものだ。」

女は倚竊に泣き居る面を背けたるまゝ、

「貴方は直に惡緣だ、惡緣だと言ふけれど、惡緣なら奈何するんです！」

「惡緣だから恁うなつたのぢやないか。」

「恁う成つたのが奈何したんですよ！」

「今更奈何するものか。」

「當然さ！　貴方は一體水臭いんだ‼」

「おい、お靜、水臭いとは誰の事だ。」

色を作せる男の眼は、衝と湧く淚に輝けり。

「貴方の事さ！」

女の目よりは漣々と零れぬ。

「俺の事だ?!　お靜……………手前は那樣事を言つて、それで濟むと思ふの乎。」

「濟んでも濟まなくても、貴方が水臭いからさ。」

「未だ那樣事を言やがる！　さあ、何が水臭いか、それを言へ。」

「はあ、言ひますとも。ねえ、貴方は他の顏さへ見りや、直に惡縁だと云ふのが癖ですよ。彼我の中の惡縁は、貴方が那樣に言なくたつて善く知つて居まさね。何も貴方一箇の惡縁ぢやなし、私だつて是でも隨分謂ふに謂れない苦勞を爲て居るんぢやありませんか。それを貴方が然も然も迷惑さうに、何ぞの端には惡縁だ〳〵とお言ひなさるけれど、聞かされる身に成つても御覽なさいな、餘り好い心持は爲やしません。其も不斷なら左も右もですさ、此場になつて迄も、然云ふ事を言ふのは、貴方の心が水臭いからだ――何が然うでない事が有るもんですか。」

「悪縁だから悪縁だと言ふのぢやないか。何も迷惑して…………。」
「悪縁でも可ござんすよ！」
彼等は相背きて姑く語無かりしが、女は忍びやかに泣き居たり。
「おい、お靜、おい。」
「貴方屹度迷惑なんてせう。貴方が那樣氣ぢや、私は…………實に…………充らない。私は奈何せう、情無い！」
お靜は竟に顏を掩うて泣きぬ。
「何だな、お前も考へて見るが可いぢやないか。其を迷惑とも何とも思はないからこそ、世間を狹くするやうな間にも成りさ、又恁云ふ…………なあ…………譯なのぢやないか。其を嘘にも水臭いなんて言れりや、俺だつて悔しいだらうぢやないか。餘り悔しくて俺は涙が出た。お靜、俺は何も藝人ぢやなし、お前に勤めて居るんぢやないのだから、然う思つて居てくれ。」

「狹山さん、貴方も那樣に言はなくたつて可いぢやありませんか。」

「お前が言出すからよ。」

「だつて貴方が恁云ふ場になつて迷惑さうな事を言ふから、私は情無くなつて、奈何したら可からうと思つたんでさね。ぢや私が惡かつたんだから謝ります。ねえ、狹山さん、些と。」

お靜の顏を打矚りつゝ、男は茫然たるのみなり。

「狹山さんてば、貴方何を考へて居るのね。」

「知れた事さ、彼我の身の上をよ。」

「何だつて那樣事を考へて居るの。」

「…………。」

「今更何も考へる事は有りはしないわ。」

狹山は徐々に目を轉して、太息を吻いたり。

「もう那樣溜息なんぞを吻くのはお舍しなさいってば。」

「お前二十……………二だつたね。」
「それが奈何したの。貴方が二十八さ。」
「あの時はお前が十九の夏だつけかな。」
「あゝ、然う、何でも袷を着て居たから、丁度今時分でした。湖月さんの那の池に好いお月が映して居て、暖い晩で、貴方と一處に涼みに出たんですよ、善く覺えて居る。那が十九、二十、二十一、二十二と、全三年に成るのね。」
「あゝ、然う〳〵。昨日のやうに思つて居たが、もう三年に成るなあ。」
「何だか、恁う全で夢のやうね。」
「吁、夢だなあ！」
「夢ねえ！」
「お靜！」
「狹山さん！」

兩箇は手を把り、膝を重ねて、同じ思を猶悲く。

「ゆ……ゆ……夢だ！」

「夢だわ、ねえ！」

聲立てじと男の胸に泣附く女。

「恁う成るのも皆約束事ぢやあらうけれど、那奴さへ居なかつたら、貴方だつて餘計な苦勞は爲はしまいし。私は私で、那も恁も思つて、末始終の事も大概考へて置いたのだから、もう少しの間時節が來るのを待つて居られりや、曩日の御神籤通な事に成れるのは、もう目に見えて居るのを、那奴が邪魔して、横紙を裂くやうな事を爲やがるばかりに、大事に爲なけりや成らない貴方の躰に、取つて返しの付かない傷まで附けさせて、私は、狭山さん、餘り申譯が無い！　堪…………忍…………して下さい。」

「そりや何有、お互の事だ。」

「いゝえ、私が最少し意氣地が有つたら、恁でもないんだらうけれど、

胸には色々在つても、其が思切つて出來ない性分だもんだから、つい這麼破滅にも成つて了つて、私は實に濟まないと、自分の身を考へるよりは、貴方の事が先に立つて、然ぞ陰ぢや迷惑もして在なんだらうに、逢ふ度に私の身を案じて、毎も優くして下さるのは仇や疎な事ぢやないと、私は嬉いより難有いと思つて居ます。だものだから、近頃ぢや、貴方に逢ふと直に涙が出て、何だか悲くばかりなるのが不思議だと思つて居たら、果然恁云ふ事になる識ざつたんでせう。

貴方にはお氣の毒だ、お氣毒だ、と始終自分が退けて居るのに、惡緣だなんぞと言れると、私は躰が縮るやうな心持がして、あゝ、然でもない、貴方が迷惑して居るばかりなら未だ可いけれど、取んだ者に懸り合つた、と倘や後悔してお在なんぢやなからうかと思ふと、私だつて好い氣持はしないもんだから、つい向者は那麼に言過ぎて、私は誠に濟みませんでした。其はもう貴方の言ふ通り惡緣にそ差無いんだけれど、後生だから

那樣可厭な事は考へずに居て下さい。私は是て本望だと思つて居る。」

「生木を割いて別れるよりは、まあ愈だ。」

「別れる？　吁、可厭だ！　考へても慄然とする！　切れるの、別れるのなんて事は、那奴が來ない前には夢にだつて見やしなかつたのを、切れろ切れろぢや私も何の位内で責められたか知れやしない！　而して擧句が這麼事に成つたのも、思へば皆那奴のお蔭だ。え〻、悔しい！　私は屹度執着いても、此怨は返して遣るから、覺えて居るが可い！」

女は身を顫せて罵ると與に、念入りて呪ふが若き血相を作せり。

不知、箇の恨み、罵り、呪はる〻者は、何處の誰ならんよ。

「那奴も好い加減な馬鹿ぢやないか！」

男は齒咬しつ〻苦しげに嗤笑せり。

「馬鹿も大馬鹿よ！　方圖の知れない馬鹿だわ。畜生！　所歡の有る女が金で靡く乎、靡かない乎、些は考へながら遊ぶが可い。來りや不好な

顏を爲て遣るのに、其さへ解らずに、もう慇く附けつ廻しつして、了局
には人の戀中の邪魔を爲やがるとは、那奴も能く〳〵の藝無猿に出來て
居るんだ。憎さも憎し、私はもう悔くて、悔くて、狹山さん、實はね、
私は此世の置土產に、那奴の額を打割つて來たんでさね！」

「えゝ、奈何して！」

「何有ね、貴方に別れた那の翌日から、延續に來て居やがつて、ちつと
でも傍を離さないんぢやありませんか。這箇は氣が氣ぢやない所へ、も
う惡漆膠くて耐らないから、病氣だと謂つて內へ遁げて來りや、直に追
懸けて來て、附絡つて居るんでせう。然すると、寸法は知れてまさね、
丁と渉が付いて居るんだから、阿母さんは傍から(ちやほや)して、そり
や貴方、眞面目ぢや見ちや居られないお手厚さ加減なんだから、那奴は
圖に乘つて了つて、やあ、風呂を沸せだ事の、ビイルを冷せだ事のと、
あの狹い內へ一箇で幅を爲やがつて、なか〳〵動きさうにも爲ないんぢ

ぢやありませんか。
私は全で生捕に成つたやうのもので、出るにも出られず、這箇の事が有るから、然して居る空は無し、那麼氣の揉めた事は有りはしない――本當に奈何せう乎と思つた。えゝ、何有、那麼奴は打抛出して措いて、這箇は搔卷を引被つて一心に考へて居たんですけれど、もう憤れたくて耐らなくなつて來たから、不如管はず飛出して了はうかと、餘程然う念つたものゝ、丹子の事も、ねえ、考へて見りや可哀さうだし、あの子を始め阿母さん迄、私ばかりを頼に爲て居るものを、然ぞや私の亡い後にも、甚麼にか力も落さうし、又那子も好い苦勞を爲なけりやなるまいと、其ばかりに牽されて、色々話も有るものだから、あの子の阿母さんにも逢つて遣りたし、それに、私も出るに就いちや、爲て置かなけりやならない事も有るし爲るので、到頭遲々して出損つて了つたんです。
然すると、奈何でせう、まあ、那奴は其晩二時過までうつ付いて居て、

それても不承々々に還つたのは可い。すると翌日は半日阿母さんのお談義が始まつて、好加減に了簡を極めろでせう。然う言つちや濟まないけれど、育てた恩も聞飽きて居るわ。其を追繰返し、引繰返し、惡體交りにはら散々聽せて、了局は口返答したと云つて足蹴にする。何有、私は足蹴にされたつて、撲れたつて、それを悔しいとは思やしないけれど、這箇だつて貴方と云ふ者が有ると思ふから、もう一生懸命に稼いて、爲るだけの事は丁と爲てあるのに、何ぼ慾に限は無いと謂つても、自分の言條ばかり通さうとして、他にも些でも樂を爲せない算段を爲る。私だつて金屬で出來た機械ぢやなし、然う／＼驅使はれてお爲にばかり成つて居ちや、這箇の身が立ちはしない。

別に奈何してくれなくても、譯さへ解つて居てくれりや、辛いぐらゐは私は辛抱する。所歡は堰いて了ふし、旦那取は爲ろと云ふ。那樣不好な眞似を爲なくても、立派に行くやうに私が稼いてあるんぢやありません

か。それを然云ふ無理を言つてからに、素直でないの、馬鹿だのと、足蹴に爲るとは……………何……………何事で……………せう！

それぢや私も赫として、もう我慢が爲切れなく成つたから、物も言はずに飛出さうと爲る途端に、運惡く又那奴が遣つて來たんぢやありませんか。さあ、捉つて了つて、其處の塲圖で逃るにも逃られず、阿母さんは得たり賢しなんてせう、一處に行け〳〵と聒しく言ふし、那奴は何でも來いと云つて放さない。私も内を出た方が都合が好いと思つたから、まあ言ふなりに成つて、例の處へ拽られて行つたとお思ひなさい。あの長尻だから、さあ又還らない、而して何か所思でも有つたんでせうよ、何だか知らないけれど、其晩に限つて無闇とお酒を強るんでさ。這箇も嚼勃肚で、飮めも爲ないのに幾多でも引承けさんだけれど、醉ひさうにも爲やしない。

其内に漸々又お極りの氣障な話を始めやがつて、這箇が柳に受けて聞い

て居て遣りや、可いかと思つて増長して、呆れた眞似を爲やがるから、性の付く程誘々然う言つて遣つたら、さあ自棄に成つて、それから毒吐き出して、やあ店番の埃被だの、冷飯吃ひの雇人が奈何だのと、聞いちや居られないやうな腹の立つ事を言やがるから、這箇も思切つて隨分な惡體を吐いて遣つたわ、私は。
然うすると、了局に那奴は何と言ふかと思ふと、幾許七顛八倒しても金て縛つて置いた躰だなんぞ、と利いた風な事を言ふんぢやありませんか。だから、私は然う言つて遣つた、お氣の毒だが、貴方は大方目が眩んで、そりやお袋を縛つゝんだらうって。」
聽居る狹山は小氣味好しとばかりに頷けり。
「それで那奴は全然慍つて了つて、それからの騷擾てさ。無禮な奴だとか何とか言つて、私は襟を持つて引擦り仆された。隨分飲んで居たから、依様酔つて居たんでせう、其時はもう全で夢中て、唯那奴の憎らしいの

が胸一杯に込上げて、這畜生と思ふと、突如其處に在つたお皿を那奴の横面へ叩付けて遣つた。丁度それが眉間へ打着つて、血が淋漓流れて、顏が半分眞赤に成つて了つた。是は居ちや面倒だと思つたから、家中大騷を遣つて居る際を見て、窃と飛出した事は飛出したけれど、別に往所も無いから、丹子の阿母さんの處へ駈込んだの。

所が、好かつた事にそ、今旅から歸つたと云ふ所なんて、時間を見ると、十時餘程廻つて居るんてせう。汽車はもう出ず、氣ばかりは急ぐけれど、若箇道間に合ふんぢやなし、それに話は有るし爲るもんだから、一晩厄會に成る事にえて、髮なんぞを結んでもらひながら、些と譯が有つて、貴方と一處に當分身を隱すのだと云ふやうに話を爲てね、それから丹子の事も悉く言置いて遣りましたら――善い人ね、あの阿母さんは――おいくく泣出して、自分の子の事はふっつりとも言はずに、唯私の身ばかりを案じて、那の愆のと色々言つてくれた其の實意と云つたら……………噫、

同じ人間でありながら、内の阿母さんは、實に、あなた、鬼ですわ！
私も那子の阿母さんのやうな實の親が有つたらば、這麼苦勞は爲やしまいし、又貴方のやうな方の有るのを、然ぞかし力に念つて、喜びも爲やうし、大事にも爲る事だらうと思つたら、もう〳〵悲くなつて、悲くなつて、如何に何でも餘り情無くて、私は甚麼に泣きましたらう。
それに、私をば那麼に賴に爲て居た阿母さんの事だから、當分でも田舍へ行つて了ふと云ふのを、それは心細がつて、力を落したの何のと云つたら、私も別れるのが氣の毒に成るくらゐて、先へ落付いたら、どうぞ一番に住所を知せてくれ、初中終旅を出行いて居る躰だから、直に御機嫌伺ひに出ると、其事を那麼に懇々も賴んで居ましたから、後で聞いたら、さぞ吃驚して……………屹度疾ひでも爲るでせうよ。考へて見りや、丹子も可愛し、あの阿母さんも怜いし。吁、吁！
歔欷して彼は悶えつ。

「然云ふ譯ぢや、猶更内ぢや大騷を爲て搜して居る事だらう。」
「大變でせうよ。」
「それだと餘り遲々しちや居られないのだ。」
「どうて、狹山さん、先は知れて居…………。」
「然うだ。」
「だからねえ、もう早い方が可ござんすよ。」
女は咽びて其處に泣伏しぬ。狹山は涙を連瞬きて、
「お靜、おい、お靜や。」
「あ…………あい。狹山さん！」
憐むべし、情極りて彼等の相擁するは、畢竟盡きせぬ哀歎を抱くが如き者ならんをや。

(三)の貳

兩箇は此方に且泣き且語れる間、彼方の一箇は徒然の柱に倚りて、やうやう傾く日影に照され居たり。

其の待人の如何なる者なる乎を見て、疑は決すべしと爲せし貫一も、彼の伴ひ還りし女を見るに迨びて、其疑は逾よ錯雜して、而も新なる怪訝の添はるのみなり。

如何なればや、女の顏色も甚だ勝れず、其點の男といと善く似たるは、同じ憂を分つにあらざる無からん乎。我聞く、犯罪の底には必ず女有りと、若し信なりとせば、彼は正しく彼女ゆゑに如何なる罪をも犯せるならんよ。其罪の故に男は苦み、其苦の故に女は憂ふると爲ば、彼等は誠に相愛するの堅き者ならず哉。

知らず、彼等は何の故に相率て此の人目稀なる山中にぞ來れる。其罪を

遁れんが爲乎、其苦と憂とを忘れんが爲乎、或は其愛を全うせんが爲乎。明に彼等は夫婦ならず、又は、女の藝者風なるも、決して尋常の隱遊にあらずして、自から穗に露るゝ所有り。さては何等の密會ならん。貫一は彼を以て女を偸みて奔る者ならずや、と先推しつゝ、尙ほ如何にやなど、飽かず疑へる間より、忽ち一片の反映は閃きて、朧にも彼の胸の黯きを照せり。

彼は此際熱海の舊夢を憶はざるを得ざりしなり。

世上貫一の外に愛する者無かりし宮は、其の貫一と奔るを諾はずして、僅に一瞥の富の前に、百年の契を蹂躪りて吝まざりき。噫、我が當時の恨、彼が今日の悔！　今彼女は日夜に榮の衒ひ、利の誘ふ間に立ち、守るに難き節を全うして、世の容れざる愛に隨つて奔らんと爲る乎。

爾思へる後の彼は、陰に彼の兩箇の先に疑ひし如き可忌き罪人ならで、潔く愛の爲に奔る者たらんを、禱るばかりに冀へり。若し然もあらば、

彼は具に彼等の苦しき身の上と切なる志とを聽かんと念ひぬ。心永く疲きて戀に敗れたる貫一は、殊更に他の成敗に就いて觀るを欲せるなり。彼は己の不幸の幾許不幸に、人の幸の幾許幸ならん乎を想ひて、又己の失敗の幾許無殘に、人の成效の幾許十分ならん乎を想ひて、又己の契の幾許薄く、人の縁の幾許深からん乎を想ひて、又己の受けし愛の幾許淺く、人の交せる情の幾許篤からん乎を想ひて、又己の戀の障碍の幾許強く、人の容れられぬ世の幾許狹からん乎を想ひて。嗟乎、既に己の戀は敗れに破れたり。知るべからざる人の戀の末終に如何ならん乎を想ひて。

晝間の程は勗めて籠り居し彼の兩箇の、夜に入りて後打連れて入浴せるを伺ひ知りし貫一は、例の益す人目を避るならんよと念へり。

還り來て多時酒など酌交す樣子なりしが、高聲一つ立つるにもあらで、唯障子を照す燈のみいと明に、內の寂しさは露をも置きけんやうにて、

さては彼の吹絶えぬ松風に、彼等は竟に醉を成さゞるならんと覺ゆばかりなりき。

爲す事もあらねば、貫一は疾く臥内に入りけるが、僅に眊むと爲れば直に寤めて、其のまゝに睡は失ると與に、樣々の事思ひ居たり。

夜の靜なるを動かして、彼の男女の細語は洩れ來ぬ。甚だ幺微なれば聞知るべくもあらねど、娓々として絶えず枕に打響きては、なかなか大いなる聲にも增して耳煩はしかり。

然なきだに寢難かりし貫一は、益す氣の澄み、心の冱え行くに任せて、又徒に左や右と、彼等の身上を推測り〳〵思回らすの外はあらず。彼方も其の幺微なる聲に語り〳〵て休まざるは、思の丈の短夜に餘らんとするなる乎。

乍ち有りて、迸れるやうに其聲は衝と高く揚れり。貫一は愕然として枕を欹てつ。女は遽に泣出せるなり。

其時男の聲音は全く聞えずして、唯獨り女の縱に泣音を洩すのみなる。窄めたる貫一は彌が上に窄めて、自ら故を知らざる胸を轟せり。少焉泣きたりし女の聲は漸く鎭りて、又濕り勝にも語り初めしが、一たび情の爲に激せし聲音は、自から始よりは高く響けり。然れど仍其の言ふ所は聞知り難くて、男の聲は却りて前よりも仄なり。

貫一は咳きも遣らで耳を澄せり。

或は時に斷ゆれども、又續ぎ、又續ぎて、彼等の物語は蠶の絲を吐きて倦まざらんやうに、限も知らず長く亘りぬ。げに此の積る話を聞きも聞かせもせんが爲に、彼等は此に來つるにやあらん。然れども、日は明日も明後日も有るを、甚だ忙しくも語るもの哉。然ばかり間遠なりし逢瀬なる乎、言はでは裂けぬる胸の內乎、恁く有らでは慊らぬ戀中乎、など思ふに就けて、彼は有繫に我身の今昔に感無き能はず、枕を引入れ、夜着引被ぎて、寐返りたり。

何時罷みしとも覺えて、彼等の寐物語は漸く絶えぬ。
貫一も遂に短き夢を結びて、常よりは蚤かりけれど、目覺めしまゝに起出てし朝冷を、走り行きて推啓けつる湯殿の内に、人は在らじと想ひし
眼を驚して、彼の男女は浴し居たり。
貫一は礑と閉して急ぎ返りつ。

第四章

兩箇は較熱かりし其日も垂籠めて夕に抵りぬ。むづかしげに暮山を繞りし雲は、果して雨と成りて、冷々と密下るほどに、宵の燈火も影更けて、壁に映ふ物の形皆寂しく、憖ひに起きて在るべき夜頃ならず。さては貫一も枕に就きたり。

ラムプを細めたる彼等の座敷も甚だ靜に、宿の者さへ寐急ぎて後十一時は鳴りぬ。

凄じき谷川の響に紛れつゝ、小歇もせざる雨の音の中に、彼の病憊れたるやうの柱時計は、息も絶氣に半夜を告げわたる時、兩箇が閨の燈は乍ち明かに耀けるなり。

彼等は倶に起出でゝ火鉢の前に在り。

「膳を持つて來ないか。」

「えゝ。」

女は幺微なる聲して答へけれど、打萎れて、なか〳〵立ちも遣らず。

「狹山さん、私は何だか貴方に言殘した事が未だ有るやうな心持がして……………………。」

「吁、もう恁う成つちやお互に何も言はないが可い。言へば猶且未練が出る。」

彼は熟と內向きて、目を閉ぢたり。

「貴方、その指環を私のと取替事して下さいね。」

「然うか。」

各其の手に在るを拔きて、男は實印用のを女の指に。女はダイアモンド入のを男の指に、揷し了りても仍離れかねつゝ、物は得言はで居たり。

颯と鳴りて雨は一時繁く灑ぎ來れり。

「あゝ、大相降つて來た。」

「貴方は不斷から雨が所好だつたから、屹度それで……暇……乞に降つて來たんですよ。」
「好い折だ。あの雨を肴に……お靜、もう覺悟を爲ろよ！」
「あ……あい。狹山さん、それぢや私も……覺……悟したわ！」
「酒を持つて來な。」
「あい。」
お靜も今は心を勵して、宵の程誂へ置きし酒肴の床間に上げたるを持來て、兩箇が中に膳を据れば、男は手早く燗して、其間に各服を更むる忙しさは、忽ち衣の擦り、帶の鳴る音高く綷䌨と亂れ合ひて　轉た雨濃なる深夜を驚かせり。
「えゝ、もう好かない！」
帶緊めながら女は其端を振りて身悶せるなり。
「奈何したのだ。」

「何有ね、帶が這麼に結ばつて了つて。」

「帶が結ばつた？」

「あゝ！　あなた釋いて下さい、よう。」

「何か吉い事が有るのだ。」

「私は倘も遣損つて、耻でも曝すやうな事が有つちやと、それが苦勞に成つて耐らなかつたんだから、これでもう可いわ。」

「それは大丈夫だから安心するが可い。けれど、倘もだ、お靜、那樣事は無いとは念ふけれど、運惡く遲れたら、俺は屹度後から往くから——甚麼にしても往くから、恨まずに待つて居てくれ。よ、可…………可いか。」

銜と俯したるお靜は、男の膝を咬みて泣きぬ。

「其代り、偶としてお前が後になるやうだつたら、俺は死んでも…………魂は…………おまへの陰身を離れないから、必ず心變を…………す、するなよ、お靜。」

「那様事を言はないで、一處に……連れて……往つて……下さいよ。」
「一處に往くとも！」
「一處に！　一處に往きますよ！」
「さあ、それぢや此、此の世の……別に一盃飲むのだ。もう泣くな、お靜。」
「泣、泣かない。」
「さあ、那裏へ行つて飲まう。」
男は先づ起ちて、女の手を把れば、女は其手に縋りつゝ、泣く泣く火鉢の傍に座を移しても、仍離難なに寄添ひ居たり。
「猪口でなしに、その湯呑に爲やう。」
「然う。ぢや半分づゝ。」
熱燗の酒は烈々と薫じて、お靜が顫ふ手元より狹山が顫ふ湯呑に注がれ

ぬ。

女の最も悲かりしは、げに此の刹那の思なり。彼は人の爲に酒を佐るに媚ひし手も、胡や今宵の戀も命も、儚き夢歟、うたかたの水盃のみづからに、酌取らんとは想の外の外なりしを、唄にも似たる身の上哉と、漫に逼る胸の內、何に譬へん方もあらず。

男は燗の過ぎたるに口を着けかねて、少時手にせるまゝに眺め居れば、縱し今は憂くも苦しくも、久く住慣れし此世を去りて、永く返らざらんとする身にぞ、僅に一盃の酒に對するも、又哀別離苦の感無き能はざるなり。

念へ、彼等の逢初めし夕、互に意有りて銜みしも此酒ならずや。更に兩箇の影に伴ひて、人の情の必ず濃なれば、必ず芳かりしも此酒ならずや。其の戀中の樂を添へて、三歲の憂を霽せしも此酒ならずや。彼は其酒を取りて、吉き事積りし後の凶の凶なる今夜の末期に酬ゆるの、可哀

に餘り、可悲きに過るを觀じては、口にこそ言はざりけれど、玉成す涙は點々と散りて零れぬ。

「おまへの酌で飲むのも……今夜限だ。」

「狹山さん、私は這麼に苦勞を爲て置きながら、到頭一日でも……貴方と一處に成れずに、藝者風情で死んで了ふのが……悔しい、私は！」

聞くも苦しと、男は一息に湯呑の半を呷りて、

「さあ、お靜。」

女は何氣無く受けながら、思へば、別の盃乎と、手に取るからに胸潰れて、

「狹山さん、私は今更お禮を言ふと云ふのも、異な者だけれど、貴方は長い月日の間、私のやうな這麼不束者の我儘者を、能くも愛相を盡かさずに、深切に、世話をして下すつた。

私は今迄口にこそ出さなかつたけれど、心の内ぢや、狹山さん、嬉いなん

ぞと謂ふのは通り越して、實に難有いと思つて居ました。其の御禮を爲たいにも、知つて居る通の阿母さんが在るばかりに、唯然う思ふばかりで、奈何と云ふ事も出來ず、本當に可耻いほど行屆かないだらけで、これぢや餘り濟まないから、一日も早く所帶でも持つやうに成つて、然したら一度に此の恩返しを爲ませうと、私は、其ばかりを樂に、出來ない辛抱も爲て居たんだけれど、もう、今と成つちや何も彼も水……………水……………水の……………泡。

つい心易立から、浸々お禮も言はずに居たけれど、狹山さん、私の心は、然うだつたの。もう是限で、貴方も……………私も……………土に成つて了へば、又とお目にも掛れ、ないんだから、せめては、今改めて、狹山さん、私はお禮を申します。」

男は身をも搾らるゝばかりに怺へかねたる涙を出せり。

「もう那、那、那樣事……………言つて……………くれるな！　冥路の障だ。兩

箇が一處に死なれりや、それて不足は無いとして、外の事なんぞは念はずに、お靜、お互に喜んで死なうよ。」

「私は喜んで居ますとも。嬉いんですとも。嬉くなくて奈何しませう。此のお酒も、祝つて私は飲みます。」

涙諸共飲干して。

「あなた、一つお酌して下さいな。」

注げば又叩りて、其の餘せるを男に差せば、受けて納めて、手を把りて、顔見合せて、抱緊めて、惜めば逾よ盡せぬ名殘を、奈何にせばやと思惑へる互の心は、唯それなりに息も絶えよと祈る可かめり。

男は抱ける女の耳の恰も唇に觸るゝ時、現ともなく聲誘はれて、

「お靜、覺悟は可いか。」

「可いわ、狹山さん。」

「可けりや…………。」

「不如もう早く。」

狹山は直に枕の下なる袱紗包の紙入を取上げて、内より出せる一包の粉劑こそ、正に兩箇が絕命の刄に易ふる者なりけれ。女は二つの茶碗を置並ぶれば、玉の如き眞白の末は封を拔きて、男の手より其内に頒たれぬ。

「さあ、其酒を取つてくれ。お前のにも俺が酌をするから、俺のにもお前が。」

「あゝ可うござんす。」

雨は此時漸く霽れて、軒の玉水絕々に、怪禽鳴過る者兩三聲にして、跡松風の音颯々たり。

狹山は旋て銚子を取りて、一箇の茶碗に酒を澆げば、お靜は目を閉ぢ、合掌して、聞えぬほどの忍音に、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

代りて酌する彼の想は、吾手男の胸元に刺違ふる鎗を押當つるにも似た

る苦しさに、自から洩出づる聲も打震ひて、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無………阿彌陀………南無阿彌………

……陀………佛、南無…………。」

と兩箇は心も消入らんとする時、俄に屋鳴震動して、百雷一處に墮ちたる響に、男は顚れ、女は叫びて、前後不覺の夢歟現の人影は、乍ち顯れて燈火の前に在り。

「貴下方は、怪しからん事を！　可けませんぞ。」

男は漸く我に復りて、惧ぢ愕ける目を瞪き、

「あゝ！　貴方は、」

「お見覺ありませう、あれに居る泊客です。無斷にお座敷へ入つて參りまして、甚だ失禮ぢや御座いますけれど、實に危い所！　貴下方は奈何なすつたのですか。」

悄然として面を擧げざる男、其陰に半ば身を潛めたる女、貫一は兩箇の

姿を眗しつゝ、彼の答を待てり。

「勿論是にそ深い事情がお有んなさるのでせう。ですから込入つたお話は承はらんでも宜い、但何故に貴下方は活きて居られんてすか。それだけお聞せ下さい。」

「…………………………………………。」

「お二人が添ふに添れん、と云ふやうな事なのですか。」

男は甚だ微に頷きつ。

「然やうですか。而して其の添れんと云ふのは、何故に添れんのです。」

彼は又默せり。

「其の次第を伺つて、私の力で及ぶ事でありましたら、隨分御相談合手にも成らうかと、實は考へるので。然し、お話の上で到底私如きの力には及ばず、成程活きて居られんのは御尤だ、他人の私でさへ外に道は無い、と考へられるやうな其が事情でありましたら、私は決してお止め申

さん。是に居て、立派に死なれるのを拜見もすれば、介錯もして上げます。私も此間に入つた以上は、空く手を退く譯にも行かんのです。貴下方を拯ふ事が出來る乎、出來ん乎、那一箇です。幸に拯ふ事が出來たら、私は命の親。又出來なかつたら、貴下方は此世に亡い人。此世に亡い人なら、如何なる秘密を此て打明けた所が、一向差支無からうと私は思ふ。若し命の親とすればてす、猶更其者に裹み隱す事は無いぢやありませんか。私は何も洒落に貴下方のお話を聽かうと云ふのぢやありません、可うございますか、顯然と聽くだけの覺悟を持つて聽くのです。さあ、お話し下さい！」

第五章

貫一は氣を嚴肅にして逼れるなり。さては男も是非無げに聲出すべき力も有らぬ口を開きて、

「はい御深切に……………難有う存じます……………。」

「さあ、お話し下さい。」

「はい。」

「今更お裏みなさる必要は無からう、と私は思ふ。いや、つい私は申上げんて居つたが、東京の麹町の者で、間貫一と申して、辯護士です。恁云ふ場合にお目に掛るのは、好々是は深い御縁なのであらうと考へるのですから、決して貴下方の不爲に成るやうにと取計ひません。私も出來る事なら、人間兩箇の命を拯ふのですから、奈何にでもお助け申して、一生の手柄に爲て見たい。私は是程までに申すのです。」

「はい、段々御深切に、難有う存じます。」
「それぢや、お話し下さるか。」
「はい、お聴に入れますて御座います。」
「それは忝ない。」
彼は始めて心安う座を取れば、恐る惶る狹山は先づ其の姿を偷見て、
「何からお話し申まして宜しいやら……………。」
「いや、其の、何ですな、貴下方は添ふに添れんから死ぬと有仰る――何爲添れんのですか。」
「はい、實は私そ、恥を申しませんければ解りませんが、主人の金を大分遣ひ込みましたので御座います。」
「はあ、御主人持ですか。」
「然やうで御座います、私は南傳馬町の幸菱と申します紙問屋の支配人を致まして居りまして。狹山元輔と申しまする。又是は新橋に勤を致して

居ります者で、柏屋の愛子と申しまする。」
名宣られし女は、消えも遣らで居たりし人陰の闇きより僅に躪り出てゝ、面伏にも貫一が前に會釋しつ。
「はあ、成程。」
「然る所、昨今是に身請の客が附きまして、」
「あゝ、身請の？　成程。」
「否でも其方へ參らんければ成りませんやうな次第。又私は其の引負の爲に、主人から告訴致されまして、活きて居りますれば、其筋の手に掛りますので、如何にとも致方が御座いませんゆゑ、無分別とは知りつゝも、つい突迫めまして、面目次第も御座いません。」
彼等は其の無分別を愧ぢたりとよりは、此の死失ひし見苦しさを、天にも地にも曝しかねて、俯しも仰ぎも得ざる項を竦め、尚も爲ん方無さの目を閉ぢたり。

「はゝあ。然うすると爰に金さへ有れば、奈何にか成るのでせう！　貴方の費消だつて、其の金額を辨償して、宜しく御主人に詫びたら、無論內濟に成る事です。婦人の方は、先方で請出すと云ふのなら、此方でも請出す迄の事。而して、貴方の引負は若干許の額に成るのですか。」

「三千圓ほど。」

「三千圓。それから、身請の金は？」

狹山は女を顧みて、二言三言小聲に語合ひたりしが、

「何や彼やで八百圓ぐらゐは要りますので。」

「三千八百圓、それだけ有つたら、貴下方は死なずに濟むのですな。」

打算し來れば、眞に彼等の命こそ、一人前一千九百圓に過ぎざるなれ。

「それぢや死ぬのは充らんですよ！　三千や四千の金なら、隨分そこらに滾つて居やうと思ふ。就ては何とか御心配して上げたいと考へるのですが、先づ左に右貴下方の身の上を一番悉くお話し下さらんか。」

係る際にも如何ばかり嬉しき人の言ならんよ。彼は其の僞と眞とを思ふに遑らずして、遣る方も無き憂身の憂きを、冀くば跡も留めず語りて竭さんと、弱りし心は雨の柳の、漸く風に搖れたる勇を作して、

「はい、ついに一面識も御座いません私共、殊に痴情の果に箇樣な不始末を爲出来ました、何ともはや申しやうも無い爛死蛇に、段々と御深切のお心遣、却つて恥入りまして、實に面目次第も御座いません。折角の御言で御座いますから、思召に甘えまして、一通りお話致しますで御座いますが、何から何迄皆恥で、人樣の前では幾と申上げ兼ねますので御座います。

實は、只今申上げました三千圓の費消と申しますのは、究竟遊蕩を致しました爲に、店の金に手を着けました所、始の內は奈何なり融通も利きましたので、其が病付に成つて、段々と無理を致しまして、長い間に憺穴を開けましたのが、積り積つて大分に成りましたので御座います。

然る處、もう八方塞つて遣繰は付きませず、いよ〳〵主人にも知れますので、苦紛れに相場に手を出したのが怪我の元で、ちよろりと取られますと、さあ其だけ穴が大きく成りましたものですから、逾よ爲方御座いません、今度は奈何か、今度は奈何かで、もう然う成つては私も死物狂で、無理の中から無理を致して、續くだけ遣りました處が、到頭逐倒されて了ひまして、三千圓と申上げました費消も、半分以上は其に注込みましたので御座います。

然し、是だけの事で御座いますれば、主人も從來の勤勞に免じて、又奈何にも勘辨は致してくれましたので御座います。現に此の一條が發覺致しまして、主人の前に呼付けられました節も、此度の事は格別を以つて、赦し難い所も赦して遣ると、箇樣に申してはくれましたので。」

「成程?!」

「と申すのにも、少し又仔細が御座いますので。それは、主人の家内の

姪に當ります者が、內に引取つて御座いまして、之を私に妻せやうと云ふ意衷で、前々から其話は有りましたので御座いますが、どうも私は氣が向きませんもので、何と就かずに段々言延して御座いましたのを、決然奈何かと云ふ手詰の談に相成りましたので。究竟、費消は赦して遣るから、其者と一家內に持つて、と箇樣に主人は申すので御座います。」

「大きに。」

「其處にそ又千百〱事情が御座いまして、私の身に致しますと、其の緣談は實に辭るにも辭りかねる義理に成つて居りますので、其を不承知だなどゝ吾儘を申しては、なか〱濟む譯の者ではないので御座います。」

「あゝ、然うなのですか。」

「そこへ持つて參つて、此度の不都合で御座います、其さへ大目に見てくれやうと云ふので御座いますから、全で仇をば恩で返してくれますやうな、申分の無い主人の所計。其を乖きましては、私は罰が中りますの

で御座います。然うとは存じながら、猶且私の手前勝手で、如何にとも
其氣に成れませんので、已むを得ず縁談の事は拒絶を申しましたので御
座います。」

「うむ、成程。」

「其が爲に主人は非常な立腹で、然う吾儘を言ふのなら、費消を償へ、
其が出來ずば告訴する。然うしては貴様の躰に一生の疵が附く事だから、
思反して主人の指圖に從へと、中に人まで入れて、未だ〳〵申してくれ
ましたのを、何處までも私は剛情を張通して了つたので御座います。」

「吁！　其は貴方が惡いな。」

「はい、もう私の善い所は一つでも有るのぢや御座いません。其事に就
きまして、主人に書置も致しましたやうな次第で、既に覺悟を極めまし
た際まで、心懸と申すのは、唯其ばかりなので御座いました。で又其の
最中に是の方の身請騷が起りましたので。」

「成程(なるほど)！」

「是(これ)の母親(はゝおや)と申(まを)すのは養母(やうぼ)で御座(ござ)いまして、私も毎々(まい〳〵)話(はなし)を聞(き)いて居(を)りますが、隨分(ずゐぶん)それは非道(ひだう)な強慾(がうよく)な者(もの)で御座(ござ)います。まあ悉(くは)しく申上(まをしあ)げれば、長(なが)いお話(はなし)も御座(ござ)いますが、是(これ)も娘(むすめ)と申(まを)すのは名(な)のみで、年季(ねんき)で置(お)いた抱(かゝへ)も同樣(どうやう)の取扱(とりあつかひ)を致(いた)して、爲(し)て遣(や)る事(こと)は爲(し)ないのが德(とく)、稼(かせ)げるだけ稼(かせ)がせないのは損(そん)だと云(い)つたやうな了簡(れうけん)で、長(なが)い間(あひだ)無理(むり)な勤(つとめ)を爲(さ)せまして、散散(さん〴〵)に搾(しぼ)り取(と)つたので御座(ござ)います。

で、私の有(あ)る事(こと)も知(し)つては居(を)りましたが、近頃(ちかごろ)私が追々(おひ〳〵)廻(まは)らなく成(な)つて參(まゐ)つた所(ところ)から、さあ聒(やかま)しく言出(いひだ)しまして、毎日(まいにち)のやうに切(き)れろ〳〵で責(せ)め拔(ぬ)いて居(を)ります際(さい)に、今(いま)の身請(みうけ)の客(きやく)が附(つ)いたので御座(ござ)います。丁度(ちやうど)去年(きよねん)の正月頃(しやうぐわつごろ)から來出(きだ)した客(きやく)で、下谷(したや)に富山銀行(とみやまぎんかう)といふのが御座(ござ)います、他(あれ)の取締役(とりしまりやく)で、」

「え!?　何(なに)………何(なに)………何(なん)ですか！」

「御承知で御座いますか、那の富山唯繼と云ふ…………………。」
「富山？　唯繼！」
其の面色、其の聲音！　彼は言下に皷怒して、其名に躍り破らんとする勢を示せば、愛子は駭き、狹山は懼れて、何事とも知らず狼狽へたり。
貫一は轟く胸を推鎮めても、仍ほ眼色の燃ゆるが如きを、兩箇が顏に忙しく注ぎて、
「其の富山唯繼が身請の客ですか。」
「はい、然やうで御座いますが、貴方は御存じで被在いますので？」
「知つて居ます！　好く…………知つて居ます！」
狹山の打惑ふ傍に、女は密に驚く聲を放てり。
「那奴が身請の？」
問はるゝ愛子は、會釋して、
「はい、然やうなんで御座います。」

「で、貴方は彼に退かされるのを嫌つたのですな。」
「はい。」
「然すると、去年の始から貴方は他の世話に成つて居つたのですか。」
「私は那麼人の世話なんぞにも成りは致しません！」
「はあ？　然ですか。世話に成つて居たのぢやないのですか。」
「いゝえ、貴方。唯お座敷で始終呼れますばかりで。」
「あゝ、然ですか！　それぢや旦那に取つて居つたと云ふ譯ぢやないのですか。」
女は聞くも穢はしと、有繫謂ふにも謂れぬ尻目遣して、
「私にも、然云ふ事が出來ませんので、今迄ついにお客なんぞを取つた事は、全然無いんで御座います。」
「あゝ、然ですか！　うむ、成程……成程な……解りました、好く解りました。」

狹山は俯き居たり。

「それでは恁云ふのですな、貴方は勤を爲て居つても、外の客には出ずに、斯人一箇を守つて――然ですね、」

「さやうです。」

「而して、餘所の身請を辭つて――富山唯繼を振つたのだ！　然ですな。」

「はい。」

倏忽に瞳を凝せる貫一は、愛子の面を熟視して止まざりしが、旋て其眼の中に浮びて、輝くと見れ　霑ひて出づるものあり。

「嗚呼……感心しました！　實に立派な者です！　貴方は命を捨てゝも……斯人と……添ひたいのですか！」

何の故とも分かず彼の男泣に泣くを見て、兩箇は空く呆るゝのみ。

貫一が涙なる乎。彼は箇の色を賣るの一匹婦も、知らず誰か爾に教へて、死に抵るまで尚此の頼り難き義に頼り、守り難き節を守りて、終に奪は

れざる者あるに泣けるなり。
其の泣く所以なる乎。彼は斯の人の世に、然ばかり清く新しくも、崇く優しくも、高く麗しくも、又は、完くも大いなる者在るを信ぜざらんと爲るばかりに、一度は目前睹るを得て、其の倒懸の苦を寛うせん、と心窃くが如く望みたりしを、今却りて浮萍の底に沈める泥中の光に値へる卒爾の歡極まれゝばなり。

「勿論然う無けりや成らん事！　其が女の道と謂ふもので、然う有るべきです、然う有るべき事です。今日の此の輕薄極つた世の中に、迚も那樣心掛のある人間は、私は決して在るものではないと念つて居つた。で、倘し在つたらば、何のくらゐ嬉しからうと、然う念つて居つたのです。私は實に嬉しい！　今夜のやうに感じた事は有りません。私は此通泣いて居る――涙が出るほど嬉しいのです。私は人事とは思はん、人事とは思はん譯が有るので、別して深く感じたのです。」

恁く言ひて、貫一は忙々しく鼻洟打擤みつ。

「ふむ、それで富山は奈何しました。」

「來る度に何の彼のと申しますのを、躰好く辭るんで御座いますけれど、もう愁く來ちや、一頻なんぞは毎日揚詰に爲れるんで、私はふつ〳〵不好なんで御座います。それに、あの人が那で大の男自慢で、而して獨で利巧ぶつて、可恐い意氣がりで、二言目にも金々〳〵と、金の事さへ言へば人は難有がるものかと思つて、俺が恁と思や千圓出すとか、此へ一萬圓積んだら奈何するとか、始終那樣有餘るやうな事ばかり言ふのが癖だもんですから、衆が（御威光）と云ふ仇名を附けて了つて、何處へ行つたつて氣障がられて居る事は、そりや太甚いんで御座います。」

「あゝ、然うですか。」

「那樣風なんですから、躰好く辭つたぐらゐぢや、なか〳〵感じは爲ませんので、可けもしない事を不相變執煩く、何だ彼だ言つて居りました

けれど、這箇も剛情で思ふやうに行かないもんですから、了局にも手を易へて、內のお袋へ親談をして、內々話は出來たんで御座んせう。どうも那樣やうな樣子で、お袋は全で氣違のやうに成つて、さあ、私を責めて責めて、もう箸の上下にも言れますし、狹山と切れろ〳〵の聒しく成りましたのも、それからなので、私は辛さは辛し、熟く這麼家業は爲る者ぢやないと、何も解らずに面白可笑く暮して居た夢も全く覺めて、考へれば考へるほど、自分の身が餘り充らなくて、もう奈何したら可いんだらう、と欝ぎ切つて居る矢先へ、今度は身請と來たんで御座います。」

「うむ、身請――けれども、貴方を別に何爲たと云ふ事も無くて、直に身請と云ふのですか。」

「然うなので。」

「變な奴な！　然云ふ身請の爲方が、然し、有りますか。」

「まあ御座いませんです。」

「然うでせう。それで、身請をして他へ圍つて置かうとでも云ふのですか。」

「はい、是迄色々な事を申しても、私が聽きませんもんで、末始終氣樂に暮せるやうにして遣つたら、言分は無からうと云つたやうな譯で、まあ身請と出て來たんで。何ですか、今の妻君は、他は奈何だから、恁爲るとか、那爲るとか、好いやうな嬉しがらせを言つちや居りましたけれど。」

眉を昂げたる貫一、胡ぞ彼の心の裏に震ふものあらざらんや。

「妻君に就いて何云ふ話が有るのですか。」

「何んですか知りませんが、あの人の言ふんでは、其の妻君は、始終寐て居るも同樣の病人で、小供は無し、用には立たず、有つても無いも同然だから、其内に隱居でもさせて、私を内へ入れてやるからと、まあ然云つたやうな口氣なんで御座います。」

「而して、其は事實なのですか、妻君を隱居させるなどゝ云ふのは。」

「隨分ちやらつぽこを言ふ人なんですから、なか〳〵信にはなりは致しませんが、妻君の病身の事や、那樣這麽で餘り內の面白くないのは、どうも全く然らしいんで御座んす。」

「はゝあ。」

彼は遽に何をや打案ずらん、夢むる如き目を放ちて、

「折合が惡いですか！……………病身ですか！……………隱居をさせるのですか！……………あゝ……………然うですか！」

宮の悔、宮の恨、宮の歎、宮の悲、宮の苦、宮の愁、宮が心の疾、宮が身の不幸、噫、竟に是宮が一生の慘禍！　彼の思は今將た箇の憐むに堪へたる宮が薄命の影を追ひて移るなりき。

貫一は彼の生ける宮よりも、此の死なんと爲る女の幾許幸に且愚ならざる乎を思ひて、又躬の、先には己の愛する者を拯ふ能はずして、今却り

て得知らぬ他人に惠みて餘有る身の、幾許幸無くも又愚なる乎を思ひて、謂ふばかり無く悲めるなり。

時に愛子は話を繼ぎぬ。貫一は再び耳を傾けつ。

「那樣捫擇最中に、狹山さんの方が騷擾に成りましたんで、私の事はまあ奈何でも、爰に三千圓と云ふお金が無い日には、訴へられて懲役に遣られると云ふんですから、私は吃驚して了つて、唯もう途方に昧れて、是は一處に死ぬより外は無いと、其時直に然う念つたんで御座います。けれども、又考へて、背に腹は替へられないから、是は不如富山に譯を話して、それだけのお金を奈何にでも借りるやうに爲やう乎とも思つて見まして、狹山さんに話しました所、俺の身は奈何でも、お前の了簡ぢや、富山の處へ行くのが可い乎、死ぬのが可い乎、と恁う申すので御座いませう。」

「うむ、大きに。」

「私は那麼奴に自由に爲れるのは扨置いて、是迄の縁を切るくらゐなら、死んだ方が愈だと、初中終言つて居りますんですから、那麼奴に身を委せるの丶不好は知れて居ます。」

「うむ、然とも。」

「然なんですけれど金ゆゑで兩箇が今死ぬのも餘り悔しいから、三千圓屹度出すか、出さないか、それは分りませんけれど、倘出したらば出さして、何有私は那裏へ行つたつて、直に逃げて來さへすりや、切れると云ふんぢやなし、少の間不好な夢を見たと思へば、それでも死ぬよりは愈だらう、と私は然う申しますと、狹山さんは、其は詐取だ…………。」

「其は詐取だ！　然とも。」

恰も我名の出でしまゝに、男は之より替りて陳べぬ。

「詐取で御座いますとも！　情婦を種に詐取を致すよりは、費消の方が罪は夐に輕う御座います。那樣惡事を働いて迄も活きて居やうとは、私

は決して思ひは致しません。又これに致しましても、あれまで振り通した客に、今と成つて金ゆゑ躰を委せるとは、如何な事にも、餘り意氣地が無さ過ぎて、それぢや人間の皮を被つて居る効が御座りませんです。私は金に窮つて心中なんぞを爲た、と人に嗤れましても、情婦の躰を賣つたお蔭で、やう〳〵那奴等は助つて居るのだ、と一生涯言れますのは不好で御座います。那樣了簡が出ます程なら、兩箇の命ぐらゐ助ける方は外に幾多も御座いますので。

爰に活きて居やうと云ふにも、奈何でも此上の惡事を爲んければ成りませんので、迚も死ぬより外は無い！　私は死ぬと覺悟を爲たが、お前の了簡は奈何か、と實は私が申しましたので。」

「成程。そこで貴方が？」

「私は今更富山なんぞに何しやうと申したのも、究竟私ゆゑに那樣譯に成つた狹山さんが、奈何にでも助けたいばかりなんで御座いますから、

其人が死ぬと言ふのに、私一箇殘つて居たつて、爲樣が有りは致しません。貴方が死ぬなら、私も死ぬ――それぢや一處にと約束を致して、爰へ參つたんで御座います。」

「いや、善く解りました！」

貫一は宛然我が宮の情急に、誠壯に、凜たる其の一念の言を、夫の當時に聽くらん想して、獨り自ら胸中の躍々として痛快に堪へざる者あるなり。

正に是、垠も知らぬ失戀の沙漠は、濛々たる眼前に、麗しき一望のミレエジは清絕の光を放ちて、甚だ饒に、甚だ明かに浮びたりと謂はざらん哉。

彼は幾と此の女の宮ならざるをも忘れて、其の七年の憂憤を、今夜の今にして始て少頃も破除するの閒を得つ。信に得難かりし此の閒こそ、彼が宮を失ひし以來、唯之に易へて望みに望みたりし者ならずと爲んや。

嗚呼麗しきミレエジ！
貫一が久渇の心は激しく動されぬ。彼は聲さへ較震ひて、
「然う申しては失禮か知らんが、貴方の商賣柄て、一箇の男を熟と守つて、而して其人の落目に成つたのも見棄てず、一方にそ、身請の客を振つてからに、後來花の咲かうといふ躰を、男の爲にそ少しも惜まずに死なうとは、實に天晴なもの！　餘り見事な貴方の其の心掛に感じ入つて、私は……………涙が……………出ました。
貴方は、どうか生涯其の心掛を忘れずに居て下さい！　其心掛は、貴方の寶ですよ。又狹山さんの寶、則ち貴下方夫婦の寶なのです！
今後とも、貴方は狹山さんの爲にそ何日でも死んで下さい。何日でも死ぬと云ふ覺悟は、始終屹と持つて居て下さい。可う御座いますか。
千萬人の中から唯一人見立てゝ、此人はと念つた以上は、勿論其人の爲にそ命を捨てるくらゐの了簡が無けりや成らんのです。其の覺悟が無い

くらゐなら、始から念はん方が可いので、一旦念つたら骨が舍利に成らうとも、決して志を變へんと云ふのでなければ、色でも、戀でも、何でもないです！　て、若し好いた、惚れたと云ふのは上邊ばかりで、其實は移氣な、水臭い者とも知らず、這箇は一心に成つて思窮めて居る者を、いつか寐返を打れて、突放されるやうな目に遭つたと爲たら、其の棄てられた者の心の中は、甚麼だと思ひますか。」

彼の聲音は益す震へり。

「然云ふのが有ります！　私は世間に然云ふのゝ方が多いと考へる。那樣徒爾な色戀は、爲た者の不仕合、棄てた者も、棄てられた者も、互に好い事は無いのです。私は現に然云ふのを睹て居る！　睹て居るから、今貴下方が偕して一處に死ぬ迄も離れまいと云ふ迄に思合つた、其の滿足はどれ程で、又其のお互の仕合は、實に謂ふに謂はれん程の者であらう、と私は思ふ。

其に就けても、貴方の其の美しい心掛、立派な心掛、どうか其實は一生肌身に附けて、甚麼事が有らうとも、決して失はんやうに爲て下さい――可う御座いますか。而して、貴下方はお二人とも長く、です、毎も今夜のやうな此心を持つて、睦じく暮して下さい、私は其が見たいのです！

今は死ぬ所でない、死ぬにも及びません、三千圓や四千圓の事なら、私が奈何でも爲て上げます。」

聞訖りし兩箇が胸の內は、諸共に潮の如きものに襲はれぬ。未だ服さゞりし毒の俄に變じて、箇の藥と成れる不思議は、喜ぶとよりは愕かれ、愕くとよりは打惑はれ、惑ふとよりは怪まれて、鬼乎、神乎人ならば、如何なる人乎と、彼等は覺えず貫一の面を見据ゑて、更に其目を窃に合せつ。

四邊も震ふばかりに八聲の雞は高く唱へり。

夜すがら兩箇の運星を蔽ひし常闇の雲も晴れんとすらん、隱約と隙洩る曙の影は、玉の緒長く座に入りて、光薄るゝ燈火の下に並べるまゝの茶碗の一箇に、小さき蛾有りて、落ちて浮べり。

（三十六年六月）

新續金色夜叉

第一章

生れてより神佛を頼み候事とては一度も無御座候へども、此度ばかりはつく〴〵一心に祈念致し、吾命を縮め候代に、必ず此文は御目に觸れ候やうにと、それをば力に病中ながら筆取りまゐらせ候。幸に此の一念通じ候て、ともかくも御披せ被下候はゞ、此身は直に相果て候とも、つゆ憾には不存申候。元より御憎惡強き私にて候へども、何卒是は前非を悔いて自害いたし候一箇の愍なる女の、御前樣を見懸けての遺言とも思召し、せめて一通り御判讀被下候はゞ、未來までの御情と、何より嬉う嬉う存上げまゐらせ候。

扨とや、先頃は久々とも何とも、御生別とのみ朝夕に諦め居り候御顏を

拜し、飛立つばかりの御懷しさやら、言ふに謂れぬ悲しさやらに、先立つものは涙にて、十年越し思ひに思ひまゐらせ候事何一つも口にこそ出ず、あれまでにこそ樣々の覺悟も致し、また心苦しき御目もじの恥をも忍び、女の身にてこそやう／＼の思にて參じ候效も無く、誠に一生の無念に存じまゐらせ候。唯其折の形見にこそ、涙の隙に拜しまゐらせ候御姿のみ、今に目に附き候て旦暮忘れやらず、あらぬ人の顏までも御前樣のやうに見え候て、此頃は心も空に泣暮し居りまゐらせ候。

久しう御目もじ致さず候中に、別の人のやうに總て御變り被成候も、私にこそ何とやら悲しく、又殊に御顏の羸、御血色の惡さも一方ならず被爲居候は、如何なる御疾に候や、御見上げ申すも心細く存ぜられ候へば、折角御養生被遊、何は措きても御身は大切に御厭ひ被成候やう、くれぐれも念じ上候。それのみ心に懸り候餘、悲しき夢などをも見續け候へば、一入御案じ申上まゐらせ候

私事耻を耻とも思はぬ者との御さげすみを顧ず、先頃推して御許まで參じ候胸の內は、なか〳〵御目もじの上の辭にも盡し難くと存候へば、まして廻らぬ筆にそ故と何も記し申さず候まゝ、何卒々々宜しく御汲分被下度候。こやうに候へば、其節の御腹立も、罪ある身にそ元より覺悟の前とは申しながら、餘とや本意無き御別に、いとゞ思は愈り候て、歸りて後は頭痛み、胸裂るやうにて、夜の目も合はず、明る日よりは一層心地惡く相成、物を見れば唯涙こぼれ、何事とも無きに胸塞り、ふとすれば思迫めたる氣に相成候て、夜晝と無く劇く惱み候ほどに、四日目にそ最早起き居り候事も大儀に相成、午過より蓐に就き候まゝ、今日まで懶致候て、唯々懷しき御方の事のみ思續け候ては、みづからの儚き〳〵身の上を慨き、胸は愈よ痛み、目は見苦しく腫起り候て、今日は昨日より瘦衰へ申候。

かやうに思迫め候氣にも相成候上に、日每に闇の奧に引入れられ候やう

に段々心弱り候へば、疑も無く信心の誠顯れ候て、此の蓐に就き候が元にて、はや永からぬ吾身とも存候まゝ、何卒これまでの思出にと、たとひ命ある內こそ如何やうの御恨は受け候とも、今はの際にて御前樣の御膝の上にて心安く息引取り度くと存候へども、それも悈はぬ罪深き身に候上は、もはや再び懷しき懷しき御顏も拜し難く、猶又前非の御ゆるしも無くて、此儘相果て候事かと、諦め候より外無く存じながら、とてもとても諦めかね候苦しさの程は、此心の外に知るものも、喩ふるものも無御座候。是のみは御憎惡の中にも少は不愍と思召被下度、かやうに認め居り候內にも、淚こぼれ候て致方無く、覺えず麁相いたし候て、かやうに紙を汚し申候。御容し被下度候。

さ候へば私事如何に自ら作りし罪の報とは申ながら、かくまで散々の責苦を受け、かくまで十分に懺悔致し、此上は唯死ぬるばかりの身の可哀を、つゆほども御前樣にれ通じ候はて、これぎり空く相成候が、餘ヰ口

惜く存候故、一生に一度の神佛にも縋り候て、此文に私一念を巻込め、御許に差出しまゐらせ候。

返す〴〵も悔しき熱海の御別の後の思、又いつぞや田鶴見子爵の邸内にて圖らぬ御見致候而來の胸の內、其後途中にて御變り被成候荒尾様に御目に懸り、しみ〴〵御物語致候事など、先達而中冗うも〴〵差上申候毎度の文にて細に申上候へども、一通の御披せも無之やうに仰せられ候へば、何事も御存無きかと、誠に御恨しう存上候。百度千度繰返し候ても、是非に御耳に入れまゐらせ度存候へども、今此の切なく思亂れ居候折から、又假初にも此上に味氣無き昔を偲び候事は難堪く候故、こゝには今の今心に浮び候まゝを書續けまゐらせ候。

何卒餘所ながらも承はり度存上候は、長々御信も無く居らせられ候御前様の是迄如何に御過し被遊候や、さぞかし暴き憂世の波に一方ならぬ御艱難を遊し候事と、思ふも可恐しきやうに存上候を、やうも〴〵御めで

たう御障無う居らせられ、悲しき中にも私の喜は是一つに御座候。御前様の數々御苦勞被遊候間に、私とても始終人知らぬ憂思を重ね候て、此世にて苦みに生れ參り候やうに、唯儚く〳〵月日を送りまゐらせ候。吾身ならぬ者は、如何なる人も皆可羨しく、朝夕の雀鴉、庭の木草に至る迄、それ〴〵に幸ならぬは無御座、世の光に遠き囹圄に繫れ候惡人にても、罪ゆり候日の樂は有之候ものを、命有らん限は此の苦艱を脱れ候事慍はぬ身の悲しさは、如何に致候はゞ宜しきやら、御推量被下度候。申すも異な事に候へども、抑も始より私心にて何とも思はぬ唯繼に候へば、夫婦の愛情と申候ものは、十年が間に唯の一度も起り申さず、却て憎き仇のやうなる思も致し、其傍に居り候も口惜く、倩く疎み果て候へば、三四年前よりは別居も同じ有様に暮し居候始末にて、私事一旦の身の瀆も漸く今は淨く相成、益堅く心の操を守り居りまゐらせ候。先頃荒尾様より御譴も受け、さやうの心得は、始にて御前様に不實の上、今

又唯繼に不貞なりと仰せられ候へども、其始の不實を唯今思知り候ほどの愚なる私が、何とて後の不貞やら何やら辨へ申すべきや。愚なる者なればこそ人にも勾引され候て、歸りたき空さへ見えぬ海山の果に泣倒れ居り候を、誰一箇も憫みて救はんとは思召し被下候はずや。御前樣にも其の愚なる者を何とも思召し被下候はずや。愚なる者の致せし過も、並の人の過も、罪は同じきものに御座候や、重きものに御座候や。

愚なる者の癖に人がましき事申上候やうにて、誠に御恥しう存候へども、何とも〳〵心得難く存上候は、御前樣唯今の御身分に御座候。天地は倒に相成候とも、御前樣に限りてはと、今猶私は疑ひ居り候ほど驚入まゐらせ候。世に生業も數多く候に、優しき〳〵御心根にもふさはしからぬ然やうの道に御入り被成候までに、世間は鬼々しく御前樣を苦め申候か。田鶴見樣方にて御姿を拜し候後始て御噂承はり、私は幾日も〳〵泣暮し申候。これにて定て深き仔細も御座候はんと存候へども、玉と成り、瓦

と成るも人の一生に候へば、何卒昔の御身に御立返り被遊、私の焦れ居りまゐらせ候やうに、多くの人にも御慕れ被遊候御出世の程をば、偏に偏に願上まゐらせ候。世間にて隨分賢からぬ者の好き地位を得て、時めかし居り候も少からぬを見るにつけ、何故御前様にて然やうの善からぬ業を擇りに擇りて、折角の人に優れし御身を塵芥の中に御捨て遊被候や、殘念に〳〵存上まゐらせ候。

愚なる私の心得違さへ無御座候はゞ、始終御側にも居り候事とて、さやうの思立も御座候節に、屹度御諫め申候事も叶ひ候ものを、返らぬ愚痴ながら、私の淺はかより、みづからの一生を誤り候のみか、大事の御身までも世の廢り物に致させ候かと思ひまゐらせ候へば、何と申候私の罪の程かと、今更御申譯の致しやうも無之、唯そら可恐しさに消えも入度く存まゐらせ候。御免し被下度、御免し下被度、御免し被下度候。

私は何故富山に縁付き申候や、其氣にて相成申候や、又何故御前様の御

辭にも從ひ不申候や、唯今と相成候て考へ申候へば、覺めて悔しき夢の中のやうにて、全く一時の迷とも可申、我身ながら譯解らず存じまゐらせ候。二つ有るものゝ善きを捨て、惡きを取り候て、好んで箇樣の悲しき身の上に相成候は、よく／＼私に定り候運と、思出し候ては諦め居り申候。

其節御前樣の御腹立一層强く、私をば一打に御手に懸け被下候はゞ、なまじひに今の苦艱は有之間敷、又さも無く候はゞ、いつそ御前樣の手籠にいづれの山奧へも御連れ被下候はゞ、今頃は如何なる幸を得候事やらんなど、愚なる者はいつまでも愚に、始終愚なる事のみ考居り申候。嬉くも御赦を得、御心解けて、唯二人熱海に遊び、昔の濱邊に昔の月を眺め、昔の哀き御物語を致し候はゞ、其の心の内は如何に御座候やら、思ふさへ胸轟き、書く手も震ひ申候。今も彼の熱海に人は參り候へども、そのやうなる樂を持ち候ものは一人も有之まじく、其代にも又、私如き

可憐の跡を留め候て、其の一夜を今だに歎き居り候ものも決して御座あるまじく候。

世をも身をも捨て居り候者にも、猶肌身放さず大事に致候寶は御座候。それは御遺置の三枚の御寫眞にて、何見ても樂み候はぬ目にも、是のみは絶えず眺め候て、少しは憂さを忘れ居りまゐらせ候。いつも御寫眞に向ひ候へば、何くれと當時の事憶出し候中に、うつゝとも無く十年前の心に返り候て、苦しき胸も暫は涼しく相成申候。最も所好なるは御横顔の半身のに候へども、あれのみ色褪め、段々薄く相成候が、何より情無く存候へども、長からぬ私の寶に致し候間は仔細も有るまじく、亡き後にぞ棺の内に斂めもらひ候やう、母へは其を遺言に致候覺悟に御座候。ある女世に比無き錦を所持いたし候處、夏の熱き盛とて、差當り用無く思ひ候不覺より、人の望むまゝに貸與へ候後は、いかに申せども返さず、其内に秋過ぎ、冬來り候て、一枚の曠着さへ無き身貧に相成候ほどに、

いよ〳〵先の錦の事を思ひに思ひ候へども、今は何處の人手に渡り候とも知れず、日頃それのみ苦に病み、慨き暮し居り候折から、さる方にて計らず一人の美しき女に逢ひ候處、彼の錦をば華かに着飾り、先の持主とも知らず、貧しき女の前にて散々ひけらかし候上に、恥まで與へ候を、彼女は其身の過と諦め候て、泣く〳〵無念を忍び申候事に御座候が、其錦に深き思の繋り候ほど、これ見よがしに着たる女こそ、憎くも、悔しくも、恨しくも、謂はうやう無き心の內と察せられ申候。

先達而は御許にて御親類のやうに仰せられ候御婦人に御目に掛りまゐらせ候。每日のやうに御出で被成候て、御前樣の御世話萬事遊被候御方の由に候へば、後にて御前樣さぞ〳〵御大抵ならず御迷惑被遊候御事と、山々御察し申上候へども、一向さやうの御內合とも存ぜず、不躾に參上いたし候段は、幾重にも御詫申上まゐらせ候。

尙數々申上度存候事は胸一杯にて、此胸の內にて申上度事の外は何も無

御座候へば、書くとも〳〵盡き申間敷、殊に拙き筆に候へば、よしなき事のみくだ〳〵しく相成候て、いくらも大切の事をば書洩し候が思殘に御座候。惜しき〳〵此筆止めかね候へども、いつの限無く手に致し居り候事も叶ひ難く、折から四時の明近き油も盡き候て、手元暗く相成候まゝ、はや〳〵戀しき御名を認め候て、これまでの御別と致しまゐらせ候。

唯今の此の氣分苦しく、何とも難堪き樣子にては、明日は今日よりも病重き事と存候。明後日は猶重くも相成可申、さやうにて候へども、筆取る事相叶ひ候間は、臨終までの胸の內御許に通じまゐらせ度存候へば、覺束無くも何なりとも相認め可申候。

私事空しく相成候とも、決して餘の病にては無之、御前樣御事を思死に死候ものと、何卒々々御愍み被下、其段はゆめ〳〵詐にては無御座、みづから堅く信じ居候事に御座候。

明日は御前樣御誕生日に當り申候へば、わざと陰膳を供へ候て、私事も

共に御祝ひ可申上、嬉しきやうにも悲しきやうにも存候。猶くれ〴〵も朝夕の御自愛御大事に、幾久しく御機嫌好う明日を御迎へ被遊、ますます御繁榮に被爲居候やう、今は世の望も、身の願も、それのみに御座候。まづはあら〳〵かしこ。

五月二十五日　　　　　　　　おろかなる女ゟ

戀しき〳〵

生別の御方樣

まゐる

第二章

隣に養へる薔薇の香の烈しく薫じて、颯と座に入る風の、此の讀盡されし長き文の上に落つると見れば、紙は冉々と舞延びて貫一の身を繞り、猶も跳らんとするを、彼は徐に敷据ゑて、其膝に慵げなる面杖拄きたり。憎き女の文なんど見るも穢はしと、前にも皆焚棄てたりし貫一の、如何にして這回ばかりは終に打拆きけん、彼は其の手にせし始に、又は讀去りし後に、自ら其故を譲めて、自ら知らざるを愧づるなりき。

彼は旋て屈めし身を起ししが、又直ちに重きに堪へざらんやうの頭を支へて、机に倚れり。

綠濃かに生茂れる庭の木々の輕々なる燥氣と、近き邊に有りと有る花の薫とを打雜ぜたる夏の初の大氣は、太だ慢く動きて、其間に旁午する玄鳥の聲朗に、幾度か返しては遂に往きける跡の垣穂の、然らぬだに燃ゆ

るばかりなる滿開の石榴に、四時過の西日の夥しく輝けるを、彼は煩はしと目を移して、更に梧桐の涼しき廣葉を眺めたり。

文の主は恁れと祈るばかりに、命を捧げて神佛をも驚かしゝと書けるにあらずや。貫一は又、自ら何の故とも知らで、獨り之のみ披くべくもあらぬ者を披き見たるにあらずや。彼を絡へる文は猶解けて、巖に浪の瀉ぐが如く懸れり。

そのまゝに專と思入るのみなりし貫一も、漸く惱しく覺えて身動ぐと與に、此の文殼の埒無き樣を見て、良慌てたりげに左肩より垂れたるを取りて、二つに引裂きつ。さて其の一片を手繰らんと爲るに、長きこと帶の如し。好き程に裂きては累ね、累ぬれど、皆積みて一冊にも成りぬべし。

恁る間も彼は自と思に沈みて、其の動す手も怠く、裂きては一々讀むかとも目を凝しつゝ、良有りて裂了りし後は、恰も劇しき力作に勞れたら

んやうに、弱々と身を支へて、長き項を垂れたり。

然れど久しきに勝へずやありけん、卒に起たんとして、彼の文殻の委きたるを取上げ、庭の日陰に歩出でゝ、一歩に一たび裂き、二歩に二たび裂き、木間に入りては裂き、花壇を繞りては裂き、留りては裂き、行きては裂き、裂きて〳〵寸々に作しけるを、又引捩りては歩み、歩みては引捩りしが、はや行くも苦しく、後樣に唯有る冬青の樹に寄添へり。

折から縁に出來れる若き女は、結立の圓髷涼しげに、襷掛の惜くも見ゆる眞白の濡手を彈きつゝ、座敷を覗き、庭を窺ひ、人見付けたる會釋の笑を銜と浮べて、

「旦那樣、お風呂が沸きましたが、」

此の姿好く、心信かなるお靜こそ、僅にも貫一が此頃を慰むる一の唯一の者なりけれ。

(二)の二

浴すれば、下立ちて垢を流し、出づるを待ちて浴衣を着せ、鏡を据るまで、お靜は等閑ならず手一つに扱ひて、數ならぬ女業の効無くも、身に稱はん程は貫一が爲にと、明暮を唯其のみに委ぬるなり。然れども、彼は別に奧の一間に己の助くべき狹山あるをも忘るべからず。そは命にも換ふる人なり。又然れども、彼と我との命に換ふる大恩を此の主にも負へるなり。如此く孰れ疎ならぬ主と夫とを同時に有てる忙しさは、盆と正月との併せ來にけんやうなるべきをも、彼は仍未だ覺めやらぬ夢の中にて、其の夢心地にも、如何なる事も難しと爲るに足らずと思へるならん。寔に彼は然も思へらんやうに勇み、喜び、誇り、樂める色あり。彼の面は爲に謂ふばかり無く輝ける程に、常にも愈して妖艶に見えぬ。

浴後を涼み居る貫一の側に、お靜は習々と團扇の風を送り居たりしが、

縁柱に靠れて、物をも言はず勞れたる彼の氣色を左瞻右視て、
「貴方、大變にお顏色がお惡いぢや御座いませんか。」
貫一は此言に力をも得たらんやうに、萎え頽れたる身を始て搖りつ。
「然うかね。」
「あら、然うかねぢや御座いませんよ、奈何あそばしたのです。」
「別に奈何も爲はせんけれど、何だか惓う氣が閉ぢて、惺然せんねえ。」
「惺然あそばせよ。麥酒でも召上りませんか、ねえ、然う被成いまし。」
「麥酒かい、餘り飲みたくもないね。」
「貴方そんな事を有仰らずに、まあ召上つて御覽なさいまし。折角私が冷して置きましたのですから。」
「それは狹山君が歸つて來て飲むのだらう。」
「何て御座いますって?!」
「いや、常談ぢやない、然うなのだらう。」

「狹山は、貴方、麥酒なんぞを戴ける今の身分ぢや御座いませんです。」
「那樣に窄く爲んでも可いさ、內の人ぢやないか。もつと氣樂に居てくれなくては困る。」
お靜は些と淚含みし目を拭ひて、
「此上の氣樂が有つて耐るものぢや御座いません。」
「けれども有物だから、所好なら飮んでもらはう。お前さんも克くのだらう。」
「はあ、私もお相手を致しますから、一盃召上りましよ。氷を取りに遣りまして――夏蜜柑でも剝きませう――林檎も御座いますよ。」
「お前さん飮まんか。」
「私も戴きますとも。」
「いや、お前さん獨で。」
「貴方の前で私が獨で戴くので御座いますか。而して貴方は？」

「私は飲まん。」

「ぢや見て被居るのですか。不好ですよ、馬鹿々々しい！　まあ何でも可いから、左も右も一盃召上ると成さいましよ、ね。唯今直に持つて參りますから、其處に被居いまし。」

氣輕に走り行きしが、程無く老婢と共に齎せる品々を、見好げに献立して彼の前に陳ぶれば、有繫に他の老婆子が寂しき給仕に義務的吃飯を强ひらるゝの比にもあらず、良や難捨き心地もして、コップを取擧れば、お靜は慣れし手元に噴溢るゝばかり酌して、

「さあ、呷と其を召上れ。」

貫一は其半を盡して、先づ息へり。林檎を剝き居るお靜は、手早く二片ばかり剝ぎて、

「はい、お肴を。」

「まあ、一盃上げやう。」

「まあ、貴方――いゝえ、可けませんよ。些とお顔に出るまで二三盃續けて召上れよ。然すると幾らかお氣が霽れますから。」

「那樣に飲んだら倒れて了ふ。」

「お倒れなすつて宜いぢや御座いませんか。本當に今日は不好な御顏色で被居るから、それが愆う消えて了ふやうに、奮發して召上りましよ。」

彼は覺えず薄笑して、

「藥だつて然うは利かんさ。」

「奈何あそばしたので御座います。何處ぞ御躰がお惡いのなら、又無理に召上るのは可う御座いませんから。」

「躰は始終惡いのだから、今更驚きも爲んが………ぢや、もう一盃飲まうか。」

「へい、お酌。あゝ、餘りお見事ぢや御座いませんか。」

「見事でも可うんのかい。」

「いゝえ、お見事は結構なのですけれど、餘り又――頂戴…………あゝ恐入ります。」

「いや、考へて見ると、人間と云ふものは不思議な者だ。今迄不見不知の、實に何の緣も無いお前さん方が、恁して內に來て、狹山君は那して實躰の人だし、お前さんは優しく世話をしてくれる、私は決して他人のやうな心持は爲んね。それは如何なる事情が有つて恁う成つたにも爲よ那裏で逢はなければ、何處の誰だかお互に分らずに了つた者が、急に一處に成つて、貴方が奈何だとか、私が恁だとか、…………や、不思議だ！奈何か、まあ渝らず一生恁して附合を爲たいと思ふ。けれど、私は高利貸だ。世間から鬼か蛇のやうに謂れて、此上も無く擯斥されて居る高利貸だ。お前さん方も其の高利貸の世話に成つて居られるのは、餘り榮でも無く、然ぞ心苦しく思つて居られるだらう、と私は察して居る。のみならず、人の生血を搾つて迄も、非道な貨を殖えるのが家業の高利貸

が、縁も所因も無い者に、設ひ幾らでも、そらほど大事の金をおいそれと出して、又躰まで引取つて世話を爲ると云ふにも、何か可恐い下心でもあつて、それも獨且慾德渾成で恩を被せるのだらうと、內心ぢや甚麽にも無氣味に思つて居られる事だらう、と其も私は察して居る。さあ、コップを空けて、返して下さい。」

「召上りますの？」

「飲む。」

酒氣は稍彼の面に上れり。

「お靜さんは奈何思ふね。」

「私共は固より命の無い處を、貴方のお蔭ばかりで助つて居りますので御座いますから、私共の躰は貴方の物も同然、御用に立ちます事なら、甚麽にでも遊してお使ひ下さいまし。狹山も那樣に申して居ります。」

「忝ない。然し、私は天引三割の三月縛と云ふ躍利を貸して、暴い稼を

爲て居るのだから、何も人に恩などを被せて、其を種に錢儲を爲るやうな、廻り迂い事を爲る必用は、まあ無いのだ。だから、どうぞ決して那樣懸念は爲て下さるな。又私の了簡では、元々些の醉興で二人の世話を爲るのだから、究竟そちらの身さへ立つたら、それで私の念は屆いたので、其念が屆いたら、もう剩錢を貰はうとは思えんのだ。と言つたらば、情無い事にそ、私の家業が家業だから、鬼が念佛でも言ふやうに、お前さん方は愈よ怪く思ふかも知れん――いや、屹度然う思つて居られるに違無い。殘念なものだ！」

彼は長吁して、

「それも惡木の蔭に居るからだ！」

「貴方、決して私共が那樣事を夢にだつて思ひは致しません。けれども那樣に有仰いますなら、何か私共の致しました事がお氣に障りましたので御座いませう。恁云ふ何も存じません粗才者の事で御座いますから、」

「いゝや、…………。」
「いゝえ。私は始終言はれて居ります狹山に濟みませんですから、どうぞ行届きません所は、」
「いゝや、然云ふ意味で言つたのではない。今のは私の愚痴だから、然う氣に懸けてくれては甚だ困る。」
「ついに那樣事を有仰つた事の無い貴方が、今日に限つて今のやうに有仰ると、日頃私共に御不足がお有なすつて、」
「いや、惡かつた、私が惡かつた。なかなか不足どころか、お前さん方が陰陽無く實に善く氣を着けて、親身のやうに世話してくれるのを、私は何より嬉しく思つて居る。往日話した通り、私は身寄も友達も無いと謂つて可いくらゐの獨法師の軆だから、氣分が惡くても、誰一人藥を飲めと言つてくれる者は無し、何彼に就けて其は心細いのだ。然云ふ私に、醉いで居るから酒でも飲めと、無理にも勸めてくれる其の深切は、枯木

爲て居るのだから、何も人に恩などを被せて、其を種に錢儲を爲るやうな、廻り迂い事を爲る必用は、まあ無いのだ。だから、どうぞ決して那樣懸念は爲て下さるな。又私の了簡では、元々些の醉興で二人の世話を爲るのだから、究竟そちらの身さへ立つたら、それで私の念は屆いたので、其念が屆いたら、もう剩錢を貰はうとは思はんのだ。と言つたらば、情無い事にそ、私の家業が家業だから、鬼が念佛でも言ふやうに、お前さん方は愈よ怪く思ふかも知れん――いや、屹度然う思つて居られるに違無い。殘念なものだ！」

彼は長吁して、

「それも惡木の蔭に居るからだ！」

「貴方、決して私共が那樣事を夢にだつて思ひは致しません。けれども那樣に有仰いますなら、何か私共の致ましました事がお氣に障りましたので御座いませう。愆云ふ何も存じません粗才者の事で御座いますから、」

「いゝや、…………。」

「いゝえ、私は始終言はれて居ります狹山に濟みませんですから、どうぞ行届きません所は、」

「いゝや、然云ふ意味で言つたのではない。今のは私の愚痴だから、然う氣に懸けてくれては甚だ困る。」

「ついに那様事を有仰つた事の無い貴方が、今日に限つて今のやうに有仰ると、日頃私共に御不足がお有なすつて、」

「いや、惡かつた、私が惡かつた。なか〳〵不足どころか、お前さん方が陰陽無く實に善く氣を着けて、親身のやうに世話してくれるのを、私は何より嬉しく思つて居る。往日話した通り、私は身寄も友達も無いと謂つて可いくらゐの獨法師の躰だから、氣分が惡くても、誰一人藥を飲めと言つてくれる者は無し、何彼に就けて其は心細いのだ。然云ふ私に、鬱いで居るから酒でも飲めと、無理にも勸めてくれる其の深切は、枯木

に花が咲くやうな心持が、いえ、嘘でも何でも無い。さあ、嘘でない信に一獻差すから、其積で受けてもらはう。」

「はあ、是非戴かして下さいまし。」

「あゝ、もう是にも無い。」

「無ければ嘘なので御座いませう。」

「未だ半打の上有るから、他を皆注いで了はう。」

「可うございますね。」

貫一が老婢を喚ぶ時、お靜は逸早く起ち行きけり。

(二)の三

話頭は酒を更むると與に轉じて、

「それはまあ考へて見れば、隨分主人の面でも、友達の面でも、踏躙つて、取る事に於ては見界なしの高利貸が、如何に虫の居所が善かつたからと云つて、人の難儀――にも附込まうとも――それを見かねる風ぢやないのが、何で那麼格にも無い氣前を見せたの乎と、是は不審を立てられるのが當然だ。

けれども、ねえ、いづれ其譯が解る日も有らうし、又私といふ者が、何う云ふ人間であるかと云ふ事も、今に必ず解らうと思ふ。其が解りさへしたら、此上人の十人や二十人、私の有金の有丈は、助けやうが、惠まうが、少も怪む事は無いのだ。恁云ふと何か酷く偉がるやうで、聞辛いか知らんけれど、是は心易立に、全く奥底の無い所をお話するのだ。

いや然う考込まれては困る。陰氣に成つて可かんから、話はもう罷に爲う。而してもつと飲み給へ、さあ。」

「いゝえ、どうぞお話をお聞せなすつて下さいまし。」

「肴に成るやうな話なら可いがね。」

「始終狹山とも然う申して居るので御座いますけれど、旦那樣は御病身と云ふ程でも無いやうにお見受申しますのに、いつも慿う御元氣が無くて、お險しいお顏面ばかりなすつて被居るのは、何云ふものか知らんと、陰ながら御心配申して居るので御座いますが、」

「これでお前さん方が來てくれて、内が賑かに成つた丈、私も舊から見ると餘程元氣に成つゝのだ。」

「でも其より御元氣がお有なさらなかつたら、まあ甚麼でせう。」

「死んで居るやうな者さ。」

「奈何あそばしたので御座いますね。」

「やはり病氣さ。」

「何云ふ御病氣なので。」

「欝ぐのが病氣で困るよ。」

「何爲て然うお欝ぎあそばすので御座います。」

貫一は自ら嘲りて苦しげに哂へり。

「畢竟病氣の所爲なのだね。」

「ですから何云ふ御病氣なのですよ。」

「どうも欝ぐのだ。」

「解らないぢや御座いませんか！　欝ぐのが病氣だと有仰るから、何爲てお欝ぎ遊ばすのですと申せば、病氣で欝ぐのだつて。それぢや何處まて行つたつて、同じ事ぢや御座いませんか。」

「うむ、然うだ。」

「うむ、然うだぢやありません、緊りなさいましよ。」

「あゝ、もう醉つて來た。」

「あれ、未だお醉ひに成つては可けません。お横に成ると御寐に成るから、お起きなすつて居らっしやいまし。さあ、貴方。」

お靜は寄りて、彼の肘杖に横はれる背後より扶起せば、爲ん無げに柱に倚りて、女の方を見返りつゝ、

「此を富山唯繼に見せて遣りたい！」

「あゝ、舍して下さいまし！名を聞いても慄然とするのですから。」

「名を聞いても慄然とする？　然う、大きに然うだ。けれど、又考へて見れば、他に罪が有る譯でも無いのだから、然して憎むにも當らんのだ。」

「えゝ、些の太好かないばかりです！」

「それぢや餘り差はんぢやないか。」

「那麼奴は那箇だつて可いんでさ。第一活きて居るのが間違つて居る位のものです。

本當に世間には不好な奴ばかり多いのですけれど、貴方、何云ふ者でせう。三千何百萬とか、四千萬とか、何でも太した人數が居るのぢや御座いませんか、それならもう少し氣の利いた、肌合の好い、嬉しい人に擡見しさうなものだと思ひますのに、一向お目に懸りませんが、ねえ。」
「然う、然う、然う！」
「而して富山見たやうな那麼奴がまあ紛々然と居て、番狂せを爲て行くのですから、それですから、一日だつて世の中が無事な日と云つちや有りは致しません。奈何したら那麼にも氣障に、太好かなく、厭味たらしく生れ付くのでせう。」
「おう〳〵、富山唯繼散々だ。」
「あゝ、もう那麼奴の話をするのは馬鹿々々しいから、貴方、舍しませうよ。」
「それぢや恁云ふ話が有る。」

「はあ。」
「一體男と女とでは、だね、那箇が情合が深い者だらう乎。」
「あら、何爲で御座います。」
「まあ、何爲でも、お前さんは奈何思ふ。」
「それは、貴方、女の方が甚麼に情が、」
「深いと云ふのかね。」
「はあ。」
「信にならんね。」
「へえ、信にならない證據でも御座いますか。」
「成程、お前さんは別かも知れんけれど、」
「可う御座いますよ！」
「いゝえ、世間の女は然でないやうだ。それと云ふが、女と云ふ者は、慮が淺いからして、奈何しても氣が移り易い、是から心が動く――不實

を不實とも思はんやうな了簡も出るのだ。」
「それはもう女は淺捗な者に極つて居ますけれど、氣が移るの何のと云ふのは、依樣本當に惚れて居ないからです。心底から惚れて居たら、些も氣の移る所は無いぢや御座いませんか。善く女の一念と云ふ事を申しますけれど、思窮めますと、男よりは女の方が餘計夢中に成つて了ひますとも。」
「大きに然云ふ事は有る。然し、本當に惚れんのは、奈何だらう、女が非いの乎。それとも男の方が非いの乎。」
「大變難しく成りましたのね。然ですね、それは那箇乎が非い事も有りませう、又女の性分にも由りますけれど、一概に女と云つたつて、一つは齢に在るので御座いますね。」
「はあ、齢に在ると云ふと？」
「私共の商買の者は善く然う申しますが、女の惚れるにそ、見惚に、氣

惚に、底惚と、恁う三樣有つて、見惚と云ふと、些と見た所で惚込んで了ふので、是は十五六の赤襟盛に在る事で、唯奇麗事でありさへすれば可いのですから、全で酸いも甘いもあつた者ぢやないのです。それから、十七八から廿そこ〳〵の處は、少し解つて來て、生意氣に成りますから、顏の好いのや、扮裝の奇なのなんぞにも餘り迷ひません。氣惚と云つて、樣子が好いとか、氣合が嬉しいとか、何とか、那樣處に目を着けるので御座いますね。ですけれど、未だ〳〵猶且浮氣なので、此人も好いが、又那人も萬更でなかつたりなんぞして、究竟お肚の中から惚れると云ふのぢやないのです。何でも廿三四からに成らなくては、心底から惚れると云ふ事は無いさうで。それからが本當の味が出るのだとか申しますが、那樣ものかも知れませんよ。此齡に成れば、曲りなりにも自分の了簡も据り、世の中の事も解つて居ると云つたやうな勘定ですから、いくら洒落氣の奴でも、然う〳〵上調子に遣つちや居られるものぢやありません、

其處は何と無く深厚として來るのが人情ですわ。係うなれば、貴方、十人が九人までは滅多に氣が移るの、心が變るのと云ふやうな事は有りは致しません。あの（赤い切掛け島田の中は）と云ふ唄の文句の通、惚れた好いたと云つても、若い內は奈何したつて心が一人前に成つて居ないのですから、猶且それだけで、爲方の無いものです。と言つて、お婆さんに成つてから、やいの〳〵言れた日にや、殿方は御難ですね。」

お靜は一笑してコップを擧げぬ。貫一は連に頷きて、

「誠に面白かつた。見惚に氣惚に底惚か。齡に在ると云ふのは、是は大きに然うだ。齡に在る！　確に在るやうだ！」

「大相感心なすつて被居るぢや御座いませんか。」

「大きに感心した。」

「ぢや屹度胸に中る事がお有なさるので御座いますね。」

「はゝはゝはゝは。何爲。」

「でも感心あそばし方が凡て御座いませんもの。」
「はゝはゝは。愈よ面白い。」
「あら、然なので御座いますか。」
「はゝはゝ。然なのとは奈何なの？」
「まあ、然なのですね。」
彼は故に瞪れる眼を凝して、貫一の醉ひて赤く、笑ひて綻べる面の上に、或者を索むらんやうに打矚れり。
「然ざつたら奈何かね。はゝはゝはゝ。」
「あら、それぢや愈よ然なので御座いますか！」
「はゝはゝはゝはゝは。」
「可けませんよ、笑つてばかり被居つたつて。」
「はゝはゝはゝ。」

第三章

惜くもなき命は有り候ものにて、はや其より七日に相成候へども、猶日毎に心地苦しく相成候やうに覺え候のみにて、今以つて此世を去らず候へば、未練の程の御つもらせも然ぞかしと、口惜くも御耻しう存上參らせ候。御前樣にも追々暑に向ひ候へば、いつも夏まけにて御惱み被成候事とて、此頃は如何に御暮し被遊候やと、一入御案じ申上參らせ候。

私事人々の手前も有之候故、儀ばかりに醫者にも挂り候へども、もとより藥などは飲みも致さず、皆打捨て申候。御存じの此疾は決して書物の中にも載せて在るまじく存候を、醫者は譯無くヒステリイと申候。是もヒステリイと申候外は無きかも不存申候へども、自分にも廣き世間に比無き病の外の病とも思居り候ものを、さやうに有觸れたる名を附けられ候は、身に取りて誠に〱無念に御座候。

晝の中は頭重く、胸閉ぢ、氣疲劇しく、何を致候も太儀にて、別けて人に會ひ候が懲く、誰にも一切口を利き不申、唯獨り引籠り居り候て、空く時の經ち候中に、此命の絕えず些づゝ弱り候て、最期に近く相成候が自から知れ候やうにも覺え申候。

夜に入り候ては又氣分變り、胸の內俄に冱々と相成、なか〳〵眠り居り候空は無之、かゝる折に人は如何やうの事を考へ候ものと思召被成候や、又其人私に候はゞ何と可有之候や、今更申上候迄にも御座候はねば、何卒宜しく御判じ被遊度、夜一夜其事のみ思續け候て、毎夜寐もせず明しまゐらせ候。

然りながら、何程思續け候とても、水を覓めて逾よ焰に燃かれ候に等しき苦艱の募り候のみにて、いつ此責を免るゝともなく存へ候は、孱弱き女の身には、餘に〳〵難忍き事に御座候。猶々此のやうの苦しき思を致候て、惜むに足らぬ命の早く形付き不申るやうにも候はゞ、いつそ自害致

候てなりと、潔く相果て候が、遙に愈と存付き候へば、萬一の場合にて、然やうの事にも可致と、覺悟極めまゐらせ候。さま〴〵に諦め申候へども、此の一事は迚も思絶ち難く候へば、私相果て候迄にて是非々々一度、如何に致候ても推して御目もじ相願ひ可申と、此頃は唯其事のみ一心に考居り申候。昔より信仰厚き人達は、現に神佛の御姿をも拜み候やうに申候へば、私とても此の一念の力ならば、決して愜はぬ願にも無御座と存參らせ候。

（三）の二

昨日は見舞がてらに本宅の御母様参られ候。是は一つも唯繼事近頃不機嫌にて、とかく内を外に遊びあるき居り候處、兩三日前の新聞に善からぬ噂出で候より、心配の餘樣子見に参られ候次第にて、其事に就き私へ懇々の意見にて、唯繼の放蕩致候は、畢竟内のおもしろからぬ故と、日頃の事一々誰が告げ候にや、可恥しき迄に皆知れ候て、此後は何分心を用ゐくれ候やうにと被申候。私事其節一思ひに不法の事を申掛け、愛相を盡され候やうに致し、離縁の沙汰にも相成候はゞ、誠に此上無き幸と存付き候へども、此姑と申候人は、評判の心掛善き御方にて、殊に私をば娘のやうに思ひ、日頃の厚き情は海山にも喩へ難きほどに候へば、なかなか辭を返し候段にては無之、心弱しとは思ひながら、涙の零れ候ばかりにて、無據身の不束をも詫び申候次第に御座候。

此命御前樣に捨て候ものに無御座候はゞ、外にも此人の爲に捨て申可と存候。此の御方を母とし、御前樣を夫と致候て暮し候事も相叶ひ候はゞ、私は土間に寐ね、蓆を絡ひ候ても、其樂は然ぞやと、常に及ばぬ事を戀しく思居りまゐらせ候。私事相果て候はゞ、他人にて眞に悲みくれ候は、此世に此の御方一人に御座あるべく、第一然やうの人を欺き、然やうの情を餘所に致候私は、如何なる罰を受け候事かと、悲く〳〵存候に、はや淺ましき死樣は知れたる事に候へば、外に私の願の障とも相成不申やと、始終心に懸り居り申候。

思へば、人の申候ほど死ぬる事は可恐しきものに無御座候。私は今が今此儘に息引取り候はゞ、何よりの仕合と存参らせ候。唯後に遺り候親達の歎を思ひ、又我身生れ効も無く此世の緣薄く、かやうに今在る形も直に消えて、此筆、此硯、此指環、此燈も此居宅も、此夜も此夏も、此の蚊の聲も、四圍の物は皆永く殘り候に、私獨り亡きものに相成候て、人

にて草花の枯れたるほどにも思はれ候はぬ儚さなどを考へ候へば、返す返す情無く相成候て、心ならぬ未練も出で申候。

（三十五年四月一日）

煙霞療養

第一章

筆だに投ずれば必ず愈ると云ふのが、己の持病であつた。例に因つて其の筆を投じたが、驗が無い、服藥をゑたが、それでも驗の無いのは、此の四月以來の鬱々樂まざる病。神經衰弱との診斷で、之を治するは、煙霞に如く無しとの處方であつたのを、出億劫に牽されて、等閑にするではなかつたが、差當つて心地死ぬべく覺ゆるのでもない所から、風待をゑて居るやうに、今日明日と五十日約も過した。或日入湯中に、其の瘦せたことは、馬車馬の胴を見るやうに、肋骨が一枚々々露れてゐるのを發見したので、恁では苦い藥の簡畧を捨てゝ、熱い旅の億劫をも取らねばならぬ、と實は即夜に決心したのである。

抑も己の出億劫と云ふは、不精の故であるのか、繁用の故か、閉戸讀書の癖ある故か、臆病の故か、父母在すが故か、妻子の可愛き故か、杖頭に挂くる物無き故か、山水を樂まざる故か、と謂ふに皆非なりで、己の最も好まぬのが、汽車に乘るので。其の甚しい事は、既に停車場に入るさへ不快を感ずるくらゐ、三十分間以上車內に据らるゝのは、一種の苦痛なるのである。然ればと謂つて、此便を假らずに百里の道を行くほどの醉興も無い。新潟なる親戚は、己の病を聞いて來遊を勸むること再三に及ぶのであつた。

上野から沼垂迄は二七〇哩二三鎖、之を時に爲れば、直江津迄が十二時間、此に一泊して、沼垂迄六時間。己は寧ろ此の發着表を見て心地死ぬべく覺ゆるのである。然し此表を見て懼れた乎、己の肋を見て懼れた乎、と謂へば論は無い、强て「赤脚にして層氷を蹈まん」と吟じて、雪の越路と志したのである。

偖いよ〳〵出るとなると、爰に又一件の億劫を助くる事が有る。それは俗に云ふ彼の降性で、遠行すれば必ず雨に逢つて惱されると云ふのが、前世の宿因などのやうに己に祟つてゐるので。門出は七月一日の午前六時(上野發)と決すると、實に嘘のやう！　約そ一箇月餘も照續いて置きながら、其の前夜の月は忽ち暈を被て了つた。

家内は「又雨ですよ」と言ふから、己は「ふん、又雨だ」と言つた。雨でも槍でも持つて來い！　既に六年此方出億劫の羈を斷つて、神經衰弱の進まぬ駒に策つほどの覺悟の上は、迅雷風烈と雖も蹈破つて通るのだと、簾を捲いて落ちかゝる月を罵りながら、七碗の熱茶を傾けて、己に災せんとする曉の到るを待つ内に、雨は破落ついて來る。程無く明れば、如何に爲たのか一天拭へる如き快晴。這は忝しと、大に勇を作してステエションへ飛すと、何事か有ると見えて、群集が洶々として居る。入つて見ると大變が有る。出札口に揭示して、水害の爲線路毀損に付田

口驛以北は不通の事、と飽くまで祟つて居るのであつた。出は出たものの是ては雨より始末が惡い。とても直江津泊と期したのであるから、其の近處まで踏出たいものであるが、何とか禍を轉じて福と作す工夫は有るまいか、と鐵道案內の一〇二頁と云ふのを見ると、田口驛の項に（赤倉溫泉あり）と志てある。夙て聞及ぶ勝地であれば、此に休息中線路を修繕させて然る可し、と意氣頓に北越鐵道を呑んで、さあ機嫌が好いと句の吐きたい癖。

夏瘦の藥採りにまかる日和下駄

と書いた手帳の端を引裂いて、見送に立つた紫明、斜汀の兩生に投付けて發車志た。

第二章

前夜から仕込をゑたサンドキッチが少く臭を發した事、熊谷堤を横目に見ながら、御家寶を噬つた事などは覺えてゐたが、彼の月を罵るので徹夜した一件で、餘は何も知らずに寐入つて了つて、高崎に着くと赤帽に起される始末。是から直ばかり高くて、車が穢くて、取扱が不深切と云ふ官線に移つたのであるが、名にし負ふ碓井峠のアブト式と云ふのは、初度の事であれば、一條鐵の峻坂を走るの妙は幾許のものならん、と睡を覺して窓に凭つてゐた。すると、松井田邊から又降出して、峠に掛る比は前巒後嶺雲漠々として、車の過る處山氣冷に、空翠濕ひて流るゝ趣は、氣韻先づ生動して、點染渲暈の未だ乾かざる水墨のパノラマ中に在るかと疑はれた。

夏ころも碓氷の雨の灑ぐ哉

又偲ばるゝ昔日本武尊東征の御師を旋して、此嶺に立せ給ひ、三び歎じて、吾嬬者耶と悲ませたまひし御事、其折憧れたまひし東南の空に方りて、恰も雲の搖曳するを見たれば、

いそのかみ古き碓日の雲の袖

風萬綠を度りて山の亂るゝ如きを衝いて進めば、乍ち晦くして幻燈の照さるること須臾、乍ち明にして岩走る水の木間に彩るなど、一逕一迎の變化を盡して、許多の隧道を過るのは、妙は乃ち妙であるが、通計二十六門の出入は、蓋し目眩しきに失する。

さて熊の平を下れば、川柳點の歌枕として聞えた（老の身も旅にしあれば――――）などゝ有る輕井澤に着く。續いて名所は、一中節に（肱で返事を

すが菰の、十に一つも言ふことを、聞いてもらへば遠山の）と唱はるゝ淺間ヶ岳を過ぎ、（我心なぐさめかねつ）と照る月ならぬ姨捨の雲間を洩るゝ日を眺めて、篠井越れば一騎撃、三枚續の川中島。長野は停車十九分、夫此許は（我待衆生心無間）と上は上宮太子に御返有り、下は牛角に布を掛けて、濟度の不思議を今に傳ふる、善光寺如來垂跡の靈場にて、此間始終俳諧師となり、畫人となり、史學家となり、大通となり、歌人となり、版木摺となり、信心者となる忙しさ。何彼と言ふ内はや五時も過ぎて田口に着く。

ステエション前の櫻やと云ふのに休憩して居ると、降りみ降らずみであつた空は全く掻曇つて、盛に降立てる。車の支度の出來る間雨中の斑尾山を簷端に看ながら澁茶を啜る風流は、坐に六年の門外不出を悔いて止まざらしむるのであつたが、顧みれば、其時身は既に（人類運搬車）の外に放免されて居たのである。

第三章

赤倉道は是から西に一里十町とあつて、妙高、神奈、赤倉の諸山を頭上に仰ぎつゝ、草深い坂路を後押付で挽上ぐるのである。

過る所は妙高、二俣の二ケ村、小田切、合田切の二谿、路は唯八重葎の茂れるばかりで、極めて風致に乏しいが、其の羊腸を踏み行くまゝに、件の山々は境に因りて變化し、處に隨ひて隱顯し、六千呎の雲表に態を盡して人を迎ふるのは憎からぬのであつた。雨は乍ち歇むと風か起つて、山腰の密雲を搖亂すと見る間に、妙高の巓近く一道の日光に照された濃綠の傾斜面に、點々として大さ馬蹄の如き白い物が露れた。殘雪と謂ふにそ、鹿子斑とも覺えず、餘り輕少であつたから、何ならんと目を瞪りつゝ進行けむ、其の側面が振替つて、大斧劈皴とも見ゆる凹處の玲瓏として、そこらに立迷ふ雲に輝くを認めた。

夏山の雪見る雲の絶間かな

と口吟んで、行く程に山は益近く、坂は益急に、漸く溫泉場の高い處に見え初めた邊から、又降つて來た。此の險い路の左右に渠の付けてあるのは、春暖に雪解水を下す爲であるが、例年充溢しては道を毀すので、此通手入も屆かぬ事で御座ります、と車夫は語る。

此日は朝から別して涼しく、單衣に薄羽織の上に袷羽織を襲ねて東京を出たので、上のを脫いだのは十一時から二時ぐらゐ迄であるのに、此の山中の雨であるから、恰も暮秋の冷氣、加ふるに、三方開拂の高みを、殘る一方の的面に妙高颪を浴せられるので、鶯の頻に啼くのが腸に沁むやう。六時三十分に垂として新潟縣下越後國中頸城郡一本木新田赤倉鑛泉(字元湯)香嶽樓に着す。

溫泉は炭酸泉で、無色透明無臭、少許の白色浮游物あり、と試驗表にあ

る通で、溫度も適宜に、効能は各種僂麻質私、皮膚病、食思缺乏、中風、痛風、創傷、痔疾、脂肪過多症など、枚擧すべからざる程記してあるが、己を以て見るに、此の溫泉の尙ぶ處は、決して如此き賣藥的の點ではない。若夫一たび浴場に入れば、近くは斑尾、關田一帶の諸山、遠く米山の蒼突、越海の縹緲たるが、石榴口の鏡板に描成せると一般座にして眺めらるゝの一事である。三島中洲翁撰する所の赤倉二十勝記あり。其目を擧れば、

香嶽殘雪　米山浮雲　神名驟雨　黑姬斜暉　遊園鶯語
古池蟲聲　蓮湖明鏡　苗瀑降龍　斑尾皎月　關田淸颷
關川水靄　關山汽烟　中山霧海　板鄕稻雲　春日古壘
鳥坂舊墟　直江漁火　高田炊烟　左島靑黛　越海白帆

外に南摩羽峯翁の六宜と云ふが有る。

氣候淸爽、宜避暑　眺矚曠濶、宜娛目

温泉渾沸、宜レ醫レ病　常有二鮮魚一、宜レ養レ體
人朴客少、宜レ樂レ心　距二鐵道一近、宜二來往一

右二十勝の中特筆大書して最も妙と稱すべきは、左島青黛で。左島は佐渡で、越後の左に在る故懸も書いたとゑてある。是は北の方直江津の空に方りて、有りと見えては、浪の揚るが如く、無しと疑ひては、霞の浮ぶに似て、而も此樓の緣側から見ゆる所が一奇てある。

涼風のわが眉太し佐渡ヶ島

亞では蓮湖明鏡、是は野尻池と云つて、樓の東南に起伏する山の央が、一處鍤返したやうに坦を形作つて、其の周匝に群生ふる木立の暗綠を掠めて、宛然一口の長劍を草叢に委てたりと見ゆる光の陸離として射るが有る。始は雲であるか、水であるか辨ずべからざるのであつた。彼の坦は野尻の宿、白く見ゆるが圍三里の湖と聞いて、然れば左に波上の山あ

り、右にも山中の波あり、兩ながら臨眺の多く得易からざるひねり物である。第三には米山浮雲、佐渡を見た目を東に轉れば、亂脈に並ぶ連山を挺いて、位は最も高く、色は最も麗しく、容は最も好く、誰も必ず指して名を問はであるべからざる峻嶺こそ、彼の甚句に聞ゆる米山である。四にも己の途に望んだ香嶽殘雪。古池の蟲、苗名の瀧、春日、鳥坂の城跡などに至りては、此樓に居て擅まになるのではないが、他の十六勝は、嘘を言へば自ら座に入來るのである。

六宜にも眺矚曠濶宜娛日とあるが、凡そ溫泉場と云へば、山の中、谷の底で、眺望散策の樂むべきものの無いではないが、處が皆似てゐるから、景も從つて千篇一律に失する。獨り此の赤倉の曠濶は、恐く湯治場としての日本一、それも尋常の曠濶ではない、兼山野湖海之勝而宜諸疾有此泉而已と中洲翁も書れたが、山野湖海のみでない、佐渡が見ゆるから島が有る、關川が流れてゐるから川も有る。地理は先づ此位にして、天象

門にそ、一日の中に雪が有る、風が有る、雨が有る、霧が有る、雲が有る、虹が有る、露が有る、朝夕の寒、日中の熱、何でも有る。是て客さへ多ければ、手付かず三才圖會が出來るのであるが、地の僻なる爲に世間に知られず、又知られても猶且其が爲に足を運ばれぬのである。

宿ひきの夏鶯よ人も來ず

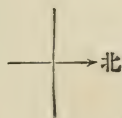
り、右にして山中の波あり、雨ながら臨眺の多く得易からざるひねり物である。第三には米山浮雲、佐渡を見た目を東に轉れば、亂脈に並ぶ連山を挺いて、位は最も高く、色は最も麗しく、容は最も好く、誰も必ず指して名を問はであるべからざる峻嶺こそ、彼の甚句に聞ゆる米山である。四にして已の途に望んだ香嶽殘雪。古池の蟲、苗名の瀧、春日、鳥坂の城跡などに至りては、此樓に居て擅まになるのではないが、他の十六勝は、嘘を言へば自ら座に入來るのである。

六宜にも眺矚曠濶宜娛目とあるが、凡そ溫泉場と云へば、山の中、谷の底で、眺望散策の樂むべきもの無いではないが、處が皆似てゐるから、景も從つて千篇一律に失する。獨り此の赤倉の曠濶は、恐く湯治場としての日本一、それも尋常の曠濶ではない、兼山野湖海之勝而宜諸疾有此泉而已と中洲翁も書れたが、山野湖海のみでない、佐渡が見ゆるから島が有る、關川が流れてゐるから川も有る。地理は先づ此位にして、天象

門にぞ、一日の中に雪が有る、風が有る、雨が有る、霧が有る、雲が有る、虹が有る、露が有る、朝夕の寒、日中の熱、何でも有る。是で客さへ多ければ、手付かず三才圖會が出來るのであるが、地の僻なる爲に世間に知られず、又知られても猶且其が爲に足を運ばれぬのである。

宿ひきの夏鶯よ人も來ず

第四章

既に述べたるは、樓の當面の風景で、後にと實に負ふと云ふ語の如く、山勢峻く競ひ起ちて、常に雲を吐き、雨を放ち、朝は青く、夕は紫に、晴れては晝の翠を滴らすのである。

赤倉溫泉の今用る元湯と稱するのは、前山に在る北地獄谷の一ノ釜、二ノ釜と云ふ二ヶ處の、海面を拔くこと約五千三百呎の泉源から、丸山を經て三千百二十一間(横二間三尺)の引路を傳ひ來るのである。赤湯又赤倉湯と稱するは、赤倉山の南地獄谷に沸くのであつたが、嘗て山崩の爲に湯口を失つて以來、廢滅して用を成さずなつたが、其湯は帶黑半透明、硫化水素瓦斯の氣が強くて、熱も高かつたと謂ふ。然れど今日の赤倉溫泉は、赤倉湯ではないのである。尤も兩地獄谷とも同時に開かれたので、今より八十三年の昔、文化の十二年榊原家十一代に當る高田の領主が赤湯元湯の湧出地及引用路を、元此は關山の三社大權現の境內なり、朱印地である所から、別當に談じ、幕府に請ひ、東叡山の許を得て金八百兩に買受けたとしてある。それから溫泉普請に掛り、開墾を始めて、一本木新田といふ村にして、二人の奉行を置いて移民を奬めたのが、今日の湯場の開闢である。けれども、何に爲よ寒氣が嚴くて、一年の半は雪に

封じられてゐると云ふ有樣であるから、作物は皆無、仕事は出來ず、商は利かず、湯治ばかりでは立たず、活計に差支へるので、次第に村の烟は細くなるばかり。廿九年の調に據れば、人口凡二百餘、戶數卅五の內旅店十四戶とあるが、今日では未々減じた樣子。

凡そ己の知る限に、此ほど山水の勝を占めた溫泉場は無いのであるが、又此ほど寒酸の極に陷つた町並を見た事が無い。一日遊園鶯語を聽き、兼て溫泉碑を讀み、古池の名殘をも尋ねん、と湯宿の軒を並ぶる通を過ぎたが、町にも村にも、此の一條の往來と兩側の家居との外に一本木新田は無いのである。二三の店を除いては、皆自炊宿の棟低く、屋根は朽ち、軒は傾き、格子窓さへ破れて、見る影も無き散々の躰。唯有る七軒ばかりの續長屋は、道を貫いて滾々と流れ落つる惣湯の淡烟を帶びて將棊倒に歪んだまゝ、毀ちもされず荒廢して、人の住む家と謂へば、燧箱の古いのより未だ埒も無い。此裏に異しく感ずるのは、外湯の浴場の不

相應に莊重しく新築せられたのが三個所に聳えて、五色硝子の欄間に滿目の荒涼を照すのである。見もて行けば、家々に馬鈴藷が乾してある。是が唯一の産物たる葛粉に製せられるので、正眞の葛も出る趣。外にそ蕎麥粉、竹細工と聞いたが、いづれもいづれ儚い物ばかり。

馬鈴藷の葛粉と云ふのは、天保年間當村の定詰手代に白石榮十郎なる者が有つて、料理を巧者にゑたのであるが、或時馬鈴藷を切つて居ると、其液が俎板の上に固るのを見て、製法を工夫したもので、之を村民に傳授すると與に、上州から藷の種子を取寄せて栽培せしめた所が、盛に蕃殖する、因で此の製造を奬勵して、左に右一本木新田の産物と名らせる迄に爲たのである。

第五章

さて町通の盡頭から遊園地に入れば、山腹を拓いて逍遙の路を穿つたのみの經營で、始は成程手入もまたと見ゆる跡は有りながら、植込は荒れ、草は茂るに委せて、何處を堺と目に遮る物も無く、上るほど茫々たる高原に踏迷ふのかと想はるゝ。若之を遊園と謂ふべくんば、園內の裝飾と目せらるゝ者は、溫泉碑と山水の飲用溜と道路と、此の三より外に之無い。然しながら其の人工の多く手を着けざる所が、又赤倉遊園たる所以かと曉らるゝやうにもある。露を帶ぶる叢、其叢の下行く泉、其泉と呼交す鶯、其聲する方に匂ふ山卯木、其花の白きに映添ふ日影、其日影には嶺の横雲の遊ぶなど、何と云ふ事は無けれど、其中に立つて居れば、自然を呼吸して形を遺るゝのである。猶此に來れば、樓背の山は全幅を披いて、蒼々たる勢は人に逼り、撲々たる翠は面を染めて、敲雲問姓な

どゝいふ唐めいた興も發する。
顧望すれば景は一變して、遙の空に入亂るゝ信の嶺、越の山、眼下に中山の八宿、其より北へ十里の沃野、軒を並ぶる湯宿の一郭は手にも乘るかと窺はれる。快く晴れたる午前九時の日光は、微熱を送りつゝ山を照し、草を照し、人を照して、此の廣濶の眺矚を更に明ならしむる。乃ち石に腰掛けて心靜に燻らす卷莨の味は、酒も茶も有つたものではない。由來風景の宜きに對しては、其の友とする所天下唯シガレットあるのみで、莨の趣を解せざる者は、與に山水を談ず可からずである。其と與に、探勝のマッチを携へた者にあらざれば、未だ以て喫煙の妙を語るに足らぬ。
居ること久うして病骨頓に爽なりと覺えた後は、恍然として又徘徊する足の、歸るともなく路無き路を蹈分けつゝ、藤蔓の實の赤きを嚙んで山を下りた。下りる途中に得たる一句、

雲は飛ぶ夏草の氈を拂ふ時

歸來の路を轉じて、宿の裏手の草深い搆外に出ると、つい鼻の先に中二階造の隱座敷と覺しき一間が在つて、若い男女の相對して語る影さへ著に見えた。己は這麼處に這麼別室の在るのを其時始て知ると與に、又這麼別室的泊客の有るのを始て知るのであつた。此際誰しも、彼等は何であらうと先づ考へるであらう、次で何處の者であらうと又考へるであらうが、己も依樣然う考へたのである。總じて恁云ふ場合にそ、多く惡推量さるゝのが常であつて、彼等は或は公々然たるホネイムウンであつたかも知れぬけれど、例に因つて然は想像されなかつた。尤も其が己の惡推量の如き者であつたに爲よ、謂はゞ三面雜報の瑣事に過ぎざる者を捉へて、巣林子が作中の主人公を生で見たほどに珍重がるにも及ばぬのである。但此の山中の雲深き處に反映する二人の姿、其が一の不思議を示

すか何ぞのやうに頗る己の感を動したのである。又恐く之が爲に費した空想の量は、優に二百頁を占むべきものであつた。乍有りて此に人の窺ふと見付けた女は閉然と窓の障子を立切つた。後は雲無心にして岫を出で、鳥晴を弄して頻に囀る、などは愈よ面白い。

けれども己は此に於て飜然として其愚の甚しきを悟らざるを得ぬのであつた。甞て歐羅巴の諷刺畫に(詩人)と題するのを見たが、其の第一圖は聖誕祭のミズルトォの下を行く美人の後に、髪を長くして瘦削けた男(所謂詩人)が其姿を嘆賞して崇拜せんばかりにして居る。第二圖に至れば、突如として顯れた瀟洒の一紳士が、彼の美人を橫抱にミズルトォ下の接吻を縱まにするに遭つて、詩人は駭き仆れんとして。其の長い髪が皆逆竪つてゐるのである。其圖と今の己と何程違ふのであらう。頭を撫でゝ見て逆竪つても居らぬのが可笑かつた。熟く其圖の善く出來て居るのを憶出して、覺えず吃々と獨り笑つたが、山の奥の草茫々たる中で吃々笑

をする其態を思へば、愈よ可笑くて耐らぬので、匆々此を立退いて、件の座敷の背面に廻れば、葦の人より高く生茂る片面にそ、小笹、蔓草、萱、薄の打亂れたる底に名も知らぬ花の咲ける徑が有る、其を登れば浴場の側に出るので。其處に杉の大木の六七本矗立つてゐる陰に、長の七尺も有らうと見ゆる圓錐形の茅葺が据ゑて在る。其の四五間先の庭盡頭の平地に窖樣のものが在るかして、下男が地の下から何やら取出さうとして居る。行つて見れば、氷室から貯藏の魚類を出すのであつた。

深さ一丈ばかりの窖に貯へられた雪は半消えて、周匝も約そ一尺の量を減じて蛇目を成してゐる隙間に、鯛、甘鯛、赤鯖、川鱒、鷄肉などを繩に懸けて、吹矢の人形のやうに吊下げて、別に野菜の類は籃に入れて雪の表面に卸してある。上にそ火雲の蔽へる地底の暗き處に、雪は凜として大水晶塊の如く明に照す處々に、赤き鱗の花と見紛ふばかりなるが點綴する狀は、是眞畫中の逸品たるべき好粉本として見らるゝのであつた。

若し中洲翁をして俳諧あらしめたならば、必ず之を二十勝の外に措く事ではなかつたらう、と返す〴〵惜まれた。古風の一句、固より十が一の意を盡すに足らぬけれど、

舌鼓うつや氷室の櫻狩

餘り比喩に失して、情景共に索然たる病は有るが、唯氷室の櫻と見付けた手柄が、我ながら無に爲かねるのである。

彼は恰も籃の中の蒲鉾と胡瓜とを引揚げたので、其瓜に手を觸れて見ると、若菜を摘むかとも想はるゝのであつた。此窖を（空池）、茅葺の圓錐形を（雪ニヨウ〔納屋?〕）と彼は教へた。雪ニヨウは例として二個を造つて一年中の用に供するので、雪は寒明後（三月頃）實の入るのを待つて、始て之に收藏するのであると云ふ。

此日の中食にそ川鯲の魚軒、甘鯛の鹽燒、鯛の潮煮など、出るものは皆

氷室の花紅葉であつた。其色の美しきに比して風味の劣るは、雪塡の是非無さであるが、甘鯛の素氣も無くて、食缺くやうなのにそ些とばかり避易した。けれども畢竟其は榮曜の餅の皮と云ふもので、是が常法ならば、生節の餡掛、山女の鹽燒、のべつ玉子に苛まれても、愬ふる所無き此の深山に在りて、時は暑中の溫氣皆饐ゆる那裏に、豆腐は柔く蒲鉾は硬く、酢貝も有ればチキンも有る、然る上の鯛、甘鯛、鯖よ鱒よと謂ふに至りては、其の敗れたるのを拜むさへ容易ならざる次第と、先以て觀念の口を閉づべき所、噫、此の氷室の花紅葉と難有く頂戴致したので、句有り證と爲す。

雲の峯わが飯盛るや劣らじと

夜食の膳にそ眞竹の筍の味噌汁を出したが、格別の風味であつた。是は中山邊から出るのであるが、今そはや旬過ぎて、一尺のもの丶頭二寸ぐ

らゐを切取つて漸〻膳に上すと聞いて、

鶯の若さにくれし杖なるか

山中日盛の溫度は華氏八十度乃至八十五度、朝夕は七十度乃至七十五度としてあるのが、兩三日前暴の有りし爲氣候變じて恁く凉甚しき也とは、然もあるべし。

山霧を拂ふ扇の寒かりき

第六章

朔日、二日と泊り、三日の午前六時二十分に山を發つて、七時五十三分の列車に乘つて、水害破損の工事中の處々を蹈んで直江津に入る。直に俥を馳せて、春日新田停車場に行く道、先目を牽くのは(女の車力)であつた。女の車力は東京にもあるが、此のは格別に車力は女で、女が車力なので、從つて東京で見るやうな、乳兒を横仆におんぶした其の肩頭から、食ふや不食の肋骨まで露出して、襤褸浴衣の尻褰に折れさうな空臑を突張つて、膏汗を垂し〳〵息を切つて後押などを爲る、那樣脂こいのとは譯が違ふ。どれも兵糧炊に頼まれさうな凛々しい小爽りとした扮裝て、木材の滿載したのを二人ぐらゐで曳いて行く、皆屈竟の新造年増、牛とも組むべき骨格である。

今一つは(雪を賣る)ので、いづれ内儀さん達の小遣取と見えて、店の片

側に葭簀、茅葺などの差掛をして、緣臺のやうなものゝ上に菰の青々したのを敷いて、其に三四十斤大の角に挽いた雪の塊を据ゑて、依様鋸で碎す。此に出せる北越雪譜（六月賣レ雪圖）と體裁は少も變つて居らぬ。又同書に、京山が其子京水を携へて南魚沼郡の鹽澤に赴く途中、

「芝原嶺を下り、湯澤に抵らんとする途にて、遙に一楹の茶店を見る、庇の下に床ありて、淺き箱やうのものに白く方なる物を置きたるは、これ石花菜を賣るならん、口にし上らずと思ひながらも、山を離れて暑も烈しく、汗もしとゞに足も疲れたれば、茶店あるが嬉しく、京水と共に走入りて腰を掛け、彼の白き物を見れば、石花菜にしあらで雪の氷なりけり、六月に氷を見る事江戸の目に最珍しければ、立寄りて熟視れば、深さ五寸許の箱に水を入れ、其中に小さき踏石ほどの雪の氷を置きけり、賣茶翁に問へば、是は山蔭の谷に在るなり、召し給はゞ薦めんと云ふ、さらばとて乞ひければ、翁菜刀

を把り、盃の中へさら〳〵と音して削り入れ、豆の粉をかけて出せり、氷に黄粉をかけたるは江戸の目にそ見も慣れず可笑ければ、京水と相目して笑を忍びつゝ、是は價を取すべし、今一盃豆の粉をかけざるをとて、雨掛に用意したる沙糖をかけたる削氷に、歯も浮くばかり暑を忘れたるは、珍しき事謂はん方なし、」

六月の雪を珍しがつて、雨掛から用意の沙糖を出した人に、江戸で朝飯を食せて、坐つたまゝで直江津の晩食を出したら、抑も何の中から何を出して驚嘆するであらう。

聞けば、高田では貧民孤兒救助の一端として、別に有志者が貯雪を差て、其を彼等に施して盛に賣しむるのであると云ふ。此邊でも高田と謂へば名だゝる雪所で、積る時は此下に高田ありと札が立つの、盲人が屋根から落ちるのと一つ話になるほどであるから、貯雪も多く此から輸出さる。豊年の兆ばかりに止らずして、此の昭々たる天の恵の妙用は、實に

越路の雪ほど有つて、雪の中の雪と謂ふべきてある。故に越に入れば、氷といふものは弗に無い、皆此の雪を以て氷の用に充つるので、新潟などの酒樓で冷膾に附けて出すのも雪、ビイルに入るゝのも雪、林檎を冷す鉢の中も雪、町々をひやつけ、ひやつくいと童男童女の賣行くのも雪である。其の白いところを味つて見たが、依樣雪にある土臭い香がして、結句妙でない。

第七章

九時三十五分に此を發車して、忽ち眼明なりと驚けば、渺々たる日本海は折しも波に一船を着けず、雲に一鳥を帶びずして、千萬頃の虚く濶きに、唯池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、琉璃の烟るやうに物ありて幽に顯るゝのを、早くも、佐渡、佐渡！と案内する聲がきた。信に香嶽樓の縁端に伸上つて、（わが眉太し）と此美人を天の一方に望んだ佐渡ケ島は、今目を遮るものもあらぬ三十海里の波上に溫泉水滑洗凝脂とやうに浮び出たのである。

美なる哉此島の風情。凡そ眺めて恪も可懷く、又況へん方無く心動さるる遠景色は、之を他に求めて己は有りとも覺えぬ。直江津の古い（鹽たれ唄）とか云ふのに、

左渡へ〳〵と草木も靡く、

佐渡は居よいか、住みよいか、

とあるのを見ても。此景に對して心を動さゝる者は無いと知れる。殊に居よいか、住よいかと疑つた處に言れぬ妙が有るので。此唄の精神も、唯其の九字に存すれば、又此景に人の恍惚たるのも、頗る其の九字の感に堪へぬのである。又彼の(來いとゆたとて行ろりよか)の如きは、苟も日本語を解する者にして知らざるは無きまでに轟いて居る。其處が古の配處であつたとも知らず、今も小判に成る物が出ると知らぬ輩でも、波の上の行れぬ處と云ふ事は皆心得て居る。それほどの口吟を思はずに誰一人此が過ぎらるゝであらう。遙に佐渡が見ゆる、四十九里と直に胸に浮ぶ、其にしては近いやうだといふ疑が又起るのである。能登の輪島から四十九里と云ふ說が有つて、左に右越後の唄ではないに極つて居る。佐渡の相川の人の談に、極々快晴の日所謂日本晴にて能登の珠洲崎が雲烟縹緲として見えると謂へば見えるくらゐに見える。其人は一年の中に

唯一度見たと云ふ。因で（來いとゆたとて行ろりよか）の首を搔いて遠人を憶ふ惆悵無限の意が殊に深い。此の（來いとゆたとて）に就て思出したのは、過る年富小路侍從の行くを送つて岸田吟香翁の歌が有る、なかなか面白い。

大君のみことかしこみ、來いとゆたとて
行ろりよかといふ佐渡へ行く君

己も亦一句無かる可けんやと、

來いといふ人あれ島は涼しげ也

抑も此海の雄渾と併せて此島の秀麗を見るのは、北越鐵道線双快の一で、他は更に進んで、鉢崎から柏崎に抵る迄、米山峠の眞下を磯傳に疾驅しつゝ八門のトンネルを出入するのである。其趣は稍東海道線の薩埵峠を過るに髣髴たるのであるが、それは皮相の似たるばかりで、彼に在つて

は全く此の氣魄を虧く。
道は荒浪の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に蹲り、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで佇ると云ふ有樣。扨其の大いなる者に在つては、百歩にして崖と塞り、二百歩にして岩鼻と突出るのを、總てトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者有れば必ず突いて進むのである。
トンネル續の線路は碓井であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬは無いが、別して此に其想が有るのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出れば直に乙のトンネルの全景が見える、乙を過れば丙、丙が去れば丁と、彼等の爭つて五月蠅成すのが一々目に入る。譬へば己大剛の者にして、群る敵を物の數とも爲ず、當るを幸ひ一太刀づゝ片端から撫斬にして通るも恪やと覺ゆるやうにて、而も處は弓手に方りて日本海、遁るゝ路も荒磯の浪鞺鞳と寄せて

は返す閧の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無双の名も高き米山峠は聳えたり、と思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。此を過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なか〳〵神經などを衰弱させて居る段ではなかつた。柏崎を踰れば、線路は次第に海に遠つて、長岡を過ぎ、三條に入れば此邊から掛けて加茂、矢代田の水害は甚しきもので、見ゆる限は村も無く、小屋も無く、平一面の漠々たる青田である。其の七分を領して氾濫する水は、縱橫に川を蓄いて流れ、水嵩の厚き處は湖の狀を成して、漾々波を弄んで居る。水漬になつて稻の葉末の小指ほども出てゐる處を見れば、水さへ退けば舊のやうに勃然となるのであらうと、唯水の勢を見て、害の恐るべきを知らぬのであつたが、其の水の退いた跡を過ぎて見ると慄然とした。

苗は盡く根を拔いて打倒れたのを、又其上から蹈付け散したやうに、百

方狼藉を極めた爲躰は、迚も米の生る木と見る影は無い。

水害の跡吊ふ田唄作らせよ

眺むかと思へばのつたり（沼垂を訛りて）と呼起されて、こゝで下りると慌てゝ停車場を出れば、三時十分。さて茲に八千八川の水を取つて一條の流に打成すと聞ゆる信濃川を帯びて、日本五港（七港と言はず）の一なる繁華と、北陸七ヶ國の大都會たる殷富とを左右にせる新潟市は、始て己の眼に映ずるのであつた。が頗る不足を感じた。今己は車を驅つて其の繁華の都會に入らんとするに際して、必ず爾有るべき意氣の盛なる者が絶えて無くして、心の底にそ冷なものが觸れて居たのである。

第八章

實に立派なのは信濃川であつた。川口の衢と海に入る處、漲る水の滔々として天に横る勢は、有繫に飛信越三國の群流を綱絡する者なる哉と合點さるゝ。扨長いのは之に架る萬代橋、巾四間の長四百三十間、橋の上へを行くばかりが七町有餘とあつて、之を車で輾す希代な乘心は何に況へんやうも無い。

聞く所に據れば、明治十九年の架設にして、經費二萬四千七百十四圓〇九錢二厘（木造）私費であるから車付一人前三錢五厘といふ橋錢を取るゝ。鐵道馬車の一區より高いのであるから、其の橋の長いことを知るべし。然しながら抑も新潟市とも謂るゝものが、木戸錢を取つて喜んで居るのは不見識も太甚い。縣下は多額納税大盡の顏揃で居るのでは無いか、二萬五千圓ばかりの仂金は誰か一人の手でも奈何かなりさうなものを、僕

をして某の富あらしめたならば、三萬圓許ハンカチイフに裹んで橋の欄干に結付けて、萬代橋鐵造改築寄進といふ紙札を下げて來るのであつた。折角偉大なる信濃川も此の三錢五厘の爲に夥しく器量を下げるのである。是から市に入ると、町並は碁盤目に整列して、道路は淸く夷に、小路小路に至るまで疎は無い。之を思へば吾が東京の道の如く不手際千萬なものは他に類を見ぬのである。設へば小石川の砲兵工廠前などを歩かせたら、此市の人は三錢五厘出せと云ふかも知れぬ。

醫學校町に抵る途中の目に着いたのは、例の車力を始として種々の勞働婦、就中（普請場の女土方）は松壽軒が筆も未だ寫し及ばざる所と驚入つた。又それらの髮は多く割島田と云ふのに結うて、在郷の婆さんの杖い來るのを見れば、五厘が燈心を束ねたやうに、猶且此の割島田に結うて居る、誠に古風で宜い。尤も見た所では、之に結ふのは、長屋の嬶、在の者、勞働婦などの下等社會で、其外見掛けるのは、娘も妻も銀杏がへ

し、前には長袖の内方に限つて圓髷、町家は姨御と極つて居たもので、今も土地の者は其風を守るさう。

次に目新いのは、家の構造と屋根一面の重石とである。皆然うとは限らぬが、或處には家の向が桁端を表にして、廂上の壁を切拔いて櫺子窓が附けてある、其が二階造のもあれば、平家で明取の用ばかりと見ゆるのもある。而して家並は總體に低くて、木戸にも雨戸にも欄間障子を入れて置くなど、をさ〳〵雪の支度と知らるゝ。

凡そ市内の家と謂ふ家は、官省、學校、病院、劇場等の西洋造を除く外、總て屋根の一面に重石を置並べたもので、目して大厦高樓と稱すべき建物まで皆是である。之を木羽葺と謂ふが、實に一奇觀で、殊に繁華なる新潟市としての一奇觀である。木羽葺の制たるや無造作、釘を用ゐずに屋根板を敷並べて其上を石で押へるまでの事。是も雪の防か何ぞのやうに考へられたから質して見ると、瓦は凍てゝ割れて了ふ。二つには手細

工に葺替が出來て裏返が利くと謂ふ。勿論柿よりは肉も有れば形も大きい、彼の枌と云つて板屋に葺く者で、いづれ賤が家の造たるは免れぬ。些と見たばかりでも、風の時は險難であらうと想はれる。然し、此の石が上げてある位であるから、屋根の勾配は鈍し、棧の押へが有るから、那物の滾げるやうな事は無いが、唯可恐いのは火事で、燃拔けると此の石がどた〳〵落ちて來る。成程此の火掛は考へ物であらう。

悉しくは追而として、先づ醫學校町の宿に着いたのは午後三時半といふ頃であつた。

越後は雪の國であり、新潟は前後に大河と大海とを控へて居るのでもあれば、定て涼い事であらうと私に期して居たのが、いやもう暑い〳〵。時候不順で東京が涼くて、赤倉で寒かつたのが、此に來ると、本極りに照らうと爲るのに際して、決して熱くない事は無い處であつたから、市中の見物も足跡多くは到らずして、直に佐渡へ度つて了つた始末で、新

潟は實に瞥見したのに過ぎぬのである。

町は古町通と云ふのが最も賑しく商賈の肆を連ぬる處で、之に亞いでは本町通。靜軒の（新斥富史）に八千餘水合走洋。七十多橋分界坊。と有る如く、町中に縱横の渠を通じて、信濃川の水を導くのであるから、四辻と小橋の有る事夥しい。古は總計七十四橋有つたのが（柏木如亭の詩に（八千八水歸新斥。七十四橋成六街）。當今では約百九十橋に上ると謂ふ。有繋に目貫の古町通は人居稠密に建物も相應であるが、例の木羽屋根と家の低いのとの爲に、極めて見立が無い。其に構造が總て閉してあるやうに、雪の用心堅固とばかり見えて、店は引込んで薄暗しするから、陰氣に鬱いで居る躰が有る。日中であつた、此町を通ると、絶えて往來が無い、寂しい事であると思へば、往來の無いのではないが、門々に張出した廂の下が立派な道に成つて、之を雁木と稱へて、雪降の通路に拵へてある、其前に面々の日除暖簾を店一杯に懸けて置く、其内を人が通るのであつ

た。成程、是は天日に曝れて暖簾を見物して行くのは愚の至と悟つたから己も早速御免を蒙つて見た。

然る處、暖簾の內の廂の下と云ふが既に狹いのに、店の鼻先を內薄に通るのであるから、目を衝れるやうで、第一息窒つて、迚も半町と續くのではなかつた。店の方でも前を塞いであるから、暗くはあるし、風は通らず、彌が上に往來の目眩しさ、然ぞかし可厭な事であらうと思遣らるるのに、此の方が結句商が有ると謂ふのも一理である。

此市は原が洲鼻の砂地ゆゑに自と樹木に乏い、青いのは常磐岡の松林と堀端の柳とばかりと謂つて可いくらゐのもので、是は雨ながら善く茂つて居る。靜軒の詩に、柳猶堪數橋堪數。數到裙釵數不堪とある。外にも大畑通の行形亭の庭に翠を見るのである。（新斥富史）に、

寺坊之西有村。曰寄居。（明治十六年より町に編入せらる）農人開圃。種四時之蔬。毎朝搬來入市。圃之北松樹爲林。外面幽邃。似無人之

境。而酒店佳于林中。曰行形亭。搭起數樹待游客。客携妓至。松韻和絲聲。空翠滴紅衣。

此家は庭を以て鳴るので、園内に雌雄の鶴を養つて置く。一日此に遊んで口占したのが、

鶴は居ても松は有りても暑いぞや

樹の足無い土地であるから、此庭が珍重されるのであらうけれど、實は植木と石とを一杯に塡めたまでの田舍細工で、一向見ともない者であつた。松韻和絲聲。空翠滴紅衣の趣は無きにしもあらねど、其は庭ではなくて、却つて亭後の松林の風致に屬する。不都合な事にそ、此傍に監獄署が置いて在る。松韻和絲聲と爲れば、絲聲隨鬼哭そずんばあらずて、人は此の事を地獄極樂と謂つて居る。雪隱の中で饅頭を食はうと、牢屋の傍で酒を飲まうと、其は面々の勝手であるが、囚人たる者に三味線な

どを聞せて、それで懲惡の効が擧るものか奈何か、當局の君子は少く考へて可からう。

行形亭の庭で獨り珍とすべきは杉の木である。其杉は何ぞ異りものかと云ふに、然でもない、依樣尋常の杉である。其の尋常の杉の珍たる所以は、土地の諺にも男の子と杉の木は育たぬと云つて、新潟市中を尋ねて此木の外に一本の杉も無いのであると謂ふ。して見れば、女の子は善く育つかして、古より越は美女を出すと聞えて、今目前に魚屋、八百屋、手間取、職工に至る迄女の稼ぐを見るのである。二十七年の調査に因れば、市内の人口四萬八千七百六十九にして、男二二七二八に對する女二六〇四一、則ち女の有餘ること三千二百十二人である。尤も市長の談であるとて聞いたのは、例年春先になると縣下の地方から女子の轉籍が頻繁て、日々忙殺せらるゝ騷を爲ると云ふが、皆諸國へ賣色の出稼ぎを爲るのに、原籍が北魚沼郡や東頸城郡では響が惡い、いづれも新潟生の肩

書を付けて直賣をしたがるのであると。自然其等の餘波を受けてゐるや否やは知らぬが、何の道女子の數は超過してゐる。

第九章

此故に生れ得て美しき者は、雪の膚と爲りて色を賣り、不出來の者はつぶしと爲りて骨を折らねばならぬ勘定で。其の憐むべき勞働婦は、濱の眞砂の數々見たが、他の憐むべき麗質にえ絶えて逢はずに了つた。事は違ふが、魚類に於ても其と歎を同うしたので、新潟の魚に富むことは、現に日本海といふ無量の籞を控へて、些と市に行つて見ても、甘鯛などの偉しいのが生存在にごろ／＼して居る。而して新鮮な事に於ては、海から上つて晝寐して居るくらゐの者であるが、さて口に入れると驚くほど味に乏しい。

然う言へば新潟の人は慍つて、東京の腐つた魚を魚と志てゐるから、鮮魚の肉の緊つたのを味ひ得ぬのであると力む。堂々たる帝都の魚は決して腐つて居らぬ。何でも一から十まで有るのが都であるから、蒲鉾屋の

殘餘に金蠅の取付いたのも、腥の中に入れてはあるが、肉の柔いのを以て直に鮫れたりと爲すのは大早計、實は彼の肉の柔い處に東京の味は在ると謂はなければならぬ。己も敢て肉が硬いからとて、其のみて日本海の魚を非るのでない、左に右に荒海の物は何に因らず大味である。大味が味の上乘なる者と爲るを得るならば、食つて醉ふのが魚と覺えた山國の口にも、眞理を認めて遣らねばならぬ。

獨り春の鰮と秋の鮭との二魚に至つては、新潟の名物として世間に膾炙するを聞くのみで、未だ箸を染むる果報に會はぬ故、叨に喙を容るゝ權利は無いが、各食味以外に賞翫する所有つて、いづれも彼土の勢張を見るべき者である。

去る十二日の新潟新聞は報じて曰く、

○初鮭　秋高くして初鮭の網に上る頃とはなりぬ、一昨日信濃川に於て沼垂町漁夫津野五郎作なる者重。量。八。百。五。十。匁。の鮭一尾を捕へ、

本町通十一番町鮮魚問屋高木平八より行形亭へ金廿五圓十錢にて賣渡したりと、本年の初物なり、

此の金二十五圓十錢が、新潟人士の鼻を鳴して江戸の初鰹などが、と大いに凹す所である。

最も一つ凹されたのは新潟の牡蠣であつた。蓼太の句にも(煎蠣や獨り臥す夜の小紫)と聞えて、寒中の物とばかり覺えたに、此地では玉なす汗を拭きながら、土用蠣と云つて珍重する、從つて價も高い。鍋茶屋では酢蠣、行形亭では炮烙蒸にまで出した。夏の貝であるから、腸が脹れ上つて、ぐさと嚙む其の惡腥い心持、迚も咽に下るのではない。冬場は海が暴れて捕れぬのである乎、但は育たぬもの乎、己の擇ばんとする新潟七不思議の一つは是である。

其二は女名の如何にも奇なる事である。一日日和山へ遊びに行くとて遊廓を通ると、店每に街燈を立てゝ、各其に樓主の實名が赤く誌してある。

晝間の事で見る物は無く、那樣物に目が着くと、姓は別條も無いが、ニナと云ふ女名前。異つてゐると思ひながら、段々見て行くと、戸々殆ど女主で、女主でさへあれば又殆ど奇名が附いてゐる。曰くミカ、タチ、ノヱ、ミテ、シヨ、ミイ、ミン、ミセ、ミタ、ミト、サセ、ヨノ、ケン、リタ、凡なところでミス、チセ、ムツ、驚くに堪へたるものである。然し考へたのは、恁云ふ家業の者であるから、剽輕がつて可笑な名を擇ぶのではあるまいかと、旋て廓を出ると駄菓子屋があつた、營業札を見ればヲソと書てある。

歸つてから之を人に質せば、別に那樣理窟が有るのではない、自分の知つて居るので、ヒン、チン、カプ、フタ、などゝ云ふのも有るとの話。愈よ出でゝ奇なりと謂ふべし。

其人の說に、ミン、ケン、ヒン、チンの類のンは、東京のイと同じで、ミイちやんと謂ふべきをミンソンと謂ふ、ヒイちやんがヒンそん、チイ

ちゃんが、チンそん。ミン、ヒンと幼名に呼んだのを、戸籍面の名に書出したものと見えるので、其は可しとした所で、リタ、ヨノ、コナ、ノエ、サセ、ヲソの如きは到底端倪すべからざる者である。

案ずるに、土音に強い訛がある所から、呼聲の誤つて了つたのもあらうし、又言訛を其儘字に寫したのなどもあらう。ミイの如きは明にミヘ(三重)の誤で、八重といふ名をヤイと現在呼んでゐるのを聞いた。或はユをヨと訛るのは此の名物で、ヨキが降つても割れない新潟の金梃頭、他國にも有る事ながら、(問ひば)(笑へて)の類は新潟縣の文法として毎日の新聞に繰返さるゝ。甚しいのは、僧良寛歌集に萬葉假名にまで書いて取違へてゐる。貧幾遠能布流歌と云ふのゝ末に、

「……以爾之遍遠於母飛盤由免能世耳己所阿利計連」

又秋の歌の中に、

「阿幾乃怒丹爾報遍天散計留不知婆可末……」

是は作者の訛か、淨寫の誤か知らぬが、良寛が越後の出生であるからは、必ずしも罪を後者に歸して了ふ譯にも行かぬので、現に士君子とも有る可き人にして、此の不注意を顧みざるが常であるやに見受けられた。此の良寛の草書といふのが、新潟地方では大分賞美されて、既に僞筆さへ出來て居るくらゐ。己も一二幅見たのであるが、其書は張懷の逸躰有りと稱せられて、頗る和臭を脫した趣がある。又詩を賦し、歌を詠ずるのであつたが、己の見る所では、書が一の藝で、龜田鵬齋も北游中に交を結んで、曾語人曰、吾遇良寛悟草書之妙我書從是長一格としてある。（北越奇談）にも出てゐるが、奇行の有つた禪僧で、出雲崎の士豪山本左門の長子に生れ、十八歲にして佛門に入り、多年諸國を遍歷して、歸ると國上山の五合庵といふ萬元和尙の古蹟に住んで、後にも其麓に庵を結び、樹下石上の生涯を甘んじ、飄々として雲の如く處したもので、詩に歌に其風が窺ひ知らるゝ。蒲生褧亭翁の偉人傳に、

庵中藏一擂醬瓦盆、既擂醬畢、又用洗手足、有箏生床下不得伸、乃撤床毀屋、養箏成竹、吟哦其下、人索其書不可獲、唯見女毬戲而乞之、輒書、

手毬が所好であつたと見えて、歌集にも、

冬ごもり春さり來ればいひ乞ふと、草の庵を立出でゝ、里にいゆけば玉鉾の、道のちまたに子どもらが、今を春べと手毬つく、ひふみよいむなあがつけば、あは歌ひ、あがつけば、なは歌ひ、つきて歌ひて霞立つ、長き春日を暮しつるかも、

霞立つ長き春日に子どもらと
手毬つきつゝけふも暮しつ

詩にも又、

褊衫長兮裾子短。　騰々兀々只麼過。
陌上兒童忽見我。　拍手齊唱放毬歌。

更に毬子と題して、

袖裏繡毬直千金。　誇言好手無等四。
箇中意旨若相問。　一二三四五六七。

詩は斯人五言古に長ずと云ふのであるが、己は國風を取るので、尤も自身に、貧道の好まざる者三あり、曰く詩人之詩（又歌人の歌）書家之書、庖人之饌と云つて、書は申すに及ばず、詩歌ともに天狗であつたらしい。

白雪は幾重も積れ積らねばとて玉鉾の
　道踏分けて君は來なくに（旋頭歌）

そのかみは酒に承けつる梅の花
　土に落ちけりいたづらにして（懷舊）

ふして思ひ起きて眺むる七夕の
　いかなる事の契をかする

いざ歌へわれ立舞はん烏羽玉の

今宵の月にいねらるべしや

月よみの光を待ちて歸りませ
山路は栗の毬のおほきに

よもすがら草の庵に我居れば
杉の葉志ぬぎ霰ふるなり

いひ乞ふと里にも出でず成りにけり
昨日もけふも雪の降れゝば

紀の國の高野の奥の古寺に
杉の雫を聞きあかしつゝ

子どもの殀りける親の心にかはりて

人の子の遊ぶを見ればにはたづみ
流るゝ涙とゞめかねつも

第十章

新潟の眞趣は偏に紅燈綠酒の間に在りと稱せらるゝ、筇を曳いて遊覽すべき處と謂つては至つて鮮い。己の知る所では白山神社、新潟遊園、日和山、偖は川口の眺望、寄居の濱の海浴など。

白山の祠は境內神々として、心耳を淸す松風は長へに廣前の塵を拂つて、げに此許の土地神の宮居ぞ、と宜々しう拜まるゝのである。盆踊の歌に、

新潟戀しや白山さまの
　松が見えますほの〴〵と

と有るは、此の神垣の內に常夜燈を置いて、海上を照したと云ふ昔、港入する舟人の意を詠んだもので。當津の八景には、此を白山夕照として、何樣小唄の題に入るべき沽券は有りと見ゆる。又盛に踊り行く狀況を叙べては、

御祭堀から白山までは
　上りつめれば夜が明ける

靜軒の所謂七十四橋將蹋頓。三十四坊危顚覆。と爲る者。

　御祭堀から白山までは
　　後家の數々八百三十八後家

と謂ふのも有る。之を（新斥富史）にて、

　八百八孀何處是。　柳濛七十二橋頭。

と詠んでゐる。新潟の八百八後家と謂へば、人も知つた名稱で、今は全く跡を絶つたのであるが、以前は後家と稱へて、眉を落した一種の娼妓が有つた趣で、其名の由來は、事の始が、夫に別れて便無い身の情を賣つた故であると云ふ。それを八百八後家とは、數の多きを表はすに過ぎぬのであらうが、八百八と半端を出した所が面白い。八百は八百屋八百萬の類で大數を示して、他は唯一音の調を取る爲に八の字を重ねたもの

てあらうが、信濃川の水が八千八川、其末の流の身ぢやほどに八百八後家でも通らぬ事はあるまい。其を又三十と雑返した所も面白い。境内に接する（新潟遊園）は、當市のオアシスとも謂つべきもので、鬱然として樹有り、湛然として池有り、丘にそ茸有りて幽靄、路にそ石有りて寂歴、鳥も來啼けば魚も躍る、盤桓するも可し、偶坐するも可し。出で、東南を遶れる陂に立てば、眼を浸す信濃川は穏波鋪くが如く、微風菰を撲ち、輕舟洲に横りて、遙に望まるゝ角田、彌彦の山容は、秋ならざるも粧へるなど、恐く市内一等の風景。

　　此景に羞ぢざらめやも吾が團扇

第十一章

一日夙に起きて海浴に出掛けた。道は新潟病院の前から旭町の坂を登れば、松林の涼しい陵に出る。其處に立續く人家を過ぎて、暫くは木間よ、畑よ、叢よと辿る程に、陵の盡る處に抵れば、洋々たる千里の潮は面を照して、平沙遠く眼界を領する濱は、此に舟江津の名も有らざりし古の荒漠を殘すのである。天と浪と沙と、目に入る物は唯其三つあるばかりの曉の、雄大にして高渾の氣象は、神として之を崇ぶべきも、景として之を弄すべき者ではなかつた。己は餘に規模の宏いなる、寧ろ其が爲に畏るべき如此き海浴場に値つた事が無い。小高い砂山の駱駝背狀を成した頂に登つて、姑く休息して居ると、恰も好し旭は杲々と差昇る。

松に濡れて旭に晞く衣涼し

やがて渚に立寄つて其の衣を脱捨つれば、少く寒いのであつた。はや二三人づゝ四五箇處に潮を浴びて居たが、濱が廣いから寥々として見回すやうである。さて波はと謂ふと、夏海であるから至極穏なもの、それに(出し)と稱ふる風模樣で、東南から海へ吹くのであつた。然しながら北溟の水の皷盪し來る餘勢、又侮るべからざる者有りて、敢て高く打つてはないが、大束に寄せて來る、揉立てる力も從つて劇しい。潸然とばかり飛入つて、少々泳いで見たが、一間も出れむずばと深くなるのに、其の大浪が四布蒲團を被せるやうに推して來る、加ふるに鼻の先は長波沓瀚として、見ゆるものとては水光の天に接するばかり、陸の方は黄沙滿目鳥獸も跡を絶つ處、頗る寄邊渚の感あるので、之に處する未熟の水練者は膽幾度か破れんとするのである。乃ち匆々身を回して、長の立つ處に哱と息を响いた油斷の背後から、どんと一つ強いのに衝てられたので、何かは以て耐るべき、地藏仆に顚覆ると、其儘ずる〱と曳れて、目の

玉の飛出さうな鹽辛い物を二口ばかり呑されるといふ憂目に遭つて、這這の體で逃歸つた始末である。

潮を浴びるのでは、如此く醜く失敗したが、曉の砂を蹈み、凉しき旭を拜し、壯なる潮を聽いて、夏塵を洗ふに於ては、君子は其罪を惡んで其人を惡まざる可く、己は其曉の雄大高渾を今に忘れぬのである。

日和山は八景の内晴嵐の目有る處、市の北に方る海濱に在つて、名こそ山であるが、實は蕞爾たる小丘で、好も之に名を附けた事だ、と私に可笑いくらゐの者。己の北に散歩した日は極めて暑くて、途中に二句を得た。

　木羽屋根の石に水打つ人もあらず
　一厘が雪買ふ門の暑さかな

遊廓を過ぎては、

鮓などに漬けまほしくも晝の妓の風情

廓の裏は直に砂原で、其中に狀恰も島の浮べるやうに隆起して、茂跡に綠を着けたのが日和山であるが、敢て島や綠を以て物色するに及ばずして、其丘の上に火見櫓の如き長梯の聳ゆるのが、必ず何ならんと人目を牽くのである。己も始は此の拳大の丘が日和山とは知らず、又此の長梯を何ならんと訝りつゝ指して行つたので。石段を登れば、頂に住吉明神の祠が在つて、小奇麗な茶店が出て居る。是から石屋根の重疊たる市内は一目で、東は羽州の山々、南にゝ彌彥、角田、又は演演として雲の廻るに似たる信濃川、北から西へかけては例の溟々渀々として窮無いのである。扨日和山は何處かと茶汲に聞けば、此が然である。又此の櫓は船見櫓と稱へて、舊來から港入する船舶の見張に問屋中で建てゝ置くのであると云ふ。見ると櫓が三段に附いてゐるので、其の中段に二人晝寐す

る男が在る。己も早速登つて見たが、段梯子の甚だ急なのが、小高い處に吹暴に立つて居るのであるから、眼下の低いのと、四方の廣いのとが冥眴と見えて、足が浮くやうに感じられる。上段に到れば、櫓は優に六七人を容るゝのであるが、持つて行れさうな心地がして、吾を覺えず欄に縋るのであつた。けれども又其の憫いもの見たさの處に一種の興が有る塩梅は、淺草の凌雲閣をばたくさと草履で昇るの比ではない。一つには是が船見櫓なる事と、其造の古風なる事とが、大いに好奇心を喜ばすのである。

己の考案にて、之を鐵材に改めて鞏固にすると與に、永く朽敗を防いで、遊客の爲に登覽の具に供するのは、決して無用の事ではあるまいと念ふ。新潟の眺望は獨り此の日和山有るのみで、而して日和山の眺望は畢竟此の船見櫓有るが爲である。然れば南にて彼の遊園有りて信濃川を翫ぶべく、北にて此櫓有りて日本海を見晴すべく、豈大いに之を修飾して、市

の面目と爲さずして可ならんや。近い〳〵と叫んだら、定めて火事と想はれうが、佐渡が近いのである。句有り。

　　莊子にありや綠なる何の鳥の浮巣

これで三たび佐渡を望むのであつたが、此日の如く親く相面して、分明に其の全景を伺つた事は無い。

　　佐渡で餅搗く、越後でならす
　　　佐渡は越後と一ねばり

と謂ふのは至極である。

　　佐渡と越後は筋向ひ
　　　橋を架けたや舟橋を

と唱ふのも亦至極。此に龜田鵬齋の航海到佐渡詩を思ふも、亦敢て至極ならずと爲さず。

孤島藐然太瀛外。　四垠積水望還空。
青天低處乾坤盡。　白日沈邊西北窮。
鰈海雲腥靺鞨雨。　蟹鄉月黑任那風。
此生不慣荒陬景。　聳坐只驚濤勢雄。

是は然る尼君布敎の爲彼島に渡らんの思立にて、此まで迢々と越されたのであるが、一日濱邊に出で、此の藐然たる孤島を眺めらるゝと、潸々と涙を流し給ふ、近侍の徒弟異みて、抑や如何なる事の在しますにかと訊ね參らせた。爾時尼君にも世にも悲しげなる御氣色にて、此の可恐い大海の波の上に笠の浮いたやうな心元無い處へ行くは可厭じや。命全して得還る事はあるまい、と渡海の儀は終に御沙汰罷になつたといふ物語。誠に孱弱き女性の心にて、爾危まるゝも理で、己の親類の娘に極めて險難がりの神經質の甚しいのがあつた。其などは向島へ花見に行つても、決して渡船に乘つた事が無い、眞中頃で船の底が拔けたら奈何せうと云

ふのが、常に彼の心を支配するのであつた。

今一つ佐渡に就ての話柄は、圓山溟北と云ふのが彼國に於ける前後一人の碩儒であつたが、一年京に行くと、舊幕時代の事であるから、彼地の者は佐渡ヶ島から渡つたと聞いて、さては鬼ヶ島と女護島との間に在る島で、其處に住む者は胴腹に孔が開いてゞも居るやうに希代がつて、佐渡と云ふは甚麼國で、島と云ふは甚麼物か、と切に其僕に向つて質すのであつたが、段々話を聞いた末に「國の周邊に欄がしてあるか」と眞面目に訊ねるから、彼憤然として、謊な事は言はねえものだ、國の中にも加茂湖と云つて、周匝の五里もある湖水が在るのだと息巻く下から、それおや清正樣の紋所見るやうな國じやな、と何處までも解らなかつたと、溟北翁の直話とて、其地の人が己に話して笑つたのである。

抑も己が佐渡の渡航を志したのは、全く此の日和山よりの遠望に興を發したのであつて、東京を出る頃、或人は新潟まで行きながら佐渡へ渡ら

ぬと云ふ愚は無いと誨ふるも有れば、忘れても佐渡などへ渡るものではない、風が悪い日にゝ半月も一月も船止を吃ふやうな、風濤の険なる處である、と又戒むる者もあつた。で己は那箇とも決せずに新潟に來たのであるが、逢ふ人毎に一遊を勸めて、其地の勝を説くのであつた。海路は今少し遠い事と想つたのが、案外にも鼻の先であつて、波濤は常に洶湧して、(兎浪)なる者が躍つてゐる事と想つたのが、案外にも滑にして油の如くである。猶更に己の心を動したのは、青畫くが若き美人の眉をも羞ぢしむる其容であつた。然しながら己ならざる人々も、又は船に血反吐を噴かんずる弱虫も、己の値つたやうな快晴の日に、此の日和山の櫓に登つて、此の大海の靜なるを眺め、此の佐州の麗しさを望むであらうならば、必ず踊躍して、大筏に浮ばん哉と思はずしては止むまい。

莊子にありや緑なる何の鳥の浮巣

と聲高かに再び吟じつゝ櫓を下つた。

第十二章

▲萬代橋

八景にて信濃川秋月とあり、大河の明月は偉觀も然こそと想はれたが、此の橋上の納涼も亦妙ならんと、其も想ふのみにて日中の事なれば、

遠山や馬も日傘も橋の塵

▲川口眺望

則ち舟江歸帆とある處、

川や海海や空なる嗚呼涼し

▲鍋茶屋

新潟第一流の酒樓で、閑靜と廣闊とを以て勝るのが行形亭、是は味を以

て稱せらるゝ。格に於ては亭の方が一段下るのであるが、各其特長を持して左も右も對峙する有樣がある。鍋茶屋の建築は古の新潟的で、謂はば總じて上方風である。料理に至るまで其趣が有つて、又較異るのであるから、箇々に離しては然もないが、づらりと並んだ所で物珍しく感ぜらるゝ鰈の冷膾。すつぽんの煮付、硯蓋が、淡雪（蛋白にて製したるもの）天保錢形の燒蒲鉾、榮螺の煮付、茶碗は鹽鮭に豆腐、小皿に枇杷、別に煮桃などゝ云ふ景色であつて、何分か勝手が違つてゐる。噂の如く味は皆宜しい。東北の邊陬にして此の美饌有る事奇也と驚れたのである。

東道の主人は、此樓の涼しき夕衣香鬢影の間に己を招いて、追分踊、盆踊、から囃子、と新潟藝盡を舞ひ奏でしめて、如何に、句有らん、聞かせたまへと盃を屬して、陰に己の意を問ふのであつた。

から囃子と云ふは、三味、太鼓、笛、鼓の合奏で、曲は（老松）であつたが、是は踊無ゆゑからと稱へたものであらう、則ち（長唄の下方入）彼地

では最も之を珍重する。

追分踊は讀んで字の如く、追分の地で大勢揃つて踊る、手は八體有るのを、歌に依らずに拍子を合せるので、究竟新潟音頭とも謂ふべきもの。

席上一句を拈る。

夏の燭海棠を看る夢うつゝ

尤も喜ぶべきは盆踊。大山酒の梅川と烙記の銘ある三割の樽の鏡と胴を、槌形の兩撥で絃に合せてカンカラコンコロと囃すのを音頭取に圍んで、唱ひつ踊りつ花の姿が輪を成して廻るのであるが、唱歌も異つてゐれば踊の手も異つてゐる、樽の音や拍子の異つてゐるに至つては無類の飛切で。手振と拍子とは筆紙の寫し得らるゝのでないから、此に其の唱歌の一二を擧れば、

染んで來たよ、梅干に紫蘇の葉、中の核まで眞赤でてつかで染んで

來た、
盆だてガンに茄子の皮の雜炊だ、餘り盛付けられて、鼻のてつから
燒いたとさ。

新潟や愁を知らぬ樽砧

樽砧といふは己の造語であるが、俳には盆ゆゑ初秋であるが、扱に因つ
ては雜にもなれば戀にもなる。但し此句の用は非戀と知るべし。

第十二章

新潟七不思議

一市内に杉の木一本の事。
一女土方の事。
一土用蠣の事。
一石屋根の事。
一女名の奇なる事。
一樽砧の事。
一川口の不便なる事。

是は七不思議中の最たる者で、苟も五港の一と稱せられ、現在も七港の内に數へらるゝ新潟にして、信濃川の推流す砂は港口を塞いで、小蒸汽船の出入が心に任せぬのである。而も水戸守と云ふ者が有つて、海門に

番船を浮べて、五十噸の船が出入の度に其の指揮を受けて、航路を教へらるゝ始末。聞けむ港口に壅る砂の爲に日毎瀬が變るので、其の水理を諳んずる者は天下一人の伊藤仁太郎とか云へる老漢有つて水戸を守るが爲に、總て此に集る船舶は、彼の操つる敎の櫂の一縱一横に税を拂ふ趣。然れば新潟港は新潟の港にあらずして、實に船頭仁太郎なる一私人の港であると謂つて差支無い。如此き有樣でありながら、仍ほ日本七港の一と謂ふを得べきものか。

若し彼の仁太郎の櫂が入るなかれと合圖を爲るならば、佐渡から三十三海里の波を凌いで、大川通の町まで泳いでも行れさうに間近く寄せながら、出ないよと乞食が聲を掛けられたと一般、悄々艦を回して又三十三海里の逆戻を演ずるのである。眞那の如く此の水戸は險惡を極むるが故に、仁太郎の言は直に龍王の意であつて、彼に從はざるが最期、船は藻屑となるの例、歴々證す可く、恐る可しと語傳へる。

此の壟斷の利を占むる仁太郎の富は、船頭王とも稱へつべく、天は彼に福する丈新潟に禍するのである。或人己に此地に於て何ぞ小說の材料を獲られたかと問ふので有つたから、答ふるにそ、材料は獲ぬが主人公を捉へた、即ち彼の水戸守仁太郎である。此外に己の五案外と云ふが有る。

一暑き事。

一美人を見ざりし事。

一魚類の味惡き事。

一信濃川の濁水を飲用する事。

一越佐汽船會祉の船賃不廉なる事。

第十三章

佐渡へ便船したのは七月八日の曉であつた。然るに此日歸航する齋藤、羽田の二氏を知る人有つて、不案內の己の爲に同行を求めた次第であるから、二氏の注意に因つて、度津丸の午前五時卅分といふ出帆に晚れざらんやうに、船着の近間なる其の旅寓に前夜一泊する事に成つたので、夜に入ると礎町一丁目の宿に赴いたのである。

川沿なれば涼しからんと想つたのが、然らぬだに鬱燠たる夜熱を、空も見えず建籠めた一間の中、蒸風呂ならば裸で入らうものを、汗は流れ息は窒つて、目は血走るかと惱まさるゝのであつた。其さへ苦しいに、蚊の多い事。骨も折れよと打鳴す一面の扇は、右に熱を拂ひ、左に蚊を逐ふと云ふ難局に當りながら、今一つ加ふるに、二三日前から右の臀に血瘍を發して、其がちくり／＼と痛む。

己が旅すると有れば雨の必ず伴ふやうに、能も血痔を出す事て、往年社中と吉野の花見に罷りし頃も、同じく是て、涙の零るゝほど辛かつたのは、初瀬寺の階廊を畏縮股で、アルプス越の野戰砲と言れながら攀登つたのである。日切地藏にて三日で一錢の願を掛けて、壺坂の透迤を横乘の俥で曳上げられて、獨り吉野の花に分入る後から、徒歩の同行の登り來る路々、己の拭捨てし紙を栞にして、病人の無事を知つた、と今に一つ話に殘る難澁を始として、其後も數箇處に惱まされた腫物が、又候お見舞申したので、思へば幸先宜しからず、此分では佐渡の道中記も艱難辛苦の條あるべし、と早くも覺悟を極めたのは可いが、此の有樣で十時に蚊帳に入つた暑さ、苦しさ、切なさは唯々言語道斷であつた。

すると、縣下の警察會議が有るとやらで、隣室に泊り合せた十名約の警官が、寄つて掛つて一場の論戰を開いた。問題は内地雜居後に於ける警察事務に就いてゞあるが、先づ三人の意見が衝突して、甲賛乙駁丙罵丁

笑、皆幾分か晩酌の酒氣を負つて居るから、雷の激する勢を鼓して、互に執つて動くのではない。喧々囂々として、十二時を過ぎ、一時を過ぎても止まずに論ずるので、始の内こそ面白くも聽いて居たが、何に爲よ一往議論風生の大音聲を揚げて、喝する時は疊を拍ち、笑ふ時は一度に哄と聲を合せるのが、前後三時間にも亘らうと云ふのであるから、(蚤虱馬の尿する枕もと)の安眠妨害となつて、鬪論は終結し、彼等は忽ち眠つて了つた後も、此方は耿々と取殘されて、二時過まで轉輾反側して居た。寐るとも覺えなかつたが、五時に近しと驚されて枕を擧れば、二氏そは や起きて膳も出さうな有樣に、慌てゝ顏洗ひに行けむ、瓶の中は雨水の如く濁つたのに、芥さへ幾多も混つてゐる。之で人の面を洗へ、口も漱げ乎、と暫く打眺めて居たのであるが、安ぞ怪まん、是ぞ則ち信濃川の濁水で、新潟の水は之より外に無いのである。但飯料にそ善く漉して用る、雑水にそ善く漉さずに用ると云ふまでの事で、而も之に一荷幾錢と

出して、市中の者は買水を為て居る。然るに水汲船の横着から、規定外の場所で怪しからぬ悪水を汲むのを、巡査に尤められて拘引されたと云ふ話も間有る。其の濁り加減と云ふものは、到底土足の外入る可からずで、有繋に傍の建水にて稍清めるのを含嗽の料に容れてあるので、其を茶碗に移して、不承ながら彼此用を足したのではあるが、近頃に覚えぬ不快の事であつた。己の識る者に江戸を最も得意の一人が有つて、曾て西京へ行くのに、他の荷物は無くて、龜甲萬を一樽携へたのが、大の手柄と為る所で有つたが、若し其人に之を聞かせたならば如何に計ふであらうか、と考へると獨り可笑かつた。

續いて盛付けられた飯の其の蒸前の熱さ、實に後までも思うて之に及べば、慄然として舌が縮むのである。早立の旅籠飯と謂へば、天下の不深切なる者に極つては居るが、如此きは人を虐るも甚しい。昨夜の宵から何も食はずに二時過までも起きて居て、今や一方ならず空腹を感じて居

る際、之を突付けられた四苦八苦は、旅にしあれば椎の葉などの洒落ではなかつた。

更に又己をして此の熱飯の恨を忘るゝ能はざらしむる一件の出來事が之に伴つて居るので、何に爲よ、右樣の空腹を抱へたのであるから、那樣のでも奈何にか喉に通さうと躁つて居る傍から、さあ、五時過ぎだ。今日は正午頃にも風が出る摸樣さうで、五時卅分には無相違出帆する。今もう郵便物が行つた、お早く〳〵と番頭が促き立てる。

風が出る！　出帆する！　飯が熱い！　匕箸はなか〳〵失するのではなかつたが、狼狽は察すべしで。飯は扨置き、出帆はともあれ、船に乘らんとして風が出ると聞くのである、山に行かんとして、蛇が居るのではない。謂ふべからざる惡感は胸を衝いて、

「風が出るのか！」と聞返したほど猶答が惡い。

「暴風の警報が有りまして、濱にも信號標も出て居りますさうで。」

暴風の警報、濱にも信號標、唯風が出ると聞くのと孰れである。砂の立つのも風が出るの、凧の揚るのも風が出るの、雨の霽れるのも風が出るの、暴風の警報と謂ふのは疊の上の語でない、第一氣に入らぬのは警の字であつた。

「それでも船は出るのか。」

「はい、正午頃までは大丈夫で御座いますから、それで出帆を急いで御座います。」

話の中に汽笛が鳴つた、不快千萬な音をたて。

同行の二氏も稍遲ふ氣色、己は益す心安からず、奈何したものであらうと詢れば、二氏は更に之を番頭に詢ると、

「何有大した事は御座いませんです、それに正午頃までは大丈夫と申すので御座いますから。」

所謂乘掛つた船である、然らば行くべしと議は決した。設ひ警報が有つ

たに爲よ。會社が船を出すのであるから、別條の有る冒航をするのでも無からう、揉れるぐらゐは波の上の常と、支度を急いで門を出ると、一陣の風は颯と面を拂つて、單衣に薄羽織では寒いくらゐ。爭はれぬもの哉、暴風の警報驗有ること已に此の如し。今朝は己が新潟着以來の風が立つのである。

大川前の越佐汽船會社の店前にそ乘客麕集して、晴々と旭の輝く下に誰一人彼の警報に就て案しるらしい顏色をした者も無い。パンを買つたり、梨子を直切つたり、其中を風は頻に吹いて、川浪そだぶ〳〵揚る。

さては是底の模樣に風濤の危きを夢てゐるのは、此の己のみてある歟。勝手不案內の儀とは申しながら可憐い事であつたと思ふと、與に親船に乘つた氣もして、今は唯艀の出るのを待つのみであつたが、五時卅分の筈が六時になつても沙汰が無い、小一時間も彼此して漸く艀に載せた。船を行るのを見るに、艪を用ゐずして、大形の櫂の長い撞木を兩手に把

つて揑ねるやうに水を掻く、之を練擢と稱へる。艫に二人棹を遣つて、川口の岸邊を蔽ふ連檣の林の中に煙を揚ぐる五號度津丸に漕付けたが、はや此處等は高浪を打つて、親く艀を寄せぬのである。乍ち昂つて即くと見れば、乍ち低く離れて了ふ、間を圖つて僅に空身で飛込む始末。其は可しとして、又不安心なのは、度津丸なる者の船體の輕少奄末にして、此の信濃川をこそ往來すべく浮べられたのではないかと見えて、排水量五十噸と聞えた。

時計を見れば七時に垂んとする、此の航程五時間と稱するもの丶、事實は六時間を費すと有る。風は四時間の後に起るとして、此の眇たる木片船は左にも右にも警報を要する風に遇はねばならぬのである、豈懼る丶に足らずと爲んや、と又衰弱せる神經を勞するのであつた。

船は直に出帆した。左舷に方つて（流末工事）の狀況を見つ丶過る程も無く、沙嘴の一邊に樹てる信號標は、半空高く揭焉に赤球を擧るのである。

船は徐々に浪を排いて海門を入らんとする時、彼方の波間に搖きつゝ小旗を立てたる一艘の船に人在りて、擢を把つて縱橫に畫するは、彼の水戶守が我等に向つて航路を示すのである。亟て無事を祝する彼の一擲を受ると齊しく、我が度津丸は日本海の水を吃して、全鱗始て動かんとする勢を作した。

第十四章

然れば俄に起る船體の動搖は、前に頽れ、後に傾きて、人をして甲板の座に安ぜざらしむるばかりであつた、況や臀に臼有りて、努めて桃尻に居る者をや。己は此の動搖の爲に(起上れ小法師)の如く弄ばるゝを禁じ得ずして、且苦み且懼れたのである。遠く望んで疊の上よりも滑なりと侮つた日本海は、僅に川口を出て之に就くと等く、此の瀾汗たる洪濤を揚るのである乎。然れば船は進んで今にも百立つ沖に出るならば、此に在つてすら既に此の駭く可き洶湧の、更に幾許鼓怒して已まんとするのであらう。六時間此波に揉れてさへ耐らぬと思ふに、之より未だ〱烈しく盪れて、それで可いものであらう乎。健體に於る心痛が其であつた、己は健體である乎。彼の血瘍は漸く熟んで、疼痛は益す加はりつゝ在るものを、嗚呼、噫、惡、天!!!

乘客の中に十六聯隊の兵士夫婦が有つた。其が最も己の目を牽き、又最も己の座に近つたが、船が此の簸揚を吃ふと、彼の若き妻は身を顫せて夫の膝に縋付くのを、そのまゝ兵士は右に引抱き、左に胸釦を外して、打笑みながら海風の吹送る凉を納るゝのであつた。彼は逾よ懼れて、終にそ夫の膝に乘つて了つたので、兵士も見るに忍びずして、顏と顏とを推付けて慰むるのであらう、呼くやうであつたが、後にそ然りともなくて顏のみを推付けて居た。

良有りて、「さあ、可し。」と兵士は妻を引起す時、己も其に奪れてゐた心を放さるゝと、船は遽に泰然として、繋れたるやうに鎭りつゝ進むのである。又慚づべきは此の物驚も例の勝手不案内の致す所で、畢竟は川の注ぐ勢の海の寄する潮と相歴つが、暫く彼處に激して水戸口の險を成すまでの事であつた。旋て目に入る物とては、指して行く佐渡の翠の外は有らぬ漫々たる海面に乘出すほどに、風は幾分か吹募る狀で、波は然

して高いと謂ふでもなかつたが、船が又少しづゝ盪るゝので、如何な事にも彼の桃尻が安穩に据ゑられぬので、枕を借りて横に成つたが、風が寒くて寐ては居られぬので、やをら身を起さんとすると、稍々船暈の氣が有るやうに覺えたから、又倒れて枕に就いて居る間に、昨夜の今朝でぐつすりと寐入つて了つた。餘に盪るゝので夢は破れたのが、正に十時といふ頃、首を擡ぐれば、佐渡は鮮に山又山の襞を疊みて、既に嚴しき島根と其形とを現じて居る。模糊たる新潟は、其處に眺めし佐渡の可懷さにも劣らず、畫の如く、打霞むのである。

船は始に（出し）と云ふ　己の順風を承けてゐたのが、いつか（あい）の風と稱ふる北に變つて、斜に逆から吹付けるのが、既に警報の氣を持つて一段と烈い。浪はと謂ふと、大さ三十疊敷も有るのが眞額に白泡を嚙んで、ゆさ〱と推して來る。兩面に此敵を受けて、船が五十噸であるから些と耐らぬ、速力の鈍ると與に振盪は強くなる。それに此の五號船と

云ふのは癖が有つて、船體が左に傾いて居るのであるから、盪るゝ度に左へ引けるのが、箕の口などを傾けるやうなもので、寐てゐる體がずるずると辷つて行く、這戻つたかと思ふと又浪が轞のずる〳〵。血瀉でも何でも恁う轉されては寐ては居られぬので、いでや起きんと爲る所を、船首の方から衝てられて、思はず尻居に倒れたが、此の尻居が尋常一般の尻居でないから、吽と言ふと、少頃は人事も不省に、其の疼痛と云ふものは實に膽先を貫くのであつた。（血瀉は譬に押させる）と謂ふが、譬と雖も甲板の狠毒に企て及ぶのではない。己は之が爲に生きたる心地もあらず、唯悶々として打伏して居た。

漸く疼痛が去ると又睡を催して、風島の辨天が見えると起された。實に風島、糯木崎、水津の燈臺、城が鼻、龍王岩や姫崎と、船は今小佐渡の背面を指して來た方針を轉じて、其の岬を廻りつゝ港入の態度を取るのである。旋て當面に顯れた兩津灣は、東濱、內浦の左右翼を張つて、親

鳥の塒に待つが如く我が度津丸を迎へた。やれ嬉しやと起にも漫とは起れぬほど、却つて灣内の浪は暴い。是は(あい)の吹懸けるのが港口に激して勢を作る爲で、此分では午後の船は出まいと噂さるゝのであつた。棧橋にそ着けられぬので艀を出す、と船は岸に遠く投錨した。見ると、其處に繋つて居る三百石積ぐらゐの船が、幻燈畫の難船を見るやうに揉れて居る。此方からは棧橋際を乘出して來る艀、高浪に艫を扛がれて、棹す人は隱れて船の腹ばかりが見ゆる。

那に乘れやうか、と己の膽を冷す傍に、同く見てゐた彼の兵士の妻は、物をも言はず泣出した。泣くのは決して無理ではなかつた。之に泣く者は獨り彼のみではあるまい、己の識れる限の女は皆泣くであらうと想はれた。

やう〳〵漕寄せた艀は、衝と來て本船と摩れてX字形に翻ると見れば、忽ち引去れて危き浪間に傾くのを、人々は我先と爭つて其に飛下りる、

船の者は殆いと制する、聽かずに推合ふ、引止める、紛々擾々として混雜を極むる躰は、宛然此船の今にも覆らんとするを命辛々免るゝやうであつた。

人數の三分の二も乘移つた頃、兵士の姿は突として舷に顯るゝと、正躰も無く縋付く其妻を小脇に抱へて居るのである。彼は効々しくも此の最愛の重荷を負つて、あはや寄來る艀に飛入らんと身搆へた。之を見たる己は魂消えんとして、

「待つた、待つた！　殆い、殆い、殆い！」

と兩手を抗げて遮る途端、

「殆い！」「そりや殆い！」「一處ぢや殆い！」「二人は殆い！」

と呼ぶ聲は湧くが如く艀から起つた。兵士は其妻を放した、すると舟が寄る所を、夫の合圖に女は飛込む、兵士も翩然と續いた。

此の一場の活劇に己は太く脅されて、須臾は胸の仍騷ぐまゝに、艀の隅

に竦んで居た。其間に入替り、立替り乘移つて、溢るゝばかり滿載されたので、

「もう皆乘りましたか、舟を出しますよ。」

と聲が懸る。ばた〳〵と又舷に顯れた者が有る。七十近い田舍爺が瘦羸れた病人の婆を搔卷に裹んで、やう〳〵歩けるのを介抱しつゝ出て來るのである。

はつと思つた己の五體は、千仭の壑に落ちて碎くる乎とばかり戰慄した。噫、吾家に在する祖父母！　此の祖父母を扶くる孫は無いの乎、此の老父母に冊く子は無いの乎。

「殆い、殆い！」　と頷ひながら聲は高くも出ぬのであつた。幸に今は艀の重くなつて居る爲に、兵士の妻の場合のやうにそ虞も甚しからずして、不思議にも怪我は無くて濟んだ。

若き夫婦よ、老いたる夫婦よ、己は向後再び卿等の斷じて船に乘らざら

ん事を祈るのである。或は知らず、卿等躬の心勞と危懼とは、傍觀者の己が心勞と危懼とに比して、却つて然ばかりにもあらぬ者で有つた乎。若し然あるに於ては、其の萬一の危難は猶ほ卿等の爲に懼るべきものである。

壯年にして且單身の己は、此波と此舟との如き何か有らん、と然して危むのではないが、若し之をして家に在る妻と祖父母とに見せしめたならば、又必ず今後再びと席を拍つて諫めずには措くまい。けれども傍より己の危むが如くは彼等の自ら危まぬと同く、己も己の危きは念はずして、再び此波を踏み、此艀に乘りて、此の心痛に遇はざる可からざる可忌さに、未だ渡航を了へざる艀の中に居て、早く歸航の苦艱を憂るのであつた。

艀は難無く棧橋に着いたが、さて紡ふと謂ふよりは、二本の太い麻繩で尾首を綁り付けるのであつたが、動搖は不相變逞しいもので、荷物も履

物も捨てゝ了つて、上に居る問屋の人夫が仁王のやうな片手を出す、其に縋つて曳やつと引揚げられるので、其狀の惡いことは、奈何しても血池の亡者が地藏樣の袖に取附くのである。因で棧橋に上つて見ると、生ける色も無く內俯に倒れて、片息になつて居るのもあれば、通路に嘔散して、蝙蝠傘を杖に腰も立たず呻いて居るのもある。子を抱いた女房の亂髮の額を抑へて、べつたりと坐つたの、或は杭に取縋つて水中に嘔かんとして膝を穢す者。彼の兵士の妻は浪に驚いて未だ胴間に伏して居る。老病婦はと見れば、いつか上げられて、己の佇む後に火事場の荷のやうに轉して在る。

風は益す募つて、鞺鞳と打つ浪は耳も聾るばかり、午後一時と云ふ日盛の空も陰慘として、見晴す海は何と無く凄氣を帶ぶるのであつた。其風に吹かれ、其浪に拍るゝ棧橋の上に狼藉として男女の姿が横はる、是何等の光景ぞ。己は愴然として去りも敢へぬのであつた。

同行者の語るにそ、風の浪のと謂つても、高が夏海の事で、冬場となつては是底に止るのではない、屢ば浪に甲板を洗れる、那樣場合の難澁は、實に目も當てられぬと。其の冬の浪を和船で乘切る昔の渡海は、如何に迷惑なるものであつたらう。吉田松陰の（東北游日記）にそ、

豪遊吾欲航佐州。自謂投鞭可絶流。
出雲崎頭拍手笑。隔海連山明双眸。
何者海若忽怒號。濁浪排空不可舟。
幾日延留尼瀨浦。起臥一樓如俘囚。
山川荒絶無勝境。移杖戸外何處遊。
夜深索々聽風雪。遠客無端生旅愁。
區々旅愁何須說。丈夫當爲天下憂。
君不聞西虜從來壯船艦。三檣掠遍五大洲。
嗚呼備海須要熱航海。求魚切勿緣木求。

不然或有事海島。　臨海茫洋施何籌。
隱憂悄々竟何益。　且禱明朝風力柔。

未だ外に三詩有る。時は二月の半で、海上に變は無りつたが、打續き日和が惡くて、風待の爲に頗る阨められたのである。

十六日將航佐渡。雹。舟不可發。午後晴。至暮風起雪降。十七日陰。十八日。十九日。廿日雪。廿一日晴而風逆。廿二日陰。浪穩而風順。巳時舟發。離岸僅里許。雨來風轉。乃復歸出雲崎。午後雨益甚。竟夜不止。廿三日。廿四日或雨。或雪。竟日不霽。廿五日。廿六日晴。而風逆。至廿七日始得發舟。延留十三日矣。

とある、以て冬海の險きを想ふべきである。更に橘南谿の（東遊記）を見ると、其の冒險は命に別條が無いばかりで、蓋し五十噸の汽船に乗つて風の涼しい夏の海を晝寐で渡るなどは、此上も無い命の洗濯と謂はなければならぬ。右の書中佐渡わたりの條に、

越後國直江津に到りけるは三月八日の事なりしが、今町の旅館松屋といへるに入りぬれば、越中にて親く交りし松軒といふ人、此間より此の松屋に逗留して居られければ、旅中の邂逅心慰みて打語ふに、松軒いふは、今宵此町より佐渡に渡る船あり、好き便船なればみづからは渡るなり、足下にも佐渡ヶ島一見したまひなんや、よき道連なれば、倶共に彼の島の名所探らんと勸むるにぞ、天氣は晴れたり、風は靜なり、又憖く好き便船も有るまじければ、今宵出づる事ならば、いざや彼地に三五日逗留して、風土をも見んものと、何心無く暮過る頃より船に乘りぬ。

纔に水手四人乘れり、客といふは松軒主從、予師弟のみなり、其外に荷物少々積入れて、いと小き船なり、殊に北海は冬より春に至り浪風荒れて、海上に船の往來無く、やう／＼四月初頃に至り船を出す事なり、此頃は天氣打續き長閑なればとて、未だ三月の上旬なる

に初て佐渡に渡らんとする船なり、是は諸方とも未だ佐渡に渡りし船無き折なれば、其內に荷物を積み渡れば、格別の利をも得る故に、危きを冒して渡る船なり、初更過る頃湊を出でしに、年老いたる船頭一人送り來て、船中の水主どもに言ふやうは、北の空に雲少し見ゆ、月の色も勝れねば、いかに此程天氣好ければとて油斷はならず、佐渡に渡るは大事の海なり、北に見ゆる雲動きなば、中途より急に何方へも船を着くべし、佐渡山近くなりても、風起れば、佐渡に取付く事難うして、北溟に吹放たるゝなり、若き者元氣に逸りて過失などすな、と繰返し誡めて歸りぬ、氣味わろき事をも言ふもの哉と思ひながら、帆にまかせて北海四五里が程出づる所に、北方の天と接せる所いと黑くなり、上弦の月入るほどに、其の色ます／＼怪くて、風やゝ變れば、水主ども氣遣ひて、夜明る頃にて西風や落ちん、東風にや變らんと口々に評議す、之を聞くに彌よ可恐く、又晝の程

北海を見しに、海中より水氣の揚りし事など思合せて、是は必ず明日雨風や起らんと思廻すに、安き心も無し、其内に風やゝ起り來りて波逆立ち、船のゆること箕を飜すが如し、岸遠く離れたり、殊に夜更けぬる事なれば、四方皆渺茫として便るべき處見えず、船頭に、何方にもせよ船を陸に着けよと言ふに、此邊にそ着くべき處無しと言ひて、船頭さへ船を操りかねて見ゆれば、今にもあれ雨降り來り、風いよ〳〵荒れ來らば、此船忽ち覆らんものをと思へば、心の中遣方無く、立ちても安からず、居りても安からず、何卒して一刻も早く恙無くて元の湊へ戻れかしと祈念し、是より以後は此事心肝に刻みぬれば、いかなる事有りても船には乘るまじ、と獨り心に誓ひ居たり、されども波鎭らず、西に盪られ、東に漂ひするほどに、心神惱亂して、誠に諺にいふ三年の壽命も促りし事を覺えたり、然るに天の冥助ありて、風又東北より吹出て、五更の頃不思議に元の直江

津の湊に入りぬ、其時の嬉しさ、誠に蘇生の心地ぞせし、松木屋急に上り、夜もすがらの心勞に身も太く疲れぬれば、其翌日は終日寐ねて休息す、云々、

己は此の大海に對して五十噸の汽船も輕少塵末を感じたのであるが、南谿の便船したのは、水主四人の小船で、而も彼の恐るべき惡時節の風波を衝くのであつた。難易は固より同日の論に非ず、唯昔人が諸般の事毎に勞苦するの深切を思つて、頗る今日の己に愧づるのである。

畏くも順徳上皇の御遷幸ありしは承久三年の七月、日野權中納言資朝卿の左遷は正中二年の十二月、日蓮上人の遠流は文永八年の十月。罪無くして配處の月見んと謂ふ己は、又此の古を仰いで無量の感に亂るゝのであつた。

二氏に促されて夷町に出で、字築地なる裏町に入りて、吉田屋といふ旗亭に案内された。

第十五章

此で中食の間に宿を求めて貰ふと、宿が無い。本間と云ふのにて、鑛山巡視に見えた岩崎男の一行が詰めて居る。是が午後の出帆に引拂ふのであるから、其跡へといふ齋藤氏の寸方であつたのが、風の爲にいよ〳〵船止と爲つてたので、これは御斷。外に野村と云ふのは、徴兵檢査官の宿になつて居て、是亦座敷が無い。其他一等下つた旅宿は、召集された壯丁を始として、親戚朋友と一人に五六人以上の附添が有つて、到る處に充滿ちて居る、漸く齋藤氏の斡旋で、諏訪神社の宮司安藤氏に一泊する事になつた。

風は益す吹くのであるが、なか〳〵暑い、そこへ酒は飲む、船中の勞は有るのに、來訪者に接すると云ふので、唯惘然として了つた。時に、兩津橋の稅關署の涼しさは、當國第一とも謂ふのであるから、之を訪ひた

まへと勸められて、町の見物旁出掛けたのである。
抑も此港は夷町港町の二箇町から成つて、其境に兩津橋が架る。

港欄干橋は眞中から折れよと
船で通ても止めりやせぬ

と夷甚句に唄ふもの則ち是で。町は較南北に長く亘つて、東に兩津灣西に加茂湖と、狀恰も眼鏡の玉の如く兩樣の水を湛へて、橋下に通ずる一道の流は、海と湖とを結び付るのである。言を易へて云へば、此の細長い二個町は大佐渡に架る橋とも見るべく、然すれば湖は又加茂の入江と謂ふべくも有る。けれども其實、波は互に通ふと見えながら、水に淡鹹の別あるからは、灣は灣にして湖は湖也、凡そ奇なるは夷港の地勢。恐るゝのは、此の町筋の何處にも名狀すべからざる惡臭を放つのである。忽焉にして肥田子の如く、膓擣の如く、或は臭叢の如く、渠泥の如く、鼻持も息遣もなるゝではない。最も繁華なる夷町の要路に於て其の始末、

所が右を視ても左を瞻ても、軒を連ぬる相應の店構、不潔の氣の洩れさうな露地が一つ見出されぬ。さては是が佐渡のにほひかと想つた。橋を渡つて港町は、大半漁師が住むので、其邊に掛ると、件の臭氣は益す甚しい。彼方此方の軒端に干烏賊が吊してある、辨慶にした炙魚が干してある、入口に鯣が積んである。他か知らぬが、其にしては臭ひ過ると思へば、果して有之哉、殆ど門並に紙札を貼つて、いかごえ有り。

鯣に割いた烏賊の腸を貯へて、肥料に賣るのである。其風は漁師町に止まらずして、彼の港町の商家までも、烏賊を買へば其腸を捨てずに置いて、猶且有りに爲るのは、紙屑や空壜の類と同格に扱ふものと見えた。苟も七港の一と謂るゝ地にして此の不體裁は、ゼントルマンの袴無くして交際場裡を行くと何ぞ異らん。之を佐渡一國の上より言へば、人にして磨かざる口中の臭きが如き者、大いに取締らずして可ならんや。

税關署の位置は、灣の形成る馬蹄の爪頭と云ふ處に當るので、見晴と涼

しさとに於て此上は有るのでない。増して船止になるほどの（あい）が吹く今日であるから、沖合から驀直に寄せるのが、應接間の窓々を穿つて目口も開けられぬ凄じさ、船に居るより涼しいのでは無く、寒いのであつた。此風の勢であるから、窓前の柵際に來ては打當てる浪は、地盤を動がせて轟と鳴る。趣の有るのは、此に一株の老松が幾百年の翠濃に枝を交へて、税關署を其の下蔭に掩ひつゝ、風に狂じ、波に鹽たれて立つのである。打眺め居るほどにおどろ〳〵しき四邊の風物は、何樣佐渡島根に吾居ると想はしむる。

署員の鎌原氏は此の松が得意で、己に其名を求むるのであつた。佐渡は謠曲の最も行はるゝ處であるから、村雨の松など可からう、浪の飛沫に濡れぬ日とてもあるまいと、其を村雨に見立てたので。（浦曲の波のよるよるは、げに音近き蜑婦の家、里離なる通路の、月より外に友も無し）と謠ふにぞ、須磨よりも波此許の一層凄寥の感は深い。然れば月の夕此の

樹下に徘徊して、千鳥を聽くの愁思は如何なる者ならん、それは風流と謂ふの乎、醉興と謂ふの乎、例の俳諧と謂ふの乎、餅の皮と謂ふの乎、空想と謂ふの乎、臻穿鑿と謂ふの乎、何と謂つて可いのか知らぬが、一夜は那樣目にも遭つて見たいと云ふ意を含んで、

夏寒み蘆火焚くべき松陰や

雜談に時移つて五時となつた。佐渡の朝湯は今だと聞いて、湯好の頓に痒きに堪へず、同氏と連立つて錢湯に行つたのであるが、存外に海士の鹽屋と謂ふべき者では無い。見付は間口一面の格子、入口に葦簾を下して、内の體裁にそ然して異つた所も無いが、土間から板敷、板敷から板間、板間から湯槽、と段々に築上げて在るのが目新しい。桶が無法に小くて、數が三箇許よりは無いのと、岡湯の槽が被蓋樣の制になつて居て、鳩の塒を仰向にしたやうに、圓い切穴が二つ穿けてある其に四合適るほ

どの柄杓が添へて在つて、一杯づゝ汲出す仕掛で、其の一杓が丁度小桶一杯になる、岡湯を吝むのは一躰に地方の習慣で、其がと謂ふと、皆風呂の中で擦つて了ふのであるから、些の上り湯として浴びるまでの用で、東京のやうに搔出すのではない。桶の少いのも其が爲であるが、慣れなくては中でぼちや〳〵遣るのは無氣味ゆゑに板間に出る、すると岡湯は不足、桶は無し、這々の體で上るのが常である。別して不斷に湯を遣ひつけた者は、染垂な穴の中から柄杓で汲出して、桶へ手拭を突込んだかと思ふと何も亡るやうなのでは、大盥の中で汗を流す方が夐に氣が利いて居る。尤も六厘の湯錢であるから文句を言ふのではない。但地方の錢湯の美事として、東京に勝る點が一つ有る、湯の中で放歌する者が無い。縱し有つたにしても、東京のやうに何か歌はざるを以て恥と心得た、那樣蠻習の有る國は無い。此を出て吉田屋に還り晩餐後夜に入つて安藤氏に投宿した。佐渡の旅寐の第一夜は、蚊に責められたと、血瀉に惱んだ

との外にそ、何等の事も無くて了つたのである。

第十六章

明れば九日、好天氣ながら未だ昨日の風が吹通して船止であつた。今日等は人々が己の爲に加茂湖の舟遊を催さるゝ話も有つたなれど、波は立つし、涼くもあると云ふので、明日に延びた。實は此方も血瘍が痛んで船中は迷惑の所、今日は舊暦の二日で、夷町通に市が立つと聞いたから、其へ散歩に出たのである。

大方は野天に店を出して雜貨、古着、太物、金物、青物、苗類、菓子、陶器、塗物、農具、家具等、專ら在郷向の物を鬻ぐので、相應の賑ひ。中にも居附の店を半分借りて、其に並べて居るのもある。判じ物のやうで可笑かつたのは、藝妓營業と云ふ札を掛けた家の、平素は格子を入れた表の間に、何ぞ他の商賣も有らうに、鐵物屋さんが店を擴げたもので。下の方へ行くと、鍬の柄を賣る男が、喞煙管で刄を着げて居れば、其前

に百姓が三四人踞んで話す狀など頗る好かつた。市の摸樣は他國に見ると相違した佐渡的の點が有るのでも無かつたが、新潟から渡つて以外の想あるのは言語である。此の島でありながら、都會の新潟の如き强い訛が無く、又其に似たる處も無くて、多く京辯を雜へる。之に就いては、古來の配處として雲の上人の頻々入込む事の有つた爲に、自ら其人を崇拜し、其語を摸倣したのが浸漸して、今日の方言を成す土臺を作つたのと、又一面にそ夙に京大阪への海路が開けてゐたのも、都言葉を齎す道であつた所から、其力も與つて、內外から學んだのである、と人の說くのを聞いた。

市を見物して少く上へ行けば、右に折れて濱に出た。片側は谷地といふ漁師町、取付の岸角に龍王殿の祠が立つて居て、其から長く張出した船着の大棧橋は、半まで夕潮に浸されて、雲の蒸すが如く高浪の打寄する度にゆら〳〵と震ふ。其上へ蹈出して見ると、撲き飛されさうな勢で、

方言に（山瀬）と稱ふる東の風が烈しく吹立てるのである。岩崎男の用船と聞えた北越丸と云ふのが、上を下へとばかりに揉れながら遠からぬ波間に繫つてゐた。
引返して件の祠の傍に來ると、向角は蕎麥屋であらう、看板も無ければ、那樣搆とも見えぬが、入口に伸板と麵棒とが置いて在つて、奧の框に二人相對に腰を掛けて、椀の蕎麥を食つてゐる。其が如何にも旨さうな黑い色をして居たので、忽ち一椀試みたくなつて、ひよろりと門を入つたが、實は聢と蕎麥屋と見極の付いたのでも無かつたから、
「内ぢや蕎麥を賣るのかね。」と聲を掛けたが、是は考へて見ると、餘り利巧な人の言ふ事ではない。すると、此方向になつて食つて居た一人が、
「さあ、お入んなさいまし。此方が虛いて居ります、どうぞお上んなさいまし。」

と箸を措いて其處等を片附ける。さては亭主か。亭主が店頭で食ふやうな始末だから、蕎麥を賣るかなどゝ云ふ客も飛込むのであると思ひながら、直と入らうとする處へ、駈出て來たのが女房、

「はい、一錢八厘で御座います。」

誰も直などを聞きは爲ぬのに、此嚊も客に劣らず相應に悦けて居て面白い。

さて彼の亭主の請ずる座に着いて、二人の樣子を見れば、其人は亭主でも何でもなくて尋常の客であつた。五十餘の律義さうな在の者、市にでも出て來たかと見ゆる。突如に持つて居た茶碗を己に差して、慇懃に一盃を勸る。はて面白い！　迢々來ぬる浦の苫屋に風の潮の鳴るを聽いて、斯の翁と斯の茶碗酒の對酌、忝なしとお辭儀無しに受けると、五合入の白鳥の口から滾々と番茶の如き地酒を注ぎながら、何處の旅の衆かと訊ねる。東京から來たと答ふれば、如何にも駭いた躰で、何しに御座つた、

と又訊ぬる。見物に來たと言へば、二人ともに逾よ呆れて、東京から態態佐渡を見物に御座つたのか、と四の眼に己を諦視するのであつたが、そりやまあ、遠方を好う御座りました、と喜悦面に滿ちて抵掌する傍から、今一人の翁が、私のもお一盞と差す。是又辭すべきにあらずと、兩手に受けた處は壯であつたが、なか／＼然う飮めるのではない。前のを一盃傾けて、後のは別の物に移して、双方へ返盃した。

彼等在の衆が東京から來たと謂ふ己を見て珍しがるのは、決して怪むに足らぬと思ゑるゝのは、同行した羽田氏の話に、兩三年前東上する汽車中で、何方からと問るゝまゝに佐渡からと答ふると、其の妻なる人の如きは吃驚して目を瞠つて、佐渡の者が日本人と少しも變らぬのが、返す返す不思議さうな氣色で、愚にも付かぬ事を散々訊ねられて、大きに困つたと謂ふ。

彼の翁も、一度は東京へ行つて見たい、と願に懸けて言ふのであつた。

其間に一錢八厘の蕎麥が顯はれたが、膳の上に二椀盛付けてある。下地は別に出たが、其の惡腥い事は謂ふに謂はれぬ。因て憶出したのは、昨日往來で空乾にした小鯵の編んだのを彼方此方で賣るのを見掛けたから、人に訊ねると他は干物として食ふのではなく、專ら在方で出汁に遣ふので、又蕎麥屋でも遣ふ但其は下等なので。誠に下等なのに相違無かつた。已むを得ず生醬油を取つて試みたが、それこそ逾出でゝ逾拙。手も着かずに殘した一椀と、別に一銚子の酒を命じて、彼の翁に贈つて出やうと爲れば、これは、餘りお名殘惜い。我等は又何の世花の都人と、此樣に手を取つて酌交す事の有るべきや、是今生の思出なり。是非に〳〵と左右から例の茶碗を突付ける。はて面白い！（かくばかり經がたく見ゆる世の中に、可羨しくもすむ月の、出汐をいざや汲まうよ）と又受けた少許づゝのを立ちながら傾けて、互に健康を祝して門を出ると、脚の蹌踉つくこと夥しい。

酔うた機嫌に、此のまゝ歸るも妙ならずと、又龍王殿頭に潮を觀て、そこを去つて谷地の漁師町を漫行する次に、鯣の新しいのを五把(百枚)と買ひ、饂飩粉に鹽味を附けて、銅鑼燒にして賣るのを見て、何といふ名と聞けば、おやき(燒餅)と云ふ。其は珍しいと、煖いのを十三食つて澁茶を飲み、夷町に入つて、烏賊切を二挺と野呂松人形の手遊とを買つて、兩の手の荷と共にふらり／＼と宿に歸つた。

第十七章

加茂湖は古名を越の湖と稱へて、周圍四里廿三町、十個村其水を環つて、南北に長く、東西に窄りて凹凸し、大佐渡の諸嶺其の鑑中に入りて、春秋の容を粧ひ、朝暮の雲を洗ふのである。

（年を經て積りし越の湖は五月雨山の杜の雫か……冷泉爲兼）又宗忍法師が（みだれ蘆のかゝる折しも己のみ青葉ぞ見ゆる鴨の湖）など稍趣の一斑を寫したるもので。凡そ此湖の奇たるや、之を景其者の宜しきのみに取るべきでない、船漕寄せし離れ小島の覺束ながらるゝに、何ぞ計らん、金北の山の聳えたるより猶目を驚して、此に漫々たる水の一望の外に溢るゝ碧を疊みて、逢山方得地。見月始知天とも謂はゞ謂ふべき大いなる者を得たる、是一奇。又は大海の怒濤東を壓して、眼眩き心傷む時、纔に頭を回せば如何。忽焉として山は悠に水は恬に、舟去りて禽眠る底平

和の圖を看る。前海後湖之を況ふるに、彼は猛者の戟を執りて逼る勢、此は高士の琴を枕にして慵き風と、坐らにして全く境を別にする想あらしむる處は、信に奇中の奇として賞すべきである。

鴨湖八勝と傳ふるのは、

△雨津橋夕照　△湖鏡庵晩鍾　△金北山暮雪
△椎崎歸帆　△籠米落雁　△鳥崎晴嵐
△五月雨山夜雨　△米山秋月

前年清の王黍園が此に遊んで、更に十景として撰んだのは、

△津橋曉棹　△鏡庵晩鐘　△金嶺殘雪
△椎岡斜照　△孤島神祠　△鷗洲波碧
△雨岫烟青　(以上は前の七勝を取る)
△福浦垂竿　△江郁晒布　△潟端漁舍

何處へ往つても些と風景が好ければ、食物に蠅の簇るやうに、直に八景

が附いて居るが、元來八景は天下に二つのもので、曰く瀟湘八景、是が古渡の原物で一つ、曰く近江八景、是が模造で一つ、此外にそ決して八景有る可からずで、琵琶湖のですら實は持餘して居るのであるから、模造の又模造の次第に粗製濫造などは俗の尤も甚しきもので、山水は指名點呼に因りて撿閲すべき者にあらざるを知らざる可からず。無理な鐔目を合せて、八景の書出をする酷算段の拙劣は、却つて景に對する人をして興を冷させるのである。他に多く逢着する八景の、劈頭から茶番と解つてゐるのは、此方も哈々と笑つて了ふまでゞあるが、此の湖の如きは佐渡一國の面目であつて、又苟くも北陸の勝たるべき者なるを、慭ひに八勝十景なんどの蛇足を添へたるは、山靈湖神を誹譏するの罪輕からずと謂ふべし。

第十八章

明れば十日も船止て、風はなかく收る氣色も無かつた。舟遊は又見合、もう明日と然うそ待れぬのは、佐渡一見の豫程二週間て、相川、新町、小木、都合に因つては松ヶ崎邊まで蹈出さう乎であるから、遂に此湖に浮ばぬのは遺憾であるが、再び歸來る頃にそ月も佳し、緣も有らば其節夜遊に興ぜん、と人々に契り置いて、午後一時半といふ程に相川を指して出發した。幸にも途すがらの覽るべき者に就いて、特に案內の勞を取らるゝ福島氏の同行を得たのである。

扨路順は湖水の北岸から大佐渡の麓を貫く縣道を蹈んで、最寄の名所古蹟を尋ねつゝ河原田に入り、眞野灣に沿ひて澤根に抵り、中山越して相川に着くのであるが、此日は午後から俄に蒸して、今俥を聯ねて出る空に、炎帝火龍を鞭つと覺しく、風の力は漸く衰へて、恰も湖の畔に來る

時、例の拙い音の汽笛が二聲ばかり聞えた。福島氏の曰く、船が入つたと見える、然無くば岩崎男の北越丸が出るのであると。吁、舟遊の日に舟遊は爲ずして、行くのではない日に行く、それは未だ可しとして、彼の血瘍の今日ばかり痛む日は無かつた。其の堪へられぬ俥を暫く下りて水邊の涼しい處に一息吻きながら、

遊子瘦せて水鶏に似たり湖の頭

路は遠し、又乘らざるべからず、乘れば輙ち痛むので、可成痛まぬやうに横乘をして、秋津、長江、吉井と過ぎ、頭上に金北、妙見の翠を仰ぎつゝ金澤村に入る。此に千種の里と聞ゆる道端の丘に本莊了寛師が發願に成れる明治紀念堂に詣でた。此堂の建立せられた主意は、征淸の師興るに當つて、佐州より出でゝ軍に從ふ者約四百五十名、内四十餘名の戰死者を出したと云ふ。則ち亡き者の爲にそ其の忠魂を祀り、生ける者の

爲に之其の軍功を彰し、一は以て彼等の義勇に報ひ、一は以て國民の志氣を勵さんと爲るに在るので。西洋館造の堂上に之、陣亡、凱旋兩者の肖像を懸けて、戰死者の携帶品を掲げ、戰利品の武具を列ね、四間四方の天井一面に色分の萬國地圖を書き、總ていと好く整へる堂内の經營、官に招魂者はあれど、未だ一私人が勸化の力に由りて如此き作善の營有るを聞かず、感ずべき篤志なる哉。己の携ふる佐渡全圖の折本も、亦斯の能化の手に成るもの。刺を通じて面會を求めたが、此にも在らず、又此奥を上つた寺にも不在とあるので、堂側の開導館と云ふ小博物館を硝子戸越に窺ひ、此より丘續に尾花崎の碑のある畔に到れば、國仲の沃野は眼界濶く横りて、頗る山容の愛すべき小佐渡と相對す。

眉つくる小佐渡の風の薫る哉

碑は故鈴木重嶺翁の記すところ、

承久の帝此國に遷幸あらせられし頃、こゝにも折にふれ出ましありしとか、親の名はさだかならねど、花といへるは、天さかる鄙には似ず麗しき處女にて、帝も御心寄せられけん、其家にいこはせ給ふこと屢ありしとなん、今にお花屋敷と稱へ、思川といふも其のあたりにて、こは帝をおふげなくも思ひ奉りしより、後人いつとなく其名を負せしとぞ、そのかみ愛でさせ給ひし櫻もありて、年經しまゝに老朽ちたれど、蘖は猶榮えて、昔の春ゆかしうこそ、熊野の御社のほとりに尾花が崎といへるなん、お花が崎にて、本屋敷村と稱ふるも、ふるくは花やしき村といひしを、花と本と草體似かよひたれば、誤ちて終に今の名になりぬとぞ言傳ふ、又淺島某が家に持傳ふる土器あり、こはお花のもとにて大御酒たてまつりし器なりと言傳ふ、彼も此も皆ありげに聞ゆ、されど此のをち〳〵正しき書の傳も

無く、唯里人の語繼ぎ言繼ぎたるを、なほ數多の年經たらんにそ、跡形も無く傳の失せなんが惜しさに、後の參考の爲一言志るしてよ、と某が請のまに〳〵かくなん、

明治八年五月　翠園のあるじ志るす

事稍〻須磨の蜑婦の物語に似たりなど打語ひて、此碑の下を去りも敢へざりしに、彼方なる熊野の社の森陰より、大聲に呼びかけつゝ走り來る者がある。或は了寛師の追ふならずや、と此方よりも前み行けば、果して然であつた。導かれて再び紀念堂に返し、更に開導館に入れば、諸方の寄附と師が丹精とに頼りて蒐められたる數百點の雜品は、館の名る如く、是に博く覽、治く渉らしめて、絕域の人智を進むる一端たるの緒に就く者であつた。彼の紀念堂と云ひ、此の開導館と云ひ、謂へば佐渡の爲には可慶も今新に白銀の花は咲出づるのである。

少頃閑談の次堂に一句の留題を乞れ、館に一品の寄贈を約し、新訂佐渡

全圖の餞を受けて別を告げた。

▲紀念堂留題

わすれじの勝鬨や蟬の諸聲に

第十九章

隣の中興といふ村に本間西蓮寺(東照山)を訪ひて、本尊たる日蓮上人眞筆日本三枚繼三幅一對の曼陀羅一軸を拜し、程近き藤津村に御井戸と云ふは、其水を硯に一念三千の妙用を籠め、六根清淨の筆を點じて、右の曼陀羅を書れしと傳ふる者なれば、行いて尋ね、又隣なる泉村に入りて黒木御所(和泉御所)の舊蹟に詣づ。

御蹟は僅に圃中の亂がはしき邊に、存すると謂ふも名のみに、磊石を破げる土の堆くなりて、側に一基の石燈籠立ち、梅、椿、楓、木槿、さては蔓苺、蓬、葎等の夥しく生茂れるに、形ばかりの柵を繞して、全く荒蕪に委せたる有様は、重嶺翁が(吹きすさぶ音ぞ悲しき、そのかみを思ひいづみの里の松風)も未だ其情を盡さゝるのである。申すは畏けれど、御身苟くも至尊に生れ給ひながら、如何にして彼の帝の御運ばかりそ、桑

滄七百年の今日に至るまで猶恁く拙く在しますにか、と覺えず暗涙を催したのである。

抑も承久の三年御齡二十五にして浮世の果なる此島に遷幸ありてより仁治三年の崩御まで廿一年が間、寐覺も逆賊憎き御無念と、都戀しき御歎とのみなりけんに、

　　かくまでに身の**あたゝまる**草の實を
　　　ひえの粥とは誰か言ふらん

と民家に在りて詠じさせ給ひしを思へば、衣食に事缺せたまひし御やつやつしさの程も推測られて、古今の哀を留めたる夢の跡。

　　日盛の草にも打泣かれける恨

低回して去るに忍びず、居れる悽愴の感に堪へぬのであつた。再び元來し路の葎を蹈分け、俥を待せた所に出て、松榮山實相寺に抵りて日蓮袈

袈懸の松を看る。此は祖師が市野澤の妙照寺より朝々來りて天拜せし處とて、高祖一代記の額にも其圖を畫く靈場であるが、在りし昔の松は寛永中の大風に折れて、猶其根を留むる傍に、今は形見の若木が植ゑてある。

▲此寺御松山の號もあれば

松は朽ちて御凉しさの遺る哉

裏門より近道を彼の妙照寺へ行かんと、幾處の山畑を横り、林を出入し、谷のやうな處にも下り、山の腰の如きものを傳ひ、後に乞傘を杖いて東奔西走するのであつたが、いつまでゝも山の中で、妙法華山妙照寺何に在りとも知れぬので、憐むべし、辛抱の行者も腫物の痛手に屈して、はたと路頭に僵れて了つた。嚮導の福島氏は頻に面目を失して、無二無三に獨り路を索むるのであつたが、四方盡く茂に塞つて見越が利かぬから、

何方へ行かうにも帷幄の中に計るなど丶云ふ器用な事が出來るのでない、空脚を踏んでは草臥れて、己の憩ふ木蔭に來て大汗を拭ふのである。

「寺の建物の事だから、木の蔭に屋根か何かゞ見えさうなものぢやありませんか。妙照寺にそ塔は有りませんか。」

福島氏は能く覺えぬと言ふ。

「市野澤の妙照寺とも謂れる名寺が、是底の森に隠れて見えんやうな、那樣小さなものぢやないでせう。」

佐渡唯一の法華寺たる大伽藍との答。

「それでは寺までは未だ距離が有るのでせう、近ければ必ず見えなければならん。」

己は天王寺の塔が谷中の森を抽いて遠くから望まる丶と同じやうに考へて居たのである。氏の言ふにそ、見ゆるか、見えぬかは審かにせぬが、妙照寺の在る處は、昔は一の谷と稱へ、今の市野澤と云ふ如く、擂盆の

底のやうな山間の懷に當るので、祖師も其處では旭が拜まれぬから、實相寺の崖へ日參した始末であると。

「成程是はお說に服した。それでは妙照寺は見えん事になりました。見えんければ爲方が無い、鐘が有りませう、有るなら些と鳴れば可い。鐘の音を聞いて方角を定め、遠近を測るのです。」

時計を見れば四時に三十分も間が有る。然も待れぬから、地圖に據つて覺束ない見當を付けて、徐々出掛けると、半町行くか行かぬに、妙照寺の境內を眞下に見ゆる裏門前の坂に偶然出た。噫、愚であつたと念ふほど又嬉くもあつた。直に庫裏に駈入つて一杯の湯を乞ひ、そこの上框に腰を卸した時は、再び動くべうも覺えぬのであつた。

寺內は四面綠の蔽ふ中に五町五段八畝強の地を拓いて、本堂は茅葺にして、普請も鄙びた者であるが、內の佛壇、器具、經座等の莊嚴なるは更なり、境內清淨に諸堂具足して殊に山門の高きに倚り、石階の長く疊め

る趣尤も凡ならず、信に宗崇の靈塲たるに負かざる者と見ゆる。
住持に會はんとしたれど、所化の言を托して之を拒むのであつたから、匇々出でゝ、僅に行けば石田堤、遙に川原田の町を望めば、稍近くに方りて西北の地勢聳ゆる處に、西洋館造の新築が見ゆるのは佐渡尋常中學校、是獅子ヶ城(又は東福城)の趾にて、本間佐渡守が世々の居城たりしも、天正年中上杉景勝の爲に一族攻滅され、後德川氏の天下となりて城は毀れたのであると云ふ。

第二十章

川原田の江戸屋に着いたのは五時であつた。是から相川までは丁度日一杯といふ刻限であつたが、何と爲るにも、彼の腰部は逾よ紅腫脹痛して、之に觸るれば其の大いさと熱さとは、番茶土瓶の胴中の如く、殊に此脚を曳いて炎天に跋渉した疲勞が其に加はるのであるから、座敷に入ると橫倒になつた限、梃でも用るのでなければ到底動くのではなかつた、因て日は高いが此に泊るとして、專ら手療治に力を盡した。

宿は後の窓に大佐渡の山を邀へ、表の緣よりは眞野灣の波を望むと謂へば、極て涼しさうであるが、前段述ぶる如き此日の嚴暑、暮方となり、夜分となるも依然たるもので、疲れて居るとて早くから寐て見たほど寐られぬ。幸ひ枕上の友には(佐渡俚謠集)の稿本を編者の川上氏から借りて携へたのが在つた。此に其の一斑を抄出すれば、

小木は澗で持つ相川は山で
夷港は漁で持つ

澗といふは灣の小なる者を指す、山は金銀山の事。

オロシヤ船なら千艘來とまゝよ
土屋長三郎さん來にやよかろ

土屋長三郎は佐渡奉行なりと云ふ。

空の好い時は新潟が見える
殿は新潟の川裾に

佐渡で咲く花新潟で開く
とかく新潟は花處だ

以下は己の過來し兩津より北國仲の地方に始りしもの。

見れば可愛や夷の横藻
いとし殿子のかゝり場だ

お松むごいものだ御番所の橋で
　落ちる釣瓶のさかおとし
彌平岩さん音頭の聲は
　七里きこえる峠超えて
出たら見てくらんせ四ヶ村の若衆
　二番すぐりの麻のやうだ

舟津四ヶ村と云ふ。

新保小鯛寺さん笹でおいち招く
　おいち笹無うて手で招く

小鯛寺、おいちの事未考。

中興三ヶ村和泉四ヶ村で
　立野道益さんの嫁無いか

立野道益醫者らしき名なり。

新保車で絲取るやうに
　物も言はずにうん〳〵と
貝塚者は知れる、胸に帯して、半草履はいて
　鳥が飛ぶやうにぴよこ〳〵と
音に聞えた毘沙門夜宮
　關根嘉藏さんが出にや闇だ
嫁に行くなら眞光寺庄へ行くな
　一に朝起二に山稼三に柴賣町通ひ

▲上七文字無き格

粉飯でも飯だ、加茂の般若坊も山伏だ
北山峠の見える石楠花みな欲しや
頭巾縫うて冠せ、尾花細手が寒うごんす
眞光寺だらり、七つ剝いたら夜が明けた

眞光寺境内なる(だらり柹)。

　　眠る目も覺ませ、前の三千苅は唯取れぬ

三千苅と稱ふる豐腴の地あり志如し。

　　下り風そいやだ、長木なんかね性吹きいこす

長木は村の名。荒馬を(なんが馬)と云ふ、(なんかね性)そなんかの性にて馬工連女の意なり。

第二十一章

翌日の朝飯であつた、皿に附いて居るのが、葛饂飩とも謂ふべき葛麵の太いやうな物、之に擦生薑と醬油とが添へてある處は、紛ふ方無く魚軒扱ひにしてあるのなれど、何の氣も着かず一箸試ると嚥下れぬほど腥い。實は烏賊の魚軒であつた。佐渡に來てから昨日までは打續き風の爲の不漁で、全で生魚と云ふものを口に爲ぬのであつたから、此に名物の烏賊あることを忘れてゐたので。縱し烏賊あるを知つたにても、其の魚軒あるを知るは難からんと思はれた。何も名物と再び試たが、如何にも腥氣が強くて味ふに堪へぬのである。

次にそ泥鰌の蒲燒であつたが、泥鰌は兩津に居て不漁の爲毎日のやうに食されたが、味の美なることと嘆賞すべきもので、吾人が常に謂ふ所の泥•鰌•以•上•の•味•が有る。是も佐渡の一名物と聞いたが、洵に然矣。

此の泥鰌に就いて順德帝の物語が有る。帝の事蹟の口碑に傳はるものゝ、必ず二三にして止るまいと思うて人々に質ねても見たが、理に於て盛に傳へらるべき御方の事が、不思議にも邈として痕跡が無い。恐くは己の聞いた此のお伽噺が一の唯一なるものであらう。

或日二三の農民打連れて、金北山に詣らんと、帝の住せらるゝ庵を訪れて、堂僧一處に詣らつしやれと御誘ひ申した。此國で堂僧と云ふのは寺を持たぬ僧とでも謂ふ意か、おい、和尚さんと謂ふが如く、大分安く見て呼ぶ稱で、當時の土民は皆此の上皇をいと輕く堂僧と呼ぶのであつたと云ふ。其は民多く此君を一天萬乘の至尊と知らず、又は知つても帝の何者たるを辨ざる輩にて、薙髮の御姿を見て都の坊樣ぐらゐに思うて居たものらしい。之に由つて觀ても、北條氏の內意と地頭の待遇との如何なりしか、帝の御不自由の幾許なりしか、推して知らるゝのである。扨帝の仰せらるゝにそ、今泥鰌汁が仕掛けてあるゆゑ、其を食うてから

一處に詣りたいものじや。少し待てと有るので、百姓どもは色を作して、御山は精進潔齋じやと云緘して、無法な事して怪我すまいぞと諫むるを、必ず氣遣すな、と泥鰌汁を吉たゝか參つて、一同と登山あそばされた。然る處途中に御疲勞ありて步み煩はせ給ふ時、山神の將軍地藏忽ち姿を現し、白馬を牽いて御迎に出でたれば、其に召されて易々頂上に着せられたと云ふ。

抑も神龜の古より、近く寶永の頃まで配流の地たりし此國の事なれば、位高き人々の世々に絕えず入來るのであつたのに、誰の事蹟一つ後の人口に膾炙する者とても無いやうであるのは、上皇の御事を始として尤も疑ふべきである。或は囚人の事を傳へじとて、代々嚴禁の制など有つたもの乎、或は又佐渡の民は語るを好まざる國人てあつた乎。爲に尠から
ず惜まざるを得ぬ。

第二十二章

名ある俳人にして此國に行脚した者は極めて少い。近い頃では暮雨庵曉臺、眞野の御陵を拜して、

　　鳴く蟬も腸有らば斷えぬべし

夷湊にては、

　　蚤に蚊に狂ひて夜の衣裂く

又戀が浦の吟は、

　　荒海を流るゝものか雲の峯

金北山に攀ぢて、

　　炎天の北斗ゆびさす巖かな

相川水金の廓に絃歌を聞くと有りて、

　　月悲し島傾城の夏をどり

など佐渡日記に見えたるが、そのかみでは池西言水がある。是の自筆は當地の早川氏（佐渡中學校擊劍敎師）の許に藏せらるゝと聞きしが、惜むらくは見るに及ばずして後に摸寫を得た。

金山にて安岡氏もよふせる　　紫藤軒言水

秋や木玉たかねにかへす山烏

こしの長濱

長濱やよそのあくびも秋の夢

湖にまかりけるに草々茂き

中にもながめありて

風の折々蒲や槌うつ水衣

此を發足したのが午前十一時、暑氣は昨日に變らず、彼の脹痛も手療治の効著志からずして、俥は例の横乘なり。窪田といふ村に入れば、群立つ松は一面に道の左を罩めて、下蔭にそ其の綠に朱を點ずる萱草の疎に

咲ける間より、瀲灧たる水光の洩るゝは眞野灣の濱に來たのである。行くほどに松は疏となり、密となりて、海の景色を待ふ面白さ。此が(越の松原)と聞くより、俥を下りて林に分入り、濱邊の石を拂ひて一服の煙を樂む。

はる〴〵と越の松原一涼み

街道に人聲がするので、振返つて見れば、女の魚賣が群を成して行く。天秤に籠を荷つて、一隊一樣の風俗、菅笠を戴いて素足に草鞋、寛袖の木綿單に前帶をして、方言にかたね裂織と稱ふる刺子の袖無の、長は胴より下るほどのを着て、誠にきりゝしやんとして居る。かたねと云ふはかたげの訛にて、かたね裂織は物を擔ぐるに用る裂織である。馬琴の(烹襍記)に出せる圖に小異はあれど、大躰を知る便ともなれば此に揭ぐ。裂織の事は同書にも見えたるが、况へば北海道のアッシと謂ふが如く、佐

渡特有の物で、其製の素樸なることは、尤も島國の風を徴すべきである。之を大別すれば二種ある、曰くきん裂織、曰くかな裂織、きんは絹の音便、かなは木綿絲の義。仕立方は長裂織、半裂織、かたね裂織の三種で、長ーーは對長の物、半ーーは半纏やうの物、いづれも冬季の上衣として用るのである。絹裂織は絹襤褸を木綿絲(昔は麻絲)の經にて織る、專ら赤を雜ふるを好みて緋縅の如く見ゆる。娘などは別して赤澤山の長裂織を悅びて、之を綺羅の第一に着飾るので。昔は村の役を勤むるとか、苗字御免とか云ふ身分の者でなくては、絹裂織着用の儀は堅く相成らぬのであつたと謂ふ。綿裂織は緯に木綿襤褸を用る、今は紙縷を雜ふるのもある。此原料の襤褸を(草)と稱へる、絹のは(絹草)、綿のは(織草)。烹襍記にそ、

さき織といふものは、江戸にて賤き者の脱捨てたる木綿のつゞり衣を、此國へ船積にして送り來るを買ひて着用す、之をさき草と云ふ、

彼のさき草を山苧もてひたと編綴り、道服の如くにして常に着るなり、

とて更に（さき草）の説を作して曰く、（さき草）は刺草にて、江戸より送る舊衣を刺して着用するゆゑ刺草と云ふにて、草は草稿の草の如く刺衣下地と云ふ義ならん歟と。己は唯（くさ）とのみにて（さき草）とは聞かぬのであつたが、（さき草）が正いと思はるゝ。然しながらさきを刺と考ふるにも及ばず、（さき草）は（裂草）にて、襤褸を裂いて織るゆゑ裂織、其の裂いた原料なれば裂草にて能く解るのである。又裂織は決して舊衣を刺したるものにあらざれば、刺草にては一向通ぜず。元來烹襍記に出せる佐渡の事は、相川の人にて石井夏海といへる好事家が馬琴へ通信したのを綴つたものであるから、例の臆斷も多く、誤謬も有る。其の方言を記せる條下に△芹をばいたと云ふとしてあるが、ばいたは割木の事で、今の若い衆はばいた腰を好む

柳細腰そいやぢやゝら

と云ふ唄が有る。因で、ばいたは薪と書いてあつたのを、走書の字躰を見損じて芹と讀んだものと見える。▲木履をげらといふに注して、げらは下駄の訛なるべしと有るのは、大いに當つて居る。佐渡の音訛はタ行とラ行との混同で、タとあるべきがラに出るから(げた)が(げら)になる。但下駄は(げら)と上を濁らずして(けら)と言ふ。故に己の國を(佐渡)とを言はずして(さろ)、(田樂)を(れん樂)(檀風)を(らん風)、又は(源の賴光)が(みなもろのだい光)(太閤秀吉)が(らい閤)、チツとリルとの音に就いては聞かぬのであつたが、他の各行三音の訛の甚しさは、然と知りつつ些と聞くと意味の解らぬくらゐの事が有る。苟も字を識る人にして然やうに不束な口吻をする者こそ無いが、到る處に是が耳立つて聞える。又恁云ふ唄が有る、

▲聞いて下んせ、佐渡なまり、

かん〳〵、とん〳〵、びい、さまさん、
ばいたに、あぐちに、ねまらんせ、
かったに、ねっから、だっちやかん、

かん〳〵はお坊さまと云ふ事、とん〳〵は其より下れる稱なれば坊ちやんにも當る歟。烹襍記にそ(愛子を勘藏といふ)と出せり、然ればかんかんは勘藏の勘を重ねたるならんか。同書に(勘藏は甘草なり、甘く育つるといふ義にや)とあれど、例の馬琴流の解說にて受取り難し。とん〳〵の義も未だ審かならざれど、己案ずるに、とん〳〵はとゝ(父)、かん〳〵はかゝ(母)にて、いづれも幼子の父母を呼ぶ口氣なるを、彼其者の稱に移し用ゐしにそあらざるか。

びいは汎く中より其以上の娘の稱にて、猶敬ゑてはびいさんとも云ひ、びこ又びやんは專ら中流に用ゐて、自から親しき意も有り。びいは美人の轉語なりとの馬琴の註は夏海の說か。さまさん士分の娘に限りて、是

も年少ければびいさんなり。ばいたは割木、あぐちは胡坐、ねまるは坐る。かつたには奈何もと云ふ事、ねつからは根からにて、吾人が用ると同じ。だつちやかんは埒明かぬにて、例のラとダの混同なり。

旦那といふ事をとつさん▲其の配偶をかゝさん▲長袖に限りて旦那と云ふ▲其室をぢよろ(女﨟)さん▲其家の母をおかみさん▲他に在りてそばばさん又ばゞやん▲おぢさん又おぢやんは其夫▲とつさんの一段下がおやさん▲かあさん▲其下がだんさん▲うめさん▲其の又下がだん▲うめ▲うめは母と云ふ意にて、其乳を子のうま〳〵と言ふより出でたりとの説あり。東京にておかみさんと輕く呼ぶ處をうめさんと云ふ▲賤しきもの其夫をとさんと呼ぶ▲中位にては子供其父をちやん、母をちや〳〵▲下か流はだんやん▲かやん。

東京の茶まが(釜)京阪のおもろい(面白)の類は、

▲かだら(身躰)　▲さうれん(葬禮)

▲ほてさん（佛）

▲つぶれ（釣瓶）

▲びちやる（打遣る）

▲わらんぢよ（草鞋）

▲けら（下駄）

▲くらすける（打つ事。吃はし付ける）

▲こつまかたい（擽つたい）

▲かたねる（擔げる）

▲がちわら（輕業）

▲まごとこ（間男）

▲ほいちやう（庖丁）

▲まみや（眉毛）

▲おとろしい（おそろし）

▲せんち（雪隱）

▲ちびたい（冷たい）

其他耳新しき二三の方言を擧れば、

▲乞食を「ほいと」

▲盲人を「先生さん」

▲竹の皮を「あめの皮」

▲泥を「べと」

▲左利を「ちよつかい」

▲襤褸を「どんざ」

▲蟻を「ありんぢよ」

▲戯謔を「じよんから」

▲德利を「錫」　▲安心を「おゝやれ」
▲酔たん坊を「酔うたんべい」▲私窩子を「ねこ」
▲無頼漢を「山犬」　是は昔金山の坑夫が横暴なるより仇名せしに始る。
▲やんちやんも横暴の義にて、是も昔は坑夫を「山の大工」又「大工」と稱へ、碎きて山のあんちやんと云へり。山は金山の略にて、あんちやんは兄貴なり。「山のあんちやん」を「山ンちやん」と約せしが轉訛して「やんちやん」となりし乎、と佐渡新聞の森氏が稿本(佐渡方言集)に出せり。東京にもやんちやんと云ふ語ありて、義も亦同じきは、佐渡奉行附の役人などの必ず相川より江戸に齎せしならん。
▲働かで口利く人を「だいない爺」と云ふ。昔西三川の金山盛なりし頃、山の麓を採掘するを遠くに在りて其土の崩落つるや否や見張する役ありて、常に「大事無い〱」と云ひしより起れるとぞ。吾が文壇の批評家たる

者輙すれば無用の絶叫を放つて、而も其間に己の名を成さんとする所、頗る此のだいないぢいに似たるあり。

▲往つたり來たりを「往つり來つり」

▲きたないを「べたない」

▲きたならしいを「やぜこない」

▲ぺたんこ(扁平)を「べつちやりこい」

▲手ぶらを「手びようらん」

▲無理云ふを「くじこねる」

▲贖ふを「まゝへる」

▲無愛相を「ぶすこき」

▲大きに難有うを「出來志ました」

▲乾魚を「四十物」

▲催促するを「せたげる」

▲嘘つくを「おんべりこく」
▲尤も宜しと云ふ處を「それでぢやうだ」
▲雑作も無い事を「おてゝこてん」
▲下賤の者に對して「うんしや」と云ふ。（おぬしは）なるべし。
▲下流の婦を呼ぶに「あば」と云ふ。
▲やたらと云ふ事を「なぐそへぐそ」
▲落つるを「ぼろめく」
▲せつないを「てきない」
▲諷諫を「ゑご」
（以上森氏の佐渡方言集稿本に據る）

第三十三章

扨此の松原は遠く八幡の雪の高濱に連つて、眞野の入江の正面は一望渾て松ならざるは無く、左田切須崎、右臺ヶ鼻に抱かれて眠るが如く波の靜けきに、折しも日は高く長汀數里の翠に映ふ風情は、おどろ〳〵しき荒磯の配所として豫想に畫いた佐渡の景色なる者とは全く相反して、明媚愛すべく、樂むべく、將終に恍然として忘れしむるのであつた。順德帝の御製に、

啼けば聽き聽けむ都の戀しきに
此里過ぎよ山ほとゝぎす

とある其の八幡の里の濱續なるも幽しく、此に不添森の古名あるも、又何やら忍ばるゝやう。己に佐渡一見を切に勸めた在京の某も、躬は未だ遊ばずとあつたので、林の松の葉を摘んで、彼（はる〳〵）の句と一つに

封じて、不取敢郵送したのも、此の風景を愛づる餘に出でたのである。窪田村を越れば、炭屋町、五十里町、此にも名高き銅器師の琢齋あり、と車を停めて其人に會ひ、二三の作品、蠟型などを一覽したが、手腕の佐渡を超脱したる目覺しさは、如何にして此島に巧ありや、と唯不思議に堪へぬのであつた。

澤根に入つては(下の茶屋)の名物、

　　澤根通れば團子が招く
　　　團子招くな錢が無い

と唄はるゝ澤根團子ありと聞きたれば、必ずそこに一服せんと思つて居たに、いつしか通越して、相川との境なる中山峠の新道に掛つた。此の峠道は恰も大佐渡の西の出鼻に墨繩を打つたやうに、澤根より西北の相川に向つて山の脊を横截るのである。山中多いのは合歡の花で、當地では合歡(がふと濁らず)と云ふ、五步に十步に、右に左に眞盛の梢低

く、其の下道を佐渡牛と稱へて此國のは愛らしいほど形の小いのが三々五々と荷を負つて行く。登りつめて相川の海見ゆる邊にて、

涼風のからむ馱牛の角ふりて

文祿慶長の昔大盛を極めて、

鶴が舞ひます鶴子の山で
御山繁昌と舞ひまする

と歌はれた鶴子坑は、往來から東に白子嶺の中腹に方つて其の道が望まるゝ。又相川に近く此の山續に二岩と云ふ處が有る、道の左右に大岩が門の如く對峙してゐるので爾名けらるゝのであるが、其より奥に行けば三の洞窟が在つて、團三郎穴と云ふのは、昔から此にゐ團三郎と云ふ古貉が棲んで、神出鬼沒の働を作すと傳へらるゝ。元來佐渡にゐ狸、狐が一切跡を絕つて、人を魅すも貉、人に憑くのも貉、不思議を示すのも貉

と、貉が佐渡の怪異を司るやうに信じられて居る。而して此國に貉の多いのは、昔金山にて吹鞴の用が有るので、其の風穴の皮は貉に限るところから、之を山に放つて野飼にしたのが繁殖したとしてある、因で佐渡貉といふ語まで有るくらゐ。團三郎は之が首領で、件の窟の中に館を構へ、其身は人の形を成して、妻あり、妾あり、奴僕ありて、大家に等しき生計をして居るとの言傳。箇程通力自在の團三郎も犬に逢つては克はぬので、町へ買物に出す人足が欲さに、薄鈍い者と見ると神隠をして穴に連れ込む。すると其者は忽ち自失して歸るを思はずなる、若し暇を請ふ事あれば、錢百文を給れて、之を遣つても一文だけ殘して置けば、財布の中は始終百文になつて居ると敎へて家に返す。其の無盡藏の期限は必ず穴に勤めた年季の數に應ずると云ふのが、疑ふべからざる奇談として里俗の説く所である。

團三郎術をくらべよ夏の雲

下り〳〵て坂の盡る處は相川の町に入る處で、そこを海士町と云ふ。隣の羽田町に入れば、聞きしに勝る繁昌は、

相川で褒めた在郷育にも珍しや

と唄ひし天領の昔にも及ばずとも、猶優に佐渡の都たるべき市を成して、理髮所を覗けば、明晃々たる大姿見の五面も懸列ねたる凄じさ、或は菓子屋、呉服店、或は銀行、電信局、醫院、活版所、割烹店、旅館、道具屋、辯護士事務所、或は舶來小間物、氷水、何が無い者であらうと見廻すにも、道を夾んで店と店と、店と店と、店、店、店で目眩くのであつた。

第二十四章

羽田町の高田屋と云ふのが差れた宿で、之に着いたのが午後三時頃、未だ風呂が立たぬと云ふので湯屋に案内されたが、大躰は夷港のと似たもので、唯相川だけに幾等か湯屋らしくはあつたが、如何に夏とは謂ひながら、何の蔽ふ物も無く、浴場の殆ど往來へ丸出なのは、此の都會たる場所だけに一層淺ましかつた。然かと思ふと、湯錢を齢割にした手際などは明細なもので、

一歳より六歳迄　二厘　　七歳より九歳迄　三厘
十歳より十四歳迄　四厘　　大人　六厘
合計金一錢五厘也、

那樣ことは書いてはなかつたが、更に抱腹絶倒すべき掲示は、板間の羽目に杉板を打付けて、其文意に曰く、佐渡にて在來一種の眼病が流行する、それは風習として入浴の際不潔の

局部を洗滌せざるが、原因の一であれば、諸君に於ても各自十分に注意ありて、若し浴客中に不都合の所業ありと認められたらば、速に告發せられんことを請ふ、右警察署の諭示を奉じ云々。
其原文と云ふのは甚しく露骨なもので、最少し書きやうも有つたらうに、餘り人を馬鹿にして居るのである。淺草奧山の猿茶屋にして御持參の食物堅く無用といふ札が出してあるが、件の掲示の下に赤裸で押合つてゐるのも、決して禽獸を離れずと觀じられた。
尤も、此國に限らず、獵場にして能く有る眼病であるが、昔から佐渡目と謂れて、目が赤爛になる、其から延て偏盲になり、失明になる者が澤山ある。或人が祭禮の時己の門を過る者を百人まで數へたれば、其內兩眼無疵の者僅に三十何人であつたと云ふ位、因て右樣の掲示も實は已むを得ざるに出づるのではあらう。
是が（佐渡目）で、（佐渡牛）あり、（佐渡貉）あり、（佐渡坊主）（佐渡魚）

（佐渡鰯）。（佐渡坊主）は此國多く僧を出すゆゑで、（佐渡魚）は方言すけとうの借字で、海の深き處に棲むと云ふので、魚偏に底の字をも書くが、鱈に似て小なる者。

五時頃福島氏は用ある身の是まで同行を辭して去つた。晩餐後羽田の濱に出て見れば、恰も日の入際で、波を離るゝ凡そ一尺とも謂はまほしき邊に、宛然紅玉の大いなるを懸けたる如く、看來れば淸雲遠く露潮平にして、茫々たる日本海上に唯此の一團の耀く物在るのみの眺望は、較粗大にして味無きに似たれど、豪放なるに於て、人をして氣を旺ならしむるに於て、自然の甚だ高きを感ずるに於て、尋常一樣の夕榮を見るの比ではなかつた。

此濱の風景に自在なることは、其を表にして、裏にも別に月雪の友たるべき一彎雋麗の汀を控へて、故丸岡南陵の（幽岬與富岬。左右張鳥翅。中間半倚山。瓦屋魚鱗次。人口一萬餘。市街七十二。）と作りし如く、其の左に

盡る處が、西南に當つて春日崎と斗出し、右に曲らんとして富崎、千疊敷、横島と散じ浮ぶ。下相川、羽田、下戸の町は其間に列り、東に鑛山を深く負ひて、淺きに倚りて人家の簇るを上町と稱へ、山と上町と下町、濱と海、と低う五段に成つて居る雨の端が一筋に延びて、或は危巖を起し、或は斷磯を點して、相川全景が又好箇一顆の盆石を形成つて、沒變化の大海と相配するのである。最も此に風情を添ふるのは、濱砂利の玲瓏として渚の踏む所皆白く、之を拾へば箇々玉にあらざるは無い、其が颯と來る浪に洗るゝ傍から、夕日の紅に染つて、異さまでに麗しと見れば、忽ち寄する浪の下に薄緑の色を成し、又顯れて逾白からんとすれば彼の麗しく、一波去りて萬珠爭ひ輝く狀は、書にも語にも上すべからざるもので、眞に蓬萊が島の珠を磯と爲すと謂ふも是なり、と目も放たず恍惚として立盡すのであつた。子細に石を取つて見れば純白なるは石英質、渥丹なるは赤玉、淡紅、又は黄なるは瑪瑙、紫なるは紫石英、金梨

子地に輝くは銅鑛、黒白相錯るは金鑛、其他に名も知らぬ色々數々を含む、けれども最も石英質の多く在る爲に白玉を敷いたるやうに見遍さるるのであるが、又其が掲焉に且美しくもあるのである。

日は落ち、海は昏くなるまで、此濱を逍遙する程に、はや沖の方にそ烏賊船の火の五つ六つばかり凉く點るのを見て宿に歸つた。主の曰ふやう、明後十三日より三日が間鑛山祭にて、猫も杓子も盃踊に狂ひまするが土地の俗で、盛る時刻にそ往來が踊に成つて了ひまする。三日間夜晝無しの大騷で、些とお喧しうは御座りませうが、お笑草なり、お土產なりに、佐渡御見物にそ好い時お越になりました、とは誠に又無き仕合であるが、さて其の祭の前一日に當る明日の鑛山一覽は如何あらん、仕事も定めて早仕舞などであらうし、三日過ぎての十六日とても、皆疲れて半休であらうと話す處に、三菱製鑛會社の岡部氏なる人が面識を求めらるゝのであつたから、早速委細を問合せ、且製鑛、採鑛の縱覽、附けて其掛の說

明を得べき便宜を與へられたので、乃ち明朝を期して同氏を會社に訪はんと十一時に別れて、蚊帳に入つたのが十二時。例の如く暑く、例の如く睡られぬのであつたけれど、川原田の江戸屋でも慥であつたが、佐渡にて盗人が無いと云ふので、夜中そこらが開放の暢氣、庭から月が差込む、風も有るほどは枕に通ふ、這麼嬉しい事は無かつた。

蚊帳つりて鎖さぬ御世にあひ川や

第二十五章

十二日の午前九時、羽田町の宿を出て、表通を北へ鹽屋町、石扣町、小六町、と過行けば、鑛山より落來る濁川の海に注がんとしつゝ町を横截るに度せる橋がある。川は製鑛所より排泄する酸化鐵に染められて、流も岸も洲も石も燃ゆらんやうに皆赤い。

　　鴨が棲むとはむかしの事よ
　　　今は濁川泥鰌が棲む

と云ふ其の今も何時の昔であるやら、又相川の古名鮎川とあるも、曾て此川の清冽の水に鮎の群を成した日があつたので、金山開けて後の濁川であらう。橋の北詰より右折して濁川町を爪先上りに小半町も行けば、直に三菱會社の門前に出づ。濱邊なる貯炭所より構內に架る綱車道（ワヤツラムエイ）は遠く數里の山中に延いて、半空高く炭車の往來する狀は、

籠の渡の危かりしを想しむる。約の如く會計課に岡部氏を訪ひ、分析所の中本理學士に面會して、製鑛所に案内せらる。

凡そ採金の事は、一に採鑛、二に撰鑛、三に製鑛、四に分析と四段の手續を要するのであつて、其内最も複雜なるは製鑛の一事で、搗鑛、沈澱、混澒、溶鑛の分工場を有する。是等の工場は構内の南に劃り殘したる山に倚りて層々棟を疊み、彼の綱車道は此邊を過ぎて、石炭を分配しつゝ往きし車は、山に抵りて鑛を載せて還るのである。北側も亦山を鑿てる斷面に限られて、其麓に庶務課、鐵工場、納屋、分析處等の建物が並んで居る。構内に入つて先づ奇を呼ぶのは、當面に聳ゆる山の頂より腰まで深く眞二つに裂けて、恰も蟹の鋏を竪てたるやうに山骨赤く分れたる隙より天の蒼きを望むのである、之を(道遊の割戸)、古名(靑柳の割戸)と謂ひて、相川八景に秋の月の名ある處。其の大斧鑿の跡は殆ど天工に逼ると見えながら、鑛脈の然やうに蟠まりしを尋ねて採掘せし昔の名殘

を留るのである。

第一に混汞所に入りて其用を看るに、山より劉出したる上鑛中鑛の石を、嚼巖機、搗鑛機等を以つて紛碎し、之に水を加へて攪拌鍋に容れ、更に混汞鍋、分離鍋に移して後、水銀の作用に因りて始て銀色の泥樣を成す金銀のアマルガムを得る。

此に渣滓として生ずる混汞尾なる者と、搗鑛所より同じく生ずる搗鑛尾とを移し來りて製錬する所を沈澱所と爲す。唯見れば砂の如き、右の二種を混和せる者の中にさ、猶凡そ金百萬分の四、銀十萬分の九を含むのてあると云ふ。驚くべき化學の力は其の四と九との有るか無きかの微利をも餘さず拔去つて、些の遺憾無からしむると謂ふは正に此事を指すと思はるゝ。

混汞所に隣りて山の一級高く鎔鑛所在りて、更に地上よりは幾百級の棧道を登れる處に置るゝ沈澱所に通ふ、佐渡目、或は片目の老若の運搬婦

は、彼の混澒尾を盛りたる塵取様の箱を負ひて織るが如くに上下する。此の急坂の頂に立てば、西の方朝鮮、韃靼の空を遠く、

　　浦風に袖をまかせて釣る魚の

　　　いかに涼しき舟居なるらん

と（ゑみ草）の作者藏田茂樹の詠める波路は眼を射て明かに、其の緑を一線に抹して架かる鋼車道を、蜘蛛の度るやうに炭車の黒く蠢く景色は又見る可きものである。

沈澱所に入れば、乾鑛爐に投じて炙らる件の兩鑛尾は、赤色の熱砂と成りて紛々と衣袂を撲ち、場内は全く丹霞に罩められて、人の面焦るばかりに輝く凄じさ。此に濕へる砂は乾されて鹽化物と成るを、爐の下級に据ゑたる焼鑛庫に入れて放冷し、轉じて浸出槽といふに移すと與に次亞硫酸石灰を注入して金銀を溶解せしめ、更に沈澱槽に送りて、酸化石灰を加へて沈澱せしむる。彼の濁川の血を流すは、此に滾々たる酸化鐵の

泉を成じて場外に棄てらるゝ爲である。扨又此の澱物を取りて壓搾機に掛れば、黒色なる粘土狀のケエキ（菓子の義）と稱ふる物を得る。此中には金一萬分の五、銀百分の二乃至三約を含むので、之を又鎔鑛所に致して精錬する。

鎔鑛所の用は專ら右の（ケエキ）と最上鑛とを製するので、鑛は之を別つて、最上、上、中、下の四種と爲る、此分類は撰鑛の掌るところで。上中の二鑛を製するが混澒所、中下を扱ふが搗鑛所と、各其能に由つて其職を別にするのである。

鎔鑛所に在りては、二種の原料を培燒爐中に燒きて、鎔鑛爐に入れて鎔し、鈹と稱ふる物を作る。爾する時は鍰（俗字柄實）と稱へて石炭に似たる鍛冶糞とも謂ふべき物を得る。是は再び燃料として其爐に用ゐて鎔解の効有るもので、聞いて見るほど一物として駄目の無いこと夥しい。始に得たる皮は精鈹と云ひ、之を又燒き、又鎔して銅鈹を得れば、更に鉛

を加へて鎔解せしめ、貴鉛(卸地)と黒銅とを作るを俟つて、最後に分銀爐に容れて貴鉛より金を拔つのである。
是で略製鑛の模樣を知り得たので、中元氏は再び己を分析所に導いて、此に精錬せし重量廿キロの燦爛たる煉化石大の金銀混和せる一塊を取つて示さるゝのであつた。是より進んで搗鑛、撰鑛の三場を巡りて高任坑に抵り、そこに豫て宿より運ばせし午辨當を開きて後、天晴坑下りを試みんと企てたのであるが、はや十二時に近かつたので、中食の爲宿に引返して、更に岡部氏に伴はれて發足したのは彼此一時であつた。
直に往いて沈澱所の後に出づれば、綱車道の停車場あり。此より路は始て山に入るので、一徑の岨を拓いて、之に軌道を敷いてある。左側に沿ひて、構外とは謂ひながら甚だ近く山上に建續く人家は、巨蟒の伏したるやうに猶奧深き邊より蜿蜒として來れる上町の一部であつて、元來相川なる者の發達は、金銀採掘の目的から移住された山中の繁昌が、終に

は麓に及び、海濱に播り、貸した庇が母家たる都會に成つたのであると云ふ。

之に就けて思合さるゝ談は、近來評判の北見國枝幸地方の沙金一件、那に第一着の手を下したと稱する採集者に出會つて己の友人が聞いた中に、先づ茫々たる無人境に彼等が足跡を點する時は、亟で來る者は第一に鴉で、是が食物を見付けて直に小屋の周邊に聚ると云ふ。次に何が來るかと思へば、酒が來た。捷い奴めがアルコオルを一鑵脊負つて險を凌いでお出だ、而して之に水を叩込んでは一盃賣を爲る。瞬く間に其の一鑵を六十圓以上に賣上げて、還れば直に出直し來る。酒の次に何が來たか、如此して口腹の慾は既に充されたのである、扨は其他に彼等の飽かんとする者は色に外ならぬ。便ち谷を渉り、蘿を攀ぢて、大膽不敵の女が此までも踏分けて來る。因で始て笑聲も出れば、人氣も附いて、之から段々に里らしくなると云ふのであつたが、相川の開闢とても其通、必

ず鴉と酒と女とであつたらう。

道の左は濁川の上流、北澤川の谷に臨みて、前岸に續く山又山にて、彼の綱車道が透迤と絕ゆるを知らざらんやうに長き縷を引くのである。

（三十七年十一月）

明治三十七年十二月

門人
斜汀　泉　豊　春　校

紅葉全集卷之六終

紅葉山人傳

清初文章有三大家。曰汪堯峯。曰魏勺庭。曰侯雪苑。堯峯以法度勝。勺庭以鍊磨勝。雪苑以才氣勝。汪六十七。魏五十七歲歿。而侯則三十七歲死矣。吾紅葉山人。以才氣兼鍊磨。會歿年與侯同。可謂奇也。或謂余曰。三大家文章。與山人體裁不同。子併稱之。不亦謬乎。余曰。否。和漢古文時文。種類自別。然其巧妙動人則一耳。余之以山人比雪苑。自信其不謬也。」山人姓尾崎。

名德太郎。東京人。幼聰慧。卒業小學中學。進入法科大學。二年。移文科。然不喜爲科程所羈束。去與山田石橋巖谷諸才子。結硯友社。發行我樂多文庫。奇思如湧。頗多警語。人始異之。後參讀賣新聞社。著小說。如伽羅枕多情多恨金色夜叉最其出色者也。平生熱於情。而鍊於文。又與友交極厚。性有俠氣。所謂江戶兒氣象。山人能得其神髓矣。嘗患胃癌疾。荏苒不愈。明治卅六年十月卅日歿。所著數十種。友人輯爲一書。名曰紅葉全集。大行於世。」盖雪苑全書二十卷。

其詩文。才氣橫逸。使讀者莫不想見其人焉。山人之著亦如此。爲人所服宜矣。余與山人善。爲作傳。

依田百川曰。山人歿後。遭其門人柳川春葉。春葉謂某得先師遺筆一篇。開見之。即先生所著譚海。先師手抄其數節者也。蓋先師敬仰先生久矣。乃出示之。撿其歲月。係余未與山人締交以前。不知余何以得之山人也。人在世間。得一知己足矣。山人眞吾知己也。嗚呼山人亦一偉人也哉。山人履歷行義。門人所輯錄者詳。余不復贅焉。

明治三十七年十二月。

友人學海居士　依田百川識

傳終

紅葉山人著作年表 追加

掲載書目	標題	起稿/發行年月日	發行所
讀賣新聞	飾海老	二十三年一月一日	日就社
千紫萬紅	子細あつて業物も木刀の事		硯友社
讀賣新聞	片曆	二十七年二月二十七日	春陽堂
同	なにがし	二十八年四月二十八日	同
同	豫備兵	同	同
同	義血俠血	同	同
國民之友 自第二百五十九號至第二百七十三號	名曲クレーツエロフ	自二十八年八月十三日至二十八年十二月七日	民友社
讀賣新聞	笛吹川	二十八年十二月十七日	春陽堂
新小說 第三年第一卷	手引の糸	三十一年一月五日	同
同 第三年第六、七卷	油柄杓	三十一年五、六月五日	同
同 第三年第九、十、十三卷	心中船	卅一年八、九、十二月五日	同

紅葉全集

著作年表（二）追加

掲載	題名	年月日	發行所
同 自第三年第十一卷至第四年第十卷	新油柄杓	自三十一年十月五日 至三十二年八月十五日	春陽堂
讀賣新聞	煙霞療養	三十二年九月一日起稿 全年十一月十三日脱稿 三十七年十一月十六日發行	同
	紅葉遺墨百人一首	三十三年一月書 三十七年一月發行	文祿堂
新小説 第五年第二、三卷	佐渡ぶり	三十三年一月二十八日 全年二月二十五日	春陽堂
同 全第七、八、十卷	續佐渡ぶり	三十三年五月二十五日 全年六月全日 全年七月全日	同
夏模樣	月下園	三十三年六月二十一日	三井呉服店
新小説 第七年第三卷	をさな心	三十五年三月一日	春陽堂
同 全	ツルゲネエフ小品	同	同
同	投書家	同	同
同	石	同	同
同 全第四卷	神の宴	年四月一日	同
同	鐵臭	同	同
同	火中の花	同	同
同	三女相行	同	同
前讀賣新聞	新續金色夜叉	三十五年四月一日起稿 全年五月十一日脱稿	日就社
新小説 第七年第九卷	をんな	三十五年九月一日	春陽堂

アンナカレーニナ	三十五年九月十日	文藝（自第一號至）	藻社
非常報知	三十六年六月一日	新小說（第八年第七卷）	春陽堂
月と人	同年八月一日	同（全年第九卷）	同
寫眞帖	同年十月一日	同（全年第十一卷）	同
病骨錄	三十七年三月一日		文祿堂
蕉門十哲句選	同年十月二十一日		國民書院
續新潮	三十八年一月		同
西鶴文粋下卷			春陽堂

著作年表終

明治三十七年十二月十三日印刷
明治三十七年十二月十六日發行
明治三十八年二月二日再版發行

不許複製

紅葉全集第六卷
定價金壹圓八拾錢

著者　尾崎德太郎

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　飯田三千太郎
東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地

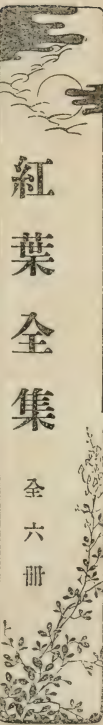
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地

十千萬堂藏版

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

紅葉全集

全六冊

第壹卷

二人比丘尼色懺悔　風雅娘　新桃花扇　巴波川
南無阿彌陀佛　拈華微笑　戀の蛻　此ぬし
夏痩　關東五郎　新色懺悔　文ながし
猿枕　わかれ蚊帳　七十二文命の安賣　二人むく助
二人女房　紅葉山人著作年表

第貳卷

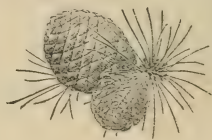
伽羅枕　おぼろ舟　むき玉子
伽羅物語　女の顔　花ぐもり　紅白毒饅頭
戀の病　夏小袖

第

三人妻前編　錢の富士…天邊の樂…沈香亭…火上の氷…心配筋…天の邪鬼…濡事師…いつも端麗…風の柳(上)…風の柳(下)…金と女…雪盡し…佩刀の鐺…煎餅屋の娘…砂糖餅…南無三寶…尺八の稽古…談義所の響物…苔の花…御恩がへし…心嬉しき顔…瑠璃の梁…夜半の嵐…火澤暌

參巻

第四巻

第五巻

多情多恨　前編　全　後編

安知歟貌林　月下の頭巾….夜中の代診

千箱の玉章

寒牡丹　雪中の狼藉…不幸の盃….背の冷汗….掌上の人形….一萬五千ルーブル….老の嘆願….門前の一瞥….驚天動地….結婚の刑….財産目録….文中の秘密….勤倹貞淑….恐怖と寒さと….村の記録….兇険の相….窮命の淵….滅水の量….御神の審判….令聞嘖々….賢婦忠僕….特赦の天使….燈下の指環….配所の雪….(大團圓)花の都路

第六巻

金色夜叉前編　全　中編　全　後編

續金色夜叉　續續金色夜叉

新續金色夜叉　煙霞療養

紅葉山人傳　紅葉山人著作年表　追加

△大判紙數毎冊九百餘頁　正價一冊金壹圓八拾錢＝全部六冊金拾圓＝郵税一冊拾五錢宛▽